町民C、勇者様に拉致される

つくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
町民Ｃ、勇者様に拉致される

【Ｎコード】
Ｎ５６１１Ｖ

【作者名】
つくえ

【あらすじ】
のほほんと生きてきた町娘。戦闘能力もからきしの彼女がある日突然拉致される。その相手は、なんと勇者様だった！？　町民Ｃ視点で送る、主にコメディ、時折シリアスのファンタジー小説です。
※最終章開始しました。

町民C、拉致される

働いているパン屋に出勤しようとしたら、拉致された。

冗談みたいなホントの話。冗談で言ってるんだったらどんなによかったか！

正直、わたし自身冗談であって欲しいと祈ってる。祈るだけだけど。今はどうにも硬直して動けない。

「うあー」

ほら、うめき声すら乙女の声じゃなくなってます。自分で乙女って言ったら思ったより恥ずかしかった！

乙女じゃなくとも、せめて人間でありたい。私は荷物じゃありません。声を大にして言いたい。私は荷物じゃありませんから下ろせ！！

誘拐犯は軽々と私を肩に担いで、朝っぱらから町を歩いています。堂々としてるな誘拐犯！

ほら、通りがかったおじいちゃんがビックリしてるじゃないか。おじいちゃーん、助けてー。いや、拝まなくていいから。何で拝んでんの。まだ声が出せない。このまま動けないなら、助けを呼ぶこともできない。

誘拐犯が歩くたびに、みぞおちにヤツの肩が食い込み、ぐえ、ぐえって声が出てしまう。膝の裏を片手で抱えて押さえている様子。

軽々と持ち運ばれるさまに、先月ダイエット頑張らなかったらよかったとわけの分からない後悔が押し寄せてくる。まあ、減ったのは僅かな体重と胸だけでしたが。胸だけでしたが！！そこは減るなよおおおと泣き崩れたのはちょっぴり苦い思い出だった。減らなか

ったお腹周り。そこに幾らやわらかお肉があるとしても、肩にみぞおち食い込んでるから！　みぞおちって、人体の急所だから！

ちなみに私はタダの町民Ｃの分際なので、体なんて鍛えてありません。

筋肉なんて無いよ！　町民Ａ、Ｂでもすらなく、町のにぎやかし要員、それが私だ！　そう自負してる！　地味顔、田舎娘服装、ほーらどうみてもお金持って無さそうですよー、拉致しても意味無いですよー、と心の中だけで叫ぶ。声に出して言いたいけれど、唇開いても出る声ってぐえとかうあとかしか無いってなんなの。

なんでこうなった。

呆然としながら自分の長いみつあみの先っぽが、顔の横でゆらゆら揺れてるのを眺める。

目立たない薄茶色のくせっ毛が誘拐犯の歩調に合わせてぴょこぴょこ跳ねる。

あ、誘拐犯の癖に生意気な。このマント、相当いい素材だわ。肌触り滑らかです。

ワーちょっと冷静になってきたかも。

いける！　この勢いで今の状況を整理しよう（きりっ）

えーと、今朝は特に夢もみず、すっきり目覚め。

お気に入りの緑のワンピースが乾いて無いから、代わりに水色のスカートと白いブラウスと茶色のブーツで家を出た。どうでもいい話っていわないでください。一応、乙女として身だしなみは大切なんです。

そうしてパン屋のエプロンと財布が入ったかごバッグをもって、家を出たところで視界がぐるっと回った。

気がつけば担がれて街中を移動中。

いや、状況整理できて無いから！　自分で自分にツッコミだよ。

だんだん頭に血が上ってきたあああ。それにしてもこの人一体どこに連れて行くの。見当もつかない。周囲の風景をグルグル見回してみても、人通りが少ない所通っているのが分かった。

土地勘のある人間の犯行ッ！　でもこんなマント使ってるような知り合いなんていないし。

はっ。

実は変質者！

営利目的ではなく、そう、変態行為目的での犯行か！　食べても美味しくありませんよ。食事的な意味でも、性的な意味でも。ほらほら、担いでるなら分かるでしょう、私のまな板具合がな！

パン屋のおかみさんが、胸は作るものだといってた。名言である。でも上手くメイキングできません。寄せるものが、無いのでね！お腹の肉はあるんだけど……。だんだん辛くなってきた。精神的な意味で。

そうこうしているうちに、周りの風景が変わってきた。

宿屋街だ。

まさかの展開ですよ！

町娘C、このあといろいろいたされた挙句、鋭利な刃物とかで切り裂かれて死体発見、あらたな事件の予感とかな！

隣のおばちゃん、「あの子は普通のいい子でしたよ、なのにどうしてあんな事件に巻き込まれるなんて」ってぐらい言ってくれるかな。

そうして町を訪れた勇者さま一行に、町人Aさん辺りが噂として

伝えるんですよ。恐ろしい事件がありましたよ、多分魔族の犯行ですねとかってさ。

色々考えてたら悲しくなってきた。頭に血が上っているせいか、だんだん目が潤んできたのが分かる。

何でこんな目にあってるのか、妙に悲しくて、悔しくて、いろいろこみあげてきた。

お父さんやお母さんが死んだ時、強く生きるって決めたのに。ここで人生終了したら天国で会えるかなあ……。

ひとりしんみりムードになってきた。やばい本気で泣けてきた。

うえー。

べそかいてたら、いつの間にか誘拐犯の足が止まっていたらしい。

わたしは泣いてたから気付かなかった。

「あなたはいったい、何やってるんですか！」

神様！　どうやら常識的な人がいたようです！！

町民C、泣きべそをかきまくる

私は唐突に下ろされた。
腰をひょいと掴まれ、人形を下ろすように、こう、ストン、と。
ひどい泣き顔を人様にさらすわけにはいけないので、とりあえず手で擦ろうとしたら、

「女の子泣かせて何してるんですか！」

と先程の声の人が、常識的なことを叫んでくれた。
もっと言ってええええ！
さっきの拝んでたじいちゃんとは違う、助けてくれる予感がひしひしとしている。それにしてもあのじいちゃん、何を拝んでたんだ。ちょっとボケの心配をしてしまったし。

とにかく、助かった！　安心して涙腺が緩みまくりました。ぼたぼた涙がこぼれてくる。止まらない。下を向いて泣いている私の頭の上を、会話が通り過ぎていく。

「とりあえず、持ってきた」

「まあ、確かにさっきの抱え方は持ってきた、ですが……」

いや、そこは納得するところじゃなかろうよ！　もっと頑張ろうよ！　私はとうとう堪えきれずに、主張した。心の声を聞かせてやりたいね！　下を向いたまま、しゃっくりの間になんとか口を挟んだ。

「っく、わたし、も、物じゃないです！」

何故か背後で息を呑む音がした。

「喋れたのか」

ちょっと待て、私のことをなんだと思ってるんだ。

というか、今の声は、明らかに目の前の人と違うわけで、えーっと何か大事なことを忘れている気がする。

「ああ、お嬢さん、どちらにしても申し訳ないことをしました。これで涙を拭いてください」

下を向いた私の目線の先に、すっと差し出されたハンカチを受け取った。指先にとてもやわらかい素材が触れる。ちょ、これもかなり高級な布だよ！　こんななめらかハンカチつかったことないよ！　略してなめカチだよ！　いやな響きだな……。

とりあえずハンカチを拒むいわれが無いので、ありがたくお借りして涙を拭く。色々乙女としてはいえないことになっている顔を整える。目が腫れている気がする。うー。いやだなあ。知らないひとの前で大泣きをしてしまった。と、ぼんやり考えながら、ハンカチを畳みなおした。

腫れた目では恥ずかしいけれど、下を向いたままでは失礼だ。私は意を決して顔を上げた。

「あ、ありがとうございました……」

目を上げると、そこには神々しい笑顔の美人さんがいらっしゃいました。

ガチン、と再び硬直する私。

白い肌に金色の瞳、流れる銀の真っ直ぐな髪。なんと神々しい。
あれですか、最近流行の小説風に言えば、『水晶を集めてろ過した月光を束にしたかのような髪、そして蜂蜜と黄金を形にしたような瞳、薔薇の花びらを浮かべた唇』とかいうあれですか。
耽美ってやつですね、これが耽美か。
目がつぶれる！
こんな主人公オーラ出してる人みたら、町民Cとしては目がつぶれるううう！！
私の狼狽をものともせず、美人さんはハンカチを受け取った。あれ、ちょっと手が硬かった気がする。そして渡してから気がついた。そのハンカチ、私の涙やいろいろ染みてますよ！　洗って返しますううう。と言おうとする機先を美人さんは制して、

「うちの連れが、大変ご迷惑をおかけしました」

と仰った。

ちょっと待て。

ウチノツレ。えーっと。
私は反射的に一歩あとずさった。一歩あとずされば、そこにあるものにぶち当たるわけで。がつ、と背中と肩に硬いものが当たった。

おそるおそる振り返ると、深い深い蒼の鎧が目に入った。鎧があるということは、その上にひとの顔があるというわけで……。
そうだ！
何か重大なことを忘れてる気がしたんだ！

私の背後には誘拐犯がいたんだあああああ！

私は声無く絶叫した。

町民C、再び泣きべそをかく

声なき絶叫の後、私の頭は真っ白になった。で、妙に冷静になった！　クールになれ！

頭真っ白のまま、見上げたそこにある顔に、私は眉根を寄せて考え込んでしまう。なんだか見覚えがあるような、妙に懐かしいような変な気分がもっさり沸いてきた。

まじまじと見る。

……うん、やっぱり知らない！

私がガン見している間、相手はじっとこちらを見下ろしていた。無表情で。

というか、忘れてたけど、私の背後にいるひとは誘拐犯だよ！　眺めている場合じゃなかった。

忘れていた自分にナチュラルにショックだ。さっきのじいちゃんのボケを心配している場合じゃなかったみたい。自分がボケだなんて。目の前の美人さん効果で忘れてたことにしておく！

「じゃ、そういうことで」

私はパン屋で鍛えた接客スマイルを振りまき、踵を返して鮮やかに立ち去ろうとした。が、そうは問屋がおろさない…よね……。がっちりと腕をつかまれました。痛い痛い腕が痛いです！

「腕、痛いんですけど！」

「そうか」

そうか、じゃなあああい！

それにしても誘拐犯、鮮やかな蒼い鎧を着けている。こんなに目立つ格好ならば、すぐに通報されるに違いないのに。

「うー」

興奮しすぎると上手く言葉に出来ないのは、私の悪い癖。とりあえず睨む。

び、びびらない、私被害者！　あっち加害者！　びびってる場合じゃないけど……こーわーいー。

負けない！　目に力を入れてぐぐぐと睨み返す。

睨んでいたら気がついた。

こいつも無駄に美形である。ただし表情が無いことで減点だな。

そして誘拐犯ということで素敵さ五割引大セールだよ！　つまりかっこよさ五割だよ！　多分、一般男性レベルです、五割引で。

長めの黒い髪はわずかに乱れているものの、私の髪みたいに癖は無い。切れ長の蒼い目が冴え冴えとこちらを見下ろしている。背が高い。妙にそのせいで威圧感があるのか、ホントにこーわーいー。

怯えて後ずさりたいのは山々ですが、手をがっちりホールドされているからあとずされないぜ。

まさにぴーんち。

だんだん言葉が乱暴になっているのはかなり余裕が無いからです。

それにしても、……うん？　どっかで見た顔……どっかで見た……。

「おお、勇者様！」

朝早く出発しようとした商人達の団体が、こちらに気付いて手を振っている。

そうだ、ゆうしゃさまだー確かにどっかで見た顔だわ。

って、

「勇者様あああ？！」

私が魂からの叫びを上げてしまったとしても、仕方が無い事は紳士淑女の皆さんなら分かってくださると思う。

酸欠のようにあうあうと喘ぐ私を、にっこりと笑顔で美人さんが封殺しました。
目が笑って無いです。黙れ。あの表情はそれだ。私空気読む子！
了解いたしました美人さん！

「おはようございます、皆さん。もう出発ですか？」

勇者様（のはず）は、くるりと商人に向き直る。先程までと別人のような爽やかな声と笑顔である。
ぞぞぞぞぞぞ。
トリハダどころか、私の髪も逆立ちそうな勢いなんですが。
誰、これ！　いや、こっちが素なのか？

私が頭で記憶していた勇者様像と、目の前の男が結びつかなかったのは、まさにこれだ。

一昨日、勇者様が町にやってきた！　とのことでなぜかお出迎え式典とやらが執り行われていた。そこで見た顔だった。
やけにキラキラしてるひとが二人いるわ、と思いながら、仕事帰りに横目で見たんです。
遠かったのと、チラっと見ただけだから覚えてなかったのはご愛嬌ということで！

まだボケじゃないよ！　しつこいけどね！

そのとき、わー爽やか笑顔だー、と思った覚えがある。

目の前の無表情男と全然違った。が、今、商人さんたちに向けているいい笑顔は確かに必殺！　勇者スマイル（私命名）でした……。
こういうのも必須科目なのかな、勇者って。笑顔の見せ方キラッ

とかさ。

そりゃあんな笑顔見せられたら、隣のおばちゃんも「私があと十歳若ければどうにかするのにねえ！」とか言い出すよ。て言うか実際言ってたよ。どうにかしちゃったら、旦那さんはどうなるんだろう。ちょっと気になります。

勇者様は、その代ごとに、通称がつく。

偉人とされ、生きる伝説である彼らの名前は何故か伝わっていない。

俗世との関わりを絶つという意味があるとかないとか無いとか。深い経緯なぞ私は知らん。で、今の目の前にいるはずの人は、確か、「深蒼（あお）の勇者様」だったはず。口に出すと恥ずかしいな！

鎧が青いのは人ごみの隙間から見えたから、ああ、なんと安直な命名だと思ったんだけれど、こう近くで見ると、その名前の由来は瞳の色なんだろうな。

すごい蒼い。

こちらを見ていないからまじまじと観察できるんだけれど。というか、手を離してくれないから逃げることもできません。

商人のおっちゃん達と勇者様（らしき人）がしばし和やかにトークをして別れるまで私ぼんやりと立っていました。空気になれ！空気になるんだ私！　空気になれば、この手もすり抜けられ……るわけないか。

で、おじちゃんたちがいなくなった途端、勇者様（らしき人）から笑顔がなくなりました。

だから怖いってその変化！

勇者様（らしき人）の顔の変化を見上げて、びびってる私に、美人さんが声を掛けてきた。

「ところでお嬢さん」

「はい？」

「私たちと一緒にお茶でもいかがですか？」

ナンパ……ですか？

予想外のことに、私の頭はついていけません。

私の人生が荒波にもまれすぎて難破しそうです、マジで。

町民C、誘拐犯と話し合う？

気がついたらお洒落な食堂の端っこにいた。
はっ、いつの間に移動を！　私、それほどまでに魂抜けてたのか！　今更気付いた！
それにしてもこの食堂、朝早くから開いてるんだなー……って！

「あっ！　出勤しなきゃ！」

がたーん、と椅子を蹴倒しながら私は思わず立ち上がった。だってさっき出勤途中だったんですよ。パン屋は朝が早い。朝が早い代わりに、早上がりできるんだ。いい職場です。って、遅刻確定だよおおお。今までショックで忘れてた。人生の終わりだと思い込んでたしね！
　でもここで無断欠勤しようものなら、別の意味で人生終了のお知らせですよ。社会的な意味で！
「まあ、せっかくのココアが冷めてしまいますし、どうぞ一杯だけでも」
美人さんがにっこり笑顔で勧めてくる。
「いや、あの、」
「どうぞどうぞ」
この人分かってやってるだろ！　私が小心者で断れないのを見抜かれている！
　座ろうとして、椅子を蹴倒したのを思い出した。けど、椅子はいつの間にか戻されていた。あれ？

「座れ」

彫像、もとい無表情勇者様（たぶん）が、くいっと椅子を指し示

した。戻してくれたんだね！　ナイスガイだね！　さすが勇者様！
いらんとこに気が利きますね。
「あ、ありがとうございます……？」
お礼を言うべきなのか……？
ここまでされたら大人しく座らざるをえないでしょ。すとんと腰を下ろす私。
私の前に置かれたココアは、ゆったりと蒸気に甘い芳香を混ぜながら私に誘いかけてくる。淡い茶色には幸福が溶けているんだよ……ぶっちゃけ、好物です。断れないから手に取り、くん、と匂いを鼻腔に吸い込む。わーいいにおい。
むっ！　これは濃厚な牛乳で作ったココアではありませんか！！
僅かに表面に張りかけている膜がその証拠！　タダでさえ牛乳は高級なのにっ。それで作ったココアなんて、私が飲めることなんて滅多に無い。
これは迷惑料に違いない……と懐柔された感たっぷりに私はココアに口をつけた。しょ、食欲に負けたわけじゃ、無いんだからねっ。
ふと目を上げたら、ものすごく温かい目で見守られてたあああ。
その、愛玩動物がごはん食べているのを見守る眼差しは止めてええ。
いたたまれず視線を外せば、食堂のお姉さんがチラチラこちらを見ている。
そうだよね、気になるよね！　私だって気になるよ。何で小娘捕まえて勇者様たちがお茶してるんだとか！　なんでだよおお！　説明もとむ！

本当に、本当に私は普通の庶民ですから。

大体、才能がある人は見出されてそれなりの学校に通ってるっていうのが常識だ。
人間には適正があり、それはある程度神様が見出してくださる。
星都（せいと）……あ、これは神様の大神殿がある都のことね、あそこには神

様の声を代弁する大神官『神の声』と言う御方がいらっしゃるそうなんだけれど、地方にいる神官も神様の道具を使えば人の才能に関するお告げぐらいならできるのだ。

もって生まれた才能は、たやすく延ばすことが出来るそうな。ただ、適正と望む職業が一致するとは限らないんだって。それはそれでなりたい職業があるっている意思は否定されるはない。ただ、才能が無いからかなりの努力と学校へねじ込めるだけの財力が必要なわけなんだけれど、閑話休題。

結局剣術にしても、魔法にしても、神官職にしても、はたまた町の鍛冶屋のおっちゃんにしても！　一定のラインで適正が計られているのだ。

私は何も無い。やったね！　……特別、にあこがれたこともあったけど、あれは大変そうだなって言うのが本音。何も無い人のほうが九割。殆ど大多数なんだ。普通万歳！

この世で今現在一番なんでもできるという可能性を持っている人、それが私の左斜め横に座っている人が持っている称号『勇者』であり、『神の手足』である。神様の代わりに、世界を立て直すために、神様の手足となるから、とか何とか。詳しいことは、裏の家のおばあちゃんに聞いて！　私は聞いたけど覚えれなかったから！　気軽に聞いたら話が五刻位かかっちゃたんだ。苦い思い出です。

美人さんがカツ、とテーブルを叩いた。指先で軽く弾く程度なんだけど、思わずはっとして注意を戻す。

「で、貴重なお時間をいただいた理由なのですが」

背筋をしゃきんと伸ばして、聞く姿勢を整える。そう、ようやく説明タイムが来た！！　これを待っていたんですよ。説明カモン！

「どこから説明をすればいいのかわからないぐらい、色々面倒なので本題だけ言います」

なのに美人さんがいきなり話を省略した。その中略はひどくね?!
多分今んとこに大事な事隠されてた！　ちょ、まだ私ついていけてないよ！
嫌な予感がひしひしとしながら、耳を塞ぎたい衝動に強く強くかられた。

「私たちと一緒に旅をしませんか?」

は?

町民C、誘拐犯とでは話し合いにならない

えーっと。

無理。

無理無理無理。
光の速さで否定するね！
私がついて行った所で、荷物入れの皮袋以上に役に立ちませんとも！

ぶっちゃけ、リアクションが取れませんでした。唐突過ぎるって。口をあんぐり開けてしまったことに気がついてぱくんと閉じる。乙女にあるまじき……このセリフはもういいって？　失礼しました。

とにかく！
だから、私には何のスキルもないんですって。人の話を聴いてください。

「そういった人材は、王立魔法院とかでお求めになってください」

適材適所！　いい言葉ッ！
乾いた笑いを浮かべながら言ったセリフは、検討するにも値しなかったようだ。
私の拒絶ッぷりを眺めながら、青い鎧の誘拐犯様がこう零しましたよ。

「面倒だ。持って行った方が早い」

そこの男おおお！　なんつー物騒なことをさらっと言うかな！
勇者の癖になんつー黒いセリフをおおおおお。
いやいやいやいや。ここできちんと行くつもりがないよと否定しないと人生終了のお知らせだ！　と強く思った私は、なけなしの勇気を振り絞り、主張をした。
ここまで強く主張をするなんて、人生始まって以来だよ！
初めてづくしだね！　ひゃっはー！

「私を連れて行ってもお荷物以上にしかなりませんよ！　魔法は使えない、歩くにしても半日で足がパンパンになります！　それに血を見たら気絶する自信があります！」

私は語った。熱く語った。拳まで振り回した。言えたよ、天国のお父さんお母さん！　ちゃんと怖い人たちに意思を伝えることが出来ました。私、やれば出来る子！

しかしそんな私の拳を振るった熱弁は、あっという間に却下された。

「そのあたりは力技で何とかします。残念ながら財力と権力にだけは溢れていますので」

にっこり笑う美人さんに、私のトリ肌は立ちっぱなしよ！
この人も危険すぎるのか。常識人に思えたのは嘘だったのか。

「神に誓って、あなたを全力でサポートいたしますよ」

美人さんがさらりと出した首飾りは確かに星神様に使える神官が持つ護符（アミュレット）だ。というか、神官様だったんですねー。

「体力はそこの勇者が有り余るほど持っています。疲れたら私が魔法で何とかいたします。まあ、男二人だというところに不安を覚えてらっしゃるなら、それは我慢していただけると幸いですが、そういった危険性はありませんし」

私が呆然としている間に話がすすんでしまっているようだ。なんて強引な展開！

と、いま色々聞き流してはいけない言葉を聞き流しそうになったんだけど。

「えっ。男性の方だったんですか……？」

「はい。よく間違えられるんですが」

私の質問に、美人さん、もとい、神官様はにっこり笑って流してくださった。

ですよねー。

いろいろ女性として悲しくなってきた。だってお肌の艶とか負けてる気がビンビンしますよ。

「詳細な話をしたいところですが、ともかく私たちも色々困っていることがありまして、あなたの力をお借りしたいのです」

愁い顔もさまになります。だが！　私は！　流されないっ。

「勇者様たちに解決できない難問が、私ごときが解決できるとは思えません……」

だんだん主張も尻すぼみ。ですよね、世界中で信仰されている星神様の神官様に、強くいえませんってー。

「残念ながら」

唐突に会話に介入してきた滑らかな声に、私は反射的に跳ね上がった。

置物と化していた勇者様だ。この人、威圧感半端無いくせに、たまに静か過ぎるから存在を忘れてしまう。はっ、気配を絶つ達人とか！　まさかねー。

「お前に用意された選択肢は二つしかない」

高まりゆく緊張感に、私は思わずごくりと喉を鳴らした。

「歩くか、担がれるかだ」

二択どころじゃなかった。

勇者様は斜め上を行ってらしゃった……。

どっちがいい？　無表情なままでじっとこちらを見る勇者様に、私はこう、言うしかなかった。

「歩きます……」

完全に負けた。

◆神官、勇者に確認をする（前書き）

※本日は「残酷なお話」がまじったりしています。
町民Ｃの出番はありません。シリアスです。

◆神官、勇者に確認をする

溜息がテーブルの上に落とされる。
神官は軽く首を回した。
少女を説得するなんて、生きてきた中で全く経験がなかった。正直疲れたといっていい。
これだと魔物と戦っているほうがいい。あれには敵愾心しかないから、余計な思考を回さずに済む。星職者としてあるまじき考え方ではあるが、事実そうなのだから仕方が無い。
店員を呼び、少女が飲み干したカップを下げてもらう。笑顔を向け、礼を言えば、頬を染めた女性店員が機嫌よく立ち去った。町の人間が彼らに向ける好意は分かり易い。憧れと、信頼と、そして他に潜むもろもろと。
ただ、その必要以上の注目は今は不要であった。
手で軽く呪印を切り、一定範囲外への空気の振動を抑える。こうすれば彼らのテーブルから外に声が漏れにくくなるのだ。

少女は本当に普通の女の子だった。金茶色の頭髪をみつあみにした、清潔感のある町娘。それ以上でもそれ以下でも無い。道ですれ違っても、印象に残らないだろう娘。
だから神官は勇者にもう一度確認を取る。

「本当にあの子なのですね」

ゆっくりと勇者と称される男がこちらを見た。肯定である。
蒼の瞳は底知れぬ輝きを宿している。それに怖気ることなく、神官は真っ直ぐに目を見かえす。問いはただの確認だった。そして、本気で彼女を連れて行くしかないという事実を自分に言い聞かせるものでもある。

勇者が嘘をついた事は無い。彼は虚言と最も遠い場所にいる人間だ。幼馴染としてともに育った神官は一番知っていた。

彼がそうというならば、そうなのだろう。

少女を眺めながら、実際にどうなのか軽く能力判定のための走査術をかけていた。彼ぐらいであれば、道具などなく簡単に行える術であった。結果、本人の自己申告どおりに、驚くほど少女には能力がなかった。勇者の言うことが確かならば、それは完璧な隠蔽（いんぺい）だといえる。一つ疑念を持てば、様々なことが連なり、疑問ばかりが増えていく。

その一つは、この町があまりにも平和だという点だ。

今、世界は魔物の侵食によって脅かされている。

勇者が最後の砦と称されるのは、誇大な表現ではない。

隣の大陸の国家は繰り返される戦闘により大きく疲弊しているという。隣の大陸は、現在彼らがいるここより気候が温暖であり、災害が起こりにくい。そのため、食料の自給率が増し文明も国力も増し、様々な国家が繁栄していた。

しかし、それが今、揺らいでいる。

魔物の発生である。

魔物がどこから沸いて出るのか、それを詳しく知る人間はいない。その時々で違うのだ。

魔物たちの欲望には際限は無い。あれらは特に人間に対して貪欲だった。何がそうさせるのか、魔物は人間を襲い、殺す。恐らく魔物が増えずにいれば、人間社会も大きな発展を迎えていたに違いな

い。

魔物を迎撃するために、様々な研究が行われている。しかし、不思議なことにそれらの研究が実を結ぶことが無い。何故か魔物に襲われ、新しい技術が花開くことが無いのだ。

それを人々は魔王の呪と呼ぶ。

先程の少女も口走っていた「王立魔法院」でも確かにそのような研究が行われている。

能力により人々を選別し、高い力を持つものを囲い込む。

そのような機構を設けているのも、この魔王の呪のせいでもあった。

危険な研究を隣人が行っているとすれば、そして、そのせいで自分も魔物に襲われる確率があるとすれば。

普段大人しい庶民たちが急に変貌するのだ。

一時期、魔法使い狩りが行われたという闇の歴史もある。

魔物に襲われた町の人間が混乱し、「魔法使いが研究をしていたせいでこの町が襲われたのだ」という流言を信じた。それにより町の人間が町に暮らしていただけの魔法使いたちを殺害し吊るし上げたのだ。

皮肉なことにその町は、力ある魔法使い達を失ったせいで程なく滅んだという。

これをその町の名前をとり、ツワナアゲート事件と呼ぶ。

この後、魔法使い達のための学院が各国に設けられ、魔法文明が進んだと言っても過言では無い。災いが転じた例だ。不思議と平和利用の研究のためであれば、魔王の呪は発動しないことが多いのだ。

今、神官の前に置かれている冷やされた果汁もその恩恵である。

ここ五十年で魔法の技術は庶民の生活に浸透するほど広がった。

しかし、勇者の旅には魔法使いは同行していなかった。
神官以外が同行していた時もある。
だが、彼らのたびにそのまま付いて来られるかということは別問題だった。

ひと時の仲間ではなく、本当の意味で同行してもらうには、勇者達と『同じ』でなければならない。これればかりはどうしようもない。逆に言えば、条件さえ合えばそのあたりはどうとでもなる。

先程の町民は、根本的なところで、どうしようもなく、勇者達と『同じ』だったのだ。
本人がそれを知ったところで、頑なに否定するだろう。彼女の常識を打ち破るのは難しい。だから彼女には結論だけを伝えたのだ。人のよさそうな、小動物的な少女は、怯えながらも同行を許諾した。結果さえあればいい。神官はそう考えている。
面倒だから説明を省く。その言葉には、様々な意味を込めていた。

この町は平和すぎる。
かといって、星職者が多くいるわけでもない。
むしろ神官の姿など見かけなかったといえる。

魔物が増えると同時に、神官の数が増える。貴族の子弟がこぞって押し寄せるのだ。星神殿では実際魔物を寄せ付けない結界を張る能力を習得しているものが多い。
戦えなければ、寄せ付けないようにすればいい。たとえ自分に適性がなくとも、能力がある人間を囲い込むことが出来れば安泰。そういう考えが透けて見えるのだ。保身もここに至れりといえるのだろう。
だが、それを臆病とはいえない。実際魔物の脅威は白い布に落とされたインクのようにじわりじわりと人々の心を染め上げていく。

そして、それは幾ら拭ったところで容易には落とせない。シミのように常に暗い影を落としていくのだ。
どの町にいっても人々の顔は暗い。

しかし、ここの雰囲気は全く別のものだった。
例えて言うならば、春の日差し。人をまどろみに誘う、やわらかい空気が流れている。
魔物の存在など、御伽噺でしかないと錯覚しそうなほどに。

「ここは、平和すぎますしね」

皮肉に近い声で神官はぽつりと洩らした。
何かに守護されているかのような平和。人の力とかけ離れたところで蠢いている理(ことわり)の力。
理不尽ではないか、と神官は思う。世界に蔓延(はびこ)る流血と悲劇に比べ、守護されたまどろみのあまりの甘美さに。

「俺は分かる気がする」

珍しい勇者の発言に、机に落ちたままだった視線を引き上げる。
勇者は窓から外を見ながらぽつりと呟いた。

「ずっと見てるなら、平和なほうがいいだろう。意思があるなら、そういうことじゃないのか?」

まさか、と笑い飛ばせるならよかった。が、この状況がそうすることを許さない。
誰のための平和か。
神に贔屓があるなど、神官としては知りたくなかったが。

「それも、そうですよね」

とりあえず、彼の言葉には同意だけを返しておくことにしたのであった。

町民C、身辺を整理する

支度金としてぽんと渡された金額は、私の年収でしたあああああ。

大混乱中の、町民Cです！　自己紹介しながら落ち着け自分。

今まで持ったことのない金貨なんて物を抱えてるから、挙動がいつもより不審になるよ！

こんなに小さいのに、私の年収だよ！！　頑張って貯めても銀貨一枚ぐらいの生活です。

何故大金を持っているかといいますと、いただいたからです。拒否権は私に存在しない。人権はありますか？　ありますか？　ちょっぴり今から不安です。特に勇者様に対して聞きたい。でもその答えが怖いから聞けない！

金貨を渡されて固まる私に、旅装は思ったよりも高いんですよ、と神官様が仰った。いや、高いとかどうとかよりも、ポンと渡しすぎだよ！　なんか本気度に驚いたよ。この人たち、確かに無駄に権力と金に溢れてるって実感した。なめカチ（なめらか肌触りのハンカチ）持ってるしね！　これからの旅に必要なものを教えてもらった。旅なんて出たことがないからね。実は町からも出たことがありません。いや正直必要ないでしょ？　親類はいないし、この町以外に知り合いはいないし。いきなり旅とか飛躍しすぎだろ。

これからの予定も話された。通告ですね！　相談ではなく通告ですね！

私は買い物に行って色々揃えて、明日集合とか。

随分ゆっくりだなと思ったら、「お家の解約とか必要でしょう？」とのこと。

私どこにつれていかれるんですかあああ！！
ちょっとの期間って雰囲気じゃないよ！
あれ？　なんだか町民Ｃは色々大事な情報を聞いていないのではないだろうか。今更だけど！

とりあえず、職場のパン屋に恐る恐る出勤してみると、朝の混雑は終わってた。
そして怒られることもありませんでした……。ほっとしてまた泣きそうになったのはひみつ。
おかみさん、怒るとホント、怖いんだから！
無表情勇者様とタメ張るぐらい怖いんだから！

なんでも、私が今日遅れるという知らせがあったらしい。
そんな使いの人なんてだした覚えないよ！　勇者様……はそんなことしそうにないから（偏見？）おそらく神官様だろう。あの人あれ見えて苦労性に違いない。それも偏見？
おかみさんに、しばらく休みを貰うことを切り出してみた。すると、大丈夫だとのお返事をいただいた。あえて期間は言わなかったけどね！　そこには私の希望も含まれてるけどね！

なんでも隣の大陸に嫁いでいた娘さんが、魔物の被害がひどくなってきたから帰ってきたとのこと。一応、手は足りるそうだ。
また帰ってきたらいつでも復帰してくれたらいいよとは言ってくれたけど。

帰ってこられるのかな。遠い目になりそうなのをぐっと堪えましたよ！
ホント、勇者様の旅についていくなんて信じてもらえそうに無いから、遠くの親戚が危篤で、と言っちゃったせいもあるんだけれど。良心がちくりとしました。でも本当のことといっても、やばい子扱い

だよ！　庶民なのは私が一番知ってるよ！

勇者様の旅についていって、帰ってきたら職が無くなってたらどうしよう……。

これは、養ってもらうしかないのか？　終身雇用でお願いします！　役に立てないけど。

でもあんな人を世間のお姫様たちが放っておかないに違いない！　どこかのお姫様とあの人たちがくっつくとしたら、正直邪魔者ですよねっ。小姑状態になりますよねっ。

うっかり養ってもらったりしてたら、そしてそのせいでお姫様たちにらまれる羽目になったら、私は縮み上がる！　美人さんたちとは戦えなどしない！　初めから逃亡確実です。

そもそも勝負にならない！　この無い胸、無い色気！　どこに勝負できる要素があるよ！　……。あっ、自虐ネタ言ったら自分で悲しくなってきた……。はう。

とりあえずお家の大家さんにも同じ話をして、荷物を整理した。結構物に執着が無いから、ぽんぽん捨ててしまう。

結局一抱えある箱ぐらいの荷物が残った。困っていると、大家さんが帰ってくるまで取っておいてくれると言ってくれました。戻ってくるつもりはあるので、助かります。

裏のおばあちゃんありがとう！　あ、物知りおばあちゃんは大家さんです。

そんなこんなで知り合いの人に声をかけつつ、商店街で毛布代わりにもなるマントや丈夫な衣服やもろもろを買い込んだ。こんなに思いっきりお金使うの初めてだよ！　いつも銅貨一枚レベルで悩む生活なのにね……どうしてこうなったのか。なにかと。

で、必要だといわれたものを買い込んだだけなのに、荷物まみれ

になった。
　買うたびに増えていくのは仕方が無いんだけど、道端でカバンに整理できないから中途半端に溢れて、持ちにくい！
　よろよろしている私の荷物を、誰かが支えてくれた。
　引ったくりに注意！　とか頭に浮かんだけど、見る人を勝手に犯罪者扱いするのはよくない。本当に支えてくれただけみたいだしね！　絶妙なバランスにゆらゆら揺れる荷物がちょっと固定される。
　助かった。
　ありがとう、親切な人！
　礼儀としてお礼だよね。

「ありがとうございま……」

　す、が言葉にならなかった。見上げればあの蒼い瞳がじっとこちらを見下ろしていた。
　ある意味犯罪者より怖いです。

　何してんですか勇者様。

町民C、気まずくなる

人通りの激しい大通りで勇者様登場とか。

絶対騒ぎになるよおおお！　退避！　総員退避いいい！　といっても退避するのは私だけだけどね！

と思ったけど、はて、あまり注目をされていない様子。ちらりと過ぎった違和感に、私は勇者様を上から下まで眺めてみた。

あの派手な鎧を纏っていない。

洗いざらしの生成りのシャツに、茶色のズボンと同じく皮のブーツ。

使い込まれた風の皮の剣帯で剣を腰にぶら下げている以外は、そこら辺にいる兄ちゃんといった風情だった。勇者オーラ的なものはあまり無い。

えっ、勇者様って、鎧で認識されるもの？　ちょっとそれって不味くね？　勇者的な意味で。勇者って、こうキラキラギラギラして控えおろうははーって感じじゃないんですか？

「家に帰るのか？」

まじまじと勇者様の服装を観察していたら声を掛けられた。

「ひゃい！」

思わず舌を噛んでしまったのは仕方ない。そう、あれだ。彫像が喋った時の驚きみたいなものだ。私の返事だかなんだか分からない叫びを勇者様はどう受け止めたのか、荷物をひょいひょいと勝手に取り上げてさっさと歩き出した。

私は慌ててそれを追っていく。

足長いし！　一歩の距離が私と違いすぎる！　追いつけないって。

荷物が半分……いや、さりげなく重いのを持ってくれているみたいだったから、半分以下になったけど、歩くには邪魔だ。
その上、この人と歩くの早いです。
私は小走りでやっと追いつける。普通の歩行もこんな感じかな。
徒歩の旅だったら、もしかして私オンリーマラソン状態ですか！
持久力に自身はありませんよ！
二人で歩くというか、私が勇者様を追いかけるという、私だけにとってのデッドレースはようやく終着点へたどり着こうとしていた。
程なくして、住宅街に入り、私が借りている家の前に到着する。

ゴオオオル！
ただいま、私のおうち！　まあ、今日までですが。

はあはあと肩で息をしている私をよそに、勇者様は相変わらず無表情で家を眺めている。勇者様、息なんて切らせてませんよ。これが基礎体力の差か！　基礎体力セレブめ！　あ、私が作った言葉です。基礎体力が凄い人たちを羨ましがる言葉です。

しばらく勇者様は庶民の家を眺めていたようだった。
が、不意にその視線が私に向けられた。ばちっと音がしたような気がする勢いで目が合ってしまった。反射的に息を吸い込んでしまう。野生動物と目があったら逸らせないあれですよ。そ、逸らせない。
だって怖いし！
この一瞥（いちべつ）は、鍵を早く開けろって言う意味ですね、荷物持たせてすみません！　了解しました！　お待たせしましたああ！
慌てながら荷物をとりあえず横に置き、鍵を探す私に、勇者様はぽつんと、
「早かったか」
と呟いた。

何の話ですか！
妙に意味深だな……。緊張で手が震えてなかなか鍵が開かない。
数度目のチャレンジでようやく家の中に入れました。勇者様は特に
何もコメントすることなく、じっと荷物を持って待っていました。

沈黙が気まずい。
さっきは歩いていたから、会話のことなんて考えなかった。
何も話すことがない、が、沈黙が重過ぎる。
あーいい天気ですね……ぐらいの話題しか思いつかないわ。
所詮、私の社交スキルはこの程度である。

扉を開けながら、私はようやく勇者様の言葉の意味に行き着いた。
というか閃いた。

歩くのが早かったかという確認か！！

勇者様って、まさか翻訳係が必要な人？　言葉、足りない人？
私もそのうちこの不思議空気に慣れることが出来るんだろうか…
…。

私、慣れることが出来なければ終わりかもしれない。だって記憶
力なし、学なし、体力無しの上に言葉も通じないなんて、何重苦な
お荷物人間が出来上がるんですかあああ。

扉を開け放つと、狭い我が家が良く見える。

私の部屋は、もうほぼ片づけが済んでいた。あとは今日寝るだけ
のスペースと着替えぐらい。イスとかもそのままにしていくから、
すっきり物が無い状態です。あ、しまったお茶も出せない！
「なんもお構いできませんがどうぞ」
と家に上がるようにとりあえず礼儀として勧めてみた。けれども勇

者様は動かない。変わりにこんな事を言い出した。
「荷物はここに置いても？」
「え？　あ、はい」
玄関先に勇者様は荷物を置き、
「もう少し、警戒心を持て」
と淡々と告げる。
唐突に始まった話に、理解が追いつかない。
「はあ……」
私の生返事に、それ以上の言葉は続かず、
「では明日」
と勇者様は踵を返した。
色々と口も疑問もはさむ隙がなかった！

颯爽としてるな。さすが勇者様、歩き去る動きまで爽やかだ！

私はようやく大事なことを忘れていることを思い出した。
「荷物、ありがとうございました！」
背中に私の声が当たっているのだろうが、勇者様は振り返らなかった。肩で風を切るって、あんな感じなんですね、実際見たらすごいな。
背中を見送り、ドアを閉めた。

荷造りしなきゃなあ。勇者様って意外といい人かもしれない。
ちょっとは上手くやっていけるかなーって考えてて、ふと気付いた。

私はさっき、勇者様の歩調に追いつけず、ずっと後ろを走ってた。
なのに勇者様は迷うことなく、私の家にたどり着いた。

何であの人私の家知ってるんだあああ！

謎だけが深まった午後であった。

町民C、ようやく旅立つかもしれない

朝ですよ！

日の出ちょっと前にパッチリ目を覚ますのが、私の毎朝です。

勝った！　隣の日之出鳥に勝った！　日之出鳥というのは、裏のおばあちゃんが飼っている鳥で、日の出と同時にけたたましく鳴く種類の鳥のことです。名前はヒナちゃん。成鳥でもヒナちゃんです。

おはようございます、町民Cです！

今日はかなり朝もやが掛かっています。もやっとしてますね！
まさに絶好の旅立ち日和です。
朝もやにまぎれて、どさくさで旅立てるんじゃないんでしょうか！

まあ、自分の意思での旅立ちじゃないですけどね！
目立たないで旅立ちたい……。切実に。

朝ごはんをもそもそ食べて、用意した水と食料その他もろもろを持って、マントを羽織る。
服はなるべく露出をしない格好で。足を出してうっかり虫や蛇にかまれたら危険ですよ、との神官様の言。センパイの言葉は重要だよ！
食料って意外と重いな。これがなくちゃ生きていけないのは、分かってるけど重い！
荷物の重さにふらつきながら、最後に鍵を取る。大家さんの家に、この鍵を返したら、部屋とお別れのときが来る。
入口から、ちょっとだけ部屋の中を見回す。

ここで過ごした時間が、ふっと頭を過ぎった。

もう何もなくなった部屋がちょっと寂しい。

思わず部屋に向かって、行ってきます、と呟いたけれども、その乙女的行動（笑）に自分で恥ずかしくなって心の中で悶絶した。いたたまれませんよね！！！

とりあえず、締まらないけれども。

こうして私は旅立った。

とりあえず家からは旅立った。

本当に、生きて帰れるんですかあああ！！　神様！

待ち合わせの門の前、勇者様と神官様は目立たないローブを被って待っていました。

灰色のローブで、しかもそのフードを深く被った人が二人です。

軽く引いた。

だって、ローブですよ！

うさんくささ倍増ですよ！

だって想像してみてください。朝霧がうっすら掛かった場所で、フード被った二人組みがひっそりと気配なく佇んでいるんですよおおお！　暗殺者か何かと間違うって。

私が近所の人だったら、自警団に通報するレベルです。

神官様がちょっとフードを挙げて挨拶してくれないと、私遠巻きに見守るところだった！

実際、今も少し距離をとっていますけれども。

中身をさらしても困ることになるけれど、フード姿も胡散臭いです。どっちにしろ、困るのは私だけか！　そうか、そういうことか！

そんな心理的葛藤を知ってかしらずか、神官様はあっさり挨拶をしてくれた。

「では、これからよろしくお願いしますね」

「は、はい！」

びし！と返事をする私。勇者様は相変わらず頷くだけで会話に参加している様子。

勇者様、たまには喋らないと、喉が退化しそうですよ！

こちらの門は、あまり人気の無い地方へつづく門のため、利用者が少ない。今日は私達だけかもしれない。霧が出てるせいで、旅立ちを見合わせている人がいるのかも？　旅素人の私には分からないがな！

「この町から出るのは、初めてですか？」

神官様の問いに、私はこっくりとうなずく。勇者様の真似じゃ、無いよ！

この町には様々な思い出がある。

しんみりするなあ。

広い世界に、旅立とうと思ったことなんてなかった。

何で勢いで旅立ってるんだって、ちょっと冷静になったら危ないかもしれない。

このテンションのまま旅立つよ！

「じゃあ、いきますか」

何の気負いなく神官様と勇者様が歩きだす。

私はその後を追って、初めて門を越えた。

が。

越えたところで、ぶつ、と意識が途切れてしまった。

町民C、なんの感動もなく旅立つ

遠くで、声がする。

不思議な声。

ざらりとした、心のひだを撫でて行くような、掻き分けるような声。

それでいて無機質。

――……存在率の九割五分は……で埋まってい……

――この町を出ると…の望みと反するため…

――受容器とし……耐性は

――それでも、これにかける…か……とするか…

人が寝ている耳元で、さわさわ話している声が聞こえるって、すごおおく不快じゃないですか？

寝ているときに虫とかが耳の周りを飛び回っていると、めっちゃくちゃ気になって気になって眠れません。安眠妨害だよ！

皆さんもそうですよね！

私、夜中にキレて、跳ね起き、真っ暗な中見えない敵と戦うぐらいの勢いで虫を追い払うことに専念したことがあります。だって虫のために明りつけるなんて、ランプの油もったいない。それにつけたところで虫が見えるぐらい明るくならないから、暗いまま戦ったわけですよ！　あれは辛かった！　三つ子月の明るさをもってして

も厳しかったね。辛い思い出です。

まだ脳に話し声が届く。

いらいらが積もり積もって、とうとう私は爆発した。

「うるさいっ！」

反射的に叫んでがばりと身を起こす。

が。

場所があまりにも想定外でした。

えええええええええ?!

何故か私、勇者様に背負われてましたああ!!　あ、おんぶなんですね。

前回の荷物担ぎより、ちょっと人としての扱いを受けている気がする！　やったね！

「無事に起きたか」

勇者様が淡々と一言で状況説明してくださいました。

私、寝てたんですね。

私がいきなり身を起こしても歩く姿は全く揺るがないです。

それに、くっ、この人、できる人ですね！　耳元で叫ばれたにも拘らず、表情が全く動いていません。三歩ぐらい離れて歩いている神官様のほうが正直ビックリしています。

真横にあった無表情に、私のほうがトリハダ立ててしまう。

この人、すごいマイペースなんだろうか。私だったらとりあえずうるさいのと驚いたので、地面に落としますよ。ええ、落としますとも。勇者様の評価がグッと上がったね！

「あ、ありがとうございます……？」

今回も微妙なお礼になってしまったのは、状況把握が出来ていないせいです。

とりあえず、きょろきょろしてしまいます。

草原のど真ん中みたいです。左右に緩やかな丘陵地帯が広がって、地平線は見えない様子。残念！

お日様はガンガン日光をご機嫌に降り注いでいます。

これは、日焼けするわ……。

そういえば、初めての旅の醍醐味（だいごみ）、外から見る私の町！　をしてみたかったので、グッと振り返ってみる。

麗しのわが町が背後にッ……って、やっぱり見えないわー。

どんだけ離れたんですか、私が寝ている間に。

逆か。どれだけ寝てたんですか、私。

勇者様の足取りは確かで、全く乱れが無いです。

ざっ、ざっ、ざっ、っていう感じ。鎧装備して私抱えて、このひとやっぱり基礎体力セレブだ。実感しました。おんぶしてもらっているのに、汗臭くないよ！　どうなってるんだこの鎧！　鎧はくさいって向かいのじいちゃんが言ってた。勇者オーラですか、勇者オーラですね！

神官様ものんびりと歩いているようで、ちゃんと付いて行っている。インドア派に見えたのにね。

横には一頭、荷物運び用の黄緑色の陸馬（うま）が歩いている。

背中に括られた荷物の中には、私の荷物も見えた。

陸馬（うま）は大きさは成人男性より大きいぐらい、四本足で首がそこそこ長くてゴツイ毛が生えている動物です。

毛の一本？　ひとかたまり？　まあとにかくその太さが私のこゆびぐらいはある。そんな毛がもっさもっさしているから、見た目巨大なモップが歩いているように見えます。そして色がとんでもなくカラフルな種族です。実際今横に歩いているのは黄緑色だよ！　草原だが、保護色にならない。いいのか野生。

大人しいけれど、丈夫で働きものだから旅人は重宝するらしい。これも物知りおばあちゃん情報だよ！　あと、生息地の違いで天馬や海馬、森馬とかどこまで本当なのか分からない仲間がいるらしい。

陸馬をじっと見ていたら、唐突にヤツが「ポー」と鳴いた。え、ポーって鳴くの！

「お昼ですね」

えっ、時計代わりなの？！

神官様に目線で問いかけると、

「知りませんでしたか？」

と逆に言われた。馬族は、体内時計が恐ろしいほど正確らしい。どうやら定期的に一定間隔で餌を取れなければ急に動けなくなるという種族なんだそうだ。

とりあえず、草原のど真ん中ですが休憩ということになりました。

「下ろすぞ」

予告してくださったので、とても華麗に着地できました。

ぐっすり眠ったので、元気ですとも！

わりとどこでも寝られる特技は持っています。

「重かったですよね。申し訳ありません」

とりあえず勇者様に謝罪を述べると、

「そうでもない」

と答えが返ってきた。

なんとも微妙な……。

「そこは嘘でも軽かったというべきなのでは？」

と神官様のお言葉でした。

それ、フォローのつもりですかあああ。

まだまだ口に出してつっこめない私。いつか、つっこんでしまうんだろうか……。

色々将来の自分が不安になってきた。

はっ……もしかして、このたびに私が必要とされたのはツッコミのため?!　そんな役割を求められているのですかっ！　大体このツッコミだって、心の中で喋っているのにっ！　神様並に神通力をお持ちですね、もしや！

うろたえる私をよそに、神官様はがりがり地面に絵を書き出しました。えっ、何が始まるの。ゲー術ですか?　ゲー術というのは最近流行している、爆発する術だそうです。小説に載ってた。アートを作ることによって爆発するらしい?　素人は手を出してはいけないそうです。

「それはゲー術ですか?」

はいっと手を上げながら質問したところ、神官様はビミョーな表情をした。

「いえ、これは普通の術ですよ」

何でそんな表情なんだろう、と首を傾げると、勇者様が、

「これは新星術(しんせいじゅつ)だ」

とまさかのフォローをしてくださいました。予想外の場所からのフォローに、思わずびくりとした。

「しんせいじゅつって、なんですか?」

「平たく言えば、今、一般的に星教(せいきょう)で使われている術式のことです。始原(しろ)の勇者以降に体系付けられました」

えーっと。いまいち、その、勇者様の名前でどの人がどの勇者様かなんて聞きわけがつかないです。ぽかーんと口を開けていると、神官様はその顔で察してくださったようです。

「勇者の順番を覚えていらっしゃいますか?」

苦笑する顔も美人さんは得ですね!　エレガント!　私の相手をしながらも、地面にがりがりと図を書いている。大人二人が手を伸ば

したぐらいの直径の円だ。円の周りに星のめぐりを配置して記入している。あれ、星の配置なんて私知ってたっけ？　占いでもするために覚えたかなあ。

どちらにしても、星の配置は分かっても、勇者様の順番は、

「ええっと」

正直、覚えていません……。ごめんなさい。

えへ、と笑う私に、神官様の作業を眺めていた勇者様が、またしてもフォローですよ！

ますます勇者様の株が上がります！　このままだったら大きなカブに育ちますよ！　意味はありませんけど！

「勇者が現われたのは、始原（しろ）の勇者、紅蓮（あか）の勇者、黄金（きん）の勇者、夜闇（く）の勇者、の順だ。大体星が一巡りか二巡りの期間を置いて現われる（ろ）」

星の一巡りは、大体、百年ぐらいだから、百から二百年毎なんですね！

意外に短い周期な気がしないでもない？　むむむ。

「そして、始原（しろ）がはじまりのひとと呼ばれる場合があります。それまで複雑だった星術を整えて新星術に編纂しなおされたのがこの時代ですね」

へー。

「という辺りまでは流石に一般常識だと思っていたのですが……」

そんなかわいそうな子を見る目で、見ないでください……。

視線を避けるようにそっと目線をずらすと、陸馬がもっしゃもっしゃ雑草食べてたのとバッチリ目が合った。陸馬がびくっと跳ね上がる。大丈夫だから。私はその草は取りません。君の餌です。ちょっと和みました。勇者様と目が合ったときとは大違いだけどね！

ともかく、神官様の地面への落書きは意味があったらしい。

「では、星都セレスタイトいったん戻りますよ」

にっこり笑って神官様。な、何のおはなしデスカ？
神官様が、土の文様を蹴ると同時に、何かの言葉を口にした。

「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，」

その宣言のような言葉と同時に、足元の模様が光りだした。
真昼間なのに光ってるのが分かるってある意味凄い。
謳うような声が草原を流れていくのですよ。ちょっと詩人風に解説してみた。

「Ｔｎ，
Ｚｈｙ－２５７７８９５－　Ｋｒ　Ｚｈｙ－４５８７５２１－，Ｏｙｓ　Ｓｈｔｒｙ　５７８６，”Ｍｓｈ”　Ｓｈｇｂｔ　Ａｒ，
Ｊｍｎ　Ｋｙｎｓｒ，Ｍｎ　Ｋｈ　”Ｄｚ”　Ｓｈｋｔ，」

ふ、と神官様の声が止まった。模様は光りっぱなしだ。まだ途中なのにどうしたんだろ？
ぼんやりとその様子を眺めていたら、勇者様がおもむろに私を担ぎ上げた。

「ぐえ」

また、荷物担ぎですか！　私ってやっぱり荷物？　さっき復活したような人権はどこへ行った。
人権の消失ですね！
勇者様が私を担ぎ上げ、陸馬を円の中に引き入れる。
その様子を見て、神官様が最後の言葉を放つ。

「Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ」

えええええええええ！
円の外の世界が、ぐにゃぐにゃに混ざっていきます。
うわーん不気味だよおおおお！　反射的に勇者様のマントを握ってしまった。

――　こうして、私の旅立ちはよくわかんないまま終了するのだった。えええええええ。
感動も、何も無いよ！

町民C、知らない場所にやってくる

きーもーちーわーるーいー。

荷物状態に担がれ、おなかを圧迫されているのを差し引いても微妙にくらっとくる。

なにがどうなったんだろ？

星都へ帰るとか何とか聞いた気がするけど……？

歪む景色を見たくなくて、ぎゅっと閉じていた目を開いた。変な感覚が収まったから恐る恐るにだけれどね！

開くんじゃなかったと後悔しました。

ええ、後悔しましたとも！！

ここ数日で後悔することばっかりだな！　そんな気がする！

周囲には十人ぐらいの人がさわさわ話しながらこちらを見ていました！！

大！　注！　目！　ですよ！

私から見えるところだけでこれだけ人がいるんだから、全体だったらかなり多いんだろうね！　その中を荷物担ぎで登場の私は一体どういった位置づけなんでしょうね！　あ～。

下ろしてほしいけど果たして下ろしてもらっていいものなのか。

むむ、と悩んでいたところ、また軽々と下ろされました。意外と下ろす時は丁寧だね！　担ぐ時こそ、その気遣いがほしいですよ！

一言声を掛けるとかね！　いや、声を掛けてもらってもどうなん

だろう……。ともかく！　気遣いは人間関係の潤滑油です。上手いことといいました。

下ろしてもらったおかげで、足の下に地面を感じます。

夢じゃないのか。実感がわいてきました。

なにがどうなったかよく分かりません。

ここがどこかも分かりません。

やたら綺麗な芝生ですが、ここは本当に立ってもいい場所なんでしょうか！　ふかふかした芝生が丁寧に敷き詰められ、整備されています。勇者様も陸馬も平然と立っているからいいんだろうか。私、芝生様を踏みつけないよう、状況によってはちゃんと靴を脱ぎますよ！

ひとりで混乱する私をよそに、事態は進行していたようです。

「お帰りなさいませ」

目の前にやたらキラキラズロズロした服を纏った一団が近づいてきました。

しかも、礼を取っているよ！　庶民の私にとってはこれはビックリ状況でしかありません。硬直してしまいますよ！　あんなに金糸の縫い取りをした服を着ている人なんて、見たことが無いよ！　目がつぶれるううう！！！　しかも美しく整列しています。乱れが無いって綺麗だけど思った以上に怖いです。

「用が済めばすぐに出ます。陸馬（うま）をしばらく預かって置いてください」

神官様がセレブリティたっぷりな雰囲気で、集団に声を掛けていらっしゃる。慣れてるのかな？　もしかして本物セレブ？

神官様はそれ以上何も言わずに歩き始める。集団がささっと両側

に避けて道を作る。えええええ。なんか怖い！　勇者様は無言でそれについていくし。私はどうすれば！

はっ、周囲の人からあいつは一体なんなんだ目線をじわじわ感じます。突き刺さるよ！

そうだね！　どう見てもハイパー庶民が混じりこんでいるね！

なんでかは私もよくわからない！　聞くなら先頭の神官様に聞いてええ！！　私のほうが知りたいです……。

そんな中、勇者様が二歩ほど歩いたところでふと私を振り返った。視線をじっと注がれます。

これは、待っててくれているのかな。

慌てて歩き始める。芝生様、踏みしめてごめんなさい。

私がついてくるのを見て、勇者様は歩き始めた。待っててくれたんですね！　多分……。

このさいだから観光するつもりでいいよね！　絶対に庶民では入れない場所の匂いがぷんぷんするから！

私は開き直って周囲を観察してみた。

見れば見るほど変な感じです。

異常に高い壁が周囲を包んでいる庭っぽい場所だった。

壁の上部を見ようとしたら、口が開くぐらい上を見なきゃいけない。顎と首のラインが真っ直ぐになるよ！

壁は白い。とにかく白い。混じりけのない白がキラキラ陽光を跳ね返している。

木は一本もなく、芝生広場がただただ広がっているだけ。

空は青空が突き抜けて見えるから、屋外なんだろうと思う。それにしても、私の家二十戸分ぐらいの広さです。なのに何も無い。芝生と壁だけだよ！　何のための場所なんだろう？

ふと先程までいた場所を振り返ると、陸馬が近寄ってきた人に引かれて、おそるおそる移動していたのが見える。そうだね！　怖いよね！　分かるよ！　陸馬に親近感をぎゅんぎゅん感じます。次に逢ったときは親近感たっぷりにお世話するよと心に誓った。待っててね陸馬さん。

周囲をきょろきょろ見渡しながら歩いていたら、私はちょっと遅れてしまったらしい。勇者様がじっとこっちを見てましたああ！　いや、声を掛けてくれたらいいのに！

勇者様と付かず離れず歩いていった先には、また壁がありました。そこに神官様が手を触れると壁にうっすらと切れ込みが入り、入口になる。つなぎ目は一切わからなかったけどね！

周囲を取り囲むキラキラ集団は頭を下げたまま神官様が通過をするのを待っているようです……。あ、あそこの間を歩くんですかあああ！　とんだ羞恥（しゅうち）プレイだな！

挙動不審な私に、流石に勇者様が見かねたようです。

手を差し出されました。

手ですか！　迷子対策ですね！　すみません！

それにしてもこの人も喋らないな！　神官様が十喋るとして、一喋るかどうかだよ！　つまり十対一の割合ですね！

びくびくしながら手を重ねると、そのままエスコートされる形で歩き始めました。

手は本当に重ねるだけ。あ、意外と手が大きいですね勇者様。

というか。

というかあああ。

こ、こ、これは恥ずかしい！！！！！！！！

何でこの人は素なんでしょうか！！　色々と恥ずかしいな！　多分色々と訓練されてるんですね！　何の訓練かは分からないですが！

手を引かれた混乱でグルグルしている間に、あの人々で作られた道は終わったようです。

室内に入ると、やや暗いです。

ちょっとだけ目をしぱしぱしていると、

「歩けるか？」

と声を掛けられました。全力で頷きますよ！

「歩けます！」

いまの言葉に不穏な響きを感じたからです。ここで、歩けないなんて言ったら……荷物担ぎされる！　そんなムードが漂ってましたから……。

町民C、もう帰りたくなる

他の御付の人はぞろぞろとは付いてこなかった！

よかった。あの行列がついてきたら本気で心臓止まりかけるところだった。

残念ながら通路は二人並んでもゆったりとした広さがある。だから手を離すタイミングを逃したまま歩いています。さりげなく、勇者様の気遣いを無駄にしない感じで離したい。考えれば考えるほど、今の状況を意識してしまいます！

重ねた手から意識をベリッとひきはがし、また周囲の観察ですよ。

通路はこれまた白い壁だった。

床にはふかふかの青い絨毯（じゅうたん）が敷き詰められている。

靴に当たる感触がやわらかいですね！　靴から泥が落ちていないか本気で不安です。でも気付いた。靴に泥が付く暇なんてなかったことに！　町は石畳で舗装されているし、草原では一回勇者様のおんぶから下ろしてもらっただけ、そして気がつけばさっきの芝生広場（仮称）ですよ！　安心した！　万が一汚してしまったら、自分で掃除をする所存です。ええ。掃除はこう見えて得意ですし。弁償はカンベンしてください。払えませんって。

それにしても長い通路です。延々と同じような景色が続いています。ところどころに燭台が置かれて光を放っているおかげで足元が良く見える。それにしても、これは高い蝋燭ですね！　ふわっと蜜の匂いがします。庶民には手の届かない蜜蝋ですよ。たぶんね。だって聞いたことしかないし。それを常時灯（とも）してるとか。贅沢だな！

……で、つまりここはどこだ。疑問は膨れっぱなしよ！

足音さえ絨毯に吸収されるから、物音は本当に衣擦れと鎧とかの音だけ。静かな雰囲気の中、質問するのは、はばかられます。く、口を開けない！　この沈黙嫌だああ！

不意に先頭を歩いていた神官様が足を止めました。行き止まりのようです。のっぺりとした白い壁だけが前にあります。

くるりとこちらを向き、神官様はあからさまに驚いた顔をした。

えっ、ていう表情でした。

重ねた手に凄い視線を感じます。そんなにこのエスコートもどきは恥ずかしいことだったんですか？　誰か指摘してええええ！　勇者様を見上げても、いつも通り無表情だった。

ゴクリ。さすが勇者様……ゆるぎないぜ。

ですが、これだけガン見したにも関らず、神官様はなかったことにしたようです。なんでだ。ツッコミはいつでも歓迎ですよ。さらりとエスコート状態のことを流したまま、

「この先、もしかしたら面倒なことが起こるかもしれませんが、しばらくの間我慢していただけますか？」

と仰る。何の事だか分からないのは相変わらずだけど、そう言われたなら仕方が無い。岩のように口をつぐむよ！　実際心の声はぺらぺら喋っているけど、口に出してはいない純情乙女でございます。自分で純情とか言ってるけどね。

「分かりました」

とりあえず、勇者様のように動作だけで返事をせずに口を開いてみた。神官様はかすかに頷いて、苦笑したようだ。

「いろいろと、しがらみが有るんですよ。まあ、何も無いかもしれませんが念のためです」

セレブには気苦労がつきものなんですね。大変ですね。

「なにがあっても、喋らないでください。私たちがフォローします

から」
たち、っていうところに疑問がありますよ！　勇者様は果たしてフォローしてくださるのか！　乞うご期待ッ！
　神官様は壁に向かい、杖をかざした。またあの不思議な韻律の言葉が謳われる。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，

—Ｋｊ（開錠呪文），

Ａｋｔｂ　Ｎｙｒｙｋ　—｛Ｋｍ　Ｈ　Ｎ　Ｍｃｈ｝（合言葉入力　神への道），

Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」

壁がゆらりと揺れて、無くなりました。壁が無くなった！？　い、いちいち驚いていたら身が持たない！　そうですね、魔法って不思議ですね！　もうこうやって自分の中の常識と折り合いをつけていかなきゃいけない気がした！
「行くぞ」
一声掛けられてから、軽く手を引かれる。
「あ、は……ぃ？」
見上げた勇者様は、笑顔でした。

もう一度言う。笑顔でした。

勇者スマイル装備ですよ！！！！！　ゆうしゃは　えがおを　そうびした！　ぱららららったらーん。

でも今の声は笑ってなかった気がするんですが！

笑顔装備しなきゃいけないって！　この先は一体なにが待ち受けているんだああ！

旅一日目ですが、帰っていいですか？

町民C、びびりまくる

扉を潜り抜けたら、とんでもない空間が開けていました。さっきから口が開きっぱなしですよ！

まず、天井が高い。

さっきの壁ぐらい、高い。

でもさっきの壁より恐ろしいのは、ここが室内だということです。ひ、広すぎる。何のためにこんなに高い天井に設定したのか……。

天井を見上げるとまた顎と喉のラインが一直線になったよ！　人は何故上を見るときに口が開くのだろう。自分的に謎です。

天井には一面に絵がびっしりと描かれていました。天井だけに、天上の様子ってね！　冗談ではすまない感じですが！

凄く写実的な人の絵が、生き生きと綺麗な彩色で描かれています。描いた人って、上向いて描くんだろうか。絶対肩こりになるよね！

むしろ苦行かもしれない。

絵を眺めていたら、色々見つけた。頭が白い人がいる。あれが始原の勇者の物語かな。そうだとしたら安直ですね！　なにがというか、ネーミングが……。

と、天井に目をとられている場合じゃない。さっき神官様が不穏なことを言ってたばかりじゃないか。かぽんと口を閉じて、前を向く。

だけど、また閉じた口を開けそうになった。

前もとんでもない感じだった。無理！　これで平常心とか無理だ

からあああああ！！！

白い壁には金で作られた装飾がツタのように這っていて、それがまた窓から差し込む日差しを受けてキラキラ光っている。金ですか！　ゴールドですね！

ひい！　何という金の無駄遣い！

窓には色ガラスがはめ込まれて、それも何かの物語の絵になっています。普通の窓じゃ駄目なのか！　どうあっても装飾を施す気か！　このセレブ空間め！

窓をすり抜けた日の光は、廊下にも物語を映し出している。それらが幻想的に映し出されている床は、陽光の色彩を計算しているのか、これまた白い大理石だ。うっすらと入る黒い模様が上品ですね！

ツルッツルに磨き抜かれている表面は、鏡のように窓の光を反射している。ゆらゆらと輝きが天井にまで拡散して、色と彩りが乱舞して、本当に幻想的な雰囲気をかもし出してる。そうか、これがゲー術かっ！　爆発したとしても、仕方あるまいな！

そして、私の思考は初めに戻るのだった。

だから！

このどう考えても豪奢な建物は一体！

どこですか！

気後れしている私の手をくいっと勇者様が引っ張った。

ギラギラブリリアントなゴージャス廊下を進むらしい。この、豪華空間を進むらしい！

この大理石で滑ったら、ものすごく恥ずかしいんですけど！　慎重にならざるをえないよ！　恐る恐る足を踏み出してそーっと歩く。

旅装そのままの私は、本当に場違いだな。場違いすぎて、ばちが

当たるぞ！　おおっと、私が滑る前に、ギャグが滑ったあああ！！　自分で言ってて寒かった！　これは寒い！！　厳冬並みである。く、くだらないことを考えたら、気分が落ち着くかなって思ったんだって！　信じて！

私が誰かに弁明をしている間に、いつの間にやら廊下を一行で粛々と歩いていた。半分、私の魂が抜けかかっているがな！　見よ、この口から出た魂を！

いろいろキャパシティが限界になってきた。いや、とっくに限界を迎えてたのを気付いてない振りしてました。歩くのだけで、正直一杯一杯です。

「背筋を伸ばせ」

横の人から声が掛けられた。ぼそっと呟きレベルの大きさなのに、耳に滑り込んでくる。反射的に私は背筋を伸ばす。

「顎を引いて前を見ろ」

言われて初めて、目線が下を向きがちだったことに気付く。顎を引いて、前を見ると、視界が広がった気がする。

「その靴はある程度は滑り止めがある。滑らない。かかとから着地しろ。胸を張れ」

きわめて自然につなげられた指示に、私は何も考えずに従った。頭、真っ白ですから！

「頬と口角を上げて目をもう少しパッチリと開け。笑顔を作り、敵意が無いことを示せ」

無理やり笑顔を作る。か、顔が引きつってる気がするけど、そのあたりの指摘はない。何とか合格ラインなんだろうか。

「前方から王族の気配がする。そのまま姿勢を保て。俺が合図で手

を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼しろ。あとはあいつに任せてじっと立ったまま笑顔を保てそれだけでいい」

頭の中で今の指示を反芻する。よし、覚えた！　多分！

色々教えてくれてありがとうございます！　心の中で師匠と呼ぶよ！　意外と面倒見がいいお兄さんなのだね！

というより、今の発言の中で幾つか不穏な単語が混じっていた気がするけど、私は全力でスルーするよ！

ええ、スルーさせてください！

そう、無心になって歩くんだ。無になれ。

おうぞくってなにそれ。

……いや！　考えちゃ駄目だよ、考えたら負けな気がする！

町民C、お姫様は無理だと悟る

真っ白になって歩くことしばし。とうとうその時が来ました。

「深蒼（あお）の勇者様！　お帰りを、お待ち申しておりましたわ！」

静寂を破ったのは、鈴が鳴るような声と花の香りでした。

前方から何かが近づいてきます、先生！

声の主は、若い女性だった。先頭に立つ彼女が一番華麗で、そして何かのオーラを纏っています。その背後からは付き添いと思われる人がずらずら付いてきている。先頭の彼女より簡素だけれども、綺麗な揃いの服装です。その意味は深く考えたくない！　どう考えても王……いや、気のせい！　気のせい！

見事な金色の巻き毛を複雑に半分だけ結い上げ、生花とティアラで愛らしく留めている。背中に流した髪は金の滝のようだった。周囲の彫刻に負けてないぐらいゴールデンでぴっかぴかです。キューティクルというのは、ああいうものをいうのか！　ゴージャスな風景にしっくり溶け込んでいらっしゃる。

物語の挿絵ぐらいでしか見たことのない、ふんわりとパニエでふくらませた薄紅色のドレスをちょっとだけつまみながら、紫色の瞳を輝かせて小走りに近寄ってくる。本当にあんな丸いドレス、あるんだー。ビックリするほど肌が白いから、淡い色がよくお似合いです。

それにしても顔が小さい！　目がぱっちりと大きくて、桃色の唇がほんのり色気をかもし出している。簡単に言えば、美少女です。同じイキモノですか？

淡い色で全体がまとめられている姿は、春の妖精みたい。

私が少女小説風な表現をしちゃうぐらい、本当に可愛いです。

でも、どっかで見たことがあるね！
お祭りでよく売ってる国王様一家の絵姿で見たことあるような気がするなんて、気のせいだよね！

彼女はふわふわした雰囲気の笑顔で、こちらに――訂正、勇者様に駆け寄ってくる。
なんだろう、とてもヤバイ予感が。脳裏に警鐘がガンガン響くぜ！

反射的に、勇者様にひかれている手を、すっこめようとしました。が、あろう事か勇者様は握りました。握りやがりましたあああ。ちょ、離してええええ！　絶対面倒ごとの予感がするからあああ！

「勇者様、お帰りをお待ちしておりましたのよ」
両手を胸の前で組んで、うっとりと勇者様を見上げる彼女。勇者様は、日頃のあれがどこへ行ったのやら、にっこりと笑いかけ（ここで私のトリハダが一気に増えた）、
「ありがとうございます」
と答える。全体的にぼやかされた言葉を、そつなく笑顔勇者様は返します。
その返答に美少女はポッとあからさまに頬を染めたあと、
「あの、よろしければ旅のお話などを聞かせていただきたいんですけど」
ともじもじしながら仰いました。
「申し訳ございません、王女殿下」
ここで神官様の登場ですよ！
この話の隙間からねじ込んでいく能力は感嘆に値します。私は絶対無理！　姫君はここでようやく神官様のほうへ向き直った。って、王女様って言ったあああ！

混乱は顔に出さないッ。それが庶民としての立ち位置を守るのだああ！　クールになれ！

神官様は相変わらずのクールっぷりで話を続けます。

「今回は神殿に立ち寄っただけでございますので」

神官様の笑顔は本日も炸裂中です。あえて語尾をぼかすテクニック！　お断りムードを察しろということですね！　でもちょっと黒いものが見えてる気がするな。気のせいだと思いたいな。姫君の御付きの人がちょっと緊張した様子。そうだよね、下っ端って、敏感になるよね！　ちょっと親近感を覚えました。

さり気に黒い神官様に、それでも姫君はマイペースを崩さない。

「あら、神官様もお帰りなさいませ」

神官様に今気付いたのか？！　ようやく勇者様を見上げる乙女モードは終了したようです。神官様へ向き直り、にっこり。しかし、彼女は諦めなかった。

「でも、少しぐらいお時間はいただけませんこと？　ひとやすみも、重要だと思いますわ。美味しい焼き菓子が手に入りましたの」

お姫様のスルー力は凄いな。わたしも見習わなければならない。だが、見習わなくて大丈夫なようだ！　今、私、全力でスルーされている気がするよ！　ああ、すっぱり私の存在がなかったことになってる！　いや、このままでいいよ！　私を無視してくれてもいいよおおお！　いや、無視してくださいマジで。

「姫様」

勇者様（笑顔）が爽やかに姫君に声を掛ける。はい、と姫様は本当に嬉しそう。

「まことに申し訳ございません。本日は時間が取れないのです」

本当に、残念そうに、情感を込めて勇者様は仰った。普段とのギャップはなんだろう！

そういえばその件について聞いたことがなかった。二重人格なのか、それともなんかどっちかが偽者の俺的なんだろうか。どっちにしても、普段のぶつ切り会話ッぷりを知っている身からすると、正

直、トリハダが止まらないんですが。

ここで初めて姫様の視線が私に流されました。

ちょ、見ないで！　怖いから！

町民C、ジョブチェンジするらしい

お姫様の視線が突き刺さる先は、一つしかない。
勇者様が握り締めやがった手です。
だから！　離して！　ほしかったのに！

神官様はお姫様の視線に気付いたらしい。にこっと笑いかける。
「こちらの方は、私たちの旅を手助けしてくださる方です。ご紹介します」
神官様の無言のうながしに、勇者様が手を少しだけ前に出した。

前に出ろって、いじめですか！　と叫びかけたが、先程勇者様に言い聞かされたことをかろうじて思い出す。

合図で手を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼！

ぎこちないながらも、一礼をした。ギクシャクどころじゃないよ！　庶民にはこれが精一杯。
でも、挨拶の口上も分からない。
あれ、自己紹介って身分が下のものからするんじゃなかったっけ？
でも、私は黙っていろって何度も言い聞かされた。とりあえず、敬語もぐちゃぐちゃだと思うから、大人しく黙っておく。
神官様が私の一礼を見届けてから口を開いた。

「こちらが新しい神子になられる方です。これから、セイヒツの間に入り、星原樹（せいげんじゅ）の選定を受けていただくところです」

ちょ。

ちょっとまてえええええええ！！！　何も聞いてない！　聞いてないですよおおお！

みこってなんすか。

なんかその煌びやかな呼び方ってなんすか。

これから気軽に職業が名乗れなくなりますよ！

ご職業はなにをされていますか？

神子です。

ッ、言えない……！！！　この平凡顔のまな板娘では名乗れない！

笑顔を保ちつつ、頬がぴくぴく痙攣（けいれん）するのが分かります。

私の知らない衝撃の事実！　どどーん。

いや、ホント知りませんって。

それならそうと、はじめから話してくれれば……信じませんよねー。ですよねー。

姫様は、ご不満のようです。

ですよねー、どう見ても庶民が勇者様（笑顔効果で三割カッコよさ増量）の手を握ってる図、ですしねー。御付きの人たちからもビュンビュン視線が飛んできます。視線が針だったら、私、ハリトカゲみたいになってるはず。ハリトカゲは全身針で出来たトカゲの魔物です。俺に触ると怪我するぜ、みたいな。

はっはー。

緊張しすぎてようやく落ち着いてきました。

平常心だよ！　もう私平常心保ってる！

お姫様がうろついているって事は、神官様が仰ったとおりここは星都なんだと思う。

で、星都って言うのはイコール王都だ。ただ、この国に関しては王より神が上って感じなんだよね。だから、星神の都という意味で星都ってよばれているのさ！　冷静に誰かに解説してみた。

「この方が……？」

スーパー疑惑の眼差しですよ、お姫様。

私もそう思いますよ！

あやしいですよね！　とってもあやしーいですよね！

何でこうなったのか意味が分からない。

全体的に、まあ、私を拉致した誘拐犯（勇者様）のせいだということだけは理解しているがな！

「はい。なので一刻も早く儀式を行いに行きたいのです」

畳み掛けるように神官様。要約すれば早く行かせろってことですね。

「では、その女性があの星神官（せいしんかん）の代わりというわけですか？」

お姫様も負けずににっこり。

ん、なんだろう、今の言い方が引っかかる。

代わり、といわれるからには、私の前に誰かがその神子とやらをしていたのだろう。

星神官、ってあまり聞き覚えの無い役職だ。

「あなたは、これからのことに耐えられて？　わたくし、同じ女性としてとても心配しておりますの」

お姫様は私に向かって両手を胸の前で組みながら語りかける。

何の、話でしょう？

私は口を開きたいが、開けない。そう約束したから。

でも彼らも私に色々話さずにつれてきた。なんか、おかしいよね？　いや、今更って言わないでくださいいいい！　一応、世間的に、地位も名誉もある方々だから、変なことをするはずがないって思って付いてきたんですがああ！！！

「男性の星神官でも一月で心を病んでしまわれたの。過酷な旅にな

りますわよ」
わたくし、心配で、という姫君。なのに、何故か私を心配している風にはちっとも聞こえない。私の耳が悪いんでしょうか！　それとも女の嫉妬は怖いねっていう話で納まる話題なんでしょうか！
それにしても内容がいきなりヘビーですよ！　聞いてないよ、その二ですね！

私が異常な緊張のせいで、掌に汗をかいたことに気付いたのだろう。勇者様が少しだけ、手に力を入れた。それを見逃さないお姫様。ますます笑みが深まり、言葉に刃が潜む。
このひと、こーわーいー。
無表情勇者様の怖さなんて、子猫のひっかき攻撃ぐらいに思えてきた！　こう、じわじわくるのがたまらないーしかも美少女なのがまた怖さを増やすううう！
「選定されるまえでしたら、辞退できますわ。辞退されても、わたくしが悪いようにいたしませんわよ」
ふと、もし私が辞退したらどうなるんだろうと思った。辞退しても、大して変わりは無いんじゃないだろうか？　所詮一般人です。

「姫君」

ここでようやく勇者様の介入です。姫様はぴたりと口をつぐみました。
「この方の不安を徒（いたずら）にあおらないでいただきたいのです。世界は刻一刻と魔物の侵食を許しています。それを食い止めるには、神子が必要なのです」
愁いをたたえた勇者様の言葉に、姫君は流石に勇者様の前でこれ以上何かを言うのは諦めた様子です。この笑顔バージョンの勇者様が本当にお気に入りなんだろうなあ。分かりやすすぎる対応ですね！

それにしても、いつの間に、こう、急展開になったんだ？

私だけがついていけません……。

町民C、いたたまれなくなる

私を他所に事態は進んでいるようです。私にとっての非常事態ですがね！

お姫様からは睨まれるし、後ろの人たちも怖いし、勇者様たちは説明が無いためもうどうしようもないわ！　付き合ってられません。奇声を上げて踊りでも披露したら、逃げられるのでしょうか……？

いやたぶん駄目だな。居場所が廊下じゃなくて、牢屋になるだけですね。

だらだらと冷や汗を流しつつ、この居たたまれない雰囲気をスルーしようと精一杯頑張っています。でも発言はしちゃ、駄目なんだよね。恐ろしい角度からいろいろ抉り取られそうな予感がします。ペンペン草も生えない感じに全滅フラグですよ！

「お姉さま、そのあたりでおよしになったらどうです？　見苦しいですよ」

横から涼やかな声が割り込んできました。全員の目がそちらに向きます。私も思わず注目！

カツカツといい音をさせてブーツのかかとを鳴らしながら、王子様っぽい服装の方が登場です。

短く切った癖のある黄金の髪をなびかせ、明るく淡い色使いのお姫様と対照的に、深い緑と黒を基調とした軍服を纏っています。イメージも真逆。お姫様がふわふわしているとすれば、この方は怜悧で颯爽としている。腰には繊細な細い剣を佩いている。でも高そうな剣です。鞘にまで金とか！　あんな立派な服が仕事着なのか？　どう見ても男物なんだけど、でも女性の声だったよーな。

「主神殿でまで男性の衣装を纏うあなたよりは分別はありましてよ？」

お姫様は笑顔で皮肉を投げ返しました。

また一つ分かった事があるね！　ここってしゅしんでんだって！

えーと。どっかで聞いたな。どこだっけ。

そして新たな王子さまっぽい方は女性らしい？　人間、見た目で判断してはいけないって、神官様で学びました。まあ、昨日ですが。

美人に性別は意味無しだよ！

王子さまっぽい方は、姫君と同じ紫色の瞳をすっと細めて、

「この方が動きやすいのです。これから剣の稽古ですから。この服装については陛下と睨下のお許しはいただいております。頭の中まで砂糖菓子とおしゃべりがつまっているお姉さまと、一緒にしないでいただきたい。お姉さまこそ、ダンスの時間ではありませんか？」

と言い放ちました。

ぞぞぞぞぞ。

ひい！　私のトリハダは休むことを知らない……！！

涼やかに笑う姿は、うん、立派な王子様ですがセリフに棘がありすぎるよ！　ざっくざく相手を攻撃してるううう。

お姫様は流石に慣れているのか、表情が変わらないようです……いや、こめかみの辺りがぴくっとなった気がする。私、目だけはいいんです。見逃さないよ！

お姉さま、というところを見ると、どうやら姉妹らしい。

と言う事はこのお姫様が第一王女の華姫と、第二王女の騎士姫だろうなあ。姉妹の折り合いがたいそう悪いと町の噂で聞いたことがあります。あんだけ離れた町まで話が届くって、どれだけ仲悪いの。

まあ、こう、お二人揃ったら一目瞭然ですがね！　空気が軋みを

上げていますよ！　退避ー！　総員退避ー！
騎士姫様が、お姫様から目を離さず、声だけで勇者様に呼びかけた。
「勇者殿、急がれているのだろう？　早く救世の旅の続きに戻るといい。世界の一大事に、お姉さまも分かってくださるだろうよ」
先程までわがままで引き止めていたのを明らかに知っていますね！　いつから見てたんですか。そして、セレブって皮肉のエスプリが効いた会話以外は無いのか。
いたたまれません。
この毒気にいたたまれません！
私の笑顔はとっくに硬直しているよ！　お面状態です。

勇者様はこの好機を逃しませんでした。
「ありがとうございます」
と軽く礼を言い、歩き出します。
勇者様の笑顔とお礼に続いて、神官様も丁寧に礼をした後、颯爽と歩き始めます。私も慌てて礼をして、追いかける。追いかけずとも、手を握られているので引きずられることになりますがっ。
騎士姫様は、悪戯っぽく笑って手を振っていらっしゃった。
姉姫様が何か仰りたそうにしたけれど、妹姫の手前、沈黙を選ばれた様子。

何はともあれ。

ようやく刺々しい空間から脱出できて、大きく溜息をついた。先程と大して変わり無いけど、空気が美味い！　胸いっぱいに吸い込んだね！

勇者様の手と重ねた手が、結構汗ばんでいるのに気付いた。乙女としてこれは駄目なんじゃないでしょうかっ。外してくれなさそう

だから、後で即行謝罪することに決める。
そして今更気付いたけれど、勇者様はちゃんと私の歩調に合わせてくれていたみたい。昨日のように置いてけぼりにならずにすんでます。勇者様には気遣い大王の称号を与えたい。でも荷物担ぎはＮＧな！
しばらくそのまま無言で歩きます。天井の絵は、進むにつれてだんだん逆に勇者達の時代から創星（そうせい）の時代へとさかのぼっていきます。
絨毯が足元の衝撃を吸収してくれるから、歩きやすくてたまらない。

そして、行き止まりにはこの高い天井まで届く、デカイ扉がドーンと存在していました。
白い、何の材質か分からない、つるっとした扉には浮き出し模様が彫られています。

その扉には樹の模様と、そこから果実を取る人の姿。
創星記ですね！　流石に知っていますよ！　始まりの樹と万物の果実ですね。
これは石になった人間が貼り付けられているといわれても納得しそうな彫刻です。
こんな馬鹿でかい扉（推定石材っぽい？）、どうやって開けるんだ？
まじまじと近づいてくる扉を上から下まで眺めます。

ここで神官様が立ち止まり、くるりとこちらに向きました。

「先程の姫君の言葉を聞きましたよね？　それでもこの向こうに一緒に行ってくださいますか？」

神官様はあくまで私の意思を聞こうとしている。……らしい？

えっ、今更ですか！　今まであんまり意思を聞かれた覚えがなかったんですがっ。

町民C、やっと説明を受ける（かもしれない）

ようやく発言を許された感じの私は、恐る恐る切り出した。
「えっと……、いろいろお伺いしたいことがあるんですが、ここで聞いてもいいんですか？」
一応、黙っておけ発言があったしね！　どこまでが駄目なのかちゃんと聞いておかなくては。さっきみたいにお姫様たちがひょっこり現われたらいたたまれないよ！
「大丈夫ですよ。ここには近づける人間は滅多に居ません」
え、なんで？
また疑問が増えましたよ！　なんですかその選別されてるっぽい発言は。ここは不思議ゾーンですか？　不思議ゾーンですね！
私が首を捻っていると、
「ここは星神の力がもっとも強い場所でもあります。耐性のない人間はまず近づくことすら許されません」
それでさっきのお姫様たちは追ってこなかったのか。何で大人しく見送っているのかと思いました。特に姉姫様はハンカチとか噛締めてキーッとかしそうだったぐらいの眼光だったしね。
「私、そんな不思議な耐性はあまり無いと思うんですが。星神様の力？　とかも感じませんし」
「……本当に、何も感じないか？」
不意に勇者様が口を開きました。いつも通りに平坦な調子で、もう無表情に戻っています。
やっぱりこっちが素顔なんだろうか。あ、これも聞きたいことですね！
何を感じるというのだろう。
ぐるーっと首を回して、壁、床、天上、目の前の扉を見ました。
うん、高そうな調度品ですね、とか庶民丸出しの感想でいいんだ

ろうか。
　微妙な気持ちがにじんだ表情を、神官様は読み取ってくださったらしい。
「私でもここの濃密な空気は苦手ですよ。不快ではないんですが、常に全身を軽く圧迫されているような気がしますから」
　反射的に私はもう一度、周囲をきょろきょろ見回した。
　だ、だまされてるとかじゃないよね！
　本当に何も感じません。ぶっちゃけて言えば、さっきのお姫様たちのバトルの方が重苦しかったです！
　勇者様がじっと無言で私を見下ろすんですが。これが重苦しいぐらいですよ！
　何も感じていないのはこの反応であらからさまだったようです。神官様は続けてこう仰いました。
「それがあなたを連れてきた理由なんです。他のものは耐えられませんでした」
　自分が何も分からないから、いまいち理解が追いつかない。だって、重苦しい雰囲気とか、何も感じないんですって！　耐えられない、でふとさっきの会話を思い出す。
「先程の王女様が仰ってた、星神官様のことですか？」
　なんだか地雷の匂いがぷんぷんして聞きにくいことだけど、私の身体に関わりそうなことだからね！　今のうちに労働条件を把握するために聞きまくりですよ！
「あの方は、元々耐性は殆どありませんでした。ですが、私たちの旅に同行することになったんです」
　何が起こったんだろう？　勇者様が一発で分かる補足をしてくださいました。
「王族だったからねじ込まれた」
　不穏なムードが漂ってきましたああ！　権力って怖い！！！
「王位継承権の上でも、私たちの旅に同行したという実績が付きますしね。いい感じの箔付けだと考えられたのでしょう」

色々権力闘争があったみたいですね！　怖いからつっこまないけど。ついでに言えば、これ以上は聞かないほうがいいんでしょうね！

「同行したはいいものの、彼は耐性がなかった。本来果たすべき神子の代理は果たせませんでした」

あ、また出てきた単語ですね！　なんか派手な響きの神子！　ここで質問だ！

「神子ってなんですか？」

そんなけったいなものになるつもりは無いんだけれどな！　なんかこう、派手な衣装を着て、歌ったり踊ったりするんじゃないのかな。

「神子とは、尊から発生した言葉です。神の体現者であり、代理者として御言を発する方という意味があります」

むむ。これは私の知識とはちょっと違ってきた。

「神様のお言葉を伝える方って、『神の声』の大神官様のことじゃないんですか？」

都の神殿にいらっしゃる大神官様は、文字通り星神様のお告げを代弁するお方だというのは子供でも知ってることですよ！　流石の私でも分かります。勇者様の順番は知らなかったけどね！

神官様はほろ苦い笑顔を浮かべた。何でそんな顔をされるんでしょうか？

「『神の声』は文字通り代弁者なのですが、乱暴に表現すれば、そうですね……預かった言葉を読み上げるだけなのです。ですから分類としては尊ではなく、預言者であります」

むむ。また難しくなってきました。

「じゃあ、神子と預言者の違いはなんなんですか？」

さっぱり分からないぜ！　両手を挙げて万歳降参ですよ！　プリーズ説明担当！　か、噛み砕いて、優しくお願いしますね。

「神子は神との意志を通じることが出来るものです。『神の声』は一方通行でありますが、神子はある意味双方向で意思を交わすことが出来るそうです」

ソウデス、って伝聞形ですか？

「現在まで、本当の意味での神子が立った事はなかったからな」

勇者様がぼそりと呟きます。えー……驚きが大きすぎて、わけが分かりません。この二日間でこの単語ばっかり使ってる気がする！

どちらにしても、私が神様と繋がるとか、無い無いって！

ということは、神子、とは呼ばれても神子の代理なんだろうな。うん、代理だったらいけそうな気がする？　ぶっちゃけ、あまり星教の勉強とかもしたことがないんです……。信仰心、普通ぐらいだと思うよ。修行とかあっても全力でお断り申し上げたい！　滝に打たれるとか無理だから！　あと苦しいのも痛いのも駄目ですよ！

「選定とか、仰ってましたよね？」

「大げさなだけですよ、この部屋に入って、箱に触れるだけです」

神官様が指したのは、背後の大きなどでかい扉。あんぐりと見上げる。本当にこの扉、開くのか？

「樹があるだけの部屋だ。恐れる事は全く無い」

なんだか労働条件がよすぎて、凄い落とし穴がありそうですよねっ。またしても何か聞き逃したのか？

鳥アタマを自他共に認める私は、すぐに大事なこと忘れちゃうんですよねー。

あ、手を握ったままだ。解くタイミングが窺えないっ。しまった、ついうっかり。ここで手を引っ込めるのはおかしいかなあ。悶々とする私を見て、神官様は優しく仰いました。

「あなたを巻き込んでしまい、申し訳ございません。ですが、あなたほどの適正を示す人はいませんでした。力を貸していただけませんでしょうか」

両手を胸の前に組み、深々と頭を下げる。神官の最上礼だ！　私なんかにもったいないです！

「や、やめてください！　その、私が本当に役に立つかが不安なだけで」

慌てて止める。神官様の愁い顔は晴れない。いまいち私の返事が

振るわないせいかもしれない。うん、せっかくパン屋も休み貰ったし、やれることがあれば協力してみよう。ちょっと前向きになりましたよ！

「……で、私は何をすればいいんですか？」

本当は、大層な肩書きはつけたくないけれど、一応、一応だけ！　聞いてみました。

「簡単ですよ」

その単語にだまされないっ。気構えをしっかり持ちます！

「戦わずとも、何もしなくて構いません。ただ、樹の枝を持って一緒に歩くだけで結構です」

……えっと。

それって荷物持ちですか？

町民C、やっとココがどこか分かる

「流石にここの奥に何があるかは、分かるか？」
色々不安になった私に、勇者様が問いかけました。このひとに質問されたら、思わずびくついてしまいますよ。
「ここの奥ですか？」
え、えへ。分かりません……それどころか、ここがどこか分かりません。えーい適当に答えちゃうよ！
「お城ですか？」
私の返答に、神官様も勇者様も沈黙ですよ。
うわあああああああ！
気まずいいいいいいいいい！！！！！！！
今のは絶対かなり外した！！！　私は慌てて言い訳するよ！
「あ、あのですね、ここが星都だっていうことは分かってるんですが、それ以外が実はよく分かって無いって言うかっ」
私は本当のことを喋りました。
追い詰められたら喋ってしまうよ！
多分ちょっと脅されただけでいろいろ情報を洩らしちゃう人間だな！　自覚はあります。
神官様、こめかみをぐりぐりって揉んだ。今、かなり困ってますね？　困ってますね！
「どこまで何をご存知なのかは推測しかねるんですが」
勇者の順番も知らなかったしね！
「とりあえず、創星記はどこまで知っているんだ？」
勇者様が基本を聞いてきた！　どこまで私は無知なんだ！

創星記（そうせいき）、とは。
星神様がこの世界を作ったときの物語です。これは子供の頃からみんな聞いて育つ話ですよ！

「では、復習を兼ねて聞いてください。子供向けに編纂されたのが主流となってしまっていますから」

大人向けは違うんですか？　はう、まさかの子供は見ちゃ駄目というマークが？　……そんなわけない？　ですよねーちょっと言ってみたかっただけです。

ええと、はい、真面目に聞きます。背筋を伸ばしました。

「初めに星神が自己を自覚された。全き存在から神となった。そして星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した」

むむ。覚えていたのとちょっと違うような。はい、先生質問です。

「星の配置を決めたあとに韻律を決めて、命の基盤を整え、子等を野に放ったんではないのですか？」

神官様はそれはそれは難しい顔をして考え込んでしまいました。

あっ。失敗した。

「す、すみません。私の記憶違いかもしれないですし」

「いいえ。ちょっと、気になることがあったので。こちらこそ申し訳ない」

かなり深刻な悩みなんだろうか。更に凄く考えこんでしまう。

ちょーっとまって！　置いてけぼりにしないで！

けれどもすぐに神官様は説明を続けられた。やっぱりこの人は気遣いも出来る美人だね！　まだちょっと難しい表情はしているけど。美人ってどんな顔も似合いますね！

「……まあ、その続きとして、世界の中央に樹を植え、神はそこを始まりの場所とした。これが星原樹（セイゲンジュ）がはじめて、歴史物語に出てくる内容ですね。ここまではよろしいですか？」

ほほう。星原樹（セイゲンジュ）ですか。世界一有名な樹ですね！

「その後、星原樹を守るために建造されたのが主神殿エンジェライトです。星原樹の力で、この辺りには星石（せいせき）が豊富に産出されました。それで天上の青い石を使った都としてセレスタイトが有名になりました」

おお、青き麗しのセレスタイト！　とか吟遊詩人が大げさに謳っていたのは聞いたことがあるよ。青い石で屋根を作ってるから、晴れた日とか凄い綺麗らしい。

魔法？　でココに来たから、そんな光景は見て無いんですけどねっ。

ちょっと見たかったなー。

それにしても、星原樹は主神殿（エンジェライト）にあるんですね。

し、知らなかったわけじゃないですよ！

昔習ったから覚えてなかっただけです！

……うむ。

そういや、主神殿って、どっかで聞いたよね！　はっはっは。

エンジェライトっていう名前でしか、覚えてなかったよ。

ここじゃないかあああああ。

と言う事は、この扉の先にはまさか！

まさかー！

「ようやく分かったか」

冷静なツッコミをありがとう、勇者様。

「というわけであなたに持っていただく枝は、星原樹の枝になるわけです」

神官様が話を締めくくった。

それって、折っていい枝なんですか……？

町民C、ちょっと真面目に考える

正直に聞いちゃうことにしたよ！　だって、あとで呪われたり？　したらいやじゃないですかああ！

「そ、それって折っていい枝なんですか？」

そもそも枝を持ち歩くことすら意味が分からない！

私の質問に、神官様はにっこり笑ってこう仰った。

「星神様のお告げですから、大丈夫ですよ。世界の愁いを祓うために必要なのです」

お告げですか……。へーおつげ……って、お告げってあれですか！　大神官様が神様にいただくあれですね！　それは覚えてます。いきなり話が壮大になったなあはっはっはっは。

本当に私がここにいることすら訳分からないしね。

「部屋に入れば簡単に事が済む」

勇者様があっさりと仰います。あなたカンタンに言いますけどおお。

引き返せないことだけは、理解できている。

世界の危機とか、本当のところ、深くは理解できて無いのも分かってる。

どこか私の知らないところで全部起こって、解決されるものだと思ってたんだ。

そう、伝説の勇者様とか、どこかの強い人達がやってくれるんだって、思ってた。私が動かなきゃいけない理由が実感できません！！！！

冷たいっていうのかなあー……シロウトが布の服だけで人食い熊とかと対決するぐらいの勢いといいますか、勇気がいるんですよお

おお！

考え込んだ私を見てか、此処に来て勇者様がそっと手を離しました。

いままで散々引きずってきたのに、本当に今更。

たったそれだけなのに、いきなりぽん、と知らないところに放り出されたような気持ちになる。

掌の温もりが離れて、途端に不安になった。

すっと手に残っていた熱が冷えていくと同時に心も冷える。

私は顔を上げた。

じっと静かに二人とも私の結論を待っている。私が何か能力があるとか実感していたら、飛び込んでいけたのかな。スーパー能力発揮されるとか、いきなり前世に目覚めるとか、性格が変わるとかないかな！　そんなご都合展開はないでしょうけど！

さっきから怪我したらどうしようとか、怖かったらどうしようとか、つらいのはいやだとか、ぐるぐる頭に回って、もう爆発寸前ですよ！　弱虫だと笑ってもらってもいい！　怖いんだよおおお。

なにって、その、色々と。

その、責任とか。

世界を救うって事は、それだけ期待とか凄いと思うんだ。それって私に何とかなるのだろうか？

うわー、なんかまじめなことを考えている！

自分のシリアスっぷりにドキドキしてきたよ！

とりあえず現実逃避だ！　うん、目の前の扉のことを考えてみよう！

この扉どうやって開けるんだろうね！　ごごご、とかいうに違いないよ！　ああ、くだらないことを考えたああ。

ちょ、ちょっとは落ち着いたかな。落ち着け私。

うん、現実逃避完了！　この問題は先送りにしてもいいことが無さそうです。

ええい、頭が悪いなら、考えるだけ無駄だ！

何とかなるだろう。
私は全部棚上げをし、とりあえず質問した。とーっても大事なことを。

「えっと、とりあえず、付いていったら養っていただけますか？で、もし、お役目が終わったら雇用を保証してもらってもいいですかっ」

この人たちのお墨付きがあったら、どこかでは雇ってくれるだろうね！　そして生活保障を忘れない！
私にとっての重要事項を口に出した途端、神官様が目を丸くし、噴出した。笑うさまが上品ですね！
じゃなくて！
えー、これは笑うところじゃないですよ！　必死に考えた結果ですよ！
むう。もうちょっと厳格な言葉で言うべき？　難しいことはできないよー。
僅かにむくれていると、勇者様がぽつりと零した。
「お前は、先のことを考えるんだな」
私はあまり深く考えずに返す。
いままで緊張していた反動で、一気に心の中がダダモレだよ！
ぐっと握りこぶしを作って、力の限りに熱弁を振るった。
「だって、これまで何の仕事やってたんですか？　ッて聞かれた時、神子です！　世界救ってましたがなにか？　とか、いえないじゃないですか。私、平凡まな板娘ですよ！　えー、こいつ嘘ついてるかもーとか思われて終了で、働き口すら満足に無いかもです。勇者様もそうですよ、世界が救われたら勇者廃業になって、腕もたつしちょっとその辺の場所の護衛とかして稼ごうかなーと思ったとき、前職は？　て聞かれて勇者ですって答えるのとおんなじぐらい気まず

いでしょう！　勇者なにしてんのとか絶対みんな心の中でつっこんでますよ！」

神官様は流石に大笑いするのが悪いと思ったのか、こちらを背に向けて震えています。どう見ても笑っているよ！　私が言っているのは正論だと思うんですがっ。

この言葉に対して、勇者様の返答は、

「そうか」

だった。

流された?!　流されたのかっ。

神官様はようやく落ち着いたようで、笑いながらこちらを見た。

「まあ、将来のことを考えることはいいことだと思いますよ」

といいながら、幾つか雇用条件を出しました。

ええ、神子とかのスピリチュアルな話より、こっちの方が分かりやすくていいです！

一日のお小遣いとか、町に入った時の行動とか、細やかな条件を詰めたところで、私と神官様はがっつり握手を交わしていた。

「ではよろしくおねがいしますね」

はっ。

あっ、勢いで承諾してしまった！　今気付いたけど、あとの祭りですね！

町民C、ジョブチェンジをする

巨大な扉の開錠は、やっぱり呪文によるものだった。
さっきまでの呪文とは響きが全く違う別の言葉を神官様が謳いあげる。

『Ｓ＊ｋｘｘｘｖｖｖ　Ｎｖｖｖ　Ｍ＊ｒｖｖｖｖｊｖｖｖｒｗｗ／（世界に命じる）

Ｍｖｖｖｖｃｈｖｖｖ　ｗ０　Ｈｖｖｖｒｘｘｘｋ＊／（道を開き）

Ｗｘｘｘｇｘｘｘ　Ｉ　ｗ０　Ｔ０ｗｗｓｈｖｖｖ／（我が意志を通し）

Ｈ０ｋｘｘｘ　ｗ０　Ｋｗｗｄｘｘｘｋ＊．（他を砕け。）』

こっちの言葉は、意味が頭の中に浮かんでくる。
凄いね！
意味は分かるけど、何かは分からないよ！　当たり前だけど。
前の言葉より韻律がまろやかで棘とげしくない。よくわかんないけど！
呪文にはいろいろあるんだね、とポケーと口を開いていたら、勇者様がこっちを見ていました。ひい！　見ないでいいよ！　おおっと、ココは口を閉じるところだった。危ない危ない。

今日はよく口が開く日……。人生、驚きの連続ですね！

ちょっとやそっとではもう驚かない！　ふっふっふ、スーパー町

民ですよ、私は！
生まれ変わるんですよ！　スーパー町民にね！　響き悪いな。他に何かいい言葉あるかな？　超町民とか？　だめっぷりだけが増えてます……。

神官様の呪文の余韻が、光の粉となって空気に溶け込んだ。広いホールに残響が響く。それと同時に大きな扉が音もなくすっと開いた。
えっ、ごごご、とか音は無いんですかっ。神設計かもしれない！
神殿だけに？　はっはー。動揺なんてしてないよっ。スーパー町民だからね！

そんな風に扉について考えていたことは、次の瞬間に吹っ飛びました。
扉の向こうにあった光景に、私は息をすることも忘れてしまった。

なんじゃこりゃあああ！！！

扉の向こうは、とても広い広い場所だった。
室内ではなかった。屋外だ。

光降り注ぐ場所。

深い蒼穹の空と、緑の丘。

風すら息を潜めるぐらいの威容を誇る星なる樹。

その樹が、普通じゃなかった。大きいとか、そういう問題じゃない。いや、確かに大きいよ！　大人が五十人手をつないで、囲えるかどうかも分からないぐらい。視界の殆どが樹に埋め尽くされる。

でも暗くない。樹が光を放っているから。光っているだけで驚いたんじゃない。それ以上に、この樹はとんでもなかった。

天（そら）から生えた樹が、地上に向かって伸びている。

えっ？　とか思いますよね。
私も思いましたあああ！
なんで空から生えてんの！
どうやって空中に浮いてるの！

端が見えないぐらい広い丘の上に、その樹は空からぶら下がっていたのだ。

半透明なうっすらと白い幹の中には、天から根が吸った光がちらちらと通り、葉にたどり着く。葉は完全な星型をしていて、キラキラと蒼い色に輝いていた。時折、葉から雫のように光が零れ、下にある箱に注ぎ込まれる。
樹の先端は、地上から大人一人分ぐらいの距離を残して宙に浮いている。箱はその下にあるのだ。

これが星原樹。

神様、植えるなら、ちゃんと丘の上に植えてくれてもいいじゃないですかあああ。
光がはらはらと樹から零れ落ちるさまが、とても綺麗で、胸が詰まる。
言葉が、喉の辺りから出てこない。
上を見上げても、樹の根元が見えない。あの先は神様に繋がっているのかな？
こんなものを見せられたら、流石に星神様がいらっしゃるのを疑

えるはずが無いよ。

「ここがセイヒツの間になります」

声を無くす私に、神官様がそっと教えてくれた。そして、

「セイヒツは、静けさを表す静謐と、星なる櫃を示す星櫃の両方をあらわしています。樹の先に、箱があるでしょう？　あれが神が命の基盤と韻律を納めた星櫃です」

指差された先にあるのは、ただの白い四角いものだった。箱、というには大きいな。棺っていったほうがいいかもしれないぐらいの大きさ。

「あれに触れることが、選定といわれることです。……まあ、何の危険もありませんので来てください」

神官様に促され、恐る恐る扉の中に入る。

澄み切った静寂に私は包まれた。

うわー！　うわー！　静か過ぎる！

息をする音さえ響きそうですよ！　こんなところ来たらくしゃみとかしたくなるじゃないか！　我慢！　我慢しかあるまい！！！

こう、真面目な場面がきたら、笑いに走りたくなる！

そーっと踏み出した足は、芝生で音を立てることなく、歩けるようだった。

静謐って難しい言葉だし、響きも凄く静かにしなきゃいけないイメージがありますね！

神官様に先導され、おどおどと箱の傍に来る。樹の真下だ。この樹、落ちてきませんか！　落ちてきたら一瞬で私の押し花……じゃなくて、押し町民が出来るよ！　そういった意味でもびくびくします。

近くで見たら、箱はふたがなく、小さなバスタブみたいな大きさだった。表現、庶民のたとえでゴメンね！　だって丁度バスタブの大きさなんだもん。

材質は白くつるっとした石っぽい何か。鑑定なんて出来ないから解説できないです。すべらかに輝いていますよ。

石っぽい何かでできた四角い箱。本当にどう見てもバスタブ……。

その中に、さっきから樹から零れ落ちてきた光が溜まっていきます。風呂の湯みたいな感じで、ゆらゆらと、たゆたっています。光って、溜まるものなのか？　これが命の基盤と韻律なんだろうか？

えーっと。

覗きこんで私は首を傾げた。

ちなみに、これをどうすればいいんだろう？　先生！

助けを求めて神官様を見ると、手を、と仕草でうながされた。

この光の中に手をつけるらしい？

い、痛くないかな。びくびくしながら手を出してみる。一度石鹸で洗ってきたほうがいいですか？　さっき凄く汗をかいた気がしますっ。でもそんなことを許してもらえなさそうな気配がビュンビュンします。

えーい。仕方ないっ。

投入！

勢いよく光の中に手をつけました。

すると！

なんと！

何も感じませんでした。

えええええー。

こう、ちょっとびりっと来たーとか、冷たい、とか、あったかい、とかないんですかあ。

光が私の手を水のようにするするとなでているように見えるけれど、感じません……。

たぶん横から見た私の姿は、お風呂の温度を見るのと同じ格好だよ！　ちょっと回りが壮大すぎる風景だけど！

……この後、どうリアクションをとれば。

ちょっと考えていたら、目の前のバスタブに、いきなり何かがドサッと落ちてきました！！

ひい！

反射的に手を引っ込めました。

怖いよ！　ちょっとずれてたら私に直撃したよ！

よく見たら、私の身長ぐらいある枝が、バスタブに浸かりこんでいます。わー、半透明な枝と、お星様の葉っぱだーきれいだなー。って。んん？

も、もしかして、これを私が持つんですか？　勝手に折れてきたけど、いいのかな。

私の背の高さぐらいあるんですけど！

こ、これ以外落ちてこないよね？　上からブッスリ、串刺しなんかになった日には、悲しすぎるでしょう！

恐る恐る神官様を見ると、凄く真剣な顔をして私を見て頷きました。このアイコンタクトはなんだろう……。あ、枝を持てっていうことですね。分かりました。

じょうだん、いえそうな、ふんいきじゃ、ないっすね。ははは。

私はよいしょ、と星原樹のありがたい枝を持ち上げた。あ、軽い

です。
櫃（はこ）に満たされた光が、枝に纏わり付いているため、動かしたらそれがハラハラと落ちる。意外と綺麗だけど、光は私に降り注がれている。こういった照明効果は美人の神官様や隠れ美形の勇者様にしてください！
なにかが……つらい！　普通過ぎる自分が……つらい！

『選定は成った』

わぁん、と響く不思議な声。どこかで聞いた声だ。反射的に振り返る。
後ろから聞こえた気がした。

しかし、そこには神官さましかいない。
いまの声、誰だろう？　神官様のなめらかボイスと明らかに違うんですが。
心霊現象ですかあああ。
慄く私をよそに、事態は粛々（しゅくしゅく）と進んでいたようです。
ようやく神官様が声を出しました。

「お疲れ様です。勇者一行にようこそ、神子」
神官様はにっこりと笑い、私に握手を求めてきた。そっと握り返す。前も思ったけど、この人の掌、結構硬い。剣でもしてるんだろうか。
「こちらこそ、よろしくお願いいたします……」
でも神子呼びは止めてほしいな！　心がすさみます……。
「勇者様も、よろしくお願いします」
勇者様は、少しだけ何かを滲ませながら、頷いた。実は勇者様も居たんです。私たちからちょっと遠いところに。無表情じゃちょっぴりなくなっていたけど、この人の表情を読むスキルが無いから分

からない！
　握手はしないの？　ちょっとだけ、手の行き場を失う。あっ、まさか！　さっきまで握っていた手が、汗ばんでいたのに気付いていたのかっ。
　ごめんなさいね！　いまも絶賛汗ばんでます！　緊張の連続ですよ！

　こうして、私は町民から、神子（仮）になったのであった……。
　でも、心は町民なんだからねっ。
　神子よばわりは、本気で勘弁していただきたいんですが……。
　泣くよ！

◆魔術師、研究資料を遺す（前書き）

いつもとやや傾向が違います。
世界に関わる話なので、なんとなく読み飛ばしていただいても結構です。

◆魔術師、研究資料を遺す

研究資料

神話における創星物語と現代星術の限界とその汎用性について

著：ラブラドライト・ツワナアゲート

星術とは、なにが出来るものなのだろうか。
単純であるこの問いに、正確に答えられるものは少ないだろう。

大体においてこの質問を投げかければ、「この呪文を唱えればこうなる、だからこれができるのだ」といったことを説明するものが多い。これは星術学において嘆かわしい事態である。この答えは星術を道具として理解しているに留まり、本来の星術という概念を理解したとは到底いいがたいものであるのだ。

星術とは、現象を顕現させるものである。
神が定めたもうた韻律を読み上げることで、有り得ない可能性を引き寄せ、現実化する。

例えば、荒野の真ん中で火を欲している人間が居るとしよう。道具も何も無い。彼が星術を使用できると仮定する。
まず、あらかじめ定められた「火が存在できる」という可能性を引き寄せ、最も実現可能な形で「火が燃えている」状態を現実化するのだ。
この喩えでいうならば、燃焼要素（例えば、乾いた木や燃えやすい草）がある場所で火を呼ぶ行為と、はたまた水中で火を呼ぶもの

は難易度が全く違ってくる。現実化しやすいものであればあるほど、星術はたやすく現象を顕現させる。

韻律とは世界に織り込まれた法則である。火は燃え、水は下にたまり、風は軽やかに吹く。つまりそれらが記された膨大な知識であり法則なのだ。自然現象にも韻律は働いている。それを曲げ、干渉するのが星術である。

このように、星神が定められた韻律は、物質としての現象を変化させることが出来る。人はそれを歌という形で発見し、様式を定めた。それが古代星術の黎明であった。古代星術は、術師の製術過程により編む呪文も謳われる効果も全く変わってくる。

それは時代が進むに従い更に洗練され、新星術として編纂された。

新星術においては様式は簡略化され、目的と効果がはっきりしている呪文となっている。

原初の勇者以降編纂された新星術では、世界という単語はＳｋ，と表され、術を詠唱時には裏拍をとりながらＳ４ｋ１ｑと謳いあげる。

これは裏拍を一定の法則で決めてしまうことにより、簡略化された呪文用語である。

古代星術においては、おおむねＳ＊ｋｘｘｖｖと表記されるが、音程、長さによって効果が変動してしまうのだ。

このように、新星術は使用するための法則を決めることにより、生まれる現象の品質を規格化したといえるであろう。

星術の違いによる考察はさておき、ここで創星記に戻ろう。

神は、『星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した』とある。

韻律は、星と命の基盤と人間の存在には干渉できないとされているのは、この神話を基にした学説である。

命の基盤は韻律より先に神が創りたもうたものであり、韻律とは別の法則で動いているとされた。命の消失に対して、その命がまだあるという状態（つまりは死からの甦りである）を引き寄せられた例が全く無いのは、この創世記に記された順序が厳然として存在するためであるという。多くの術師は経験則からそういう結論に達している。

とすれば、星術の限界は人間の存在にたいしてどこまで干渉できるかということになるであろう。

しかし、ここで私は一つの疑問を呈する。

星術において、傷を癒す術が確立されている。これは、はたして命の基盤に関わらないものなのであろうか？

生命は命を指すと考えられる。韻律でひとが生命を支配することが出来るのではないだろうか。

もしも命の基盤に関わる韻律が存在するとしたら、現在通用している創星記がひっくり返る可能性がある。つまり、誰が広めたか不明である創星記における信頼性が失われるということである。しかし、代々の『神の声』が創星記に関して、肯定も否定も発表はしていない。神が語らないのは、間違えた創星記を広めたのが星神自身

であ……

（以下、インクと血？　とおぼしきものが滲んでよく読み取れない。
研究資料は瓦礫の石の間に挟まっており、何とか風雨をしのいでいる。
誰も文字を読む人間は居らず、彼の疑問に答える声はもう無い。）

◆魔術師、研究資料を遺す（後書き）

ラブラドライト・ツワナアゲート（Ｓｋ，７８８６～Ｓｋ，７９４１）

ツワナアゲート伯とも呼ばれる。魔術師としての才に秀でた領主であった。教鞭をとり、魔術師の教育に力を入れる。しかし、魔王の呪の流言により、民衆の暴動により死亡。宮廷魔術師として招聘が決定していた矢先の出来事である。享年５４歳。

その後、ツワナアゲート地方は人々に忌避され、廃墟だけが残っている。

元町民C、それでもあくまで一般市民

こんにちは、町民Cです！

神子じゃないかって？

それで呼ぶなよ！

泣くよ！

お仕事のときはそれで諦めてるんだけど、普段は本当にその名前で呼ばれたら涙と鼻水でべちょべちょになってやる！　乙女とかをかなぐり捨てているけどな！

……失礼しました。いささか取り乱しましたオホホオホ。はあ。最近、ノーブルすぎるものと触れ合いすぎた反動で言葉が汚くなっております。高貴アレルギー一歩手前です。

突然ですが、最近とてもある願望がたぎっています！

身の丈に合う生活がしたい！！！！

本当に心の底から庶民だと実感している！

一日は二食でいいです。それにこんなひらっひらな服に金糸で刺繍なんていりませんから！　半透明の布なんて、これは一体なんなの！　どこに引っ掛けて破るか分からない。動きにくい上にびくびくしながら歩いてますよ！

私は遠い目をしながら、窓から見える景色をぼんやり眺めています。

今日もいい天気だ。紅茶が旨い。窓の外には綺麗に剪定（せんてい）された植木が整然と並んでいます。のどかだ……。鳥の声がする。いい朝で

すね！

はい、私、旅立ってなんていません。
まだ絶賛神殿でひきこもり中ですよ。

主神殿で枝を貰ったあと、勇者様達と出てきた私を迎えたのは、歓迎パーティとかでした！

枝はとりあえずとても凄いものとかで、持ち歩きは許可されませんでした。樹のところにとりあえず置いてきた。そんな扱いでいいのか。神官様も勇者様も、枝には触れずに妙に遠巻きにするんで、なんか私には分からない変なにおいが出ているのか気になりました。く、臭くないよ！　とりあえず、星櫃（せいひつ）とやらのバスタブの横に寝かせて置きました。枯れないよね！　大丈夫だよね！　枯れたらこっそり燃やそうか……。証拠隠滅ですよ。

お城でパーティと聞いて、まず、関係ないと思っていました。出席すら想定外。

パーティーかあ、誰の歓迎だろう。美味しいもののおこぼれがあればいいけど、なんて考えていたこともありました。

まさかの主賓ですよ。
えええええ。

姫様お二方と遭遇しただけで、キャパシティーはとっくにオーバーしてました。なのにパーティとか。

無理無理無理！

その時の事をお話できないのは、パーティー中、私の頭が真っ白だったため、ほとんど覚えていないからです！　今でも断片的にし

か思い出せない！

はっ！　ご馳走食べ忘れた！！！　今気付きましたよおお！！

世界の珍味が！

王様やら王妃様やら、セレブマックスレベルの人たちに囲まれ、顔が引きつったまま勇者様や神官様に引きずりまわされたことは微妙に記憶にあります。

覚えがあるのはそれぐらいと、ゴージャスだった、きらきらだった、貴族の名前ってさっぱりおぼえられない、ってぐらいしか思い出に残っていません……。惜しいことをしたなあ。もう一生縁が無い（はず）だしね！

とりあえず覚えているのは、パーティが終わったあと、お風呂に放り込まれ、磨かれ、着替えさせられ、気絶するように寝て、何故かマナー講座を受講させられ、怒られ、星語（せいご）を勉強させられ、怒られ、転寝をして怒られ、ごはん食べて、勉強し怒られていたら一週間たちました！

あれ？　何でいつの間に一週間経ってるのっ？　そして大体怒られている記憶ばかりだ。何故だ。

はい、そこの君！　なんかおかしいよねこれって！　急いでるとか神官様は仰ってたような気がするんだけど、どっかから湧いて出た御付の人たち一団に拉致されて現状に至ります！　私って拉致されやすい人間なんでしょうかっ。

神官様は申し訳無さそうに少し危険な場所に行くから、と私と別行動をするとおっしゃいました。勇者様は相変わらずです。無表情の置物と化していました。

神殿にやってきた時のあの庭から、お二人と陸馬（うま）は旅立って行き

ました。陸馬さん、あなたに会いたかった……。

で、置いていかれた私は、よくわからないまま、客人なのか教育されているのか謎の扱いを受けています。この妙に高級な部屋、そして着替え、食費もろもろおよびマナーとかの講座代は、必要経費ですよね！　私、払えませんよ！

マナー講座とか、凄くぎらりと光った眼鏡をかけた中年の女性が私のことを睨むんですよ。そしてわざとらしくため息をついたりします。

ですよねー、マナーとか、なってませんよねーあっはっは。だって町民だもの！　宮廷作法なんて知ってる方がおかしいよ！　そのあたりは開き直ってる。ストレス感じてもいいこと無いよ！　嫌なこと忘れて開き直ります。これ私の長所。でも、授業の内容も結構忘れちゃう。これは短所。自称鳥頭ですから。

人間順応力は意外と高いよ！　キラキラしている建物に怯えなくなりました。指紋つけないかって銀製品持つたびにびくびくするのは変わりないけれど。

主神殿は馬鹿でかいドーナツ状の建物だそうです。ちょっとバカにされた感じで教えてくれました。お、怒らないぞ……なぜなら、物を知らないのは事実だからだ！　ここ、胸を張るところですよ！

とにかく、神殿の話にもどると、あの樹をぐるっとか込むように広がる建物だから丸を二つ重ねたみたいな形だそうです。あれだけ大きな樹をかこむって、どうやって建造したんだ。そしてやろうと思ったひとって、一体なにを考えていたんだ。人間って、意外とミラクルです。

で、その南に城があるそう。私が住んでいるのは北側の棟だそうだから、城は樹の根っこで見えません！　根っこが見えるんですよー見上げたら。でも、普通の人は、葉が無い枝が広がっていると勘違いしているらしい。ちっちっち。みんなの想像よりも世界は不思

議で一杯でしたよ！
ちょっとお得感があります。

それよりも不思議なのは、毎日来襲する、あれなんです。

それはいつも唐突に訪れる。
次はマナーの時間だったかなーウフフアハハと遠い目になりながら用意をする。といっても身だしなみチェックと教本のおさらいだけれどね！
扉がノックと同時にするっと開いた。その向こうにいるのは、輝くばかりの金の髪と美しい紫の瞳の女性です。後ろに控える人の人数が、彼女の身分をあらわしています。

「おじゃましますわ！」

今日もキタアアアアア。
でもノックと同時に開けるって、どうなんだ！

あー、えっと。華の姫様……、王族って、暇なんですか？
まだ聞けませんが。

元町民C、お姫様とでは会話にならない

華の姫様は、今日も絶賛お元気そうです。
今日は若草色のドレスを纏っていらっしゃいます。織り模様が素敵ですね！　一体何着持ってるんだこのひと。毎日ドレスが違いますよ。毎日一着とか！

ありうる！　王族だし！　偏見じゃないよ。それぐらい財力ありそうですしね！

姫様は事態についていけない私をよそに、とてもご機嫌です。
「神子様、ご機嫌麗しゅう。今日は素敵なお茶菓子をご用意しましたのよ！」
何故か毎日顔を出して、私に一方的に話しかけるのですがどうしたものか。気がついたら私の部屋にわらわらとお姫様の侍女さんたちが入り込んでお茶をセットしていきます。ねえ、どうやってここまでその熱湯を持ってきてるんですか？
姫様は特に私に断りもなく、同じテーブルにつく。この場合のマナーはどうだったっけ？　マナー講座が役に立たないよ！　覚えていないのが原因ですが。
気付けばホカホカの花茶を差し出され、狐色の焼き菓子が並べられてセット完了。侍女さんたちは仕事の素早さが半端じゃないです。何で音もなく動き回れるのこの人たち！　いろいろ置き去りにされた感はあるものの、とりあえずお礼を述べる。
「……ありがとうございます」
どうやら神子？　というのは、キラキラしい名前だというほかに、意外に身分とやらが高いらしい。王女様と普通に同席が可能だそうだ。でも中身は私ですよ。とても残念な仕上がりだと思います。決してロイヤルになりませんよ！

「ウフフ、今日こそは勇者様のお話を聞かせていただきたいのです」
キラキラ、ではなく、ギラギラとした目を輝かせながら、お姫様は私ににじります。テーブルを挟んでいるものの、私は若干引き気味です。

ですが、これは完全に人選を間違えているんでは無いですか！

私と勇者様のふれあいなど、拉致されて、脅されて、荷物持ってもらって、おんぶされたぐらいですよ！　言葉によるコミュニケーションなんて、高度な交流はしていません。あっ、なんだか悲しくなってきた。最近お二人の姿は見てない。

選定とやらのあと、ちょっとここで待っててくださいね、とお二人はどこかへまた出かけられましたしね。その後、連絡もありません。えっ、出かけなくていいの、と困惑したのはたった一週間前なのに、置き去りにされたような寂しさがあるよー無いような。もともとお二人ともそれほど一緒に居なかったのになあ。もしやこれが刷り込み？

というわけで、勇者様情報など私が持っているはずが無いです。そもそも、素性も何もかも知りませんよ！　私は正直に姫様に進言します。

「その……、神官様にお伺いしたほうがいいのでは、ありませんか？」

あのお二人がずっと一緒に居るならば、片割れに聞くほうが確実でしょうよ！

そんな心を込めて、今日も同じセリフを訴えます。

お姫様が飛び込んできた初めの頃は、王族という単語に遠慮して何もいえなかったけど（正直頭がついていかず、口が開いたまま相手していたように思う）、最近はちょっと敬語に気をつけながら喋るようにしているよ！　じゃないとこの姫様押しが強すぎるものですから……あとで予定がずれて痛い目にあうのは私だからっ。

「あの方に？　大体笑顔ではぐらかされて終わりですわ。さあさあ、聞かせていただきますわよ！　勇者様がどなたかをエスコートしてらっしゃったのは、初めて見ましたし」

えすこーと。

ああ、あれか。手を握られたあれですね。姫様の視線を思い出してトリハダたちました。思い出しトリハダですよ。

ええ、あの羞恥プレイのことですね！　覚えがあります……。脳裏に刷り込まれています。

でもあの笑顔装備状態の勇者様ならやってくれそうですよ！　多分ジェントルマンです。多分。いつもの無表情勇者様なら分からないけど。姫様は笑顔しか知らないかもなあ。無表情、本当に怖いです。威圧感しかない。

なので色々推測で物を言ってみる。

「勇者様にお願いすれば、エスコートはしてくださるのでは？」

私の意見はばっさり切り捨てられました。

「いいえ。あの方、滅多にどなたにも触れられませんのよ」

えー。いつの間にそんな設定が？　私、荷物担ぎとか、主に運搬されましたよ。そうだな、運搬のふれあいばかりだな！

「理由がおありらしいんですけれど、なかなかお話してくださらないんですの」

勇者様と楽しいトークって、イコールで結びつかないにも程がある。神官様のスキルを見習わなければいけませんよ姫様！　勇者との会話は、空気を読め！　ですから。

私は、はあと相槌を打ちながら、花茶を飲む。初めの頃、お茶が何で花の味がするのか、甘いのか混乱したけど、今は普通に味わえる。今日の花茶も旨い。言葉遣い訂正します、美味しくってよ、かな。心の中だけでの感想だけどね！

どちらにせよ、毎日姫様はこんな感じで唐突に私の部屋に飛び込

み、小一時間勇者トークをして、満足したらお帰りになる。だから、何でここにくるんだ。話し相手なら他に一杯居るんじゃないですか、侍女さんとか。お付きの人とか、妹様とか。あ、最後は止めた方がいいか……。嫌味の応酬で部下の人の心臓が止まりそうになるからね！

しかし私はここで閃いた！　毎日ここに来る理由！　それは、勇者様はわたくしのもの！　という無言の圧力じゃないですか？　そうでしょう！

恋はガチバトル、まさに乙女の戦ですね、分かります。意外と恋愛小説的な行動をとられているのか。初めて生で見ましたよ！　これが乙女というものか。

感心してしげしげみていたところ、

「神子様、なにを考えていらっしゃるの？」

と、例の笑顔で問いかけられましたあああああああ。考えを読まれては無いと思うけれど不穏な気配を感じたようです。黒いですよ、姫様！

姫様がなおも言い募ろうとした時、ほとほとと、扉がノックされました。姫様は口をつぐみ、妙に笑みを深くされます。怖いって。不穏な気配を感じながら一応返事する。部屋の主は一応、私らしいので……。

「失礼いたします」

扉を開けたのは、めがね女史！　マナーの先生ですよ！　先生は相変わらず無駄の無い格好をしていらっしゃる。きつく束ねられた髪、ぎらりと光るめがね、抑え目の化粧、地味目の服装！　どれをとっても教師の服装です。初めてお会いした時、ここまで教師っぽいひとも人生初体験だと感心したね！

「神子様、マナーの授業時間でございます」

笑顔なのに冷たい！　吹雪の中に居るようですよ！　あえて姫様

に声をかけずに私に声を掛ける。部屋の主が私だしね！　私が姫様においとまを告げれば、この乙女お茶会は終了するのだろう。でも、姫様の眼光が密かに怖いです！　何でこう、睨み合っているの！

「神殿の方々は、神子様の自由を束縛することは出来ないのではなくて？」

姫様は懐から取り出した扇に口元を隠しつつ、さらりという。ひとりごとっぽく。でもそれは確実に私とめがね女史に仰っているですよ。

「姫殿下に直言をお許しいただけますか？」

めがね女史は侍女にわざわざ取り次ぐ。目の前に居るのに。こういう辺りが、王族って不思議！　なところですよ。聞こえるのにね。侍女さんがわざわざ姫様にそれを伝え、姫様が、

「許す」

と仰った。ここで二人の視線が交わったああ！！　どう見ても火花が飛んでますよ！

カーン。

戦闘開始の合図が私の頭の中だけで響いた。先攻、めがね女史！

「私どもは、大神官様より神子様を託された義務がございます。授業の時間は開けていただけますよう、伏してお願い申し上げます」

どうやらめがね女史は神殿の人だったらしい。うん、私語なんてして無いから、一週間もいるのにさっぱりどこの誰だか分かりませんよ！

後攻、姫殿下！

「あら、睨下は神子様をお願いします、と仰ったのでしょう？　それはあなた方の思想を押し付けるような教育の時間ではなく、ゆっ

たりとした休息を指していたのではなくて？」

フフフ、と笑いながら姫様。えーと、私の勉強時間を減らす話ですか？　とりあえず、大神官様が関わっているらしい。凄い大物ですね！　まだ噂でしか聞いたことが無い人です。

「市井より見出された神子様におかれましては、星学を一通り修めることにより、より深い教養と造詣を身につけられるかと」

「それはあなた方の判断です。この件は大神官様直々にお言葉を賜るまで、わたくしは聞き入れませんわ。ねえ、神子様？」

こっちにふるなあああ！！！！！

せっかく置物の振りをしていたのに！　めがね女史も何も無い風を装っていますが、怒りのオーラがビンビン出ていますよ！　こわーいーー。

何で二人とも私をみるのか。

そして二人ともなんで、こいつを追い出せオーラを出すのかな！

とりあえず、私、ひっそりと息でもして時間潰していますから、関わらないでください。

なんだか嫁姑問題に悩む夫の気分がよく分かったっ。

どっちも、出て行ってほしいんだけどな……。

元町民C、おむかえがくる

気まずすぎる空気の中、とりあえず冷えてきたお茶を口に含む。
喉がカラッカラですよ！
この空気で緊張しないとか、そんな気力と根性があったら、私ここに居ないと思います！
いろいろ流されるままに神子就任だもんね……。ちょっと、深く考えるように反省しようと考えています。考えるだけで、実行できて無いけどね！
とりあえず私がノーリアクションなため、お二人はにらみ合いに突入しました。どっちの肩を持っても大変なことになる気がするんだ！
お姫様の肩を持つと、マナーの先生とか、あと神殿の人とかともめそうな気がする。生活は大体神殿の人が面倒を見てくださっています。その人たちとこれ以上関係悪化させたくないんだ。今でもぽっと出の神子だから微妙にみんなよそよそしいしね！
神殿の人の味方をしたらしたで、お城の人たちと話したときにあの毒攻撃が来る気がする。あの毒を受け止めきれる自信はゼロよ！
嫌味の応酬なんて出来そうに無いから、受け止めるしかないけど、怖すぎます！
分かってるんですよ。どっちつかずって、正直、かーなーり感じ悪いじゃないですか！　でもそうしなければならない時も在る……やっと理解しました。斜め向かいに住んでいた、鍛冶屋のおっちゃんの気持ちが分かるよ！　何で奥さんとお母さんの間で真っ青になってるだけなんだ、止めたらいいのに、なんてちょっと厳しい見方してた。けど、理解したよ！　こういったときどっち止めても自分が大ダメージだってことに！　おっちゃんゴメンね！　嫁姑問題って、ちょっとやそっとで解決できる問題じゃないんだね！　私もちょっと大人になった！

えーえー、事態が硬直しそうになっています。どうにかならないかなー。私も硬直しすぎで体が痛くなってきました。

その時、ぶわっとトリハダがたちました。

何のトリハダだろう！　思い出しトリハダか！　緊張しすぎで鳥肌って……立つんだね！　と思ったら、今度は空気が揺れた気がする。気のせいかな？

あー、風でも吹いたのかなーと思ってきょろきょろしたら、

「どうかなさいましたの？」

思いっきり不審そうな顔をした姫様と目が合いました。そんな、そよ風を探していたなんて、言えないよね！　乙女過ぎるよね！

「いえ、少し」

周囲の人たちが急に動き出した私に視線を集中させています。

やめて！　見られたら減ります！

私の体力とかが磨耗するよ！　まあ、確かにあのにらみ合いの中、置物だった私がいきなり動き出したのにビックリする気持ちは分かります。勇者様が大体そんな感じだし。あのひと、静かなのにいきなり喋りだすから本気で怖い。

注目に身じろぎした瞬間、廊下ではっきりとざわめきが広がるのが聞こえた。

なんだろう？

扉がノック無しにばたーんと勢いよく開きました。

勇者様だった。いつも通り無表情なんですが、迫力が違った。

蒼い鎧がほこりと血のような汚れでかなりくすんでいる。頬には細かい傷があり、黒い髪も乱れていた。戦地に居ましたね、その、殺気というか何と言うかそういった怖い気配がダダモレですよ！

蒼い瞳が文字通り鋭く私を見つけると、

「すぐに出る」

と端的に状況を説明されました。用意をするんですね、分かりまし

た！

　がたがたとマナーそっちのけで私が立ち上がると、お世話係の人が近寄ってきて、御召しかえはいかがなさいますか？　と優雅に聞いてきた。いつも食事の用意とかしてくれるお姉さんです。姫様がいらっしゃったので、部屋の隅で待機していたようです。お気遣い、すみませんね。

　ですが、それを勇者様は言葉でばっさりと切り捨てました。

「時間が無い」

　勇者様は無表情を崩していません。婉曲（えんきょく）な表現をしてくださいよ！　そして人の話は聞いたほうがいいですよ、勇者様！　お世話係の人が本気で怯えています。震えながら謝罪をしていますよ。勇者様はこう見えても怒ってませんよ！（多分）このお姉さんも私に気を使ってくれたのにな。この場合、どっちが悪いっていうのでも無いけど、申し訳ない気になって、

「大丈夫ですよ」

とその人の肩に触れてみた。ありがとうございます、とお世話係のお姉さんは本気で泣き出してしまいました。そ、その、どうしろと。とりあえず同僚と思われる人にお願いし、私は準備をすることにした。

　勇者様の目がまじこわいからです。

　お姉さんは泣いてたりするし勇者様は傷だらけだしで、凄い修羅場な気もするんだけど、とりあえず部屋のすみっこに置いてあった荷物の袋を掴みます。一週間前から荷解きせずに放置していました。食べ物とか、腐るものはちゃんとのけているから大丈夫だよ。

　着替える時間が無いといわれたけど、このひらひらゴージャスな服、汚したらどうするんですかあああああああ！　こんな高級布地、弁償できないよ！　私がもだえている時間もないんだろうな。うん、汚して、洗って駄目だったら、神官様や勇者様に弁償してもらえばいいよね！　生活手当てに入っているはず！　外套でとりあえず防げればいい。

よーし外套も羽織って準備完了！
私が荷物を持ち上げていると、姫様が恐る恐る勇者様に声を掛けられました。
「勇者様」
表情を取り繕っていない勇者様に、流石の姫様も引き気味です。
ですよねー。このバージョンの勇者様って、正直怖いですよねー。分かります！　勇者様は姫様に向き直って、優雅に一礼した。マナー教師のめがね女史が目指してたのって、ああいう礼だったのだろうね！　私には無理です。
「姫殿下、申し訳ございません。魔物の群れを殲滅はしたのですが、浄化が不完全で、今は何とか結界で防いでいる状態です。一刻も早く神子による浄化を行わなければ危険ですので、無礼を御寛恕下さい」
礼儀正しく、でもいつもと大違いな無表情で勇者様は口上を述べている。一番に姫様に気付くかと思ったけど、今ご挨拶ということは、実は目に入っていなかったのかも。焦っているのは分かるけど、かなり大変な状況なんじゃありませんかああ！　とりあえず、魔物がいる場所に行くのでは無いこと分かったけどね！　姫様の疑問がなかったら、説明してくれなかったんでは無いですか。その当たりどうなんですか勇者様。
姫様は、とりあえずは、
「そういう事態なら、仕方ありませんわ」
と仰った。それに礼を述べ、勇者様はくるりと私に向き直る。勇者様に近づくと、勇者様は私の足元を見ながら渋い顔だった。な、なんでございましょうか！
「走れるか？　枝が必要だ。取りに行く」
ああ、あのなんかの匂いが出ている（推測）枝ですね！　分かりました。私は力強く頷いた。
ひらひらの服に華奢な靴だけど、意外と走りやすいし歩きやすいんだよ！　職人様の魂を感じます。これが高級な衣装ってヤツか！

まあ、中身は釣り合っていない残念な私ですが。枝、意外と担ぎ上げるの面倒だなあ。服に引っかからないように気をつけよう。

「枝、……星原樹の枝を？！」

姫様が真っ青になって叫ばれました。ええー、姫様もその反応ですか。あの枝、かなり嫌われているんですね……。私にはさっぱり分からない嫌う要素があるはずなんだ。今日取りに行ったら、もう一度匂ってみよう。あれを持ってるからって、私も一緒に嫌われたくないし。

勇者様は姫様を無視できなかったのか、返答をしました。

「選定の際に神子が樹から譲り受けました。現在はセイヒツの間にあります」

姫様は目を見開いて、震えながら、

「神子様は……枝に触れられても、大丈夫でいらっしゃるの？」

と仰いました。

えー。なんですか！　その化け物を見るような目は！　それは姫様だけじゃなくて、部屋の人全員からの目線ですよ！　ガン見どころの話じゃないよ！　だから見るなって。減るよ！　私の何かが！

……こう、聞かれたら、他の人にあの枝がどう見えるのかがかなり心配です。

「綺麗だけど、普通の枝ですよ」

私がどん引きしながら言った台詞は、どうやら何かを外したようです。皆さんの目線が強くなたあああああ！　なんだかとっても、溝が開いた雰囲気がするよ！　だって、本当のことじゃないですか！

「時間がありませんので、これで」

勇者様が颯爽と立ち去ります。私も慌てて姫様や御付の人たちに礼をして、

「お茶、ご馳走様でした」

と言って、少し悩んだ。行ってきます、というのもおかしいよね。

ここは私の家じゃないし。だから気になっていたことを付け加えた。
「服は汚れたら洗濯して返しますね！」
汚しすぎたらゴメンだけどね！　その時は、神官様、頼りにしています！
私は長いスカートの前を掴み、勇者様の後姿を追って走り出したのだった。

◆姫君、今後のことを考える（前書き）

華の姫様視点です。

◆姫君、今後のことを考える

勇者様と神子が出て行った扉は、閉められることがなく中途半端に開いていた。現状の中途半端さを示すかのようだった。話題の中心人物がいないことには、事態は何の進展もしない。

神子はある意味常識の範囲からはみ出す少女だ。私にとっても触れ合ったことの無いタイプだった。

何故洗濯の心配をするのか、私には理解できない。彼女の服は神殿が彼女のために用意したものであり、それを汚したところで誰も何も言えないであろうに。

恐らく本人の中に於いて、現在置かれた立場に付随する権力と、等身大の自分の一致がなされていないのであろうと推察できる。だからこそ丸め込めるかと判断したわけだが、時期が悪かったようだった。

勇者様が怪我をするほどの戦闘、あの方が浄化できかねるほどの瘴気(しょうき)があるとは。

お二人が危険な地域に行くと仰っていたが、あそこまでとは思わなかった。

勇者様は、彼が神に選定された直後、この都を襲った一万とも二万とも言われている魔物の群れを撃退している。激戦は先頭に勇者様を据えた騎士団と魔物の群れの間で三日間行われ、星都の空は戦の炎で赤く染まった。

幸いにも魔物の群れは統率されていなかった。さらに、魔物の嫌う天上の青い石が都市を囲う高い壁に使用されていたことが勝敗の分け目だった。

大きな被害をこうむることなく、人間たちは生き残り、勝利した。

街道を埋める魔物の群れを殲滅(せんめつ)など、本当のことかと他国のもの

はまず疑う。街には殆ど被害が無いではないか、と。

だがこれを誇張した話だと言うものは、星都にはいない。あの日、街道を埋め尽くす黒々とした絶望という名の魔物の群れを、遠目ながら私も見ている。都の民も例外では無い。あの群れを駆逐（くちく）したことは、神と勇者様の威光に恐れと畏敬（いけい）を深く抱くことになった。この都のものは、誰しも勇者様の行く手を遮ることなどせず、協力を惜しまないのだ。深蒼（あお）の勇者様は、まさに生きる伝説でもある。

彼の戦闘能力は、対魔物に特化している。それは魔物に苦しめられている他の国にとっては、喉から手が出るほどほしい力だ。実際、彼らにはどの国からも熱い勧誘や懐柔は止む間がないそうだ。一応は生国であるわが国に属してはいる。しかし、それは彼らが決めることであって、私たちに関与できることではないのだ。できれば、婚約や婚姻といった手段でより強固に勇者様を繋ぎ止めたいとは考えているものの、全く手応えは感じられない。いつも勇者様は微笑んでいるものの、その奥の感情を揺るがせる事はない。先程の雰囲気には流石に驚き呑まれかけたが、先程の様子に神子は驚いてはいなかった。あれも勇者様の一面なのだろう。

どちらにせよ、神子様も勇者様も旅立ち、この部屋には用はなくなった。

私はこの後の予定を考える。

もともとここに居るのは歴史学の授業を抜け出したからだ。あの教師は隣国の息が掛かっており、わが国の歴史に批判的なのがいただけない。それほど馴れ合うべき人物ではないと判断している。授業を抜け出したことに関しては姫のわがままだと思うだけであろう。そう思われるように、軽率に振舞ってもいるのだから。

花茶はぬるくなっていた。
カップを持ち上げると、侍女の一人が意図を察し、新しいそれと取り替える。
結局神子の言質は貰えず、彼女の扱いに関しては宙に浮いたままである。神殿に与(くみ)するのか、はたまた我らの利となってくれるのか。
「時間は……ありますわね」
喉を花茶で潤し、神殿の女神官をちらりと見やる。
マナー講師を任されている女は、神殿のものに多い思い上がりが鼻に付く。
この国はもともと神殿と王室の対立が、歴史上でもしばしば起こっている。考えてみれば当たり前のことだ。大きな人間の集団がある、それの頂点に立つのはどちらだ、と言う話であるのだから。一応、手を携(たずさ)えると言う形をとっているものの、神殿はこの国自体を神殿のものとしたがり、王室は神殿に対して神を祭るのであればそれで満足して政(まつりごと)に手を出すなと考えている。永遠に平行線でしかない。
これ以上、あの女にも話をすることも無い。私はカップを置いて言葉を発する。
「神子様もお出かけになられましたし。わたくしも帰りますわ」
自分の考えを声に出すことで、周りの人間が動く。意志を示すのも王族の仕事である。下々のものが動くためのきっかけを与えなければならない。私の言葉で周囲の人間が動く。茶器を片付け、私の椅子の背を引き、護衛と先導をする。
そのあたり、あの神子は圧倒的に言葉が足りないのだ。いつものんびりと笑っており、周囲のものに軽んじられても気付かないのか、気付いて無視をしているのか分からないが気にしていないようだった。
与えられたものに戦々恐々とする姿は、哀れさを通り越して好感を覚えた。貴族の中には責務を果たさず、豪華な生活を享受(きょうじゅ)することを当然と思っているものもいる。

それらより、自分がしたことに対して得た対価で無い生活に慣れようとしない神子は、まだよいほうであろう。彼女は恐らく気付いているのだろう。責務と対価はつりあうべきであることに。彼女の実績は全く無いのだ。本来ならば歓待されるいわれはない。あの歓待は、期待が形をかえただけなのだから。神子の態度は私にとって好ましい。権力闘争を目の当たりにし、明らかに関わりたくないという態度をとっていることも簡単に見て取れて、それはそれでほほえましいのだ。権力を握ったと勘違いし傲慢な態度をとるよりはるかに可愛らしい。

廊下に出たところで、再び私は口を開く。

「部屋には帰りません。中庭の花が咲いておりましたわね。そちらへ向かいます」

部屋に帰ったところで、歴史学者がまだ居たならば面倒な事態が発生するはずだ。あえてその選択を取らず、中庭に向かう。星原樹を囲む壁は、天高くそびえ、視界を常に片側から遮る。

この国は星原樹を囲む神殿の外側に広がっている。

星原樹を守るためだと言うが、王族や神殿の上層部はそうではないことを身に染みて知っている。

星原樹を守るのではない。

人を、星原樹から守るための壁であるのだ。

あの壮大な神授の樹は有史以来七千年間、あの場所に佇んでいる。神気を纏うあの樹木は、それゆえに神の力にそぐわないものを一切近づけない。

近づけるという事実、それはすなわち既に星神により特殊な選定を行われたものだという証左となる。

あの強大な力と象徴を、我が物としようとした王や権力者は歴史

上存在したらしい。分かりやすい権力が形をとったものだと勘違いしたのか。

しかし、そういったものにはかならず神罰が下る。彼らは樹に近づこうにも近づけない。それを押して樹に触れようにも、触れるだけでことごとく狂ったのだと言う。

睨下（だいしんかん）の口を通して星神が仰ることには、人間の手に余る力を秘めた樹木であるから、だそうだ。触れるだけで大きな力が流れ込んでくるらしい。自分の精神より広く広大なものを、どうして受け入れられようか。小さなスプーンで、海を掬うようなものだ。

歴史から人は学ばないものだ。最近発生したことも、結局は神の威光を自らの権力としようとした例でもある。彼も違わず、破滅の道を辿った。

星神官と名乗り、勇者様達の旅に同行しようとした従兄弟殿は、平たく言っても俗物であった。

王位継承権六位という中途半端な立場が、彼を野心に駆り立てたのだろう。そしてそんな彼に、王族につなぎを持ちたい神殿の一派が、星神官、というよくわからない役職をつけ、権力を持たせ、勇者一行にねじ込んだ。

彼は浄化のためにと持たされた星原樹の葉の欠片を持ち歩くだけの役目だった。旅の間は食事や休憩場所に盛大に文句をつけていたそうだ。その我侭ぶりは私も身近で見たことがある。聞いただけでも目に浮かぶようであった。同行させられた近衛騎士団からの評判はすこぶる悪く、勇者様たちの心がわが国から離れないことだけが本当に心配されていた。

報告が様子を変えたのは二週間後だった。星神官が気力をなくし常にぼんやりとしている、と。

お二人が一旦星都へ戻ってきた時には、何もかも洗い流されてぼんやりするだけの生きた人形がそこに居た。もともと同行を申し出たのは彼だ。勇者様たちは何度も止めようとした。しかし、結果はこれだった。

星原樹の葉にしても、直接身につけていたのではない。結界の韻律を幾重にも刻み込んだ天上の青い石で作られた護符に包み込み、首から提げていただけだ。

しかも、小指の爪ほどの葉の欠片だけなのに。

神とは無慈悲なものだ、と私は思った。神はもしかすると、役に立たないものは容赦なく切り捨てられるのだろうか、とも。従兄弟殿は哀れな姿になったが、それは本人の欲望による結果である。それが分かっているにも拘らず、畏れのあまり救国の主である勇者様たちを忌避する動きがあったのは、人間の弱さだろう。

長い回廊を抜け、整備された庭に出る。護衛騎士たちの先導に従い、今が盛りの花を眺める。麗しい幾重にも花弁が重なっている花が、日の光の下で咲き誇っている。この花は美しさと裏腹に、鋭い棘を葉や茎に持つ。手を伸ばし折り取ろうとする人間の愚かさに気付いているかのようだ。

勇者様は人に滅多にふれる事はない。

私の勝手な推測でしかないが、彼はこの花や星原樹と似たような存在なのでは無いだろうか。

触れるだけで力を流し込んでしまうのではないか。これは憶測でしかない。

しかし、あの神子に関してはためらいが無いということは、その

推測を裏付ける。
神子はあの枝に普通に触れることができると言う。触れるだけで破滅をする星原樹の枝を持てるとは、想像を絶する。ただの綺麗な枝、と言い切る神子の感性もいかがなものか。
勇者様に触れることが出来ないならば、このまま婚姻により勇者様を国につなぎとめることが出来ないかもしれない。そうなれば別の手を考えなければ。どちらにせよ、今は一介の神官として付き添っているあの方は、ここに戻ってこなくてはならない。まだまだ接触の機会はあるはずだ。
策謀は、王族に生まれたものとしてのたしなみである。
正直、心が躍って仕方が無い。
口元を扇で隠しながら、私は楽しみで口元が緩むのを抑え切れなかった。

元町民C、枝を持っていく

こんにちは！　臨時雇い神子をやってる町民Cです！　このあたりで妥協しました。職業欄は、一応神子と書くことに、自分で折り合いをつけました。

今は、死にかけています。

ぜ、全力ダッシュというものが、こんなに苦しかったのって、覚えてなかった！

神殿の廊下を疾走とか。廊下は、走ってはいけません……！　マナーの授業で学んだけど、早速破ってますよ！　やわらか絨毯のおかげで走りやすいよ！　やったね！　絨毯痛みそうだけどさ！

だんだん廊下が見覚えのある場所に差し掛かる。

天井の絵が、始原（しろ）の勇者様のあたりになった。息をするのも苦しいです！

そういえば一緒に走っている人が基礎体力セレブ（私命名）だったのを忘れてましたあああ！　ちょっと休憩とかありえませんよね、そうですよね！

ぜーはーと荒い息をしながら、何とかついていっています。はぐれたら、しゃれになりません。

こんな荒い息だと、不審者だと言われても仕方ないぜーはー。汗だらだらの口開けて死に掛けている表情、誰にも見られないのが不幸中の幸いですね！　こんな顔見られたら、お嫁にいけません。だから勇者様は振り返ってはいけないよ！　乙女の尊厳守ってね！

目の前の背中に念じておく。

徐々に天井の絵が移り変わり、だんだんあの馬鹿でかい扉が見えてきました。

あれ、そういえば神官様いらっしゃらないのに、あの扉を開くの

はどうするんだろう？
あの重そうな石っぽいものでできた扉を押して入るとか、それとも合言葉とかあるんだろうか。大事な部屋っぽいし、鍵も掛かってるよね。

そのとき、勇者様が一言だけ呟きました。

「Ｈｘｘｔｘｘｎ　ｓ＊ｙ０／（破綻（はたん）せよ）」

わあん、と空気が震えた。

小さな声だけれども、確実に耳に届いた。

凄いトリハダがたったあああああ！
走ってて暑いのにトリハダとか！　自分で自分が気持ち悪い！
そして目の前の光景を見て、トリハダどころじゃないことに気付きました。おもわずあんぐりと口が開きますよ。
扉が、さらさらと崩れていきます。
実は光の粒で出来ていたんだよ、と言われたら納得できるような崩れっぷりです！！！　端っこから空気に溶けて崩れていきます。
扉の向こうには星原樹がそびえ、青空が広がっています。
え、ちょっと、扉、無くなったんですけど。
しかもなにをしたとかではなく、ただ勇者様が呟いただけで、巨大な石っぽい扉が消えたんですが。勇者様、実は武器要らずなのか！！

それはそうと、扉、壊していいんですか勇者様！
これ、絶対高いというか、補修簡単じゃないでしょう！！

「大丈夫だ」

心の声を読まれたのか、勇者様は走りながら普通に喋ります。聞こえるのも不思議だけど、この人の息が乱れてない方が不思議ですよ！　分けて！　その体力分けて！

「この扉は自己修復の韻律が組み込まれている。そのうち勝手に直る」

へー便利なんですね。

というか！　ヤッパリ壊したってさらっと認めましたね勇者様！　なにをどうしたのか分からないけど、公共のもの（なのかなあ？）は壊しちゃまずいですよ！　ツッコミたい！　そして常識を説きたい！

しかしそんなツッコミをしている体力など、私には無い！

肩で息をするのが精一杯、バスタブ、もとい星櫃（せいひつ）にたどり着いたときなんて、もう瀕死状態でした……。

そうだ、この一週間、ろくに運動もしていなかったんだよなあ。食べては授業、食べては授業でうたた寝……はっ。ちょっと前に頑張ったダイエット、あれのお肉の量、私取り戻しているかもしれない！　この、ゆったりドレスもどきが悪いんだ！　どれだけ太ったかが分からないっ。でもいいんだ、今走ったことで、ちょっとでも痩せれるような気がするから……。お肉との戦いは、乙女の永遠の課題ですよ。

私はそんなことを考えながら、星櫃の横においていた枝を手に取りました。

相変わらず軽い。

そしてみずみずしい。枯れちゃってたら証拠隠滅で燃やそうかと思ってたけど、必要は無いようだ。うむ。肩に担ぐしかないけれど、

正直間抜けな格好です。本当に荷物運びだね！　これに荷物の袋を吊ったらどうだろう？　持ちやすいかなあ？　ちょっと旅人っぽくないですか？　枝に荷物ぶら下げるのって。でも葉が落ちちゃうかな。結構わさわさ茂っている枝だし。

枝を揺らしたら、薄い硝子か鱗がすれるような、シャラシャラという音がする。お、意外といい音です。癒しアイテムになりそう。見た目綺麗だし。

しげしげと枝を眺めて、ふと思い出した。

そういや、勇者様も神官様もこれを遠巻きにしていたけど、結局原因はなんだったんだろう？　やっぱりニオイ？

むむ。これ、臭いんだろうか？

ぼふ、と葉っぱが密集しているところに顔を埋めると、ふんわりと優しい香りがした。お日様の匂いだあ。ほんわりする。私には匂わず、他の人にだけ臭い匂いなんだろうか。臭い枝なんて、誰も持ちたくないよね。分かります。ですが、生活のためです！　どんな臭い枝でも持ちましょうとも！

「持ったか？」

勇者様は、私の奇行をじっと見詰めていらっしゃったようです。え、声を掛けて。もっと早く、声を掛けて！　恥ずかしいです！思いっきり匂っていたのがばれた！　恥ずかしさに身もだえする！

私は勇気を出して、どうしても気になって仕方が無いことを聞くことにした。聞くは一時の恥ですよ！

「この枝って、臭いんですか？」

「なにを言っているんだ？」

会話が通じないようです。

元町民C、やっと荷物担ぎをやめてもらう

とりあえず、枝は臭くない。それは分かった！　歩く公害ではないんですね。ちょっとほっとしました。臭いって、本当に我慢できませんからね！

「少し急ぐ」

勇者様の声が少しだけ、固い気がします。お急ぎなんですね！　了解しました。声音だけで分かるって、もしかして無表情マスターに私もなってきたのか！　もっと極めたら勇者様の感情が分かるようになれるかも？

でもちょっと待て、今の言葉に嫌な予感がする。私は勇者様を見上げて先手を打ちました。

「荷物担ぎはいやですよ！　あれ、地味に肩がみぞおちに食い込んで痛いんです」

急ぐということは私に走らせないことで、つまり私を担ぎ上げて持っていくことなんじゃないかと！　名推理ですよ！　そしてこの予測は当たっているはずだ！　乙女の勘がそう囁いています！

私は渾身の力を目線に込めて、勇者様に訴えました。

本当にあれは辛いから止めてくださいよ！

むむむ。

にらめっこはそこまで長く続きませんでした。勇者様は、

「すまなかった」

と謝罪してくださいました！　勝利！　私の勝ちです！！　言えば分かってくれるんですねっ。言葉が通じるんですね！　やったあ！

私が天に拳を突き出して達成感を噛締めていると、そのままひょいと持ち上げられました。

持ち上げられたっ？！

勇者様の左腕に座らされる格好です。正確には、左の肘の辺りに座らせて、手でぐっと腿と膝を押さえて固定しています。え、なにが起こった。

確かに、荷物担ぎは嫌だといいました。

それは汲んでくれたんですねっ！　でも、幾ら小さいほうだといえ、片手で抱きかかえるとは、尋常では無いと思うんですよ！　これって、チビッコにお父さんがよくしている抱っこですよねっ。私と荷物と枝を軽々と持ち上げた状態なのに揺るぎない勇者様。基礎体力セレブのみならず、力持ちだったのか！　さては筋力セレブですね！　脱いだら凄いとか！　どう凄いかは、乙女のたしなみとして口には出せませんがっ。

私が固まっているうちに、勇者様はさっさと踵を返します。思わず揺れに身を硬くして、勇者様の肩に手を置きます。すると、

「落とさない。信じろ」

と言われました。信じますよ！　との心を込めて、首を振ります。信じるも信じないも、私を支えているのは勇者様の腕一本ですからね！　私の命が掛かってますよっ。落とさないでくださいね。

「あと、その枝には俺は触れない。できれば、少し遠ざけて持っていてほしい」

あ、そうなんですね。分かりました。

勇者様に枝が触れないように慎重に肩に担ぎ直す。

揺らした拍子に葉がしゃらりと音を立てます。薄く青み掛かった透明な葉っぱが、複雑に日の光を透かして、ゆらゆらと水面みたいに光を揺らす。癒される。和むなあ。皆さん、何でこの枝嫌うんでしょうね。

この枝を持つだけの楽な仕事で、なんと！　三食おやつ衣料しかも宿屋つきですよ！　ぼろい商売だと思いませんかっ。うまい話には裏がある……裏のおばあちゃんの言葉を胸に刻みながら、一応警戒はしていますが。今のところ、拉致されたのと、恥ずかしい職業名を押し付けられた以外は特に不満はありません。

勇者様は私を抱えたまま、早足から、徐々に疾走に移行していきます。

びゅんびゅんと景色が後ろに流れる流れる。わー速い。私が走ったより速い……。私って鈍足？

凄いな、勇者様まだ息が切れていないよ！　私は大人しくしておいた方がいいだろうと、身動きしないように枝と荷物をぎゅっと抱えて小さくなっています。

だんだん勇者様に抱えられるのに慣れてきた自分がいる。

羞恥心は人並みにありますが、どうも勇者様の抱え方って、動物とか荷物とかに対する抱え方なんですね。だから恥ずかしく感じないんです。実際、あのエスコートもどきのほうが恥ずかしかった！

多分、人間扱いされたから？

ここで、きゃッ！　勇者様に抱えられちゃったッ！　とか、姫様だったらラブモード展開とか、あるんじゃないかな！　あ、姫様と言えば、勇者様が人に触れ合わないとか仰ってたけど、あれは一体なんだったんでしょう。今実際、勇者様の腕の上に座らされていますが……。恋する乙女の罠的な何かですか！！　勇者様は私のものよ

！　といった牽制的な何かですか！

つくづく、勇者様は本当に謎の人だよね。

結局この人たちのことは、漠然とした業績しか知らない。どんな道を歩いて、こうなったのかは分からないし。人に歴史有りってね！　誰しも、歩んだ道のりの先に今がある。向かいのじいちゃんが言ってました。たまにいい事言うじいちゃんです。

抱え上げられているから、勇者様の顔が私より下にある。見下ろすって新鮮ですね！　いつも頭一つ分高いせいで、見上げてますから……。

改めて勇者様の顔を見下ろすと、痛々しい頬の傷が見えました。治療していないんだろうか。

もしかして、勇者様見えないところに怪我しているとかないのかな？　さっき私と一緒に走ってた、っておかしくない？　その気になれば荷物担ぎで攫うはずなのに、私の横をわざわざ走っているとかありえない。相当急いでいる雰囲気が伝わってくるのに。

「怪我、されてませんか！」

私を抱えて走っているくせに、結構な速度がでています。なので舌を噛まないように一生懸命口を開いたら叫び声になってしまった。うるさくてごめんなさい！

勇者様は前から目を逸らさずに、

「もう治った」

とだけ返答。そうですか、治りましたか……？　うん、謎ですね。怪我ってそんな早く治るものですか？　よく見たら、頬の傷も生々しい傷跡じゃなくなっています。

「じゃあ、もう怪我は無いんですか？　痛くないんですか？」

状況が分からない私はしつこく聞きますよ！　最近しつこさも重要と気付いた！　しつこくきかないと、絶対この人自分から口を開かないよ！

勇者様は私を一瞥（いちべつ）しました。

「……痛くない」

その間はなんですか！　怪我人を無理させちゃいけないと思うんですけど！　私はにわかに焦りだした。血とか出たらどうするんですかあああ！　急な運動危ないですって！　いや、危ないどころじゃないのか？　私は疲れているけど元気ですよ。まだ走れるッ。ダイエットも必要だしね！

「まだ痛いなら、下ろしてくださいね！　自分で走りますよ！」

私のしつこさに、勇者様は根負けしたのか、

「全く痛みは無い。このままでいい」

と言い換えました。全然痛く無いならいいんだ。うん。私はようやく追及の手を緩めました。この人はたぶん嘘をつかない人だと思います。大人しく口をつぐみました。

しばらくすると、前方に見慣れない広場が見えてきました。

ここも見事に人気（ひとけ）がありません。

神殿って、人口密度凄く低いんですか？　セイヒツの間からこっち、全然人を見ません。

この広場も初めて神殿に来た時に良く似た、芝生と壁だけの場所です。何でこんな場所が一杯あるんだろう？　無駄設計じゃないんですか？　庶民は無駄という言葉が嫌いですよ！　無駄遣いとかにあこがれますがっ！　無駄遣いするほどお金はありませんから！　無駄にお菓子とか買いまくって、ごろごろだらだらしてみたい……そんな夢を抱いたことは確かにあるけど！

勇者様は広場に出ましたが、私を下ろす気配がありません。そのまま芝生広場の中央に歩み出ます。青空には、太陽と白い第一の月がぽっかり出てます。いい天気だ。

ここから一体どうするんだろう？

すると、扉のところで謳っていたあの言語が勇者様から流れてきました。

「Ｚｘｘｘｈｙ０ｗｗ－４５８７５２０－　Ｋｘｘｘｒｘｘｘ
Ｚｘｘｘｈｙ０ｗｗ－２４６４５１２－／
（座標４５８７５２１から座標２４６４５１２）」

世界が、息を呑んだような静寂が広がった。

空気が歪み、軋むさまが、見える。ごくりと思わず息を呑みました。超常現象ですよ！　なにが起こるの！

勇者様は今度はなにを壊そうとしているんでしょうね！

芝生広場は自己修復しないと思いますよ！　庭師の人、泣かせるのよくないです。

不思議な韻律のせいでか、トリハダがまた立ちました。

ホント、今日これを立ててばっかりですよ！　何回目のトリハダですか！　これ以上何かあると、私、鳥になります！　ばっさばっさとか飛んでいくよ！　飛ぶのは意識と記憶だけど！　つまり失神です。

とにかく、視界が歪む気持ち悪さもあり、私の緊張は高まる。ぎゅっと枝を握りなおした。

「つかまっていろ」

勇者様が普通の言葉で私に注意します。

その言葉通り、勇者様の肩に手を回し、マントをとりあえず握ります。掌（てのひら）には汗が滲（にじ）んでた。慎重に枝を勇者様から離して準備完了です！

凄くいやな予感がするんだ！

だって、空気がおかしい！

空が歪んで、空気が軋んでるなんて。

勇者様が続きの韻律を謳いあげる。

「Ｋｙ０ｒｖｖｖ　ｗ０　Ａｓｓｙｗｗｋｗｗ／（距離を圧縮）」

耳鳴りがするほどの静寂が広がる。圧倒的な何かの気配がひたひたと押し寄せて、頂点に来た時、勇者様が最後の韻律を口に出す。

「Ｉｄ０ｗｗ．／（移動）」

勇者様の宣言の後に、特大のめまいが来ました！

ぎゃあああ！

神官様の術の感覚に近いけれど、こちらの方は穏やかさじゃない！

凄く無理やりねじ込んだって感じがあります！　もしかして、凄い力技なんじゃないですか！　そこのところどうなんですか勇者様！

とりあえず、意識が遠くなりかけても、枝を離さなかった私を誉めてほしいです！

元町民C、出番が来る？

――ぱちん。

ぴったりと正しい枠に納まったような、世界が元に戻ったような、そんな圧倒的な安堵感とともに私は目を覚ました。

気がついて、まず枝の確認をした。

とりあえず、ぎゅっと握り締めていますよ！　勇者様に触れさせても無いし、落としてもいませんでした！

こわかったよおおおおお！　はい、意識飛びましたとも！

勇者様の力技って半端無い。もしかして、あなた、基本力技の人ですね！　身に染みて理解しました！　うすうす感じていたんですけどね！　今更って言わないでください！

世界の歪みが正常に戻り、大きく深呼吸しようとしたところで、私は思いっきり息を吸うのを躊躇（ためら）いました！　んぐ、と喉で息を止めましたとも！

だって、空気が、ピンクでした！

いや、喩えではなく、ピンクの霧がもやもや漂って視界を遮っています。気持ち悪いです。

それもふわっとしたピンクじゃなくて、どぎつい目に痛いピンクですよ。なんですかこれ。

ピンクの霧がそこかしこに溜まって見通しが悪すぎます。

この空気はどう考えても吸うと体に異常をきたしそうな感じですよ！　吸いすぎて頭の中がピンクに染まる……なんだか卑猥（ひわい）ですね！　乙女の口からはこれ以上何もいえません。

はっとして口と鼻を手で塞ぎます。吸い込んだら危険な気がしますから！

勇者様はそっと私を下ろしました。ありがとうございます。鼻と口を塞ぎながら、ふごふご礼を述べ、きょろきょろと辺りを見回します。

濃いピンクの霧に阻まれて、景色が薄ぼんやりとしか見えません。さっきまでぴかぴかの晴れ空だったよね？　太陽も月も見えません。私、そんな長時間気絶してないよねっ。勇者様にさすがに起こされると思うし。

周囲は昼間のはずなのに、薄曇ぐらいのどんよりした暗さに加え、さらにピンクの霧ですよ。怪しさ爆発です。勇者様、私をどこに連れてきたんですかっ。

「こちらだ」

勇者様は迷うことなく私を先導して歩き出しました。勇者様は口を抑えていない。大丈夫なのかな。深蒼（あお）の勇者様がピンクと混じって、紫の勇者様になったら、目も当てられませんよ！

それにしても、ここ、歩きにくい。勇者様は身軽に歩きますが、足元にはごろごろ石が転がっていて歩くのが難しいです。む。……石じゃないな。これは、瓦礫（がれき）ですね！　レンガとか混じってます。ちょっとこの華奢な靴では、ヒールがはまり込みそうで怖いんですが！　なんとか勇者様についていきます。ピンクの霧って、暖かそうなイメージがあるんですが、この霧はとても冷たいです。背筋がぞくぞくしてきた。

ふと前方から、風が吹いた気がしました。しゃらん、と葉が音を立てます。

小さいながら、神官様の声が聞こえますよ！

勇者様の足が少し速まります。えーと、待ってください！　結構

必死で追いかけるために、この纏わり付く長いスカートの裾がかなり邪魔です。大きくドレスの裾を持ち上げます。膝が見えるけど、いいよね！　非常事態です。一気に走りやすくなりましたよ！

何とか勇者様に追いつくと、神官様が目を閉じて一心不乱に呪文を唱えられていました。神官様の周りには、ピンク色が薄い気がします。と言っても、少しだけだけど。それよりも神官様が大変な状況でした！

「Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．」

ただでさえ白いお顔が真っ白です！　額には玉のような汗が吹き出て、今にも倒れそうな雰囲気。でも、声を掛けられません。とても鬼気迫る表情で何かを押さえ込もうとしているのが分かる。

「Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．　Ｋｋ　Ｙｒ　〟Ｈｎｋ　２４５８５〟　Ｎ　Ｈｎｎ　Ｏｔ，Ｔｊｋｍｙ．Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．……」

同じフレーズが何度も繰り返されると言うことは、ずっと謳ってなければ継続できないほどの星術なんだと思う。

私が息をのんでいると、勇者様がこちらに振り返り、一瞬動きを止めた。私の足元に視線が突き刺さります。

足？

あ、すみません、ひざこぞうまで丸出しでした。走りやすさ優先の結果ですよ！

「足はしまいなさい」

ぎこちなく視線を逸らしながら勇者様が仰いました。何で丁寧語

なんですか。お父さんみたいですよ。すみませんね！　乙女失格ですね！　お見苦しいものを見せました！　裾をばさばさとさばき、足の収納が完了です！　収納が完了したところで、改めて勇者様がこちらを向きました。

「枝で瘴気（しょうき）を浄化してもらう」

この枝ですか？　確かに癒しオーラが出ていると思うんですが、それだけじゃ足りませんよね。どうしたらいいんでしょう？　でも早くしないと神官様の状態が悪化するのがよく分かります。

私も微力ながら考えますよ！　確かに枝はこの不審な霧を寄せ付けていません。うーん、枝を振り回してみるとか？　地面を葉っぱで掃除してみるとか！　うん、ろくなことが思いつきませんね！

「俺と同じ言葉を繰り返して言うこと」

はい！　了解いたしました！

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）」

うっ、いきなり難易度高いですよ！

「ア、」

舌を噛みそうになったので、仕切り直しです。ええと、リズムはたん、たん、たたん、ぐらいだから、

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／」

ですね！　うん、言えた！

するともう一文勇者様が口を開きます。

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／（あるべき姿に。）」

私もまねをして、

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／」

と謳う。

う、な、何も起こりません……よ？　びくびくしながら周囲を見回したその時。

りん、と風が無いのに葉が鈴のような音で鳴った。

ん？　おかしいな、とさすがの私でも気付きます。目の前の枝に目を戻すと、ふわりと葉が光りだしました。えええ、木の葉っぱって、発光するんですか！

その状態の葉に触れたピンク色の怪しい靄（もや）は、青い光の粒子となって空気に溶けました。

目に見える空気洗浄ですよ……！　即効ですね！

ゆったりと靄が意思を持つように渦を巻き、枝を取り囲みます。えええええ、これちょっと大丈夫ですか？

私は思わず枝を地面に突き刺して手を離した。よし絶妙なバランスで立ってますね！

それを確認して、じりじりと後ずさる。だって、濃厚なピンクの変な霧が寄ってくるんですよ！　触りたくないし、正直、怖過ぎるじゃないですか！

一歩離れて立つ勇者様の横にちゃっかりと退避します。ここだったら安心な気がする！

徐々に枝を取り巻く霧の量は多くなり、濃いピンクは渦を巻いて枝を取り囲みます。……違う、枝が靄を吸い込んでるの？　恐るべき吸引力ですよ！　私の横を霧がどんどん流れていきます。風が無いのに渦を巻いた霧が、竜巻のように枝を包み込んだ瞬間！

シャァアアン！

万の鈴が一斉鳴ったような音が響き渡りました。枝から押されるようにして光が弾け、光の波が波紋のように広がっていきます。優しい圧力を持った光が、そよ風のように私たちを撫でて、そのまま空へ還っていく。

そして光に触れた霧が、溶けるように空気に消えていきました。

神官様が同時に、

「Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ！」

高らかに呪文の終了を宣言しました。

一気に場を包み込んでいた何かが、泡のようにはじけて消えます。世界が、正常に戻りました。

呆然と見上げた空には、神殿で見たのと同じ、のどかな青空と、太陽、そして第一の月がぽっかりと浮かんでいました。

目の前にはもう光っていない枝が、地面に刺さったまま風に葉を揺らしています。今の不気味な光景は、夢か幻だったような気さえしてきます。

凄い枝だったんですね。枯れたら燃やすとか言ってごめんなさい！

元町民C、おるすばんをする

青空を眺めていて、また開いていた口をぱくんと閉じました。
砂ボコリとかはいりそうだしね！
不意に背後で音がしたから思わずビクッとなる。慌てて振り返ると、神官様が真っ白な顔色のまま座り込んでいました。

「なんとか、なりましたね」

気力が尽きた表情で神官様が仰います。肩で息をしながらですが、晴れやかな表情です。さっきのピンクの霧に包まれてるって、凄い重圧でしたしね！　おつかれさまです。
勇者様がふと何かに気付いたようです。

「陸馬（うま）を連れてくる」

ど、どこに？　勇者様が見ている方向を私も見てみたけど、何も見えない。どれだけ目がいいんですか。

「恐らく危険はないが、念のため枝はそのままにしておいたほうがいい」
「はーい」

私の気の抜けた返事の後、勇者様は軽く土を蹴って、瓦礫の上をひょいひょいと走ります。
あっという間に見えなくなりました。こう、客観的に見たら凄い速度だね！　ホント、さっき落とされなくてよかったです……。それにしても鎧を着て厚着して重装備なのにあれだけの身のこなしとか。筋力セレブ半端ないです。

私はいきなり手持ち無沙汰になりましたよ。何かできること、できること。とりあえず荷物から綺麗な布を出して、神官様に差し出しました。

「ありがとうございます」

ものすごく疲れているだろうに、律儀な人だな。やっぱりこの人は律儀大将だよ……今名前をつけました。

しかし、神官様の気力はそこまでだったようです。

汗を拭きながら、神官様はぐらりと上体を揺らしました。危ない！　とっさに手を伸ばして支えます。私ナイスキャッチ！　意識を飛ばした神官様、意外と重いよ！　着やせですか！　うらやましいですね！

神官様の様子を素人ながら観察します。

顔色は悪いものの、息は……普通です。疲労のあまり意識が飛んだのかな。心配ですけど、私はこれ以上どうも出来ない。分厚いはずの旅装にまで汗が染みています。どれだけの間、ああしていたんだろう。とんでもない精神力だということは、私にでもわかります。

汗だくだけど、このままにしていいのかな。着替えもないから、いきなり脱がしちゃうわけにはいかないなあ。せめて脱がすなら勇者様にお願いします。神子もいやな称号だけど、チカンならぬチジョという称号は痛すぎますしね！

そういえば荷物に水を入れてくるのを忘れました。これは痛い。神官様に飲んでもらうことも額を冷やすとかも出来ません。次は気をつけよう。

他に出来ることはないかな……あっ。

閃きました！　これしかない！

とりあえず簡単に小さな瓦礫をのけて、神官様を横たえました。そのままぺたんと座り込んで頭をふとももに乗せます。私に出来

ることって、人間枕ぐらいですよ！
つまりひざまくらです。
思ったより人間の頭って重いんですね。足がしびれるかも。
でも忍耐！　庶民の雑草力をなめてはいけません。神官様の綺麗な髪の毛が土についたら悲惨なことになりそうなので、スカートの上にまとめてあげておく。よし。あと、神官様が握ったままだった布をそっと取り上げて、額の汗を拭いたあと、畳んで目の上におきました。こうしたら、眩しくないよね！　ゆっくり休んでください。
のどかだなあ……。

もう危険がないと仰った勇者様の言葉を丸呑みにして、油断しまくりですよ！
ぼんやりと空を眺めます。

空には太陽と第一の月がぽっかり浮かんでいます。
樹の枝一つで空気が綺麗に掃除できるなんて、神様って超越してるんだなあ。創星記って、やっぱり本当のことなんだろうな。
星神様っていう呼び方は、まず何よりも星の配置を整えたと言う創星記の伝説によるのだそうです。
空には太陽が一つ、月が三つ、世界にとって主要な星はなんと八千百四十六あるそうですよ。はっせんって！　神殿で受けた星学の授業でどん引きしました。だって、神官様とかこれの周期を全部覚えた上で星術を使われているとかいうんですよ！　同じ人間とは思えません！
以前神官様が転移術を使うために、ガリガリと地面に書いていたものはこの星々の周期表だったそうです。それを利用することによって術を使うときの負担とかが軽くなるとのこと。まあ、全部覚えられない凡人用に『これでカンタン！　絵でおぼえるみんなの星術』と言う教本まであったわけですが。もちろん、お世話になりました

とも！　そう、町民ですが、ちょっと賢くなっているのだ！　一週間の勉強付けのお陰だけどね！　一週間だから、本当にちょっと、なんだけどね……。だんだん自信がなくなってきた。

静かだなあ。枝がたまに風に揺れてさやさやと音を立ててるぐらい。鳥の声とか、何にも聞こえません。

この周りに広がる瓦礫はなんでしょう？

だんだん気になってきた。

街だったっぽい場所みたい。建物の土台かなーと思うものとか、レンガの欠片とかが転がってる。

壊れたばかりな生々しさがないのは、風化が始まっているっぽいから。レンガとかも白くなりかけてるし。凄く昔に壊れた建物みたい。

あと、普通の生活に必要な小物とか、食べ物とかが見当たらないから、壊れたばかりの街ではないことが分かる。じゃないと落ち着いて座ってないよ！　思い出したように雑草も生えてるしね！

それにしても雑草以外の生物の気配がないな。

虫とかいないかな、ときょろきょろ周囲を観察する。ひざまくらと、それぐらいしかすることないんだもん。

む？　横の瓦礫の間に、何か紙の束が挟まれています。

神官様を落とさないように、揺らさないように慎重に手を限界まで伸ばし……むむ、と、届くかな！

よし！　取った！

うわーなんかぼろぼろのノートっぽい紙束でした。めくるだけで崩壊しそう。中身は……昔の文字だ。これ名前かな？　つ……つぁなぁげ？

た、達筆すぎて、私には読めません！　誰かの落し物かも。拾ってよかったのかも謎です。結構汚かった……。

とりあえず、あとで埋め戻しておこう。横に紙の束を置き、ぼんやりと空を眺めます。本格的にすることなくなってきた。勇者様は戻ってこないし、神官様は眠ったままです。

日差しがぽかぽかと、丁度よい感じです。後ろの瓦礫に背中をもたせかけてみる。うん、倒れそうにない。

そうやって脱力していたら、だんだん私も眠くなってきた。欠伸をかみ殺しますよ～。

あー、だんだん瞼（まぶた）が、重くな……。

ちょっとだけ、目を閉じてもいいかなあ。ねむ……。

◆　【５／Ａ０】、【１／Ｓｈｒ】と接触する（前書き）

勇者視点です。

◆【５／Ａ０】、【１／Ｓｈｒ】と接触する

星術単位にして二千は離れた場所に到達しつつある。遠見の術を逆算して割り出した位置は間もなくだろう。

この戦いの最初から最後、そして今もなお、こちらを観察する何かがいる。

知能が発達した魔物と言うものは、未だに発見されていない。しかし、皆無であるとも限らない。発見されていないだけかもしれないのだ。相手の正体が分からない以上、瘴気（しょうき）を抑えるのに全てを使い果たした神官や、戦闘に全く慣れていない神子は連れてくるべきではない。そう判断して、あの場を単独離脱してきた。

対象との遭遇まで、あと三呼吸ほど。

走り続けながら戦闘体制を構築する。

左に佩いた剣の柄に手を添える。この距離に迫っても、相手が何かが視認出来ない。恐らく障壁によるかく乱が仕掛けられているのだろう。

背後に残してきた二人の周囲には、能動的に動くものの気配はまだ感じられない。星原樹の枝による簡易神域が展開したままであるので、生物は本能的に忌避（きひ）するはずだ。

二。

思考でのカウント。右手で抜刀体勢を整え、息を絞る。左手では簡易星術を展開、効果は振動を選択。星語Ｓｖｖｖｎｄ０ｗｗは省略、唱えた場合は術の解放規模が大きすぎ、相手に悟られる可能性がある。

一。

かく乱障壁突破。物理的障壁、なし。
目標視認。ここに至り、フードつきのマントを纏い、ゆったりと立ち尽くしている人影を認識する。フードの陰から見える口元はゆるく笑みを浮かべていた。

接触。
飛び込みと同時に抜刀、銀線と化した剣先が相手の喉元を狙う。だが、それは想定済みだったらしい。展開済みの星術結界に阻まる。剣と術が食い合い、火花が散った。相手の表情に焦りはない。全力の打ち込みと、それに対する結界の斥力により、剣が金属の悲鳴を上げた。右手の力をそのままに、左手で展開していた星術を剣の下に潜り込ませる形で打ち込む。これも結界で阻めると構えていたらしい。
しかし、選択していたのは振動の術だ。結界に直接叩き込めば、恐らく相殺されと判断して、振動を与える対象を変更、結界の手前の空気を振動させ衝撃波と化す。結界ごと相手を吹き飛ばした。数歩吹き飛んだその人物は、そのまま体勢を崩さずこちらへ相対する。

「勇者にしては、結構な挨拶だね」

声音からすると若い男だろう。
笑いを含んだ声音は、あくまでも楽しそうだ。あれだけの衝撃にも拘らず、服装に乱れはない。振動の術も、相手の体勢を僅かに崩しただけだった。もともと距離をとるために仕込んでいた術だ。効果が薄くても仕方がない。
剣を構えなおす。状況によっては、右の剣を使わなければならない。

「こちらを終始観察していた相手には、十分な挨拶だろう」

こちらが気がついていたことを公開し、相手の出方を窺う。

「深蒼（あお）の勇者は気が短いのかな」

芝居がかった仕草で会話が流される。見ていたという事実は認めるのだろうか。

「それにしても、面白いものを見つけたね。星原樹の影響を受けないものは、本当に珍しい」

腕を広げながら言う。会話の影での星術の展開は見受けられない。男の全身を眺め、『ほころび』を探す。あまり目立ったそれはない。苦戦しそうだと分析する。どのような生物にも、必ずある『ほころび』、それはあえて神が創った多様性と可能性の裏返しでもある。おおよその場合、それが弱点に共通する。勇者となってからは、より明確に『ほころび』が見えるようになった。魔物は最も『ほころび』の視認が容易である。魔物ではないのか。人間だった場合、更に厄介なことになる。

勇者は人間の敵ではあってはならないのだから。

目の前の男は、こちらの様子に気を払うことなく自由に話し続ける。楽しそうと言うよりも、皮肉な響きが多く含まれている。

「あそこまで侵食度が高いなら、存在率の九割五分以上は恣意（しい）的に作成されたものだろうね」

あきらかに誰を指しているか分かる言葉であったが、彼女をもの扱いしていることに、疑念が先に立つ。この男はなにでどこまでを知っているのか。

「あの子は人間だ」
「君がそういうのかい？」
こちらの言葉に被せるようにして男が言い放った。
「どうせ『声』も一緒に居るんだから神に聞いているだろう？　その上でもそう言い切れるのかい？」
「俺よりは人らしい」
抱え上げた体は確かにあたたかだった。感情をくるくると顔に出し、動くさまはなんら他と変わりがない。この答えに、男は一瞬押し黙り、笑みが消えた。
「……なあ、深蒼（あお）の。お前は人間が好きか？」
「守るべき対象だ」
「好悪の感情を聞いているんだよ」
「感情論で語るべきではない。義務だ」
この男はなにを聞きたいのだろう。事実そう考えている上に、のがれることの出来ない星神によって与えられた責務である。それを全うする以外に道も、選択肢もない。だが、それに関して感情を持っているかといわれれば、特にないと答えるしかない。
男はこちらをじっと見た上で、次の問いを発する。
「その右腰の剣は何度抜いた？」
「答える義務はない。それよりお前は何者だ」
「僕はただの遺物だよ。これは親切心からの忠告。右の剣はもう抜かない方がいい。君がもっと削り取られることになる」
「そんなことを何故言う」

問いには倍の問いが返ってくる。
これ以上は話さないほうがいいのか。会話で情報を与えかねない。しかし、それよりも知りうるはずがない情報を持っていることに対しての疑念が強い。未抜刀の右の剣の重みが増した気がする。これについて知っているのならば、これは切り札にはならない。密かに抜いたままの剣に対して星術をかける。効果は術の対消滅。星術を構成している韻律に働きかけ、術の効果を崩壊させるもの。男は気付いているのか気付いていないのか、言葉をなおも続ける。
「深蒼（あお）、世界の悲嘆（ひたん）と慟哭（どうこく）を祓（はら）う者。この世は悲鳴と涙で溢れかえり、星原樹も蒼く染まってしまった。それを払拭（ふっしょく）したとして、君の願いと悲しみはどこに往くんだろうね」
「俺の事は関係ない」
「関係あるさ。個の願いと多数の願いと、どちらが上位かなんて決められることじゃない」
この男は一体なにを言いたいのか。
「君はわざと自己から切り離しているようだね。いずれまた会うと思うけれども、その時にまで答えを考えてほしい」
「問いには今、答えたはずだ」
「君が人間が好きかどうか、についてだよ。では、失礼する」
フードの中でまた唇が弧を描き、歪んだ笑いを浮かべる。
揺らいだ術の気配に、男の気配が風に滲んだ。
逃がしてはならない。
判断を下し、男の『ほころび』へ向けて星術を乗せた剣を振り下ろす。予想していたのだろうに、男は避けなかった。剣がたやすく男の体に吸い込まれ、そこが霧となり崩壊した。

男は唇だけで一言、呟いた。
肌にチリッとした感覚が走る。思考より先に剣をそのまま振りぬくことを止め、踏み込んだ足で地を蹴りバックステップで距離をとった。
業火が先程まで男が立っていた場所に湧き上る。炎の星術だった。肌と鎧の表面を、熱と光の余波がなでていく。距離を取っていなければ、炎に巻かれるところであっただろう。炎が消え去った時には、もう何の痕跡もない。恐らく、本体ではなかった。
男が最後に呟いた言葉を思い出す。

哀れだな。

何に対しての言葉かは、漠然としたものであった。
その言葉を認識した瞬間、胸の奥で久しぶりに苛立ちを覚えた。そして、右手に力が入っていたことに気づき、大きく溜息をついた。剣の柄が、握りつぶされていた。どうせ刃が欠けてしまったのだ。打ち直しか、買い替えかをしなければならなかった。だが柄がつぶれたとなれば買い替えが妥当だろう。
思わぬ自分の感情に、力のいれどころを間違う。制御できていると思っていたが、まだ未熟だった。あの程度で揺らぐとは。これだから感情は厄介なのだ。
大きく息を吐き、思考を明瞭にする。
また人里に足を運ばなければならないのか。そう考えるだけで、僅かに気が重くなる。

――人間が好きかい？

男の問いを頭の中で反芻する。
答えは、決まっているじゃないか。
なのに、どうして口に出すことが出来なかったのか。その理由も

分かっているからこそ、あの問いは性質が悪い。

もはや使い物にならなくなった剣を鞘に収め、今度こそ本当に陸馬を連れ戻す為、行き先を変更した。二人の元に戻るまでには、いつも通りに戻らねばならないと考えながら。

元町民C、目が覚める

「寝てたあああああ！」

がばっと起き上がると、勇者様と神官様がびくっとこちらを見ました。

「あ、おはようございます」

うん？　自分で言って、違和感を覚える。

周囲の光が黄昏時だね！　遠くの森に太陽が沈んでいきそうな時刻です。

まさか私あれから爆睡ですか。ちょっとの昼寝がとんでもないことに！

お、お留守番さえ出来ない私！　荷物係、頑張りますね……それしかとりえがないのかっ！

それにしても健やかに眠りましたよ。頭すっきりです！　でも背中痛い。そうか、土の上で寝ていたからね！　ごろ寝だよ。よだれ垂れてなかったか心配になってきた……。

あまりの事態に、呆然とする私に、

「大丈夫か？」

と勇者様が問いかけられます。

大丈夫ですよ！　もしかして、頭の中身を心配していますか？

そっちも、大丈夫ですよ！　全くもって、問題ありません！

もぞもぞ動き出すと、私の体の上から何かが落ちます。あ、マント。このなめらかな手触りは勇者様のですね！　前、拉致された時に感嘆したなめらかマントですよ！　なんというジェントルマン。

足を隠してくれたのかも。しまいなさいって言ってたし。汚れを叩いて、綺麗に畳んでからちょっとはなれたところに座る勇者様に渡しに行く。

「ありがとうございました」

勇者様は軽く頷いただけでマントを受け取りました。

あ、横にお陸馬（うま）さんがいらっしゃいます。やっと再会だね陸馬さん！　喜びのままに陸馬さんに抱きついたら、「ポー」と鳴きました。え、これ嫌がっているの？　でも気にせずこの暖かさを味わってやる！　再会記念で許してね。思ったよりふわふわもふもふで、ちょっと幸せです。

そういえば、私より大丈夫じゃない人がいたはずだと言うことを思い出した。

「神官様は、もう大丈夫ですか？」

神官様は、真面目な顔でなんか汚い紙を見ていた。あ、あれは私がさっき瓦礫の間からほじくりかえしたヤツですね！

それ、あまりおすすめできませんよ！

私の言葉に、神官様は紙から顔を上げました。

座る神官様、顔色は見た目は戻ってきているように見えます。でも夕日のせいでちょっと色まで分かりません。みんな顔が赤らんで見えるよ。もともと私よりも白い顔されてますし。う、うらやましくなんか、ないもん。もうちょっとお化粧頑張ればどうにかなりますかね？　一度、華の姫様にいじられましたが。あれも一種の恐怖体験でした。ちょっと思い出しただけで遠い目になりますよ。

神官様は穏やかに笑います。そのお顔を見たら、大丈夫かなって思う。

「おかげさまで。こちらこそありがとうございました。お陰で何とか浄化が間に合いました」

「いいえ。そもそも枝の運搬のために養っていただいていますし」

わたしがお礼を言われるところじゃないと思うんだ。

だって扶養されているんですよ！　いうなれば雇用主！　つまり私は雇われの身の上ですよ！　生活保障までしていただいているのに、ちゃんと働かないなんて、庶民ポリシーに反します。それに、私がした事は本当に枝の運搬だけですから……。む、お枝様というべき？　あんな秘密兵器な枝だとは思いませんでした。これからは

丁重に扱いますよ！

「これ、どこにあったかご存知ですか？」

枝のことに思いをはせていると、神官様がさっきの紙を私に見せます。

「あ、それ、さっきそこの岩とレンガの間に挟まってました。何かなーって思って、ちょっと引っ張ってみたんです。神官様は、その文字、読めるんですか？」

「読めなかったんですか？」

町民の能力を高く評価しすぎですよ！

「そんな達筆すぎる文字は、ちょっと無理です」

「そうですか」

神官様は納得してくださったようです。勇者様が立ち上がって、陸馬さんの近くで何かを取り出しましたよ。薪（まき）ですか。キャンプの醍醐味（だいごみ）、焚き火ですね！　テンションが上がりますよ！

だって街中ではあまりこう、ごーっと火を焚く機会なんてないし。人生初めて尽くしですよ。

「今日はここに野宿になります」

私があまりに見ているからか、ちょっと申し訳無さそうに仰る神官様。一応、女だから気を使ってもらったのかな。あ、野宿がいやなんじゃないですよ！

私は力強く宣言しました！

「どこででも寝る自信はあります！」

現にこの人たちと逢ってから、いろんなところでの睡眠を披露していますよ！　旅立つ時意識なくしたでしょ、気がついたらおんぶだし、神殿に行く転移の時も気絶しかけたし、勇者様がさっきつれてきたときも気絶したし、そして今、私は地面でも寝てました。……想定以上に、色々、脳裏をよぎりましたあああああ。

しまった！　これは恥ずかしい。今更恥ずかしい……！　どれだ

け寝てるの。そりゃ、どこででも寝る自信がつくよ！　心の中で悶絶するよ！

「そうだな、寝つきはいいようだな」

勇者様、ここは流しておくべきです。いつもなら、そうか、でスルーなのに。何でちゃんと同意を示すんですか、あなた。こんな時に限って。

「まあ、……健康的でよいのでは？」

神官様、相変わらずフォローが滑っています。

元町民C、街は遠慮したい

それから陸馬（うま）に載せていた簡易鍋ややかんで湯を沸かし、簡単なスープを三人でもそもそと食べ、寝ることになりました。私はクラッカーも食べた。お二人はもう一度食べてるらしい。私だけがいっぱい食べてるんじゃないと思う。思いたい。

ゆっくりと広い大地に沈んでいく真っ赤な夕焼け空が凄かった！建物のない広い場所なので、ゆらゆらと揺れる地平線と太陽をじっと見ていました。

まだまだ世の中知らないことばかりだよね。というより、私が知っていることの方が極端に少ないわけですが！

日が沈んでから、星原樹の枝がキラキラ光っているのを眺めます。問題が無さそうなので、地面に刺したままです。光の雫が葉っぱの先からぽとぽとと地面に落ちるのが凄く綺麗。ためしに光を手にとって見たんだけど、すぐに淡く消えてしまった。これってなんなんだろうね。これが光源になるので、焚き火は消しました。薪（まき）の節約ですよ！　薪の節約にもなるなんて、ますますありがたいお枝様です。

「明日は一番近い街に向かう」

勇者様が焚き火の始末をしながら仰います。了解しました。街、と聞いて、自分の街に勇者様達が来たときの事を思い出しました。

「勇者一行パレードとか、もしかしてありますか？」

お二人とも黙り込むところを見ると、あれには閉口気味のようで

す。嫌な沈黙だな。無言の肯定って、こういうやつのことを言うのか。学習しました。

「これも役目だと割り切ってはいるのですが、あの歓迎は困りますね。ですが、救世の旅が行われていると言うことを広めるのも役目なんです」

と言うわけで、嫌でも歓迎されちゃうんですね！

「私だけこっそり裏から入っては駄目ですか！」

「女の一人旅の方が危ないだろう」

一撃で切って捨てられました。そうですよねー……武芸も術も身につけていない一町民です。強盗とかが起こっても対処できません。

「それに、その枝が目立ちすぎる」

私は枝運搬員ですからね！　何で皆さん触りたがらないのか、漠然としたことしか分かりませんし。

「一応、布を掛けて簡易結界としましょう。認識阻害と、封印ぐらいで」

それでもあまり持たない、と神官様は少し苦い顔で笑います。

「私の力不足ですから」

「お前に出来なければ、他に出来るものはいないだろう」

勇者様が普通にフォローしています！　私も神殿で、神官様は天才だと聞きました。知らない新星術はないんじゃないかというレベ

ルらしいです。美人な上に天才とか！　無欠ですね！　逆にこの神官様が出来ないことは、他の人は本当に出来ないのだろうな、と素直に信じられます。

「枝での浄化が本当に必要なのは、もう少し行ったところの谷です。そこに行ってからあなたを連れてくる予定だったのですが、ここの瘴気（しょうき）があまりにも強すぎて、来ていただくことになりました」

しょうきかー。耳慣れない言葉です。実は皆がしょうきしょうきって言ってたけど、正体を知らないのでした！

はい、先生！

「質問です！　しょうきって何ですか！」

分からない事は聞く！　これが学習の基本！　まず聞くところが分からない場合は最悪だけどね。

そうですね、と前置きをしながら神官様は説明してくださいました。

簡単に言うと、魔物の残りカスみたいなものらしい。

魔物を倒すと、死骸は残らず、消えてなくなるそうです。

でも、それはすぐに消えちゃったんじゃなくて、薄く空気の中にしばらく漂っているとか。吸い込んだら吸い込んだで、体にも精神にも悪いんだって。普通はそこまで深刻に考えるものでなく、弱い魔物とかだったらすぐに日の光で消えちゃう程度らしい。星術で浄化することも出来るとのこと。

けど、ここに居たのは上級に分類される魔物の、しかも群れだったそうです。で、それらを倒したはいいが、瘴気が溢れて浄化が間

に合わなかった。倒した、とさらっと言いますが、群れって半端ないことないですか。そういえば飛び込んできたときの勇者様の様子が戦場真っ只中っぽかったのが頷けます。あ、結局怪我の話題が浮いたままのような気がしてきた。

ともかく、瘴気が消えない上、濃度の濃いまま広がってしまうと魔物以外の生物には大変毒になるんだって。風で流れていって街とかに行ったら更に大変なことになるため、神官様がここで結界を張って抑えていたそうです。

勇者様が姫様に簡単に報告していたことは、こういうことだったのですね！　やっと納得しました。

「じゃあ、あのピンクの霧が瘴気だったんですか？」

「ピンク？」

なんかまた町民が変なこと言ってるよ！　って視線が突き刺さります。

「瘴気が見えるのですか？」

神官様が真剣に問いかけます。

え、あの妙に卑猥（ひわい）な空間は私しか見えてなかったってことですか！

「はい、とってもどぎついピンクの空間でした」

表現が微妙だった。

慌てて自分をフォローするよ！

「ピンク色の、かなり体に悪そうな靄（もや）が充満して、前が見えないぐらいでした」

じっと神官様が私の目を見ます。なんですか！　私もじっと見詰め返します。睨めっこなら……負けない！　神官様の金色の目をじっと見詰めますよ。むむむ。

「あなたの目にはどんな世界が映ってるんでしょうね」

ふ、と息を吐き出しながら目線を逸らしたのは神官様。

勝った！　僅かな達成感を握り締めます。でもなんでちょっと空しいんでしょうね。そうか、私だけが勝負だと思っていたからですね！　真面目な話の途中なので、あたりまえですが。

それにしても。

私の目には、どんだけ奇妙な世界が広がっていると思われてるんですか！

「人それぞれだろう」

勇者様が淡々と述べます。なんと。そう、このフォローを待っていた！　ナイスです勇者様。珍しくまともなフォローですね！

そうだよね！　私が変なんじゃないですよ！

それにしても、なんでピンクだったのか。もうちょっと、おどろおどろしい色でもいいんじゃないかなあ。

本当に浄化が必要な谷って、ピンクの谷なんですね……。しかもそう見えるのは私だけ。笑ってはいけない拷問のような気がする！

でも、これでようやく私の旅が始まったぽい？

色々先は不安ですがね！　はっはっは。まずは街についてからですね。はあ。

問題はそれからだ。

神子（仮）、人ごみは拒否したい

こんにちは、町民Cです。雇われ神子やってます。

えー、荒野を旅立って早三日。

今日は生まれて初めてよその街にやってきました。そこで人の壁に囲まれています。人が集まるだけで、こんなに暑苦しいものなんですね。

人ごみで、呼吸をするだけでも苦しいです。ちょっと距離はあるものの、この熱気とムードはぐらぐらします。

た、たすけて……。

人の声って、凶器になるんですねっ。初めて知ったよ。

野太いおっちゃんたちの万歳の声、キャー勇者様ー！　というお嬢さん方の黄色い声援、その他もろもろ、誰だよ鍋持ち出してガンガン叩いてるの！　それは太鼓じゃないよ！　耳に痛いだけですよ！

私は半分死んだ目をしながら、陸馬（うま）さんの背中に揺られています。ぽくぽくと歩くリズムで私は揺れます。このまま、意識を失いたい勢いです。

私の前を歩く勇者様と神官様は、あの素敵スマイルを惜しみなく振りまいています。

無理！　私は無理！

唯一の救いは、顔を分厚いベールで隠しているから、町民の皆さ

んと顔を合わさずにすむことですね！　これは妥協の結果です。どうしても勇者様ご一行として混じることに不安を覚えた私は、ベールを被った神秘の神子として登場することになりました。

しんぴ……しんぴ。

ここ、笑うところだからね！

頼む！　笑い飛ばしてええええ！

街に入る前に神官様に術をかけてもらったので、お枝様はそれほど危険物じゃなくなったとか。

危険物？　これは危険物だったんですか？　初耳ですよ！　臭いんじゃないんですね！

確かに光ったりしたり、勇者様が触れないとか言ってたりしたなあ。怯えながら聞いてみれば、私には害がないそうです。えー。

といっても、その封印術とやらも三日位しか持たないとのお話。効力の期限に申し訳無さそうな神官様へ、私は正直に、三日あったら十分ではないですか？　私の街にも勇者様達三日いたっけ？三日目には私を拉致して帰還してましたよ。と告げた。すると神官様がうなだれて、その節は申し訳ございませんでしたとか言い出したので、私のほうが慌てました。謝るべきは勇者様だと思うんだけど……。何故か神官様が保護者をしているような気がする。この二人の力関係も謎です。とりあえず、正直すぎるのもたまには駄目なことだと学びました。

とにかく、勇者様の剣が壊れたそうで、その修理も必要だとか。そういえば、二本持っていますよね？　と不思議だったんですが、右に吊ってる方は普段使わないそうです。オシャレアイテムですね！　分かります。使わないものでも、持ち歩いちゃうんですよね！

そして荷物が増えていくんですよ、私のように……。

まあ、今回はそれが珍しく役に立ったんですが。荷物の中に色々布を突っ込んでいたので、有り合わせでベールっぽい何かを作れたのだ！　裁縫は得意だよ！　大体の生活力はある。サバイバル力の

ない町民ですがね！　このベールと言うバリアーがないと、私は人前に出れない。本気で。

街に入るだけなら、どうにでもなると思ってたんだけど、街では既に勇者様を待ち構える体制が整っていたらしい。やめてええええ！

以下、パレード（ここも笑うところ）が始まる前のちょっとした時間で神官様が要約してくださった、街での出来事ダイジェスト！

それにしてもいつの間に聞き取り調査を……神官様恐るべし。

昔からあった、とんでもなく呪われている廃墟から、凄い光がして魔物の気配が消えた。行商人も急に魔物が減ったことを実感した。これは何かいいことがあったに違いない。つまり勇者様！

門番もがっつり見張るよ！　たまたま他の町で勇者様見たことある行商人も目を皿にする！　つまり商売のチャンスだから！

あ、道に人影が！　我らの街に、勇者様来たあああああ！

……という流れとか。

それにしてもうすうす感じていたんだけど、この人たちの知名度半端ないですね！　顔バレとか。だが、私は決してそこに溶け込まない！　顔なんて出さない、出せない！

地味に生きたい私には正直不要です。こうしてベール越しでも街のお嬢さんたちの「なにあの子」視線が突き刺さる突き刺さる。痛いって！　だから視線だけでハリトカゲみたいになるよ！　針町民（元）が出来上がります。カンベンしてください。もはや癒しはお陸馬（うま）さんだけ。あいかわらず微妙に避けられてますが。

紙ふぶきをしようとしたのか、紙が飛んだり、花が飛んだり、どんどん現場がカオスになってきているようです！　ちょーっと身の危険を感じる。そろそろ皆さんクールダウンしませんか？

うう、陸馬（うま）の上でひとり揺られているのが凄く罪悪感が沸いてき

ました。だって、働かざるもの食うべからずですよ！　ここまで、正直私は何も働いていないと言える。自分の力でなんかしたこともないし。本当に枝運搬員だけでいいのかな？　言葉に甘えて大きな穴にどぼんはいやですよ！

ぼーっとしているのも芸がないので、手を振るとかしてみてみたほうがいいのか？

それとも何もしなくて人形を間違われた方がいいのか？

貧乏暇なしが身に染み付いているのでね！　逆に何もしなくて言いといわれたら困ります。仕事ー仕事ー何か仕事がほしいですよー。手がわきわきします。最近、裁縫も洗濯も料理も力仕事もしていません！　なんか文字書いたりティーカップ持ったり、枝持ったりぐらいしかしてない。この、仕事へのパッションをどこにぶつければ！　できることかー。考えながら周りを観察します。といっても、あからさまに出来ない。なんたって神秘の神子（笑うところ）ですから！　お上品に、ゆったりと。できれば姫様レベルで優雅に。

うーん。今の私のスキルでできることは、街並みの観察ぐらいです。あとで買出しとかいるかもしれないし。

大通りの先に広場があって、領主様や役所があったり、星神さまを祀（まつ）る場所があるのは大体の街で同じだと思う。

今通っているのがメインストリートかな？　人ばかりで狭いですが！　そのうち領主様の館かお役所に着くかも。

ここに面してあまり出入り口がある家はない。

私の住んでいたところもそうだけど、魔物が侵入した時、真っ直ぐに広場に向かわせるように一本道にあえてしている面があるんだって。一歩裏通りに入ったらくねくねとした道で分断させて迷走させて各個撃破するのじゃ！　って向かいのじいちゃんが言ってました。本当かな？

魔物は知能が低いそうです。私より賢くないらしいよ！　比較対象が私という自虐（じぎゃく）が辛いですがっ。

実際、まだ魔物を見たことがないんだよね。正直今からびびって

ます……。幾ら勇者様と一緒としても、怖いものは怖い！
まだ見ぬ魔物はともかく、ちらちらと周りを見て、なんとなく商店街とかの方向が分かった。よし！　お使いもいける！　役立たず町民から脱却ですよ！

周囲を観察していると、ふと、視線を感じました。
む。気のせいじゃないな。最近視線に凄く敏感です。こんな職業についているからでしょうかっ。
人ごみの向こうで、マントのフードを被った人がじっとこちらを見ています。
何故か凄く気になったんですが。だってフードだし。フードって、めちゃくちゃ怪しいんですけど！　犯罪のにおいがしますよ！　これは私が目撃者になるのかっ。まだこっち見てるな……。じっと観察しかえしてやる。茶色のフードつきマント以外、性別も年齢も分かりません。お嬢さんたちの棘のような視線とはまたちょっと違った嫌な感じです。
ふとその横のお姉さんに気を取られた隙に、その人は人ごみに消えました。気を抜くなって言わないで！　だってお姉さん、胸の谷間がぼーんと露出して、私の視線を釘付けにするんですよ！　けしからんお胸様です。いいなあ。お胸様……分けてください。
フードの人、犯罪を起こしちゃだめですよ！　なんとなく心の中で呼びかけてみる。まあ、不審者をみたら犯罪者と思っている私がひどいんですがね！

パレードは一応、前進していたようです。程なく広場に着いた。町民は熱狂して、炒られた豆のようにぽんぽんはじけています。私、あの中にも混じれないかもしれない。そういえば、自分の街の勇者パレードも人ごみが嫌で見に行きませんでした！　今思い出した。
パレードが行き着いた先には、鎧を着た一団が立っています。

「おお、勇者様！」

手を広げて待っていたのは、とても丸い物体でした。

もとい、太りすぎた丸いおじさんでした……。ギラギラしてるよ！　服の金糸の縫い取りもさることながら、その、……脂（あぶら）で。

まさか、領主様ですか……？

思ったより、丸いですね。

神子（仮）、長話は聞きたくない

丸い領主様に連れられて、やってきました屋敷！

私の住んでいたところには、領主様がおらず、領主様に任命された町長さんが治めていたから珍しさと好奇心がうずきます。領主様だって！　初めて見る……のに、感動が薄いのはなんでなんだろう。喋るたびにたぷたぷ揺れる、領主様の豊満なおなかとほっぺたを眺めます。大変、恰幅のよい方ですね。大人の言い方をしてみた。

とりあえず、気を取り直します。中流セレブの生活を覗く絶好の機会ですし！　上流セレブの生活はもうおなか一杯だけど！　お城やお姫様はもういいです……。いつ不敬罪で連行されるか、いつ壷割るかとか、終始びくびくしますから！

広場のど真ん中に高い塀があり、その中が領主様の屋敷のようです。街の中なのに、妙に高い塀だなー。なんかね、街の人たちから屋敷を守るみたいな印象。領主さまなのに変なの。

それ以外は変なところはなし。当たり前だけど周囲に比べてとりわけ立派な建物なだけです。石造りの四階建てぐらいで、大雑把に形を言えば立方体のお屋敷です。四角か……ご本人と違い、屋敷は丸くないんですね。え、偏見ですか？

石造りの壁にも彫刻があるので、さりげなくお金が掛かっているのを見て取れます。お金の気配は見逃さないよ！

勇者一行は領主様に先導されて、当たり前のように屋敷に入っていきます。

え、ここに泊まるの？　いつの間にか勝手に領主様の中で決定し

ているようです。まあ、領主様の屋敷断って、わざわざ普通の宿に泊まるって言うのは、よほどの理由がない限り、宿屋の人も気まずさ最高潮でしょうけど。

私は中庭のあたりで、お陸馬さんから降りて歩きになりました。屋敷の使用人さんにお陸馬さんを預かってもらうしかないですし。しばしの別れですね、お陸馬さん……しんみりしかけた私をよそに、もりもりお陸馬さんは餌を食べていました。ああ、そういやさっきポーって鳴いてた。餌の時間だよ。そりゃ私より優先ですね！

鎧さんその一が、私の枝を持とうとしてくれたけど、丁重に断った。

ただし身振りで。

だって、長い間緊張していたせいか、声が震えて上手く出ない！思わぬところで乙女ッぷりを発揮ですよ。本当にいらないところでの発揮だな！　身振りで意思を伝える怪しい女です。神子と言うふれこみがないと、追い出されること間違いないよ！

代わりに荷物を持ってもらうことになりました。申し訳ないです。

領主様に先導され、大きな扉の中に入ります。

うわ、ここも蝋燭ガンガンに焚いてる。室内なのに明るいです。絨毯も気合を入れているのか、凄くふかふか。

絨毯に関する感想は、一瞬で吹き飛びました。

凄い空間だった。

所々に飾られている、金ぴかの美女像（ただし裸）や、あっはんうっふんにスレスレな絵画とか、ちょっときわどい形の壷（乙女の

口からはいえない）とか、ご趣味はよくないと思われます！

一つや二つじゃないよ！

大体そんな美術品です。どこから探してきたんだよ！　逆に凄いよ！　うわあああああ！　今度は裸の男性像ですよ！　肉体美はいいから隠して！　大事なところ隠してええええ！　そこまで精巧に作らなくていいから！　どこなんて私の口からは言わせるな！　察してというやつです。

ちょっと青少年には目に毒ですよ！　趣味悪！　ある意味潔さ過ぎます。こんなインテリアをする人が世界にいるなんて……想像を超えまくりですよ！！　オープンスケベの恐ろしさに私は慄きました！　見よ、この久しぶりのトリハダを！　実に三日ぶりです。

目のやり場に困るところだけど、ベール越しだから私の顔は見えないはず！　この際だから美女像のお胸様でも心の中で拝んでおこう。あやかれますように、あんな胸になりますように……わりと切実です。

あ、今気付いた。ここで私、「きゃあ」とか言うべきなんでしょうか？

妙にニヤニヤして領主様が私のほうを見るんですが！

「神子様には刺激が強すぎましたか？」

ニヤァ、と笑う領主様。

セクハラですか？　セクハラですねッ。なんか悔しいんですが。刺激と言うより、品格の問題な気もするけどね！

ボール……いや、領主様はちょこちょこと勇者様の横に並んで歩きながら、ずっとお話していらっしゃいます。

この街の成り立ちや、自分の業績、困っていること、そしてまた自分の資産情報、名物に美女情報、そして今度は屋敷の自慢やらを熱心に、それはそれはなめらかに語ります。綺麗なお姉さんのいる夜の街の話のあたりで、私のほうを見てなんかニヤリとされたんで

すが。私は性別女ですが、このお二人とはそういった意味では無関係ですよ。なんかこのニヤニヤ笑いがイラッときますね！

笑顔が振りまかれるたびに、お顔の脂がてらてらと輝きます。多分、あの顔をうっかり手で触ったら、その手は洗わない限りいろんなところに指紋をつけちゃうんじゃないだろうか。そんなブラックなことを考えてしまうのは、本当にお話が取りとめがないからです。

正直、もう遠慮したい！

お口塞ぎますよ！　でも触りたくない！

領主様のお口には脂が塗ってあるに違いない！

だからあんなに喋るんだよおおお！　あ、一族の美女情報になった。美女で勇者様を釣る気満々ですね！　分かりやすすぎるッ！美女か～。見てみたいなあ。だって、このボール（失礼）領主様のご親族での、美女ですよ……！　でもうっかり勇者様が気に入ったら大変です。まさかのカップル成立！

でもそうなったらそうなったで、姫様の猛攻撃が始まるんでしょうね……あんな女に取られてたまるか！　見たいな。ひい！　女の戦い勃発ですよ。私は退避します。でもちょっと怖いもの見たさで観察したい。とりあえず勇者様とどこかの女性とでカップルが成立したら見てみたい気がするんですが。特にデート。どんな会話しているかが気になりすぎる。会話が無いほうにいい笑顔で金貨をかけますがね！

それにしても勇者様の笑顔仮面半端ない！　この会話によく応対できますね。

聞いているのか聞いていないのか、重要な問いは笑顔でスルー、あとは適当に相槌を打っている様子。す、凄い！　ちょっと尊敬し

ますよ！

いつも話すはずの神官様は、そんな二人のあと、つまり私の横を歩いています。

神官様の笑顔ですらちょっと剥がれかけてる……というより、神官様は話聞いてませんね。

この人は知識欲が旺盛なようで、建物とかを眺めて、「この建築年代は……」とかひとりでぶつぶつ呟いてる。マニアですか……？

まあ、人の趣味はそれぞれですし、それに、そんな風に歴史に思いをはせる方が、領主様のお話聞いているより実りがある気がしないでもない。周囲のエロ美術は、神官様は華麗に無視されているようですが。この方も流石ですね。年季の違いを感じます！

はあ。

さっきから私の口が悪いのは、正直、疲れているせいもあると思う。

自分でも気づかなかった疲労っていうやつかなあ？　慣れない旅だし。お二人に、色々フォローしていただいているのが分かるから、疲れたとか辛いとかなんて、言い出せないけど。

それに加えてさっきのパレード！　そしてこのオープンスケベ屋敷！

どんどん町民の心の余裕を削っていきますよ！

今ならあらゆることに毒を吐ける気がするっ。

ただし心の中限定で。相変わらず小心者です。

何でこんなに心がささくれ立ってるんでしょうね！　そんな自分にイライラしますよ！　きー！

なんとなくイライラしながら周囲を見回してみると、ベール越しの景色に違和感がありました。

何かおかしい気がします。

んん？

ベール越しだから、よく分からないな。

何か凄いいやな予感がするんだけど。ベールを取る勇気は正直ない。

なんかね、こう、空気を吸ったらいけないような気がするんですよ。

この間の、遺跡の時みたいに。

神子（仮）、ここに居たくない（前書き）

ちょっと下ネタ気味です。ごめんなさい。

神子（仮）、ここに居たくない

じっとりと汗が滲んでくる。一度、ここにいたくないと思ったら、だんだん我慢が出来なくなってきましたあああ！

うう、これ以上先に進みたくない。何でだろう？　分からない衝動にもじもじしてしまいますよ。

神官様が、

「大丈夫ですか？」

と気にかけてくださったけど、どう伝えればいいか分からない。

それよりも、気持ち悪すぎて口を開いたら大変なことになりそう。確かに調子悪いっちゃ悪いんですが！

ここは、一時脱出ですね！　この場所から、何とか離脱するしかない！

でも、あの手しか思いつきません。

悩む……私は今、ギリギリの瀬戸際に立っています。

どうするか！

ここであの手を使えば、いろいろささやかながら持っていた尊厳的な何かが削られそうです。

しかし！

背に腹は変えられません！　私は心に強い決意を秘めて、きっと顔を上げた。女は度胸だ！

私は勢いよく手を上げて、こう言いました！

「すみません、お手洗いに行きたいんですが」

ぎょっとして振り向く皆様。

その勢いに私もびくっとなりました。

一斉に見ないで！　ただでさえ見られることに慣れていないのにこ

の仕打ち。
しかもこんな発言をするときに見られたら、恥ずかしくて悶絶しますよ！　実際、ベールの向こうで死に掛けていますが！
自然と全員の足が止まりました……。
居たたまれない一瞬の沈黙が、この場に満ちました……やめてー
誰か、発言してえええ！
ですよねー。乙女としてトイレ行きたい、はどうかと思います！
神秘の神子設定もどっかに行きそうですよ。でもね、それ以上にこれより先に進みたくない気持ちが勝った。お枝様を握り締める手に、びっしょり汗をかいている。うー、こんなに汗っかきじゃなかったのに。
初めに口を開いたのは、領主様だった。
「そうですか、神子様もそんなときがあるんですねえ。おい、案内して差し上げろ」
領主様が妙に嬉しそうです。えー、ちょっと引きますよ！　なんか良くない発想と繋がっている気がする。だけど、このさい気にしている場合じゃない。
鎧さんその三が、こちらへどうぞ、とぎこちなく先導されます。よし！　横道！　これから先はさっきみたいな圧迫感がありません。ついでに横道のせいか、エロ美術もありませんでした。
思わずほっとする私。
で、冷静になって、今更気づきました。
これ以上進みたくない私の動きは、まさにトイレを我慢する動きであったのではないかと！

……気分良くなっても、戻りたくなくなってきた。
っうわあああああん！　顔が真っ赤になる！　ベールで隠れているけれどね！

横道は先程までとは違って蝋燭はまばらに燈されている。あまり、

使っていない道なのかもしれない。私は先導する鎧さんその三に問いかける。

「あ、あの……」

鎧さんが、あからさまにびくっとなる。そんなに怯えられる理由はないよ！　ちょっとショックです。私は喋らない方が、円滑にすすむのかっ。うーん、と悩んでいたら、

「神子様をご案内にするに足る場所ではないかもしれませんが……」

しきりに恐縮されながら言われました。どんだけ私はセレブですか。一般庶民なんで、とんでもないぐらい汚いトイレじゃないかったら大丈夫ですよ！

くねくねと幾つか角を曲がり、そしてようやく目的の場所に到着した様子。こちらです、と控えめに案内してくれた姿が好感度高かったです。それにしても広くて道順が分かりにくい屋敷だな。

とりあえず、羞恥心やら気持ち悪いやら限界だったので、転がり込むようにトイレに入ります。

なんと！　トイレは地味だった。

一般家庭と大して変わったつくりじゃなかったです。この木の模様が落ち着きますね。ここまでもギンギラエロワールドが広がっていたらどうしようかと、真剣に考えていました。

トイレでひとりになったところで、ようやく大きく溜息をつけた。やっと地味なストレスから解放されましたよ！

でもさっきの気持ち悪さ、一体なんだったんだろう？

廊下とは違って、ここは薄くですが窓が開いています。

窓の外は相変わらずの青空。とっても鳥の声がのどかです。屋敷の中が異空間過ぎて、頭がぐらぐらしていたのが、外の風景を見るとすっきりしました。

そういや、廊下には窓が一切なかった。空気がよどんでいたのか

なあ。

私は気分転換に、ベールを上げて一息を付く。こうしたら、ちょっと冷たい空気が顔を撫でて気持ちがいい。

あー、やっと落ち着いてきた。そろそろ帰ったほうがいいのかな……。か、帰りたくないけど。

そんなことを言ってられないね！

頬をパン！　と両手で挟むように叩き、気合を入れる。

けれども、よし！　と顔を上げた瞬間、固まった。

だって、廊下に繋がるドア、周辺の空気がピンクに見える。例のどぎついピンクが、当たり前のように空気に混ざっています。

はっ、と振り返って、窓のほうを見ました。窓の外は、普通に青空が広がっています。オーケー、自然な色合いが心に優しい。

もう一度、ドアを見ると、特に下の方に、ピンクの靄が溜まっている。

あのお枝様が大活躍だった、ピンクの靄で前が見えなかった廃墟ほどではないけれど、漂う薄っすらとしたピンクムード。

い、幾らエロ美術品があるところだって言っても、空気までピンクに彩る必要はないだろう！！！　そんな効果は誰も期待していないよ！

いやいやいや。冷静になれ。

あれはえっちなムードじゃなくて、瘴気かもしれない。

かも知れないっていうのは、いまいち無臭だし、ピンクだし、あの領主様なら空気までおピンク路線に染めるとかもやってしまうかも知れない、と一気に考えたせいです。偏見ですか？

神官様に説明してもらったにせよ、世界の不思議に関しては、まだまだ私はシロウトに毛も生えていない程度です。つまりシロウト。丸ごとシロウトですよ。

ここまでの道、廊下は蝋燭の明りだけだったし、ベールで視界が殆ど遮られていたせいで、詳しい色が分からなかった。それでさっき気付かなかったのか。もしかして、先に進みたくなかったのはこのせい？　これが乙女の勘なんでしょうかっ！　トイレトイレ言ってるから、乙女発言をいつもより多めにしていますよ！

この瘴気、神官様は気付かれていないのかな？　それにしても、私はどう伝えればいいのでしょう？　領主様もいらっしゃるよね。だとすれば、領主様に報告差し上げた方がいいのかな。

――領主様！　空気がピンクに汚染されています！

そうでしょうとも。エロ彫刻の館ですから。あえてピンクに染め上げているオープンスケベだもんね。

――領主様！　空気がよどんでいます！　入れ替えましょうよ！

これはメイドさんたちに挑戦状を叩きつけることにならないでしょうか？　ちゃんと換気をしていないのか、という。で、ピンクが瘴気だとしたら、街に広がっていいのかって話だね。

――領主様！　気分が悪いので帰っていいですか！

これが私的には真実だしベストなんですが、ダメだろうなあ。帰りたいです。

それにしても、勇者様や神官様は気付いていないのかな？　瘴気が見えるんですか、って驚いてらっしゃったぐらいだから見えない？　あの時、ちゃんと聞いておけばよかった！　どちらにせよ、あのまま先に進んでいったら、さらに瘴気が濃いほうに行ってしまい

そうな予感がします。

でも、なんで建物の中に瘴気が溜まってるんでしょう？　瘴気って、溜まるものなのかな？　まだまだ分かりません。どこかに教科書でもないかなあ。『はじめて学ぶ、よくあるしょうき』とか！　誰か書いてほしいな。私、ちゃんと図書館で借りますから！　え、買わないのかって？　本なんて高級品、庶民の給料じゃ、手が届きません。

お枝様におすがりするとか？　勇者様に教えていただいた呪文は、微妙に覚えてる。

けれど、お枝様はわざわざ封印するほどの危険物だから、安易に開封しちゃったらダメっぽいし。

私単体じゃ、ただの役立たずの町民だな！

つくづく実感しました。身に、染み渡ります。

どうにか、ここに勇者様か神官様を呼ばなきゃならない。瘴気の件だったら神官様になるのかな？

ここ……女子トイレに。

汗がぶわっと吹き出た。

なんという難問ですか！！！

女子トイレに呼び出しって。

私の尊厳って、今、試されているんですか！　なんという……私、だんだん涙目になって来ましたよ。もうやだー、うわーん。

頭を抱えてうずくまる私。

そこに、控えめなノックの音が響き渡る。鎧さんその三だ。

「神子様……、お加減はいかがですか？」

私があまりにもトイレにこもっていたのを、気にしてくださった

ようです。
　これだ！　私は目の前に現われた、素晴らしい突破口にすがりつきました。
「あ、あの、あまり調子がよくないので……勇者様か、神官様をお呼びいただけますか？」
羞恥のあまり、声が震えました。鎧さんその三は、あわてた様子で、
「すぐ、お呼びしますね！」
とばたばたと走り去った。ちょっとだけ良心が痛む。嘘はついてないよ！　事実を婉曲（えんきょく）に言っただけだよ！

　少し冷静になって考えた。もしかして、あんな呼び出ししたら。
私、おなか壊して動けませんよレベルに勘違いされてしまう……？

　それに思い至り、トイレの床に膝をつきそうになった。なんてこったい。

　もう、乙女の尊厳はぼろぼろよ！　元々あったかどうかは、別として！

神子（仮）、つっこまれたくない

女子トイレに呼び出しとか！

やってしまった感が半端ないんですが、私にはどうしようもなく。とんでもない後悔がこみあげてきてなんだかとっても落ち着かないいいい！　もういやだあああ！

このほとばしる何かを押さえつけるために私は壁に張り付いた。恥ずかしさというか失敗したというか、なんだろうこの気持ち！

あ、ちなみにトイレから出て、廊下で待ってます。

でもベール完備。恥ずかしすぎるしね！

それにしてもこの広いお屋敷、人の気配がありません。エロ彫刻で、使用人に逃げられた？　有り得ますね！

廊下もかなり薄暗いです。トイレも使ってないぐらいのレベルで綺麗だった。

だから安心してこんな恥ずかしい格好でいろいろ堪えることができるんですよ！　ああ、壁のひんやり感に癒される……。このまま、壁になりたい。白塗りの壁と同化したい。

なんか、こう、いたたまれないよね……！

その衝動のままに、壁にごんと額を打ち付ける。ううう、落ち着け、他の人が来る前に。

がりがりと壁を掻いていると、恐る恐る声を掛けられました。

「み、神子様……？」

……あっ。

しばし、沈黙が流れる。私も動きを止めて、ごくりと喉を鳴らしました。

この静寂が痛い。

「ありがとうございます！」

あえて爽やかにくるりと振り向く。ベールで顔は見えないけど、明るい声と仕草で元気さをアピールした。私の勢いに飲まれたのか、鎧さんその三は、混乱のまま、突っ立っています。よーしよし、そのままでいいぞ。

動くなよ……じゃなくて、私の行動にツッコミをいれるなよ……。頼むから。しかし、その願いは意外な方向から砕かれました。

「壁がお好きなんですか？」

神官様、この状況はスルーしていただけるとありがたかったです。なんでここでツッコミですか。スルーすべきところでしょう！

居たたまれない雰囲気の中、神官様は診察を始めました。

「体調が悪いことに気付かなくて申し訳ありません。手、失礼しますね」

丁寧に謝る神官様は、私の手を取る。脈や熱を見ていらっしゃる様子。あ、大丈夫です、平熱です。

「本当に、大丈夫ですか……？」

このセリフが心に突き刺さる！！　大丈夫です、心も頭も。精神状態は……ぼろぼろだけど！　今しがたの出来事のせいでね！

でもそれよりも、伝えたいことがあってここに呼び出したんだ。当初の目的を思い出し、私は意を決して口を開いた。

「神官様、ここの空気、ピンクに見えるんですけど……」

神官様は真剣な顔をして考え込んだ。

「確かに彫刻は卑猥ですが……刺激が強すぎましたか？」
いや、違うって。通じてるの？　本当に通じてるのッ！
私の心のツッコミは、神官様に届いたのかどうなのか。神官様は私の持つぐるぐる巻きに布を巻かれたお枝様を指し、
「不安でしょうから、少しお守りを作りましょうか」
と仰った。枝を出せという仕草に、私は素直に差し出す。神官様は布の間から何かを引っ張り出した。小さな葉だ。あ、この程度では封印は弱まらないのか。ふーん、と眺めていたところ、それを勢い良くプチッて千切りました。え、それいいんですか！　お枝様から引っこ抜いていいんですか？

「手の甲を出してください」

大人しく手を出すと、ぼんやりしていたせいで左手の掌を出していた。
「甲です」
珍しく焦った口調の神官様が言いながら、私の手を取りくるりと手をひっくり返す。あ、すみませんね、とっさのうっかりが多いんです。
私の手の甲に、神官様は葉を置いた。そして新星語を呟く。
「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，
Ｈｎｓｈｔｓ，　Ｂｓｓｔｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｗ　Ｈｓｈｎ　Ｓｙｇ　ｈ，
　Ｂｔｓｒｋｇｋ　Ｈｋ　，　Ｔ　Ｓｈｋ　，　Ｊｄｊｙｋ，
Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」
すると、やわらかい光を放ちながら葉っぱが溶け、私の手の甲に葉っぱの刺青がうっすらと記されました。
ちょ、い、刺青反対ですよ！！　まだ裏家業の人間にはなっていませんよ！
私の焦りに神官様は気付いているのか、

「効力がなくなると消えますので、その時はまた仰ってくださいね」
とにっこり微笑まれた。あ、消えるんですね。良かった。ふーん、
と手の甲を眺めていると、ふと神官様の仕草が気になりました。指
先を擦り合わせている様子。
「指、どうかされましたか？」
神官様は苦笑して、
「いえ、やはり私もそれに触れるのはきついですね」
と仰る。え、先程、葉をつまんでいた指ですよね？　薄暗い明りで
も、赤くなっていることに気付く。元が白いからかなり目立ちます。
か、かぶれるんですか、この枝……？　危険物扱いなのを、ちょっ
と納得しましたよ。
　それにしても、左手の刺青っぽい模様がとても不思議です。思わ
ず擦ってみました。すると、手の皮が赤くなっただけだった！　へ
ー不思議。ふと顔を上げると、ピンクが薄まったような気がします。
　とりあえず、私が言ったことは通じていたのかな？
　それを聞こうと思ったのだけれど、神官様が口の前に指を当てて、
しずかに、と目線だけで訴えられました。了解です！　私空気読む
子！　そうですね、私たちの後ろには鎧さんその三がいたんだった。
なんとなく、お屋敷の人の前で、建物の悪口を言うのは気が引けま
す。
　このお屋敷、凄くピンクですね！　とか、彫刻、卑猥ですね！
とか。あ、でも神官様口に出してたよーな。ま、いっか。基本、私
も適当です。
「これで落ち着きましたか？」
神官様が私の手を取り、甲を撫でて確かめる。ふと、それに強烈な
視線を感じた。
　廊下の角で、鎧さんその三の向こうに光る目線を感じた。な、な
んですか！
　ちらちら見えるのはメイドさん……？　そのとき、私の地獄耳へ、
メイドさんたちの会話が飛び込んできた。

「ほら、神子様はやっぱり本命は神官様よ！」
「でも分からないわ！　勇者様との三つ巴の可能性も……」
「いや、もしかしたら、あえての大穴で、勇者様と神官様が」
「でもダークホースで領主様とか」
「ちょっと……それは」
「それは……ないでしょ」
「そうよねえ……きついわあ」
きーこーえーまーすーよーーー！
一部不穏な発言が聞こえた！　メイドさんは自重すべきですよ！
勝手にカップルにしないでください！
手を振り払いたいッ。勘違いは姫様だけでおなか一杯！　相変わらず私は勘違いラブファンタジーの渦中にいるようです。ただし、噂話の中だけでは。そんな華麗な生活は、今までの生涯においてあったことなどありません。
それ、ありえないから！　私の胸と同じぐらいないから……。ぐすん。
どう考えても神官様の仕草は医者の動きです。診察が終わり、あっさり手は離れました。
夢を見ないでください。あと、領主様という線は絶対にないから！　脂は……カンベンです！
こう、自分以外の噂はへー、と聞き流せるけれど、なまじ関わっているものだからげっそりします。神官様はあまり聞いていないのか、スルーされています。華麗ですね。
「……私もきちんと男に見られてたんですね」
スルーじゃなかった……聞こえてたようです。でも、食いつくとこがそこですか。よりにもよって、そのポイントですか。やっぱりずれているんだろうか。でも若干、嬉しそう？　この人も苦労してるんだな。ちょっとだけ親近感が沸きました。

それはそうと……いつからメイドさんたち、見てたんですか！

さ、さっきの私の壁に張り付いてたのは、見てないよね？　見てないといってくださいいい！

こ、怖くて聞けないッ！

「少し、おうかがいしたいことがあるのですが」

にっこりと話し始めたのは神官様。鎧さんの向こうにいるメイドさんたちに呼びかける。

「え、ええっ」

「どうしよう」

メイドさんは思いっきり動揺している。

ですよねー、私が同じ立場でも動揺するよ。だって、覗き見していた相手からの呼び出しだよ。

覗き見するメイドさんたちの姿に、貸本屋で読んだ『メイドは見た！』シリーズの小説を思い出した。あの主人公もこんな感じで覗き見していたんだろうか。それにしてもあの小説のメイドさん事件にあいすぎだと思う。

鎧さんもどうするか困惑しているみたい。鎧さんの顔は鎧で見えないんですけどね！　あ、今更ですが、この人たち全身鎧なんです。重くないのかな。

メイドさんたちはおずおずと出てきた。三人いる。

おだんごさん、みつあみさん、ポニーテールさんでした。髪の色は薄暗いせいでよくわからない。多分明るめの色じゃないのかな。

そして特筆すべきは三人とも、目がくりっとした可愛らしいタイプだったこと！　この屋敷ではアレですか、容姿ももしかして採用基

準ですか？　でもあの領主様だったらありうる。

「この最近、お屋敷で変わった事はありませんでしたか？」
神官様はにこやかに問いかける。直球勝負ですね。こんなこと聞いていいの？
　メイドさんは顔を見合わせて、話していいか悩んでいる。
「どうしてそのようなことを？」
逆に鎧さんが聞いてきた。
「こちらの領主様は、領民に慕われた気さくな方とお伺いしていました。この屋敷は、前からこうでしたか？」
　へー、丸いおじさんはいい領主様だったんだ。でも、エロ屋敷の領主様だよ！　慕われるの？　メイドさんたちはちらちら同僚を見ながらどうしよう、と小声で相談始めました。

「去年ぐらいから、領主様のご趣味が変わられたぐらいかな」
「えー、そうだったっけ？　もともとやらしー感じはしてたんじゃない？」
「でも、彫刻はさすがにアウトだと思うよ」
「いや、私はあの壁の絵のほうがやばいと思う」
「あの裸の彫刻、ほこり払うの本当に恥ずかしいし」
「え、あんた楽しんでたじゃないの」
「ちょ、ちょっと今言わないでよ！　そっちこそ、熱心に磨いてたじゃん」

　メイドさんたちは内緒話をはじめました。内緒話にしては音量が大きすぎる。まるっと聞こえてますよ！　あれ、そうするとエロ屋敷になったのは最近ですか？
　それにしてもメイドさんたちは自由だなあ。お城で働いている人たちだったら、答えてくれない感じの雰囲気を纏ってたのを思い出す。領主様が気さくな方だったというのも関係あるのかな。

それにしてもメイドさんたちの相談がドンドンずれていきます。
そんな女の子の話のとりとめのなさに、神官様は苦笑している。

「では、最近あの彫刻が増えたんですね」
ちょっと神官様がまとめに入りました！　メイドさんたちは真っ赤になりながら、ようやくおしゃべりを止めて、神官様に向き直る。
「お掃除大変なんです」
「埃すぐ溜まりますし」

それは思った。あんなにごちゃごちゃしてたら、掃除大変だよね。いっそ何もないほうがいいと思う。お城や神殿は『初めの状態を維持する星術』が掛かっているそうで、なかなか汚れないらしい。庶民にとって夢のような術じゃないか！　すごく便利そうだなあと思って、この間気軽に神官様にこの術のことを聞いたら、凄い長い説明がはじまった。一時間ぐらい説明してもらったのに断片的にしか覚えていない。ごめんなさい！　つまり、術を維持するにはお金が凄く掛かるそうだ。一般庶民には無理ですね。

「あと、お屋敷も色々改装されてたみたいですよ」
ぽろっとメイドさんが違う話題に移ろうとした。更に長くなりそう。私はお枝様を杖代わりにして、ちょっと体重をかけた。直立しているのも、足が疲れるんですよ！
　すると鎧さんが、
「そろそろ仕事に戻りなさい」
と言い出した。この人のほうが立場が上なのかな。
「えー、横暴ー」
「ひどーい」
メイドさんが口々に鎧さんに文句を言いますが、神官様はあっさりと話題を打ち切った。
「そうですね、ありがとうございました」

と、微笑を向ける。うお！　輝く笑みですよ！　私が以前、目がつぶれそうになったあれです！

メイドさんたちは思わず、きゃあ、と歓声を上げて真っ赤になりました。

「コラ！　お客様の前だぞ」

鎧さんがすかさず注意をすると、さすがにばつが悪かったのか、メイドさんたちは顔を見合わせた。でも、色々いまさらだと思うよ！

「失礼します」

メイドさんたちが綺麗な揃ったお辞儀をしてくれた。私は内心拍手を送りました。それぐらい綺麗に揃った礼でしたよ！　メイドさんたちはお仕事の続きに散っていった。素早い。メイドさんとか、御付の人とか、この人たちは素早くなければつとまならないんじゃないだろうか。

「ご迷惑をおかけしました」

生真面目に鎧さんが頭を下げられますが、そこまで気にしていません。

「大丈夫ですよ」

私が口を開く前に、神官様が仰った。

私を促して、鎧さんを先頭に歩き始める。

ううっ、ピンクの空気の中に戻っていくのか。ちょっと気が重いです。吸いたくない、けれど息は止められないしね！

「これは使えませんか？」

お枝様を少しだけ持ち上げて神官様にお伺いします。

「それは強すぎます」

神官様は首を振りながら却下。ですよねー。先程の神官様の指を見たら、私は何も言えなくなりました。そういえば耐性がどうとかっていってたしね。

「物事には、原因があり、結果があります」

唐突に話し始められた神官様を、思わず見上げます。隣に立つと、私よりこぶし二つぐらい神官様のほうが背が高い。

「起こっている事象そのものを解決したとしても、原因を断たねば意味がないのです」

主語がないと、とても小さな声なのは、たぶん鎧さんを気にしているせい。瘴気の話をするわけにはいけないのは私でも分かるよ！

瘴気は魔物の残骸。

街には瘴気は発生していなかった。

じゃあ、この屋敷はどうして瘴気が発生しているのか。

つまり、ここには魔物がいる可能性があるわけで。

「でもピンクは身体に悪いんじゃないんですか？」

あえて瘴気をピンクと呼ぶ！　通じるかな。

「私たちにはアレは見えません。もちろん、他の方々にも」

通じたらしい。

「ですが、術を使うわけにはいけません。あなたの仰るとおりならば、かなり大規模な術が必要です」

すぐには浄化は無理だということですね！　了解しました。でも、目に見えないけれど体に悪いものが漂ってる、それってとんでもなく怖くないですか？　あ、だからですね。いたずらに、瘴気がありますよーといっても駄目なのか。自分で見たもの以外信じないタイプの人もいるし。難しいなあ。

神子（仮）、会話に加わりたくない

結局、廊下で勇者様と領主様に合流しました。私を待ってくださっていた様子。

相変わらずのエロ彫刻の林ですよ。領主様、集めすぎです。そして、いい笑顔で美女像の太ももをなでないでください。

思わず大注目ですよ！　メイドさんたちはあの像を日々磨いているのか。

近づくと、お二人の話が聞こえました。

「私は断然巨乳派ですなあ」

私は領主様を敵認定いたしました。この丸め！！　そうだね確かにここにある像は巨乳ばかりだね！　でも、人間の度量って乳だけでは、量れないと思うのですよ。ふっ。私が言っても何もかも空しい。

ここの屋敷はコンプレックスをびしばし刺激しまくりやがります！　そこに正座しろおおおお！　そして謝れえええ！　全世界のお姉さんに謝れえええ！　思わず力いっぱいお枝様を握り締めました。手が力が入りすぎて真っ白になる。私の厳しい視線に、神官様が引き気味です。

「で、勇者様はどこに注目されますか？」

ニタリと笑った領主様の質問に、

「……どの女性も、別々に魅力をお持ちですよ」

勇者様は無難に返しました。勇者様はひとまず、敵ではないようです。神官様、なぜ私から距離を取るの。

「はっはっは、色男は違いますなあ。こりゃあかなわん」
なんて……なんて実のないトーク！　しかも落ちもない！　ツッコミどころも分からない！　勇者様はずっとあのトークに付き合っていたのか！　なのに疲労の色がないとは……！　やはり伊達に勇者を名乗っていないのですね！　この人、できるッ！　勇者様の社交スキルに改めて戦慄していたところ、神官様が私の体調が優れないということを伝えてくださいました。
体調よりも、心がすり減っていますけどね！　領主様のせいで。

とにかく、晩餐までの間、部屋で休めることになりました。ありがたいことです。地べたで寝ることに抵抗はないけれど、部屋の中で寝れるのは素直に嬉しい。湯浴みはいかがですか、と問われ、思わず頷きました。お風呂！　私のテンションは急上昇ですよ！　わーい久しぶりのお風呂！

といっても、私たちが臭いわけではありません。星原樹の選定のせいで、実は三大欲求がある程度制限され、身体から老廃物が出にくいのだとか。いつの間に人体改造されたんですか！　全然そんな感じなかったんだけど。お、おそろしい。
しかも、衣服も例の作られた当時の状態を維持する術がしこまれているらしい。一体一着幾らなの！　そのおかげで私たち臭くないですが。旅で臭くなるかと恐れていたけど、この点は嬉しい誤算です。神子になってよかった。いやまて！　おかしい！　神子になったから旅に引きずり出されているんじゃないのっ。危ない！　神子万歳とかいいそうになりましたよ！　領主様が神子になったら欲求が制限されていいんじゃないかな？　これは嫌味ですが。

通されたお部屋には、なんと個別にお風呂が付いているそうです。セレブめ！　風呂場にぐらい歩いていきなさい！
案内役の方に導かれたのは、三階の部屋だった。お隣同士で三部

屋。同じ部屋じゃないんですね。三部屋も凄いな。

おそるおそる踏み込んだ部屋の中には幸いというか、彫刻も絵画もなかった。安心する。思いのほか落ち着いた家具と色合いだった。私の借りていた家よりはるかに大きいですよ。私は溜息を付きながら、ソファーに座りふかふか具合を確かめる。お尻を適度な弾力が包み、跳ね返します。やわらかすぎず、硬すぎず、いい感じです！

これはいいソファーだ。撫でて確かめたけど、これは皮のソファーだった。居心地がいいため、ポーッとしてしまう。元々、この屋敷ってこんな感じだったとか。いやいやいや、それはないか。今の印象がきつすぎて、他の状態を思い浮かべれないのもあるけど。

案内役の方はさっさと持ち場に帰りました。私も知らない人といると緊張するから、かなりほっとした。

さて、動こう。

私がした事は、荷物整理よりもまず窓を開けること。やわらかいまどろむような午後の光が部屋に差し込みます。家具が日焼けするかもしれないけど、ちょっとの間だったら許容範囲だよね！　カーテンを風がそよそよと揺らします。あーやっと落ち着いた。

そしてやっとベールに手をかける。

髪の乱れを直しながら周囲を見ると、やっぱり端っこにピンクがちらちら見える。それがふわりと日光に当たると消えていく。なんでこんなにもピンクムードがあるんだろう？　お屋敷が魔物にのっとられている？　それにしては街の人には変わり無さそうだし。魔物って、そんなに賢い生き物だったっけ。魔物は動物に近い、って授業で習ったし。魔物と動物の違いは、屍骸にあるそうだ。動物は屍を残すのにたいし、魔物は瘴気となり星へ溶けていく。何か死んだら溶けるって、変だよね。まるでイキモノじゃないみたいだ。

神子（仮）、会話に加わりたくない（後書き）

最後付近修正しました。

神子（仮）、世間の裏は知りたくない

窓を開けて深呼吸。

胸いっぱいに新鮮な風を満喫する。すがすがしい空気を吸うだけで気持ちがすっきりする！　窓の外に花が咲いているのか、いい匂いがふんわり漂ってきます。ベールも地味に呼吸が圧迫されるから、あまり好んではつけたくはない。けれど背に腹は変えられません。切実です。

控えめなノックが響き、私はばさりとベールを被りなおしてから「はい」と答えた。ベール被るだけで神秘の神子へ変身完了です！　そういえば晩御飯どうしよう。部屋でいただけるのかな。顔は、かなり、出したく、ない！！！　でもご馳走は別ですよ。きちんといただく！　食べ逃したくないです。

私の返答にドアを開けたのは神官様と勇者様だった。メイドさんは付いてきていない。思わず壁や柱の影を見てしまいました。あの人たち、隠れるのが凄く上手そうだし。むむ、ベール越しだとあまり分かりません。廊下にピンクが見えるのはあえて気にしない！

神官様はいつも通り、勇者様は相変わらず無表情へ戻っている。さっきまでの笑顔はどこへ行った。笑顔を探す旅に出たくなるぐらい、見事に無表情です。たまには私たちにも笑顔の無料配布はありませんか？　笑顔が惜しいのか……？　いや、違う！　さっきまでで表情筋を使いすぎて、顔がお疲れなのかもしれませんね。顔面マッサージ、いたしましょうか？　華の姫様秘伝の、顔マッサージです。美容と健康にいいらしい。

同情的な目線でしみじみしながら勇者様を見ると、微妙に怪訝そうな顔をされた。視線、ベール越しでも気付くんですね！　見ていただけです、別に用ではありませんよ。

「先程の件で、失礼してもいいですか？」

どうぞどうぞ。私はお二人を招いてドアを閉めました。ソファーに誘導したその足で、窓をさらに全開！　カーテンも限界まで開きます。お二人が入ってきた時に纏わり付いていたピンクを日光消毒ですよ！　見事な溶けっぷりです。ああ気持ちいい。

そして、再びベールを取って確認する。うん、部屋の中は綺麗に消毒できたみたい。ベールは手近に畳んで置いておこう。いつメイドさんがくるか分からないしね！

私は部屋に設置されていたティーセットを取り、紅茶を入れ始める。さっきメイドさんにお湯を貰ったのだ。丁度喉も乾いていたし。

窓を開けまくっていた私の一連の行動を、不思議そうに見ていた勇者様が、

「あれの対策か？」

と仰る。伏字、了解しました！　瘴気とは口に出さない方がいいんですね！

「はい、さっき日光消毒しました！　この部屋でようやく安心して息が吸えます。どんどん吸っちゃって下さい！」

私は元気よく答えました。

すると神官様は、

「確かにこの部屋の空気は軽いですね」

と周囲を見回しながら納得した風に呟かれた。

どの部屋も日光消毒したらいいのに。

ついでにエロ彫刻もエロ絵画も、日光にさらして退色や磨耗させてしまえ！　そのほうが世界にとって平和です。特に私にとって平和になります。

紅茶の水色（すいしょく）が明るい紅に染まった。うむ、淹れ時である。カップに注ぐと、ふんわりと香気が部屋に広がった。

まず、私の隣の勇者様の目の前に紅茶を置く。

「どれぐらいの濃度で見えた？」

蒼い瞳が厳しい色を浮かべている。

確かに大問題だよね。神官様の前にもお茶を置き、自分のカップも持って座りました。光景を思い出してみる。

「あの廃墟の半分以下です」

その答えにお二人とも首を捻った。どうも、いまいちピンと来ない様子。

「あそこが濃すぎたのは、分かるんですがね」

私の喩えが悪いんですね！　分かりました。

何かないかなと部屋を見渡した私は、丁度いいものを発見する。

私は横に置いたベールを手に取った。

「あの廃墟は、これの四枚重ねぐらいでした」

私はベールを折りたたんでお二人に見せる。

向こう側が本当にわずかに見えるぐらい。腕ぐらいの距離だと大体のかたちしか判らない。本当にあの時はひどかった。ほとんど前が見えなかった。

「で、ここはこれぐらいです。二枚ぐらい」

ちなみに私の普段被っているのは二枚です。

うっすら向こうの色が分かる程度。視界は良好とはいえない。でも、先が見えないほどじゃない。

「……ここの街の景色はどれぐらいですか？」

神官様は深刻な声で質問を重ねる。

「ベール無しです。ピンクはこのエロ屋敷の中だけです」

私の即答に、勇者様が口を開いた。

「女の子がエロとか言わない」

内容とは全く関係がなかった。本当にたまにお父さんみたいですね！　私は頭をフル稼働させて言い換えました。

「……じゃあ、わいせつ屋敷」
勇者様が沈黙した。その反応はオッケー？　それともアウト？
「淫猥、わいせつ、卑猥、いやらしい、性愛表現が露骨。まあ、まだまだ様々な表現はあると思いますが、もうエロでいいんじゃないですか？」
神官様は時折ざっくばらん過ぎる。この人もどうなの。
「まあ、この屋敷の装飾に関してはさておき、濃度が問題ですね」
あ、話題を放棄した。ともかく、濃度が高いのが屋敷の中だけということは伝わったらしい。
私が思っていた以上に、かなり濃度が高く事態は深刻らしい。
神官様は顎に手を当てながら、
「領主殿は、良くも悪くも底の浅い方です。何か深い策謀があって魔物を使っているというタイプではない」
と、実も蓋もない分析をされました。この容赦ない言い方には、勇者様はつっこまないんですか？
「魔物に関しても、恐らく先代の置き土産か、もしくは誰かに利用されたか、それか知らずに魔物を屋敷に入れているかですね。先代は深い謀略に長けていた方らしかったと聞いてますし」
と苦く洩らされました。
「色々、調べていらっしゃるんですね」
私が感嘆しながら言うと、神官様は、
「本来身分が低い私が王侯貴族と渡り合うには、知識だけが身を守る武器ですから」
と苦笑された。
そうご自分を低めて仰ることでもないと思うな。知識だけでも凄いと思うし。でも、一体どこからそんな情報を得るんだか。私の頭では何も覚えられなかったよ！　どんな脳みそをしているんですか！　その記憶力を分けていただきたい！
私が微妙な表情をしていたのを、説明が飲み込めていないと思われたみたい。詳細説明が始まりました。

「先代については……たとえば、そうですね。この屋敷の周りに、とても高い壁があったでしょう？」

そうですね、かなり高い壁がありました！　お金掛かってるなあ、と見上げましたとも！

「先代は増税を重ね、それで得た資金で星都で暗躍したようです。その際、領民が反乱を起こし領主館を襲わないように堅牢な建物を作ったとか。噂かもしれないと思っていたんですが、実際に建物を見ると信憑性が出ました。この館は外からは攻めにくい構造になっています」

そ、そんなところから色々読み取られるのか。純粋に凄い！

「先代はかなりの守銭奴で、女は財産を食いつぶすと仰って結婚もしませんでした。貯めた財産を分与したくないのか後継者も決めてなかった」

心のメモ帳に書き記しますが、多分半分以上忘れそうです。

「先代はそのまま突然死しました。病死だったそうです。遺言も家族ものないため、所領は一度、星都預かりになったんです。その後領主不在も困るので星都側で血族より後継者を選出した。つまり、今の方がその選出された領主様になられるんですよ」

私の敵、あの丸い人ですね！　ただの贅肉、もとい、ゼイタク丸いおじさんじゃなかったのか。

選ばれたぐらいなので、一応人品に問題はなかったらしい。趣味には問題があると思うんだ！

「つまり、一応星都も調べて彼を領主にしているのです。そこまで問題はないと思うのですが……人も、変わりますからね」

神官様は溜息をつく。

「ともかく、情報が足りません」

勇者様も同意した。

「俺の剣も修理が先だな」

そういえば壊れたって仰ってた。廃墟から街までの道のりは、大掛かりな浄化をしたせいか魔物が全く出なかった。なので、勇者様

の剣は壊れたと聞いたがどんな風になっているか知らない。
「剣って、壊れるものなんですか？」
「良く壊れる」
私の疑いの眼差しに気付いたのか、勇者様は左に下げていた剣を鞘ごと抜き取り、ごとりと机の上に置いた。私は一度ちらりと見て、思わず二度見した。

えっと。
……剣って、柄が握りつぶされるような柔らかいものなんですか？

神子（仮）、見えないものは見えない

「見事につぶれていますね」

神官様、それは私でも見たら分かりますよ！

持ち手にあたる柄の部分が、ぎゅっと握りつぶされたパンみたいなことになっている。パンは握りつぶしたらいけないよ！　食べ物で遊んではいけません。

私はぐにゃぐにゃのそれを、恐る恐る指で突付いてみました。

冷たい！

硬い！

さてはこれは金属ですね。パンじゃない！

まあ、見たら分かるけど。……金属って、つぶれるものなんだあ。へー……って、さすがにお馬鹿の私でも分かりますよ、ちょっと普通じゃないって。

さては犯人は勇者様ですね！　勇者様の剣だから、あたりまえだけど。

「潰しちゃったんですか？」

私の問いかけに、勇者様は溜息と一緒にああ、と返事をくださいました。浮かない様子に見える。何でかな。

「力持ちですね」

凄いなあ。しげしげと剣を眺めながら、私はしみじみ呟きました。そりゃあ私を片手で持って走れるよ。体力ばかりか筋力も凄いんですね！

そして重要なことを思いつく。

「そうだ！　今度、ビンの蓋が開かないときは勇者様にお願いするので開けてくださいね！」

私のお願いに、何故か凄い微妙な空気が流れました。

え、何か間違えましたか？

おお、勇者様にビンを開けさせるとは何事かってやつですか？
でも、ビンの蓋は開かないと困りますよ。そのかつての困窮を私は訴えてみた。
「あれが開かないせいで、朝ごはんに何度ジャムが使えなかったことか……そしてその日一日が、どんなに憂鬱だったかっ。朝ぐらい、美味しいもの食べたいじゃないですか、なのに、ビンが開かないせいで一日憂鬱なんですよ！」
私はずっと一人暮らしで、食事もよく作っていた。パン屋のおばちゃんがまかないでパンをくれるんだけど、大体は味がなくて噛み応えがありすぎる黒パンなんだ。それにあうジャムを自作してちょっとした楽しみにしていた、だけど密閉するためにビンに入れたら、蓋がよく開かなくなってジャムを食べられない事態が何度も発生。そのたびに涙を呑んだね！　お湯であったためたらいいとかいうけれど、正直燃料もお湯も、もったいない！
私の力説に勇者様は幾分ぽかんとしている様子。
あ、珍しい表情ですね。ジャムの重要性はそこまでビックリすることだったかな。それとも私の食べ物への執着に引いちゃっていますか？　すみません、唯一の楽しみなんです。
勇者様の反応に困惑する私に、神官様が笑いながら、
「まあ、あなたらしいですね」
と仰いました。
最近大体のことが、これで片付けられている気がしないでもない！
私が首を捻ると、少しだけ笑いを引っ込めた神官様が、
「怖くないですか？」
と仰る。
主語を言って下さい主語を！　推理力がないのは自分が一番よく分かってるからっ。
「剣ですか？　確かに斬られたら痛いと思いますけど」
あ、言わないけど勇者様が無表情に変わる瞬間も怖いです。私的に

ホラーだと思いますよ！
神官様を見ると、呆れと笑いが混じった表情です。呆れないで！
解説して！
「こんな風に剣を潰す俺の異常さが怖くないか？」
勇者様が長い言葉を喋った！　それにビックリして動きを止めてしまいました。

沈黙が流れる。
えーと、いや、問いが想定外だったことにも驚いていますよ！

これは真面目な問いだ。
緊張感に喉が渇く。
私は頭を絞りつつ考える。どうせ言葉を飾ることも出来ないから、そのまま言うしかない。

「怖くないです」

これはちゃんと言わなければいけないことだって思う。
だからちゃんと目を見て真っ直ぐ言いました！　正面から見た勇者様の威圧感は、相変わらず半端ないけどっ。
「私を抱え上げる時はちゃんと痛くないようにしてくださってましたし、なによりも、この力で私が叩かれたこともないですし」
部屋の隅に立てかけたお枝様を見る。
あの枝も危険だ危険だと皆さん仰るけど、全く私には実感が沸かない。
多分それと似たようなものかもしれない。傷つけられたことがないから、実感がない。うがった考えをすると、自分に危険がないから、怖くないのかな。そこまでいったら、ちょっとひねくれすぎな思考かも。

たとえば、目の前に凄く怖い猛獣がいる。今は大人しくしているけれども、いつ不意を付かれてがぶりと食べられちゃうかもしれない。猛獣がなにを考えているか全く分からないし、理解できないから。

もし勇者様に恐怖を感じるとしたら、そんな怖さだろう。想像はつきます。乙女の想像力をなめてはいけませんよ！

でも実際、勇者様はそこまで怖くない。たまに突拍子もない行動をとりますけどね！

この人は人を傷つける理不尽な事はしないだろうって、そのあたりは信頼している。拉致されたばかりの頃は意味が分からなかったけれど、最近は対応がやわらかくなってきた気がするし。でもなんで初めいきなり拉致されたんだ。今更不思議に思ってきた。それの疑問は取り合えず横においておいて。

私は考えながら、言葉を継ぎ足した。

「それよりも、街を出てからずっと見るもの全部が新しいから、なにがおかしくてなにが普通なのかさっぱり分かりませんよ！　それに関しても、あー、力持ちなんだー、ぐらいの感想しか浮かびません」

答えながら、変な問いだなって思う。何で勇者様が自分が怖いか、とかなんて話になるの？　なにかにひっかかる。すっきりしない！

上手くいえないもどかしさとは別の違和感。それを探して、勇者様の青い瞳を正面から見詰めた。睨めっこ勝負ですよ！

「……そうか」

いつもと同じような言葉だけど、少しだけやわらかい響きが混じっていたと思う。勇者様は私から目を逸らして横を向いた。

目を逸らしたな！

む、この睨めっこは私の勝ちですね。戦いはいつも空しい。

ふと気がつけば、神官様はマイペースにお茶を飲んでいる。いつ

の間に話題を振るだけふって離脱してたの！
　真剣な話をしたら確かに喉が渇きますよね！　丁度よい温度になったお茶をぐいっとあおる。いいお茶だ！　鼻に抜けていく甘い香気が、舌に広がり果実のみずみずしい味をかもし出している。お茶独特のちょっとした渋みがアクセントをそえて、大人の味を演出していますね！　さすが領主様の館！
「いい飲みっぷりですね」
私の空っぽになったカップに、神官様がポットに残っていたお茶を注いでくださる。
　ここは酒場ですか！　美人のお酌はいいねぇとか、親父っぽく言うべき？　もう一杯、ぐいっといっとく？
　ポットを置きながら神官様は真剣な表情になる。
「こんな話をしたのは、今後戦闘が行われる可能性が強いためです」
おっと、まさかの真面目な話の続きですよ！　背筋を伸ばしました。
「今までうすうす感じていらっしゃると思いますが、勇者の能力は尋常ではありません。あの力は、あなたに向けられることはありません。それを知っていただきたかった」

　私はその瞬間閃いた。

　わかった！　さっき引っかかっていた違和感。
　勇者様はいつも人を助けているのに、どうして自分が怖いかなんていうのか。
　まるで、今までひとに怖がられたことがあるみたい。
　私が怯えることが当然みたいな話の流れに、違和感があったんだ。
　……変なの。もやもやをごまかすために、私はもう一杯お茶をあおった。
「神官様、おかわり！」
「のみすぎですよ」
　神官様は苦笑をしながらお茶を注いでくださいました。お茶は美

味しいけれど、もやもやっとした気持ちは、なかなか消えなかった。

お、お茶の飲みすぎじゃ、ないんだからね！

神子（仮）、それは剣とは認めない

美味しいお茶といっても、飲むのには限界がありますよね！
そんな基本的なことをすっかり忘れていた、私を指差して笑えばいいよ！　今、喉までお茶が一杯です。やり過ぎた。明らかにやり過ぎた！

私がお茶のせいでいささかグロッキーになっていると、神官様が「さて、」と呟きながらポットを置き、剣を手に取った。すらりと引き抜けば、ぼろぼろになった刃が見える。柄がぐちゃぐちゃなだけじゃないんですね！　刃にひびが入り、所々欠けているのが分かる。ぴかぴかの剣じゃなくて、うっすらとした曇りが使い込まれた雰囲気をかもし出してる。こんなにぼろぼろだったら、鍛冶屋のおじさん泣いちゃいますよ！

その刀身をひとしきり眺めて、神官様はテーブルに剣を戻しました。

そしてとてもイイ笑顔で勇者様に問いかけた。

「で。どうしてこの剣はここまでつぶれたんですか？」

にっこりと笑いかける神官様の笑顔に、一部の隙もありません。目が獲物を狙う肉食獣みたいに鋭いですよ！　つまり怖い。

私は椅子ごと思わずドン引きました。床にイスが磨れて音がしたけど、お二人ともこちらを見ません。睨めっこの最中です。私に構っている場合じゃないんですね。分かりました、大人しくしています！

神官様はさらに質問を重ねます。柔らかい口調が、逆に恐怖をあおります。

「戦闘の時はつぶれていませんでしたよね？　なにがあったか私は聞いていないのですが」

爽やかなのに、黒い。

相反する二つが入り混じった時、こんなに怖いものとは思いませんでしたあああああ！　正直パン屋のおかみさんが怒ったのより怖い！　逃げられない！

あ、勇者様が目を逸らした。なんだかこういうところを見ると、このひとも怖いものがあるんだなって思います。ちょっぴり親近感沸いて和んだ。こんな状況ですがね！

戦闘の時っていったら、ピンク発生前ですよね。じゃあ、私を迎えに行って、帰ってくる間に何かあったのか、それともこの街に来るまでの間になにかあったのか。実際に勇者様の戦闘を見た覚えが全くないので、けんがどうなっていたか分かりませんでした。

神官様が拳でテーブルを叩きました。

さほど強くなかったようで、それほど食器は揺れません。さすが気遣い王です。こんなところにも自制が効いてるんですね！　でも、テーブルを叩くのは私もビクッとするよ！

「情報の共有の重要性はいつも話してたと思うが、相変わらずその黙り込む癖を止めろと言ってるんだ。幾ら繰り返しても忘れるなら、手にでも書いとけ！」

えっ、……誰？

私の目が点になったのも、仕方ないことだと思いませんか！

神官様の言葉遣いがかなり乱れていらっしゃいます。あわわわわ。丁寧語がすっ飛ばされてますよ！　初めて聞いたけど、それだけにお怒りが分かりますねっ。つっこみたいけどつっこめないこの空気

よ。
　この、誰かが怒られているという空気がなんとも苦手。がたがた震えそうになります。しばらく沈黙が降りてくる。
　勇者様は僅かに沈黙した後に、ようやく、
「悪かった」
と一言だけ零しました。
　神官様は怒りを抑えるためか、ぐりぐりとこめかみをもんでいます。
　私は口を挟んでいいんでしょうかっ。
　そもそもここにいていいんでしょうかっ。出来ることなら部屋のすみっこにいますよ！
　神官様の仕草を見ながら勇者様は、
「……あとで話す」
とだけ付け加えられました。神官様はひとまずそれで納得することにしたようです。
「わかりました」
と溜息混じりに仰います。そして、まだ苦い表情のまま、私に向かい、
「取り乱して申し訳ありません」
と仰った。
　忘れられてはなかったんですね私！　私は硬直したままぶんぶん頭を振ります。いいえいいえ、ダジョウブデスヨ。この人も怒らせてはならないと、私も手に書いておきます！
「そもそも勇者は勝手に何でも抱え込む性質がありますので、何かがあってもこちらから問いただされない限り口を開きません。注意してくださいね」
私が感心して頷いていると、勇者様はまた目線をずらしました。気まずさですね！　だんだん私も分かってきました。やっと緩んだ空気に、私は話題を強引にさらいました。

「お二人は、いつから一緒に旅をされているんですか？」
二人とも不思議そうに私を見ます。
「あれ、お話してませんでしたか？」
と神官様。言葉遣いがいつも通りに戻っています。話題を変える作戦は成功したようです！

少し落ち着いた神官様は、苦笑いしながらお話してくださいました。

「勇者と私は、同じ村で育った幼馴染です。私が勉強のために星都へ行くまでは大体一緒に行動していました」

それで無言の勇者様相手に意思疎通ができているんですね！　納得しました。

「先程は……今まで数年にわたって言い続けていたことをまた忘れられて、つい頭に血が昇ってしまいました」

ああ、唐突にお怒りになったんじゃなくて、今までの地味な蓄積だったのか。納得。怒りっぽなしも体に悪いけど、たまには抜かなきゃですよね。少しずつ蓄積していくストレスの方が爆発した時の威力は強いし！　これは勇者様が悪いな、と勝手に知らないのに決め付けてみる。

勇者様は聞いてないフリをしてお茶を飲んでいます。

まあ、自分の話で盛り上がられたら、強引に入るか知らんフリをするしかないと私も思いましたけどね。お城でよくその気持ちを味わいましたッ！　私を話題にしても何もでないよ！

神官様のお話に納得しつつ、勇者様をしげしげと見て、今まで気にしなかったあることに気付いた。多分、さっき驚いて後ろに下がったせいで、イスがずれたから見えるようになったのだと思う。

勇者様はテーブルに上げている物のほかに、もう一本剣を下げている。ああそういえばそうだった。

「あれ？　勇者様は、剣を二本お持ちなんですよね？」

修理しなくちゃ大変だな、と思っていたけれど、そういやもう一本あるならいいんじゃないかな！　安易ですか？

私が何の話をしているか、すぐに分かったらしい。勇者様は腰からそっちの剣を鞘ごと抜き、私に差し出してきました。また重かっ

たらいやだなあと構えながら受け取れば、思った以上に軽くて驚いた。

飾り気のない、けれど壮麗な紋章と不思議な文字が刻み込まれた柄、無骨な鞘。もちろんこっちの柄は無事ですよ。

「それは普通に抜けませんよ」

神官様が仰います。これだけ軽いんだったら、私でも剣が使えそうな気がしてくる！　気の迷いだと思うけどね！

へー、コツがあるのかな？　と何気なく鞘を握り、柄を持って引っ張ってみた。

きゅぽん。

とんでもない軽い音をさせて、剣は抜けました。

っえええええええ！！！

剣、抜けましたよ！　抜けましたが！！　ジャムの蓋より軽かった！　なんですと！

しかも、刃が……無いです。鞘のほうを思わずさかさまにして振ってみました。出てきません。これ、柄だけだよ！　不良品だよ！

何で勇者様これ持ち歩いているの？　物持ちがいいだけ？　それとも……まさか、私が壊したんじゃないよねっ。

「さすが神子ですね。抜くことは出来ましたか」

動揺のあまり、がくがく震えながら目線を上げました。

「こ、こ、こ、こ、」

私の動揺っぷりに、神官様が落ち着いてとまたお茶を入れてくださる。ガッ！　とカップを雄雄しく掴み、ぐいっと一気飲みした！

さっき喉までお茶で一杯だったけどね！

「壊れましたああ！」

頭を抱えながら叫ぶ私に、勇者様は若干引きながら、
「元々、刃は無い」
と仰いました。なんですと？
「折れない剣の話を聞いたことがありますか？」
「えっと、始原（しろ）の勇者様が作られた聖剣の話ですよね？」
心と魂が折れない限り、その剣は折れる事はない。
星神殿の奥で神代からひっそりと立ち尽くす、神の一振り。色々華麗な伝説がある代物らしいけれど、噂と伝説でしかないものです。というか、鋼がそんな昔から保存できるのか、っていう謎もあるけどね！
あ、このパターン、読めてきた！　フフフ、超町民を体得した私は、もう驚かないよ！
「これがその聖剣です」
ですよねー。この話の流れからいうと、そうですよねー。あっ、私聖剣に指紋つけた！　いい記念です。
でも、何でわざわざこの剣と別に、普通の剣を持ってるんだろう？　幾ら体力セレブだといっても、邪魔じゃないかな？　折れない剣があるなら、使えばいいのに。
「これも万能ではないということらしいですよ」
神官様が仕草で剣を戻してと仰るので、ぎゅっと柄を鞘に押し込んでみた。これでちゃんとしまえたよねっ。引っ張って確かめる。
よーしよしよし、ちゃんと締まって……きゅぽん。あっ。思ったより簡単に抜けました。それを三度ぐらい繰り返した私。ちょっと二人の視線が生温くなりました！　そんな目で見ないでください。
見かねた勇者様が手を伸ばしてひょいと剣を取り上げた。かちり

ときちんと鞘にしまった様子。初めからお願いすればよかったね！

はっはっは。はう。どれだけ不器用なの。

「これは……使うと体力やら色々奪うからな。鞘から抜けても、発動するためには剣と契約が必要になる」

まあ、私には関係の無い話ですけれどね！

◆兵士E、狂気への融解（前書き）

※　シリアス、残酷表現、ドロドロ、ホラーがあります。
動物っぽいものに対する、残酷な表現があります！
苦手なかたは即退避してください。

◆兵士E、狂気への融解

オレは正直イラついていた。手に提げた桶の重みすらオレの神経を逆なでる。乱暴に歩けば歩くほど桶の中の水が跳ね上がり、さらにオレの感情を針で刺すようにちくちくと刺激しまくる。

クソ、何で俺がこんな仕事を。あいつの仕事だろ！

朝から先輩には怒鳴られる上、今日も面倒な仕事を押し付けられた。水汲みなんてやってられるか！　桶の中身を樽に移し、苛立ちのままに桶を投げた。

けたたましい音を立て、それは壁に跳ねかえり、檻に当たる。

檻の中にいる気持ち悪いひよこのようなイキモノが、ギャアギャア騒ぎ立てやがる。全身がウロコに覆われた鳥のようなイキモノだ。ひよこの興奮は納まらない。それがまた俺の怒りをあおった。それらが入っている檻を苛立ち紛れに蹴飛ばす。鋼が鈍い音を立てるが、それ以上に自分の足も痛い。檻にまで笑われているようで、全くいい気がしなかった。

この屋敷で働き始めて四年になる。

もともと商家の次男坊だったオレは、正直言ってやっかいものだった。

優秀な長男が跡を継ぐからお前は自由にしろ、時期が来たら出て行け。常々率直に言い渡されていたのは、優しさだったのだろうか。オレには未だに分からない。すがりつくような気持ちで星神殿の神官による才能検査を受けたが、見事に空振りだった。神殿に納めた

お布施が途端にもったいなく思えたのは仕方がないだろう。何も持たないオレはなりふり構っていられなかった。あらゆるところに頼みこみ、実家の伝手を使い、何とかこの屋敷にもぐりこんだのだ。

毎日ぼろぼろになりながら訓練をこなし、一年経った頃、鎧を与えられた。重いそれは責任が鋼の形をしたものだった。この時点から、正式に領主様の私兵と認められるのだ。だが、鎧を貰ったといっても取り立てて変わる事は無い。訓練と仕事の繰り返し。同僚と仲良くなるつもりは無い。オレは淡々と予定を消化していた。

そんな日々に、少しだけ変化が訪れた。

鎧の兵士さんって、誰が誰だか分からないわ。

とあるメイドにいつも言われる。彼女はオレによく話しかけてくれた。取り立てて美人ではないが、笑った顔が可愛らしかった。彼女は俺を見るたびに笑って挨拶してくれる。まさかオレに気があるのかと思っていたが、ある日先輩と街で腕を組んでいる光景を見てしまった。つまり、恋人の後輩を気にかけていただけだったわけだ。オレがうぬぼれて勝手に舞い上がっただけだった。

オレはそれで彼女のことを諦めたつもりだったが、だが、言い知れぬ怒りのような感情が常に胸の中にくすぶっている。彼女への感情を、先輩は察していたらしい。手を出すなと釘を刺され、地味に嫌がらせをされる日々が続いている。

もういやだ。ここを出て行きたい。でも、オレが悪いわけじゃないだろ！　何でオレが出て行かなければいけない？　罰を受けるならあいつらだろう。何かを壊したい。めちゃくちゃにしてしまって、高笑いをしてみたい。ああそうだ、先輩の顔をボコボコにして、彼

女をオレのものにするんだ。いうことを聞かなければ、力づくでも従わせればいい。オレをバカにした罰だ。それぐらい、神も許す！
正当な報復なのだから。

オレの背後で、まだけたたましくひよこどもが喚いてやがる。

「絞め殺すぞおまえら！」

ひよこに吠えてみたが、一向に静まらない。
クソ、ひよこまでもバカにしやがって！
ガンガン檻を蹴ると、怯えたのかひよこどもが奥に固まった。それを見て、俺の心がざわめいた。いいことを思いついた。

どうせこいつらは餌なのだ。その餌やりを今したところで文句は出ないだろう。俺は自分の口元が歪むのを感じた。横においてある網でひよこもどきを一羽救い上げる。今からの運命を気付いていないのか、ひよこはいまだにオレを馬鹿にしたように騒ぎ立てやがる。がたがたと網が揺れるが、オレは離す気は無い。そのまま、隣のさらに大きな檻の中に投げ入れた。

低い唸り声を上げ、その中の獣がのっそりと立ち上がる。鋭く黄色い歯は、大人の男の指よりも太く強い。どんな肉でも引き裂くだろう。灰色の剛毛は僅かに青みがかっている。狼型の珍しいイキモノだそうだ。ただし、でかい。陸馬なみの体格をし、それでいて動きは俊敏である。先代の領主がペットとして手に入れたとかとにかく珍しい種類だそうだ。俺は正直こいつは好きではない。すぐに歯を剥き、世話をしてやっているのに懐かない恩知らずだからだ。

だが、今、この瞬間だけはこいつが好きになれそうだった。
さあ、餌だ。食っちまえ。

長い黄色の舌をだらりと出しながら、のっそりと立ち上がる。ひよこは一羽、けたたましく騒ぎながら檻の端に逃げた。しかし、檻の隙間は開いているようで開いていない。星術が掛かった檻だとか。

ひよこは死に物狂いで暴れるが、あいつはゆっくりと獲物を観察するのだ。そして、唾液まみれの長い舌で巻き取り……。

ひよこの断末魔が響いた。

オレはその光景を笑いながら見ていた。実にいい。気分がすっきりする。一瞬、獣の口から何かが溢れたような気がしたが、見間違いだと思う。こんな暗いところ、しかも使用人しかいないところに置く蝋燭はないのだ。

「ほらよ、まだまだこいつらはいるぜ」

俺は笑いながらひよこを獣の檻に入れる。獣は噛み付いたり、引っかいたり、押しつぶしたりとひよこをいたぶるメニューをバラエティに富ませようとご執心のようだ。それにしても、獣の癖にうまいことをやる。一羽もこいつは逃さなかった。餌といっても、食い散らかすのではない。あくまでいたぶり、愉しむのだ。

初めの頃は残酷すぎて受け付けなかったこの光景も、今は好ましいものだ。なぜ、昔こいつのことを嫌っていたのか、思い出せない。

「フヘヘッヘ、お前は最高だ」

獣の檻を撫でる。こいつは偏食がひどい。

様々な動物や獣の肉を与えたが、特に食することが無かった。商人どもがどこからか見つけてきたこの気味の悪いひよこを与えるようになってから、いたぶってから食べているようだ。ひよこをあれだけいたぶるなら、血が流れそうなものだが、いつも綺麗になくなっている。食っているんだろう。こいつがすみずみまでねぶるほど

ひよこが好物に違いない。食べかすも排泄物も散らかさない、いい獣だ。まさにペットとして理想的ではないだろうか。

「そうだ、お前の世話をしているのはオレだ。オレが飼い主だろう」

オレは素晴らしい思い付きをする。こいつを連れて行けば、先輩など一ひねりだ。面倒な上司、オレを馬鹿にしたメイドも、ひよこのようになるに違いない。俺はその妄想を浮かべ、うっとりとする。素晴らしい光景ではないだろうか。それは、この檻をあければ実現するのだ。手軽に実現する妄想に、オレは興奮した。

「ここから出してやる、そして、オレに楽しいものを見せてくれ！」

オレは腹の底からわいてきた笑いの衝動そのままに笑い転げながら、腰の鍵束に手を伸ばし、躊躇いなくこいつの檻を開けた。オレが檻をあけるのをじっとあいつは見ていた。よしよし、分かってるじゃねえか。

オレは表情を緩めながら扉を全開にする。あいつは、嬉しさにはじけるように、オレに甘えて飛び掛ってきた――。

◆【1／Ｓｈｒ】、結果の観察（前書き）

※流血、残酷な表現があります。

◆【1／Shr】、結果の観察

血が散る室内に、フードの人物は立っていた。

獣の牙、爪の跡は石の壁、人間の体を問わず刻み込まれている。先程立ち去った狼型の魔物の力を示していた。異様な室内である。

しかし、そんな異様な場所にもうろたえることなく、怒りも悲哀も無くただ観察者の眼差しだけを持ちながら、彼は立っている。

彼の足元には、獣に引き裂かれた哀れな男が唸い続けていた。この屋敷の兵士である。鎧は彼の命を守るのには役に立たなかった。明らかに命の炎は消えかかっている。その流れる血をとめることも治療もフードの男はしない。ただ、観察するだけだ。

「瘴気に狂ったか」

足元の男は、明らかに瘴気に犯されていた。

瘴気酔いの症状は、以下の通りに上げられる。

判断力の欠如。痛覚の麻痺。そしてもっとも恐ろしいのは人の心において外してはいけないたがを溶解してしまう作用。人が獣になる。――むしろ、魔物になる、というべきか。

身体をずたずたにされながら、うつろに唸う男を見下ろしながら彼はひとりごちる。

「思ったよりも、侵食が深いな」

考えを廻らせる。

ふと彼が気がつけば、いつの間にか部屋は静寂に満ちていた。

既に男は沈黙していた、永遠に。見開いたままであった瞳を指で閉じてやる。狭量ではない、それぐらいは彼とて行う。男はどちら

にせよ、間に合わなかった。瘴気による魂の融解が進みすぎていた。既に男の命は無く、魂は循環の旅に消えていった。あのまま生きるより、そのほうが幸いであるだろう。死という神の祝福に抱かれるほうが。

ギャア、と一羽だけ残っていたひよこが騒いだ。その方向へ振り向かぬままに術を投擲する。

「Ｈｒ（はり）」

白く輝く針に貫かれ、ひよこは沈黙し、靄（もや）となって消え去った。

「魔物の餌に魔物を与えていたか」

異様なひよこもどきは、正しく魔物であった。魔物は死ねば瘴気になるのみだ。肉は残らない。

恐らく誰も気付かなかったに違いない。狼型のあれは、殺すのに愉悦を覚えていても食うことに喜びをえていたのではなかったということに。

魔物の主食は人間だ。それ以外にはない。そう決められているのだから。

これだけ瘴気が蓄積すればたやすく人は狂う。先程の魔物は瘴気を取り込み人を食い、普通とは違う変化を遂げているのだろう。

「さて、どうするのかな深蒼（あお）は」

死の沈黙が包み込む室内に寂寥を伴い響く。彼はマントを翻すと、空気に溶けるように消えた。

神子（仮）、五里霧中はやめてほしい

勇者様達は色々調べてみるとのことで、私の部屋から帰っていきました。

結局のところ、お二人は変な感じは受けていないそうです。でも、私が主張するピンクについてはあっさり信じてくれた。出所をまず探らなければ、との神官様の言葉を思い出します。どっから出てるんだろう。あんなピンクが噴出しているところがあったら、近寄りたくないです。いかがわしいお店とかだったら演出でありそうですけど！　ピンクの霧で効果的な演出です。怪しいムード大盛り上がり！　そういったえっちなお店は領主様が詳しそうですがね！　偏見じゃないよ！　さっきなんか勇者様に一生懸命お話していた！　耳に入ってきたから仕方ないよねっ！　勇者様も神官様もスルーしていたけど、興味はあるんだろうか。今度聞いてみよう。

部屋を出るとしたら、ピンクの中を突っ切ることになるんだよね。左手に貰ったお守りはまだうっすらと形を残しています。さっき試しにピンクの霧の近くに行ってみたら、霧が私を避けた。お守りの効力凄すぎです！　さすが神官様！　しばらく楽しいので霧に手を伸ばして避けられるを繰り返してた。ちょっと楽しかった。で、我に返って頭を抱えました。なにしてるの私。

お風呂どうしようかなあとか考えながら、ベッドに寝転んでみる。お風呂はいってないけど、ベッドカバーの上だったらいいかなと思って、普通に寝る方向じゃなくて横から仰向けにごろごろ。金糸とかの刺繍がごわごわしているけど、それを差し引いても素晴らしいベッドですよ！

なんだこのベッド！　広すぎるじゃないか！　私が三人寝ても大

丈夫だよ！

一般庶民用のより縦も横も二倍あります。ふかふかだしね！　丁度いいマットレスの具合だ。

ふかふかに包まれたまま、先程の話を思い出してみる。

幼馴染かあ、いいですよね！　なんか、こう気心知れてる感じが！　お怒り神官様は丁寧語じゃなかった。神官様が何で丁寧な言葉を話してるのか聞いてみたら、都会ではいろいろあるんですよって笑顔で言ってた。色々ってなに！　濁された部分が怖いです。

どんな村でお二人が生活していたのか気になります。あんなキラキラした感じの人がいる村ってどんなんだ。どう見ても職業村人にはなりそうにありません！　町民みたいに地味に生きていくには、キラキラは不要だからね！

それにしても幼馴染かあ。どんな感じなんだろう？　私には幼馴染っていないから分からない。

私って小さい頃なにして遊んだっけ。

友達いたっけ？

つらつら考えても思い出せない。えっ、そろそろボケがはじまったのかあああ！　友達とかいたっけ？　あれ……、本格的に記憶喪失な気がしてきましたよ！　そのうち思い出すかなあ。忘れっぽさには自信があります！　友達いない人だったっけ！　うわ！　寂しい人生です……。

あー……眠い。

このまま寝ちゃって大丈夫なんだろうか。またなにか用事があるかな。領主様と一緒にごはんとか言われたら、生ぬるい笑顔で断りそうだ。ストレス的な問題で！

ピンクに気が張っていたのか、今は反動でぼんやりしている。たぶん瞼を閉じたらそのままウトウトしちゃうはず。

あー……お茶でおなかがだっぷだっぷですよ！　まだ治まりません。

絶対、腹回りの大きさが増えているに違いない……。後でトイレ行きたくなったりして。さっきはとっさにあの場所を離れたい一心でトイレの話題を出したけど、本当は行かなかったし。またトイレ行きたいですと言い出したら、私どれだけ我慢できない子だと思われるのか！！　今更思い出したけど、勇者様は私がトイレに行ったと思い込んでいるのかな！　いやあああ！

ひとしきりもだえながらゴロゴロとベッドを転がりまくります。

いやあ、ベッドが広いって、いいですよね！

転がりすぎて息が上がった！

全力投球ですよ！

窓からいい風が吹き込んできます。

ほんとに眠い……。

うと、と瞼が落ちかけた瞬間、遠いところで人の声が聞こえた。

……なんだろう？　悲鳴に聞こえたけど。

そちらに意識を向けた瞬間、ぞわっとトリハダが立ちました。

駆け抜けた感覚に、反射的に跳ね起きた。

振り返った先にある扉、その隙間から大量のピンクの霧が漏れだしてきている！　うわあああ！　増えてる！　どう見ても増えてる！

私はそのまま扉に駆け寄り、開きました。

前が、見えない。廊下はピンクの霧で埋まっていた。

うわあああ！　何があったんですか！　トリハダが治まりません！

あの廃墟で見たぐらい濃いピンクになっちゃってるんですけど！！

そして、私にとって見えない霧の先から、明らかに悲鳴と思われる声が届いた。

な、なにが起こってるの？

いただいたお守りのおかげで私から腕一本分ぐらいはピンクの霧は近寄ってこない。でもそれだけ。充満しているせいで、廊下の視界はさっぱりだよ！

ばたばたと人が走り回る気配、悲鳴、怒号。

明らかに何か異常なことが起こっているのに、私には分からない。

立ち尽くす私に、知った声が掛けられた。

「部屋に入ってろ。危険だ」

勇者様だ。

「何があったんですか！」

私の声は震えていた。だって、これは明らかにおかしい。

「魔物が出た」

勇者様の答えは簡潔だ。簡潔すぎて、私の理解が一瞬遅れる。え、ここ屋敷の中ですよ！

否定する言葉を発したものの、自分の中から答えが返ってくる。

瘴気は魔物の残りかすだとしたら、魔物がいるのは当たり前。それが原因なのだから。

部屋に入ろう、と足を返した瞬間、

「動くな！」

という勇者様の鋭い声が私に突き刺さった。その声に縫いとめられるように、私は思わず立ち止まる。相変わらず廊下も、姿も見えない。生臭い風が前から流れてくる。

鉄さびの臭いがする。

ピンク色の霧の向こうで、獣の唸り声と激しい戦闘音がした。私には見えないから動くことが出来ない。動くな、という指示に従うしかない。

「グルルルル」

怒った犬のような声がする。ただし、その大きさは犬とは大違いに音量が凄い。ガン！　と鋭い音の後、勇者様の息を飲む音が聞こえた。

私が開けた扉の方へ、ピンクの霧が僅かに流れている。そのおかげで、少しだけ霧が薄まり、見える部分が広がった。

けど、それはいいことじゃなかった。

「ギャウウウウウ！」

血走った目、異常な黄色い舌、鋭い歯を持つ人間よりも巨大な狼が、私の目の前に踊りだしてきた。

み、見えないなら最後まで見えなかったほうがよかったんじゃないですかああ！！

食べられる！

鋭い犬歯をむき出しにしながら私に飛び掛ってきた魔物は、何故か私をスルーして後ろに着地しました。

魔物の動きのせいか扉の方に空気が流れた。二十歩ぐらいの距離はうっすら見える程度にピンクの靄が薄れました。

視界が良好になったのはいいけれど、魔物が目の前にいるのはいただけない！

魔物は私を眼中に入れていない様子。

え、なんで？　助かったのか、なんなのか、分からない！

喉が引きつって声も出ない。

じわじわと背中に死を感じる。

背筋が強張って動けない。

汗が背中を垂れるのが分かるけど、どうしようもできない。

魔物はまるで私がいないように、もう一度後ろ足のばねで再び飛び上がろうとする。

このままじゃ、私に直撃だよ！

背後での動きのはずなのに私は何故かそれが分かり、反射的に座り込んだ。膝の力が入らなかったから、簡単にそれは出来る。

その瞬間、私の前に人が立ち塞がった。勇者様だ。

勇者様の手に剣はない。徒手だ。魔物は明らかに彼を狙って飛び掛っている。

危ない！

その声は喉に引っかかったまま音にならなかった。勇者様は無造作に左手で拳をつくり、振りかぶる。

そのまま手は魔物の口に吸い込まれる。魔物なのに魔物が哂ったように見える。魔物が顎に力を入れてしまえば、勇者様の腕も無事ではいられない、最悪、噛み千切られる。

流血の予感に、私の喉を引きつった息が通り、かすかな悲鳴になる。

しかし、私の予想は大きく覆されることになった。

勇者様はそのまま腕を振りぬいた。まるで魔物などその腕に噛み付いていないかのように。金属と牙が磨れる不快な音が響く。

「ギャン！」

壁に魔物が叩きつけられ、悲鳴が上がる。ずるりと壁から落ちるけれど、すぐに魔物は体勢を整えなおした。舌が異様に長いです。黄色って気持ち悪いって！

勇者様を危険とみなしたか、ひらりと距離を取り、体勢を低くして唸りを上げた。じっと隙を窺っています。じりじりと左右に動きながら、距離や間合いを測っている様子。剥きだしの犬歯は、数本折れている。先程の一撃の効果だろう。

勇者様も腰を落として臨戦態勢をとる。

けれど相変わらず手には剣はない。右に吊り下げられたそれは、今が抜く時じゃないんですか！

それにしても、私を挟んで対峙されるととても生きた心地がしないんですがあああああ！　怖すぎるよおおおお！　魔物の眼中に無さそうなのだけが不幸中の幸いっぽいけれど！

でも動いたら襲われそうな気がする。

私は置物、私は置物と繰り返しながら腰を抜かしたままだらだらと汗を流すしかない。

にらみ合いはしばらく続いた。濃密な緊張感と殺気に、私も呼吸が上手くできません。木の葉が一枚落ちただけでもギリギリまで高められた張り詰めた均衡は、なだれのように一気に崩壊すると思う。

忍耐が切れたのは魔物だった。

鋭い歯を剥きながら、勇者様に飛びかかる。

常人ならば避けようのない速度の跳躍だけど、勇者様は慌てた様子も無く迎え撃つ。

勇者様は再び左手で魔物の眉間を狙って殴りつける、が、これは魔物も予想していたのか空中で体を無理に捻って避けた。しかし、その一撃はフェイントだった。僅かに腰を落とし、用意していた右で魔物の顎を下から一気に突き上げる。とても鈍い音がする。顎の骨が砕けたのかも。魔物の悲鳴がまた響いた。フェイントは、魔物がなまじ賢そうだからひっかかったんだろう。

魔物はふらつきながらも着地する。先程の一撃も決定打ではなかった。まだ魔物は瘴気とならない。やはり殴るだけでは足りなかったみたい。やっぱり剣がないせいなんだろうか？

顎を砕かれながらも魔物の殺気は変わらない。

勇者様は魔物が距離をとったのを見計らい、星術を展開する。

「Ｋｘｘｘｚ＊　ｗ０　Ａｓｓｙｗｗｋｗｗ（風を圧縮）」

右の掌を上にする。そこに、揺らめく何かが現われる。空気を固めたものなんだろうか。向こうの景色がゆらゆらと揺らめいて見える。あれです、暑い日の道が熱気でゆらゆらしてるやつみたいな感じ！

魔物は再び姿勢を低くし、今度は体当たりを仕掛ける。単純な攻撃だけれども、それだけにまともに当たったらとても凄い衝撃になるのが私でも分かる。勇者様はさすがに正面からその攻撃を受けなかった。左足を軸に、右足を引き、

「Ｓ＊ｔｓｗｗｄｘｘｘｎｎ（切断）」
紙一重で避けながら右手を、魔物の首の近くに叩き込んだ！　術の威力を直接叩き込まれた魔物は口から唾液を散らした。ゴリッと鈍い音がしたものの、魔物の勢いを止めるまではいかない。着地しすぐさま目を血走らせながら勇者様に飛び掛る。今度は近距離過ぎたせいか、勇者様の回避が遅かった。胸元の鎧が魔物の前足の爪に当たり、大きな跡をつけられた。勇者様は衝撃を緩和するためか、敢えてそのまま後方にさがったけど、すぐに体勢を立て直した。
魔物はその隙を襲うかと思いきや、そのまま突っ切って走り去る。

逃げた！

魔物が消えたのは、魔物が来た方向のピンクの霧の向こう。私にはもう見えない。

私はこの一瞬の攻防に、どっと汗が噴出しました！　体感時間は凄く長かったけど、本当は時間はさほどたっていないと思う。
横で置物になっているだけでも、相当怖いよ！
私は震えながら勇者様を見上げます。変だ、震えが止まらない。

勇者様の左手は、先程魔物の口に突っ込むなんて無茶をしたせいか、血が出ています。丈夫そうな手袋が裂けてる。
「勇者様、怪我……」
私がようやく出した声は情けなく揺れたままだった。
勇者様は駆け出そうとしたが、数歩で振り返りこちらに軽く視線を投げてくれる。蒼い眸はまだ剣呑なままだけれども、私に向けたそれに殺気は無かった。
けどこっちを向いてくれたのは一瞬だった。すぐに前を向き、
「……もう治った」
と言葉を落として、私に背中を向けた。

「部屋に入ってろ」
とだけ言い残し、また勇者様も魔物を追ってピンクの霧の中に消えて行ってしまった。

な、治ったって？　そういえば前も似たような会話をしたような気がする。でも、今怪我をしたよね？　何で治ってるんですか？

逸らした視線が質問を拒絶しているような気がして、私は呆然と座り込んだまま魔物と勇者様が消えたピンクの霧を眺めた。

神子（仮）、働かずにはいられない

ピンクの霧の向こう側がどうなっているかなんて、私には見えない。

霧が濃すぎて視界が全くありません！　とりあえず扉のほうから風が流れてくるから、どっちが部屋かはよく分かる。

普通に行けば、部屋に入っているのがベストな対応なんだろう。でも、何か私に出来ることがないかを探したい。怪我をしてまで庇ってくれた人に、恩を返さないのは女が廃りますよ！

でも、本当はまだ怖い。

さっきの魔物の牙を思い出す。あれで噛まれていたなら、私はやわらかいパンよりもたやすく引き裂かれていただろう。これが、勇者様達が旅する世界なんだ。姫様が言っていたことは真実も含んでいた。小娘には厳しい世界だろうというアレ。

まだ怖くて、膝ががくがく笑う。でも、ここで立てなかったら自分の中の何かをなくしそうで、ちょっと歯を食いしばりながら立ち上がった。壁に背をあずけて何とか立ち上がる。それだけで息が弾んでしまった。どれだけ情けないの私！

先程去っていった勇者様の背中を思い出す。そして、最後の会話を思い出して、イラッとした。痛いなら、痛いって言えばいいのに。なんで言わないのか。治ったにしても、痛かったのは絶対痛かっただろうし、私だったら泣き喚くレベルだと思う！　なのに大したことがないって振舞うのが勇者様の普通になっている。

この気持ちは、多分神官様が怒っていたのと近いものなんだろう

なあ。ひとりで抱え込むなと神官様は言い続けてきたにも拘らず、勇者様は相変わらず抱え込んでるみたいだし。うん、次に顔を見たらデコピンしてやる！　ちょっと驚いて、将来禿げ上がるがいい！

あ、ちょっとだけでいいです。男のひとにとって髪の毛が無くなるのは重大事だって分かってるから、ちょっとで！　何で減って欲しい毛が減らずに、減らないでいい毛が増えるんでしょうね。どことは言わないけど！

よし！

私は立ち上がって、お腹に力を入れた。

怖がっている場合じゃない、動くんだ！　パン！　と頬を両手で叩き、行動を開始しました。

瘴気は日光が嫌いだから部屋の中に瘴気を呼び寄せて、少しでも日光消毒するべきだよね。

消毒したら消えて私の視界も広くなって一石二鳥！

屋敷の中の人、どれぐらいの濃さで体に悪影響が出るんだろう？

でも、これは明らかに悪影響が出てそうな濃さだけれどね。

お枝様に頼るのも考えたけど、神官様の手が赤くなったことを思い出した。お枝様の封印を解けば瘴気が消えても人が体を悪くしたらいけないよね。うーん……もうちょっと、真面目に星術の勉強をしておくんでしたああ！　適正ないって、侮ってたよ！

神官様もどこかで瘴気と格闘していると思う。あの人が逃げたとかは全く思い描けない。そう考えたら、あの幼馴染二人は結構根っこのところは似てるんじゃないかな。真面目で抱え込みがち。うわー、秘密主義ばかりですよ！　私には秘密にするほどの事はないがな！　ただの町民です。資産もささやか過ぎるから、脱税もしてません。

神官様の事を考えていたら、ふと左手に貰ったお守りの事を思い

出した。そうだ、これは最初よりちょっと薄くなってる。本物の葉より、やんわりとした効果になっているんじゃないだろうか？　メイドさんや鎧さんとか平気そうだったし。

でもこれを使うとしたら、どうしたらいいんだろう？

首を捻ると、頭の中で韻律が流れた。さらさらと水が流れるように、音と力ある言葉の意味とその旋律が。

――　Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）

ああ、この音の連なりだ。覚えがある。初めてお枝様の力を使ったとき、勇者様に復唱しろと言われた言葉。世界の根幹を成す連なりの音、すなわち韻律と人が呼ぶもの。

――　Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／（あるべき姿に。）

そして私は理解をする。

これは呪文じゃなくて、ただの祈りであり、お願いだと言うことに。ただ、世界にお願いをしているだけ。ひとにとって異質なものを排除して欲しいと言う依頼であると。

これをお願いすればいい。左手にある世界の欠片に。

私は、ピンク色を吸い込むことを気にせず、大きな声で韻律を唱えて祈った。

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／

（あるべき姿に。）」

左手から、はらはらと光がこぼれる。弱弱しい小さな光が生まれ、やがてそれは爆発かと思うぐらいの光芒となった。光なのに圧力があるように感じ、私はよろめいたけど何とか踏みとどまる。

やがて光は消えうせ、瞼の裏に隠したにも関わらず、目がチカチカした。

爆発と同じように、唐突に光は収束した。

反射的に閉じた瞳を開けば、廊下は普通の様相を取り戻していた。ピンクの霧など、どこにもなかったかのように普通の景色だ。

静かで、ちょっと暗いだけの廊下。壁にあるひび割れって、もしかしてさっき勇者様が魔物を殴り飛ばした時のアレですか?!　馬鹿力だなあ……。

日常の風景と引き換えに、左手にはもう葉の模様はなくなっていた。

せ、成功ですか！　よかったあああ！

私は緊張が緩んだ脱力感のために、ずるずると床に座り込んだ。壁へ背中を預ける。冷たい壁が心地よい。ああ、部屋に帰らなきゃ。でも手足が重い。頭がくらくらする。これは眠気だ。ただの眠気、大丈夫。

それにしても、私は旧星語なんて知らないのに何でちゃんと星術を思い出せたんだろ……？　さっきまで身近にあると思っていた記憶や知識の源が、すうっと遠ざかっていく感覚がした。待って、一つだけ教えて。その何かに私は頭の中で呼びかけた。それは何故か留まり、こちらを振り返った気がする。

教えて、勇者様や神官様や、他の人は無事なの？

返答が、文字情報となって頭の中を流れる。
星別者（せいべつしゃ）検索。
返答三件。現在情報更新。
【５／Ａ０】、損傷率八割、あと五秒後回復。交戦続行中。
【５／Ｄｓｎｋｎ】、損傷なし。人間に対する治療中。対象回復率四割。失血率二割のため危険。
【０／Ｍｖｖｖｋ０】、損傷なし、存在力低下、平常に比べ六割。自動的に休眠に入ります。要因星術の反動。カウントダウン、五、四……。

ああ、そうか。と全部の情報を読み取り、私は納得した。何故か全部の指し示す内容を理解した上で、私は納得したんだ。
そしてその何かは私の中からすうっと消えていく。知識があったはずの場所はぽっかりと穴が開き、そこに何があったか分からない。ただ、失ったことだけを自覚した。
緩やかなカウントダウンが頭の中で再開される。
一、そして〇を刻み、頭の中での情報が【０／Ｍｖｖｖｋ０】休眠、と更新された。

その瞬間、日が落ちるより速やかに、私の意識は闇に落ちた。

せめて部屋に入ったらよかった。誰かをビックリさせるかな、とそれだけを後悔しながら。

◆【Ｓｋ】、記憶の混線と流出

瞼の裏の暗闇では、私は私であり、でも私じゃない何かになる。
先程は強引に知識を開いたから、余計に不純物が混じっている。

まだ「目覚め」の時ではない。

分析。
結果……体内の韻律が乱れている。世界へ存在を固定する部分が狂っているらしい。修復が必要。混線した記憶を整理するために、幾つかの記憶の欠片を拾い上げる。

本来の私が持つべきものと、そうじゃないものを選別する。
たまに混線が起こる。どこまでが自分が持っているべき知識か分からないことになるのだ。

さて、この記憶はなんだろう？　古い本を開けるように、私はその記憶を覗き込む。

これは私の記憶か、それとも【Ｓｋ（せかい）】の記憶か……。

――　砂礫を含んだ風が吹いている。風には、血の匂いが混じっている。魔物を呼び寄せるに違いない。

荒涼とした砂漠だ。空の色と、砂漠の色、それだけが視界にある全てだ。
木々は枯れ果て、水の気配は無い。時折舞う風が、砂礫をダンスに誘うように巻き込み、砂漠への侵入者を排除しようとする。
ここは、厳正なる死が平等に降りそそぐ場所だった。

「仕方ない」

そんな場所で、彼女は高らかに笑う。
彼女の笑顔は力強く、淑女からは遥かに遠いものの、ひとを惹きつけてやまない。
黄昏の残照が彼女の黄金の頭髪を輝かせ、炎のように燃え上がらせた。瞳の色は濃い紫。強い意思を宿す眸。正面からその視線を受け、相対する青年はたじろぎながら声を発している。
「本当にいいのか？」
「上等だ、私の命でそれが贖えるなら、幾らでも持っていくがいい」
「国はどうするんだ」
「ふん、弟がうまくやるさ。あやつは私ほどがさつではない。皆に支えられ、よい王になるだろう」
唇をほころばせ、笑う。それだけで華麗な印象へと変わる。例えその装束が血にまみれていたとしても、彼女は正しく王族であった。
「なあ大神官、お前こそ私に付き合ってもいいのか？　帰ってするべき仕事が山積みだろうに」
青年は茫々に伸びた頭髪をかき回しながら、憮然とした表情で、
「今ここに居るより重要な仕事は無い」
と言う。その口調に彼女は笑った。青年は照れ隠しでよくこういった口調になる。
「それより、あいつの言うことが正しいと思うのか？」
「アレは人の言葉だ。お前が気まぐれに預かる星神様の託宣とは違

う。だからかな、信じてみようと思ったのは」
彼女は聖剣の柄を握りなおす。そこから光が伸び、長い紐状になる。それが彼女の選んだ武器の形、鞭だった。黄金の光を放つそれを軽く振る。
ひび割れた甲冑を気にせず、彼女は背筋を伸ばし地平線の向こうを睥睨する。
「それだけで信じるってのか？」
「なんでもそうだ。こちらから信じることが肝要だと思うが。お前こそ星職者のくせに何を言っている」
凛と言い放つ彼女に、青年は、
「お前はいつもそうだ。信じて裏切られて何度も泣いただろう。まだ懲りないのか？」
と面倒くさそうに言い返す。二人の間では、これはいつものやり取りだ。彼女も笑いながら言い返した。
「また泣いたら、慰めてくれ」
「わがまま王女様のおもりはいやだね」
即座に返ってきた言葉に、彼女はふんと鼻息を荒くし腕組みをする。
「慰める程度してくれないとは！　ケツの穴の小さい男め！」
青年は本格的に頭が痛くなったようだ。両手で抱えて座り込んでしまう。うめきながらぼそぼそと言葉を洩らす。
「どっからそんな言葉覚えてくるんだ」
「私は博識なんだ」
「違うだろ」
頭を抱えたままの青年に、彼女は拗ねる。
「たまには願いを聞いてくれてもいいじゃないか」
「オレの願いを聞かないうえに、帰る気の無いやつのいうことなんて聞くもんか」
あくまで投げやりな青年の言葉に対し、
「じゃあ、帰ったら」

彼女は珍しく言いよどむ。けれども、すぐに顔を上げていつもの尊大な調子で宣言する。

「帰ったら、一つだけ何でも聞いてくれ」

彼女は青年のほうを見なかった。視線は地平線に止められたままだ。その顔を見上げ、青年は押し黙った。しばらくのち、大仰に溜息をつきながら苦笑をする。

「仕方ないな。わがままめ、俺に何の得も無いじゃないか」

青年の譲歩は引き出せたものの、その言葉は彼女は気に入らなかったらしい。

「相変わらずの計算男め。たまには無償奉仕をしろ」

「生きるには金が要るんだよ」

「私にたかるな」

「たかってねえし」

青年は遠い目をしながら頭をかき回した。この癖のせいで、彼の頭は大体ぐしゃぐしゃになるのだ。彼女はその仕草を眺めながら、胸を張って言い放つ。

「誰かさんが言うわがまま王女だからな、わがままなんだ」

「威張るな」

二人は同時に地平線を睨みつける。

「……そろそろ、時間だな」

青年が立ち上がり、武器を構える。神官と言う肩書きのわりに凶悪な武器だった。大きな斧である。ただの斧よりも殺傷能力に秀でるよう、先端にも鋭い針がつけられている。青年は星術を保持することが出来る宝玉に、改めて術を込めた。戦いに備える。

二人が見たその方向は、彼女がずっと立ち尽くしながら見ていたそれだった。

二人が見詰める先に、徐々に黒い帯が地平線から広がっていく。砂煙が舞い上がり、その黒い群れを揺らめかせる。

魔物の群れだ。

地平線を埋める、圧倒的な数の暴力。何万、何千万いるか分からないそれに、彼女たちは二人で相対しようとしている。正しくは無謀な行い。しかし、この戦いは彼らが選択した最後の戦いであった。

彼女は笑いながら宣言した。

「黄金（きん）の勇者として、強すぎる光を押さえ込んで見せる！」

ああ、と私は溜息を吐いた。

……これは、世界の記録。私のじゃない。

幻視を終え、私はその欠片をぽいと投げる。

今の私が見るはずも無い記憶だ。

私は選別のために、別の欠片を覗き込む。

時系列が狂っているせいだ。星のめぐりの影響をもう少し受けれることが出来たら、こんな風に時間が狂うことが無かったはずなのに。

私は溜息をつきながら、欠片の選別を始めた。

神子、起きたくない

「それ、違あぁぁぁあう！」

私は焦りながら跳ね起きた。あっ、ちょっとめまいが！　いきなり起きたからだね！　そうだね！

ん？　なんか色々夢を見ていた気がするけど、いまいち思い出せない。

あー、なんだったっけ！　思い出せず気持ち悪いです。

「神子様、お加減はいかがですか……？」

メイドさんがびくびくしながら話しかけてくれる。私が叫びながら起きたのをバッチリ目撃しちゃったらしい。大丈夫ですよ、噛み付きません！　だからそんなに微妙に距離をとらないでっ。

それにしても寝言が多いんでしょうか！　最近目が醒めるとこのパターンが増えてきてるね。そうですね。

いつか凄く恥ずかしいことを叫びながら起きそうで、本気でびくびくするんですが！　夢の中って何が起こるかわからないから、とってもデンジャラスですよね。

「お着替えをお持ちします」

メイドさんがにっこり笑って部屋を出て行く。あ、はい、着替えます。

さっきから落ち着かない。例えるならば、こう……、あと一口コアが残っていたのにそのカップを下げられてしまったようなもったいない感がもやもやと渦巻いている。何か大事なことを忘れている気がするんですが、……うむ。どうせ思い出せませんよね！　気にしない！

そういえば、私は廊下に行き倒れていたはず。

誰かが拾ってくれたんでしょうか？　全く記憶にございません。寝つきだけはいいみたいだね！　ホント……どこででも寝れるようです。眠気はもう少し自重を覚えるべき。

勇者様の怪我はちゃんと治ったのか、神官様が治療していた人は大丈夫だったのか気になります。

そのうち教えてもらえるよね！

誰かが着替えさせてくれたみたいで、ちゃんと寝る格好でした。すとんとした飾り気の無いネグリジェでした。メイドさんかな？後でお礼を言おう。これも大変肌触りがよろしゅうございます。お金持ちは違うね！　神殿のネグリジェは、触るのが怖いぐらいでした。何の素材か分からないけど、艶がある布地でした。皺が付くのが怖くって、寝返りが打てなかったのはいい思い出。思い出にしたい。もうあそこに滞在はしたくないですマジで。

そしてふっと思い出しました。

ベールがないね！　力いっぱい素顔ですよ。

ああ、もういいよ……多分、大の字になって廊下に倒れてただろうし、今更取り繕うものももうないっ。トイレにも行く女です。

シーツの中でゴロゴロしてみた。うふふ、きもちいい。転がりがいがあります。

意外とメイドさんが戻ってくる時間が長い。その間にお布団を堪能するよ。

枕はふかふかだし、あと三日ぐらいは眠れそうです。幾らでも、寝れるよ！

うん、体の調子は全く問題が無い。お腹が減ってる気がするけど、そのうち何か貰えるんじゃないかな！　期待しています！　結局、御飯もお風呂も入りそびれましたが！　今からお風呂はいってもいいのかな、さっぱりしたいなー。

だらだらと欲望を脳内で垂れ流しにしていたら、メイドさんが帰ってきた。自分の欲望まみれさに、ちょっと反省します。

「お着替えをお手伝いしますね」
「大丈夫です！」
力いっぱい拒絶してみました。貧相な体は世間様に見せたくないですよ！　と言うか、人前で服を脱ぐと言う経験が圧倒的に足りないので、単純にご遠慮申し上げたく存じます。神殿でイヤだったのがまさにこれ。
お着替えも、お風呂も、おトイレも、一人で出来ますから！
その時ノックの音がしました。メイドさんが会話の途中で失礼します、と応対に出る。神官様でした。
「お加減はいかがですか？」
それほど疲れた様子が無い神官様、この人もまさか体力が有り余っているタイプなのか？　人を治療する呪文って、凄く疲れるって聞いたことがある。なのにピンピンしているのは凄い。
「神官様は大丈夫ですか？」
私からの質問に、首を傾げる。
ん？　私も首を傾げる。
「私は元気ですよ。ちょっと失礼します」
と、神官様は額に指を押し当てて、小さく星術を唱えられました。診察って、こうするんだね！　医者要らずといわれた雑草庶民の私には、いろいろ初体験ですよ！
「はい、問題は無さそうですね。色々寝言は仰っていましたが」
「え、何をですか」
「いろいろと」
そのぼかしが……ぼかしが、気になるんだよおお！　だから睡眠中の私！　何をしてたの！
「このままでは私はお嫁にいけませんね」
寝ながらぶつぶつ言う嫁など、欲しくもあるまい。私は布団の中でどんよりといじけた。
「いえ、夢の中でも掃除をしていらっしゃったようですので問題はないのでは？」

いや、問題の焦点がずれた！　今日のフォローもすべり気味ですね神官様。ゆるぎない。私はあえて話題を変えた。
「それにしても、神官様はお疲れにならないんですか？」
「十分休息はとりましたよ」
私は窓の外を見る。明るい。のどかだ。
あれからそれほど経っていないんじゃないかなあ？　まだ明るいしね！
「あれからって、一時間ぐらいですか？」
神官様はとてもイイ笑顔で、
「二日です」
と仰いました。
ん？
まさか。
「私、……二日寝てました？」
私はぱかーんと口をあけた。寝すぎですよねー。

ふ、二日ですか。
繰り返して思う程度にはビックリしていますよ！　何が驚くって、

「つまり六回ごはんを逃している計算ですね……！！」

私が思わず声を上げたのは、仕方がないことだと思う！
ごはんぐらいしか楽しみがないです最近。
何かメイドさんが、えーって顔をしてみています。恥ずかしいから見ないでくださいほんとにお願いします。心がガリガリ削られるよ！　だから見ちゃ駄目。
神殿に行ってから、ごはんを一日三度と言う生活に慣れてしまって、燃費が悪い人間になりました。食べても、おなかが減る。うーん、そこまで動いてもないんだけど。……はっ！　これは、食欲でストレスを紛らわせる作戦？　人間の体の防衛反応ですかっ！
「ご飯の心配が出来るほどでしたら、大丈夫ですね」
神官様はゆるぎなくにっこり。この人の動じると動じないポイントの違いが分からない。謎だ。そして私はもう一つ重大なことを忘れていました。
「二日間ごはんを食べていないということはつまり、その間トイレもいっていないわけですね！」
あんだけたっぷんたっぷんに飲んだ紅茶はどこに消えたんでしょうね！　まさに人体の神秘！
神官様はこの話には動じることなく、
「以前お話した、生理現象が押さえられるように変化しているせいもあると思いますよ。長く戦える体になっているはずです」
と仰る。そうですか、凄いですね！　ぐらいしか言えません。

そもそも、元々ただの町民です。そんなに戦いませんし戦えませんよ！　私はお枝様運搬要員ですからそこんところヨロシクです。

どんどん会話を重ねるにつけ、メイドさんのガッカリ具合がちょっとずつ増しているのがとても気になります。神秘の神子（笑）としての登場だけど、ご飯やらトイレやらの話ですからね！

庶民というか乙女どころじゃない、生活臭漂う話ですよね。ゴメンねー。だがこの話題は譲れない！　人間として譲れぬ……！

多分私以外のお二人はドリーム・ザ・アイドルぐらいの勢いでトイレ行かないかもしれないですから、夢は破れてないと思うよ！

私に期待するなと言うことだ。メイドさん頑張れ。心の中で応援するよ！

そうこうしているうちに、そういや、と思い出した事がある。

「神官様が治療されていた方は大丈夫でしたか？　結構大怪我だったと思いますけど」

倒れる前に、私はそのことを気にしていたハズ。

神官様は、じっと私を見る。目が笑ってませんよおお！　美人さんの威圧は怖いって！

「どうして、そのようなことをお尋ねになるのですか？」

笑顔なのに笑顔じゃない顔に、私は何かを間違えたのかとビクッとする。

「ちょっと気になっただけなんで！　ちょっとですよ！」

両手をぶんぶんと振ると、それだけで疲れました。寝たきりの筋力の落ち具合半端ないです。運動嫌いなのに、更に鍛えるとか考えられません。

「……私が怪我人を治療していたことを、なぜご存じなのですか？　あの状況で勇者が伝えるとは思えませんが」

え？　そうだっけ？

私は首を傾げて神官様を見た。どこで知ったか、覚えがない。何でそんなことを知ってるんだろう？　我ながら謎かもです。

「あの怪我人は、私の力だけではなく何かの力によって癒されました」

何かってなんだ。よくわかんないけど、とりあえず、

「よかったですね」

と言っておく。誰かが助かった、って言うことだけでも凄いと思うんだ。神官様はまたじっと私を見ます。

見ても何もでないよ！　油汗ぐらいだよ！！

「あの時、あなたは何かをしましたか？」

神官様が小首を傾げながらさらっと仰るので、私は、

「あ、はい。しました」

あっさりと容疑を認めました。町民Cから容疑者Cですよ！　やったね！　いや、格下げですが。

「具体的に何をしましたか？」

にわかに取調室の様子になってきました。この犯人席は中途半端なく辛い感じです。なんでも自白しちゃうよ！　やってないこととか。

「左手に貰ったお守りにお願いしました」

あれはお願いだったよなあ、と考えながら手の甲を見る。もちろん、もう何もない。神官様はとても不思議そうだった。

「お願いですか？」

「そうです。ピンクまみれだったので、祓えないかな、と思ったんです」

だって先も見えないピンクでしたから！　とんでもムードでした！　先は見えないし魔物は出るしまさに最悪。

「先日瘴気を祓ったのと同じ呪文で、あるべきものをあるべき姿に戻してくださいと左手の葉っぱ様にお願いしました！」

「……そうですか」

神官様はとうとう考え込んでしまいました。

「何かあったんですか？」

さすがに気になって聞いてみるよ！　私の術で何か悪いことが起こったんですか！　誰かがうっかり召されちゃったとか、恐ろしい話

題じゃないだろうな。笑えません。
神官様は苦笑しながら、
「恐らく推測ですが、その星術がかなりの効果を示したようです」
と前置きをしてからお話してくださいました。

どうやら私が使った葉っぱ様の効果はかなり広かったらしく、瘴気を吹き飛ばしただけではなく魔物にはダメージを、怪我人には治療の後押しをしたらしい。
つまり魔物を元の瘴気に戻す効果と瘴気を消す効果、あと人体をあるべき形に戻す効果があらわれたとか。人体どころか、しおれていた花まで生き生きとなったそうな。それはぶっちゃけ言いすぎと思いますが！　全くそんなことを考えて使ったとかの覚えはありません。

で、そんな星術を使った犯人（なのか？）が、どう考えても廊下で行き倒れていた私しかいなかったわけで。現在、お屋敷や街の方で神子様万歳ムードが広がっているらしい。今までのあらすじだそうです。

あいた口が塞がりませんでした。まさに超展開。

待って、ちょっと待って！　そこは勇者様万歳だろう！　私じゃないよ！　というか神子（笑）万歳とか！
……いやだあああ！！！！！！
外に、外に出たくない！！！
絶対何か勘違いしているッ！　私はピンクがいやだったから使っただけで、実際何かをしたのはお枝様だと思うよおお！

本気で泣きが入った私に、神官様は、
「元気を出してください。ご飯持ってきますから」

と慰めてくださった。

どうやら私の操縦法を覚えられたようです。

ご飯は食べるけどね！

神子、観察されたくない

満を持して、ご飯の時間です！　テンション駄々上がりですよ！
私に食事を与えて、神官様は診察にお出かけになりました。
食べ物を与えていればいいと思われているんですね。くっ……心外な！　でもおおむね正解です。
ご飯は病人食っぽかったけど、大変おいしゅうございました。ミルクで炊いたおかゆだって！　高級品のミルクをこんなに贅沢に使うとは……セレブめ！　上にちょっと掛けられたチーズの風味とあいまって、絶品でございました。これはただのおかゆではない！　おかゆ様ですね！　崇め奉れるレベル。口に含んだ時にふんわりと広がる甘みと、一緒に炊いたほっくりした豆の風味が広がって、顔が崩れましたとも。
こんなご飯を六食……六食……飛ばしたなんて……。本気で泣いていいですか？　多分領主様の恰幅のよさはこのご飯のせいだろうね。美味しいから食べ過ぎるんですよ。
危うくメイドさんによる「あーん」が実行されようとしましたが、これも笑顔で流すことが出来ました！　こ、これは拒否してもいいんだよね？　だって、おかゆをフーフーされて、更にあーんって恥ずかしすぎると思うよ。まさにウフフアハハな状態じゃないですか。何の拷問ですか。食事時間が一瞬にして拷問に変わると言う恐ろしさを味わいましたとも。一口一口を味わう私を見るメイドさんの視線がなんだかとっても暖かい眼差しなのはなんでかは分からないけど。
あと、お風呂の希望も通りました！　思ったとおりお手伝いします発言が来ました。だが……断固拒否するッ！　手伝いは大丈夫ですよとお断りしたところ、何でそんなに残念そうなんですかメイド

さん。私はそんな変な趣味は無いよ！　今準備中とのことで、待っています。あ、そうですよね、昼間っから、お風呂用意なんてしませんよね。ごめんなさい。

　メイドさんはやたら明るい人だった。ぽってりした唇が特徴的な人だ。やっと私に慣れたのか、それとも私が慣れたのか話してくれる。もうさっきの神官様との会話を聞かれているので、私にとって恐れる事は何もないッ。

「神子様のお好みの料理などありますか？」

「何でもいけます」

食べられるものだったら、だいたい美味しくいただける、優秀な味覚と鋼鉄のお腹を持っています。

「では、アメなどいかがですか」

　何故アメ。棒に刺さったアメを貰いました。本当になんでだ。賄賂じゃないよ！　貰ったものはすぐにいただく。あめをぺろぺろ舐めながらメイドさんと色々話します。

「お客様がいらっしゃるのが久しぶりですので、張り切ってしまって」

　どこまで接客するかというラインが微妙らしい。それを言うなら、私はいたって残念な客だと思われます。

「基本、放置でいいですよ」

　大体の事は出来るし。そういってみたものの、逆にプロ根性に火をつけてしまったらしい。適当で、いいですよ！

　喉が渇いたなって思ったら差し出されるお茶……こんな生活に慣れたら大変です。私の資産じゃメイドさん一時間も雇えないよ！

「こんなに可愛らしい神子様のお世話が出来て、幸せです」

ウフフと笑うメイドさん。そんなリップサービスまではいいですよ。平凡顔なのは自覚してます。私の微妙な反応に気付いたのか、メイドさんが言葉を付け加えました。

「ご飯をほおばって、もごもごされているのがとてもかわいらしゅ

うございます」
　そこ?!　そこに注目なんですかッ！　まさかの愛玩動物的な扱いでした。ならまあいいか。だからアメをくれたんですね。さっきから舐めながら会話をしています。これはこれで美味しい。最後のあたりを噛み砕くか、それが問題だ。棒にへばりついた残りを見ながら熟考していると、ノックが聞こえました。メイドさんが応対します。声が聞こえる。あ、勇者様だ。

　そういえばもう一つ、どうしても気になっていたことがある。幸い、部屋履きはベッドの横で発見する。私は寝台から下り、ドアのほうへ向かった。ちょっと広い部屋なのでベッドはドアの死角にある。病人扱いだけど、怪我も病気もしてないので普通に歩ける。メイドさんはまだ私の調子が戻っていないので、後にして欲しいと伝えている様子。別にいいですよ、と主張しようと思って、ひょっこり顔を出し、
「勇者様、お怪我はなかったですか?」
と聞いた。
　メイドさんと勇者様が一瞬固まった。えっ、別に何の衝撃映像もありませんよ?　沈黙は二秒ぐらいでした。勇者様が、
「そんな格好で出てはいけません」
と言った。メイドさんもそうだそうだとばかりに頷く。えー、ただの寝巻きなのに。私の無言の抗議は取り合われませんでした。残念な胸元も、足も出てないんですが……あ、足はふくらはぎぐらいからは出てた。メイドさんと勇者様は目線で結託したのか、
「また後ほど」
とドアを閉められてしまいました。あっ、聞きたいことがあるんですが。追いかけようとした私の肩を、メイドさんがガッと掴む。
「着替えましょうね、神子様」
　メイドさんの迫力に、すばやく頷きました。目が怖いです。
　今思い出した。マナー講座のメガネ女史が寝巻きで出るのは恥ず

かしいことだとチラッと言ってた。失敗ですね！　概ねひとり暮らしだったし、訪問してくる人なんていないのであんまり自分の格好に気を使ったことはない。部屋を出るときに着替える、ぐらいの気持ちだったんだよね。正直、面倒です……でもメイドさんが怖いので口に出せやしないよ！　あ、でもちょっと待って、あめを食べてしまいますから！

着替えて、ようやくドアを開けることを許されました。
大人しく待っててくださった様子。お待たせして申し訳ないです。文句を言わない勇者様。やはりできるッ！　紳士だ！　神官様は、診察をかねていたようだったから余り気にしていなかったのかも。
メイドさんがお茶を用意してくれる。また、この間のようにテーブルに着いて話します。二人なので向かい合わせですよ。今度は紅茶を飲み過ぎないからねっ！　今更ですが、あのときは人払いをしていたんだろう。
少し外して欲しい、と言う勇者様に従い、メイドさんは席を外した。
「この二日間のことについて、聞いたか？」
聞きたくない神子万歳については聞きましたよ！　現実逃避したくなるね！
私のぬるい笑顔に勇者様は訝しげな様子をしながら、別方面の話をしてくださいました。

この魔物発生事件の顛末でした。
あの魔物は、前領主様のペットだったとか。普通の動物だと思って飼われていたものが脱走したらしいです。
あんなに凶暴な動物を飼おうと言う気分が分からない！
瘴気が広がっていたのは、おそらく餌として与えていたのも魔物だったのではないだろうかと。魔物だと知らないまま商人たちも捕まえてきていたみたい。魔物が魔物を殺して、その瘴気が溜まりま

くったらしい。どれだけ気付かないんですか！　死体が残らないの、おかしいと思わないのか。それもそのはず、徐々に屋敷の人の精神を瘴気が侵食していたみたい。魔物の部屋が一番瘴気が濃かったのか、いるだけでだんだん頭がぼんやりしてきたと証言があったとか。人の欲望を抑えれなくする瘴気の効果、エロ屋敷はその表れらしいですよ。あ、ただの趣味じゃなかったんだ。

私の術のおかげ（？）で、そのあたりの歪みも修正されたとか。全く自覚はないけどね！　現在はエロ屋敷の家具を撤去しているらしい。へー、でも撤去してあれをどこにしまうんだ。蔵とかに押し込めても、あんな裸の像ばかりある蔵とか行きたくないですよ！想像しただけで怖いです。薄暗がりの中、林立するエロ彫像とか。今は屋敷の工事中だそうです。私が目覚めて体調を見て今後の予定を決める、という話だった。

話がひと段落ついたところで、私はどうしても気になっていたことを思い出しました。

「で、勇者様の怪我はどうなったんですか？」

あっ、目を逸らした。

今日は問い詰めるよ。時間はありますしね！

神子、怪我について話す

大体この話題を出すのは、抜き差しならない状況の時ばかりだった。

実際に勇者様が怪我しているな、と思って聞いたらはぐらかされた、みたいな。

今まで色々スルーしていたけど、聞きたいことを一つずつ潰していこうかと決心しました。たった今、決心したところだけど！　そういえばデコピンするのを忘れていました。イラっとしたときにしようと思ってたんだよね。今はさすがに出来ません。

恐らく相手が神官様だったら、こうった話題はうやむやなままに話題をずらされてごまかされるんだろうな。短い付き合いで身に染みました。うすうす思っていたけれど、神官様はボケとボケ殺しの素質があると思うのです。そのせいで、会話が迷走してどこまでが意図的なごまかしなのか分からなくなる！　恐ろしい人！

その点、勇者様は言葉数少ないと言うか、あまりごまかしはしない。元々交渉役を神官様に丸投げしているし、大体聞き役に徹してるよね。領主様相手の聞き役っぷりはプロの領域でした。見習うべき。多分お二人は昔からこうやって役割分担をしてきたんだろう。二人が幼馴染だと聞いて、更に確信を得たよ。

勇者様は、基本姿勢聞き役、用事がない限り話を自分から展開しない。無表情のせいで、いまいちこの人の距離感が掴めません。でも、言いたくないことは言わない人だと思うので、聞ける限りは聞いていこうと思います！

質問タイムスタートッ。

「で、怪我はどうなったんですか？」
私はニコニコしながらもう一度言いました。重要事項ですよ。私が倒れる前、勇者様が凄い怪我を負っていた記憶がある。でも神官様が治療していたのを知っているのと同じぐらい確証はあるのに、それを見た記憶はないんだ。だからこのあたりは伏せて質問しました。ちょっと知的じゃないですかっ。ごめんなさい、調子に乗りました。
「治った」
勇者様、ぶつ切りの返答です。
これは質問に対してはある程度は答えてくれるってことですね！分かりました。ポジティブに捉えますよ！　前を向いて進むよ！
足元の石につまずいてこけるのがオチだろうとしても！

「いつも怪我はすぐに治るんですか？」
「……ああ」

「怪我をしたときは痛いですか？」
「……ああ」

会話の神様、助けて……！　これは先程の神官様の取調べ状態になってきました！　尋問じゃないんだから！　勇者様は手元のカップをじっと見ています。何か考えている様子。
ああ、空気が暗い。私はぐいっと紅茶を飲み干しました。ぬるくなって丁度いい感じです。カップを置きながら、
「つまり、すぐ治るけど、怪我をしたときは痛いんですよね？」
と再確認。
このときようやく勇者様が顔を上げました。私が一体何を意図して質問をしてるのか、不思議そうな表情です。ちょっとだけ表情が読み取れました。私を誉めてっ。
「そうだな」

とりあえず、私が聞きたいところはそこだった。だから、ちゃんと自分の意見を伝えてみた。

「痛いなら、あまり無理をしないでくださいね。心配しますから！」

私なら痛いことは耐えられない。針で指を指しただけでも涙目ですよ！　足の上に本を落としたとかも地味にくる。紙で指を切ったときとか、寒い日に唇が切れたときとか。小さい怪我だけど、痛いって！

つまり、痛みに全く耐性がない私にとって、血をだらだら流しているのにすぐ治るから大丈夫だという勇者様が信じられない。

治るのと、痛いのは、別だと思うんですよ！　つまり、ご飯がなくてお腹が空くのと、ご飯がまずいのは別問題なのだ！　喩えがよく分からない？　失礼しました。

「すぐ治るのに？」

心の底から不思議そうな勇者様に、私は大きく首を振りました。

「すぐ治るのと、痛いのと、私が心配するのは別です！　怪我をするから心配する、そこが重要なのです！」

どーん。

言い切った！　勇者様はしばらく目線を彷徨わせた。どう見ても、私の言葉をいまいち飲み込めていない様子ですよ。この無表情を見ていたら、ほっぺを両側からつまんでぐいぐい引っ張りたくなりました。

「なら、避けきれない以外、怪我をしないようにすればいいのか？」

出てきた結論は、思った以上に斜め上でしたよ！

「普通怪我を避けることを第一にしますよねっ」
「面倒だ」
つまり、避ける怪我も避けずに突進していたのですか！
ずれている……！　この人想像以上にずれている……！！　神官様ー！　神官様ー！　幼馴染が変なこといってますよー！　タスケテー！
私もどっからつっこんだらいいか分からなくなってきた！
「怪我をしたほうが動きが鈍るでしょう」
「すぐに治る。それよりも戦闘を速く終わらせた方が効率的だろう」
話が何か違うー。
私は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。どういえば伝わるのか。
頭を抱えながらうめくように言いました。
「えーと、つまり、うーん、怪我しないでください。見てるほうが痛いんで」
私も大概うまいこと言えません。
「……血が苦手だと言っていたな」
勇者様は何かを思い出したようです。そんなこと言ったっけ？
言ってたんだろうな！　自分では忘れているけど。過去の自分グッジョブ。
「そうです！　だから流血沙汰はカンベンしてください。なるべく怪我は避けて！」
勇者様の中で何かが納得できた様子。頷きながら、
「それなら仕方ない」
と仰いました。

避けるのが面倒なことより、私に血を見せないことが優先されるって、何か変。
自分より他人をあっさり優先させすぎじゃないかな。勇者様って、自分のことには基本無頓着だけど、人の意見は簡単に受け入れるみたい。

あー。さっきからずっと覚えていた違和感の正体が分かりました！
勇者様は「自分」が痛いとかはどうでもよいといった雰囲気なんですね。でも、生物としては痛みって重要じゃないのかな！　怪我をしてるよ！　っていう体の悲鳴が痛みなんであって、それに慣れるって辛いことじゃないのかな。
勝手に私が感傷的に思っているだけなのかも。実はありがた迷惑かも？　顎をテーブルに載せた状態でうめいた。実はまだ突っ伏したままです。

べちょっとなった感じの私の頭に、何を思ったか勇者様の手が載せられる。

「……」

両者、無言です。
え、何で手を載せたんですか。しかも、ちょっと重いです。撫でるなら撫でる、叩くなら叩く！　どっちかにしてください！　受けて立ちます……！　私と勇者様はまた睨めっこタイムに突入しました。私……負けないっ！

その時、ノック無しにドアが開きました。む、一応、乙女の部屋ですよ！

「……何をしているんですか」

呆れた風の突っ込みに、勇者様は普通に、私は目線だけで振り向いた。神官様のお帰りです。お帰りなさーい。

神子、頭は痛くない

この状況に、神官様が動いたッ！

何故か勇者様にツカツカ歩みより、おもむろにその頭をぐしゃぐしゃに撫でました。小さい子にお父さんがよーしよーしと撫でるぐらいの勢いです。

な、何でだ！

勇者様も私も目を丸くして神官様を見上げます。何が起こったのか飲み込めません！

神官様は思う存分勇者様の髪をかき回したあと、満足そうに頷かれました。

「これぐらいの力具合でしょう」

な、なにがですか！

勇者様、思い切り髪が乱れてますよ。触り心地がよさそうな髪だなあ。今度私もかき回して見たいものです。ちょっとうらやましいです。身長差がありすぎて、無謀な戦いですがね！

撫でられまくった勇者様はというと、棒を飲み込んだような表情になりました。髪を直すということを忘れ果てている。

私も固まったけど、勇者様の衝撃も凄かったんだろうね！　そりゃあなあ。うん、同情します。勇者様頑張れ！　無責任な声援を心の中で送ってみた。

神官様は、彫像と化した勇者様を放置し、私に笑顔を向けられました。

「恐らく頭を撫でようとしたところ、力の入れ具合が分からなくなって固まったと思われます。またの機会がありましたら、大人しく撫でられてやってくださいね」

すらすらと仰る神官様。勇者様の行動について、解説ありがとうございます！

はあ、そうですか。ん？　……いや、そうですかではすまないよ！　頭を撫でようとしたかどうかは分からないじゃないですか！

問題の勇者様の反応はっ、と目を上げて見てみたところ、遠い目をなさっていました。当たったのか、当たっていないのかどっちですか！　この問題はぜひ白黒つけていただきたいッ。

とりあえず、頭から手を退けていただけませんか？　重いです。さてはごつい手袋のせい？　脱いでくれたらちょっとはましかも。ささやかな重量ですが。

「お茶がありませんね。お代わりはいかがですか？」

神官様のゆるぎなさは筋金入りだと思います。この混沌とした状態で、私のカップが空なのに気付いたみたい。妙に迫力がある問いかけに、私は頷くしかない。といっても頭の上の手が邪魔で、言葉だけですが。

「いただきます！」

お腹たぷたぷフラグが立ちました！　さっき飲み過ぎないと誓ったのにね！　神官様のお酌上手！

私のカップにたっぷりと紅茶が注ぎ込まれます。はっ、謹んで飲ませて戴きますっ。

ポットの中のお茶を注ぎきった神官様は、それを勇者様に普通に渡しました。

ようやく私の頭の上から手が退けられます。勇者様はまだ頭が戻ってきていないようです。両手でポットを抱え込みました。

「ちょっとひとっ走り、お湯をとってきていただけませんか？」

まさかのパシリ！

有無を言わさないってのは、こういうことか！　学習いたしました。

勇者様はよろよろしながら席を立ち、ポットを丁寧に持ったまま退室しました。多分、メイドさんにお願いするとか、そのあたりは全く頭から抜け落ちているんだと思う。背中が妙に哀愁が漂っていました。

扉がきっちり閉まったのを見届け、神官様は私に向き直りました。

「さて。お話をしましょうか」

何の話ですか！　うろたえますよ！

「先程、勇者に怪我の話をされていませんでしたか？」

「どこから聞いていたんですか？」

そんなに大声で話をしていませんよ！　テーブルでつぶれていたのが思わず跳ね起きてしまうほどのショックだよ。顎の当たり赤くなってないか心配です。

「入れない雰囲気でしたので、機を窺っていました」

苦笑をしながら神官様は続けた。

「私も常々、あの戦い方はどうかと思っていたところですので、助かりました」

付き合いの長い神官様だったら、もっとひどい怪我も見ているはずだ。だからこそ私は不思議だった。

「神官様は、勇者様に何も言わなかったんですか？」

神官様の眸にふっと蔭のようなものが過ぎった。

「彼を勇者にしてしまった原因の一つを私が担っているので、私が言ったところで白々しい話になるのです。この道に引きずり込んだ私が、怪我をするなと主張する。とんだお笑い種じゃないですか」

蔭の名前は罪悪感だ。それはさすがに分かった。なんだか踏み込んではいけない部分なのかもしれない。空気がどんよりしてきましたよ！

「ともかく」
神官様は翳りを消していつもの笑顔に戻られました。
「ありがとうございます」
神官様にお礼を言われたけれど、それは筋違いですよ。
「私は好き勝手言っただけですし」
しかも、結局勇者様が納得した理由が私が前に言ったはずの「血を見たくない」っていう言葉だし。本人忘れていました。罪悪感がちくちくと来ます。
「お礼ぐらい言わせてください。……まあ、ともかく、勇者は元々人を避けがちな所があるので、貴女と触れ合うことで少しでもましになればとは思います」
そうですよね頭を撫でようとして固まる人だ。
どんな生活を送ってきたんだ勇者様。

神子、過去の事は振り返らない

昔の話をしましょう、と神官様。

「……勇者として選定を受ける前の話です。彼が戻ってくるまで、簡単にお話しますね」

お二人は山奥の小さな村で育ったそうです。これはちょっと聞きました。で、その中でも二人とも浮いた存在だったらしい。容姿的な意味でかと思いきや、性格や行動的な意味でだった。

勇者様は無口で人の輪から外れていたそう。唯一の家族のお母さんとも余り触れ合わない。

神官様は知りたがりのひ弱な子供で、一日中不思議に思ったことを大人たちに質問しまくるから、だんだん面倒な子供だと放置されるようになった。あんまりあの頃は私は気にしていませんでしたが、と神官様は軽く笑う。

この話は、ちゃんと聞かなければいけない話だ。私は背筋を伸ばして、神官様の言葉を逃さないように聞く。

毎日無言で狩をする勇者様の後について、神官様は一緒に罠を作ったりいろんなことを喋っていたそうです。

選定を受ける前から、実は勇者様の回復力、運動神経や力は突出していた。けど、狭い村社会で異質なものは弾かれてしまうので、それをひた隠しにしてたとのこと。まあ二人とも放置されていたから逆に気付かれなかったんでしょうね、と神官様は苦笑していました。

そして、後から知ったことですがと前に置き、勇者は母親から怯

えられていたようです、と神官様は告げた。……お母さんに？　私の掌がじわりと汗を浮かべます。これは、本当に聞いていい話なの？

「思い返せば、彼女（ははおや）も必死だったのでしょう」

と淡々と話す神官様。その声には何の感情もない。

狭い村で小さな子供を抱えてひとり暮らす辛さ。そこそこ豊かな街の中で、のんびり自分だけで生活するのとはまた全然違う苦しさなんだろうな。でも、それは想像でしかない。私はその辛さを想像したけれど、実感としては分からなかった。

苦しい暮らしは人の心を容易に折る。

「私も欠片しか聞いた事がないのですが」

勇者様のお母さんは、つねづね勇者様に言い聞かせていたらしい。

――力を隠すこと。そしてみんなの役に立つこと。みんなの役に立つなら、あんたは人間として生きていける。

小さかった勇者様は、それにすがって生きるしかなかった。役に立たないなら、人間じゃなくなってしまうと信じていたふしがあるそうだ。さすがにそれは神官様が違うと主張して、一応は受け入れたらしいけれども。

その後も勇者様は村のみんなの手伝いをしながら、おこぼれに預かりながら生きていった。ある程度体が育つと、狩や耕作の範囲が広がり、生活が少しだけ楽になった。けれども、既にそのときはお母さんは病で亡くなっていたそうだ。

「その頃、私は勉強のために星都にいたので、詳しい事情は分かりませんが。もし先程の怪我の話に違和感があったなら、それは彼が昔から擦り込まれた考え方にあるんだと思いますよ。自分のことを、まず人間の数に入れていない」

それが勇者の選定を受け、力と治癒力が増し、更に顕著になった。神官様は溜息をついて話を締めくくった。室内に暗い雰囲気が満ちる。

理由は分かった。

あと、本人が何も言わない理由もなんとなく分かった。

私はこの話を聞いたからといって、実際勇者様の考えを変えてしまうことが出来るなんて思わない。小さい頃の癖が大人になっても抜けないように、よっぽどのことがないとそんなことは起こらないと思う。

だから、この話を聞いても、そうかあ、と思うけど、それ以外は考えない。

勇者様に同情するなんて、そんなことを私が考えるだけでも失礼だと思う。だって、その頃の勇者様の苦労は私には分からない。甘い考えしかない、ぬるい世間しか知らないただの町民、小娘です。

その上で、できることを考えてみた。

「はい、神官様！　発言よろしいですか！」

「どうぞ、神子殿。発言を許します」

ノリに乗ってくださいました。

私は胸を張って主張する。握りこぶしを振り回しながら。

「あれですね、ぜひ勇者様はもう少しわがままになっていただいた上で、生きている実感と幸せを味わうべきだと思うんですが！」

エキサイトする私。いい考えだと思うんだ！　これまでの事は変えられません。そんな考えを持っていることも仕方ない。なら、幸せになるしかない。ハッピーになれば人生薔薇色ですよ！

椅子からがたっと立ち上がり、

「これから勇者様を幸せにするために、色々作戦を練りたいんですが！」

と熱く畳み掛けました。神官様はそれはいいですね、と笑顔を見せてくださいました。

と、またノック無しでドアがこのタイミングで開きました。

気まずそうな勇者様が立っています。何故かその手にはポットのほかにお菓子っぽいものが載った皿がありますよ。

私は立ち上がったまま、握りこぶしを振り回していた途中です。

どう考えても、さっきの主張は聞かれていると思います。

うん、気まずい。

神子、しあわせについて考える

最初に動いたのは勇者様だった。手に持ったものを私に見せてくれる。

「メイドたちから神子に、だそうだ」

むっ……！　焼きたての焼き菓子ですね！　なんと！　バターの匂いがなんとも香ばしいです。この甘い香りにうっとりしてしまいますよ。ガン見してしまいます。熱い視線の先はお皿。これまた高級そうなお皿ですね！　金縁とか。割ったら怖そうだよ。

無意識に焼き菓子の数を数え始める。十二個か。つまり一人当たり四個食べられますね！　こういった計算力はあります。超素早いです。

勇者様が私の前にお皿をコトリと置きました。

え、いいの？　私が先に食べていいの？

じっと皿を眺めて、勇者様を見上げました。これほど真剣にアイコンタクトをとったのは初めてです。

勇者様が頷く。

やったああ！　私は思わず笑みを浮かべました。

手にとって焼き菓子を観察します。

できたてです！　ほっくりと割ると黄金の断面からふんわりと湯気がっ。あつあつですね。更にこの美しい黄金の輝きは、卵たっぷり！　鼻をくすぐる上質な香り付けのお酒の匂いがします。これもまたアクセントですね。エクセレントですね……！

私は一口食べながら幸せの旅に行きました。
お菓子って、ほんっと！　癒されますよね。あー、癒された。

とりあえず一つ食べきって目線を上げると、机に突っ伏して震えて笑う神官様と、何もなかったように座る勇者様がいらっしゃいました。
何で笑ってるんですか？
なんだか予想がつくけど敢えてそこはつっこまないよ！　ツッコミどころを心得ている町民です。えーわかんなーいってカマトトぶらないのがポリシーです。カマトトってなにって？　可憐な乙女っぷりを装う何かですよ。つまり私に近いけど遠い何か。私はむき出しの町民で人生にチャレンジしています。あくまで自然体をコンセプトに生きています。
……何の話だって？　失礼しました。だってまだ神官様笑ってるんだもん、横でもじもじするのも限界があります。思考が爆走しても仕方ないよね。

ひとしきり笑った後、あー、と神官様は満足そうなため息をつきながら、
「貴女の思考は、何に気を取られているかかなり分かりやすいんですが、飛びすぎですね」
と言う。んん、そういえば何の話をしていたっけ。と思い出して、私は固まる。
ああ、そうだ、色々気まずい状況ではなかったですかっ！
思いっきり、忘れてました。お菓子様は偉大すぎる！
でも今更気まずいなんて言えない。それこそ気まずすぎる……！
どうしようもない状態ですよっ。
私はさらっと流そうとしました。
が、ここでフォローをしてくださらないのが神官様だ。どんな事態でもおもねらない。さすがです。半端ない。

「で、何か遠大な計画でも？」
にっこり笑って問いかけるその姿はまさに星職者でございますね！　神々しいばかりです。でもその話は本人がいたら気まずいこと限りなし、だよ！　ちょっと横において熟成させることが必要です。後でこっそりと話すべきです。
「とりあえず、お菓子でもどうぞ。とても美味しかったですよ！」
敢えてスルーをしてぐぐっとお菓子のお皿を渡す。
ついでにもう一個取り、はむっと口に含む。ふわっと広がる幸せの味に、ああ、幸せってこんな香りをしていたんだなあとしみじみ笑みがこぼれる。
「貴女は幸せそうに食べますよね」
神官様は微妙な笑みを浮かべながらそう仰る。何かのツボだったのか、笑いを堪えている様子。わ、忘れてるわけじゃないですよ！食べるところに集中する、それが食事の作法だよ。

「神官様、それは違いますよ！」
私はあえての否定を口にした。否定って、ぐっと注意をひきつけられるよね。ちょっと知的な会話術ですよ！

「食べ物が美味しいのがいけないのです！　そう、私を幸せにする食べ物が罪作りなんですよ……！」

心からの主張です！　食べ物恐るべし。怖いよねっ。
神官様はとうとう耐え切れなくなったのか、吹いた。乙女の主張で笑うなんて、失礼ですよ！　美人台無しです。

言い切ったあとに私はじっとりと勇者様を見詰める。我関せずと言った感じで、ぼんやり窓の外を見ている様子。私の注意をお菓子に向けさせて、その隙に空気になる……おそろしい策ですね！　まんまと嵌められました。

幸せかあ。

このひとにとっての幸せってなんだろう。

私の幸せの形はとても単純だ。お菓子だったり、ちょっとあったかい日だったり、こんな他愛もない会話だったり。かなり安上がりで庶民的に出来ていると思う。別に浴びるほどお金がなくても、世界征服しなくても、幸せ。

じゃあ逆に勇者様の幸せってなんだろな？

ひとにとって、それはいろんな形をしていると思う。十人いたら全部返事が違うんじゃないかな？

平穏、財力、権力、それとも恋愛？　幸せを感じるきっかけもいっぱいある。

でもこのひとに正面から聞いてもまともに返事がありそうな気がしない。

そもそも、笑ったのを見たことがない。困惑や驚きはたまに見るから、完全に感情がないというわけでもないと思う。色々あって心を殺しがちなのかもしれないけど、観察していたら分かるようになってきたし！

そのうち、好きな食べ物でも地味に探っていこう。

恐らく長い付き合いになりそうですしね。つまり、考えることを明日以降に丸無げしました！　だって思いつかないんだもん。そのうち何とかなればいいなあ！

それにしても、この旅の終着点は一体どこなんだろう？

◆赤の大神官、本を書く

（その冊子につづられているのは、幼い子供が手習いで書いたような文字だ。

簡単に言えば字が汚い。

よいところを上げて言うなら、一文字一文字丁寧に書こうとしている努力は分かる。

インクの付け過ぎでにじみが酷い。

紙がそれほど高級なものではなく、繊維が荒いため、ペンをよく引っ掛けてしまったのだろう。

ところどころ、インクの飛沫を散らせている。

その冊子と言うよりは紙束に近いそれは、星櫃の横に隠しておいてある。

星原樹の能力か、紙が劣化する事は無い。

これが置かれてのち、筆者の願い通り三人の大神官が手に取った）

未来の、大しんかんさまへ

はじめまして、わたしは、あかの勇者様をせんべつした、大しんかんです。

わたしは、初めてのにんげんの大しんかんでした。

わたしが始めてだから、いろいろよく分からないことがあって、わたしもこまったので、次のあなたのために、書いておきます。はじめのひとは、次のあなたも、にんげんだろうっていってました。だから書きます。

星語なら、ふつうに書けるのですが、共通げんごはむずかしいです。五ばいは、むずかしいです。

ほかのひとに、見せたらいけないので、教えてもらえないから、ぶんしょうがおかしかったら、ごめんなさい。

ちゅうい！　大しんかんのあなた以外にみせたら、まおうの呪がはつどうするかも、だから、大しんかん以外には、みせないでください。とっても、大事な、おねがいです。ぜったいです。

あと、文字が汚かったら、ごめんなさい。

わたしは、星別者（せいべつしゃ）名では、【２／Ｄｓｎｋｎｎ】、といいます。

この名前が、わたしの名前です。勇者様は色がつくそうです。いいなあとおもいました。

あなたは、どんな名前でしたか？

でも、このノートをよむまえに、あなたもたぶん、わたしとおんなじに名前をなくしてしまっていると思います。わたしは、ちょっぴりさびしいきもちになりました。

あなたはどうですか？

いちど、星の中に書き込まれてしまった韻律なので、わたしたちの名前は、もうもどってこないです。星語がわたしたちの名前にな

ってしまっています。
知らなかったなら、ごめんなさい。
わたしは、知らなかったから、勇者様に教えてもらっていっぱい泣いてしまいました。
こどもがきらいと言っていた勇者様がちょっぴりやさしかったです。あかの勇者様は、あなたのころは、どんなふうに話されていますか？　わるいひょうばんが、いっぱい山もりあるひとですが、いいひとですよ。信じてくださいね。

ええっと、初めに大しんかんのやくわりについて、かきます。していたら、ごめんなさい。

大しんかんは、星神様のことばをつたえることができます。
でも、星神様は、全部は、おしえてくださいません。
にんげんが、きちんと、学ばなければいけないことは、言わないそうです。
わたしたちは、星神様とおはなしはできません。
大しんかんは、いっぽうてきにいただいたおことばを、ただ伝えるだけです。
でも、どうしても、星神様に聞きたいことがあったら、うらわざがあります。
星原樹のあるところだったら、大しんかんとして、星神様におうかがいを立てることが出来ます。でも、だいしょうが大きいです。星神様のことばをつたえるときの、二十倍はかくごしなくては、いけません。
それでも、大しんかんのことばは、ふつうのひとより、ちょっぴり星神様に届きやすいぐらいで、あまり効果はありません。
星神様は、世界を全部みてくださっていますから、大しんかんの祈りは小さすぎて、届かないのだそうです。わたしのしんちょうが、

小さいのとはかんけいないですよ。

わたしたち、大しんかんは、星神様の「声」をあずかります。星語を正確によみあげられる力と、韻律がきちんと実行できます。あと、神様のことばをあずかることができます。でも、あくまで一時的です。

いっぱい、神様がおしゃべりしたら、わたしたちのからだがもちません。たましいの、大きさがちがうから、神様にあっぱくされて、わたしたちのたましいが、けずられてしまうそうです。わたしは、勇者様の力になりたくて、いっぱい神様とお話してもらいました。でも、そのせいで、わたしはうすっぺらになっちゃったので、おなじぐらい、いっぱいおこられました。あなたも、気をつけてください。わたしたちのたましいは、とっても、ちっぽけです。あっというまに、なくなってしまいますよ。

次に、星別者のしゅるいについてかきます。

勇者様は、星神様の「手足」です。きょういの再生のうりょくと、戦う力をあたえられた、神様の兵士です。ひとと、神様のまんなかで、生きる苦しみにあえぎながら、たたかう兵士です。

聖剣は、気をつけてくださいね。星神様が、作ったものでは、ないのです。だから、聖剣といいます。星剣は、なくなってしまったときました。聖剣は、とてもとても大きな力ですが、大きなだいしょうがいります。あまり、つかわないほうが、いいです。勇者様の、存在値をうばいとる剣です。あぶないです。

勇者様は、しょうきが発生したら、出ます。しょうきが発生したら、まものが増えます。だから、星神様が、勇者様をせんていしします。そのため、大しんかんが出てから、勇者様がせんていされます。これは、きまりのようなものだそうです。

勇者様がせんていされたら、ささえてください。勇者様は大きな力をもっているひとですが、にんげんです。

神様のしれんは、勇者様に与えられます。ひとの子の苦しみを、勇者様が受けるそうです。でも、ひとりのひとが、苦しいのはふしぎだなとわたしは思います。だから、あなたも勇者様をささえてあげてください。ひとりきりに、しないでくださいね。わたしは、さいごまで、

（ここからしばらくは水のあとでにじんで読み取れない）

ので、おねがいします。ほんとうに、おねがいします。

ほんとうに、星神様とつながっているひとは、神子というそうです。尊という、とうといひとだそうです。つねに星神様とつながっていることが出来るので、わたしたちとはちがう手段で、星神様へ意思をつたえる事ができるそうですよ。

でも、めったなことではいらっしゃらないそうです。星神様がわざとつくらないと、ないそうです。はじめのひとがおしえてくれました。

まんがいち、あなたの時代に、神子がでたら、ちゅういしてください。星神様がにんげんをためしているということです。神子の目をとおして、星神様がみていらっしゃいます。

神子はよくみたら、わかるそうです？　どんなのか、そうぞうができません。これもはじめのひとがおしえてくれました。はじめのひとも、まだみたことが、ないそうです。なのにしっているのは、とっても、ふしぎです。神子は神様にいつもつながっているひとだけど、神様とお話しすることはできないだろうっていっていました。

おはなしするのと、みるのを、そこまでいっしょくたにしたら、

いきもののはんいをこえるそうです。ちょっとむずかしい話で、わかりませんでした。

ここから、わたしの話です。ちょっぴり、書かせてください。

大しんかんとして、わたしはいっぱいべんきょうしました。みじかい旅だったけれど、わたしはせいいっぱい生きることが出来ました。神様といっぱいおはなししすぎて、わたしのたましいはぺしゃんこに近いそうです。だから、このノートを書いておきます。未来の大しんかんさん、あなたも、あまり、お話しすぎたら、だめですよ。

わたしはなんでもないと思っていたのですが、おねえさんが、いっぱい泣いてしまいました。いつもはこわい、せんしのおにいさんも泣いていました。わたしはもうすぐ星にかえります。だから、せめてノートをかいておきます。

わたしはこうかいをしていないのですが、いろんなひとを泣かしてしまいました。未来の大しんかんは、しんぱいしてくれるひとを、泣かさないでくださいね。勇者様をいっぱい支えてくださいね。

わたしのおてがみに近い、ノートをよんでくれて、ありがとう。

わたしが未来の大しんかんのやくにたつために、この後にはいっぱい星語の韻律構成をかいておきます。神様の声をつたえるいがいに、あなたが勇者様のやくにたてますように。

わたし、ほんとうに、星語はとくいなんですよ。

あなたの、しあわせを、祈っています。

（この後百ページ余りにわたり旧星術および新星術の構成が記入されているが、解説までも旧星語のため、解読は困難と思われる）

神子、戦闘には参加できない

頭の上を変な馬っぽいのが飛んでいくのを、しゃがみながら見ました。ひー！　飛んでる！　あ、ちなみにあれはさっき勇者様に殴られた魔物です。何であんなのが吹っ飛ぶの。

私の背後に落ちて、魔物は消えた。相変わらずお見事です。

こんにちは、神子をやってる町民Cです！

職業は……無職よりはいいだろうって泣く泣く受け入れたよ！

無職はつらい……まあ、今も働いているかって言えば、微妙だけどね。

でもまだまだ他の人への自己紹介は、自分で出来ません。それどんな羞恥プレイですか。実態と本人のギャップがありますよねっ。

今日は荒野の真ん中で座り込んでます。

ちなみに皆さん戦闘中。

私は足手まとい以外の何者でもないので、離れてじっとしてる。

私は置物ですよ、私は置物ですよ！　どうぞお構いなく。

お枝様を持ったまま足を抱えて座る私は、一見優雅に観戦しているみたいにみえるけど、違うよ！　結構必死に観戦してます。万が一吹っ飛ばされてきた魔物を避けなきゃいけないしね！　素早さが鍛えられます。あ、石が飛んできた。座ったまま横にずれます。私の横を、石がカツン、と飛んでいきました。

こんなところで座っていて大丈夫かって思うよね！

何故かわかんないけど、大丈夫なんだ。魔物の皆さんは、何故か私を岩かなんかだと思っているみたい。基本攻撃されません。これ

もお枝様効果？　勇者様たちは普通に襲い掛かられてます。
　初めの頃は魔物を見ただけで怖くて固まってたけど、魔物は全部私をスルーしてお二人に襲い掛かっていくんだよね。私に来ても、硬直するぐらいしか出来ないから全く問題はないけど！　その状況を見た神官様が、大人しく観戦していてください、と笑顔で仰いました。私の動きが鈍いのは明らかですからね！　ありがたく観戦だけしています。あ、荷物もちゃんと見てるよ！　それぐらいは働きます。

　神官様が手に持った杖で変なドロドロをふっ飛ばしました。どろどろの核っぽいものを潰したみたいで、一撃でかたがつきました。魔物が瘴気に変わり、霧散する。今は太陽が出てるから、一瞬で消えるから瘴気は溜まりません。
　神官様、意外と肉弾戦に強いですね。服の下は筋肉なのか？　まさか着やせタイプ？　うらやましい……。私は胴回りは着やせせず、胸は着やせします。残念なことにね！
　そうこうしている間に、神官様は次は犬っぽいなにかを鋭い突きで倒しました。簡単そうに動いているけど、絶対私は無理。歩くだけで筋肉痛なひ弱町民です！　てっきり私は神官様は星術で敵を倒していくんだと思ってました。でも本人に言わせると、
「魔物が多いときは術がいいんですが、少ない時は殴った方が速いですから」
だそうです。意外と武闘派ですか、神官様。

　勇者様はさっきまで相手していた植物っぽい動く何かを片付けたみたい。
　剣がなかったら殴り飛ばしてたけど、やっぱり剣があるほうが効率的なんだって。確かに見ていると、剣で傷を与えたときのほうが消滅まで早いみたい。街を出るときに、予備で五本買ってた。陸馬さんに積んでいます。どれだけ潰すんですか勇者様。ちなみにまだ

一本目です。神官様が無駄遣いはしないでくださいねって笑顔で釘刺してた。目が笑ってなかった。あれ、怖かったです。勇者様の返事もちょっと間が開いてたから、そこはかとない圧力を感じ取ったのだと思われます！

ちなみに怪我もしないように気を使ってるみたい。理由はまあ、あれだけど、とりあえずはこれでよし！

戦闘が終了したみたいなので、私はスカートの土を払ってお二人のほうへ向かいます。怪我がないみたいでよかった。意外と見ているだけも疲れるんですよ。声を出したら魔物が気づきそうな気がして、口を押さえてじっとしてるし。ハラハラするしっ。

戦闘に参加するほうが無謀だからこれでいいんですけどね！

ともかく、やっとお仕事の時間です。本当に軽作業なんだけどね。

私は戦闘をしたあたりでお枝様を振って、

「Ｓｈ０ｗｗｋｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｆｗｗｙ０ｗｗ（瘴気は不要です）」

と呟いた。これだけでなんと！　薄い瘴気だったら、お枝様効果でなくなっちゃうのだ！　すごい！　私でも出来るぐらい簡単です！

小さな瘴気でもコツコツと消していけばいつか世界のためになるかもね！　という程度のことだけど。とりあえずただ飯は食べられません。働くよ！

なんとなく役割分担が出てきた今日この頃です。

あの初めて勇者一行になった街を出て、既に二週間が経過しましたよ！　時間の流れって速い！

結局あれから自分の評判がどうなってるか怖すぎて、ひきこもっ

てましたよ。あ、領主様の館はさっぱりしてた。エロ彫刻は撤去されたり、売りに出されたり、譲られたりしたらしい。だ、誰が引き取ったんですか！　地味に気になります……。すっきりしたお屋敷、そのメイドさん評判は上々だった。掃除をしやすいんだって！　ですよねー。彫刻があれば、肩とか、胸とか、いろいろなところとかに、ホコリ溜まりますからね！　私の彫刻があるとすれば、胸は掃除しなくていいけどね。……自分で言って辛くなりました。いや、それ以前にそんな彫刻があれば私は泣きながら壊してくれと勇者様に頼みます。私の力じゃ壊せないのが分かっているからこその勇者様頼み！　一生懸命お願いしたら聞いてくれるよね。基本、融通が利きます。

お屋敷では、落ちた体力を戻すために部屋で飛び跳ねてたら、勇者様に見つかって心配されたり（頭の中的な意味じゃないですよね？）、メイドさんに謎の笑顔で見守られたりしましたが、おおむねのんびりと過ごすことが出来ました。ごはんが美味しかったから、去りがたかったけどね！

数人だけで見送られて旅立って二週間、選定による体質変化のためか、服は本当に臭くない。凄いな！　逆にホコリで汚れちゃう方が問題のようです。後、ご飯もちょっとだけで満足するようになっているのが実感できました。実感は出来たけど！　出来たけど！　私は食べます。量は減らしてるけどねっ。やっぱり、人間食が基本だと思いますよ！

陸馬さんがポー、と鳴きました。あ、ご飯の時間ですね。私じゃなくて陸馬さんのだよ！　幾ら食べるのが大好きだって、そんなに頻繁に食べてはいない！

餌を、陸馬さんの背中に置いた荷物からごそごそ出します。お世話は私が係ですよ！

それを見たのか、

「休憩しましょうか」
爽やかに神官様が仰います。勇者様もこちらへやってきました。
たまに、神官様、戦闘後にすっきりした顔をされているのにつっこんでいいんだろうか。ストレス溜まってるんだろうなあ！
こんな風に、のんびりと荒野の旅が続いています。

神子、忠告される

草をもごもご食べる陸馬さんの横で私も座り、パンの欠片を口に入れる。

硬く焼いた日持ちするパンはとんでもなく硬い。日持ちさせるために、水分をわざと飛ばして焼いている。これはこれで独特なちょっとすっぱいパンなんだ。水をちびちび一緒に飲みながら、ようやく噛めるぐらいの硬さに戻る。このちょっとじゅわっとしたところが好きです。これはこれでいける。

座り込んでくつろぎ姿勢の私と、先程の戦闘で使った剣を簡単に手入れしている勇者様と、地図を広げだした神官様。無言だけれど、ようやく気詰まりじゃなくなってきました。単に慣れたともいえるんですがっ。

神官様が地図を見ながら、

「……次の街は、あまり貴女を連れて行きたくはないんですが」

と仰いました。何でですか？　私はパンを噛みながら見上げます。

神官様は苦笑しながら地図を指して、大陸の中央付近を私に見せる。

「この辺りが、つい先日までもっとも栄えていた部分です」

一番大きな大陸の、丁度真ん中ぐらい。星都の上当たりだった。

「ここがまず魔物の被害にあい、壊滅的なダメージを受けました」

指でぐるりと描かれた範囲は、意外と大きな部分でした。

「壊滅的って……」

そういえば、パン屋を休む話をしたとき、おかみさんの娘さんが隣の大陸から逃げ帰ってきたな、と思い出した。……まだ一月たっていないのに、ものすごく昔みたいな気分になるけど。ともかく、私が住んでいた街の隣の大陸は、まさに星都のある一番大きなそれ

だった。

「魔物の群れに巻き込まれ、街が幾つか消滅しました」

私の頭の中に、火と血と魔の踊る風景が染みのように浮かびあがる。かつて家だった焼け焦げた残骸はまだ火の気を孕みくすぶっている。崩れた石垣、壊された生活用具。散らばる食料に目もくれず、人々を襲う魔物たち――まさに悪夢でしかない、風景。幻のように立ち上ったそれは、はじまった時と同じように唐突にそして一瞬で、あわい湯気のように消えてしまった。

瞬きよりも短い間に見えた光景に、私の体は硬直する。

「……どうしました？」

神官様が訝しげに私の顔を見る。私は何のことか分からず、首を傾げた。

「顔が真っ白ですよ」

私は何とか噛み切ったパンをごくりと飲み込んで、

「大丈夫です！」

と告げた。ちょっと食欲が落ちましたけどね！

生々しい幻だったな。想像力が豊かって言うレベルじゃないね！

今のはなんだったんだろう？

もしかして昨日見た悪夢とか？

まるで私の記憶のように、見覚えの無い光景が立ち上るとか！

ふだんの物忘れが激しい私への自分からの挑戦状かもしれないっ。

負けないっ。自分に負けないっ。

「……体調が、悪くなったらすぐに言ってくださいね」

まだ心配そうな神官様に、首を勢いよく振って了解を示す。心配をおかけしましたっ。大丈夫ですよ！

「ともかく、これから回る地域は、比較的被害があった部分になる

という説明は、先日しましたよね」
「多分聞いた気がします！」
私はイイ笑顔で答えました。神官様はにこりと笑って言葉の語尾を疑問系から念押しに変えてきました。
「説明しましたよ」
「……もう一度お願いします先生！」
二度手間、申し訳ないです。

神官様は根気強くもう一度教えてくださった。
あの時は地図がなかったから、なんとなく「へー」と聞き流してしまったんだよね。とりあえず一緒に地図を眺めながら説明を貰います。
どうやら勇者様稼業というのもむずかしいらしいです。片方の地域を回りすぎても、「こちらへは何故来てくれないのか」と言う声が上がったり、「ひいきだ」といわれたりするそうです。

とりあえず、大陸中央部に走っている動脈のような重要な街道を安心して使えるようにするのが優先なんだって。これが開通しない限りは、物流も人の流れも滞って、復興が遠のくそう。今いるのもその関係の場所らしい。そういえば、多少歩きやすい道でしたね。
各方面にバランスよく回りながら、みんなの安全を確保する。
わあ、聞くだけで胃が痛くなるじゃないですか！

「旅の途中の私たちに直接依頼があるわけではないのですが、星都や主神殿に高貴な方々から突き上げが来るそうです」
で、順繰りに回っているそうです。大変ですね、有名人も！　無名でよかった私！
「最近は、あなただけよこして欲しいとか言うこともあるそうです。もし、そんなことを言われても行かないようにしてくださいね」
「え？　私ですか？」

逆にビックリですよ。ただの枝持ちですから！　役には立ちませんよ。

「貴女も微妙に噂が一人歩きしていますからね。美味しいご飯に釣られたりしたら、ぱくりとやられてしまいますよ」

ぱくりってなんですか。可愛らしく言っても、黒い何かしか伝わりませんよ！　それにしても酷い。私、どんなにご飯に釣られると思われているんですか！

「そんなに子供じゃないですよ」

さすがに反論する。

　すると意外なところからツッコミが入りました。

「合計六回」

勇者様がぽつりと呟きを落としました。

「六回？」

何のカウントですか？　私は神官様のほうに乗り出しかけていた体を引き、勇者様にジト目を向ける。勇者様は剣の手入れを行いつつ、続きを口にした。

「先日の領主屋敷で、メイドから菓子を貰って食べていた回数だ」

「知ってる人だし、ついていかなかったですよ！」

ちゃんと確かな人からしか貰ってないよ！　心外な。でも実際は六回以上いただいた言う真実は、私の胸に仕舞っておく。

　私の反論に勇者様が続けて、

「知らない人から貰わないのは基本だ。あと、すぐに警戒心を解いてろくに知らない相手を部屋に入れない」

む？　私が常にそんなことをしてるとでも？　記憶にございません。だけど、私の不満げな顔を見た勇者様が、

「旅についてくる前に、あっさり信用して部屋に入れようとしたのはどこの誰だ」

えー……？　しばらく記憶を探します。探します……。

「そんなことありましたっけ？」

ぶっちゃけ覚えてません。勇者様は無言になった。呆れているのか

どうなのか、なんだか辛い反応ですよ！　なじるなら、なじってください！　生焼けの魚ぐらい辛いっ！

神官様が、

「とにかく、着いていかない、物を貰わない、さあ、復唱してください」

「着いていかない！　物を貰わない！」

わたしはやけくそになりながら復唱した。ちゃ、ちゃんと覚えますよ！　何でそんなに懐疑的なんですか。

「神官様、私は幼児ですか！」

「幼児ぐらい物覚えがイイ事を星神様に祈りましょうか」

うっ。心をえぐる言葉でした。

「ともかく、名前を利用しようとしているもの、実際にこまっているひと、様々なひとびとがこれからも関わってくると思います。次の街は、特に治安が悪化しているらしいです。近づいてくる人物は、ある程度の見極めは私でしますから、貴女は自分の身を守ることを考えてくださいね」

真剣な忠告に、私は頷くしかありません。

それにしてもどこから噂を仕入れてきているんですか！　謎です。

とりあえず、知らない人に食べ物を貰わない。

心に刻みました……。

微妙に……ツライ！

神子、観察してみる

私は歩くのが遅いので、大体陸馬さんに乗って移動している。あれから二回ぐらい戦闘はあったけど、私は相変わらず空気としてひっそりすごしました。

今のところ、時々ヒヤッとするけれど、戦闘で恐怖を味わった事はない。半端ない安心感です。さすが勇者一行！　凄いね！　私はカウントに入れなくていいけど。

それにしても魔物って、見た目がグロテスクだったり変な汁とか飛ばしていたりするけど、何故か余り臭くはないんだよね。

でもなんで岩とかがじゅわっていいながら溶けかかる汁を飛ばすんですか！　危ないじゃないですか！

戦闘が終わったら、不思議と汁や血っぽい何かまで、綺麗さっぱり瘴気になって消えるんだよね。瘴気はピンク過ぎて出来る限り吸い込みたくないからないからくんくんしてみたことはない。けど、お二人が言うには特に匂いがないらしい。私は見えるから避けまくっています。ごめんね！　どちらかと言うと魔物より陸馬さんのほうが獣臭いぐらい。

神官様によると、魔物が生物かどうかは、専門家の間でも意見が分かれているんだって。何の専門家ですか！　それも聞いてみたらどうやら魔物研究のひとがいるとか。どの分野でもマニアックな人がいるんですよ、と笑顔で言われました。今度、機会があれば本を見せてくれるそうだ。『たのしくがくしゅうシリーズ！　ふしぎないきもの、きょういのまものじてん』とかが私にお勧めだとか。地域ごとの魔物の特色がでているので、魔物も気候に影響されるのか何とか。詳細な説明はともかく、……なんだかまた子供向けな気が

する題名なんですが。そこはツッコミ待ちですか？　神官様の読書の範囲が分かりません。そういえば、前に廃墟で拾ったものまで目を通していたよね。ある意味突き抜けすぎてます。

それはともかく。魔物自体は怖い。でも比較的私がけろっとしているのは、戦闘が終わった後に魔物が綺麗に消えてしまのがかなり大きいです。

生々しさがかなり薄まっていると思う。それじゃなかったら、切り裂かれた魔物の死体が転がる光景にびびってた。トラウマものです。戦闘のたびに勇者様が魔物の血まみれ肉まみれだよ！　斬ったり殴ったり裂いたりしているから。血まみれ勇者様……そんなホラーはお断りだ！　あ、神官様は杖で殴っているから返り血はないみたいです。さすが星職者。違うか。

結局、神官様が話していた街には、半日ぐらいで到着しました。

城門の上に、ブロンザイトって書いてる。分かりやすい表示ですね！　これで地図のどこか悩むことはない！

神官様が言っていた、魔物の襲撃は、たびたびあるみたい。城壁や周りの地面に跡が残っている。魔物は消えるけど、それにあたえられた損害は消えない。

街を囲む城壁は焼け焦げがあったり、崩れているところを無理やり補修したりしてるのが分かる。周りの木や草も焼け焦げがあるところを見ると、火をはく魔物か、火の星術を使う人がいたんだろうな。あまり、街の近くで放火はしないでくださいね！　よその街のことながら心配になってきた。

そういえば、神官様はそんな星術は余り使ってるのを見たことがないなあ。星術の系統は、神殿で勉強したよ！　火を出したり氷を

出したりして攻撃する人もいるらしい。神官と魔術師の違いもいろいろ書いていたけど、私は半分しか覚えてないです！　サボっていたんじゃなくて、半分で勇者様がお迎えにきたんだよと主張します。居眠りはしそうになったけどねっ。興味ない事を聞くのって、何であんなに辛いんだ……。

それはともかく、街に入るには手続きが要るのですよ。

門は昼間なのに狭くしていて、門番さんが検問をしている様子。隊商の人たちが列を作って待っていた。その後ろに私たちも並ぶ。

私は物珍しさからきょろきょろ周りを見ていた。商人さんと目が合って微妙な顔をされたけど気にしない！　田舎もので申し訳ないです！　まだまだよその街は珍しいんだ。

街の大きさは、ここから見るぶんには前の街と変わらないかな？　ビックリするほど大きな街じゃない。周りに農地見えないから、多分交易が主体な街なのか、逆側に農地があるかだと思う。美味しい名物とかありますかっ。前、貸し本屋さんで旅行記を読んだことがある。旅行と言いながら、グルメ探訪を主にした本だった。その表現が秀逸で、また挿絵が美味しそうなんだ！　あの本のせいで私はご当地グルメって言うやつに並々ならぬ興味があります。でも街の外に出ると思っていなかった頃だから、どこの街が何が美味しいかさっぱり覚えてないですけどね！　もっとチェックしておくんだった。

手続きに思わぬ時間が掛かっているみたいで、かなり暇です。太陽が少しだけ傾いた頃ようやく順番が回ってきた。それから神官様と門番さんがお話しています。場所によっては税金が必要なんだって。

この街では特に勇者一行と名乗らずに入る予定だと説明を受けました。何でかは分からないけれど、神官様がそういうならそっちの

方がいいんだろうな。

神官様が護符を出して話をしている様子。星神殿の人を疑うことは余りないから、身分証明にいいんだって。確かに初めにお二人と話したとき、私も護符を見て安心した気がする。門の詰め所の兵士さんたちは、みんな疲れているみたいだった。空気がぴりぴりしているのが分かる。魔物のせいだろう。

私はなんとなく不安になって勇者様を見たら、この人はいつも通りだった。それに安心をする。今回はよそいきモードではないみたいで、普通に無表情のままです。これに慣れてきたのはいいことなのか悪いことなのか、どっちかは分からないけど。これもある意味進化！　私も日々、グレードアップしています。

青い鎧は分厚いマントでほぼ見えないから、勇者様も普通の旅人っぽく見えるはず。真っ赤な鎧とか金ぴかのマントとか売っているって武器屋のおっちゃんに聞いたことがあるから、派手な色の鎧は思ったよりも普及してるのかも。でもそんな派手な格好をしたら、魔物の標的にならないのかな？　普通に不思議です。

長い交渉が終わり、神官様が戻ってきた。笑顔に少しだけ疲れが見える。お疲れ様です。

うながされてやっとくぐった門の中の風景、それに私はもやっとしたものを感じた。

なんだろう、この街の空気。

何か、変だ。

神子、知らない街に警戒する

何に引っかかりを感じたか分からないまま、私はぐるりと周囲を見回した。

往来にはそこそこの人の数。でも女の人は少ない気がする。余り外出していないのかな？

空気はいがらっぽい。みんなが歩くたびに砂埃が巻き起こって、黄色っぽく風が染まる。肌とかに砂がつきそうでイヤだなあ。

建物は、前に見た町と大して変わりがない。距離的に離れてないから、地形がほぼ同じだ。そういった場所では街のつくりは変わらないそうです。海辺とか、山間とかだったらさすがに変わってくるらしいよ。凄いね！　このあたりの知識は、お察しの通り神官様の受け売りです。絶対、雑学王だと思う。歩く辞書だと考えそうになります。

まだメインストリートを抜けていない。私は陸馬さんの上でまだキョロキョロする。

がたがたと荷馬車を引いて陸馬が通り過ぎる。隊商の商人たちだ。あの陸馬さんは派手なオレンジでした。本当にこの種族は一体保護色をなんと考えているんだろうね！　可愛いからいいけどっ。

違和感の正体をつかめず、私は首を捻った。

「ちゃんと前を見てくださいね」

横を歩く神官様に注意を受けました。

「了解しました！」

背中を伸ばして前を見ます。前を見ながら、

「何かこの街、変じゃないですか？」

神官様に質問です。先生、教えてくださいっ。でも返ってきた答えは、

「何が変だと思いますか？」

まさかの質問返しだった。うむ。

そういわれてもう一度考える。建物の前に溜まる人々を見る。中を恐る恐る窺っている様子。中から酷い罵声や破壊音が続いている。喧嘩だろう。

「……昼間っから、酒場で喧嘩してますね」

これが深夜なら、住んでいた街にでもたまにあった光景だ。でもこんな時間から飲んだくれが徘徊してるってどうなんだ。太陽はまだ頭上に輝いて、真昼間ですよ！　酔っ払いっぽい人がうろうろしているのも、一人や二人なら分かるんだけどこんなに大人数なんて初体験です。皆お酒を飲んでご機嫌じゃなくて、暗い目をしている。目が、何かどんよりしているんだよ。楽しいお酒じゃないのがよく分かる。

それに気付いて、私は改めて周囲をぐるりと見回した。

ああ、そうか。

笑っている人がいない。

なんだかみんな俯くか、暗い顔をして歩いている。立ち話をしている人たちも、深刻そうな顔をしている。まあ、ニコニコして歩く人も少ないとは思うけど、この陰気率は異常だ。たぶん空気に色をつけたら薄ぼんやりした灰色になるかも。暗い！　この街暗い！

「あと、なんだか全体に暗いというか」

一つに気がつくと、だんだん、他のことも気になってきた。

あと、路上生活者の人が多い。裏の路地だけではなく、メインストリートでも俯いた人々が道のすみっこに座り込んでいる。大体は町長さんや領主様が保護するハズの人たち。

私の視線を追っていったんだろう、神官様が、
「壊滅した街の人々が、難民となって周囲の街に流入したんです。しかし、着の身着のまま逃げ出した人たちにお金があるわけがなく」
こうなってしまったのだ、と。路上生活をする人を指しているのが分かる。
視線の先にはやせ細った子供がいる。明らかにボロを纏った、難民と分かる子供だった。あ、子供が人にぶつかった。案の定怒られて突き飛ばされる。子供は幸い怪我がなかったのか、すぐに立ち上がって走り去った。
その小さな背中をぼんやりと見送っていると、先程子供がぶつかった男が怒りの声をあげた。スリだ！　チクショウ！　私は思わずもう一度子供が去っていた方向を見たが、もうその背中を見ることは出来なかった。怒り狂う男に対して、周囲は冷淡だ。掏られるほうが悪いと、歪んだ笑いを向ける人すらいる。
この光景がこの街でのいつもなんだろう。
私は今まで比較的治安のよい場所で住んでいたから、こんな風に日常の中に犯罪が溶け込んでいることにビックリした。
「ないときは、あるところから奪い取れ、だそうですよ」
神官様が疲れた雰囲気で零した。星職者としては複雑な心境なんだと思う。星神様の戒律になんかあった気がするし。
「だから気をつけろ」
不意に勇者様が口を開いた。滑らかな声は喧騒の合間を縫ってきちんと届きます。勇者様は実は陸馬さんの手綱を持ってくれている。私のほうをちらりと見て、勇者様は続けた。
「お前はこの街において弱者だ。狙われる」
そうだよね！　明らかに私は弱いのがよく分かります！
私は頷いて、
「気をつけます」
とお返事しました。

覚えていますよ、食べ物を貰わない！　知らない人についていかない！

あれだけ心配されたのも判る気がしてきた。

「国の方針として、廃墟となった街を復興させるためには元の町民達を送り返したいらしいのです。しかし、安全が確約できない上に、恐ろしい思いをした故郷へ帰りたがる者たちはいません。結果、何もかもが宙ぶらりんになったままなんでしょう」

神官様が悲しそうに仰った。

実際、彼らはどこにも受け入れられることがなく、難民となってしまうことが多いそうです。たまに良心的な領主様がある程度食糧を配給したとしても、それだけでは難民達には足りません。難民達は生活苦のために犯罪に手を染める。結果、難民を受け入れた街の治安が悪化し、難民達が更にうとまれる。悪いことが悪いことを呼び、どんどん悪くなっていくそうです。

「それだけに、主要街道周辺を安全区域に戻したいのですが」

なかなかです、と神官様の声が空気に溶けるぐらい弱弱しかった。

相当参っているらしい。

「街道の安全って、どうやって守るんですか？」

私の質問に、神官様は答えてくれようとしたけど、先に宿についてしまったようです。

「またあとで、ですね」

いつもより高級な宿みたいなんですがっ。陸馬さんを預けるお金もかなりの金額だった。きちんとした宿じゃないと危ないんだそうだ。

なんだか、違う世界に来てしまったみたいだ。

私は漠然とした不安を抱えながら街の風景を見回した。見慣れているはずの、普通の街に似た場所なのに得体の知れない何かがありそうで怖い。

そのとき、軽く背中を掌で押された。いつの間にか横に立っていた人を見上げる。勇者様だ。

「疲れたか？」
「大丈夫です！」
気を使わせてしまったかな、と思って、反射的に元気に答える。ならいい、と再度軽く宿に入るように促された。

街の雰囲気に飲まれている場合じゃないよね！
よし！　気合を入れていくぞっ。
握りこぶしを作って気合を入れてたら、勇者様に不思議そうに見られた。
そんな目で見ないでくださいっ。

神子、宿を観察する

宿で取れたお部屋は一つでした。

いつもは一応、男女別とかにしているんだけど、空いてないものは仕方ない。

みんな安全を求めてある程度の宿に泊まろうとするらしい。私でもお金があればそうすると思う。

別のところを探すかとお二人が話していたので、私が「一緒でも全く気にしない」と主張しました。逆に「気にしなさい」と神官様にツッコミを受けたけど。えー、経済的だと思いませんか、三人一部屋！　一人一部屋の時より、一人頭三割引ですよ！　つまり、ご飯一回分以上なのだ！　それを主張したら、神官様に計算は、速いんですねと誉められた。計算「は」のところが強調されたように聞こえたっ。誉められたけど、釈然としないです。

チェックインの時、宿の人に勇者様が変なことを言われてました。ちょっと離れていたけど、私は恐怖の地獄耳を持っています。聞き逃さないよ！

従業員はかわいい子連れてお楽しみですね、両手に花状態だとか言ってました。言う度にこっちを微妙な目線で見るんですよ！　そんなんじゃないですって。微妙に誉められたような気もするが、これも嬉しくない。なんかさっきから嬉しくない誉められパターンばっかりですね！　あ、勇者様がイヤなんじゃないよ！　なんだかあの従業員のひとの目線がねっとりとこう……品定めをするみたいでイヤだったんだ。鼻が大きい従業員の男の人だった。鼻を引っ張ってぐりぐりしたくなります。しないけど。

そういえば、こういった下ネタ話題を言われるのは勇者様が担当ですよね。領主様も一生懸命勇者様にナイトフィーバースポットを説明してたなあ……結局、あの情報は役に立ったのだろうか。聞い

たら聞いたで、また注意されそうだから言わないけど。逆に神官様はああいったことを言われない様子。雰囲気とか？

んん？　今何かに引っかかった。

さっき勇者様は両手に花といわれてました。

両手に花ということはっ。……神官様、また女のひとだと思われてるみたいですね。普通に喋ってるのに！　美人とは、悲しいものよ……。ご本人は気付いているのかいないのか、はたまたいつものことなのか、スルーしていましたが。

とりあえず部屋の中に入る。

すぐに勇者様が窓やドアを確かめはじめた。鍵の辺りを念入りに見たり、蝶番を触ったり。

なんだろうとジッと見ていたら、気付いて説明してくれました。どうやら変な仕掛けがないか調べてたらしい。なんですかそれ！　どうやら治安の悪いところだと、外から開くように仕掛けがされているときがあるそうだ。怖いなあ、という反面、勇者様は何故調べられるのかとまた疑問がわきましたよ！　このひとも出来ることの範囲広すぎます。

神官様が星術を使い始めた。しかもちゃんと消せる白墨で、床に何か書いてまで術を使っていました。この部屋に結界を作ったらしい。簡単に侵入できないように、とのこと。持続するように書いてるんだって。奥が深いですね。

それにしても、荒野を旅していたときよりかなり警戒が凄いんですが……。まあ、荒野ならお枝様を地面に刺しておけば魔物避けになるらしいから、わざわざ結界を張る必要がないのもあるけど。お枝様はいつも通り布でぐるぐる巻きの封印状態だよ。

それにしても、お二人のこの警戒。そこまで街って怖いところなんだろうか。

犯罪のとか、雰囲気とか、変だなあって思うぐらいなんだけれど。
私は思わず、
「厳重ですね」
って率直な意見を言ったら、神官様が、
「魔物相手の方がまだ気楽でいいかもしれませんね」
とぽろりと零されました。その気持ちがちょっと分かってしまう。
だって、襲い掛かってくる魔物は単に撃退すればいいだけだけど、
泥棒さんは捕まえるにしても怪我させていいかどうかも悩むしね！
「……いえ、すみません、さっき言ったことは忘れてください」
神官様が落ち込んだ様子で付け加えた。
「大丈夫ですっ。忘れるのは得意ですから！」
胸を張れることじゃないんですがっ。落ち込まないでくださいね。

私も部屋を調べてみた！　といっても、家具とかを眺めるぐらいだけど。床は石、壁は木で出来ています。丈夫そうだね！
小説でよく読んだ、床には実は穴が開いて隠し扉がっとかはなさそうです。床を叩く私を、勇者様が微妙な表情で眺めていました。
私は想像力が豊かなんですよ！　ここに落とし穴があったらどうするんですか！
「床には何もない」
「穴とかないんですか？」
「見れば分かる」
えー。私はちょっとガッカリしながら立ち上がりました。でも見れば分かるってどういうことなんだろう？　トラップを見抜く技術を持っているんですか？　あっても驚かないけどね！

ベッドは二つ、大き目のソファーが一つ。申し訳程度の小さなテーブルが一つ。椅子はソファーがそれをかねてるんだろうな。一応、ソファーでも寝れるように、毛布が一枚付いていた。
これで三人部屋と主張するとは！　宿の人は変な笑いを浮かべて、

ベッドは少なくてもいいですよねとか言ってたな。こんな狭いベッドで一緒に寝れないよっ。簡素な寝台は、思ったよりは汚くなかった。一応掃除はしているみたい。でも、あんな料金を払ったらもっといい宿かと思いました！　私の住んでいた街の平均より、四割増は高かった。

寝る場所について、「ソファーでいいです！」と私は主張しました。だって、どう考えても体格的に私だったらちょうどなんだもん。勇者様だったら絶対足がはみ出る。まして戦闘ではお二人しか働いていません。私はゆっくり陸馬さんの旅を満喫していただけなのだ！　動いてもないよ！　だからソファーで問題なしと思った。

でもこの意見に、お二人と言うか意外なことに勇者様が首を縦に振らなかった。

「体調を崩すかもしれないだろう。ベッドで寝ればいい」

「私はさっきまでずっと陸馬さんに乗ってました！　それほど疲れてませんから、ソファーで大丈夫です」

こんな感じで、ベッドに寝ろ、ソファーでいいのエンドレスな会話に、神官様が笑顔でざっくり終止符を打つほうが速かった！　いつも通り言葉にナイフの切れ味がありますよね！

「入口近くのソファーには私が寝ます。真ん中の寝台に貴女が寝なさい。勇者は窓際の方で。そのほうが賊の侵入に対応しやすいでしょうし」

そして笑顔も安定の迫力を備えています。

私はその内容に、私は思わず声を上げた。

「賊前提ですか！」

「ええ、賊前提です。警戒心は持って置いてくださいね。この街は……」

神官様は言いよどんだけど、続きを付け加えた。

「……人の心が、堕ちつつありますから」

神子、伝言を受け取る

神官様と勇者様は、それから程なくして外出しました。

私はお留守番です！

いろいろ調べたいことがあるんだって。二人が出て行った後はきちんと戸締りするように、と言いつけられました！　……やっぱりものすごい子ども扱いですか？　一度お二人の中の私への認識を聞いてみるべきかも。

窓を開けて、外を見てみる。王宮や神殿は綺麗なガラスがはまっていたけれど、そんな高級なものは宿にはない。木の扉が付いてるだけだ。ぜったい蝶番に油差してないな！　ギギギって耳に痛い音をしながら窓がやっと開く。

重い窓を開けてみた街並みは、たたずまいこそ本当に前の街とそれほど変わらない。なのに、この灰色の雰囲気はなんなんだろう？

これだけでなんだか息苦しいな。

路上で座り込んで、うつろのままに空を見上げる人たちを見たら、胸が痛む。何とかならないかな、と思うけれど、私が何とかできるわけない。

私はなにか凄いものを持っているわけじゃない。財力があるわけでもないし、知恵があるわけでもない。勇者様達みたいに、戦闘力があるわけでもないし、術を使えるわけでもない。出来ないことの方が多い。所詮町民です。才能なしの判定も受けてるしね！

だからこそ持っていないものを数えるより、できることを数える方がいいなって思って考え方を変えてる。強制ポジティブだ。

空を仰いでその高さを嘆くより、何か一つでも出来ることを探して地面を睨む方がいいと思う。裏のおばあちゃんも言ってました。おばあちゃん元気かな。あれからずいぶん遠くへ来たものです。

どっちにしても考えていても駄目だよね！　お腹が空くだけだよね！　と思考を切り替えて、とりあえず荷物整理に励むことにした。無駄に腕まくりとかしてみる。やる気を体現するよ。

いくら体から老廃物が出ないからといっても、砂埃とかで服がドロドロだから洗濯場を借りなきゃいけないし。さっき、宿に泊まる時に洗濯場のこととか、体を洗えるかを聞いておいてよかったね！

とりあえず出来ることがあったほうがいいかも。いろいろグルグル考えるのは正直苦手です。気分が落ち込んで、駄目になっちゃうから。

自分の荷物を整理してから、そういえば、お二人の服とかも洗ったほうがいいんだろうか？　と思い至る。出かける前に先に了解を貰ったらよかった！

昔、パン屋で同僚の子が「お父さんに勝手に下着を洗われて恥ずかしかった！」って言ってたから、家族と言えど恥ずかしいものみたいだし。でも何でお父さんが下着を洗う状況に至ったの。

今更凄く気になります。手紙で聞きたいぐらい気になるな！

でも手紙って意外と高級品だね。丈夫な紙もお金が掛かるし、送るのもお金が掛かる上に今の状況だったら本当に付くかどうか分からないみたい。ちょっとだけ郷愁が顔を覗かせる。手紙っていいなあ。あこがれるよねっ、遠くに旅立った友達からの手紙が来るとか！　この場合は残念ながら私が書くほうだけど。書いてみようか……と頭の中で文章を考えてみた。

けれど、現状を説明できない！　何を間違えたか勇者一行ですよとか、絶対嘘だと思われる！　当初言っておいた場所と違う街にいるし！　手紙も出せないのかなあ。

そんなことをつらつら考えながら荷物整理をしていると、ドアがノックされた。

「……はい」

今までの言いつけとかで、私は警戒をしながら返事をした。
「この宿の従業員です」
確かに聞き覚えのある声だった。
ドアをチェーンをつけたままでちょっとだけ開けてみたら、さっきのいやな笑いをする男のひとだった。そのお鼻でよく分かりますよ。
狭い隙間から、小さく折りたたんだ紙切れを差し出してくる。
「お連れ様から手紙です」
え？　手紙？　こんな狭い街の中で？　しかも、わざわざ紙に書いて？　いくら私が手紙をほしいと思ってても、こんなに身近にいる人たちから貰ったら戸惑いが先に立つ。
私が不思議に思ったのが伝わったんだろう。慌てたように宿の人は付け加えた。
「伝言でさあ。ちゃんと渡しましたからね！」
「はあ……」
でも伝言するぐらいだったら、部屋に帰ってきてくれたらいいのに。神官様とか、無駄が嫌いだからこんなにまどろっこしいのしさそう。
私は首を捻りながらとりあえず手紙を開く。
『急用が出来たので、こちらに至急来て欲しい』
簡素な文章は共通語の殴り書きだった。その下には簡単な地図が付いている。うーむ。ぶっちゃけ、方向音痴なんですがっ。よくよく読んでみると、それほど離れた場所ではないことがわかった。これなら行けそうかな？
私は最低限の荷物を手に取り、先ほどまで拡げていたものを簡単に片付けた。窓を施錠して、部屋も戸締りをする。お枝様は邪魔だし、街中では使わないだろうから置いていく。ここに置いていたほうが結界もあるし安全だよね！　わたしの背の高さと同じぐらいあるお枝様、普段持って歩くのって実は邪魔です。でも仕事だしねっ。
部屋の鍵は一応預かっていた。内側からもチェーンとか付いているから、中で閉めるときはそっちを使うんだ。

本当に用事ってなんだろうと首を捻りながら、私は街に出かけていった。

神子、さすがに危険を悟る

纏わりつく視線が、大変うっとおしいです！

私は敢えて周りを見ずに歩きますよ。

だって凄い視線を感じる！　前に勇者様達といた時にあった、お姉さんたちの厳しい視線とは別のイヤラシさがある視線。全身トリハダたちまくりだよ。どう見てもいいカモが歩いているぜヘッヘッヘな目線ですね！　怖いって！

柄が悪いっていうんですか、なんか通り自体がすさんだ雰囲気です。気力をなくしたように座り込む人たちがちらほら見えて、道にゴミが沢山溜まっている。それがなんともいえない嫌な匂いを発しています。道も、建物も汚れている。でもそれを掃除しようと言う人がいない。皆何かに必死だった。でもそれは決して幸福な方向に進んでいる人たちの表情じゃなかった。

――人の心が堕ちかけています。

神官様の苦しそうな言葉が、頭の中に甦った。何とかしたい現状なのに、なんとも出来ないのを知っているもどかしさ。それが詰まった言葉だった。

この雰囲気のことですね。瘴気とはまた別の重い空気が街の中を包み込んでいる。当たり前のことが当たり前じゃなくなっている世界に、私はここに出てきたことを後悔しました。どうしようかな、帰ろうかな！　でもね、なんだか後ろに気配を感じるんですよっ。小動物並みに最近気配に敏感です。何かが研ぎ澄まされてきてるのかも！　うそです、調子に乗りました。

どっちにしても、この街では私が浮いているのが分かる。

ぎゅっと簡単な荷物を入れた小さなカバンを胸に抱え込みました。
手に汗をかいているのが、分かる。
目立つといっても派手な格好しているとかじゃないです。さすがに神子装束じゃないよ！　あんなひらひらは怖くて着てません。
自分の街を出てくるときに買った丈夫な旅装束だ。これなら多少の運動でも大丈夫！　かかとの低めのブーツだしね。だから今みたいに小走りで進めるのだ！　わずかに息が上がっております！　勇者様並に体力セレブになりたいものです。むきむきはカンベンだけど！
普通の格好でも、この街では目立ってしまう。

だって、女性自体が歩いていない！　これが指している事に、さすがの私でも薄々気付くよ！

つまり、出歩くことが危険だと言うこと。

うあー後ろにまだまだ誰かの気配がある。

このまま宿に帰るなら後ろの人たちとすれ違わなきゃいけないんだよね。それもさすがに怖い。
焦りながら地図を見る。
この地図の指しているところ、もうすぐなんだけどな。
進むか、戻るか。私は背後の気配に追い立てられるように道を進んでしまう。焦りと緊張に頭が全く回りません！　ヤバイという単語が、ぐるぐる頭を回るばかり。焦りだけが空回りですよ！
だんだん細くなっていく路地に、これはヤバイと実感が沸いてきたあああ！
勇者様神官様ごめんなさい！
先に謝っておきます！
犯罪にがっつり巻き込まれそうです！

言い聞かせられたの、微妙だと思っていたけれど……認める！
子供より私は始末が悪かったということを！
知らない人の言うことを信じない！　これも重要ですねっ。全部注意事項がないと駄目なひとにはなりたくなかったです……うわああん。

地図が指し示した場所には、廃墟みたいな教会がありました。追いかけっこの終点になりそうだ……。みごとに裏通り、そして人気がない場所だった。
私は速度を緩めて、うっすらとかいた額の汗を拭う。背後の人たち、諦めてくれたらいいのに。
本当にここかな？　地図はあっさりと書いていて、間違うはずが無い道順だ。教会だから、もしかして本当に呼び出しだったのかも、という懸念もある。
それにしても、あまりの建物の荒れっぷりに私は首を捻りました。あれ、星教の建物って大体の街では大事にされてるんじゃないの？
私はその前に立って、建物を観察しました。
建物の中に踏み込むのは、正直悩む。だって草がボーボーに生えてて、建付けとかガッタガタに歪んだ扉が申し訳程度についてるだけ！　これぞヤバメな物件って看板立てれますよ。格安物件間違いなし！
夜、こんなところ絶対怖い。近寄れない。一人じゃトイレに行けなくなります。まさにホラースポット間違いなし！　誰もいないよって言うのが離れててもたたずまいがさりげなく主張してくれます。
普通、こういったところって難民の救護所とかになりそうなものだけど、窓もドアも壊れたまま放置されてる。うーん、予算がなくなったとか？　でも主神殿とかは凄いお金かかってそうだけどね！
……というか、これはやっぱり騙されている雰囲気が満載ですよね！　だれがこんなところに用があるかっ！　怪しさ爆発だよ！
さすがにおかしいなー変だなーって思いながらここまできたけど来

なきゃよかったなあ。ウカツでした。

あの宿のおっちゃん、絶対なんかある。怪しい……乙女の勘が、怪しい匂いがすると囁いております。鼻がでかいのは関係ないけどねっ。

私はくるりと向きを変えて、宿に帰ろうとした。さっきからの視線は変わりない。そろそろつけて来たっぽい人たちがいる方向を突破しなきゃいけないんだよね。あっちの道のほうが大通りだった。微妙に狭い道の先、今の場所に私の背中を汗が流れます。

どうにもいやな予感がするんだよね。首の後ろがちりちりする。落ち着かない。

ちなみに、お枝様は部屋においています。あんなに大きな包みはもてませんから！

あそこだったら、神官様の結界があるから泥棒も入れないから大丈夫だと思ったんだよね。さっさと帰ろう。

ここは危険だ。私はとうとう緊張感に耐え切れず、走り出した。

その時、私の耳にかすかにその音が届いた。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，Ｓｍｎ，Ｆｋｋ　Ｎｍｒｓｒ，Ｔｓｋ　ｇ　Ｎｂｒｍｄ　Ｎｍｒ　ｈ　Ｓｍｎ，Ｋｋｙ　ｈ　Ｋｋｈ，Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」

韻律だ、と気付いた瞬間、ものすごい眠気がやってきました！

私は足をもつれさせそうになるけど、根性で踏みとどまりました。

下手糞な韻律だな！　おっさんのだみ声です。神官様の謳うようなあれと随分違う。寝言みたいに唸る声だ。でも、正確に言葉をなぞっているから、効果が出ているんだろう。……ん、なんでそんな韻律マスターみたいな感想を持ってるんだろ？　実際、勉強したことが今更生きてきた？　まさかね。それとも、眠いから、あっちと、混じったのかな……。視界が二重にぶれる。頭がぐらりと揺れた。

意図しないのに意識が飛びかける。体に力が入らない。壁に体を持たせかかる。随分強く打ったはずなのに、私は痛みを感じなかった。

ちょっと！　絶対ここで寝たらやばいよって言う場面ですよ！

それは分かっているけど、体がそれに逆らえない。韻律が耳から意識に体にしみこみ、効果を発揮する。

私の体から力が抜けて崩れ落ちる。頭を打ちませんように！　そんな間抜けなことを私は考えた。

なにか文句を言おうとして、私の意識は途切れた。

神子、誰かに拉致される

目を覚ましたら、薄暗い部屋でした。
人の気配は無い。

「んぐっ」

声を上げようとしたら、凄い圧迫感に口を開けませんでした。これはまさか……聞いたことだけがある、さるぐつわってやつですか！　人生初のさるぐつわですよ。嬉しくないお初です……。

「んうー」

何を喋っても呻き声にしかなりません！　鼻呼吸はできるから、息をするのには支障が無い。

さるぐつわって初めてしたんだけど、こんなに顎が疲れるものだったんですね。口をうっかり開けたら閉めれなくなりそう。むしろその場合、よだれを拭えない悲劇が確実に起こる！　乙女としてこれは死活問題ですよ！

何故よだれを拭えないか。
はーい正解は……縛り上げられているからです！　予想通りですよねっ。

荒縄ですよ。
これも人生初縛り……。特殊人生を歩んでいるな！　もうちょっと平凡に生きたかったけどねっ。
土の上に放置されている状態です。湿った土が、地味に冷たい。髪とか土まみれだろうなあ。洗うのが大変なのに。まあ、洗うどころではない状態ですがね！

もぞもぞと全身を動かしながら状態を調べてみます。首と目は動くし。

んー、血の匂いもないし、多分怪我はないと思う。変な姿勢で寝てたせいで体が痛いのはあるけど。

まず、手は後ろで縛られてる。肩が地味に痛いです。

あとは足首を縛り胴体と腕に縄を回してぐるぐる縛っていますよ！　普通に……っていうのもおかしいけれど、普通に縛られてます。

変な縛り方ではないです！　変な縛り方については、私より前の街の領主様に聞いてください。そのような図説の絵画が混じっていました。私、あそこで変な知識が確実に増えた。微妙に引いているのを察してか、絵の素晴らしさを解説しようとして縄目の美しさについて語ってらっしゃったけど、逆にそのせいで神官様もどん引きしてた。勇者様はいつも通りだったのがある意味恐ろしいです。領主様は悪い人じゃないと思うんだけど、なんていうか、うん、自重して下さいねお願いですから。領主様の思い出はどうでもいいから横に置いておいて。

私が身動きできないってことのほうが問題ですよね！

明らかにさらわれました！

拉致ですか……さすがの能天気な私でも、今のこれはかなりやばいと思います！

前回の拉致よりヤバイ。前回はまさかの勇者様だったけど、今回はあれより犯罪の匂いがぷんぷんするよ！　臭い……臭いぜ！　確実に匂ってやがる！

だからさっさと脱出したい！　勇者一行においてただでさえお荷物なのに拉致されて更にこの状態！　お二人に合わせる顔がありません……。脱出できたら、私田舎に引きこもってどっかの谷あたりにひっそりと住むことにするんだ……。脱出も出来ない今となっては、壮大な夢ですが。

とりあえず、現実問題、縄が私の行く手を阻みます。
この縄、解けないかな、と体を動かしてみる。気合入れて動いてみたんですが、どう考えても陸に上げられた魚程度にしか動きませんよ！　びっちびちです。横で見たら凄い格好なんだろうな、と死んだ魚の目をして考えますよ。動けば動くほど縄が食い込んで痛いです！　手首とかも結構締め上げられてる気が。小休止です。荒い息になっても鼻呼吸しか出来ないので、空気が物足りないです。
うーむ。
今、右頬を地面につけた格好で転がされてるから、何とか仰向けになろうとごろんと転がります。土がついた頬を拭いたいけど、無理だから諦める。どうせ全身土の上に転がされているせいでどろどろだろう。
上手く受身も取れないので、地面にちょっとぶつかって痛かったです。足を伸ばそうとしたら、何かをおもいっきし蹴ってしまいました。逆に足がダメージを受けましたよ！　しまった、この体勢は後ろ手に縛られたところとそれによって反っちゃう背中がじわじわ痛い！
こうでもしないと、部屋の中が見えないのだ。とりあえず、現状把握！
仰向けになったら視界が広いね！
それにしても、ココはどこですか。
思ったより天井は高い。石造りの堅牢な建物だ。
右手の壁のかなり上のほうに、空気孔か、小さな窓が開いている。
そこから射しこんでいる光が唯一の光源になっているおかげで、部屋が完全な闇になっていない。私が暴れた成果、その光の中に白いホコリがもうもうと舞い上がっているのが見えて、くしゃみが出そうになりました！　さるぐつわでくしゃみって、どうなるんだろ。
私の周りには、いろんな形の木箱が積まれていた。ただ積みまし

た！　っていう乱雑さのせいで、私が転がされているスペースが大変狭くなっている。

こう、整然と積んだらもうちょっとましになるんじゃないかな！

私も足を伸ばせるよ！　さっき上に向いたときに何かにぶつかったと思ったのは、多分この木箱だと思う。これを蹴ったとすれば、足が痛くなるのは分かる。そりゃあ痛いよ。

一時荷物置き場みたいな感じを受ける。

ここは倉庫かな？

それにしては、人の出入りが少なそう。どちらにしても倉庫だったら、いろいろものがあるかもしれない。それに、脱出の役に立つかも！　何か落ちてないかな？　刃物とか嬉しいです。

部屋の中をもっと見ようとして首を傾けて、私は固まりました。

一瞬で硬直する。

ぎゃあああああ！　私は心の中で盛大に悲鳴をあげる。

本気で驚き、一瞬呼吸が止まった。

どっと汗が噴出して、心臓が凄く速く鼓動を刻む。喉から心臓が出そうなぐらいですよ！　心臓やもろもろ健康に悪い！

今まで私が背を向けていたほうの木箱の山の上に、ひとがいた。

仰向けになったから、やっとその存在に気付いたんだ。

そのひとは木箱を三段積んだ上に腰掛けてこちらをじっと見下ろしている。

フードつきのマントに、すっぽりと全身を覆った怪しいひとだ。

窓からの光の範囲から外れて、闇の中にひっそりと座っている。

気付かなかったあああ！

これが誘拐犯との遭遇ですかあああ！！

誰もいないと思い込んでいたところにひとがいたっていう驚きと、誘拐した犯人（推定）との遭遇の驚きに、私は恐怖と混乱で固まった。

さすがにこの状況はキャパシティ越えまくりだよ！

それにしてもひとだよね？　ひとだよね？　置物じゃないよね？

静か過ぎるんですが！

私はじっとその人物を見詰めた。

木箱の山の上に腰を掛けるそのフードの人物はふいに身じろぎをした。置物説は却下されました。やっぱりひとでした！　残念です！　置物……それはそれで怖いです！

フードのひとは、私が凝視していることに気付いたようだった。

「こんにちは」

その人は、場違いなほど穏やかに挨拶をしてきました。

わたしは真っ白になった頭で、一人つっこんだ。

えーっと……その、……どうリアクションしろと？

神子、不審人物と出会う

不審人物は、答えない私を少しだけ眺めた。
眺められてもリアクションができませんよ！　できるのはジタバタするぐらいだ！　バタ足さばきを見るがいい！　足首も縛られているけどね！　暴れるよ！
リアクションできないのは、結局転がされているせいだけどね！
ハハハハハ……はう。こんな風に笑ってるけど、実際はかなり緊張している。何が始まるかも分からない。先の見えない恐怖に、じっとりと掌に汗が出てきた。ぎゅっと手を握り締めて息を吸う。背中を流れる汗が気持ち悪い。
不審人物は不意に口を開きました。今更気付いたけど、男の人の声だ。それに気付かないって、どれだけ頭が駄目になってたんですか私！

「ｈｘｘｎｖｖｈｘｘｋ０ｎ０ｈ＊ｙｘｘｎ０ｎｘｘｋｘｘｘ．／」
（範囲はこの部屋の中）

何かがふわりとこの部屋を取り巻いた気配がする。
その一言で、世界の流れが変わった気がする。
久しぶりのトリハダですよ！　なんだこれ。私は不自由ながらも周りを見回してキョロキョロします。
私の様子を気にせず、不審人物は星術を続けます。綺麗な声だった。不審人物なのに！
流れるような韻律は、いままで耳にしてきたものとは何かが違う。ひとに分かり易いんじゃなくて、世界に分かり易く謳われている、って言葉が頭に閃きました。私、詩人になったのかな?!　私の様

子など気にせずに、ドンドン星術は編まれていきます。

「ｋｘｘｘｖｖｖｓｈｖｖｖｈｘｘｘｓｗｗｇｗｗ．／」

（開始はすぐ）

世界が韻律に耳を澄ませている、息を潜めて次に何が命じられてもすぐに実行できるように。

まるで楽団の指揮者が演奏を始めるときみたいだ。指揮棒の先端に、全ての意識が集中している。この場合、次の韻律が指揮棒に当たる。緊張した空気が部屋に満ちている。

「ｋ０ｎ０ｂｘｘｓｈ０ｎ０ｋ０ｔ０ｈｘｘｘｄｘｘｘｒ＊ｍ０ｋｖｖｖｚｗｗｋｘｘｎｘｘｘｖｖｖ．／」

（この場所のことは誰も気付かない）

この言葉が広がった途端、倉庫の雰囲気がふっと変わった。世界から少しだけ色が抜けて、周囲の景色が遠くなった気がする。

その光景を見た途端、この部屋は閉鎖されたんだと分かった。

「ｋ０ｋ０ｄ＊ｎ０ｔ０ｈｘｘｘｄ０ｋ０ｎｖｖｖｍ０ｈｖｖｖｂｖｖｖｋｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ．／」

（ここでの音はどこにも響かない）

この言葉のあとに、静寂が深まりました。知らないうちに外から聞こえてた音が全て遮断された。外から実は音が聞こえてたんだ。あっ、もしかしたら叫んでたら助けてくれるひとがいたかも？　それでさるぐつわですね、そうですね、助けを呼べないようにですね……。

「ｓｈｗｗｒｙ０ｈｘｘｘｔｘｘｘｃｈｖｖｖｓｘｘｘｘｒｗｗｍｘ

ｘｘｄ＊・／」
（終了は立ち去るまで）

最後の韻律が空気に溶け、星術が終了しました。私は知らずにつめていた息をゆっくり鼻から吐き出しました。溜息をつきたいけど、さるぐつわが邪魔をする。

どうして神官様が使う星術は意味が分からないのに、こんな風に私に意味が聞こえる星術があるんだろう？　勇者様のも意味が分かるんだよね。新と旧の違いっていうのは聞いたけど、どっちがなんだかよく分かっていません。

不審人物は、世界からこの部屋をあっさり切り離したようです。そう、こんな風に星術の効果がなんとなく分かる！　もしかしてこれが乙女の勘？　違いが分かる女になりました。やったね！

で、何をするんだこのひと。

わざわざ音が聞こえなくするのは、拷問でもする気ですか！　やめてよ、町民の心は弱いので、ばっきばきにおられまくりますよ。すぐに何でも吐いちゃうよ！

固まる私に、フードのひとはこう言い放ちました。

「僕はただの見学だからあまり気にしないでほしい」

え、正直意味が分かりませんよ。私の周りは説明不足の人が本当に多いです。

困ったことに、ちょっとのヒントとかで分かるほど賢くないからちゃんと一から十まで説明を求めますよ！　ひとを拉致して何をするんですかっ。

「んぶー！」

怒っても声が出ないんだけど、とりあえず訴えてみる。怖さを怒りで何とか潰している状態です。手が震えているのを、ぎゅっと握りこんで、その人を見上げる。

「一つ訂正すると、君をさらったのは僕じゃない。僕は君を見に来ただけだから」

え、見に来ただけ？
見に来ただけって、私は珍獣かっ。
確かにこんな風に床でびっちびちしていると珍獣っていわれても仕方がないけど、乙女に向かって何と言う言葉！
ちょっとぐらい助けてもらってもいいでしょう！　不審人物は首を傾げながらさらりと、
「助けないよ」
と言い放ちました。
なんだかとっても酷いこと言われてる気がするんですがっ。気のせいですか！

そして私は、はたとそのことに気付きました。
ん？　私、声を出していないのに会話になってる？

「そうだね。思ったよりよく聞こえるから、もうそのままでいいね」
そう言いながら不審人物は立ち上がって、するりと木箱の上から降ります。そして私の横に膝をつく。まるで影が動いているみたいに音もしないし風が動かない。変だ、と言う事はさすがの素人にも分かる。不自由な身の上ながら、近づいてきた相手からあとずさり距離をとった。
「本来君が警戒すべきなのは、僕じゃない」
上から覗き込まれます。顔は陰になって見えない。ただ、視線が真っ直ぐにこちらを見ているのが分かる。
「君の敵は魔物なんかじゃないんだよ」
どういうこと？　精一杯目元に力を入れてじっとりと睨む。でも相手は私の眼力をスルーしました。酷いっ！
「馬鹿な子ほどかわいいっていうけれど」
不審人物はいったん言葉を切り、しみじみと感じ入るようにこう付加えました。
「馬鹿すぎるのも考えものだね」

ちょ、ちょっと！　いきなりこのひと出てきて私のことをぼろくそに言ってますよ！　自分で言うなら自虐ネタになるけど、人に言われたら腹が立つって事があるの、知ってますかっ！　不当に貶められていますっ酷いです！　訴えますよ！

「訴えるなら誘拐犯の方が先だろう？」

あ、そうですね。そっちの方が先だ。うむ。

私が頷くのを見て、不審人物が溜息をついた。

「……騙され易過ぎる。深蒼や大神官が苦労するのがよく分かる」

思いっきりあきれた口調です！　また馬鹿にされた！　知らないひとにとやかく言われる筋合いはありません！　きー！

……さっきのセリフでなんか引っかかった。それを深く考える前に、額にべしっと手が置かれました。手はひんやりとしていた。あっ、私の額汗だくですよ！　緊張の油汗です。

「ｓＯｓｘｘｘ」（走査）

痛っ！　一瞬びりっと何かが体の中を走ります。見学者は展示物に手を触れたらいけないんですよ！　見学者の心得を何とする！

「もがー！」

暴れる私を全く気にしていない様子で、不審人物は深く深く溜息をついた。

「やっぱり君には【０／Ｍｖｖｋ０】（神子）が振られているみたいだね」

その星語の響きに覚えがあり、私は暴れるのを止めて見上げた。

「……残念だ」

声は深淵から響くように深い闇を孕んでいる気がした。

いやな予感にトリハダが止まりません！

不審人物は急に私を軽々と抱き上げて、木箱の上に座らせる。まさかのお姫様抱っこでした。祝！　初お姫様抱っこ！　本当にいやな初めてが多いですよ！

「またろくでもないことを考えているね」
先ほどの声の響きは全く無かった。でもあの声を私は聞いたことがある気がする。初対面……ですよね？　むむ？　最近記憶力に自信がなくなってきたからね！　私が首を捻るのに、不審人物は、ああ、と声を洩らした。
「自己紹介がまだだったね」
初対面だったようです！　ますます自分の記憶力に自信が無くなった！　ツライ！
「はじめまして、【０／Ｍｖｖｋ０】、神子。僕は【１／Ｓｈｒ】」
二つ目の言葉が意味が聞き取れない。首を傾げると、どうやら分かってくれたようです。そうだったね、となにかに一人で納得して、彼はフードを外した。
真っ白い髪と、周囲が僅かに灰色に沈んだ白い虹彩の眸。闇の中では強烈に浮かび上がるその色が、私の目に飛び込んできた。
「君の耳に届くように言い直すと、【１／Ｓｈｖｖｒ０】（始原の勇者）になるかな？」
私の右頬についたままだった土がポロリと落ちたけれども、それに気付かないぐらい私は驚きに硬直してしまった。

神子、会話をしているつもり

怖い、と初めに思いました。自己紹介してくれた自称始原（しろ）の勇者には失礼な話だけど、怖い！

「さりげなく失礼な子だね、君は」

いつもは心の中だけで話しているから失礼な子だって言わないでください。それだったら、さるぐつわを外して、普通の会話をさせてください。

「却下」

絶対言うと思った。いたいけな私を解放してあげてもいいじゃないですか。

「怖いっていう僕に頼むのは本末転倒だろう？」

だって怖いよ！　何がって、綺麗過ぎて怖い！　男のひと相手にこの表現を使うとは思いませんでしたよ実際！

私は目の前の人を凝視する。睨めっこは得意だ！

神官様みたいに、美人だって言うのとまた違う。人の温かさが余り感じられない容貌なのだ。

白い頭髪は老齢のそれとは違い、艶がありながらも霜を集めたみたいに真っ白だ。ゆるいウエーブが掛かっているせいで、淡雪みたいに見える。長さはそんなに長くない。

白い目って初めて見ました！　白い虹彩の周りは、不思議と僅かに角度によって色を変える。そのせいで眼球と虹彩がきっちり分かれ目が分かるんだよね。

肌は少しだけ日に焼けている。それだけがかろうじて生きているものなんだと思わせます。男の人の顔立ちだってちゃんと分かる。弱弱しさよりも冷たさが際立つ目鼻立ちです。

例えて言うなら、覗き込んだ青く透明な湖の底が深すぎて見えないときみたいな、あるいは振り返って見えた夕焼けが世界を燃やす

ほど輝いていたときのような、そんな不安定な怖さと感動をあたえる容貌です！　よし！　頑張って詩人になってみました！　心のガッツポーズです。私の持ってる言葉を駆使しましたよ！　キラキラしい言葉遣いに正直疲れたけど。

とりあえず、あれだ。整いすぎて怖いです！　こんなに美形が存在していたら、私の乙女としての何かがなくなりそうです！　とりあえず、お肌のお手入れはどうしているんですか？

「……肌の手入れはしてないよ」

あ、お返事ありがとうございます。

でもこの説明で分からない人が沢山いると思う。そこで紹介するのは神殿の天井画！　あそこで見た顔です。こんな顔の人間がいると思えないよと思いながら見てたから、実際に動いているのを見たらびびります。

んん？　天井画って事は、この人の年齢は一体幾つだろう？

そんなにぽんぽん勇者様が交代するほど、激しく世界は危機に陥ってたっけ？

私が首を捻っていると、

「君の思考が取り留めなさ過ぎて、頭が痛くなる」

額に手をやりながら呆れ果てて白さんが言います。

どうやら私の心の声はここまで全部ダダモレだったらしい。今更だけど、心の声で会話できるって、なんか凄いよね。乙女の秘密は読み取らないでくださいね。

あと、貴方は白いから白さんで。私命名です。こういった呼び名は早い者勝ちですよ！

遠い目になって溜息をつきながら私の向かいにある木箱に白さんは座りました。

勝手に私の考えを読み取って、何であきれてるんですか！　ツッコミまくりますよ！

「白さん、ね。まあ、君にとっては深蒼（あお）が勇者だからそれが妥当か」

どうやら勝手に納得してくれたみたいです。私は座らされた木箱の

上で足をばたばたさせて、どうして脱出を手伝ってくれないんですか！　ガタガタ多少音をさせたところで、結界のせいで外に音が漏れない。安心して暴れられるよ！　いや、本当は音漏れしたほうがいいのか？

乙女が縛られているのを見て、何も思わないのですか！　自称始原の勇者さん！

私はそのまま白さんに文句を言った。心の中でだけど。

「自称じゃないよ、これは完全に他称」

微妙なニュアンスが含まれている言葉ですね。ちょっと同情しますよ。なんたって私も神子とか呼ばれている珍獣ですから。

「そうだね、縄で縛られて拉致されている神子は前代未聞だね」

前代があったんですか？　なんか、神子はいないみたいに聞いたんですけど。

「いるけどいない」

面倒な会話をする人だ！　また問答集が始まったー！

このひととの会話は、たまに通じない時がある。なんだか全部私が知っているみたいに話すしっ。一人では会話は成立しません！

つまり会話は言葉を受け取る相手がいて成立するものです。相手に伝わらない言葉は駄目ですよ！

それに私は何も知りませんよ！　説明してください！

私は抗議する。

身じろぎをする度に縄が地味に食い込んで痛いんですが。もうちょっとダイエットが必要だったかな？　座っていて太るということは無いよねっ。

白さんはじっと私を見た。

「思考は飛ぶ、記憶をぽろぽろ取りこぼす。今の君に説明をしてもすぐ忘れるだろう？　そんな面倒なことはしない」

何でそんなことを知ってるんですか！　さてはストーカーですか！　怖いっ。

「だんだん遠慮がなくなってきたね」

ツッコミをするけど、白さんは思ったより気長ですか？　失礼な思考をしてると思うけど、意外に怒りません。

うーん。それにしても、本当に貴方は始原（しろ）の勇者様？　やっと私は神官様にお伺いした話を思い出した。勇者の現われる間隔について。

「残念ながら」

……勇者様っていうのは、星が一巡りか二巡りする間に一人、って聞いたんですが。

つまり、百年から二百年に一人選ばれるもの。

「そうだよ。実際僕がそう呼ばれたのはざっと星暦六〇〇〇年代のことだ」

え、二千年前ですか？

とんでも告白ですよ！

まさかの千歳オーバー発言！　年取りすぎ！　若作り過ぎですよ！

「別に若作りしているわけじゃないけど」

でももっと古臭い喋りかたしないんですかっ。現代用語に精通しすぎでしょう！

「そのツッコミはどうだろう」

その返しもどうなんですか？　独特のテンポで話すから、白さんとの会話は難しいです。

「君の思考も酷いものだよ」

おじいさんなら、かわいいひ孫娘ぐらいの気持ちで、温かく見守ってくれてもいいじゃないですか！

「君がひ孫娘だったら微妙だよ」

白さんのとんでも発言も微妙ですよ。いきなり二〇〇〇歳デスヨと言われても普通信じませんよ！　そう、普通は信じない。なのに、私の勘が嘘を言っていないと囁く。どこに信じる要素があるかわからないけど、嘘じゃないと思ってしまうんだ。

私はじっと白さんを見ました。人を見る目があんまり無い庶民だけど、じっくり観察してみる。既婚者と未婚者の見分けがつかない町民です、見る目ないよ！　パン屋のおかみさんにコツを聞いたけど分かりませんでした！　あと悪い人の見分けもつきませんねっ。見分けがついたらここにはいない……うう、辛くなってきた。

目の前で話す白さんはどう見ても若々しい外見。

でも、雰囲気がおかしいんだよね。生活感がありません。白すぎるから？　お肌にしみ一つありませんよ！　敗北感で胸がいっぱいです。更に旅人っぽいのに手ぶらです。荷物やお金とか、どうしてるんだろう？　寸鉄も帯びていないって言うのかな、武器を持って

いる雰囲気はありません。そういえば、始原（しろ）の勇者の時代に新星術が生まれたとか聞いた覚えがある。星術が使えるから武器は要らないのかな？　神官様は面倒くさいから殴る方向らしいけど。

私が観察をしているのを分かっているのか、白さんは静かにこちらを見ています。全身を覆うフードつきのローブの下の服は見えません。靴は汚れていない。それにしてもこの倉庫にどこから入ってきたんだこのひと。もしかして私が運び込まれる前からいた？　私の寝顔を観察していたんですかっ。あっ、視線が冷たくなった。聞こえてるんですねっ、やっぱりこれも聞こえてるんですね！

じっと見ていて気付いた。生活感の無さは、多分纏う空気のせいだと思う。纏う空気がセイヒツの間に似ているんだ。静か過ぎる穏やかな雰囲気があります。嫌いじゃないけど、澄み過ぎて居たたまれない。

こんな目立つ人がそもそも食事したり、普通の宿とったりするのが想像できない。ひとを外見で差別したらいけませんがっ。で、普段何を食べてるんですか？　肉と魚とどっちが好きですか？

「……ところで、星暦はだいたい二千年区切りだというのは知ってるかな？」

私の思考は読めているはずだけれど、白さんはあっさりスルーしました。酷い。

白さんが話し始めたことを頭の中で繰り返す。このひとは多分喋りたいことだけ喋るタイプですね！　了解しました。勇者様に学ぶ聞き役の態度を踏襲して聞き役にのぞみますよ！

えーっと話題は二千年でしたっけ？

神殿での勉強が役に立ちますよ！　歴史は六千年代までは簡単にさかのぼれる。でも、そこから前が謎なんだって。大災害で全部無くなったとか。

昔から星原樹があった事はよく知られたことだけど、どんな国があったかは実はよく分からないらしい。たまに不思議な遺跡が発見されるけど、全く意味が分からないんだって。

星原樹が出来た頃から、星暦が始まったんだというのはずっと言い伝えられていることらしい。学者の先生達が研究しているそうだ。で、それがなんだって言うんですか？　木箱の上にずっと座っていたら、お尻が痛くなってきた。ちょっと身じろぎしただけでも縄が擦れていやなんですが。土に転がされていたのと縛られているせいで色々痛いんですがっ。おーい縄解いて欲しいですよー。

「二千年毎に、世界は変わるんだ」

私の訴えは聞こえないフリをされるらしい。この乙女の敵め！

……まあいいや、で、世界が変わるってどういうことですか？

この疑問は正確に読み取ってくれたようです。白さんは優しい声で付け加えました。とんでもない内容を。

「文字通りだよ。二千年で世界は滅びて生まれ変わる」

白さんはゆっくり指を折って見せた。一つ目から始まり、

「星暦一九九九年、三九九七年、三回目は少し早かったから五九八七年。今が第四期にあたる」

そう言いながら四本目の指を見せられる。

……は？

そこでようやく私は今年の年号を思い出す。星暦七九九六年。……もしかして、もうすぐ。

「そう、二千年の区切りがくるね」

あっさりとした口調は、天気の話題と同じぐらい軽いものでした。とんでもない内容を語っているようには到底思えない。

もしこれが酔っ払い親父が言ってる内容なら、ハハハ親父も変な夢を見てるんじゃないのかって笑い飛ばせると思う。

でもこのひとはそういった意味では嘘をつかないんだろう。私の中でそんな変な確信がある。

だからこそ怖いんですが！

いきなり世界が滅びる予言ってなんですか！

絶対滅びるんですか……？

私は全身からさーっと血が引くのを感じた。油汗がさっきまでと

別の意味で吹き出る。緊張で息が短く荒くなってしまう。

話が壮大すぎる！

でも、それが本当だとして、私に話したところで流れが変わるとは思えない。何で私に話すんですか？　私は非力ですよ！　それを知っても止められるとも思えない！　勇者様の一行に混じっているといっても、ただの町民です。さっくり剣で刺したら死んでしまうぐらいの戦闘力の無さですよ。……私が出来ることは本当に小さい。さっきも窓からこの街のことを眺めていて、非力さを実感したところだったのに。

白さんは、私に話をして一体何をさせたいんですか！

嘘一つ見逃さないように、私は白さんを正面から見る。

お腹に力を入れて、姿勢を正した。じゃないと何か負けそうな気になる。お肌の艶は負けていますがね！

「それは女の子が男に負けちゃ駄目だろう」

がー！　それはつっこむところじゃないですよ！　白さんは真面目な話をしているんですか！　どっちなんですかっ。

「真面目だよ。絶対に滅びるかというと、それは分からない。今期の神子（きみ）が現われたということは、星神様の裁定が最後の段階に入っている」

ここで星神様の話になるんですか？

神様がいらっしゃるのに、何で世界が滅びるんですか？

世界が危険だからこそ、勇者様達が選定されて戦っているんじゃないの？

疑問が浮かんだけれど、その次にまさか、と考える。

私はそれを思いついたけれど、恐ろしくて思考から消そうとした。

しかし、白さんはそれを正確に読み取った。

「そうだよ。世界は神様が滅ぼすかどうかを決めるんだ」

君は知っていると思うけど。白さんはそう付け加えた。

私は、喉に重いものが詰め込まれたような気がした。

神子、怒る

変でしょう！

私は気を取り直して白さんに噛み付くように考える。

魔物の親玉みたいなのが魔王とかで、それが世界を滅ぼすんじゃないんですか？　神様じゃないでしょう。そんな、酷いこと神様がするんですか？

「魔王などいないよ」

白さんは静かに断定します。

魔王の呪、とか言うのも聞いたことがある。勇者様達の旅は、魔物を倒すことじゃないの？　じゃあなんで戦ってるんだ。勇者様達の旅の目的って、何なんですか。

「目的は本人達に聞けばいい」

聞いたことがあるような、ないような。

でも勇者様は純粋に誰かを助けるために旅をしているみたいですよ。それじゃ駄目なんですか？　何で神子が出たら裁定が始まっちゃうんですかっ！

「落ち着きなさい」

落ち着けません！

私はガン！　と木箱を縛られたままの足で蹴った。

足が痛いけど構うものか！

私は滅多に怒るほうじゃないけれど、カッと頭に血が上るのを感じた。

暴力的な気分になっている。

多分、縛られていなかったら白さんに文字通り噛みついていたに違いない。

それぐらい衝動が強く私を突き動かす。

その根底にあるのは、やるせなさや、悲しさや、理不尽への怒りがぐちゃぐちゃになって、全部入り混じって、凄い色の絵の具みたいに私の気持ちを塗りつぶしていく。

この瞬間も白さんは私の思考の流れを読んでいるはずだ。

なのに、怒っているのを聞いているのに、静かにこちらを見るだけだ。

私は白さんを睨む。

目線に力があれば、串刺しに出来るのに！

どうして人を滅ぼすとか、するんですか！

とんでもないことを言い出したこの人は、絶対何かを知っているはずだ。私は血が上った頭のままで問い詰める。

私に無駄話をしに来ただけじゃないんでしょう！　滅びるとか滅ばせるとか、勝手に決めないでください！

そもそも、人間が魔物で困っているのに、神様は何をされているんですか！

「その、魔物だよ」

ようやく、白さんは口を開きました。

「魔物が現われたから、勇者が選定され、世界の裁定が始まるんだ。それが今回の四期の特徴」

魔物ってなんですか！　あんな生物、何で世界にあるんですか？

そのせいで沢山の人が泣いて、今もこの街みたいに苦しそうなひとが沢山いるのに！　どうして星神様は魔物を放っておくんですかっ！　私は興奮しすぎで鼻息が荒くなります。ぐぎぎぎぎ。さるぐつわが実に邪魔！　はずしてー！　思考だけでも暴れても、この怒りは伝わっていない気がする！

「十分伝わってるよ」
白さんの秀麗な眉の辺りには、確かに不快そうな皺が出来てますね！　ふふんだ！　そこが皺になってしまえ！　そしてちょっぴりストレスで禿げ上がるがいい！
「しょぼいけど恐ろしい呪だね……」
しょぼいっていうな！　思いっきり呪ってやる！　ぎー！
「さっきの答えだけれど、魔物は魔物だよ。人間の敵として定義されているものだ」
何で世界に人間の敵がいるんですか！
その思考をぶつけたあと、私は気付いてしまった。
「……星教でもきちんと言ってるだろう？　世界は星神様が造りたもうた。星神様が神だと知覚した後、星の配置し韻律を定め、命の基盤を整え、子等を野に放った。世界は、全部神様が造られたものなんだよ。僕らも、人間も、魔物も」
……魔物も。
なんで、なんで！
私の頭はぐちゃぐちゃだ。だって、いままで勇者様達凄く頑張ってた！　でも、それも全部神様が仕組んだことで、しかも世界が滅びに向かっているって意味が分からない！　勇者様達の苦しさとか、意味がないってことなんですか！！
私はぼろぼろ涙がこぼれてきた。でも拭えない。白さんがぼんやりとした白い塊にしか見えない。
流れる涙がさるぐつわに吸い込まれて正直不快です！
衣擦れの音とともに、目元に柔らかい布が押し当てられました。
その上から大きな掌が私の目元をやわらかく覆います。
ビックリして涙が引っ込みました。
「そのままで聞きなさい」
白さんの声だけが瞼の裏に響く。
「世界はとんでもなく短い周期で既に三度滅びている。星神様が滅ぼしたくて滅ぼしたんじゃ、無いんだよ」

それは、どういうことですか？
少しだけ、ほんの少しだけ落ち着いた私は、その先をうながした。
押し当てられた布と掌は、ほのかに温かい。
「昔の話をしよう」
白さんは穏やかに話し始めた。韻律を謳うように、なめらかな言葉を操りながら。

神子、昔の話を聞く　一度目の滅び

「一度目。人間は簡単に星語を操った。その頃、共通語はなく星語が人の言葉だったんだよ――」

白さんの話と一緒に、映像が私の頭の中に流れていく。

見慣れない不思議な服を着た人々。ゆったりとした袖のたっぷりとした布を使った服だ。

空は高く澄み渡り、緑は滴る恵みをもたらしている。

優雅な人々が、白亜の宮殿のような建物で謳い、笑う。宮殿に見えたそれは、庶民の住居だ。

星酒と呼ばれる神授の甘露の杯を干し、星神様を讃えて敬う人々。

それは理想郷と呼べるような街並みで、とても美しい世界だった。

みんなの笑顔が穏やかな世界。

いや、穏やかな世界だった。

ただ、とある一を除いては。

泣き叫ぶ女性がいる。

街から外れた山の中で裸足のままで地面に這い蹲(つくば)り、彼女は一身に穴を掘っていた。

彼女は襤褸(ぼろ)を纏い乱れた黒髪を振り乱し、らんらんと輝く瞳で空を見上げる。

三つの月が空に昇る日だった。

彼女は星のめぐりを正確に把握していた。この術をなすには、このときを逃してはならぬと狂気と裏腹な冷酷さで計算する。

美しかったかんばせは汗と怒りにゆがみ、この世ならざるもの、すなわち人の形をした悪意を体現していた。彼女は地面を掘る。爪ははがれ、手は土と血にまみれて黒々としている。

しかし彼女はその奇怪な行動を止める事は無い。

彼女の周囲は、事切れた男女の死体が折り重なっている。

首をねじ切られ死んだ男は、彼女の恋人だった。身体を真紅に染め死んだ女は、彼女の姉だった。

愛していた二人は、彼女を裏切っていた。

狭い世界が全ての女だった。ゆえに、世界が彼女を裏切ったようなものであった。

二人の血を地面に零し、それを持って毒となす術式を彼女は血で書き記す。

彼女は吼える。世界に向けて、神に向けて。

――全てに裏切られた！　私は全てが憎い！　世界が憎い！　全部、滅びてしまえ！

それは命を削りながらの呪詛だった。血を吐きながら彼女は滅びを望む。

彼女はそのまま狂いながら呪詛を呟き続けた。

本来なら、たった一人の呪詛が世界に広がるほどの強度は持たない。

だが、不幸にも彼女は特殊な存在だった。

星原樹の一枝を託された女。彼女を指して人々は巫女と呼ぶ。

巫女が独り狂ったところで、世界を腐り落とせるだろうか。

それは世界に落ちた染みであった。

しかし、その一滴は確実に浸透してしまった。

まず、彼女が持っていた枝が汚染され、それがあろうことか媒介となり、世界に彼女の呪詛がばら撒かれる結果となったのである。

気づいた時にはその染みは大きく広がりすぎていた。星原樹の世界の浄化作用が追いつかぬほどに。

世界の根源たる韻律で呟かれたその呪詛は、世界に対する毒となり、水を腐らせ、大地を殺し、風を死の運び手にした。

星神様は人の世の事は人に任せていたので気付くのが遅くなってしまった。

毒に犯された全ては一度消し、それ以外の部分を生かすしかない。

星神様は心ならずも一度、世界を消すこととなった。

それが星暦一九九九年の話だ。

世界は滅び、僅かな人々とともに新しい大地が生まれたのである。

「そして、これを機会に共通語が生まれることになった」

私は目の前を流れていった映像に絶句していた。彼女の引き裂かれそうな痛みが伝わり、私の胸をかきむしる。

「では、次の話だ」

神子、昔の話を聞く　二度目の滅び

「二度目。世界は新しく生まれ変わり、人々は秩序を重んじるようになった――」

目の前の世界が切り替わる。

先ほどまでのような、光に溢れていた世界ではなく、今の世界に近い森が広がっている。

その中に小さな集落があった。

うっそうとした森は昼間は光を通さず、静寂を伝えるばかり。この景色のどこに滅びが潜むというのだろう。

集落の中に、魂の綺麗な赤子が生まれた。

その赤子は瞬く間にあらゆる知識を習得し、美しい若者になった。

やがて若者は森を飛び出し、世界を巡る。

二度目の世界では、人々は一所に固まるということが無かった。

昔の滅びのことを口伝えにし次代に伝える際、毒の恐ろしさと固まって生活していたゆえの急速な滅びを戒めていたのである。

人々は様々な場所に都市国家を設立し、気まぐれに訪れる旅人を鷹揚（おうよう）に受け入れながら、外界と僅かな交流を持っていた。

若者は旅をする鳥のように、軽々と世界をまたぎ国々を訪れ、知識を習得していった。それは植物が水を吸い上げるように、彼にとって自然なことであり、たやすいことであった。

彼の能力は人々のそれより高かった。

人々は若者を賢者と讃える。若き賢者が現われたと。若者は純粋な好意で々に自分が得た知識を分け与えていった。

無償で差し出していた若者の手は、やがて欲にまみれた黒い手に掴まれる。商人は笑う。

――賢者様、私に提案があるのですが。

人々に知識を渡すにも、一人では限界がある。集団を作ってしま

えばよいのだ。食事などの伝手はこちらにあるから、心配しなくてよい。

商人の思惑は若者には見抜けないものであった。若者は、残念ながら身についた知識を知恵として働かせることが出来ない類の人間であったのだ。

商人は瞬く間に若者を慕う人々の集団を作り上げた。それは徐々に異様な体裁を持ち出す。若者は問われたら答える、誰にとっても最善の答えを。それゆえに誰も思考を放棄した。困ったことがあれば彼に問えばいい、というほどに。

彼は知らぬまに、神の移し身だと崇め奉られることになってしまった。いつしか若者は直接人々と会話することが無くなり、商人が彼の言葉であると人々に様々な指令を下すようになる。

「この頃、神様はその大部分を腐りきった大地の復旧に注がれていらっしゃったんだよ。だから人の世のことには無関心だったんだ。ただそれは神の事情で、人には知ることが出来るはずもない」

若者のところにはあらゆる疑問と財が積み重ねられるようになった。商人は彼の片腕としてあがめられ、いつしかその場所は黄金の都と呼ばれるようになった。若者の知識は人々の生活を楽にした。こんこんと湧き出る泉のごとく、都は潤い、人々は豊かになった。

そのころ、若者の知らぬところで一部の人間が暴走を始めた。星教の排除だ。助けてくれない神などいらぬと教会を取り壊し、神官たちを弾圧した。それに対して周辺都市は静観を決め込んだ。それらは口をはさまなかったのではなく、はさめなかったのだ。若者の樹立した都市は膨張し、最大の国家となっていたのだ。

人々の驕りは思いとどまることを知らない。自分達の正義を掲げ、いつしか星教を弾圧を始める。

そのことは若者は知らなかった。敢えて知らせられてなかったのだ。商人は彼に大人しく従順な美しい姫を与え、高い塀の中で静か

に暮らしを送るように仕向けていた。若者は壁の向こうで何が起こっているかを知らず、穏やかな暮らしを送っていたという。

たまり過ぎた膿みはいつしか更なる病巣と化す。

人々の負の念は、しかも神への負の思いは星原樹を蝕み、その葉の一部が枯れるに至った。あの綺麗な大樹の葉の先が、黒く汚れてはらりと落ちる。落ちた地面に触れる前に、幻のように葉は大気に溶け込んでいく。

「神様は悩まれた。自らが去ることで人々を安寧に導けるのであれば、それは正しいことなのだろうと。でもね、神様と世界は切り離せないんだよ。神が去るときは、全てが崩壊する時なんだ」

民衆がとうとう星原樹を焼き払おうと、万の人数が押し寄せた。それに対するは星教の信徒僅かに数百。合戦というよりは、虐殺が行われると思われた。しかし結果は逆だった。

星原樹の樹より発する神気に当てられ、万の人間が狂い死にした。ますます黄金の都における廃神論が高まり、周囲の都市との関係が悪化する。

そして、大戦の勃発。

世界に闘争が発生しない時が無くなり、世界において瞬きの間に二十人が死ぬ時代となった。世界の現状を知るために、神によって御子（みこ）が遣わされた。だが、「神の目」として人の間に入った御子（みこ）はたった二週で殺された。食料狙いの夜盗だった。命とともに奪われたのは、わずか三つのパンであった。

ここにいたり、神が動くこととなる。世界に死が満ちる前に、心あるものを救い上げようと。

星暦、三九九七年。

星神様は心あるもの達に届くよう、小さな声で呼びかけた。

――　争いを嫌うものたちよ、耳を塞ぎなさい。

幼子達が涙に濡れた瞳で、空を見上げる。母を促し耳を塞ぐ。
路地の隅で震え、隠れていた少女は、不思議な声に怯えながらも耳を塞いだ。
老人は空を仰ぎつつ、地に伏しながら耳を塞いだ。

一方、争いに明け暮れる人々は、剣戟の響きのせいでその声を聞くことが無かった。
彼らの周囲は悲鳴と砂塵で溢れかえっていたためである。

そして神様の声が世界に響き渡った。
その内容は生きているものには分からない。ただ、その言葉を耳にした、言葉を解するものは死に至った。戦場で兵士達が人形のようにパタパタと崩れ落ちていく。その形相は苦しみと程遠く、眠るような表情だったそうだ。そして死体は残る事は無く、光の粒となり消えた。
荒涼とした戦場跡は誰もおらず、砂礫の風が吹き抜けるだけとなった。

血と闘争の時代が、こうして強制的に終了することとなった。闘争の歴史については、苦しみの思い出であり人の恥であるとされ、次代に知らされること無く闇に葬られた。
歴史書が積み重ねられ、火を放たれた。舞い上がる火の粉は夜空に吸い込まれていく時はまるで星の輝きのようだった。

……ふっと、現実に戻る瞬間。夢幻の世界が、ただの瞼の裏の闇に変わった。涙はとっくに止まっているけれど、まだ白さんは手を

離してくれない。話が続いているからだ。
白さんが私の顔を覗き込んだ。空気の動きで、それが分かる。
血の匂いと鉄の匂いそして人が腐る匂いがまだ私の周囲を取り囲んでいるような気がする。
「大丈夫かい？」
続けるかどうかを、私に問いかけた。私は口と目をふさがれたままなので、かすかに頷くことで意思を伝えた。
「じゃあ続けるよ――」

神子、昔の話を聞く　三度目の滅び

「三度目。穏やかな人々とともに、新しい時代が幕を開けた。さすがに人々も懲りているからね、闘争を嫌っていた」

神様は問われれば答える神様へとなられた。前回は沈黙により混乱が広がったからね。ある程度は関わろうとされた。神の主導のもと、世界は穏やかに発展した。

この二千年期は穏やかに乗り越えられると誰しも思っていた頃だった。

現在の世界より文明が発達し、一度目の世界のように穏やかな世界に近づいてきた頃の話だ。

穏やかであるがゆえに、人々は命の長さに注目するようになった。飢えと闘争、そして病を駆逐し、注目したのは幸福の継続である。

人々は神様に問いかける。

寿命を延ばすことは出来ませんか。

神様は答える。

全ては星の巡りで決まっていること、それは変えられない、と。

その時代、一人の少女が現われた。彼女はまだ未熟であったが、たゆまぬ好奇心と才能に溢れていた。

彼女は早くに両親を亡くした。

どん底の日々、考えるのは懐かしい思い出ばかりだった。

どうして人は死ぬのかしら？

彼女は考えた。

神様が決めているからじゃないのか？　何気なく誰かがそう答えた。

彼女は様々な文献を調べた。星神様に直接問いかけるほどの権利を持っていなかったので、当時あったあらゆる文献を調べることしか出来なかった。本と文章の海を漂いながら、彼女は一つ結論を出す。

ひとに組み込まれている韻律を変えることで、人の命も操ることが出来るんじゃないかしら？

星の巡り、すなわち時と運命に触れることが無ければ、それは可能であると思いついたのだ。

早速彼女は医療の星術を操るものに弟子入りをし、研究に打ち込んだ。彼女の研究は実を結ぶことなく評価されなかったが、彼女は打ち込み続けた。これが完成すれば、ひとはもっと幸せになると信じたからだ。

やがて時は流れ、彼女はとうとう術を完成させた。

喜びの声を上げる彼女。彼女が完成させたのは、寿命を延ばす方法ではなく、命を甦らせる星術だった。生体の韻律を組み替え、そこに存在率を変動させる式を組み込む。

大々的に「ひとは死を超えた！」と発表され、一躍彼女は時の人となる。

それは瞬く間に人々の間に浸透した。不治の病に罹患したものも快哉をあげる。死んでもその後甦ればよい。家族を亡くした人々は感激の涙を流す。もう一度会えるとは！　闇に潜むものたちもひっそりと笑う。死を気にせずともよい時代が来た、と。

それは画期的な発明だった。死と生の境界線が無くなった。

星神様はそれも人の進み方の一つとして、静観することにした。

確かにその術は「星の巡り」を変えているものではない。理論と

しては成り立つ術だった。ただし、警告を与えた。

何かを存在させようとすれば、他の存在を削るしかない。多用することは控えなさい。

社会のありようが変動した。

死ぬことが無いということは、傷を負っても病を得ても何とかなるだろうという楽観に繋がった。それは社会全体に薄いまどろみのように広がっていく。

死に恐怖しないが故の、生への軽視である。

漫然と生を引き伸ばされた人々はただ享楽に身を浸し、犯罪が増加した。死を恐れなくなったので、何でも出来たのだ。

死ねばすぐに甦らせる商売も定着し、命が金で買える時代となった。

術の乱用により、人々に見えない部分の世界のゆがみが蓄積した。

あるべきものではないものが、存在しているというゆがみ。

命と存在は本来結ばれているべきもの。しかし、甦った彼らには星の巡りは関係なく、存在するための力は誰かの何かを奪って補われてしまう。

たとえば、一人の少女が甦ったとしよう。彼女の二区画横に住んでいた老人が、吸い取られて死亡する。一見関連性の無い消滅と再生が、世界のあらゆる場所で巻き起こった。関連性が見て取れないため、人は便利だと乱用した。急死が増加したが、すぐに蘇生できるため誰もその増加と分布になど気を払わなかったのである。

星神様も危惧されていたことが、とうとうやってきた。

最後の引き金は、花が枯れたと泣く子に、母親が花へ甦りの術を

使ったこと。
それは、最後の一滴であった。
僅かなその術により、とうとう世界のバランスが崩れた。
歪んだ世界が崩壊する。限界まで歪んだ世界が、正常に戻ろうと跳ね上がった。世界にとっては身震いのようなものだった。今まで散々痛めつけられていたものが、限界を超えたのだ。
それは一瞬だった。

人々は星神様にすがる間もなく、砂のように消えていった。
世界の大多数の人間が既に一度以上死んでいたため、世界が正常に戻った途端、存在を維持できなくなったのだ。都市も、人も、砂と消えた。

五九八七年。人が人の欲望により消えた、三度目の崩壊の話。

とても慎重に、白さんの手が私の目から外された。
あたたかい布によってこもっていた熱が逃げ、肌が涙の水分のせいでひんやりする。
長い長い幻視の旅が終わったけれど、私は現実になかなか戻ってこれない。
「星神様は、四度目を創(はじ)められることにとても悩んでいらっしゃった」
白さんの声は淡々としたものだけれど、表情が僅かに沈んでいる。
それにしても、このひとに今の何か凄いのを見せられたけど、一体あなた幾つなんですか？　なんだか千歳がどうとか言っている場合じゃない気がするんですが！　今の記憶は誰の記憶なんですか！
白さんはあっさりと
「僕のだよ」
と言い放ちます。この人は何時からうろついているんだ。旅が人生

ってやつですか？
「僕がうろついているのは、この第四期からだ。さて、今の世界の話をしようか」
私は緊張しながら待ちます。さっきまでの事は終わった世界の話だ。だから手を出しようが無い事。でも、今からの話は直接私たちに関わってくるんだ。
奥歯を噛締めながら、じっとりと白さんを睨む。
さあ、どんとこい！
「そんなに気合入れなくても」
溜息を洩らしながら、白さんは話し始める。

神子、そして今の話をする

「世界を三度喪った星神様は、泣いていらっしゃった」
遠い目をしながら言う白さんに、私は問いかける。
神様も泣くんですか？
「そうだよ」
現実に引き戻されたように、白さんの目が私に向けられる。
「巫女も御子も人々も失い、深く嘆いていらっしゃった」

その声をひきがねに、私の中からある記憶が立ち上がる。

耳の奥に、悲しい音が聞こえる。
透明な澄み切った悲嘆が、ゆっくりと世界を巡るさまが脳裏に浮かぶ。
余りにも悲しい音だった。
胸を引き絞られ、あらゆるものを悼み、慈しみ、そして絶望を孕みかけた夕闇のような音。
あと一歩で暗闇に転がり落ちるであろう光明の残滓と、夜の深さに人々は慄くしか出来ない。

聞くだけで涙がこぼれそうになる。さっきようやく止まった涙がじわりと湧き上がるほどの静かな哀しみの唄だった。多分、これが神様の嘆きなんだと思う。
うわー沁みる！
悲しい！
ワンワン泣きたい気分になる！
無理やり違う方向に頭を向けようとしても、ずるずるその青く透明な哀惜の念に引きずられそうになる。白さんが私の目をまた布で

抑えた。ちょっと白さん、それよりも縄を解いて私が自分で拭った方が早くないですかっ。

「遠慮しないで」

します。遠慮しまくります。鼻水でますよ！　ほーら、縄を解きたくなったでしょう！

「鼻をかみたいときは遠慮なく言うこと」

それこそ、お断りですよおおおお！　そんな世話を焼かれたら、乙女として立ち行かなくなります！

「今も厳しいと思うけど」

酷すぎる！　相変わらず酷すぎる！！

さらりとひどいことを言いながらも、意外に丁寧な仕草で涙を拭ったあと、小さな溜息をついて白さんは話を続ける。

「どの滅びも、個人にきっかけがあった。けれどもそれは人間社会のひずみが飲み込み、更に酷い結果を生むことになった」

一度目の滅びの女性。またその憎しみの元となった恋人と姉。

二度目の滅びの若者。もしくは彼を神へと仕立てた商人。

三度目の滅びの少女。あるいは最後に術を使った母親。

彼らは決して初めから誰かの不幸を望んでいたわけではなかった。それはさすがに私でも分かる。ちょっと歯車が狂って、世界まで狂ってしまった。

でも、あんなに簡単に世界が滅びるものなんですか？　それを考えたら、何度も今まで世界が滅びてそうなものなのに。

「本当に危険な引き金は、小さなものの場合が多い。大体はそのきっかけで爆発するぐらいの土壌が世界に出来ているんだ」

死体が折り重なる荒野、砂となり消え往く人々。

幻視を思い出して私がぶるりと身震いした。恐ろしい絵が頭の中に浮かび上がりそうになる。慌てて想像を頭から追い出しました。夢に出たら確実にうなされる！　寝れないよ！　私の欲求が不満に

なるよ！
「君はどこでも寝れるじゃないか」
悪夢は別問題ですよ！　白さんは大概私を馬鹿にしているっ。ちょっとは女の子扱いしてくれても！　え、なんですかその微妙な表情。
「……なんでもない」
ぎー！
いきり立つ私をよそに、白さんは淡々と話を続ける。マイペース過ぎるよ。私もマイペースだと思うけど、このひとほどじゃないです。
「この四期は初めから人々に枷をかけた」
枷（かせ）？
私が縛られているみたいにですかっ。
「そうだね。君は縛られているね。もうその話題は食傷気味だよ。僕に解くつもりはない」
いや、そういう問題ではないですよ……？　解くつもりがないって、そんなに力強く言わなくてもっ。
「世界が滅びる前に、何らかの兆候が出るようにした。たとえば、人々の間に争いの気配が立ち上がればそれが原因で魔物となる構造に変えた」
魔物は……生まれるんですか？
「そう、人間達が知らず知らずに生み出した瘴気が溜まり魔物となるんだ。人の殺気、嫉妬、強欲なそれら全てが混ざり合って魔物が生まれる。魔物は自分達が生まれる原因となった人々を殺しやがて自壊する。そういった風に作られたモノだ」
……魔物は、人間が作ってる……？
白さんはゆっくりと頷いた。

魔物は、人間だけを襲う。それは、人間が生み出したから。だから、動物を襲わない？　今まで何回か見て来た勇者様達の戦闘を思い出す。魔物は、私と陸馬（うま）さんを決して襲わなかった。それは一度の例外もない。私は星原樹を持っていたからか、ともかく、確かに魔物が動物を襲うのを見た事はなかった。

でも、今までのことを考えて私は白さんに疑問をぶつけた。

人間が瘴気を生み出すって、変ですよ！　この街の中とか、ピンク色は見えませんでしたよ！　こんなに治安が悪化している街なのに！　あと、瘴気って人間の身体に悪いって言ってませんでした？

「……ここもいずれ、瘴気の底に沈むだろう。兆候は出ている。……人間は自分達が生み出した毒で殺されるんだ」

それは、とても残酷なことじゃないんですか？　関係ないひとも、死んじゃうかもしれないんですよ！

誰も死にたくないに決まってます！

一生懸命言い募る私の顔を、白さんは正面から見詰めた。

「そう、それも解決すべき問題だった」

だった、という過去完了系に、私は微妙に悪い予感がする。

「本来は人々が反省し社会全体で生まれ変わればいい。しかし、それもなかなかむずかしいと思う。だから、二つ逃げ道を造った」

逃げ道、ですか？　そう、と白さんは頷いた。

「もしも人間全体が罪びとでも、一人でも心正しいものがひとの可能性を示すなら、魔物は浄化され、世界は救われる　――　その構造も作られた」

それって。私は漠然とその答えに思い当たり、ぎゅっと歯を食いしばった。

「一番世界で可能性を持っているもの。つまり、勇者という人物がそれに当たる」

神子、深淵を覗き込みかける

確かに、星教で才能を見てもらうときにそんな風なことを聞いた覚えがある。この話を聞くまで、私はすっかり忘れていたんだ。勇者というのは無限の可能性を秘めてるって。でも、それは個人の可能性であって、何か今聞いたのとは別次元な気がしますがっ。

でも、世界の全部を勇者様に背負わせてしまうのって、酷くないですか……？

まだ短い間だけど、いろいろなことが頭を過ぎる。勇者様も、一人の人間だ。驚いたり動揺もする。笑ったところは偽臭い笑顔しか見たことがないけど！　重すぎですよ！　色々と！

いくら勇者様が頑丈でも、いつかはぺしゃんといっちゃいますよ！

「集団としての人間が暴走した結果、何度も滅びが訪れた。では、個人の単位ではどうだったか。個人では、評価すべき人間もいたかもしれない。でもそれは数の前に無力だった」

だから、一人を選ぶんですか？

「そう、一人を選び、力を増加させ、世界のゆがみを突破させる。それが今まで何とか世界が持ちこたえている理由だ」

今までの勇者様達が、そうなんですか？

勇者様みたいな人が沢山いれば、みんなで戦えて、楽に魔物とか追い払えるんじゃないですか？

白さんは私の意見には何も言わなかった。

それに、こんな話は、本当は勇者様達にすべきなんじゃないんですか？　私に話しても何の解決にもなりません！

「君に話すのは、君の内部での情報統合が上手くいっていないから

だよ」

せ、専門用語は使わないでください！

「……知らないことを知っていることがあるだろう？　君が聞いたのか、誰に聞いたのか分からない知識が」

私は最近のことを思い出した。

領主様の屋敷でのこと。知らないはずの勇者様達の行動を知っていた。私が物忘れが酷いから、誰かから聞いたのを忘れていたと勝手に思ってた。

「神子は簡単に神様と繋がってしまうからね。君の存在の九割五分は、神子としてあるために神様の知識も混ざってるんだよ。酷くなると、自分の記憶がどこからどこまでか分からなくなる」

瞼の裏、闇の中で。記憶を拾い上げる私の姿を思い出した。

幾つもの記憶の欠片。知らないはずの知識。

自分の記憶も入り混じり、どこからどこまでが、自分だか分からない。

自分がぐらぐらして、そのまま消えそうになる錯覚。そのまま入り混じってしまえば、私は世界から消えてしまう――。

「コラ」

白さんが私の額を叩きました。その勢いに、私はのけぞりました！　痛いです！　絶対額が赤くなってますよ！　暴力反対！

はちんと不安感が消え、急に現実が戻ってくる。

「君は君。なんだろうとそれは変わらない。覚えておくこと」

先ほどの不安感のせいで、ふわふわとなりながら私は頷きました。

なんだったんだろう、今の。

「あまり、深淵を覗き込んではいけないよ」

白さんの声が少し硬い。余りにも真面目な顔をして言うので、私は素直に頷いた。

「それとは別に、君はもう少し色々考えてみた方がいいね。全部は説明できなさそうだから、この際転がりながらいろいろ考えてみなさい」

まさかの説明放棄ですか！

白さんは懐から金色の時計を出しました。星術を込めているやつですか？　時計って高いんですよね！　白さんはそれを確認してまた懐に仕舞いこんだ。

「そろそろ終わりにしなくてはいけない。時間が来たようだ」

ここに来たのは、まさかの暇つぶしですか！

白さんはそんなに暇なんですかっ、暇なら魔物とかぷちっとやっつけちゃってくださいよ！　勇者の称号があるぐらいだから強いんでしょう！　ちょっとは勇者様達が楽になるんじゃないかなあって思うんですが！

「暇じゃないよ。これでも一応、君を見学に来ただけだからね。話し込んでしまったけれども」

あ、ちょっと待ってください！　マントの裾をさばく白さんへ、私は慌てて問いかける。

一つだけ、聞きたいんです。

私は気になったことを質問しました。

結局、今の話は、勇者様達は知っているんですか……？　世界が滅びるとか、魔物は人が生み出しているとか。

一生懸命人を救おうとしているあの人たちはこのことを知っているんですか。

それに白さんはすぐに答えなかった。

少しだけ考えて、そして少しだけ悲しそうな声で言った。

「さあね。知っているかもしれないし、知らないかもしれない。でも、どちらでもあの子達は変わらないだろう。だからこそ、あの子達が勇者であり、大神官なんだよ」

このひともよく分からない。世界の滅びをあっさり口に出しながら、勇者様達に同情的なのかとも思うし。

でも、白さんが言うとおり、神様のことを知っていても勇者様達は変わらないと思う。

想像する。

勇者様達がもしこの話しを知っていたとすれば。

例え知っていても、いつも通りに戦って傷つきながら人のために頑張るんだろう。もしかしたら、余計に頑張るかもしれない。その姿は簡単に脳裏に浮かぶんだ。

無理やり旅に連れて来られて、諦めて流されて一緒にいたけれど、なんだかんだいって私はあのお二人が好きなんだと思う。なんだか少しだけ気持ちが明るくなった。

不意に白さんが私へ手を伸ばしてきた。

髪をぽんぽんと叩き、こめかみから頬を軽く撫でられる。何故か白さんはほんのり苦い笑いを浮かべている。手の温もりに、ぼんやりとこのひともちゃんと生きてるんだなあって思った。髪の色とか顔が冷たそうに見えるけど、そこまで冷血じゃないんですねっ。

「たまに失礼な子だね」

髪や頬についた土を払ってくれたらしい。どうもありがとうございました。

えーっとその勢いで縄を解いてくれれば嬉しいんですが。

「しつこい」

お爺ちゃん酷いですよ！　これからうら若き私がどんな目にあうかっ。

「子供を鍛えるためにあえて突き落とすのが教育の真の姿だろう」

肩をすくめながら軽く言い放ちます。ムキー！

「どちらにせよ、君はその目で一度世界の姿を見なければならない」

不意に白さんの声が荘厳さを纏う。それは命令にも似た響きだ。

世界の姿？

白さんは、困ったように笑った。

「人間にとって、何が幸せかということを見なければならない」
そういいながら、また私を抱えあげる。予告無しの動作だったから私は思わず硬直する。

そして白さんはあろうことか……私を。

元のように地面に置きましたあああああ！　ちょっと！　何するんですかあああ！　この真っ白シロスケさん！
じたばたもがきながら抗議する。縛られているからそんなに動けない。
「んむううう！」
縄を解いていけええ！！
「本当に君は元気だね。じゃあ、頑張って」
頑張れとかそういった問題じゃなくて、助けてくれたらいいじゃないですかあああ！
「きちんと猶予を作って上げたんだ。少しは感謝して欲しいな」
猶予、ですか？
「君を探している二人が見つけられる程度の時間、話し込んだということだよ」
え、なんか最後に言い捨ててるんですがっ！
「また」
ひらりと手を振って白さんはあっという間に消えました。本当に帰ったあのひと！

神子、被害者Cにジョブチェンジをする

白さんの気配が完全に途絶えた瞬間、世界の空気が変わりました。

まるで全てが息を潜めていたみたいに静かだったのが、音が戻ってきました！　おお、外の気配がする！　音があるって素晴らしいですよね！　さっきまでは私がびっちびちする音か、白さんの身じろぎの衣擦れしかしてなかったから静かで静かでたまりませんでしたとも。

遠くでがやがやとする気配を感じながら、何とか脱出できないものかとズリズリとそのまま移動してみる。んぐーとかうめいても、外までは聞こえなさそうです。近くで人の声が聞こえないからね。ちょっと知的に判断してみた。

うわーん、やっぱり思った以上に縄がきつい！

こう、なんというか……非力なのってたまにつらいですよねっ。

まあ、この状態になっているのは半分以上自業自得ですが！　あとの残りの責任は白さんにありますとも。次にあのひとにあったらシメルと心に決めました。衿もと掴んでガクガクして、服伸ばしてやる！　服を買いなおすがいい！

それにしても私の服が悲しいほどに泥だらけですよ。一応白さんが適当に土を払ってくれたけど、丁寧に横たえられたせいで元の通りです。

あの木箱のすみっこかで縄をがりがり出来ないかな？　そう考えて、手近な箱のところへ行こうと思うんですが、なかなかこれが移動できない！　つまり芋虫みたいに這わなきゃムりってことですね！

しかし、私は閃きました！

転がればいいんじゃないですか！　横になってるんだから、ちょっと後ろ手に縛られた手が邪魔だけどゴロゴロいけば移動は簡単だ！
よし、そうと決まればっ。明るい脱出計画のために、私は気合を入れて横向きに回転した。
と同時に、扉が開きました。

「うおっ！　転がってる！」

うお！　誰ですかこんな時に！
それはこっちのセリフだ！
知らない声だった。
動揺する私。

でも動き始めたローリングは止まらない！　止めることなどできないっ。
勢いよく私は箱の方に転がって行き――。

ゴッ、と鈍い音が倉庫の中に響き渡りました。

頭打った。
うあああああかなり痛いです。
縛られたままもだえる私。
手が自由だったら絶対頭抱えて転がってる。頭を抱えられない分、微妙に丸まっていますがっ。
うーうー唸る私をさっき入ってきた誰かが覗き込んだ。
「怪我するなよ……？」
男の子でした。私よりかなり下。生意気盛りな感じです。きつい目鼻立ちで、日に焼けた肌をしています。服装は余り裕福じゃないようで汚れたシャツとズボンをはいている。手足もがりがりだ。栄養が足りていない様子。

私の心配をしてくれてるんだろうか？　ひとの優しさって、沁みますよね！　少年は立派な大人になる。

「大事な商品なんだから、頼むから傷ものにならないでくれよ」

前言撤回。こいつが犯人一味だったようです。絶対立派な大人になんかならないよ！

私はじっとりと睨みます。さっき白さんで散々練習したので、恨みを込めた目線は得意分野になりました。フフフ、恐れおののくがよい！

「元気そうだろ？　これなら結構いい値がつくんじゃないか？」

少年は背後のおじさんに語りかけます。気弱そうな猫背のおじさんは、おどおどとしながらも頷きます。ちょっとおじさん、何頷いてるんですかあああ！　このおじさんの服装も、つぎはぎだらけで決して綺麗なものではない。

「そうだね、輸送して売却するとしよう。ここで万が一足がついてはいけない」

「でも輸送費の方が掛かるだろ？」

おじさんの声がどこか記憶を刺激する。そうだ！　さっき拉致されるときに聞いた下手糞な星術の声だ！　どう考えても実行犯ですね！

私はもごもご喋りながら暴れるより、この人たちが何をしようとしているのかを聞き取ろうと耳を傾ける。といっても話の内容が私の処遇に関することだから、いやでも聞いちゃうんですけどね！

ハハハ……やーめーてー。人を売るな勝手に！　何でこんな商取引みたいな会話になっているの！　私、商品じゃないですよ！　早く拾ったところに返しなさい。

「すまないね、娘さん。私達も生活が苦しくなってね」

「オヤジ馬鹿言うなよ。騙される方が悪いだろ」

謝るおじさんに、ハッ！　と鼻で笑ってこちらを小馬鹿にする少年。

うわ！　いらっとくる！

騙すほうが悪いんじゃないの？
何で騙される方が悪いって結論になるんだ！

敵意まみれで少年を睨みつける。
「あんまり反抗的だと、縄とかねーぞ。そのままだと血が通わなくなって、腕が駄目になったりするんだぜ」
薄暗い顔で笑う少年に、私はぞっとした。少年の目が暗い。全身から血の気がうせ、変な汗が滲み出します。
白さんのことを疑いながら本当の意味で警戒していなかったのかもしれない。こんな恐怖は感じなかった。
理解できないものを目の前にした怖さがじわじわくる！　あの変なひとのほうが、この人たちより確かにましだったかもしれない！
でも縄といてくれないから私この人たちに逢ってるんだよね……？　うん？　よく考えたら、白さんも酷いやつだと結論に達しましたとも。残念！
「あんたが最初ってわけじゃないから、安心しな。ちょっとはこましな所に売ってやるよ」
抜き身のナイフを私の頬につけます。僅かな光をナイフは反射しない。濁ったような曇りが表面に浮いたままだ。私は硬直した。
マシなところも何も、売るなよ！　ツッコみたい！　でも喋れない！
内心叫んでいない限り、恐怖でおかしくなりそうだよ。
最初じゃない、って言うことは、今までも何人もの人がこうして売られていったということ……？　その事実の方が怖い。なんで、人が人を売るの？　聞いたことがなかった。普通、ほかの人にさらわれて来たって喋ったら、どこかに訴え出ることが出来そうなものだ。でも、今まで売られていった人たちは、多分そんなことが出来なかったんだろう。だって神官様が何も言わなかったし。勝手にあの人の噂収集力は半端ないと思っています。

「あんた色気がないから娼館よりは労働力かもな？」
私の頬をナイフでひたひたと叩きながら、少年は楽しそうに笑います。
「でも健康な女の子なら意外と値がつくかもしれない」
「オレだったらこんな胸がないのはお断りだ」
胸がないって言うなあああああ！！　こんなところでも私の身体的特徴をあげつらうか！　くそういつか巨乳になってやる！　夢だと笑うがいい！　だが、最後に笑うのは私だ！
私は少年を睨みつけようとして、思わず息が止まった。
少年の周りに、薄暗い靄（もや）が見える。
ピンクじゃない、黒い靄だけど、部屋の中の明るさに対して、少年の周りが暗すぎる。思わず背後のおじさんも見てみたけど、おじさんは意外と普通だった。
「どこ見てんだよ」
少年が面白く無さそうに、ナイフの先端を私の鼻の先に向ける。思わず息を止めて、その先端を見詰めた。何もかも、異様な雰囲気だ。
もうすぐここも瘴気に沈む――。
白さんが言っていたことが頭に過ぎる。もしかして、この黒いのがピンクの元……？
掌が汗でべとべと！　無駄に握ったり開いたりしてみる。縛られて痺れてきたのが、少しだけ血の気が戻ったのを感じる。でも、それだけだ。少年が言うように、縛り付けられたせいで調子が悪くなるかもしれない。
私は誘拐犯への恐怖と一緒に、変な靄への緊張感が高まっていくのを感じた。

被害者C、輸送される

やっぱり薄暗い靄（もや）は少年の周りに漂っているようです。

こっち来るな！

ピンクのあれもどうかと思ったけど、黒いこっちも少しでも吸いたくない感じですよ！

暴れたいけど暴れたらナイフの先っぽがぷすっと刺さりそうな気がする。というか刺さる。そんな危険なものは、人に向けたらいけないんだよ！　どういう教育してるのおじさん！　いや、教育は上手くいってないね……いたいけな私を売却しようとしている鬼畜親子です。

暴れたい気持ちは満々なんだけど、

「暴れたら刺すからな」

と脅されたらさすがに暴れるわけにいかなくなった。小心者だからね！　ちゃんと大人しくしておくよ！

ナイフを突きつけられたまま、少年が私の紐を緩める。じわっと血の気が戻ってくる感覚がして、次にかゆくなって、凄く痺れてきた。うわあああ、いま突付かれたら悶絶するよ！　悶絶してナイフでぷすりといっちゃうよ！

確かにあの縛りのままだったら色々大変なことになりそうだ。それにしても、私が拉致されてどれぐらい時間が経ったんだろう？心配されてるかな……どうかな……。白さんが色々ごちゃごちゃ言ってたけど、結局どうなのか分かりません。勝手に懐いているといえば勝手に懐いているとも言えるし。おおっと、気分が落ち込んでまいりました。まあ、この状況で明るくハイテンションは厳しいかなっ。

恐怖で胃の底がでんぐり返ししそうだけど、ささやかに頑張って

いますよ。

おじさんが私の縄を解いて手首を押さえる。そして横の袋から何かを取り出しました。じゃらって重い音がする。

指示通りに手を前に出すと、がっちゃんとさびた鉄の手錠をはめられました！　小指の太さぐらいある鉄の塊で、両手首をはめる穴が開いているタイプのやつです。鍵穴もさびてて、コレ本当に開けれるの？　って言うレベル。物持ちいいんですね……。

それにしても、お、重いですよこれ！　そして動きに邪魔です。私を鍛えさせる気か！　このままだとむきむきになるよ！　いや、二の腕が気にはなっていたけれど、こんな強制トレーニングはいらないです。まことに勝手ながら、謹んで辞退させていただきます、ホント。

紐よりもきつくはないけど、つかまった感が増してきた！　じわじわといやな汗が噴出してきます。脇とか、背中とか。脇汗のしみはとても気になるところなんですが！　幸いなことに、いまは両手を上げられません。脇汗のしみは、ばれないよ！

おじさんが私の足にも足かせをかけて、留める。こっちは両足首に一個ずつで、間を鎖でつないでいるやつ。これもまた足を鍛えるフラグだね！　この重さは、多分走れないようにもしてるんだろうな。

今気付いた。靴を脱がされてる。どこへいった私の靴。足首に直接足輪がかけられて、大変冷たいです。このままだったら動かしすぎたら足の皮が大変なことになるかも！　いつの間に私は生足を晒していたんだ。白さんは何も言わなかったな。でも縛られたままの私と普通に会話するひとです。あのひと基準は間違えているということに、うすうす気付いてます。

手首と足首に鉄の輪が入れられようやく縄は全部外された。あと

はさるぐつわだけだ。でもこれは外してくれる雰囲気はありません。外したら騒ぐし。絶対騒ぐし！

私はようやく起き上がれました。手かせ足かせの鎖がジャラジャラいいます。正直、これだけさびていたら、これで傷が出来た時かなり危ないんじゃないかな。さびた刃物の傷は危険だって聞いた覚えがある。なるべく動かさないようにしたら皮膚がこすれて傷になるのを防げるんだろうか。むむむ。服にさびがつくのがイヤですが仕方ない。服に触らないように頑張るのは諦めました。大人しく膝の上に手首を置いておくか。服よりも自分の心配の方が大事だよね！　そうだよね！

無理な体勢ばっかりしていたから、身体がばっきばきです。ちょっと起き上がるだけで骨が凄い音立ててた。さすがの少年もかなりどん引きしてましたよ。ぐるぐる肩を回したりしたいけど、どうにも少年の様子ではさせてくれそうにありません。残念！

おじさんがごそごそしていたと思ったら、私の頭に麻袋をかけました。ばっさりと。

「もがー！」

いきなり視界が塞がれて、反射的に叫びます。だって麻袋ちくちくして痛いんだもん！

そして……臭い！　何を入れてたんですかこれ！

「静かにしろ」

ナイフでつんつんされて脅される。ハイハイ静かにしますよ。ええ静かにしますからそれを下げてくださいなあああ！　ちょっとぷすっとしたらすぐ穴が開くぐらいやわらか町民ですからカンベンしてください。

「よっこらしょ」

おじさんが気合の声を掛けながら、私を持ち上げる。こ、この体勢

はッ！

荷物担ぎ！！

懐かしいなあ……拉致って、これが基本なんですか？　私が知らないだけ？

まあ、お姫様抱っこをする犯人はいなさそうだけれどね。

勇者様のあれと比較するのもなんだけど、安定感がないです。おじさん、ふらふらしてます。重いなら、持たなくていいよ！　売却も諦めてくれたら嬉しいです！

相変わらず、みぞおちのあたりで身体が折れ曲がるせいか、その部分を肩に乗せられる。お腹を圧迫されてかなり苦しいんだけどっ！　しかも麻袋がちくちくしてもういーたーいー！！！　さすが勇者様、荷物担ぎも軽々こなしてた！　今から考えたら凄いことですね！　こんなところで勇者様の凄さを実感した！　したくはなかったけど……。

「じゃあ、さっさと移動するか。市は何時からだっけ？」

少年がおじさんに言います。おじさんはふらふらしながらなにやら答えていますが、麻袋が顔を擦って痛いのに気を取られて聞き逃した。

それにしても、そんな市場があるんですか。

世間は、私が考える以上に恐ろしいところだったよ！

被害者C、荷馬車に揺られる

結構いい値段がする食材の中で、草牛っていうのがある。

お肉に全く臭みがなくて、脂肪が多い。だから焼くととろけるような食感になる、庶民には手に入りにくいお肉様なんだけど。草牛ミルクも癖がないから飲みやすい。これも高級品ですよ！　これで入れたココアなんか絶品です。前、神官様に奢ってもらって、それで懐柔された覚えがあります。

草牛は、元々森に生息する森牛の小さいのや大人しいのを捕まえてきて、草原で飼育するようになったからそんな名前なんだって。

背の高さが私の二倍ぐらい大きくて、毛は短くてつるつる。頭にねじったツノみたいなのが三本生えている。繁殖期じゃないと暴れないから安全な生物らしい。陸馬さんみたいにもふもふじゃないから、余り好きな外見ではないんだけどね。

何でいきなりそんなことを言い出したのかというと、前に住んでいた街の近くで草牛牧場があったのを思い出したんだ。

で、そこにはお肉用の草牛とミルク用の草牛が飼われてるんだけど、お肉用の草牛は生きたままより都会のほうに出荷されるから荷馬車に積まれていく。時折そんな隊商を見たことがあるんだけど、荷馬車から外を見るなんかくりッとした目が、なんとも言えず哀愁を誘うんだよね……。

あのときの草牛さんたちは、こんな気持ちだったのかな！

つまり同じ立場になったようです。

これから私は売られるようです……？　まだ今ひとつ実感が沸かないんだけど！

おじさんに荷物担ぎされて下ろされた先は荷馬車の荷台だった。
板張りの床の上にごろっと転がされましたよ！　丈夫な芋じゃないんだから！　扱いは丁寧にお願いしますよ！
荷馬車の荷台は他の荷物も積んでいる。ほろが掛かっているせいで、外が見えない。隙間から覗こうとしても、前の御者台から少年がにらみを利かせているから無理っぽい。荷馬車の端っこに、ギャアギャア言うウロコがついたひよこだか鳥だか分からないものが混じってるけど、あれも商品なのかな。怖いのでそっちには近寄りません。

いまも荷馬車の板張りの床の上でゴロゴロしています。
これが一番楽な体勢だよ。怠けてるんじゃないよ！
座ったら、手かせ足かせが食いこんで地味に痛いんだもん。思う存分横になる。体力温存ぐらいしかすることないしね！
中身の軽そうな箱が、がたんと荷馬車が揺れるたびにこっちに来そうになる。ぶつかったら大怪我ですよ！　ちょっと、安全管理ぐらいしてくださいよ。足で必死に押さえていると、更に上の箱がぐらぐらしてくる。足は二本しかない！　しかもかなり上だから、届きようがないです。どれかを切り捨てるしかッ。
ふぬぬ。支えるのも、意外にに重労働だな！　足かせの重さもあって、足の自由が利かないよ！　もともと足の筋肉もそれほどないしね！　……自分で言って、これも物悲しくなりました。

ひときわ大きな音を立てて、荷馬車がガタンと止まりました。
ひー！　とうとうバランスを崩した荷物が私の上に落ちてきたよ！
かなりの痛みを覚悟して、ぎゅっと目をつぶる。
でも覚悟していた痛みは来なかった。恐る恐る目を開けると、丁度、私は荷物の隙間に入っていたようで、隣の荷物に突っかかって私に直撃しなかったみたい。
外で言い争う声がする。

なんだろう？
手かせ足かせが重すぎるからこっそり見に行けない。鎖もジャラジャラ言うし。さるぐつわも健在ですよ！
だんだん騒ぎが大きくなってきた。おじさんの悲鳴のような声も聞こえる。
端っこにいたひよこか謎のトカゲが、ぐあぐあ騒いでる。あれなんかいやな感じがするなあ……ん？　あれ、魔物じゃないんですか！！ちょっとそんなの売らないでくださいよ！
荷物が邪魔で動けない私をよそに、騒ぎは徐々に大きくなっているようです。

被害者C、確保される

馬車の外が慌しくなってきて、ほろを誰かがばっと開きました。外はまだ昼だから眩しい。

急に荷台に光が差し込んだ。暗いところに慣れた目には、光線が刺さるぐらい眩しい！

その光に驚いて、魔物が凄く騒ぎ出しました。当然ほろを開いた人もそれを見たらしい。

「魔物を飼ってるぞ！」

ギャアギャアいうウロコひよこを指して、誰かが野太い声で指摘する。そうですよ、それ魔物ですよ。気持ち悪いですよねっ。ウロコひよこは後ろの端のほうに積んでたから、すぐ発見されたみたいです。ちなみに、私は相変わらず荷物の影で生息しています！

「他にはないもないか！」

外から聞こえる声に、そのお兄さんは、

「荷物ばかりです！」

と答える。あ、さっきのおっちゃんたちとは別口なんだろうか？知らない人の登場に正直びびりまくりだ。知らない人についていかないって言われたしね！　……今更手遅れだとは言わないでください。

というか荷物ばかりで悪かったな！　どうせ荷物だよ！　ああそうさ、最近の役割はお荷物ですよおおお！

ちょうど箱と箱の間にいるうえに、さっきの揺れで上にも箱が載っているものだから、気付きにくいんだろうな。

助けてくれる人なら是非気づいてほしい。でもこの人たちが強盗とかだったら、気付かないでいいよ！　まさに二度目の災害になるね！　そこまでついていないと思いたくないけど、最近のついてなさっぷりを考えたら楽観視は出来ないっ。

「違反物は魔物ぐらいか？」

こっそり荷物の隙間から見たお兄さんは、かなりむきむきの体形でした。光を背にしているから影で体形が分かる程度だ。太い腕だな！　腕に多分ぶら下がれるよ！

抜き身の剣を持ったまま荷台に上がりこむお兄さんに、私は本気でびびる。だって、あれでさくっといかれたら終了ですよ！　人生的な意味で。

気付かれませんよーにとガクガクしながら観察していると、お兄さんが近寄ってきます！

うわ！　来るなっ！

がっしりしているせいか、荷馬車の床がぎしぎし言っている。ぎし……ぎし……って足音が更に恐怖をあおる！

一歩ずつ近づいてくるそれに、私はゴクリと喉を鳴らした。まあ、ずっと飲み食いしていないからカラカラだけどね。

そしてお兄さんが、私が隠れている箱の山の前に来ました。

「ふむ」

色々チェックしながら歩いているようです。

やっぱり盗賊ですかっ？　でも身なりは小奇麗だな。盗賊のイメージの、臭い！　風呂嫌い！　っていう雰囲気ではないみたい。それは勝手な思い込みだろうか。このお兄さんは飾り気のない鎧を着ている様子。

お兄さんは箱を眺めつつ、おもむろに剣を振り上げた。ギラリと刀身が光を弾く。

勢いよく振り下ろされるそれに、私は硬直した。ぎゃー！

重い音がして、剣が深く突き刺さる。

剣が深く刺さったのは、私の目の前にあった箱です。汗がだらだら出るよ！　でもそんなナタ代わりに剣は使わないほうがいいと思うよ！　この人もあれですか、勇者様と同類で剣は消耗品ってやつですか！

お兄さんは、箱を開けたかったらしい。

「中身は……砂か？　何でこんなもん運んでんだ」
剣をぐりぐりして木箱の中身を見ている。私は箱の陰からお兄さんを見上げました。身動きしたら、手かせとかが音を出しそうで硬直したままだ。
「ん……？」
お兄さんがふと何かに気づき、顔を上げる。
ばっちり目が合いました。
「ぎゃあああああああ！」
いやあああ！　心の中で絶叫する私と同じく、お兄さんも絶叫しました。
「どうした！」
外から鋭い声が飛び、何人か荷台に飛び込んできます。
お兄さんはしりもちをついて、私のほうを指差す。指先が震えています。失礼な！　人を指差すなっ。
「お化け！」
「はあ？」
後ろから来た人は女の人が混じってました。でも今の声は明らかにお兄さんを馬鹿にしています。鼻で笑ってるよ！　実際お兄さんは私と目が合った瞬間、腰が抜けたようで座り込んでいる。ガクガクしているのは私とおそろいですね！　ちょっと親近感が出た。
「なんだ、女の子じゃないか」
お姉さんはひょいと箱の陰にいる私を覗き込んで、普通にお兄さんに告げた。が、すぐに凄い形相で私を振り返りました。

「女の子ぉ！！」
そんなに見られたら……穴が開く！
さるぐつわをしていなかったら、恐らく絶叫を上げていたと思うよ！
こわいいいい！　確かに私の性別は女ですが！
それがなにか！　だからこれ以上は転売しないでくださいよ！
「何で女の子がこんなところに……まさか」
それは私のほうが聞きたいです。攫われて売られそうだというのは分かってるんですが。
と、お姉さんは箱をガタガタ動かし始めました。
お兄さんを軽く蹴り飛ばし、「どけ」と言った後、私をひょいとお姫様抱っこしました。お兄さんが跳ね上がるように横に退く。力関係がよく分かるね！
それにしても……人生二度目のお姫様抱っこです。
ここ数時間は濃い人生を送っている気がするよ！　お姉さん、私手かせ足かせが地味に重いんですが……これが私の体重じゃないですよ？
女の人のふんわりと優しい匂いに、警戒心が解けていく。もともと、砂糖粒より小さな警戒心なのは自覚していますよ！　一応主張はしてみる。
お姉さんだけど、抱き上げ方の安定感が半端ない。軽々と私を運搬します。さっきのおじさんの方がやばかった。荷物担ぎなのにふらふらしてたもん。そのうち、私運搬される評論家になれるかもね！　誰も求めていない情報だと思うけど。
そしてお姉さんに抱っこされたまま荷馬車のほろの外に出る。少し目を瞬かせたけれど、外の眩しさに目がすぐ慣れた。
お姉さんの髪は赤いワインみたいな深い紅で、目は優しい茶色だった。化粧をしていないけど、精悍な美人さんですよ！　でも、こんなに近くに誰か他人の顔があるのは、尋常じゃなく緊張する。
「薄茶の髪の毛、小さめの体形にこの目の色……」

お姉さんはじっとりと私を観察します。
ぎゃー！　至近距離は止めてください……鼻の頭とかが気になる年頃なんです……。
「お探ししていました、神子様」
へ？

被害者C、ようやく神子にもどる？

私は驚いて返事できなかった。けど、お姉さんは何故か私を神子だと確信したようです。目がどうとか言ってたけど、私の目は普通だよ！　ツッコミはさるぐつわに阻まれ出来なかったけどね。

「大変申し訳ございませんが、少しお待ちくださいね」

丁寧にお姉さんは言いながら、私をとりあえず横の箱に座らせた。木箱に足かせが当たって、ガツンと音を立てる。

周囲を見たら、お姉さんと同じような鎧を着た人たちが手際よく荷物を荷馬車から降ろしていた。おじさんたちの馬車だけじゃない。数台停止させられている。おじさんたちは、と探したけれど、私は見つけることは出来なかった。何気なく目をやった他の馬車からは、ホコリで黒くなった人たちが数人出てきた。……私と同じような手かせをつけている。もしかして、商品仲間ですか？　全く嬉しくない仲間宣言です。その人たちの目はうつろで、暗い穴を覗き込むようだった。

私が周囲の光景に気を取られている間、お姉さんはさるぐつわと奮闘してくれていた。

解こうとして結局解けず、小さなナイフで切り落としました。圧迫されていた場所に血が通うむずがゆさを感じる。

ようやくさるぐつわが除けて貰えた！　開放感が心の中に広がり、ふわふわする。

大きく口で息を吸い込む。何故か喉が震えて上手く息が吸い込めない。なによりもお姉さんにお礼を言わなければ。

ありがとうございます！

そう言おうとして、「あ、」と口を開いたけれど、小さな震える声しか出なかった。声を出そうにも喉が言うことを聞いてくれない。お姉さんが気の毒そうに私を見る。私は喉を押さえて呆然としていた。

手が震えている。

やっとそのことに気がついた。

手だけじゃない、全身が震える。だから声も上手く出なかったんだね！　よく分かりました！　頭の中心がぼうっと痺れて、冷静な部分ともうひとつ何かが心の中にせりあがってくる。

このガタガタって震えるのが、どうにも止まらないんですが。

多分なんだけど、今更ながら恐怖がやってきたみたい。

自覚した途端、今の状況も恐ろしくなった。すうっと身体が冷える。

安心していいの？　まだ、警戒しなくちゃいけないの？

この人たちは誰なのか、これから私はどうなるのか、本当に助かったのか、それとも実は倉庫の中で見ている夢だったり！　とか。

ろくでもないことが頭に泡のように沸いて出ること出ること、止まりません！

ネガティブ思考に走りかけていると分かっている。だけど実際手足が冷え切っていて、震えが止まりません。ぎゅっと自分の指を指で握る。こうしても、手の暖かさが戻らない。

本当に怖かった。

ナイフの輝きも、わけのわからない悪意も、簡単に死にそうな世界も、全部知らないものだった。

知らないからといって、容赦はされないんだ。それが恐怖と共に身に沁みて理解できました！

これからは知らない人と口を利かないようにします！

心の中で誓いました！

私が震えているのを察したのか、お姉さんがあったかいマントをぐるぐるに巻きつけてくれました。お姉さんがつけていたやつだ。まだ温もりが残っている。ビックリして顔を上げると、

「もう大丈夫ですから」

とにっこりと笑いかけてくれました。少しだけ、指の先がじんわりと温まる。マントの暖かさに、ゆっくりと詰めていた息を吐く。

あ！　知らない人と話さない誓いを立てたけど、お姉さんとは話すべき？　お姉さんは確信を持って私を神子だという。この人は、私のことを知らない人じゃなくて知ってる人なのかな？　これは難問だ。実際答えを間違えたら後がかなり怖い気がするよ。

お姉さんは、懐から何かの紙切れを出し、木炭の欠片でそれにしるしを書きました。

「Ｋｈ」

合言葉のような星語を唱えると、それがふわりと浮き上がりました！

伝書の紙だ！　はじめてみた！　私は目を丸くしてそれを眺める。すると、それはあっという間に風を切って空に吸い込まれていきました。伝書っていうのは、防水防火加工をした特殊な紙に星語をあらかじめセットしておいて、目的地まで簡単な伝言を届けることのできる凄い紙なのです！　さっきの欠片一枚で私の月収が飛ぶ。確実に飛ぶか、足りないぐらいだ。その代わり、速さと正確さは半端ないそうだ。

「あねさーん！」

さっきの筋肉お兄さんがのっそりと荷台から降りてきました。私は反射的にびくりとふるえる。さっきの白刃の輝きが頭に甦ったせいだ。

お兄さんを改めて観察する。

丸太のような筋肉が付いた手足、がっしりとした身体、浅黒い肌に黒い髪、そして男らしいごつごつとした輪郭の顔立ち。こうあげていったら、怖い要素で固まっている。のに、日の下で見たお兄さ

んは、怖さが一気になくなりました。
　目が……つぶらすぎる！　なんだあのつぶらな瞳！
　ペットでもあんなにつぶらでイノセントな目は滅多にないよ！　私以上にこの人も詐欺にあいそう！　つまりちょっとお馬鹿っぽいです。私に言われたらおしまいだよね！　ツッコミを受ける前に自爆してみた。
「箱をあらかた潰して調べたんですけどー」
　ニコニコしながら報告するお兄さん。お姉さんはギラリと目を光らせ、振り返った！　瞬間、空気を切り裂くように大音量がお姉さんから発せられた。
「この大ボケ小僧が！」
　声に殴られたようにお兄さんが首をすくめる。怒られた本人以外も頭を叩かれたようにびくりと首をすくめる。私も反射的にビクッと跳ね上がった。声に圧力ってあるんですね、実感しました！　さっきと別の意味で震えそうだよ！
　お兄さんは心なしか青ざめている。お姉さん、こちらに背中を向けて立ってるけど、怒りのオーラがとんでもないです。どばどば溢れてますよ！　隣の馬車を調べていた人たちも、あーあと言った顔で怒るお姉さんを眺めています。
「馬鹿が！　誰が壊せといった！　無実の市民の荷物だったらどうするんだ！　捜査は慎重に行えと厳命しただろう！　そんなだから捜査依頼のあった神子様がいても見落としをするんだ！　指示を聞いて、疑問点があればすぐ聞けといっているだろう！」
　ガツンというお姉さん。そして、実際に拳でガツンと制裁を加えてました。おお、見事なパンチです。風切り音が鋭い。頑丈そうなお兄さんの筋肉にめり込んでいます。
　ナイスパンチ！　ナイスパンチです、あねさん！　私もあねさんと呼んでいいですかっ。心の中でこっそり呼ばせていただきます。
「ヘリオドール隊長」
　別のお兄さんがあねさんに近づいて、敬礼をしました。そしてなに

やら報告しています。
どこかの軍隊なのかな？　おそろいの鎧と服だ。ちなみにお兄さんは悶絶していますが、周りの皆さんはいつもの光景なのか手を貸さずにあたたかく見守っているようです。こうしてお兄さんが成長していくのか。時には体罰も必要なのか……神官様が、私への説教に体罰を選択されませんようにっ。でもあの人の場合はそういった直接攻撃より、心をえぐる一言を連発しそうですよね！　……その方が、精神力の限界がすぐに来るけどね！
神官様のことを考えて、勇者様のことを考えた。
……お二人は、どこに行ったんだろう。
今、ここにいないのは分かる。
マントの中で服を握り締める。ようやく、手の震えは止まった。
でも、あねさん達が探してくれてたってことは、お二人が探してくれてたってことだと思ってもいいんだよね？　そもそもなんの役に立つか分からない庶民です。本当はその辺においていっても仕方がないと思う。探してくれたけど、これでお別れとかじゃないよね？
じわじわ不安になってきたあああ！
多分、知らない人の中にぽつんと取り残されている不安も上乗せされて思考が暗くなっていく。

その時あねさんが、マントの上から、私の手の辺りにそっと手を添えた。
ビックリして目を上げる。あねさんは、真っ直ぐに私を見て、力づけるように、
「すぐにお迎えが参りますよ。ご心配することはもうありませんから」
と、軽く言い添えてくれました。

あ、あねさん……！　確かにこれはあねさんだ……！
あねさんと呼びたいのをぐっと堪え、私は頷いたのだった。

◆神官、戦闘する（前）（前書き）

神官視点です。

◆神官、戦闘する　（前）

吹きすさぶ風が耳元で暴れ、全ての音を掻き消していく。
今から使う星術に影響があるか、冷静に考える。
本来、星術の効果は騒音や声量に左右されない。世界に謳った虚実を現実として引き寄せられるかに掛かっている。世界を塗り替える術、それが星術なのだ。
一般神官や魔術師は韻律を大声で謳い、それに没頭することで意識を集中させる手法を取っている。
それは不便で驚愕すべき方法だ。術のみに集中してしまえば、戦闘時に注意が散漫になる。実際の戦闘で、術者が狙われないということはありえない。
これから使う術は、本来は忘れ去られるべきものだった。口に出して使用し、謳うべきものではない術。大声では使用できないものだ。それが残っているという皮肉が、人間が人間たる業を持っているのだと思い知らせる。禁じられた知識までも手を伸ばしてしまう業だ。

私は腕を振り、遠くにいる勇者に合図を送る。勇者は剣の角度を変えたのだろう、光で返事が来る。
準備は完了だ。

息を吸い込み、初めの一行を音に乗せる。

「Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０
Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ」
（私は全てを憎んでいる）

不穏な響きの旧星術は、この一行だけで周囲の雰囲気をがらりと変える。

世界を否定し、憎み、嫌う、世界を腐らせる星術。

これは確実に瘴気を発生させ、引き寄せる。

ツワナアゲート地区に御伽噺にまぎれて伝承されている「楽園の終焉と世界を憎んだ女」の話、その女が叫んだ韻律だという言い伝えがある。全文を星唱すれば、世界に腐敗を撒き散らすという禁術だ。

ここでは前半のごく一部だけを使い、瘴気を発生させ魔物を引き寄せるために使用する。わざと世界を汚損し、歪ませることにより魔物を呼び込む。魔物は瘴気を好む。瘴気があるところに魔物がいるのではなく、逆に瘴気があるからこそ魔物がやってくるのだ。だからこそ魔物との戦闘の後の浄化が重要になってくる。戦闘に勝利したとしても、残る瘴気が次により強力な魔物への呼び水になることが多いのだ。

神官となり、今までは浄化の術ばかりを謳ってきた。知識として知ってはいたものの、この韻律を謳うこと自体、本来はありえないことだった。世界から除去すべき瘴気を増やすのだ。

これが露見すれば恐ろしい騒動になるに違いない。魔物を集めることが出来るのを証明してしまう。魔物を「有効利用」しだすものたちが出るかもしれない。更には勇者と私に関しても不審を招くだろう。かなりの危険を持っている賭けだ。

しかし、今私たちには時間がなかった。

私たちの現在地はブロンザイトより大陸中央を抜ける荒野だ。

ここならば、他に誰も通らないとサニディン騎士団は確約した場所。

本来、サニディン騎士団が魔物を駆除しようとしていた地点である。数時間前起こり、私たちでは解決できないことへ騎士団の協力を求めた。その対価として、私たちはこの地域の魔物を完全駆除する契約を交わしたのだ。双方合意の上であり、私たちに不利なものでもない。もともと勝算がないものは引き受けることはしない。

ただし、こちらの勝算があるとしても、あちらが頼んだ依頼を完遂できるかは別問題だ。

続きの星術を編み上げる。

世界を憎んだ女の悪意が、空気をたやすく汚染する。神子がいれば、何色だといい始めるだろうかと考え、苦笑する。彼女が消えて数時間、いつの間にか神子がいることが日常に変わっていたことに今更ながらふとした瞬間に思い知る。

「Ｋｗｗｙｘｘｘｓｈｖｖｖ、Ｎ＊ｔｘｘｘｍｘｘｘｓｈｖｖｖ、Ｋｗｗｃｈｖｖｖ０ｓｈｖｖｖ、Ｎｘｘｘｎｖｖｖｍ０ｋｘｘｘｍ０　ｇｘｘｘ　Ｋｖｖｖｎｖｖｖｒｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ（悔しい、妬ましい、口惜しい、何もかもが気に入らない）Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ」（私は全てを憎んでいる）

遠くに黒い雲が現れた。だが恐るべき速度で湧き上がりこちらへ向かってくる。

一見、鳥の群れのように見えるそれは、魔物の群れだった。

意識を並列思考に切り替え、状況分析と旧星術の維持に力を注ぐ。

「Ｓ＊ｋｘｘｘｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　Ｎ０ｒ０ｗｘｘｒ＊ｒｗｗｇｘｘｘｖｖｖ！（世界は全て呪われるがいい！）

Ｙｘｘｘｍｖｖｖ、
Ｋｖｖｖｚｗｗｔｓｗｗｋｖｖｖ、
Ｓｈｖｖｖｎｖｖｖｔｘｘｘ＊、
Ｋｗｗｒｗｗｓｈｖｖｖｍｗｗ　ｇｘｘｘｖｖｖｖｖｖ！」
（病み、傷つき、死に絶え、苦しむがいい！）

私の存在も汚染されるような黒い力が沸きあがってくる。
あと二構文、それに引きずられないように謳いあげた。

「Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０
Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ
（私は全てを憎んでいる）
Ｙｘｘｘｍｖｖｖ　ｎｖｖｖ　Ｏｃｈｖｖｖｖｒ０、Ｚ＊ｔｓｗｗｂ
０ｓ＊ｙ０、Ｈｖｖｖｖｎｘｘｘｄ０　Ｎｖｖｖｄ０ｔ０　Ｎ０ｂ０
ｒｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ！」
（闇に落ちろ、絶望せよ、陽など二度と昇らない！）

星術が完成し、一瞬黒い光が弾ける。
それに呼応し遠くで魔物の遠吠えが聞こえ出した。
地平線に黒い群れが次々と沸きあがってくる。憎しみの唄に惹かれた魔物たちが現われる。
その群れが膨れ上がるさまをながめ、分析の術を軽く使用する。
「Ｋ０ｗｗｖｖｖｋｖｖｖｖＢｗｗｎｓ＊ｋｖｖｖ　Ｍｘｘｘｍ０ｎ０　ｎ０　ｂｗｗｎｐｗｗ」
（広域分析　魔物の分布）
脳裏にさっと周辺地図が描かれる。そこに魔物の分布状況が重なり合う。私たちの周囲以外には魔物の分布はゼロだ。この周囲だけが密集している。
狙い通り過ぎて、笑いがこみあげそうになる。

私は傍らの地面に刺した、星原樹の封印を解いた。
私は直接に星原樹の枝に触れることは出来ない。
封印し巻きつけた布地越しに触れここまで持ってきたものの、既に掌は強すぎる星原樹の力により赤くただれ腫れあがっている。痛みはあるものの、指が動かせないほどではないのが幸いだった。火傷に似た症状だ。しかし、星原樹によって得た傷は星術では癒せない。しばらく痛みを堪えるしかなかった。

枝の封印が解けたのを確認し、術を新星術へと切り替える。
先ほどとは打って変わって、新星術は硬質な韻律の響きをもつ。速度を上げて編み上げた。

「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，（呪文開始）
Ｆｎ，（封印）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｗ　ｃｈｓｈｎ　ｈｎｃｈｋ　ｆｓ，（物質コードＳ２５８「星原樹」を中心に半径地域を封鎖）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ８２７７　ｗ　ｔｄｍｒ，（物質コードＳ８２７７「瘴気」を留める）
Ｒｇ　ｎｓｈ，（例外無し）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｓｈｙ　Ｊｋ　ｋｚｋ，（物質コードＳ２５８「星原樹」使用　浄化は継続）
Ｋｚｋ，Ｋｚｋ，Ｋｚｋ，……」（継続）

半ば意識を別方向に向けたまま新星語を謳い続けた。旧星語の方が柔軟な効果を生み出せるのだが、今の状況にはどのような効果が出るかが正確に試算できる新星語の方が適している。
半意識を現実に置き、残りで周囲の星術効果を観察する。現時点での綻びはない。
魔物を排斥するのではなく、範囲外へ決して逃がさないための結

界である。

結界が完成した瞬間、爆音が響いた。

勇者の戦闘が始まったのだ。

凄まじい雷が快晴の空から降りそそぎ、大地を容赦なく破壊の矛先で抉り取った。爆発とともに風を巻き起こし、揺るがぬはずの大地が悲鳴のように震え揺らいだ。腹のそこから響く音に、口ずさむ星語の韻律を乱されそうになる。

轟(ごう)、と風が駆け抜け、砂礫を身体に打ち付ける。瞳を閉じてやり過ごし、不自然にならぬよう星術に拍をいれ調整する。

思った以上に初手の勇者の術が強かった。結界の強度を測りつつ、乱れた髪が顔を打ち付けるがそのままに星語に意識を再び向ける。呪文を継続しながら結界の様子を慎重に窺う。

綻びはない。

恐らく物質の指定をしていることがよい方向に働いたようだった。瘴気だけを通り抜けれないように指定しているのだ。瘴気、つまりは魔物だ。

爆発の中心から煙が流れ、うっすらと変貌した大地が姿を現した。まるで巨人が槌を振り下ろしたかのように、頑強なはずの大地にぽっかりと穴が開いている。地盤のみならず岩盤質を穿(うが)ったようだ。あの深さであれば、数ヵ月後には雨水が溜まり小さな湖が生まれるだろう。それは深い水をたたえ青い空を映すに違いない。想定される未来を幻視し、しかしそれを振り払う。今はそういう場合ではない。

爆発の中心にいたはずの勇者を探す。

が、目視できない。既に移動しているようだ。

ギャアという断末魔と鈍い音が聞こえた、すぐさま左側を振り向く。

そこには逃亡しようとしていた魔物たちを一撃の下で切り捨てる

勇者がいた。両腕に剣を構えている。防御よりも攻撃を選択したようである。両方の剣はまだ刃はつぶれていない。

勇者が戦っている場所は、ここからかなり遠い。勇者の姿は握りこぶしよりも小さくみえる。

が、これが神官と勇者がともに戦う際の本当に適正な距離だった。勇者が本気であれば、この距離でも危険だ。

今はこちらのことを視野に入れているようであるので、そこまで危険ではないだろう。

補助の術をかけようとしてかけられない距離ではない。それでいて勇者の攻撃がすぐには届かない距離。これを保つ必要がある。

この距離より近づけば、恐らく勇者の星術に巻き込まれる。彼は元々大雑把なところがある。それが星術に反映されているのだ。時折ひやりとする距離で星術が放たれる場合がある。真横を炎が駆け抜け、冷や汗を流したことは数知れない。最近はもう一人と行動するようになってからは慎重さが増していたが、それは今は振り捨てているだろう。

本来、深蒼（あお）の勇者は、対多数の広域殲滅（せんめつ）戦を得意としている。

勇者の戦い方はその代毎に異なるようだが、詳しくは伝承されていない。

勇者の動向に注意をしつつ、この場の術を継続させる星句を口にする。

勇者がまた大規模な星術を行う気配がした。身構える。次の瞬間、空を青い劫火が駆け抜けた。凄まじい熱量と光が弾け、空を覆いかけた黒い魔物の群れは紙を燃やすよりたやすく炎に食い尽くされる。空を燃やし尽くす焔は、波のように駆け抜け、確実に魔物を屠っていった。空から燃えカスが舞い落ち、途中で瘴気となりはじけ飛ぶ。まるで幾つもの星が落ちているかのような光景だ。人が見る風景ではない、そんな考えが浮かぶ。

この分であれば、想定した時間より早く終了するかもしれない。
ただ、こちらが早く終了したとしても、あちらが終了しているかどうかは分からない。

神子が消えて既に五時間、打てる手は全て打った。
5時間前のことを考えると、苦いものが浮かんでくる。

◆神官、五時間前の失敗に至るまで　（中）（前書き）

神官視点続きです。

◆神官、五時間前の失敗に至るまで　（中）

そもそもブロンザイトを訪れたのは、討伐依頼の声が無視できない大きさになったためだ。

前回の街に逗留している際、星神殿より転送されてきた書簡が問題だった。

――荒野に魔物の群れが沸き起こり、物流が妨げられている。我らを餓死させる気か。早く戦力を派遣しろ。

簡単に言えばそのようなことを、美辞麗句を織り込みながら豪奢な文箱にいれ、商業国家アノーツクレスの現筆頭が送りつけてきた。

アノーツクレスは、星都より大陸中央部に位置し交易により栄えた都市郡がまとまり、商業国家として統合し成立した国である。

国、というのは便宜上であり主たる五都市が連合となったものとして考えたほうが早い。一応、五都市には代表商家がありその当主を「五人衆」とよぶ。首都はその五都市の中心にあとから建造された。流通の一大拠点として、首都は商人たちの狙い通りに栄えた。

そして、今回の魔物の被害を大きく受けた国の一つだ。

アノーツクレスの「筆頭」は、その五人衆から選出された国家元首である。

アノーツクレス筆頭が求めているのは魔物の駆除だ。

本来、星都にはそのような出兵義務はない。神殿にしてもいわずもがな、である。

ただ星都は、星原樹もあり星教の信仰拠点となっている。主神殿も抱え込んでいるため、他の国家より一ランク上に位置していると

認識され、自負している。
星都のおもな収入源は商業と観光業である。魔物の影響で観光業は落ちると思われていたが、逆に星神様にすがりたいということで、皮肉なことに星都は盛況らしい。
一応、俗世のものと神殿は切り離されていると建前はなっている。しかし、神官といえど空気を食べて生きているのではない。どうしても資金が必要であり、すました顔をした裏でこっそり布施を貰っているのが現状だ。その代わり、有事の際は星術の使い手として神官を派遣する。そういった共存関係が、不文律ながら成り立っていた。

いつも偉そうにしている分、またお前達に布施をしている分、働け。

丁寧な文言を連ねているが、これは逆に慇懃(いんぎん)すぎて無礼だった。何よりも内容が酷い。
アノーツクレスの筆頭の言いたいことが、上質な紙の裏を透けて見える。余りにもあけすけな書簡にあきれたものだった。子供でももう少し上手におねだりをする。これが一国の元首が出す手紙だろうかと頭が痛くなった。
もともと大陸中央部は何度か足を運んだことはある。しかし、勇者も私も個人である。大きな変革はすぐには出来ない。もちろん、一度大規模な浄化を行わなければならないだろうとは考えていた。
恐らく魔物が大発生した背景には、何かがあるはずだ。それも調査したが、いまだに原因は不明である。

星神殿では、夜闇(くろ)の勇者の時代以降、各地の情報収集を行う部署が設立されている。それを造ったのは夜闇(くろ)の大神官だった。目的は魔物の発生と発生した場所との関連性を調べるため、とされているが、かの大神官の狙いは分からない。当時から他国家の情報も収集

していたことを考えると、魔物は建前ではなかったのだろうかと推測される。

情報の伝達は星術を使用できるものとそれ以外では、速度において格段の差がある。夜闇（くろ）の大神官が創った組織は、その点は恐ろしいほど有能だった。問いかけるために星術を施した紙を送れば、すぐに調査結果が記されて帰ってくる。

アノーツクレスの被害については、首都は半壊、政治の中心だったおもな五大商家と筆頭達は速やかに護衛と家財を引きつれ辺境都市に避難したと報告を受けた。

あきれたことに、筆頭が避難済みだということは書簡にはそのことは全く触れておらず、首都の人民の困窮を切々と大仰な修飾語を用いて訴えていた。みていないのによく書くものだ。恐らく彼も現地の情報を集めて書いたのだろう。

商業国家筆頭とあろうものが、このようにすぐに嘘がばれる交渉をしてもいいものなのだろうかとあきれた覚えがある。

アノーツクレス筆頭については思うところがあろうとも、そこに住んでいる人々には関係のない話だ。そこで勇者と協議し、ブロンザイト経由でアノーツクレス首都へ入ろうと決定したのだった。

あらかじめ調査依頼していたブロンザイトに関する報告は、「治安に乱れが出ている、また誘拐、略奪が増え、難民の被害者が多数発生している」というものだった。そこに神子を連れて行くのはとても不安が募る。彼女は身を守る術を持たない上に、人懐っこい。すぐに誰とでも話せる半面、いつか詐欺に会うのではないかと心配でたまらない。が、彼女がいなければ大規模な浄化は決して行えないのだ。また、彼女を守護するという契約を私たちは交わしている。余り頻繁に置いていくわけには行かない。理由にもろもろあったが、彼女をブロンザイトに連れて行くことにしたのだった。

入ったブロンザイトの街は、想像以上に悪化していた。
空気に触れた途端、それを悟る。
入門の検査場である詰め所で、アノーツクレスの使いと名乗る青年から手紙を渡された。五人衆のうちの一人、ルース・サニディンが逢いたいという。彼もこの街に滞在しているとの知らせだった。押してある家印も確かにサニディンのものである。
「サニディン」は五人衆の四位に当たる人物だ。まだ若く、老練な者の多い五人衆では浮いた存在だと聞いたことがある。まだ逢った事はない。
使者はとある場所を告げた。あとでご足労を願いたい、との依頼だった。何かを依頼されるよりは、ただの顔見世としても逢っておいたほうがいいだろう。後々の判断の根拠になる。
もうこの街は長くないのではないか。人々の様子を観察し、結論付けた。用事が済めば、すぐに引き払うべき場所だ。
詰め所から戻ると、神子が不安そうに周囲を見回していた。そういえば、と思い出す。彼女のいた町は余りにも平和だった。こんな場所に来たことがないのだろう。少し説明をする。警戒心を持たせることに成功したようだ。
取った宿にも念には念を入れて防犯のために術を仕掛ける。
ここで勇者に出かける旨を伝えた。彼も神子を連れ出すには不安があるようだった。そこで、留守番のためにおいていくという選択を取ったのだ。
宿を出てから、勇者に今からの面会の件を話す。彼はいつも通り頷き、了解の意を示した。特に反論は無いようだ。神子を部屋においていく選択にも同意を貰う。
権力者と神子を合わせたくないのには二つ理由がある。純粋に騙されそうな神子をそういった場所に連れて行きたくないということ。彼女の身分が庶民であり、戦闘能力もない女性だということに問題がある。強引に婚姻を望む声も実際にある。実力行使で何かがあった場合、それを覆すにはかなりのリスクがある。

もう一点は、神子というものの特性に不安があるためだ。かつて、「神子を通して星神様が世界を見ている」と述べた本を読んだ。その本はある理由から疑う余地はない。確実に神子が星神様と接続されている以上、権力者との駆け引きは彼女に見せるべきものなのかどうかがまだ判断がつかない。

そうして神子を宿において出かけたのが五時間前だった。

宿であればまだ安全だろうと私たちが過信した結果である。

今から考えても悔やむ部分ばかりだ。

ひとこと、決して出かけるなと言えばよかったのか。それとも、もっと強力な星術を施した樹具（じゅぐ）を渡しておくべきだったのか。

ルース・サニディンと面会を終え帰って来た私たちを待っていたのは、空の部屋だったのだから。

◆神官、契約を行う（後）（前書き）

神官視点です。

◆神官、契約を行う　（後）

「買い物？」

「一応、片付けて出て行っているみたいだな」

部屋の以上を見回していた勇者が感想を述べた。争った形跡はないらしい。彼は以前、物の損傷を詳しく見る事が出来ると洩らしたことがある。勇者がそういうのなら間違いはないだろう。

初めはただ単に出かけたのかと思ったが、思いなおす。出かけただけでもすぐに迎えに行くべきだ。この街は危険すぎる。

私はすぐに呪文の準備に取り掛かる。念のため足取りを掴もうと考えたからだ。

結界に使用していた術は、一定の境界線を越えるとその人物を記憶する特性もある。念のために仕込んでいたものが役に立った。ただ、時系列に関する術式を仕込んでいなかったのが悔やまれる。結界に人が触れたのは三度。一度宿の男が触れ部屋を覗き、男と神子が同時に触れる。そして神子が境界を越えて出て行っていたことが分かる。時系列は分からないものの、男が部屋を見たときには確実に神子はいたということだ。手がかりの一つとして記憶する。

直ぐに術を切り替えて神子の現在位置を探る。

星語に登録された神子を指す単語【０／Ｍｖｖｖｋ０】を使用し精度を上げ彼女の居場所を探った。これで見つかれば杞憂に終わる。

だが、返ってきた結果は一単語だった。

――　該当無し。

すっと血の気が引いたのを自覚する。

星語に記された名前は、ただの名称ではない。世界で「唯一」を示す言葉だ。その名称を星語で名乗ることは、本人にしか許されない。例え本人が死亡していたとしても、その名前で検索をすれば見つかるほどのものである。

本人しか名乗れない名前――ただの迷信だと思われていたそれが、実際に効果を発した事件はあったそうだ。かつて勇者を詐称した男がいた。男を疑ったものが、偽勇者に星語で名前を名乗ることを求めた。偽勇者は渋ったものの、しぶしぶ星語の名前を口に出した。だが、偽勇者は口に出しただけで喉が裂け血を吐いたという。

それ以降、勇者を詐称するものが出た事はない。確かに、勇者は民衆からの支持は得られどこを訪れても王族かと思われるほどの高待遇が得られる。しかし、それが簡単にばれる上に命を失いかねないとすれば、それは旨味はないだろう。

それはともかく、星語での検索に存在自体が当たらないのは確実に異常な事態である。

捜索をかく乱するための術を使われているとしか考えられない。

しかし、それは神子自身が使えるものではない。第三者の関与があるはずなのだ。

私たちはまず宿の男から問い詰めた。私が読み取った情報から浮かび上がった宿の男は、落ち着かなさげに視線を彷徨わせていたが、自分は手紙を渡しただけだと主張した。宿の受付に少年が持ってきた手紙を渡しただけだという。

実際、それ以上でもそれ以下でもないだろう。念のため、男に知られないよう星語で印をつけるだけつけておく。これで逃げても検索することが出来る。

だが、これで神子が宿から消えていった先の手がかりは途切れることとなった。手紙を受け取って、どこへ行ったのか。

手がかりが失われた状態となり、私は次の手を打つことを選択する。

術で追えないなら、足で探すしかない。しかし、自分達には足りないものがある。土地勘と人数だ。

「ルース・サニディンにもう一度会いに行く」

次の策について説明をする。勇者がこちらをゆっくりと見た。彼にしては珍しく、焦りを感じているようだ。先ほどの宿の男を締め上げる際には、彼からの殺気がとても役に立った。

先ほど面会だけを行ったルース・サニディン。このブロンザイトはもともとサニディン家の店子が多くいる土地らしい。そのため、街道の確保にでてきたのだ、と言っていた。

「彼が関与している可能性は？」

勇者が問いかけてきた。

「低い。メリットがない。関与するならば、私たちに接触しない。街道の掃討作戦のために、彼は騎士団を連れて来ていると聞いた。協力を仰ぐ」

「対価は？」

「戦力で。騎士団をつれてきている理由をこちらで肩代わりする」

他者の戦力に依存して急ぐのには理由がある。

先ほど、神殿から報告と共にもたらされた黒い噂。

――アノーツクレス周辺で、人身売買が行われている。更に最近市場が拡大している。

人が人を商品とする。

かつて、人が人と戦っていた時代、それは当たり前のようにあったらしい。しかし、今はまずその概念がなくなっていた。魔物という外敵があらわれ、人間は人間相手に戦っている暇がなくなったからだ。まるであつらえたように、人間に敵が現れたのである。

それが、この魔物による蹂躙により、一気に闇の部分が噴出した形になったのだ。もともとアノーツクレス周辺では都市伝説のように闇市場の話が囁かれていた。

「どれだけいるか分からない魔物を、相手にすることになると思う。出来るか？」

僅かに高い場所にある勇者の蒼目を見る。勇者は頷いた。

「いくらでも」

そして、

「人間相手よりはその方が楽だ」

と呟いた。

結局、ルース・サニディンのもとに直ぐに赴くこととなった。先ほど帰ったばかりの私たちが現れたことに大きく驚きを露わにしていたが、状況の説明をし協力を仰いだ。

彼は灰茶色の頭髪をした穏やかな人物だった。こちらの要求と提示した事柄に関して吟味し、直ぐに結論を出す。

「ご協力いたしましょう。街道の魔物を掃討するには、騎士団のものから犠牲者が出る可能性があります。人手不足のために、恥ずかしながら錬度が不足しているものも連れて来ていますので」

後ろの騎士達の機嫌が悪くならないかとひやりとしたが、彼らが表にそれを出すことはなかった。

「それに元々、この街の掃除をしたかったのもあります。……この街からでているもののせいで、各地に混乱が広がっていますから」

言葉を濁しているが、なんとなくその先のことは察せられた。麻薬や人身売買の中継地となっているのだ、ここは。

「こちらにとてもよいお話です。契約しましょう」

契約紙という特別な紙がある。これは一度記入した文字を消すことは出来ず、また名前を書いてしまうと他に記入も出来なくなるのだ。契約が完了したときのみ消滅する。

その紙に今回の条件とお互いの名前を記入し、契約を完了する。
「神子様の特徴を教えていただけますか？」
騎士に私が説明をすると、彼らは互いの顔を見合わせて不思議そうに呟いた。
「薄茶色の髪、背は私の目ぐらいの高さ。目の色は――何度見ても覚えられないのが特徴」
どんな特徴だといわれても、それが彼女の特徴だから仕方がない。
神子は、見たら分かる。その一つがこの特徴でもあるのだから。
そのまま私たちは街道の掃討に出かけることとなった。

そして今、街道はすっかりと元の静寂を取り戻していた。
既に勇者により焼き尽くされた魔物の残骸が、燃え尽き、瘴気となって爆ぜる。
私はそれを浄化しながら、その情報が届いたことに気付いた。騎士団からの連絡の紙が、空から落ちてくる。それを開き、ようやく彼女が確保されたことを知った。ためしに検索をかければ、今度は先ほどと違い、検索の網に存在が引っかかることに気付いた。
どうやら、何とかなったらしい。
疲労により座り込みたくなったが、街に帰るために私は再び星原樹を封印するための術式に取り掛かった。

被害者C、もてなされる

――プリンは、人を詩人にさせる。

この思索にふけるような深い色のカラメルソースに、あわくほどけた陽の光を思わせるクリーム色がなんとも美しい。

そしてソースとプリン本体の境目、カラメルがじっくりとしみている部分は、時間の経過がもたらす芸術があるということを人にそっと教えてくれる。

本当にプリンって凄い。

スプーンでつつくと僅かに反抗するように震えるけれども、結局諦めたように受け入れていくさまはまさに圧巻。こんな震える食べ物が世の中にあっていいの？　こんなにはかないお菓子があるなんて！　スプーンで口に運べば、その優しい感触は舌の上でとろけて広がる。まさに楽園を口の中で演出します。

あー……しあわせ……。

何といっても新鮮な草牛（うし）さんのミルクと美味しい鳥の卵、そして高級品な何度か精製とかいうのをした砂糖をたっぷり使用しているものだから、一般庶民にはなかなか手に入らない代物！　全部好物ですよ！　ミルクもそのままで美味しい。ゆで卵もぽよぽよで美味しい。砂糖はそのままでもいける。

なのに、その黄金トライアングルが合体したらこんなに更に進化した恐ろしい食べ物が出来ちゃうミラクルなんですよ！　誰が作ったんですか！　美味しすぎる！

ウフフ、スプーンでつついちゃうなあ。食べたらもっと幸せになるけど、なくなるから悩むんだ。ちょっとずつ食べていこう。

一口ずつ食べてニヤニヤしていると、横に立って給仕をしてくれていたあねさんが、
「幸せそうにお召し上がりになりますね」
といつぞやのメイドさんみたいにあたたかい眼差しで見守っていましたあああああ！
あねさん！　存在忘れてごめんなさい！
とってもプリンに集中していました！　美味しすぎるプリンの罪深さよ！

ここは、あねさん達が現在本拠地にしているお宿だそうです。
もともといた宿に帰ろうとしたんだけど、私たちがいたところは、何かと差しさわりがあるため今は帰れないとか。何かあったんだろうか？　謎です。あ、部屋にお枝様を置いたままなの、後でとりに行かなきゃなあ。
あねさん以外は実は女性隊員がいないとかで、あねさんが私についてくださっています。ありがたいのに、なんともったいない！
ここに来た時、あねさんに給仕をさせるなんて焦ったけど、あねさんがにっこり笑って、
「お座りください」
というものだから、不思議な威圧感に素直に従っちゃいました。最近、笑顔なのに押しが強い人が多いです。私は押しが弱い人間の筆頭だよ！　正面から戦うなんて絶対無理です。ムリムリ。
プリンをつついていると、腕の金属がテーブルに当たってゴン！といいます。また当てた。そのうちこのテーブルがへこみそうだ。
手錠をまだなんでつけてるかって言うと、これさびすぎて上手く開かなかったんだよね。せめてと鎖を切ってもらったから、手かせと足かせだけが残っている状態です。ちょっと重いけど、我慢できないほどじゃない。鎖切りがないから、斧で鎖を切ってくれたお兄さん達の方が、切られる私よりびくびくしてたのが印象的だった。
これ、開かないのかなあ。ちょっと不便だし、すれて怪我が出来そ

う。そういえば、落ち着いてみてみたら手首や足首に怪我はまだ出来てないようです。よかった！　怪我とさびた金属のコラボなんてシャレになりません。

もしこれが外せなかったらどうしよう？　その時は新しい流行だと世界に旋風を巻き起こすしかないですね！　ニューファッション！　テジョウスタイル！　ちょっとデンジャラスでアバンギャルドなハードコアバイオレンスアクセサリ！　これがはやれば私の格好がおかしいとは誰も言わないはず。はやる要素がどこにも見当たらないから、ただの妄想だけどね。

今いる宿の部屋は、私たちが取った部屋よりは狭い。あそこに三人宿泊予定だったのもある。

部屋の中にはテーブルセットが一つと寝台が一つ。

掃除がよくされているからとても気持ちがいい。寝台の布とかも結構綺麗に洗濯してるみたい。手をかけられた部屋って違うなあ。換気もちゃんとしているから、部屋の匂いが違うんだよ！　私は違いが分かる庶民です。

「もう一つお召し上がりになりますか？」

目の前で微笑みながらプリンを勧めてくるこの男性、あねさんの上司だそうです。名前はえーっと……なんか、こう、サンルーム的な名前。サン……サニー……サム？　あー。ごめんなさい、上司のお兄さんでカンベンしてください。今本気で覚えていない自分の脳みそにビックリした。

お兄さんは紅茶にミルク入れたような色の髪に茶色の目をしています。爽やか系の顔立ち。喋り方がのんびりしていて、思わず警戒心を解いちゃいますよ。そう、一緒にお茶をしてしまうほどに！

……ん？　なんだろう一瞬過ぎったこの違和感。あっ、何で私は上司のお兄さんとお茶をしているんだろう！　今更この状況に疑問を

いだきました！　知らないひとに物を貰わない、ついていかない。あの誓いを立てて早数時間。

既に、知らないひとに、ついていって、お菓子をいただいている……？

私、もしかして誓いを破っていやしませんか？　なんと！

すでにプリン貰っちゃった。食べちゃったお菓子は返せない！

知らない人、つまりあねさんの上司のお兄さんにプリンもらっちゃっています。大変なことです！　本気で反省した事はどこへ行ったのか。自分で自分に突っ込みを入れなきゃやってられない！　上司のお兄さんは穏やかな声で神官様に保護を頼まれた、と仰いました。お二人に知らせてある、とも。私を探す代わりに、お二人は仕事をしていらっしゃるとか。大変申し訳ないことです！　この捜索隊の費用が掛かったなら、私も頑張って稼いで借金返済しますよ！

でも勇者様も神官様も知ってるらしい人物なら、これは貰っていいもの？　震える幸せの象徴（つまりプリン）を前にして、本気で葛藤しています。

上司のお兄さんは、

「他のお菓子のほうがよろしいですか？」

と私の沈黙を斜め上にとりました。セレブ発言ですね！　私はばっと顔を上げた。

「いいえ！　プリンはとても好きです！」

なんとなくこれ以上ものを貰ったらいけないような気がしたんだ。野生の勘です。例え、どんな美味しそうなものであろうとも、いただくわけには！

でももう貰ったプリンは食べる。いただいちゃったものは、仕方がありません。責任を持って消化いたしましょう。消化は得意です！

あれ、なんだか自分がとっても馬鹿になったような気がしてきた。白さんとかだったら、今更気付いたんだねとか言いそうです。想像してちょっとむっとした。白さんなんか少し禿げてしまえ！

とりあえず、プリンには罪がないのでありがたくいただきました。
今度のプリンは口に入った時のフルフル感を味わいながら食べたらあっという間でした。何でお皿の上にもうプリンがないのですか。私が食べたからですね。
ごちそうさまです。
私が名残惜しくプリンの入っていた皿を見ていたところ、窓から紙切れが飛んできました。
上司のお兄さんのところへぽとんと落ちます。あねさんが飛ばしていた紙と同じような紙だった。あんまりじろじろ見るのも失礼だなと思ったけど、上司のお兄さんが紙を開いて絶句したので目が離せなくなった。上司のお兄さんは一言、
「もう、終了したんですか」
とつぶやいた。
何の話だろう？　でも聞いちゃ駄目な話だったら申し訳ないなあと思って、あねさんが入れてくれた紅茶を飲む。あねさん、紅茶まで美味しいなんて素晴らしすぎますよ！　さすがあねさんです。心の中で大絶賛ですよ。紅茶を飲んでほっこりする私に、上司のお兄さんがこう告げた。
「神子様、勇者様と神官様が帰ってこられるそうですよ」
私は思わず顔を上げた。

被害者C、お迎えに気付く

お二人が帰ってこられる！

その言葉に、嬉しさと同時に居たたまれなさが生まれた。私はとてもすごくかなり心配をおかけしているはず。しかも私を探すために、あねさん達のお仕事を肩代わりされているとか。

星原樹の選定を受ける前、雇用条件についていろいろお話したけれど、今更ながらなんだか申し訳なくなってきた。守ってくださるって言う条件があったんだ。

かなりお荷物だよなあ、って実感がじわじわとしてきました！できることはお枝様運びぐらい。何か役に立てることとって他にあるんだろうか。紅茶を見ながらむむと唸っていると、

「どうなさったのですか？」

と上司のお兄さんに聞かれました。はっ、よその方の前で失礼なことを！

「失礼しました」

いつもながらにお恥ずかしいところをお見せしましたっ。恥ずかしくないところが私にあるんだろうか。ないかもしれないですねそうですね！

「何かご心配事でも？」

上司のお兄さんは穏やかに問いかけてきます。私はそれに正直に答えた。

「お二人に心配をおかけしたので、申し訳なくなりました」

お兄さんは苦笑して、

「そうですね、でもご無事で何よりです。最悪の事態は避けられましたから」

最悪の事態かあ。あのままだったら、草牛さんのように荷馬車で

売られてしまっていたんだろうか。少年とおじさんの馬車以外からも私のような人が出てきていたのを思い出した。うつろな目をした人たち。私よりも小さな子もいた。泣いているとかよりも、その表情は深い絶望を思わせる。あんな年頃の子がする表情じゃないと思う。

「他の人も、同じように攫われてきた人だったんですか？」

お兄さんは直ぐには答えなかった。少しだけ考え、

「攫われた人と、……家族に売られてきた人もいますね」

家族に売られた？

私の想像を絶する答えに、言葉を失った。え、なんでそんなことが。

「この街はまだマシな方です」

お兄さんはこれ以上は言わなかった。私はグルグル考えながら、でも不思議と、ありえないことではないと思う自分がいることに気付いた。怖いですよ！

説明が面倒というよりは、私に聞かせられないと判断したんだろう。お気遣いありがとうございます！　確かにさっきの話だけで、私は恐ろしくなった。

でもですね。そんなことが横行している、ここでマシなほうなんですか！

世界が乱れているみたいなことを聞いたけど、想像ができていなかった。白さんに見せられた滅びを思いだす。私の知らないところで世界は確実にあの方向へ転がっているんだろうか。

世界って滅びるんですか、って口に出しそうになり、堪える。

滅びを止めるために勇者様達が頑張ってるんだから、私がそんなことを言っちゃ駄目だ。

でも、それがとても先の見えない戦いのような気がするのは、私だけだろうか。だって、人間がいる限り、暗い感情をいだく限り、魔物が増えていく。それを止めることがどうやってできるだろう？

今までの勇者様の物語は、一体どうだったんだろう？　白さんは

今回の第四期についてはさっぱり話さなかった。神官様ならご存知だろうか？　元々私の知識が無いに等しいのが問題だな。

私の沈黙をどうとったのか、お兄さんが、

「今回の一斉検挙である程度密売ルートが潰せましたから、しばらくは治安維持に力を注ぎます。また立ち寄られる際はもう少しマシな街になっているように努力しますよ」

と付け加えました。このお兄さんの自己紹介は簡単に名前だけだったけど、つまり何者なんですかっ。領主様にしては街の外からきたっぽいけど権力持ってそうだし。

……今更ながら、星都で教育されてたのってやっぱり必要だった気がしてきましたあああ！　よその国や地方のこと、ビックリするほど知らないよ！　そういえばここはどこの国ですか？　何も考えずにお二人に連れられていたことを再認識した！　私、もう少し自立します！　心の中で握りこぶしを作る。

そのとき、ふっと意識に何かが触れた。

反射的に頭の中に、帰ってきた、と浮かぶ。

お二人の気配っぽい。……なんで分かったのかは分からないけど、野生の勘並みに間違っていないことも分かる。

ど、どうしようかな。

そわそわしだす私に、あねさんとお兄さんが不思議そうな目を向けます。

「あの、お二人がお帰りになったみたいなので、外に出ていいですか？」

窓の外が騒がしくなりました。あねさんが宿の外を覗き込みます。そして驚いている。

「よく分かられましたね」

あ、間違ってなかった！　よかった！　これ違っていたら恥ずかしかったっ。

「お迎えに行ってきます。いろいろ、本当にありがとうございましたっ」

私は立ち上がってお礼を言う。椅子をちゃんと戻してから、失礼します、と部屋をあとにした。気持ちだけが焦ってなかなか早足で歩けません。足かせが地味に邪魔です。ダイエット器具になりそうだよ。そういやこれ、そのうち取れるんだろうか。靴はあねさんにお借りしました。足かせに邪魔にならないように、普通のぺたんこ靴ですよ！　私のブーツはどこに行ったのか。ちょっと気に入っていたから悔しい。

廊下を走らないことを守りつつ、はやる気持ちで外に飛び出す。玄関のところでちょっとだけ乱れた息を整えながら、お二人を目で探した。

いた！

ぶわーって嬉しさがこみ上げてきて、ドキドキしてきた！

あねさんの仲間達が勇者様達と話している。お二人ともいつもと変わらない。いつも通りの姿に、ものすごく安心する。勇者様はえせ笑顔モードです。そうですよね、人付き合いって大事ですしね！

私はここまで来たのはいいけれど、割ってはいっていいものかどうか悩んで踏みとどまる。なんか姿見ただけで安心した！　はやる気持ちが落ち着いて、でもまだドキドキしている。や、やっぱりあねさんたちのところで待っていたほうがよかったのかな？　声を掛けるタイミングとかいろいろ失ってます！　あのマッスルお兄さん達の壁を突破できる気がしない！　あねさん、同僚さんは何であんなにマッスルなんですかっ。

他の人と話していた勇者様の目がすっと動いて、私を捉えました。そうですね、勇者様は人の気配に敏感ですしね！

その瞬間、私はものすごいトリハダが立ちました！

勇者様の蒼い目が、かなり険しいのは気のせいですかあああああ！

はっきり怒りをたたえた目に、自業自得ながらも卒倒しそうです。

被害者C、保護者とご対面

に、逃げるべき？

一瞬その発想が出た。逃げれるなら逃げたい！　けど、いろいろ迷惑をかけている身の上ですから逃げ出すわけにはいけません！

とりあえず存在感を希薄にしてみる。じわじわと身長を低くして、お宿の玄関の端っこにしゃがみこみました。大きな宿だから、ちょっとだけ階段がついているんだ。そこの端っこで座るよ。こうしたらちょっとは視界から外れるかなーって。外れたら心の準備が出来るかなーって儚い希望ですがっ。

笑顔でマッスルの壁を突破した勇者様がこちらに向かってきているようです。ヒイ！　とりあえず怖いです。後ろから神官様も現れましたあああ。宿屋の玄関で震える私。さっきまでの攫われて怖いとかの緊張感とはこれは別だな！　明らかに悪いことしてごめんなさいの恐怖ですよ！　だって勇者様怒ってる！

勝手に出て行ってごめんなさい！　あと、知らない人についていってプリン貰ってごめんなさい！

勇者様は私の前に立つ。元々見下ろされるぐらい身長の違う人だから、私は座り込んでいるせいでほぼ真上を見上げる形になる。勇者様の後ろに太陽が来ているせいでちょっと眩しいです。影の中に表情が隠れて怖いんですがあ！

私はゴクリと喉を鳴らした。

ち、ち、沈黙が痛い！

後ろのマッスルさんたちが静かなのは見守っているせいですか！

見てないで散って散って！　ホラ、皆さん仕事してください！

庶民が怒られるところなんて面白くもおかしくもないから！

「お……」

とりあえず声を出してみると、かすれた声がひょろひょろと出る。
「おかえりなさい……」
ごまかすように笑うと、じっとこちらを見る人は、まだ沈黙を続けますよ。沈黙したくないから頑張って口を開いたのに！　全くの無駄でしたあああ！
「……ただいま」
たっぷりの沈黙の後にいつも通りぶつ切り会話の勇者様がようやくお返事をくれました。……勝った！　何かに勝った！
「なにか会話おかしくないですかあなた達」
溜息をつきながら神官様の登場です。いや、もうちょっと早くつっこんでいただければ、怒りの勇者様にご挨拶なんて無謀な突撃はしませんでしたよ！
　でも、勇者様の眼光は衰えません。も、申し訳ございませんでしたああ！　平身低頭、心よりの謝罪を込めて、不肖私めが踊らせていただきます！　謝罪の舞を！！　ただの謝罪ではございませんよ！
　心の中だけではなく、現実にだらだらと汗を流しながら威圧感たっぷりに眺めてくる勇者様を見上げます。しばらくして、勇者様が私の前に座りました。階段一段下だから、丁度私の目線と同じぐらいに。
　勇者様が私の前に右手を出して、一言。
「手」
　はいっ！　お手をする勢いでぽすんと載せた手を、勇者様はおもむろにひっくり返しました。なんですか、いじめですか！　このまま手を雑巾絞りにする、捻りいじめですか！　勇者様の力でねじられたら実際ぽきんと行きますよ！　暴力はんたーい！！
　ねじられてビクッとした私の反応をよそに、なんどか手をひっくり返したりして勇者様は何かを見ているようです。うん？　手錠を見ているの？
　すると、勇者様は左手で手錠を軽くつまんだ。鍵のついていたところの少し手前、人差し指と親指でつまんだだけ。なのに、手錠が

ボロッと割れました。
わ、割れたあああ！
そして意外な慎重さでもう一箇所つまんで、完全に手錠を錆びた鉄くずに変えてしまいました。これを見ると、へえ、鉄って意外と脆いんだあって信じそうになりますよ！　衝撃の場面！　崩れ落ちる鉄！　あねさんやつぶらな瞳のお兄さんが結構頑張ってくれたけど、手錠は取れなかったんだ。でも、指二本で取れちゃったね……お兄さんのマッスルが飾りではないと思いたい。
「反対」
勇者様がゴトンと手錠を落としてから、もう一度手を差し出します。はいっ、反対の手ですね！　素早く出しましたとも！　素早さは大事！　反対側の手錠も見事に鉄くずになりました。あ、こんな風に宿屋の玄関汚してよかったのかなっ。鉄くずってゴミにするにも何か微妙ですが……。
勇者様が私の手をくるくるひっくり返して何かを確かめています。あれ？　縛られていた時、結構痛かったけどすれた跡が残ってない。よかったあああ！　縄の痕が残っていたらそれ何プレイしたんですかって言われかねないしね！
「痕は残ってないようですね。他に怪我はありませんか？」
わ！　思ったより近くで聞こえた声にビクッとします。神官様が中腰で覗き込んでいた。
「け、怪我はないです！」
私は慄きつつ答える。
何時の間に横に来てたんですかあああ！　この人も気配無いんですか！　いや、勇者様のビックリ指力に見入っていたせいかもしれない……。あっちが注目の的だった！
「足は……」
勇者様が私の手を離し、足かせに目線を移しました。あ、足ですか？　外していただけるんですか？　そう思って見やすいようにスカートをめくろうとしたら、勇者様に手をつかまれました。恐るべき

スピードに、わたしは息が止まりました。見えなかった！　わかんなかった！　ビックリするばっかりで、そのうちひっくり返りますよ私！

「足は……しまっておきなさい」

はっ。

勇者様達の後ろにはマッスルお兄さん達がこっちを注目していました。見ないでいいよ！

危ない危ない！　あまり見ごたえのない脚を披露するところでした！

あっ、勇者様、今そっと溜息をつきませんでしたかっ！　またあきれてますねっ。

そう思っていると、神官様が後ろのお兄さん達に向かって、

「これの片づけをお願いできますか？」

と声を掛けてから、私達に向き直り、本当にほがらかな声で仰いました。

「さあ、部屋の中で、洗いざらい話を聞きますから覚悟しなさい」

雰囲気が……雰囲気が黒いです神官様あぁぁあ！！

そして私は大事なことを言い忘れていたことに気付いた。

「あの！」

急に大声を上げた私にお二人の注目が集まる。

「申し訳ございませんでしたっ。ご迷惑をおかけしましたっ」

勢いよく頭を下げる。謝って済むことじゃないけど、とりあえずご迷惑をおかけしたのは確かだから、ちゃんと伝えたいことだ。

下げたままの頭に、軽く手が添えられる。すこしだけふわっと撫でる手。おそるおそる顔を上げると、勇者様だった。

「怪我が無くてよかった」

静かな声に、それと頭に乗った手の優しさに、じわりと目の奥から水気が滲み出してくる。堰を切ったように、ぼとぼと涙が零れ落ちる。止まらない。こんなところで泣いたら、困らせるだけなのに！

「とりあえず中に入りましょう」

そ、そうですね、失礼しました！　立ち上がりたいんですが、涙が止まりません！　なんだかほっとしたのと気が緩んだので、止まらないです。しかもしゃっくりが混じりだしました！　なんという三重苦。

勇者様が頭から手を退けた気配がする。すると神官様が、

「前々から思っていたのですが、女の子の運び方はこうじゃないんですか？」

と何か不穏な話をしています。でも顔を上げられない！　鼻もぐずぐずいったままで凄い顔になっているはず。涙が止まらない混乱の中にいるんだけど、頭の一角が凄く冷静ですよ！

でもこのときは根性で顔を上げておくべきだった。今なら断言できる。

ふわっと浮遊感がして、お二人の声がとんでもなく近くから聞こえてきました。

「こっちか？　両手が塞がるだろう」

「その誰かを抱えたまま戦闘をするという発想がそもそもおかしいことに気づいた方がいいでしょうね」

ぎゃあああ！　人生三度目のお姫様抱っこ！　もう、なんだか疲れてきた。というか、泣き疲れだろうかと思いながら、ふわふわする浮遊感の中、ぼんやりと安心を感じたのだった。

神子？、すっきり目が覚める

……うん。バッチリ寝ました。

おはようございます、職業神子の、元町民です。

今、ベッドの上で呆然としている。なんでこうなったんだろう。

というか、朝日が昇りかけている？　日之出鳥がどこかで鳴いている気がする。そういえば、街で生活していた時、毎朝、裏の日之出鳥のヒナちゃんと競い合ったものです。

まだ起き出す気になれず、シーツの中でゴロゴロする。

あれ？

何かを忘れている気がするよ……？

枕に顔を埋めてしばらく考えてみる。呼気のせいでちょっと枕があったかくなるのが好きなんだ。ちょっと息が苦しいけど。

うーん……あっ。

お説教受けてない！

ざあっと身体から血の気が引き、思いっきり跳ね起きました。寝ている場合じゃないだろう！

ヤバイ！　最強の、いや、最凶の神官様が現れてしまう！　まさに降臨ですよ！

というか、私あのまま運ばれてる途中で爆睡したようです。記憶があそこで途切れている！

拉致されて結構眠ったと思うんだけれど、やっぱり緊張感とかいろいろあったんだろうな。ぐっすり眠りました。ん、いつの間に寝間着に着替えているんだ。誰が着替えさせてくれたんだろう？　ありがたいことです。足をしまいなさいというぐらいだから、勇者様達ではないと思う。思いたい。いや、あれだけ迷惑かけて、挙句に

寝て、着替えさせてもらうとか。しかもお説教タイムを忘れ果てて眠りこけてましたしね！

それにしてもここは、と今更自分がいるところが気になります。覚えがない、いや、微妙に覚えがある。あねさんと上司のお兄さんがいる宿の内装に似ている。似ているからといって、あの宿かどうかは分からないかな。ごそごそとベッドを抜け出して窓際へ行く。窓は開いているのかな？　うっすらとした朝焼けの光がそこから部屋に入ってきている。裸足には床が少し冷たい。朝の空気は冷え切っているけど、肌を撫でる冷たさがなんか新鮮っぽくて好きだ。

窓は開いていたんじゃなくて、ガラスが入っていた。ビックリですよ！　まさかの窓ガラス。

窓から見下ろした外は、やっぱり見覚えがない。玄関の方だったら分かるかな、と思ったけど、違うようだった。裏側かな？　あ、あねさんの同僚発見！　見回りしているみたい。自己紹介のときにナントカ騎士団って言ってたから、それでおそろいの防具なんだろう。名称、恩人のぐらいは覚えたいと思います！　今後の課題かなあ。

窓ガラスに手を触れていると、その周りが水蒸気でじんわりと曇る。窓ガラスがはまっているぐらい、高級な宿ですね！　かなり透明なガラスだ。向こう側がよく見える。

窓の外は、濃い藍色から眩しい橙の光が滲み出している。日の出ですよ！　空には月が今日は二つ浮かんでいる。

もし、私が昨日あのままどうにかなっちゃったとして。

そう、あのまま荷馬車で揺られていたとして。

私一人が何かなったとしても、こうやってお日様は毎日同じように昇っていくんだろうな。それはとても悲しいような、でも当たり前の毎日がくることが嬉しいような不思議な感情が混じってくる。私が悲しくても、嬉しくても、怒ってても、毎日は勝手に過ぎていく。

当たり前の毎日って、ホントは凄く貴重なんじゃないかな！

何が欠けていても、その毎日にならないんだし。

昨日は一日でいろんなことを考えた。

白さんの話。

拉致されて、売られそうになったときの怖さ。

ぐるぐるまわって、寒気が這い上がる。なんだろう？　どうして皆仲良くできないんだろう？　誰もこの街では幸せそうじゃなかった。暗い眼をした人たちばかりが、よどんだ空気の中で生活を送っている。よくないだろうな、と思うけれど、私が何かできるのかといえば、できること自体が少ない。

でも、一つだけ考えた。と言うより、実感しました！

もっと勉強をしよう。世界のことを知らなきゃ、何でこんなことになっているか分からないしね！　それ以前に……常識が足りないと神官様にお説教されそうですがっ。護身術も教えてもらえればいいな。今度何かあったとき、少しは時間が稼げるかもね。知らない事や出来ない事を責める方達じゃないけど、それに慣れちゃ駄目な気がする。

窓の外はしらじらと明るくなってきた。

今日も一日始まりますよ！

まず、今日の仕事はお説教からですね……。自業自得。それにしても、お腹が空きました。ごはんを要求してもいいんだろうか？　むむ、勝手に出かけてああなったばっかりなので、部屋から出るのもためらうよ！

ぐーとお腹がなりました。これは恥ずかしい！　誰かがいるときに鳴りそうだよ。

そういえば、プリン二個以外食べてない！　お腹が空くはずだよ。

どうしようかなあ、と窓の外をじっくり眺めていたら、不思議なことに気がついた。

夜明けなのに、建物の間が暗い。
ふわふわとそこだけ夜が漂っているみたいに、暗い。
まさか、あれって。

白さんの言葉を思い出す。でも、あれはまだピンクじゃない。なんとかなるの？　でもお枝様は強力すぎるんじゃないかな！
じっくり見れば見るほど全身トリハダだよ！　怖い！　こんな量が！
思った以上に街は薄暗いそれに包まれていた。
我知らず、窓ガラスに当てた手に力が入って、爪を立ててしまう。
キイイイイ！
爪とガラスのハーモニーが響き渡る！　ぎゃあああ！　自分でやっておきながら、最悪の音を出してしまったあああ！
一人悶絶する私。あ、今気付いたけど足かせがなくなってる！
勇者様ありがとう。大変歩きやすうございます。
ひとしきり転げまわったら落ち着いた。ふむ。
今度は慎重に窓に手を当てて、外を覗き込む。見間違いじゃないよね、とじっくり街並みを見る。やっぱり薄暗いなあ。あとで神官様にお話しよう。たぶん説教つきだけどね！

そして、ふっと窓の下に視線を落とした私は、ようやくその人に気付いた。
あ、勇者様だ。中庭で何かをしている様子。何しているんだろう？
このままお腹が空いて寝なおしも出来ないし、よし、行って見よう！
知っている人が入るところに行くなら大丈夫！　と自分ルールを設定してみる。
私はベッドサイドで着替えを見つけ、手早く着替えて部屋を飛び出していた。髪結んで無くていいよね。

神子？、部屋を抜け出す

廊下を一歩出たところで、部屋に回れ右で帰ろうかと思いました！
思った以上に広い！　右も左も廊下が繋がっていてその先は折れ曲がっている。多分凹みたいなかたちのお宿っぽい。私がいるのはその真ん中の部分だった。えーっと、つまり左右の道、どっちが正解なんだろう。出口はどっちですか？
でもせっかく着替えたんだしここで引き下がることは出来ないっ。良く分からない対抗心を燃やしながら私は部屋の外へ一歩踏み出した。

早朝の廊下はまだ暗い。暗い闇が青い闇に変わるわずかな早朝の時間帯です。
所々の窓がガラスで出来ているから、廊下にほんのりと外の光が入ってくる。そのせいで怖がらず歩けるよ！
どこからか料理の匂いが漂ってくるから、従業員さんとかは起きているんだろう。朝ごはん……。朝ごはんのことを考えると、胸が一杯になります。そしてお腹は空っぽになります。今お腹がなったら響く！　絶対響く！　ならないでくださいお腹さん。自分のお腹に懇願しますよ。
宿のほかの部屋は静かだから音を立てないように頑張る。幸いなことに廊下は頑丈な板張りだった。ちょっとやそっとでは軋まない。宿泊客はまだ起きていないんだろうな。起こさないから、よく寝てくださいね！　私が言えることじゃないけど。

そして……今。私は絶賛迷い中です。
さっきここ通ったよね。この花瓶に覚えがある。
宿で迷うかって？　建物で迷うなんて、馬鹿じゃないのって？

じ、自分の足で部屋に来ていないからですよ。ほ、方向音痴じゃないよ！　実際、現在位置が何階かも分からなかったし。お迎えが来た時はちゃんと道順覚えていたから外にいけましたし！

早朝の静寂は嫌いじゃない。朝の静けさって、少し空気がピン、としていて気持ちいい静かさじゃないですか？　とても好きです。パン屋に出勤していたの、いつもこの時間帯だしね。早起きは得意技です。

行き止まりになったりどこか分からなくなったりしながら、なんとか玄関に着いた。

昼間見るのと、またエントランスが違った雰囲気になっている。ここまで誰にも逢わなかったのは、良かったのか悪かったのか。どう見ても不審者ですからね！

でも思ったよりも時間が掛かってしまった。まだ勇者様は外にいるのかな？

玄関の鍵は掛かっていなかった。出入フリーなんだろうか？　このままだと泥棒さんもフリーなんではないですか？

無用心というよりも、外に騎士さんが歩いているから大丈夫だと判断しているのかな。騎士さんたちが入ってこられなくても大変だしね。でも開けっ放しでいいのかな？　私の知識は役に立ちません。防犯知識については素人以下ですよ！　胸を張るところじゃないけど……。

ともかく、そっと扉を押すと軽い音をたてて玄関は開いた。その音すら大きく響いた気がしてびくりと身体を強張らせる。私が滑り込めるぐらいの隙間を空けて、その間から外を窺う。

外の冷たい空気が肌を撫でる。

少し先のお宿の門の所に騎士さんが立っているようです。お疲れ様です！　いきなり声を掛けて曲者扱いになったら困るから、心の中でエールを送る。立ち番、大変ですね！　頑張ってください！

玄関の隙間から滑り出して、そっと左側に向かう。

多分こっちに勇者様がいたと思う。いなかったら速攻部屋に帰ろ

う。部屋の場所は覚えている……はず。
お宿は想像以上に大きかった！　ぐるっと外周を塀で囲っている。これも防犯の一環？　塀の上には槍の穂先みたいな棘がついていて、簡単に侵入できないぜ！　っていう雰囲気だ。あねさんの上司さんが大物だとしたら、ここは結構いい宿なのかもしれない。もしかしたら丸ごと借りているとか。まさかねー。

さくさくと足音を立てながら庭を歩いていると、勇者様発見！　空を見てぼーっとしている様子です。鎧を脱いで、普通のシャツとズボンに剣をぶら下げただけの、普通の兄ちゃんモードでした。前に一度街で見たことがある。威圧感がちょっぴり減って、この方が近寄りやすいです。
さすがにぼーっとしていたとしても勇者様は勇者様でした！　私の足音に気付いて、直ぐに目線をこちらに投げます。
「おはようございます」
私は小声で声を掛ける。だって大声だったら凄く響きそうだし！　安眠妨害で訴えられちゃうよ！
「起きたのか」
そうだった、勇者様に運んでもらっている途中で爆睡したんでしたああ！　今更思い出すよ！
「そ、その節はありがとうございました」
大声にならないように早口で言う。恥ずかしいなあ。いつも眠ってばかりです。昔からこんなに寝てたっけ？　むむ、最近は特に寝ている気がしてきたっ。どこででも寝れるっているレベルじゃないです。
「体調は？」
お気遣い、ありがとうございます！
「大丈夫ですっ。バッチリ元気です」
握りこぶしを作って言えば、納得したように勇者様は頷き、また空を見上げてぼーっとする。

私も隣に並んで空を見てみた。
空にはぽっかりと二つ月が出ていた。月は三つあり、その周期は全部バラバラ。全部が出ていないことも滅多にない代わりに、三つが揃って出ることもあまりない。神官様が周期計算式を教えてくださったけど、私はさっぱり忘れてしまいました！　神官様ごめんなさい……なかなか身についてませんね。三つの月は大きさと色味で兄、弟、妹と呼ばれている。兄が一番大きくて黄色っぽい。弟は少しだけ小さくて白っぽい。妹は更に小さくて赤っぽい。いろいろ星術に密接な関わりがあるみたいだけど、専門的過ぎるから私はパスです。
今日でているのは兄と妹ですねー。朝の光の中では、月は青く白く輝いている。
勇者様は何を見ているんだろう？
高い位置にある横顔を見て、その視線を延ばして辿ってみる。やっぱりお月見ですか？　最近忙しいから、ぼーっとする時間が必要なんですか？　私もすることがない上に、なんとなく会話する雰囲気じゃないので隣に並んでぼんやりと空を眺めた。
空の端っこが金色に染まり、白っぽく光が闇を駆逐していく。パン屋に出勤しながら、いつもながめていた風景と重なって、ちょっとしんみりする。あの街は、本当に平和だったんだなあって今更実感した。帰りたいかといわれたら、分からない。不思議なもんです。なんとなく感傷的な気分になりながら朝焼けを見ていると、勇者様がぽつんと、
「怖かったか？」
と問いかけてきた。
何のおはなしですか？

神子、勇者と対話する

相変わらず主語が飛んでいる勇者様の言いたいことは、漠然と分かる。

日々の触れ合いで、推測することが出来るようになったのだ！

この場合、恐らく攫われたことを言ってるんだと思う。……その話だよね？　私は少し不安になって勇者様を見上げながら返答しました。

「怖かったです」

「済まなかった」

速攻で謝罪が来ました。逆に私が焦る！　勝手に……というのが正しいかどうかは分からないけど、攫われておいて迷惑かけたのに私が謝られるのは変じゃないかな。

「いえ、直ぐに助けていただいたし、大丈夫ですよ！」

私の返答に、何故か勇者様は沈黙した。ん？　私は不思議に思い首を傾げる。

そのとき、ゆるく風が吹いた。今日はみつあみをしていないため、風で髪が揺れて大変うっとおしいです。頬に掛かる髪を耳にかけて背中にまとめて流す。これはまとめてくるべきか、それとも後ろで一つに括るべきか。実は癖毛でふわふわしているため、みつあみでまとめているのですよ。切ったら切ったで、自由になり過ぎた毛先がとんでもない寝癖を生み出すので、それは出来ないっ。

髪に気をとられていた私に、勇者様が改めて、

「初めにあったとき、無理やり連れて行って申し訳なかった」

と長文を口にされました。おお、意味が良く分かる！　と言う事は怖かったかというのは、あのときの話ですかっ。

「あー」

私は理解が出来た喜びに、思わず手を打ちました。勇者様は神妙に

待ってくれてた。なんか、ごめんなさい。
「荷物担ぎは微妙に恨みに思っていますけど、それ以外は大丈夫です！」
とは言ったものの、今更なんであんなふうに拉致されたかが気になってきた。余り喋らない人ではあるけど、あんな理不尽な態度をとる人でもないことが分かってきたし。だから逆に気になります。
「なんで、あのとき何も言わずに連れて行こうとしたんですか？」
ちょっと話せば、私も話を聞こうかなーって思ったかもしれない。無理やり連れて行くのは、犯罪ですよ！　まあ、普通に話を聞いても話半分で疑いながら聞いただろうけどっ。未だに神子呼ばわりは慣れません。
　勇者様は少しだけ私の目から視線を外しました。何かを迷っているような仕草だ。ごまかしは通用しませんぜ旦那！　今日も絶賛睨めっこです。私はじっくり勇者様を眺めます。
「それは、お前が……」
何かを言おうとして、けれども勇者様はそれ以上口にせず、ゆるく首を振った。
「いや、判断ミスだ。……済まなかった」
摩り替えられた言葉は、なんだったんだろう？　私の微妙な表情に気付いているのかいないのか、別の話題を勇者様は口にする。
「お前はずっとあの街で暮らしていたのか？」
たぶん勇者様は、さっきの続きを口にするつもりはない。それが伝わるから、私はその話題の転換に乗った。空気読める子と絶賛してください。
「私は、両親と一緒にあの街で……」
ずっと住んでいたと口に出しかけて、私は大きく首を傾げました。
　あれ？　小さい頃から、本当にあの街に私はいただろうか？
　だって、友達と遊んだ覚えがありません。前にも似たようなことを考えた覚えがある。もの覚えが悪いって言ってもそれは別問題で、こんなに記憶が曖昧なことに変な汗が出てきました。

「た、多分、一緒に住んでたと思います……？」
思い出そうにも、両親の顔が曖昧になっていることに愕然とする。声も思い出せない。なんで？　あれ？　ぐるぐると思考の中に入り込みかける。
自分の記憶を逆行する。
最近の記憶。そして街を出た頃の記憶。街に住んでいたころの記憶。パン屋に勤めだした頃の記憶……徐々に曖昧になる、私の記憶。ぼんやりとも残っていない、昔の記憶――。
「大丈夫か」
掛けられた声に、遠のいていた現実の風景がぱちんと元に戻ったような感覚を受ける。勇者様が真剣にこちらをのぞきこんでいました。勇者様が私の肩に手を軽く触れました。その重みではっと現実に帰る。
はっ。
近いです！　近い近い！　失礼しましたああ！
思った以上に至近距離にあった蒼い目に、逆に変な汗が出た！
更に混乱するよ！
「余り考え込むな」
私の混乱を察してか、勇者様はかがんでいた背筋を伸ばして元の距離に戻ってくださいました。ふう。近すぎるのも怖いね！　びくびくするよ！
物覚えが悪いのは前からだけど、うーん、これはどうしたことでしょう。白さんならなんか知っているかな、とふと思いつく。歩く生き字引のおじいちゃんです。でもどこを徘徊しているか分からないのが問題だけどね！
白さんの言葉がふっと思い出される。
――酷くなると、自分の記憶がどこからどこまでか分からなくなる。

そうですね！　少し酷くなってますよ！　ううん、このままでいったら、若いのにボケですか私。ツッコミじゃなくてボケですか！　そうなったら一緒に旅するメンバーでツッコミがいなくなりますよ！

どちらにしても、この問題は私が考え込んでも解決しない気がする！　うん！　得意の丸無げだ！　今のところ困っていないから、今度機会があったら白さんに聞くという方向で。

心配そうに見る勇者様を見上げる。心配されているのがなんとなく嬉しくてニヤニヤしてしまう。

勇者様はそんな私を不思議そうに見たあと、大丈夫そうだと判断したのか肩から手を離しました。

なんとなく微妙に沈黙が落ち、私はさっきまでのことを思い出す。

「そういえば、何か考えていらっしゃったんですか？」

月を見ながらぼーっとしていただけだったんだろうか？　勇者様の行動も時々謎です。勇者様にとっては、この問いははぐらかすものではなかったらしい。

「人間が好きかどうかを、考えていた」

「な、なんか壮大な考えですね！」

スケールがでかいな！　個人単位じゃなくて、人間全体の話ですか！　やっぱり勇者様となったら、そういったことも考えるんだろうか。……でも、なんとなく、なんだけれど。勇者様は余り他の人といることは得意じゃないと思うんですが。あのエセ笑顔はたぶん社交スキルの一環なんだろうなと思う。

この人は人間を守るために、勇者という職責を受けて戦っている。人間が好きかどうか悩むって、かなり根本的な問題なんじゃないだろうか。戦う理由とか、なんかそのあたりのはなしですかっ。

「お前はどう思う？」

不意に質問の矛先が来ました！

え、そんな壮大な返事は出来ませんがっ。うーん。勇者様の求める答えじゃないかもしれないけど、考えたってたいした言葉が浮か

ぶわけじゃないから、正直に言うよ！
「私は、人によります！」
どーん。胸を張って答えたんだけど、勇者様は小首を傾げた。あ、今の仕草、小動物的でした！　背は私より大きいけどね！

神子、好き嫌いについて語る

私は人間といわれても、そんな曖昧な集団について語れるほど賢くはないです！　だから、分かる範囲で一生懸命答えてみた。

「たとえば、私を攫ったおじさんたちは、はっきり言って大嫌いです」

勇者様は神妙に私の話を聞いてくれる。

「でも、今まで面倒を見てくださった勇者様や神官様は好きだし、パン屋のおかみさんも好きです。一緒に働いていた同僚も友達だと思ってるし、いつも話していたおじいちゃんや大家さんも好きです」

上手く話せるかどうか分からないけど、言葉を探し探し伝える。

「でも、好きかどうかっていわれてわかんない人たちもいるんです。どうでもいいとかじゃなくて、そこまで深い付き合いじゃないしっていう人たちですね。姫様とか、嫌いじゃないけど仲良くするのはご遠慮したいとか、白さんみたいに変な人には近づきたくないとか」

あ、白さんとか言っても勇者様は知らないか。でもスルーして、とりあえず聴くことを優先してくれたみたいなので、私は話を続ける。

「だから、人間が好きかって言われたら、ひとによる、ってしか言えないんです。嫌いな人もいるし、好きな人もいるんです。でも両方とも人間だから」

だんだん自分で言ってて混乱しそうになる。でもなんとか伝えれたかな？　分かってくれたかなって勇者様を見上げたら、

「そういう考え方もあるか」

と仰いました。そうですよ、ありますよ！

「だから、嫌いな人がいたとしても、勇者様は無理に好きにならなくてもいいんじゃないんですか？」

もしかして、そういったことでは駄目なんだろうか？　全員を好きでいなきゃいけないなんて、そんな無茶なことを言われても困るよ

ね。私だって困るよ！　領主様が悪いひとじゃないかもって思うけど、大好きかどうかって言われるのと同じぐらい困るよ！　引き合いに出してごめんなさい領主様……でもオープンスケベ巨乳派はダメなんです。

「嫌ってもいいし、好きでもいいし、そのあたり、勇者様が思うとおりにすればいいとおもいます！」

必殺、やりたい放題！

私は好き勝手言ったけど、勇者様はしばらく考えていた。

そして、ぽつんと、

「そうか……そうだな」

と呟かれました。

勇者様はいろいろ適当でいいと思うよ！　でも適当で世界が滅びたら大変なことになっちゃうのかな。ううん、私の意見を振りかざしてよかったのだろうかってちょっと思ってきたけどもう遅い。

んん？　でも結局私が言っているのって、白さんが言ってた勇者様一人苦労させる世界の仕組みと似たようなことなんだろうか。人間全体で見たら分からないけれど、個人レベルならいい人間がいるかもしれないって言うヤツ。あのときは反発したけど、こういったことと同じことなんだろうか。そう考えたら、勇者様一人の苦しみを除外するとしたら、理に適ってるのかな？　いや、そういうことじゃないのかな？　むむむ。でも、実際勇者様が苦労しているはずだから、おかしい話なんだろうか。

あっ、なんか脳みそ使ってる気がする！

そのとき、空気を切り裂いてとある音が鳴り響きました。

ぐー。

お腹の音です！

しかも私の！

ぎゃあああああ！

反射的にしゃがみこむ。
消え去りたいぐらい瞬間的に恥ずかしくなったのと、こうしたら次にお腹が鳴ってもごまかせるかなあって。いや、明らかに鳴ったからごまかせるも何もないだろうよ、私！
「お前は腹が減るのか？」
勇者様が不思議なことを問いかけます。私は恥ずかしさの余り頭を抱えながらやけくそのように答えた。
「減ります！　胃袋が筒状になりそうなぐらい減ってます！」
うおおお、もうお腹は鳴らないでね！　微妙にシリアスなことを考えていた気がするけど、全部吹っ飛んだ。お腹の音で吹っ飛んだ！
「選定はなされたが、欲求の抑制はない……？」
頭の上で勇者様がぶつぶつ仰っていますが、私はよく聞いていなかった。
「あ、すみません、今何か仰いましたかっ」
しゃがんで見上げると、首が痛くなるよ！　何を食べたらそんなに身長が伸びたんですか、勇者様。私もまだ成長期なはずだから、是非教えていただきたい！　私それ食べまくります。
「気にしなくていい」
「逆にそう仰られたら、大変気になります」
さっきもスルーされたから、ここで踏ん張ってみる。すると珍しく勇者様は微妙な雰囲気をたたえつつ、
「失礼かつ聞きにくいことを質問をしようとしたが、止めたところだ」
と仰いました。こ、これは気になる！　けど、聴いたら大ダメージな気がする！　これは寝る直前にかなり甘いお菓子を大量に置かれた時のような状況ですよ。今食べなきゃ腐るけど、食べたら後の自分に大ダメージ、見たいな。悩む！
でもここは踏み込んでみる。後悔は、あとで悔やむから後悔なんだ！　踏み込むっていっても、ちょこっと、つまさきぐらいだけで。どの話かを自分で想定して逆に問いかける！

聞きにくい、そして失礼と来れば、私の場合、身長か、
「……胸の話題ですか？」
この話題かなっ。
「なんでそうなる」
ま、まさかの勇者様からの突っ込み！　だんだん私の立ち位置がボケになってきている。
「いや、聞きにくい話題っていったらそれぐらいしか想定がっ。……別の話だったんですね」
まさに壮大な自虐ネタを発してしまったのか。反省します。
「……何故胸の話題が？」
ぐっ、まさかそこに反応するとは！　勇者様、見逃してやってください！　いたいけな町民をいじめないください！　じっと見下ろされるプレッシャーに私の心はちょっとだけ折れた。
「胸……あまり、無いほうなので気になるんです……」
自分から暴露しました！　これで何も怖くないよ！　どんとこいだ！　といいながら赤くなっている自分が恥ずかしい。うああ、奇声を上げて頭を抱えて転がりたい！
「そうか？」
勇者様はそれ以上はつっこみませんでした。つっこまれたら、私が大変なことになるがな！　ありがとう、勇者様！　感謝すべきなのか、逆に涙目で突っかかるべきなのか。
深呼吸して落ち着いてみる。すーっと息を吸い込んだら、冷たい空気が胸いっぱいに入って落ちついた。
胸の話題じゃないとしたら、何の話だろう。じーっと勇者様を見上げながら話題を探ってみる。勇者様は根負けしたのか溜息を付いて、白状しました。図らずも今日も睨めっこに勝ったようです。
「三大欲求の抑制の話だ」
「抑制、ですか？」
んー。そういえば、選定を受けたら抑制されるとか言うあれですか？　三大欲求というと、と指折る私に勇者様が先に並べてくれる。

「食欲はうせてない」
そうですねっ！
「睡眠欲は、」
勇者様に言われる前に自分で突っ込んだ。
「どこででも寝れます！」
しかし、私の渾身の自爆には勇者様は触れなかった。なんですと。
「最後の欲求については……」
あえて勇者様はぼかしてくださったようです。これが聞きにくいことだったのかー。納得。でも答えは決まっている。乙女の口からはいえませんっ！　いや、普通に言えないよ……しかも、相手が勇者様だ。なんか神官様だったら学術的な話になりそうで、言えそうな気がする。
「えーっと……まあ、その……」
こ、こ、この空気は微妙すぎる！　確かに踏み込んだこの話題は自分に大ダメージだ！　ごめんなさい勇者様！　勇者様がぼかした話題に関しては、あまりつっこまないようにします。ちょっと心に刻んだよ！
「気にしないでいい。こちらこそ申し訳なかった」
いや、私があえて飛び込んだせいですよ。微妙な雰囲気のまま、会話が途切れ、静寂が訪れる。
再び朝の爽やか空気に例の音が響きました。

ぐー。

あああああ。
しゃがみこむ体勢は、役に立ちませんでした。戦いはいつも空しい。無駄な努力だと分かっていても、人は頑張ってしまうものなんですよ。たとえ、お腹を押さえたら鳴らないかもしれないという程度の頑張りであっても、それが無に帰るとこんなに空しいものなんですね。

神子、やっぱり怒られる

「さあ、いろいろお話しましょうか」

にっこりと笑った神官様、笑顔、大変黒いんですがあああああ。テーブルを挟んだ距離でも、ひんやりとした雰囲気が漂ってきます。この怒り方は怖いです！　怖いです！　だって頭に血が上ったとかいう怒りかたじゃなくて、どんな氷よりも冷たい怒り方ですよおおお！！

「あ、あの、ご、ごめんなさい」

ガタガタ震えながら謝るけど、それだけじゃすまない感じです。当たり前ですよね。ですよねー……はい、私が悪いです。悪いです！！

何故こんなことになっているかというと。

庭でぼんやりと勇者様と過ごしていたとき、私の部屋では大混乱だったようです。

起こしに来たら部屋にいないとか。

攫われて次の日なもんで、皆さん大変慌てて、大捜索が始まろうとしたそのとき部屋に帰ろうとした私が発見されました。

まさしく「あっ……」って。

あのときの気まずさはなかったよ！

玄関で武装している何人かの騎士様と鉢合わせ！　何があったんだと硬直していたら、つぶらな瞳のお兄さんが、私を指差して「いた」って言ったんです。速攻であねさんに「いらっしゃる、だ！　あと人を指差さない」と肉体言語による教育を施されていました。

軽くですけど。

あねさんにもちょっと怒られました。起こしに来てくれたという

か、様子を見に来てくれて私がいないことに気付いたらしい。そりゃ焦る。私でも焦る。でも最後はあねさんはご無事で何よりと頭をなでてくれました。まさにあねさん！　あんな素敵な人になりたいものです。方向性が違うから無理っぽいけどね！　例えるなら、つぶらな瞳のお兄さんが、知性派を目指すぐらいの違いがあると思っています。あの騎士のお兄さんは勝手に肉体派だと思い込んでる。

神官様がいらっしゃったら私の居場所はすぐわかったんだろうけど、急ぎの余り捜索と報告を同時進行で進めちゃったらしい。丁度報告をしているときに私が発見されたそうです。まことに申し訳ございません！

そして冒頭のお説教タイムに入るわけでした……。朝食は一応食べさせてくれました！　神官様は怖いけど鬼畜じゃなかった！　私のお腹がグーグー鳴って大変微妙な空気が流れたせいもあるけどっ！　軽い食事の後、勇者様に見送られ（頑張れとだけ言われた）別室にてテーブルでのお説教タイムです。勇者様は陸馬さんの世話をしに行くそうです。いいなあ、私ももふもふしたい。

ゆっくり始まったお話は、終始穏やかにすすみました。

一度、勇者様に怒った神官様の姿を見たけれど、あれとは全く別物でした。

淡々と、心配したこと私の至らない点や気をつけるべきことをお話されました。そして、随所で「この場合なら、どうすればよかったと思いますか？」と質問があり、それに私が答え、更にそれに対して注意をされるという。とりあえず、知らない手紙で呼び出されることが駄目なことも分かった！　今度、一応神官様と勇者様の筆跡を見せてくださるそうです。あと、簡単なみわけ方の星術とか、偽造書類をどう防ぐかとか。知らない人についていかないという件はあねさん達の保護に関しては大丈夫だったようです。プリンを貰ったことは報告できませんでしたっ。

簡単に書けばとても有意義な時間なんですがっ。

怖い。
神官様の静けさが怖い！
ずっと硬直したままお話を聞いていたんで、握り締めた掌はじっとりと汗をかいているよ！
「私からの話はこれぐらいにしましょう」
一通りの注意事項とお話が終わったようです。
「ありがとうございました！」
涙目のままお礼を言うと、緊張の余り身体が固まっていたことに気付きました！　ばっきばきだよ！　でも肩を回すのとか、今の雰囲気では出来ない！　まだお説教の余韻が残っています。し、静かだ……。
すっかり太陽が傾き、お昼頃になっています。つまりお昼ご飯ですか？　窓から差し込む陽射しが大変あたたかそうです。私もお昼寝したい……。お外って、あんなに遠い世界だったんだね……。
「あと、思い出したくないかもしれませんが、誘拐されていたときの話を改めて聞かせてもらいます」
神官様が改めて切り出しました。簡単なことはあねさんたちに保護されたときにお話してます。でも、白さんに関しては明らかに意味が分からないひとだったから話してません。見学って、本当にわけが分からないし！　あのひとはたぶん暇なんだと思います。暇じゃないとか言ってたけど。
「えっと……。宿屋の鼻が大きい男の人が、伝言ですって手紙を持ってきました」
神官様は手元の紙になにやら書いていらっしゃいます。まさに取り調べですね！　うわああん！
「それで？」
うながしがいつもよりそっけないのは、多分書いていらっしゃるせいだと思いたい。
「それで、地図の場所に行ったら星術で眠らされて。気がついたら倉庫で転がっていました」

無言のうながしに、少しだけ迷った末に、
「で、白さんが見学に来て、帰って、誘拐犯のおじさんたちが私を売り飛ばす話をして、荷馬車に乗せて行こうとしました。そしたらしばらくしたら騒ぎが起こって、あねさんたちに保護されました！」
神官様はさらさらと紙に書いてから、一言だけ、
「白さん、というのは、【１／Ｓｈｒ】のことですか？」
と仰る。私はよく分からないので首を傾げると、神官様は、言い直した。
「ではこちらで名乗っていましたか？　【１／Ｓｈｖｖｖｒ０】（しろ）と」
「あ、そっちです！　変なひとでした！」
神官様はむずかしい顔をしてこめかみをぐりぐりしていました。

神子、神官の推測を聞く

こめかみをグリグリするのは、頭を悩ませている時の神官様の癖なんだろうね。たまに見ます。それだけ私が悩ませているってことかあああ！　理解しました。

「白さんとお知り合いですか？」

神官様があっさりと星別者名を口にするからそう思ったんだけど、

「そんなわけないでしょう」

とさっくり切り捨てられました。

「伝説上の人物ですよ。そもそも、一般学説では実在さえも疑われています」

「六〇〇〇年ふらふらしてても、印象に残ってないんでしょうか」

あんな目立ちまくりの格好なのにね！　おかしい。そもそもどこで生活しているのか謎だ。あのひとが食材を購入しているところを想像できない！　八百屋で値引き交渉をする白さん。……どっかの洞窟に住んでるとか言われた方が、まだ現実味がありますね！　想像の中だけでも、なんて街が似合わないんだあのひと。

「……六〇〇〇年と言っていたんですか？」

さらさらと何かを書きつけながら神官様。なんだろうな、本当にいつもより取り調べっぽいよ！　さあ、なんでも吐いちゃいますよ！　そもそも、白さんは口止めも何もしなかった。どっちでもいいんだと思うよ！　言ったらいけないことを口にするだけで沸いて出てきそうな気はするんですが。恐怖ですね。それが夜だったらあんな白い人がぼおっと浮かび上がるんだよおおお！　絶対怖いって！

あ、話が脱線した。

ともかく。

「はい、昔の話を聞きました」

「昔の話、ですか。たとえばどんな？」

「はい、世界が三回滅びたときの話です」
神官様の手が止まった。私のほうを見て、
「そうですか……。大災害の前の話ですか？」
と溜息に混ぜて仰いました。さすがに大災害は私も知ってるよ！
白さんの言うところの第四期が始まる前の、三期の崩壊のことだよねっ。
私はあんまり詳しくは覚えていないけど、白さんに見せられた幻視の話をした。
一度目の、世界を呪った女の人の話。
二度目の、人の欲望が戦乱を呼んだ時代の話。
そして、三度目の命が歪んだ世界の話。
支離滅裂になりそうな私の話を、神官様は書き物をしながら相槌を打って聞いてくれました。
でも、あの事は言っていいか分からなかったんだ。
神様が世界を滅ぼそうとしていることとか。勇者様のこととか。
とりあえず、三回の滅びについて話を終わり、私はグルグル悩んだ。他のことも言っておくべき？　白さん、中途半端な知識を与えていかないでください！　あのひとのせいにしてみる。
「興味深いお話を、ありがとうございました。うすうす考えていたことが裏付けられました」
ぱたん、とペンを置きながら神官様が言う。
「え、何か分かったんですか？」
「あなたが初めて瘴気を浄化したあの廃墟で、紙を拾ったのを覚えていますか？」
うっ……そんな、記憶力にチャレンジするようなことを仰るのですか！
私の微妙な表情を見て、明らかにこいつ覚えてないなということを理解されたようです。神官様は私の答えを聞かず、
「あの紙はとある学説をつづった紙でした。現代神話がおかしいのではないかと」

と続けられました。え、急に話が飛んだ。
「神話ですか？」
神官様はすらすらと諳うようにそらんじる。
「――初めに星神が自己を自覚された。全き存在から神となった。そして星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した」
うん、その文章を覚えています先生！　なんだろ、このもやーっとした気持ち。
「でも、やっぱり違和感があるんです」
そういえば、白さんとも似たような話をしていた気がする。でもそのときには何も感じなかったから、やっぱり順番が違うのかな？
白さんがどの順番で言ったかなんて覚えてないです！
……違和感といっても、私の覚え間違いかもしれないけどね！
「あなたは以前、こういいました。――星神様が神だと知覚した後、星の配置をされ、韻律を定め、命の基盤を整え、子等を野に放った。」
すらすらと神官様が仰る。うん、こっちの方が正解な気がするんだ。
「あ、そっちがしっくり来ます！」
私の記憶はそっちが正しいと囁く。
「私が始めにお伝えしたのが、現在星教で教えられる神話です」
私はどっちにしても同じじゃないかなって思う。どっちがどっちでも、結局神様が全部創ったんだよね？
「え？　うーん、順番が違うだけじゃないんですか？」
神官様はその答えに苦笑した。
「順番が古い方が、世界への影響力が強いんです。簡単に言えば、韻律……まあ、言葉としましょうか。言葉を知らない人間がいて、後から言葉が付け加えられた。これが今、一般に通用している、『命の基盤を整え、子等を作り、この世の韻律を決定した』です。人間より言葉が先行することがないんです。言葉は人間に影響をあたえられるけれども、言葉がなければ人間が存在できない、とはして

いない」
な、なんとなく分かる気がした。
「ですが、あなたが言った方だと、『言葉があり、言葉によって人間が生み出された』と解釈が出来るんです。韻律がなければ、生物が存在しない、と」
う、うん。
「……ここまでは、分かりますか？」
「た、多分」
必死で頷きますよ。つまり、えーっとなんですか？
「つまり、その教えを星教自身で教えているとすると、それはあえて間違えた解釈を教えているということです。お話にあった三期の滅びはまさにこの順番が違えば起こらなかったことなんです」
すなわち、人が命の基盤を韻律で捻じ曲げることが出来ないなら、あんなことは発生しなかった、ということ？
「え、じゃあ神様自身が違うことを広めているんですか？」
私はビックリした。けれども、神官様は首を振る。
「広めたのは星神様ご自身か、それとも人間か……分かりませんけどね。代々の大神官が否定をしていない。恐らく彼らもこの答えに行き着いていたと思いますし」
「え、今までの人はそれを残していないんですか？」
「残すのも危険な情報です。が、もっと確実な情報源が常に存在していたとするなら残さずともよいと思われます」
それが白さんですね！　さすがにピンと来ました！　歩く大百科おじいちゃんですしね。
「ここからは私の推測でしかないのですが、神話がすりかわったのは恐らく三期が原因でしょう。命の基盤に手を出したせいで滅びた。それが神話の隠蔽に繋がったのではないでしょうか。まあ、始原（しろ）の方に逢ったら聞いてみてください」
私は反射的に答えた。
「え、あんな変な人と会いたくないんですが！」

神官様は苦笑してこう仰る。
「恐らく勇者は逢っていると思いますよ。以前接触したと言っていた人物の背格好と一致しますし。名前は名乗らなかったようですが」
白さんどれだけ徘徊しているんですか。

神子、神官に質問する

「そもそも始原の勇者自体、謎が多いですからね」
と神官様。いや、あのひとは謎と根性悪の塊のような気がしますよ！　いたいけな乙女を床に転がしなおす男です。意外と私の恨みは深い。
「ただの変な人じゃないんですか？」
純粋に疑問に思い、神官様に問いかける。
「代々の勇者は、その名称に「色」をつけられているんです。これは、その時代の星原樹が染まった色らしいんですが」
そういえば、と思い出します。一度見た星原樹は薄く青い葉っぱが茂っていました。ほほう、それが勇者様の名前になってたんですね！　え、目が蒼いからじゃないんですかっ。鎧が蒼いからじゃないんですかっ。今更聞く驚愕の事実！　まあ、鎧はあとからでも好きに出来ますしね。
「紅蓮にしろ、深蒼にしても、色名と意味を持たせてつけられている。なのに、彼だけ意味が揃っていない。そもそも白が始まりを指すとは定義されていないんです」
おお、また難しい話になってきた。頭を回転させて頑張るよ！
「初めて勇者だーって名乗ったから？」
でも、と私はおかしいことに気付く。
白さんは、今の世界の仕組みについてとてもよく知っていた。それって、世界が滅びるのを防いだからとかじゃない。そもそもずっと存在していたのに、今期に限って勇者とか言っているのも変だなあ。
それに、白さんが勇者していたって事は、神様に白さんの働きが認められて世界が存続しているってこと？　それにしてはなんだか変な気がするんだ。あのひとは頑張る立場の勇者様とは別な気がす

る。なんだか逆の管理するひと、みたいなイメージが浮かぶんだよね。

結局一体あのひとはどんな立場のひとなんだろう。

神官様は白さんの変な点について、簡単に説明してくださる。

「そもそも勇者が現われるには、大神官が必要なんです。星神様の選定が必要ですから。ですが、六〇〇〇年代初頭、神殿の記録を掘り返してみても大神官が立ったという記述がないんですね」

あ、それで思い出した。この間からおかしいなーおかしいなーと思っていたこと。

白さんは、勇者様と神官様の話をするときに、勇者と大神官って言ってた気がするんだよね。気のせいかなーって思っていたけど、この際聞いてしまおう！　よし！

「はいっ神官様質問です！」

私は勢いよく手を上げました。神官様はさっき書き付けていた紙を見直している様子です。なぜか室内なのに手袋をはめている。めくりにくそうですね。

神官様はそのままこちらを見ずに、

「なんですか？」

とだけ仰る。私はずっと聞きそびれていたことを質問しました！

「神官様は、大神官様なんですかっ」

神官様は微妙な表情で私を見ました。

「……その質問はなかったので、ずっとあなたが知っているものとばかり思ってましたが」

そ、そんな目で見ないでください！　わたしは落ち着きなくもじもじしながら、

「ちょっと変だなーっては思っていました」

と早口で付け加えてみる。よく考えて察しとけ、という感じですか？　居たたまれない！　なんだかたまにおかしいなーと思った事はぽろぽろあるんだよね。神殿の人たちが凄い丁寧に接していたとか、セイヒツの間に普通に入れてたとか、あ、あと騎士団の人たちもめ

ちゃくちゃ丁寧だったとか。
「じゃあ、やっぱり神官様が大神官睨下なんですか？」
その呼び名に神官様は少し苦い笑いを浮かべる。
「星別者名上はそうですが、今は位を返上したことになっています」
え、そんな職業選択の自由があるんですかっ！　私は前のめりで聞きました！
「つまり、私も神子はイヤだなーって思ったら、返上できるんですか！」
「できませんよ」
えー。ばっさりと一撃で切られました！
いや、ちょっとできるかなーって思ったんだ。このキラキラしい肩書きとは一生はお付き合いできないしね。
「おばあちゃんになった頃には悲惨だと思います！　なんだかこの名前で超絶美人を想像する方がいらしゃいそうですし！　世の中の人の夢を守るために、是非返上しておきたいです」
と私は力強く主張しました。が、
「あなたは特殊ですよ。無理ですね」
二度目のばっさりです。神官様は容赦ありません。私はうなだれるしかない。特殊ってなんですか。なんだかそのイロモノ的扱いはイヤですよ！
「そろそろ呼び名に慣れてくる頃でしょう。大丈夫ですよ。ずっと呼ばれていたら、だんだんその気になりますから」
神官様、そのフォローは求めてませんよ……相変わらずフォローの微妙さが光ってます。
神官様はトントンと書類をそろえながら私に向かってにっこりと笑いました。そしてお話を元に戻します。
「どうやら黄金（きん）の時代、勇者の旅に大神官が付いて行って帰ってこなかったらしいのです。そのせいで随分神殿と国が揉めたとか。その頃から大神官は基本外出しないことに勝手に決められたようで」
「え、じゃあずっとその後は皆さん神殿にいらっしゃったんですか

？」

「その次の夜闇（くろ）の時代は、当時の司教に当たられる方で既に相当お年を召していらっしゃったのです」

へー、何故か大神官様は若いイメージがあったから意外です。

「あれ、じゃあ、大神官様はどなたが選ばれるんですか？」

すると神官様は皮肉な顔で、

「簡単な試験ですよ。セイヒツの間に入り、星原樹の葉を取ってくればいいだけです」

「あ、それなら簡単ですね」

私でも出来る試験ですよ！　お使いは得意です！

「あなたには簡単でしょうが、普通は近づくだけでも一苦労なうえに、星原樹に触れるだけでも大怪我する場合がありますからね」

明らかにあきれられました。というか、お枝様はそこまで危険物でしたっけ？　微妙に危険物だって言うお話は聞きましたが、大怪我ってなんですかあああ！　ちょっと、そんなに危ないものを、乙女に持たせているんですかっ。

「あ、そういえば枝は前の宿にあるんですか？」

「いいえ、持って来ましたよ」

神官様は笑みを苦笑に変えた。

「ですが、私も封印越しに持つのが精一杯です。手がおかしくなるかと思いましたよ」

手？　そういえば、神官様はずっと両手に手袋をはめている。書き物しにくそうなんだよね。注目してました！　いつもは手袋なんかしていません。

「手に怪我をされたんですか？」

「大丈夫です。直ぐに治りますよ」

神官様はやんわりとそれ以上の話題は打ち切る。話を戻しますね、と付け加えて、

「神殿に上がるものの中には、確かに大神官になることを目指してくるものもいるそうです。一気に箔がつきますからね」

と笑う。黒いですよおおおおおおお！
「そんなにいいものじゃないんですが」
溜息に混ぜて言ったそれが、なんだか妙に耳に残りました。

「とりあえず、大神官では外に出られない決まりなので、一旦普通の神官へ身分を落として旅に同行しているわけです」
と神官様は話を括った。
「え、でも結局同じことじゃないんですか？」
いくらそういっても本質としては変わらないのに、変なの。大神官様って、『神の声』っていうなんか凄いことができる人なんだよね？　そんな風に選定された人だということに変化はないのに、一体何がしたいんだろうな。さすがの私でもおかしいって思う。
「そうですよ。同じことなんですがそれが分からない方が実に多いんですね。だからこんなごまかしが効くんですが」
おおっと！　含み笑いをする神官様はいっそ清清しいまでに悪い笑いですよ。いいんですか星職者。まよえる人々を導くお役目じゃないんですかっ。神官様は独り言のように続ける。
「ビンのラベルを張り替えたところで中身が変わるわけがないんですけれどね。ラベル自体に価値があると思っている方が多いので」
うっすらと笑うさまに貫禄すらあります。
そ、そうですか。あははは。としか相槌が打てませんよね！
「というわけで、一介の神官のはずなのに無碍に扱えないという、困った身分になっています。たまに面白いことになりますのでこれはこれで楽しいですよ。あえて知らない相手には公言もしていませんし」
その面白いですよ発言に薄ら寒いものを感じて私は笑顔が硬直します。神官様が面白い場面は、たぶん相手は生きた心地がしないと思われます。はい。
「……まあ、私の話はこれぐらいにして、他に質問はありませんか？」

神官様は私の固まりっぷりを眺めながらそう仰った。
質問かあ。今の大神官話でいろいろ吹っ飛びました！　えーっと。
そして思い出した。
さっき、朝に窓から見た街の風景が脳裏に浮かぶ。
「この街には、いつまでいるんですか？」
私は黒い靄を思い出して身震いした。私の微妙な表情に、
「……そうですね、あなたは早く出たいですよね」
と仰る。あ、違った意味で取られたかな？　悪い思い出しかないけど、そういう意味で聞いたんじゃないんですよ。私は慌てて付け加えた。
「あのですね、黒い靄が見えるんです」
「黒い？」
神官様がここでまた不審そうな顔をしました。
「以前、瘴気はピンクに見えると言っていませんでしたか？」
そうです、瘴気はピンクなんです。が！　ここで見えるのは黒い靄。黒い靄がたまったら瘴気になるの？
「えっと、黒い靄が見えるんです。悪いこと考えている人の周りに見えるというか。今は町全体が薄黒いというか……」
あの状態をどういえばいいんだろう。腹黒少年の周りを囲んでいた黒いもやーっとしたもの。あと、朝起きてみた時に街が沈んでみてた黒いヤツ。みるだけでトリハダもののあれですよ！
「あの黒いのが集まったら瘴気になるんじゃないかなって思うんです。白さんはもうすぐここも瘴気に沈むって」
白さんが言ったことを口に出した途端、神官様の表情が険しくなりました。考え込まれる神官様に、あのことを聞いていいかどうか悩む。
瘴気は人が生み出したもの。そして、魔物は瘴気から生まれるもの。
本当に乱暴な言い方をすれば、人間がいなくならない限り、魔物がいなくならないってことだよね。でもそのことはお二人は知って

いるんだろうか。考え込む神官様に聞くかどうか悩みます。
「始原（しろ）の方が言っていたなら、そうなんでしょうね」
ややあって、神官様は溜息をつきながらそう仰った。片付けつつあった紙をもう一度開いて、何かを書き付けている。
「物質コードで絞るとしたら瘴気は中和できる。けれどもそれ以前のものは一体何に当たるのか……浄化で定義されている効果は」
難しそうなひとりごとですよ！　私はとりあえず置物となっています。すみません、協力できなくて。神官様は難しそうな顔をして黙ってしまいました。そしてふと私に気づき、
「ああ、申し訳ありません」
と仰った。いいえ、どうぞ考えに没頭していただければ！　私はそのあたりにある置物程度だと思ってくださいっ。つまりあの花瓶と同じだと思っていただければっ。
「あの、やっぱりこの街って治安が戻らない限り黒いもやもやが消えないんでしょうか」
私は恐る恐る聞いてみる。多分、町全体がおかしいから、人もおかしいんじゃないかな？　悪いことがさらに悪いことを生み出して、どんどん悪くなっている気がするんだ。腹黒少年が言っていた、騙される方が悪い、って言うこととかがとても象徴している気がする。皆どこかおかしくなっているのは、町全体がおかしいせいかもしれない。
神官様は首を傾げた。
「治安が戻ると消えるものですか？」
あっ。話の繋がりが分からないですよね！　すみません唐突な話しっぷりで。私は覚悟を決めて、あのことを切り出した。
「人の心の悪いところが集まって瘴気になって、魔物になるって聞きました」
「誰に……というのは愚問ですね」
神官様は遠い目をしながらそう言った。そうです！　お察しの通り謎知識は大体白さんだと思います！　多分。いろいろ混じってき

ているから、どこからの知識か自信がないものあるけどっ。
神官様は溜息をついて、こめかみをグリグリされました。
あー。困らしちゃった。
「魔物が生物か非生物かは以前から論争がなされていたものです」
と言う事は、やっぱりこれも一般教養じゃなかったあああ！
デンジャラス知識ばっかりを置き土産にしてませんかまっしろしろすけさん！　今度逢ったらガクガク揺さぶって文句言いたい。相手が神官様だからいいものの、うっかり変なこといって私が微妙な目で見られるじゃないですか！

神子、釈放される

「その件に関しても、詳細を聞きたいところですが……」
そう言いつつ私をじっと見る神官様。またにらめっこという戦いの火ぶたが切って落とされたようです。負けませんよ！　目を逸らしたら、負け！
私は万感の思いを込めてじっと見詰め返します。
分かって神官様！　私が白さんの小難しい話を詳しく覚えているはずがないじゃないですか！
二人で無言で見詰めあうこととしばし。
神官様がそっと目を逸らしました。どうやら私の思いを理解されたらしい。
「そうですね、何事も安易に回答を求めてはいけません。これは別方向から考えるべき情報ですね」
呟きながら神官様はさっきの書類に走り書きをしているようです。
これは神官様が勝ちを譲ってくださったようですね！　うむ。この戦いも空しかった。
なんだか勝負に勝って、人としての器に負けた気がするんだけど、気のせいだよねっ。
「それにしても、始原（しろ）の方は何をしに行ったのでしょうね」
神官様が遠い目をしながら仰るので、私は元気に答えました。
「見学って言ってました！」
すると、微妙な表情をして、
「あなたの素直なところはある意味美徳かもしれません。が、言う事を額面通り受け取っていい人物かは、きちんと考えてくださいね」
と、ざっくり釘を刺されました。
……うっ。
そういわれると、心にいろいろ刺さるものがありますッ。そうい

えばこんな感じの事も言ってたっけ？
「縄で縛られている史上初の神子を見学に来たのだと……」
「どんな人物ですかそれ。本当にそれだけのために？」
神官様のツッコミが適切です。記憶に残る印象は、そんな感じですよ！　私の中で白さんの評価はどん底のようです。
「あとは私の情報がなんだかんだって、ブツブツ言っていました」
これでも一生懸命頭を捻って言葉を探す私。いろいろ言ってたなあって思うんですが、全ては遠い記憶の中ですよ。まあ、昨日ですが寝て起きたら覚えているはずがない。
「恐らくその謎の部分が重要っぽいのですが、明らかにあなたが覚えていないので無理でしょうね」
ぐあ！　これも心に大ダメージです。ええ、覚えてません。覚えてませんがっ！
神官様の私についての理解はかなり正しい。でも理解されてるって、嬉しくもあり心をえぐるものでもあるんですね！　正しさが常によいものとは限らない！　世界の無情さをまた一つ学んだ気がします。一つ大人に近づきました。
「今日のところはこのあたりでいいでしょう」
はっ、この流れは、まさか！　私は無意識に背筋を伸ばして姿勢を正しました。
「長く話につき合わせてしまいましたね。お疲れ様でした」
つ、つ、ついに釈放の時が！　やったね！　私、頑張りました。これで自由の身！　勇者様、私頑張りましたよ！　応援ありがとうございますっ。
内心は花を振りまきながら踊り狂っている私に、神官様は神妙に告げた。
顔だけは真面目に聞くよ！
「この街にはあと二、三日滞在します。それは我慢できますか？」
「あ、はい！　大丈夫……だと思います！」
根拠のない自信は得意技ですよ。そんな私を胡乱（うろん）げに見たものの、

神官様はこれ以上は何もいわなかった。
「神官様、その滞在の間ってすることがあるんですか？」
神官様は首を傾げながら、
「幾つかルース・サニディン氏に協力して魔物駆除を行う予定ではあります。でも、あなたは疲れていたら休んでいただいても大丈夫ですよ」
ルースサニ？　誰だっけ。あっ、記憶が微妙です。サニー……あ！　あねさんの上司のお兄さんですね。分かりました。覚えてた。ちょっと焦った！　これで覚えていないといった日には、神官様の目線が冷たいと思います。恩人の上司の名前を忘れるとか。
でも置いていかれるよりは、一緒に行きたいな。お城で待っていたときの居たたまれなさを思い出します。どうだろう邪魔じゃないかな？と思いながら私は主張する。
「お邪魔じゃなければ一緒に行きたいです」
神官様は少し考えた後、
「大丈夫でしょう。なら、予定に入れておきますね」
とちょっとだけ書類に書き付けた。うわー走り書きも綺麗な字です。お手本みたいだ。
それを見て、私はふと考えていた事を思い出した。
「あと、お願いがあるんです」
神官様が目線をあげる。
「もしよかったら、いろんな外国のこととか勉強したいんです。今どこの国にいるかも分かりませんし！」
「知らなかったんですね」
そこはつっこむところじゃないですよ！
神官様は一つ頷いて、
「そうですね、神殿の一般教養とはまた違いますし……」
と考えつつ、
「教師は私になりますが、よろしいですか？」
「いいんですかっ」

わーい。忙しいから断られると思ってました！
「分かりました。空き時間に少しずつお話しましょう。簡単になりますがそれでいいんでしたらお引き受けします」
「ありがとうございます！」
これでとりあえずここの国がどこかが分かるかもね！　いろいろすみません。まだ実は街の名前は分かっているけど、ここがどの大陸のどの辺りかもさっぱり分かっていないんですよ。
「あなたはどの段階まで教育を受けたことがありますか？」
そ、それは難しい質問ですねっ。私の教養は、正直微妙です！主神殿での勉強は、あえて数に入れない。マナーとかばっかりだったし。
「もといた街では、神官様の開く教室みたいなのにちょっと通いました。読み書きと計算です。あとは、貸し本屋さんで本読んだりしたぐらいです」
その時に先生に聞くときの挙手が癖でついちゃって、ちょっとまだ残っているのは乙女の秘密だ。だって、分からないところは聞かないと先生がどんどん話を進めちゃう。質問しなくちゃわかりません！　引っ込み思案な人にはおすすめできない教室だった。あれがまさか教育の真の姿？
大体、街の人はそんな感じに星教の神官様が開催するそれで勉強は終了している。だから地理は微妙だし、歴史なんて星教で教えてくださる以外あんまり知らないんだよね。そもそも勉強をするぐらい余裕があるのって、貴族とか裕福な人だから、そういった人は家庭教師を雇ったりするらしい。あと商人さんとかだったら、もうちょっと踏み込んだ帳簿のつけ方とかするみたいだけど、それは働きながら覚えるらしいし。神官様は私の話を聞きながら頷いていた。
「だから計算は速いんですね」
「はい！　特におつり計算速いですよ！」
そりゃあ朝のパン屋では必須スキルです。如何に素早くパンの金額を計算して売りさばくか。時間との勝負ですから！

「神官様は何で勉強されたんですか？」
そういえば、前に山の村出身だと聞いたことがある。同じ一般市民でも、こんなに教養が違うんですね！
「巡礼の神官を捕まえて質問したり、いろいろしてましたね」
少しだけ遠い目で神官様は言う。
どんな子供時代なんだろ。ちょっと興味はありますね。
「さて、そろそろお昼ですよ」
神官様がインク壷に蓋をしながらようやく姿勢を崩しました。おお、終了ムードです！　私は急に空腹を思い出し、お腹を押さえました。何をしたわけでもないのに、お腹が減るって不思議ですね！
何はともあれ。
これでやっとわたしは自由の身になったようです！

◆こどもたち、神話の本をよむ

（とある町。
星神殿の教会は、一般に開放されている。
奥様方が噂話に興じる傍ら、神官の授業を終えた子供達が思い思いに遊んでいる。
その一角、解放書架の傍らでは子供達が絵本に没頭していた。
そこには創星神話が分かり易く丁寧な言葉で書かれているものが多い。
ひろく普及している物語である。）

『かみさまが作った世界』

作、絵：ラズ・ライト

かみさまは、ある日、自分がかみさまだと気付きました。
それまで世界にはだれもいませんでした。
（影だけで描かれている人物が、何かを思いついたような仕草をしている。宗教画における星神は、詳細に描かれることがなく、曖昧に輪郭を描くことが多い。恐らく存在はすれど人間には知覚出来ないという神の性質が現されているものなのだろう）

あんまりにも暗かったので、かみさまはあかりを作りました。
それが太陽と、月と、お星さまになって、空をかざりました。
（藍色の背景に星がちりばめられている。月は三、太陽が一。
星教においては太陽の運行よりも星のめぐりを重要視する場合が

多い。韻律を使用する際の計算にも、星が用いられているせいであろう。

神の名称の由来もここから採られているとする学説もある。また、星の巡りは世界の運命線を描いているという研究もある。気候の変動はそれらが要因となっているとの説がある。）

かみさまはいきものを作ろうと、いのちをふきこみました。

いろいろなものから、いきものが生まれました。

（水、風、土から様々な動物が現れるさまを描いている。ただし、人間はその中に入っていない）

かみさまはわたしたちにんげんをつくり、世界におきました。

（裸の人間達が大地に立つ姿が描かれている。

この本のように人間の作成を最後とする神話は多いが、人間も他の生物との成り立ちに相違がないとする意見もある。しかし近年、人間のみを魔物が襲うという事実を取り上げ、やはり人間が神に愛された種族であり最後に作られた世界の支配者であるとする見方が通説となっている）

かみさまは、世界のことばをさだめました。これを使えば、世界を動かすことが出来ることばです。

（韻律の形が幾つかちりばめられている。学習が進めば子供達もこの部分を理解するものがあらわれるだろう）

ある日、かみさまは世界の中心に木をうえられました。はじまりの木です。

（大きな木が丘の上に植えられている絵がある。
しかしこれは実際の星原樹とは相違があり、地上から木が生えている表現である。この絵を描いた作者は、おそらくさほど高位の神官ではないとうかがわせる。主神殿の装飾のモチーフにはいたるところに星原樹を使用しているため、それが空から生えた樹であることはある程度の階級のもの達には認識されている事項である）

かみさまが植えた木に、人の子がきづきました。
（子供が木を不思議そうに見上げている。子供は一人、ほぼ服も纏っていない）

木から一つ、果実がおちました。おなかがすいていた子は、それをたべました。
（大体のモチーフは林檎を元に描かれている。しかし、有史以来星原樹が果実をなしたという記述はなく、このあたりは創星神話を語る際には省略される場合が多い。信憑性に疑問がある）

すると、せかいのことばが人の子も分かるようになりました。こうして、わたしたち人間が、星じゅつをつかえるようになったのです。
（不思議な術を使う子供の姿が描かれている。
恐らくその果実は知識の暗喩であるが、それを手にした人間が何故韻律を使用できるようになったのかは不明である。そもそも、共通語と星語が二重になっていることを疑問視する声が多い）

わたしたちを、かみさまはみてくださっています。

きちんと大人のいうことを聞いて、いいこにすごしましょう。

◆こどもたち、神話の本をよむ（後書き）

ラズ・ライト（？～Ｓｋ，６０３６）
初期星教における神官であり、新星術の研究者でもあった。子供向けの著作を多数残している。現代でもそれは写本され、流通しているものが多い。また、『始まりの樹と知識の果実』のモチーフがあらわれる現存する最古の作品の筆者でもある。ただし、その部分は創作だとする学者もいる。

神子、お勉強をする

ふふふ……遠い目をしながら私は本を抱え込みました。私が抱え込んでいるのは、神官様に空いた時間で読んでくださいと手渡された本です。つまり、お勉強のための本なんですが。

本を開けて、私は絶句しました。私は神官様の教育方針を信じています！　この本を渡されたのは間違いじゃないよね！　何らかの思惑があって、この本が渡されたんだよねっ。そう信じたい。

私は現在、座り込んでいる陸馬さんの横でくつろいでいます。陽射しがぽかぽかあったかい。寝ちゃ駄目だと頑張ってるよ。

ここは街道だった場所だそうです。でも最近は魔物被害のせいで使われていないらしく、わだちに草が生えてしまってる。結構使われてないのかも。結構馬車とか通っていたら道って残っていくものだしね。

今日は草原を横断する街道の安全を確保しに来ています！

街から結構離れた場所だ。遠くに森が見えるよ。森とかはいったことないんですが、どんななんでしょうかっ。今度勇者様に聞いてみよう。なんとなく野外活動的なものは、勇者様のほうが知ってそうな気がする。……会話になるかどうかは別としてだけどね！　尋問は心が折れます。主に私の。

勇者様達はあねさんたちと掃討作戦とか言って、さきほど出かけて行きました。

勇者様達が魔物を駆除した後、お枝様による大規模浄化を行うという段取りになっています。今日も元気にお枝様運搬員ですよ！

それにしても神官様の手がただれるほどって、本当にお枝様は危険物なんだなあ。

先頭には私は確実にお荷物なため、ここでお留守番です。騎士の

人が数人いるから、一人ぼっちではないから大丈夫！

一応、討ち洩らした魔物が街のほうにいったら危険なため、ここで待機しているんだって。といっても私を置いていく程度には安全だそうです。まさかの私が基準とは！　私参加は結構安全、私放置は少し危ない、とかお二人の中で段階わけがあるんだろうか。一度聞いてみたいですね！

皆さんが見張りや休憩の用意をしているので、お手伝いをしようと近寄っていったんですが、ことごとく断られました。やんわりと「お気遣いなく」とか言われた日には、すごすごと引き下がるしかありません。小市民は押しが弱いんです。そしてすることがないので本を開いているのだった。早速勉強をしようと思っていたんですがっ。

でも教科書がまさかの絵本だとは思いませんでしたとも。ええ。

お日様がかなりご機嫌に輝いているため、屋外で読んだら本の退色が心配なんだけど。

本といえば聞こえがいいんですが、これ……どう見ても子供向けの絵本ですよ！

絵がたくさんあって綺麗ですねっ。うわあ、ページの八割が綺麗な絵ですね！　キラキラしてますねっ。カラフルな色使いですねっ。

……とても字が大きくて見やすいですねっ。

私はページをめくりながら考えましたよ。まさか、この絵本には他に何か深い意味があるんだろうか、と。隠された暗号でもあるのかっ。どれだけ見ても分からなかった。逆さから見ても分かりませんでした！　後は神官様に聞くしかない。

多分深読みする必要性は全く無く、神官様が本気で私の学力を絵本レベルだって思っているのではないだろうか。その説が一番有力だよねっ。涙があふれそうです。

絵本をめくりながら、改めて神話の流れを見てみました！
こっちが一般流通の神話なんですね。やっと覚えました！　これで私もぼろは出さない！
町民は一般教養を獲得しました～ぱららったらーん。
そういえば昔どこかの教会でこの絵本見た覚えがある。割とポピュラーなんだろうか。本は高価なもの。一冊一冊写本をして増やしているからね！　星術のおかげで本とかを保存するのはさほど難しいものではなくなっているそうだけれど、基本紙はやわですから。伝書とかいう紙も見た！　あれ、水気にも強くて多少の雨でも痛まない紙なんだって。すごいなあ。いつの間にやら世間は便利になったようです。

私は絵本を初めに戻して再再度、ページを隅まで覚えてみる。……なんだか悲しくなってきた。この年になって絵本。絵本。
あー。癒されたい。呟きながら、後ろの陸馬さんに擦り寄ります。陸馬さんのもふもふな毛は、私を傷ついた心ごと優しくもふんと受け止めてくれる。たとえ陸馬さん自身が嫌がろうとも！
ほんと、癒されます。陸馬さんは相変わらず黄緑でもふもふです。派手だけどかわいいよ。あったかくてふわふわな天国ですよ。何でこんなになめらかな手触りなんだろう。なんだか負けたようで悔しいです。おなかのお肉だったら、同じぐらいふわふわしている気がする。でもそんな部位で対抗はしたくないけどね！
ひとしきり陸馬さんにほお擦りすると、子供向けの本を渡された私のささくれた心が癒された。陸馬さんは本日三度目のお食事中なので、大人しく草をもぐもぐしている。草に集中しているから、私を気にしていないようです。それでいいのか、野性。でも癒されるから許してしまいます。何よりもあったかいしね！
ちょっと頭が冷静になってきた。
神官様……私、馬鹿ですがここまでじゃないですよ？　めくりながらちょっと遠い目になりました。さすがに五度読んだら飽きたし

覚えたよ。絵本はもういいから丁寧にしまっとこう。

私はかわりに荷物からもう一冊の小説を取り出しました。

あねさんに、希望する品物がないか聞かれたとき、本をリクエストしたのです！　神官様の許可は貰ったよ！　知らないひとから物をみだりに受け取ってはいけないことは、ありがたいお説教でとくとくと教えていただきました。ので先に神官様の許可を貰ったのだ。ちょっとは私、進化しています！

適当に何か安いのをとお願いしたら、つぶらな瞳のお兄さんがどこからか見つけてきてくれた本です。

まさかのお兄さんチョイス。表紙は可愛らしい感じで、内容は恋愛小説っぽいなにかでした。

これは貸し本か買った本なのか、はたまた誰かに借りたのかが謎です。どちらにしても丁寧に扱うけど。

なんとも微妙な気持ちになる本でした。

だって内容が『貴族の令嬢と執事が駆け落ちしたかと思ったら、唐突に執事が剣闘士に転職して隣国の王子と決闘したり、国の名誉を背負う戦いになったり、地下帝国へお宝を探しに主人公が旅立ったり、だまされて借金が増えたり、貴族の令嬢の浮気疑惑があったり、執事にロリコン疑惑があったり』する、スリリングな話ですよ。誰が結局主人公なの？　と首を捻りながら推理して読む小説でした。一ページ先の展開が全く読めません！　だって一ページめくったら、さっきの新ヒロインが不治の病にかかってたりするし。なんでだ。私のツッコミが唸りますよ。

しかも途中濃厚な大人のシーンがあるんです。が、なんとなくこれは人がいるところでは読みにくい部分ですよね！　ちらっと見えてしまって反射的に本を閉じました。ちょっと覗きたい気持ちもあるんですが、そっと飛ばしています。見るだけで顔が赤くなりますよ！　なんかそういったページって、凄く見ることにも背徳感があるというか、つまり恥ずかしくないですか！　私は恥ずかしいです！　実は今一人ではなく、周りに人がいるから、この恥ずかしい部

分が読めません。
とりあえずお兄さんは、入手時に中身を見ていないことは確実ですね！　さすがお兄さん、予想の行動を裏切らない！　と思ったけれども、私を恥ずかしがらせるためにこの内容を選んだとしたら、私がお兄さんを見くびっていたことになります。
ともかく、暇を潰すために私は大人しく本を開きました。残りページ数が少ない。あとちょっとで終わっちゃうなあ。
私は完全におでかけピクニックモードです。緊張感はありません。
「ポー」
あ、おやつの時間だ。陸馬さん時計は正確ですからね！　私は懐からごそごそと硬いクッキーを取り出しかじります。くつろぎまくっている自分の適応力が怖い。ゴリゴリクッキーを噛み砕きながら、本に没頭しました。

神子、お勉強をする（後書き）

１１／４　２２：５０　内容差し替えました。流れは変わっていません。

神子、うろうろする

それからほどなく本を読み終えました。

私は溜息を着いて本を閉じた。まさか最後で執事の妹の旦那がこんなことになるとは！　ちょっと感動しましたよ！　うるっときた！

終わりよければ全てよし、という気持ちになりぼーっとしました。明るいところで本を読んじゃったから、ちょっと目がしぱしぱするけど仕方が無いよね。自業自得です。

さっきから陸馬さんが二回鳴いていたから、そこそこの時間は経ってると思う。でも皆さんが帰ってこない。……ちょっと心配になってきた。本を仕舞って、陸馬さんに抱きついてみる。こうしたら結構落ち着きます。陸馬さんが首を振った。ちょっといやそうです。

騎士の人たちは交替で見張りに立っているようです。まあ基本だだっ広い野原だから、何かが近づいてきたらすぐ分かると思うけどね！

それにしても、だんだん本気ですることがなくなってきた！　もうちょっと内職的なものでも持ってくればよかった。まさかの暇ですよ。でも旅する上では編み物とか正直邪魔だし。なんというか、こう、生産的なことがしたいですよね！　だって今なんて、陸馬さんにもふもふするぐらいしかしていません。

てなぐさみに陸馬さんの毛をみつあみにしてみる。太すぎるからこれは意外と難しいな。でもその難しさが私を没頭させる……！

みつあみといえば、この間、私が自分の髪をみつあみにしていたら不思議そうに勇者様が見ていました。どうやらみつあみするのが物珍しかったらしい。そうだよね、大体みんな身支度してから外に出るから、作成中を見る事は無いよね！　やり方を解説したら縄の作り方とは違うんだなと納得していた。縄とは……違うと思うよ！

ためしに編んでみますかと髪を差し出したら、丁重に断られた。神

官様は微妙な顔でこのやり取りを見ていました。ツッコミたいなら、いつでもつっこんでくれればいいです。私はいつでもツッコミ待ちです。

私の周囲の陸馬さんの毛がみつあみから編みこみに変わってきた頃、遠くにあねさんたちが見えました。

あねさん達が乗っているのも陸馬さんだけど、ちょっと種類が違うんだって。あんまりもふもふしていなくて可愛くないです。可愛さよりスマートを重視した感じですよ。走るのが早いのを掛け合わせて出来た種類らしい。カラフルなのは相変わらずだけどね！　特にあねさんのは真っ赤でした。余りの赤さに私のほうがビビリました。

数十頭の陸馬さんの群れがだんだん減速します。砂埃が凄いですね！

魔物の掃討作戦とか言うの、終わったのかな。何人かが降りてこちらに向かってくるようです。待機していた皆さんも荷物をまとめている様子。私はさっき本を片付けたから、する事は無いよ！

「神子様」

あねさんが私の前に立ちました。すっと膝を折る姿がまさに騎士！

ノーブルな匂いがするな！　私とは余り関係ない世界の匂いですよ。素晴らしい動きを観賞していたところ、

「お二人がお呼びです。陸馬に乗っていらっしゃってくださいとのことです。途中までお送りいたします」

と仰いました。はい、仕事ですね！　了解いたしました！　私は立ち上がって、陸馬さんの手綱を引く。陸馬さんはよっこらしょといった感じで立ち上がってくれました。最近はちょっと言うことを聞いてくれますよ！　餌やり係ということが効いているようです。やっぱり食べ物の力は偉大だよね。改めて食べ物への尊敬の念を深めましたっ。

陸馬さんに乗ろうと手をかけると、目の端に立ち上がったあねさ

んの顔が目に入りました。あねさんは一体何をそんな不思議そうな顔をしているの。

んー、とその視線を辿ると。

あっ。

陸馬さんの毛が見事に編みこみになってるところ、かなり目立ちますねっ。私は慌てて毛を解きました。陸馬さんごめんねっ、ところどころ毛がウエーブになりました。まさになみなみ。豪華なふわふわ感ではなく、ちょっとよれた毛糸感が出てしまった。明らかにやり過ぎたね！

私が毛を解き終える頃には、騎士の皆さんの用意も済んだようです。これは結構慣れるまで難しかったけど、だんだん枝の持ち方が上達してきました！　日常では余り使わないスキルだけどね……。

首を軽く叩いて促せば、陸馬さんがぽっこぽっこ歩き始めます。あねさんも再び赤い陸馬さんに乗って並走してくれます。走るといっても、のんびりしかいけません。あんまり疾走はしたことないから、走らないでくださいね！　確実に私は落ちます。

「瘴気がある辺りまでご一緒するように申し付かっております」

あねさんが丁寧に言い添える。了解ですあねさん！

「じゃあ、瘴気が見えたらお別れですね」

と私が言うと、あねさんは不思議そうな顔をされました。なんだろう？　首を傾げてみてみると、あねさんは申し訳無さそうに、

「瘴気は見えないと思うのですが」

といいました。あっ、そういえば私にしか見えないのか。また私は不審なことを言ってると思われた！　私が不審なのはいつものことですがっ。

「しょ、瘴気っぽい何かが感じられたらお伝えします！」

私は慌てて言いなおしました。あねさんはそれ以上は追及しません

でした。納得してくれたのか違うのか。神子的な何かでビビットくると思ってくだされば……はい。そう考えたら神子の肩書きは便利ですねっ。謎パワーがあっても、神子だからで通じそうな気がする！　謎パワーが無いのが申し訳ないところですが。

　しばらく行くと、草原の真ん中でふわふわとピンクが漂うところが見えてきた。このあたりで終わりかな？

「あの！」

私はあねさんに声を掛け、陸馬さんを止めた。あねさんは少しだけ通り過ぎ、馬首を回らせて私と逆向きにしてから停止する。

「このあたりで大丈夫です！」

「そう……ですか？」

あねさんは不思議そうに周囲をみる。あねさんにはたぶん変哲も無い景色だ。でも私にはむんむん漂うピンクが見えているんだよね。余り息をしたくないです！　でもピンクが身体に悪いというなら、あねさんも心配です。

「大丈夫です！　私、たぶん枝のせいだと思うんですが魔物に襲われませんし」

あねさんが真剣な顔で私を見る。

「なら、ここまでで。お見送りはしますね」

わーい！　私はあねさんと別れて真っ直ぐ進みました。たぶん瘴気が濃いほうが目的地だと思うんだけど。たぶん。

……うん、さすがに迷わないよね？

神子、ちょっと頑張るかもしれない

とりあえず見えている危険に対して対策をとるよ！
荷物から薄手のストールを出して、首と顔の下半分にぐるぐる巻きました。フフフ、人気の無い草原だからできるワザです！　いささか不審人物の風体になっています。しかもちょっと暑いけど！
まあピンクを呼吸すると思えば、なんのこれしきですよ。あねさんたちから十分離れているから、この珍妙な格好を出来るわけです。勇者様達に見られる前には、除けたいところだけどっ。一応、恥じらいはありますから！
こっちの方向だっていってたよね、と考えながら、陸馬さんの手綱を軽く握ります。これがただの天気がいい日だったらしあわせなのにな。

さて、徐々にピンクムードが盛り上がってきました！　おおっと結構濃いです。家三件ぐらい先がぼんやり見えなくなっているレベル。風がないからか、ゆったりと堆積していますよ。右を向いても！　左を向いても！　上を向いても！　視界がピンクです。どうすれば。
これは……今更大変なことに気付きました！
私は瘴気が見えます。
濃ければ濃いほど、色で見えます。
だから、濃かったら周りの風景が見えませんでしたあああ！
大失敗だねっ。本当にこっちの方向であってるんだろうか。ちょっとあやしいです！
こんなに見通しがいい草原で迷子なんて、笑えない状況です。普通はかなり先まで見えるよね。実際、あねさん達が送ってくれたのもかなり近くまでなんだということは分かる。

問題は、私がお二人がいるはずの場所が見えないということ！
あねさんが見ていた方向はこっちだよね？　とすると、あの時点であねさんにはお二人が見えていたんだろうか。
とにかく、前進あるのみ！
崖とかになったらさすがに陸馬さんが反応するだろう、と考えて落ち着こうとしていますよ。深呼吸したいのに空気が呼吸できないこのもどかしさ！
瘴気が色じゃなくて匂いだったら更に強烈なんだろうなあ。その場合、みんなが匂いを感じないのに私だけ匂いを感じていたら凄く疑われそうだ。あの子一人で臭いっていってるけど、実はあの子臭いんじゃね疑惑とかさ。私涙目になりますよ。ある意味色でよかったのかどうなのか。実際、私の目に色で見えても別にいいことがありません。お枝様で払うことが出来るけど、一体どんな仕組みなんだろう。
見えないけれど、神官様や勇者様はあっさり瘴気があるって言うことを受け入れてくれたよね。懐が深いのか、神官様だったら何か他の情報を持っているかなんだろうな！　それにしても今更気になるってどれだけ普段ボケてるんでしょう、私。……余り深く考えない！　面倒なことは明日に丸無げ！　かなりの得意技です。
だんだん歩いていると眠気が襲ってきました。さっき、待っているあいだに寝ちゃったら駄目って我慢していたから今、やつらがやってきていますよ！　睡魔と言う恐るべき敵がっ。敵は外じゃない、自分の中にいたのだあああ！　自分の体と言う裏切り者が手引きするのですよ……。
私は欠伸をかみ殺しながら、なんとか眠らずに陸馬さんの背に揺られます。ぽくぽく陸馬さんが歩くリズムがまた単調で眠いんですが！　葛藤しながらもぼんやりと鞍の上で過ごしていると、
「何してるんですか、通り過ぎていますよ」
と斜め後方に神官様の声がしました！
……はっ。

眠気が引きました！　私はキョロキョロと周りを見回します。相変わらず視界は悪い。声はすれども姿はなし。

えーと、声が聞こえたのはこっちだ！

慌てて陸馬さんの馬首を回らせながら、ストールを外します。お枝様を持ったままだから外しにくい。もごもごしていると、今度は勇者様の声が聞こえてきた。

「……見えていないのか？」

ようやく近づけたのか、お二人を発見ですよ！　嬉しくなって手を振ってみました。わーい発見！　さすがに振り返してはくれませんでしたが。ようやく到着です。やっと眠気がなくなりました。最近、眠くて仕方が無いです。はっ、神子稼業でストレスが増えているのかっ。

「見えてないです！　結構ピンクですよ」

私は陸馬さんの背から降りながら報告する。神官様が難しい顔をして考え込んでいる。

私はとりあえず、初めから決まっていたお役目を果たしますよ！

私と言うよりはお枝様の出番です！　お枝様に神官様が封印代わりにまきつけていた布を外します。

それにしてもお枝様、こんな扱いをしても一葉たりとも損なわれてません。不思議な透明な葉っぱもみずみずしいまま。折りたてほやほやと同じ状態ですよ！　水をあげなきゃいけないかなと思って、たらいにつけたこともあります。が、神官様に何も要りませんよとツッコミをいただいたっけ。星都の思い出です。

ずっとみずみずしいって、世界の乙女必見の機能ですよね。一度きちんと調べてみたほうがいいんではと思いますよ。これで世界の何割かの人の悩みが解消する……かもしれない。

さて、お仕事の時間です！　このために私は養っていただいているようなものですから！

お枝様を両手で捧げ持ち、祈りを捧げる。ピンクがなくなります

ように。

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）
Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／
（あるべき姿に。）」

清浄な音が響き、周囲に浄化の光が波紋のように広がった。目を傷つけない不思議な光です。残像が残らないのですよ。世界には不思議なことがいろいろあるんですねっ。

消えていくピンクを眺めていると、頭の中にザラっとした音が流れました。

世界が遠くなる感覚。

目を開いているのに、ここに居るはずの「私」の意識がすっと遠ざかるような、なんともいえない感覚だった。

――……Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８、容量限界値に近づいています。飽和する前に……。

雑音ばかりの音の中、意味があるのかないのか分からない音の連なりが頭に流れる。

意識の断絶は、唐突に訪れて、無くなった。

な、な、なんだったんだろう！　不思議体験は遠慮したいですよ！

思わずキョロキョロしますが、周囲の瘴気は綺麗さっぱり消えていて、風景も良く見えます。おかしいところは、何もない。お二人が不思議そうな顔をしています。

「どうした？」
「今……何か聞こえました？」
恐る恐る問いかけると、勇者様は、
「何も」
と仰います。
とうとう、空耳が聞こえるようになったんでしょうかあああ。

神子、さっぱり記憶は無い

さっきまでのざわざわした音はさっぱり消えうせているから、空耳が聞こえた証明も出来ない。なんだかおかしい表現だけど、ものすごく舌触りの悪いものを食べた時みたいな気持ちです。ざらざらしてて後に尾を引くシツコイ感じ。味覚と音は違うけれど、一番それがしっくりくるたとえです。

周囲をグルグル見回しても、音の源は全く見つかりません。そもそも、私達以外人がいないから声が聞こえるというのもおかしな話だしね。

さわやかな草原がずっと続いてます。さっきまでピンクの靄で風景が全く分からなかった私にはそれがなんとも新鮮に感じる。とりあえず崖や大きな岩も無かったみたいでよかった！　陸馬さん任せだったけど、さすがに回りが見えない中を進むのは怖かったよ！

それにしても空耳はボケの証拠じゃないですよねっ。だんだん心配になってきた。とりあえず、お二人が私に嘘をつく必要が無いから信じているけれど。何も聞こえなかった。うんそれで結論にしよう！

とりあえず今回の出番は終わりましたっ。何という軽作業。

またお枝様に布を巻きなおす。ちゃんと片づけまでが一連の作業なんだ。

何度かやっていることなので、私も慣れたものです。くるくる布を巻きつけるワザは、一流になったと思う！　極めたよ！　何か物を包む時に、このワザを使いたいものです。

とりあえずお枝様を上から下まで布で包んで完成。どこもむき出しになってないよね。うん、ぱっと見、不思議なものになります。ちょっとした不審物だけど、そういえばとがめられたことがないな。意外と注目されていないのかな？　同行者は派手な方達ばかりです

けどね！　もしかしてそっちに目が行くから？　庶民派な私の容姿に万歳です。

布で不思議なことになったお枝様を、神官様のほうに差し出す。この状態で神官様に術をかけて貰うんだ。神官様は手袋をしたままの手を触れない程度の距離でかざし、新星術を使う。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，Ｆｎｎ，Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８　Ｎ　Ｎｒｙｋ　Ｗ　Ｆｊｒ，　Ｋｎｎｋｋｋ　Ｓｋｓ，Ｋｋｋ　Ｎ　Ｕｃｈｇｗ　Ｈ　Ｔｊｋｍｒ，Ｔｓｈ　Ｈｎ　Ｎｎｓｈｋ　Ｓｇ，Ｓｈｒｙ　Ｈ　Ｋｋｋｈｋ　Ｍｄ，　Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」

ふわりとお枝様を包む空気が変わった気がするけど、具体的な変化は分からない。

どうやら私に見えるのは瘴気だけみたい。なんでだろう？　お枝様の力も人間によくないって聞いたのになあ。人間の身体に悪いものは全部見えたらいいのにねっ。

ちょっと想像してみる。

お枝様から立ち上る紫の靄。あー、想像の時点でこれは駄目だな。紫色オーラとか出てたら持つのが怖くて、近づくだけで涙目になっちゃうよね。うん、やっぱり見えなくていいです。このままでよし。

神官様が軽く肩を回している。お疲れ様でした！

お二人の様子は今朝別れたときと変わってないように見える。

「お二人とも、怪我とかは大丈夫なんですか？」

神官様はまだ手袋をしているけど、結局あれは治ったのかな？

たまに心配です。ぱっと見た目は怪我はないと思うけど。

「大丈夫ですよ」

相変わらずさらりと流す神官様。信じるしかないのにいまいち信用が出来ないってどうなんでしょうねっ。諦めつつありますがっ。

勇者様は聞いてもいつもと同じ答えが返ってくるから凝視してみるよ。勇者様は怪我はありませんかっ。私の凝視の意味が分からないのか、首を傾げる勇者様。とりあえず、元気そうです。勇者様は後ろめたいことがあると視線を外すし。よし。私は一人納得して、お枝様を抱えなおしました。お枝様運搬係だから、これがいかに邪魔だとしてもちゃんと持たなきゃいけない。

布でくるまれた物体を見ながら、私は浮かんだ疑問を口に出した。

「いつも具体的にはどんな術をかけているんですか？」

神官様の新星術は意味が聞こえないから、何をしているか分からないんだよね。随分前に聞いたときに実はさらっと流しちゃいました。すみません！　神官様は簡単な言葉で教えてくださいました。ありがたいことです！

「星原樹の発散している力を、この布を簡易結界として内側に封じ込めています。あとは周りの人が余り注意をしないようにする術ですね、注意を引いて結界を崩されると元も子もありませんから」

おおー。なんだか凄いワザを使っていらっしゃったんですね！

思わずじっくりとお枝様に巻いている布を眺めます。

街へ帰りますよと促されたので、また陸馬さんに私はよじ昇る。騎士さんみたいにヒラリフワッと乗りたいものです。あこがれるよねっ。まねするのは無理だけど。

首をかるく叩くと、陸馬さんがぽくぽく歩き出します。そういえば、お二人が陸馬さんに乗っているところを見たことがない。運動神経は確実にお二人のほうがいいと思うから乗れないはずはないんだけど。当たり前のように横をのんびり歩いています。

なんとなく、帰り道ってのんびりしている気持ちになる。

ずり落ちそうになるお枝様を抱えなおしながら、私は常日頃思っていたことを口に出した。

「新星術って、何がどうなっているか分からないんですよね」

神官様はあっさりと仰います。

「勉強をすれば、分かるようになりますよ」

ですよねー。なんでも勉強ですよね。
「旧星術はちゃんと意味が分かるんですけど。新星術も同じだったらいいのになあって思うんです」
神官様は少し首を傾げ、少し考える仕草をした。そして、おもむろに、
「では、Ｋ０ｒ＊ｍ０　Ｋｖｖｖｋ０＊ｒｗｗ．（これも聞こえる）、と？」
と質問を飛ばしてくる。共通語と混じったら妙なカタコトっぽいんですが！　ツッコミたいのをぐっと我慢して、
「あ、はい。ちゃんと聞こえるんですよ。なのに新星術は分からないんですよね」
とお返事して、思わず溜息。結局これも勉強かぁ。勉強をする内容が増えつつありますよ！　これは困った！　私の頭の中身、そこまで詰め込めると思えないんですが。
　がっくりしている私に、神官様は妙に硬い声で、
「では、星原樹を使うときの星語も、理解したうえで言っているんですか？」
と仰います。あれ、何でこめかみグリグリされているんですか。それ癖になっちゃいますよ！
「はい！　それはちゃんと勇者様に聞いたのと同じように謳ってます！」
　ただ繰り返してるといっても、ちゃんと同じようになるように気をつけていっているから大丈夫！　耳に聞こえたとおりに呪文を謳ってますよ。
「では、あの時使っている言葉の意味を、共通語で言ってみてください」
む。お疑いですか？　ちゃんと意味もそろえています。私は問われるままに答えます。
「あるべきものを、あるべき姿に、です！」
ちゃんと答えたけれど、神官様、採点はどうですかっ。じっと見詰

めますが、神官様は考えに没頭している様子。え、違っていたの？
たらっと汗がにじむ。
「あっている」
私の挙動不審ッぷりを見かねたのか勇者様が採点してくださいました。ありがとうございます！　間違って無くてよかった！　勇者様はそのまま珍しく長文を続けました。逆に私がビックリした。
「俺は選定を受けてから漠然と意味が分かるようになった。お前は？」
「へ？　はい、ん？　何時から……うーん……」
何時から分かるようになったか、正直覚えがありません！

神子、星語について考える

「覚えてません……」

隠すことでもないから、ありのままに伝えました。勇者様も昔は意味がわからなかったのか。なら、私もそうだと思うんだけどなあ。今まで、皆、意味がわかるんだって思っていたぐらいだし。

いつから、というのを思い出そうと頑張ってみる。

初めて星術を見たのは神官様の転移呪文だっけ。

あのあとは、なんかあったかな。さすが私！　記憶が曖昧です。日記でも書いておくべき？　最近波乱人生だと思うから、面白日記になりそうです。庶民波乱万丈人生日記……いや、もう題からして駄目な雰囲気が漂っている。この件は却下だ！

ともかく、記憶を辿る続きを頑張ってみる。

んー、勇者様が話していた旧星語は分かっていたから、バスタブ……もとい星櫃に手を突っ込んで選定を受けた後は確実に分かっていたなあ。私に記憶力を求めるとは、勇者様酷いです！　これまでの私を見ていて記憶が無いだろうなとか思ってくれなかったんですかあああ。

「では、そうしようと思えば旧星語で話せるんですか？」

神官様が不意に話題に復帰しました。え、そうなのかな。しようと思ったことが無いんですがっ。

話せるのかな？　むむむ。でも旧星語って、呪文に使うぐらいの言葉ですよね？　やろうと思ったこともないです！　そもそも星術自体を使おうという発想が無いことにやっと気がついたよ！

「日常会話に使っていて、韻律を正しく言っちゃったらいろいろ危ないんじゃないですか？」

そういえば、昔はこれを話し言葉にしちゃっていたんだっけ。第一期のことを思い出す。楽園に住んでいる人たちはこの言葉を話して

いた。共通語は無かったんだよね。あの人たちはどうしていたんだろう。白さん！　今こそ出番ですよ！　おじいちゃんの知識を披露するときです！

　もしかして、話し言葉と呪文の区別があるんだろうか？

「本来、旧星語は話し言葉に近い言語ですからね。話すことは可能です。話すだけで、謳わなければ効果は顕現しません」

「ああ、そうですね、謳わなければ……」

といったところで、私は首を捻った。謳うのとか、本当にどこで知ったんだっけ？　街にいる頃なんて、星術自体になじみが無かったのに。

「それで初めの話に戻しますが、新星術の意味は分からないんですよね？」

神官様の問いに、私は頷いた。

「はい。さっぱりです！　陸馬さんの言っていることと同じ程度にしか分かりません！」

なんとなくお腹がすいているんだろうなーとか、眠いんだろうなーとか行動で読み取ることが出来るのと同じぐらいしか分からないよ。結局神官様の新星術もそういった推理でしか判らない。あらわれた効果でなんとなく判る、ぐらいです。陸馬さんの気持ちは知ってみたいんですが。構い過ぎたときにちょっとウザイとか考えてませんかっ。どうなんですかっ。

　私が悶々としている横で、神官様は今度は勇者様に問いかけた。

「新星術の意味はわかりますか？」

「全く」

勇者様は相変わらずの単語会話です。さっきの長文が珍しいぐらいだもんね。いつも通りなので、神官様も全く気にした様子がない。私ももう慣れちゃった。慣れって恐ろしいですねっ。

「新星術は、始原（しろ）の勇者以降に編纂されたと言います」

神官様は考えながらそう言い出しました。またあの人ですか。いろんなところに顔を出す人ですよね。徘徊歴は伊達じゃないのかっ。

「へんさん……って言うことは、誰かが今の形にまとめたんですか？」

「そうです。旧星術が話し言葉に近いせいで、上手く発動できない時があるそうです。代わりに法則さえ覚えれば簡単な代用品として作られた、というのが通説です」

「じゃあ、勉強したら私でも使えるんですか？」

簡単っていう言葉に食いつきました！　簡単なら、なんとかなるかも？　神官様はふっと笑いました。

「そう、勉強をすれば使えますよ」

今の意味深な笑顔が気になります！

「とりあえず、星の配置を覚えていただいてから解説しますね。三日あれば十分でしょう」

……星の配置って、とんでもない量が無かったですか先生ッ！　確か八千百四十六だったはず！　語呂合わせで覚えてる。はいよろです！　這いよろう星、と語呂合わせしました。これだけの数、三日どころか一ヶ月ほどいただいても厳しいというか無理っぽいのですが。

うん、無理なのはわかりました。理解できました。

「あ、やっぱり、いいです」

私は遠い目をしながら丁重にお断り申し上げました。そんな無茶はしたら駄目だよ！

「残念です」

神官様は残念なんだかどうなんだかわからない口調で仰います。

「まあ、聞き流していただいていいんですが」

と神官様はひとりごとのように話しを始めた。

「現在、新星術は旧星術の進化系だと言われています。簡単に使用できるように様式を整えたものだと」

きょとんとする私に、神官様はかなり話を砕いてくださいました。

「たとえば、一つの料理を作るのに、かなり細かいレシピを用意するか、適当に作るかの違いですね。前者が新星術です。誰が作って

も大体同じものが出来る。同じような結果が出るんです。ですが後者は、経験や個人に頼ります。つまり、旧星術はとんでもなくよいものが出来る場合もあるけれども大失敗する時もある」

おお、判りやすい！　料理の喩えというのがまたわかりやすいです！

「なら、新星術のほうがお得な気がします！」

誰でも簡単レシピがあったほうが間違いが少ないしね！　誰でも同じのが作れるなら、いいレシピがあればいい料理が作れるってことで解決するし！　ああ、だから新星術が広がったんですね。やっと分かりました。ビックリ箱より確実さをとるならそっちだよね。

「確かに、そういう考え方もあります。でも、私はこうも思うんですよ」

神官様は遠い目をしながら、最後に付け加えました。

「もしかすると、人間は旧星術という危険で大きな力を忘れるように、既に仕組まれているのかもしれない。現在、神殿でも新星術しか知らない神官ばかりです。教育課程にも旧星術の時間はすでにありません。教える方も旧星術は面倒なんです。いつかは旧星術は忘れ去られる時が来るのでしょうね」

それを聴いた瞬間、白さんの言葉を思い出しました。

――この四期は初めから人々に枷をかけた。

あの時は、勇者様の話をしていた。

けれどそれ以外もあったとか？　……まさかね。でも疑わしい。しかもあの人が現れた時代に編纂されたとか、どう考えても不審に見えますから！　ふと思いついたことは、ただの勘だけどなんとなくそうだろうなっていう確信がある。旧星術を人に忘れさせようとしていることに、白さんは確実に関係しているだろう。

でも、実際人の使った星術で三回世界が滅びたわけで。そうすると旧星術って忘れてもいいことなのかもしれない。難しいなあ。

「神官様は、忘れた方がいいと思いますか？」
「……もし、人間がまだ未熟なら、忘れたほうがいいのかもしれませんね。子供に刃物を持たせるようなものです」
大惨事になっちゃったら危ないですしね！
それにしても、そもそもなんで人間が星語を使えるようになったんだろう？
鳥とかでも、人間の言葉を教えたらそれっぽくなく種類がいるって聞いたことがある。なんで人間以外は星語を使えないんだろうか。
不思議だなあ。

◆彼女、世界の外から

周囲は闇だ。
ただひたすら、暗い。
手を伸ばせば、その指先が見えなくなるかもしれない。そう思わせるほど深く、不透明な闇だった。
でも怖くはない。これは単に瞼の裏の闇なのだから、朝が来れば薄れることを知っている。
それに、完全な闇ではない。明りはある。
足元には輝く破片たち。
ガラスのようなそれは、ぼんやりと光を放っている。足元だけかなり明るい。ただし、その光は立っていると顔まで来る事はない。せいぜい膝下ぐらいまで。だから、私は座っている。こうすれば手元が良く見えるから。
キラキラとした光源は、私の周囲をぐるりと囲むように落ち、輝きを放っている。暗闇の中の浮島のようだ。

パキン、と乾いた音がした。

静寂の中、その音は大きく闇に響き、私に異常を悟らせる。
上だ。
私は音の源を探りながら上を見上げる。
闇に覆われた天蓋、そこには一筋白い亀裂が走っていた。まるで慌てて爪で引っかいたような細い裂け目だ。それは確かに亀裂で、外からここへ光の粉が侵入してくるのだ。
私の遥かに上方から、キラキラとしたものが闇の中に降りそそぐ。それはまるで砂金が落ちてきたように輝きながらこちらへ落ちて来る。樹の花が散るようにはらはらと降り注ぐ光は幻想的だった。遠

くからこの光景を見る人がいれば、砂時計だ、と例えるかもしれない。

だが、私にとってはこの状況はいただけない。私は渋い顔をして上方を見上げる。

光は徐々に降り積もり、私の頭や肩にも当たり、ふわりと溶ける。溶けなかった欠片は、そのまま足元に振りそそいだ。

一時的にここが明るくなるが、ありがたくはない。

確かに綺麗な光だとは思う。ただし、見るだけであれば、の話だ。綺麗だったらいいっていうものではない。これを私は仕分けし、掃除をしなければならないのだ。これからの作業と沸いて出た疲労感に、私は重く溜息をついた。

量がとにかく問題だ。それにしても、ふさいだはずの亀裂がなぜまた開いているのか。

とりあえず出来るところからはじめるしかない。

腕まくりをして、足元の破片を掻き分ける。破片同士がこすれ、星が笑うような音する。見た目こそはガラスのようでも、その光る欠片は私の手を傷つける事はない。

しなければいけない仕事は、これが降れば降るほど増えるのだ。どうせなら少しでも気分的に明るくなりたいと、歌を口ずさみながら、破片を掻き分ける。

ぱっと思いついたのはいつも謳っている子守唄だ。

しかし、やけくそなせいでテンポが速く大声になる。

どうせ誰も聞いていないのだから構わないだろう。

「ｎ＊ｍｗｗｒ＊ｎ＊ｍｗｗｒ＊　ｙｗｗｍ＊ｍｖｖｖｚｗｗｎ＊ｍｗｗｒ＊．／

（眠れ眠れ　夢見ず眠れ）

ｋｙ０ｗｗｈｘｘｘ０ｔｓｗｗｋｘｘｘｒ＊　ｍ０ｗｗｎ＊ｍｗｗｒ＊．／

（今日はお疲れ　もう眠れ）

ｚ＊ｎｎｂｗｗｗｘｘｘｓｗｗｒ＊ｔ＊　０ｙｘｘｘｓｗｗｍｖ
ｖｖｎｘｘｘｓｘｘｘｘｖｖｖ．／」
（全部忘れて　おやすみなさい）

あまりの量に自棄になりつつ歌を歌いながら、手にした破片をすかしてみる。残像が目に映りこむ。

夜闇の物語だ。

ああ、これは違う。横へぽいっと投げ捨てる。小さな鈴のような音を立てながら、投げ捨てたそれは床に堆積した。投げたものは、ちょっとした山のようになっている。既にこれだけは選別をしたのだ。よくやったと自分を誉めてやりたい。

今、座っている周囲には、まだまだガラスの破片に似た欠片が散らばっている。ガラスなら掃いたりまとめたりして一気に片付ければよいものだけれども、これはホウキで掃いてしまっていいものではないから困っている。そもそも、ここにホウキがないのが欠点だけれど。

なんとなく歌っている方が作業効率がいい気がして、調子に乗って大声で歌う。リズムに合わせて身体を揺らす。ちょっと楽しくなってきた。

「ｘｘｘｓｈｖｖｖｔｘｘｘｈｘｘｘｋｖｖｖｂ０ｗｗｎｖｖｖｘ
ｘｆｗｗｒ＊ｔ＊ｒｗｗ．／
（明日は希望にあふれてる）
ｎｘｘｘｋｗｗｓｈｖｖｖｔｘｘｘｋｖｖｖｍ０ｃｈｖｖｖｍ０
ｍ０ｔ０ｄ００ｒｖｖｖ．／」
（なくした気持ちも　元通り）
ｘｘｘｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖｍ０ｎ０ｈｘｘｘ　ｘｘｘｒｗｗｂ＊
ｋｖｖｖｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘｎｖｖｖ．／」
（あるべきものは　あるべき姿に）

希望を歌いながら、破片を覗き込む。

ああ、二度目の滅びの風景だ。凄惨な光景に、胸の奥が重くなる。ともかく、これは違う。私が投げ捨てれば、またハズレの山に欠片が追加される。

手近のもう一つを覗き込む。

お。これは当たり。下のものと混じらないように、無くさないように、膝の上にそっと置いた。

歌いながらまた一つ覗き込む。これも違う。もう投げるばっかりで、手が痛くなりそうだ。

「ｍ０ｗｗｖｖｖｃｈｖｖｖｄ０　ｓｘｘｘｖｖｖｖｓｈ０ｋｘｘｘｒｘｘｘ．／

（もう一度　最初から）

ｈｘｘｘｊｖｖｖｍｘｘｘｒｖｖｖｎ００ｗｘｘｘｒｖｖｖ．／

（始まりの終わり）

０ｗｘｘｘｒｖｖｖｎ０ｈｘｘｘｊｖｖｖｍｘｘｘｒｖｖｖ．／

（終わりの始まり）

ｎ＊ｍｗｗｒ＊ｎ＊ｍｗｗｒ＊　ｙｗｗｍ＊ｍｖｖｖｚｗｗｎ＊ｍｗｗｒ＊．／」

（眠れ眠れ　夢見ず眠れ……）

選別に没頭していると、歌が呟きのようになってしまった。もう一度歌いなおすかと考えていたら、声が掛けられた。

「片手間に謳うのは、どうかと思うんだけれど」

失礼な、韻律を謳うときは集中する。私は思わず反論した。知っている声だから、警戒もしない。

「謳ってないよ、ただ歌ってただけ」

「君だったらどっちでも同じじゃないか」

振り返った先には、しばらく見ていなかった昔馴染みの姿がある。

気を使ったのか、床に足をつけず宙に浮いている。確かに足をつければ欠片の幾つかは破損するだろう。宙に浮いているものの、まるで椅子に座っているように姿勢に安定感がある。そんな不安定な姿でくつろげるのが凄い。そういえば、昔からそうだった。高所でも平然としていたっけ。枝に座ってぼんやりする姿ばかり見ていた時期もあったな。

昔馴染みは溜息を吐きながら、

「それにしても、こんなところに居たのか」

などと言う。別に私がどこにいてもいいだろうに。こんなところとは言うけれども、ここも結構苦労して構築した場所だった。

私は返答せず別のことを伝える。さっき見た欠片に浮かんでいた思考についてだ。

「感想言ってたよ。好きじゃない、だって」

誰が、とは言わない。相手も判っている。途端に微妙な表情になる昔馴染み。少しだけ考えてから、

「……まあ、その程度でよかったよ」

と呟いた。そういうものの、どうせ強がりだ。私は笑いながら次の欠片を覗き込む。これはハズレ。また駄目な山に投げ入れる。

「あまりいじめないでね」

「いじめていない」

あきれ半分、といったところか。

「もうちょっと気合を入れて物覚えをよくしたほうがいい。あれは酷くないか？」

久しぶりに来たくせに、好きに言うな。欠片を覗きながらむっとする。これもハズレ。

「仕方ない、たった五分（ごぶ）だし。塞いでいた経路が回復して、いらないものも入ってきている」

私は上を見た。釣られるように昔馴染みもそれを見上げた。

ああ、と声が聞こえる。納得したらしい。私が知覚しているこの場所と、昔馴染みが見ている風景が同一とは限らない。私には暗闇

と光に見えるが、昔馴染みには別の光景に見えているのだろう。
むずかしい顔をして昔馴染みが、
「塞げない？」
と白い指先で天を指す。あの亀裂のことだ。こちらを侵食する亀裂。
私はしばらくその指の示す先を眺めていたけれども、
「塞げない。維持だけで精一杯。どちらにせよ、もうすぐ一度、限界が来る」
と首を振った。私の言葉に、昔馴染みが息を呑んだ。私は肩をすくめ、笑う。そう悲観することでもないと思う。
「まあ、ここが混じらなきゃいいかなって」
「君がいなくなるかもしれないのに？」
「寿命は何にでもある。星のめぐりが決まったときに、全部決まったからね」
膝の上に退けた欠片を見せながら言ったが、相手は納得した様子を見せない。私がいいって言ってるのに。あっちも私も頑固なのは知っている。
「それにしても、何で昔話をしたの？」
欠片を選別しながらだから、相手の顔は見なかった。ハズレばかりだ。私はまた欠片を山に投げる。
「先が見たい。ひとの行く先が。そのためには、本来は歩んできた失敗を学習しなければならない」
神妙な声に、私は手を止めて振り返る。滅多に負の表情を見せない彼が、考え込み、うつむく様が目に入った。
「話せば、神官に伝わるから？」
「そうだね。それもある」
それ以外には何があるのか、と考えてから思い出した。そうだ、本当に見に行ったのだろう。昔馴染みは、必要が無ければ隠し事をしない。私は単純に考えたことを口に出した。
「勇者達が切り開いた先は、人の未来じゃないの？」
例え過去の歴史が無かろうとも、別の未来が切り開けるんじゃな

いか。

私の掲げる欠片の中で、紅蓮の勇者が怒りに震えていた。

幾重にも重なった悲劇は、けれども演じる彼らにとっては悲劇じゃなかった。彼らは何度も立ち止まり、苦悩し、そして答えを掴み取った。見ているほうも苦しいほどの真っ直ぐな生き様は、神様の心を震わせただろう。

今は深い眠りについている神様の心は、昼と夜の間でどちらにも染まらずに漂う。

『神の耳目』を通して触れる世界は、希望が見えているだろうか。隠すことなく、ありのままに人の子の目線で見る世界は、神様にどう響くのだろうか。

欠片を覗くことをやめ、欠片の向こうにいる彼に目線を移す。

「それもまた未来だ。彼らが選んだ」

昔馴染みはきっぱりと言い切った。そして、

「ただし、人類という集合体の意見ではないかもしれない」

私は溜息をついた。

「それをいったら、きりがないよ」

人の子は、一人一人心も思考もバラバラだ。神様がそれでいいとされた。いや、それがいいとされたからこそ、世界は混沌としているのだから。同じではなく違うのがいい、と仰った本当の心は、なんとなくわかっている。その御心を推し量るのもおこがましい話だけれど、私も似たようなものだからたぶんこれで間違っていないだろうなという思いがある。

多分、神様は……。

「もうすぐ、選ばなければならない」

思考に陥りかけた私を、その声が引き戻した。硬い、苦しい声。彼はいつもそうだ。一人、人間の愚かさを見ながら悔恨に後悔を重ねていた。世界をこうしたのは自分が原因だとずっと償いたかったと、搾り出すように告白したあの日と同じ声だった。

選択のときは迫っている。

それは私もわかっている。このままでは確実に世界はよくない方向へ変貌するだろう。

人の存続か、終了か。

その重い言葉を口にせず、私は沈黙を返した。

もう一つ手近にあった欠片をとり、覗き込む。私の口元が緩む。よい思い出だ。

これは当たり。

それをもう一度すかしてみながら考える。しあわせにあふれる感情が私にも伝わってくる。これは、大事な思い出だ。手の中にそっと包み込んだ。

本当に、些細なところに幸せは転がっているのに、どうして人はそれに気付かないんだろう。

どうしてすべてを飲み込むほど貪欲に何もかもを求めるんだろう。

「ごはんを食べるだけで幸せって、結構重要なことじゃない？」

背後の気配は、虚をつかれたのか、すこしだけ硬直した。けれども、やがて、

「……そうだね、そうだったら、平和になるのかもね」

とだけ言葉が零れ落ちた。同意をしながら、絶対にそう思っていない声で。

◆彼女、世界の外から（後書き）

明日の更新は、番外編にてアンケート結果のＳＳです。ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１９７９ｙ／よろしければ、どうぞ。

神子、留守番をする

『おお、マリアンヌ！　我が心の翼よ、いまこそわが身を恋の翼で空を翔ける手助けになるがよい！

マリアンヌ、その果実より甘い名前を囁く時、この身は恋の歌を口ずさみ、恋情の炎に焼かれるであろう。

ああ、私のほうを見ておくれ、微笑という名の祝福を、あわれな奴隷に授けておくれ……！

メイドック伯爵が願うと、窓辺にマリアンヌがその美しい姿を現した。ああ、なんということだろう、かの哀れな佳人は今日も窓辺で一人涙しているではないか！　二の月に照らされたマリアンヌは、まさに天上から滴り落ちた星の雫のようだった。

メイドック伯爵はその美しさに涙を零し、胸のうちで誓いの言葉を放った。

マリアンヌ、私はあなたを必ず助けてみせる！

一方マリアンヌは、伯爵にそんな風に見詰められているとは知らず、一人バルコニーで歌を口ずさむのだった。

眠れ眠れ　夢見ず眠れ
今日はお疲れさま　もう眠りなさい
全部忘れて　おやすみなさい
なくした気持ちも　元通り
あるべきものは　あるべき姿に……

美しきマリアンヌは、不眠症に悩まされていたのだった。今日もかつて母が歌ってくれていた子守唄を口ずさみながら、眠れぬ夜を

照らす月を恨みがましく眺める。今日もマリアンヌの愁いは晴れない。眠れぬマリアンヌ、おお、哀れな囚われし小鳥！』

かくん。

……はっ。

頭が揺れて意識が戻りました！　今日も絶賛眠気と格闘中ですよ！　なんですかこの眠気！　恐ろしい誘惑です。ちょっと気を抜いた隙にす……ぐ。

……うっ。

また行ってしまっていました、あちらの世界に。

私は夢を見ないんですが、これはヤバイ。記憶が途切れ途切れになってきた。

目の前には借りたばっかりの本があります。『マリアンヌ、その愛』とか言う本で、ラズなんとかさんの作品らしいです。でも、最高に面白くないんですよこれ！　神官様は意味がわからないところが味わい深いといっていました。現実も一筋縄でいかないように、たまには不条理に慣れるのもいいのだとか。あの人の読書嗜好も全く分かりません。

私は眠気に囚われたまま、文字をぼんやりと追います。

何がなんだかわからない超展開です。メイドック伯爵とか言うひとは、前の章は別のおじさんに恋を告白してませんでしたっけ。おじさんに告白していたから男装の令嬢かと思っていたら、今度はマリアンヌ。意味がわかりません。これは多分、マリアンヌがじつは男の人だったとかいう凄いオチなんでしょうか。人物描写が装飾過剰でキラキラしいわりには全く無いんですよね。星の光を宿した瞳って、どんな目だ。

せっかく借りたので読むつもりではあるけどっ。

眠気覚ましに目の前においていたお茶をあおる。
ウッ、冷たい。
かなり冷たくなっているのを見ると、結構私うとうとしていたんじゃないですか？
うー、でも昼間から寝たら、さっき昼食食べたところなので太りそうです。それが潔く寝台にいく気持ちを鈍らせます。
眠たい目のまま、ぱらぱらページをめくってオチを見るという邪道な行為をしました。あ、やっぱりマリアンヌは男の人でした。乙女の勘は騙せません。でも最後、何故別の女性とマリアンヌが駆け落ちしているんだ？　これは諦めて読んでいくしかない。ある意味苦行だけどね。

でも眠い。あ～。

ページをめくってはカクンとしていると、後ろから冷静な声が掛けられました。
「読むか、寝るか選べ」
かくん、と後ろにのけぞった私を支えたのは、相変わらず無表情の勇者様です。どうもです。
今日は神官様がお出かけで、二人で宿で待機中です。さっきまで剣を磨いていませんでしたか？　それとも、私が椅子から落ちそうになったから支えてくれたのか。多分それで正解なんだけど。
「ありがとうございます。ですが、読みたい気持ちが、満載です」
眠気にゆらゆらしながら、私は答えます。私の自由な答えに、勇者様は困っている様子。最近は私はお二人にあんまり遠慮をしなくなりました。
この背もたれと化した勇者様に支えられてしばらくうとうとします。多分、意識が明瞭になったら自分の行動に蒼白になること間違い無いんだけど、今は睡眠欲が強い。
欠伸をかみ殺しながら、どうしようかなと思う。思考をぐるぐる

させたら、眠気がとぶかなあ。勇者様はまだ私を支えてくれている様子。遠慮しなくなったのは、純粋に慣れたからです。

もともと順応力は高かったけれど、ここまで高いとは自分でも予想していなかった！　現状、普通に馴染んでいます。

もう街を旅立ってから四ヶ月です。あっという間に過ぎていて恐ろしいですよ！

あれからいろいろあったけれど、とりあえず、いつも通りのんびりと過ごしている。

……だんだん黒いのが見える街も増えてきたけれど、いまのところは大丈夫だと信じています。し、信じたいなあ。まだ、……いろいろと、大丈夫だよね？

いろんな街を巡りながら、徐々に悪化する状況に、一人びくびくしています。ちなみに、あれから白さんとは逢わない。出てきたら出てきたで、不吉なお知らせとかありそうだけどね！　あのひとはいい事は隠しそうだしね。

それにしても、浄化の旅って難しいです。倒してもキリが無い上に、魔物もあっという間に復活するし。これって、終わりが無い戦いだよね。人間か魔物かが消えなければ、終わらないとかないし。

時間が無いというなら、常に転移術で動けばいいのでは？　と私はそう思って、初めてお二人に会ったときとかに神殿と街を転移術で飛んだ覚えがあるから、これからもそうするのかと思ったんだよね。でも、いろいろあれも制約があって大変なのだそうだ。

あれは滅多に使える人がいない上、普通は使わない術だそうです。神殿のあの何にも無い庭としかつなげないから、結構不便だそう。また、術を使う人の存在値を大きく削るから、移動する人も術者もかなり大変らしい。そのわりには勇者様も神官様も、私がいるのにぽんぽん使っていましたが！　庶民だから丈夫さだけは認められたんでしょうか……。まあいいや。大体何を食べても壊れない、鋼鉄

の胃も持ってるしね！

まあ、あんな術が世界に浸透していたら、隊商や運送屋さんが廃業するしかないんだろうなとは思うけどね。

あれから神官様に教えてもらって、いろんな国の勉強をしています。現在ある国家は七、うちまだ比較的まともなのは三、だそうです。ほぼ無いのは二。……瓦礫の山でした。すごくつらい場所だったなあ。勇者様達もだんだん余裕の無い地域を回っていかざるをえないのは分かる。実際、この街も危険ムード満載だったし。だからたぶん勇者様も一緒に留守番しているんだと思う。私にとって出来ることは、知らない人についていかない、物を貰わない、みだりには信用しないぐらいですから！　ええ、覚えましたとも。いろいろ実地で！

で、お留守番中に本を読もうと広げた矢先、また……。

かくん。

……はっ。また寝てた。

後ろにのけぞるように揺れた私。はっと気がついたとき、意外に近い勇者様と目が合った。

ひい！

自分がうとうとして忘れていたけど一気に冷や汗が出た！　いま椅子から落ちかけたのも、すかさず支えてくれる。さすがの反射神経です。勇者様は私をじっと見た後、一言だけ告げた。

「寝ろ」

お、お言葉に従わせていただきます。

それにしても眠すぎる。

神子、すっきり目覚める

すっきりとした目覚めに呆然とする私。
何度目になるんでしょうね！　もう涙目です。なにが涙目って、さっき寝ろって言われた瞬間に意識をなくしていたとか、もうね……。
気がついたら寝台の中に押し込められていました。どう考えても私が歩いてきたんじゃありませんよ。あっはっは。
……いやほんと、申し訳ないです。どう考えても勇者様にまた世話を焼かせてしまったのは間違いない！　きちんと脱がされた靴は寝台の横にあるし、羽織っていた服とかサイドボードに畳まれていました。これも結構いつも通りの光景ですあはは。将来いいお父さんになると思いますよ！
普段着のまま寝台にいるのも気持ちが悪いから、ごそごそ出ていくと、勇者様が本を読んでいました。まさかの光景に足が止まる。読書自体はいいんですが、あの本、『マリアンヌ、その愛』じゃないですか！　あれを無表情で読む勇者様、逆に怖いです。ちなみに、神官様によると、私は笑うか苦いものを食べる顔で読んでいたらしいです。観察されているようです。
「お、おはようございます」
朝じゃないけど、特に適切な言葉がないっ。
びくびくしながら声をかける私に、あっさり読書を中断して目を上げる勇者様。
「体調は？」
今日も心配をおかけしましたっ。
「寝たらすっきりしました！　ありがとうございました」
最近やたら眠いのはどうしてだろう。そのうち寝すぎて頭が溶けるんじゃないだろうか。ちょっと心配しています。でも、眠くなるの

とお腹が空くのぐらいで、後は特に体調も悪くない。陸馬さんの上で寝て落ちないように気をつけるぐらい？　後はおやつを切らさないぐらい？　どこのお子さまですかっ。夜も早く寝てるのにな。

部屋の中を見回してみる。

まだ神官様は帰ってきていないみたい。荷物とか、眠くなったときのままの配置だし。とりあえず寝すぎるのも悪いので、勇者様の前の席に座ってみた。

「それ、おもしろいですか？」

トンデモ本を指さすと、勇者様は少し考え込んだ。

「とりあえず主人公が誰なのか考えていた」

単語じゃなかった！　割とまともな答えに感動した！　これが、コミュニケーションですよねっ。

けどそれは私も答えが分からないですよ！

「とりあえず、勢いで読むものかと」

その答えに満足したのかどうかは分からないけれど、勇者様は今度はぱらぱらと本をめくりはじめた。一通りめくった後に、

「最後までよく分からないな」

とだけ言う。私は思わず席から身を乗り出した。

「今ので読んだんですか？」

めっちゃくちゃはやくぱらぱらしてただけですよ！　視力すごいんですね！

「流し読みだ」

「そのワザを分けてくださいっ」

それだけはやければ、いろいろ便利な気がする！　すると勇者様の答えは相変わらず斜め上だった。

「分割はできない」

「そこを何とか」

詰め寄る私。またにらめっこですよ！　無言の時間が過ぎていきます。

「で、また何をしているんですか」

あきれた声が横からかけられた。神官様だ。
「おかえりなさい」
驚いたのは私だけで、勇者様はいつも通りでした。ゆるぎない。私は全くノックに気づかなかったね！　そこまでぼんやりじゃないと自分を信じたいところです。にらみ合いに全力投球していただけとか！　それもどうかという感じだけど。
神官様はいつも神殿の連絡係とか言う人と会っているそうです。ちなみに私は一度も行った事がありません。私を安全なところに置いて行ける場合はお二人が出かけるし、それ以外は勇者様を置いて行きます。なんと贅沢なおもり係ですね！　わーい……。そこまでお子様じゃないといいたいけれども、前歴があるので言えません。足を引っ張っている感が満載なんですが。それを口に出したことがあるけれど、私がいなかった頃の浄化は本当にきつかったそうで、私のおもりをするぐらい全く問題にならないそうです。前に聞いた星神官とかいう人がいたときは、お付きの人が列をなして大変だったらしい。思い出したとき、神官様のみならず、勇者様もちょっと遠い目をしていた。ちょっとだけしか聞いてないけど、いろいろ凄かったんだろうな。このお二人がこんなに遠い目をするとは！　とても強烈な思い出だったんでしょう。
ともかく、神官様は一人で出歩かれるのだけど、それが心配になることもあります。勇者様に聞いてみたことがあるけど、神殿の人が護衛代わりなんだとか。よるがどうとかいっていました！　正直覚えてない。
外套を脱いだ神官様は、お菓子をくださいました。おお……！　お土産ッ！　小躍りをする私。神官様が簡単な星術で、さめたお湯を温めてくださいました。了解です、お茶を入れます！
「本を読んでいたんですか？」
椅子に座りさっきの例の本を神官様がぱらぱらとめくりながら言う。
「神官様も本を読むのは早いんですか？」
と聞くと、

「普通ですよ」
との答えが。読書家の神官様のいう普通が判らないのですが。結局勇者様はワザを教えてくださいませんでした。聞くより盗めってやつですか！　お茶を蒸らしながらぼんやりしていると、
「次の目的地が決まりました」
とのお言葉が。そろそろ移動なんですね。

神子、今日も陸馬さんといっしょ

今日は陽気とてもいいです。ぽかぽかしている。陸馬さんの背中で揺られながら、必死で欠伸をかみ殺しています。また眠くなってきた！　さっき昼寝してたのにね！

あれからすぐ荷物をまとめて街を出ました。

あの街、滞在時間はわずか二日間。物資の補充とかはついたときに済ませています。だからいつでも荷物をまとめて旅立てる。荷物をまとめるのは得意です。洗濯と裁縫と荷物まとめるぐらいしか才能が発揮できない……！　まあ、才能というより慣れだなあ。もともとなにかと才能は無いわけですがっ。

たしかタングステンとかいう街だったはず。固有名詞って覚えるの難しいよね！　自分の生活に密着していなければなおさら。さっき街を出るときに、一応城門の上にある名前を確認したよ。黒っぽい石がよく取れる採掘場が近いから、黒っぽい街だった。暗い雰囲気かと思ったけれど、ファッショナブルな感じでした。それこそアグレッシブな感じで。適当に表現してみた。

二日間の滞在で心に残っているのは、やっぱりごはん！　焼いた何かの肉が美味しかったです！　甘辛いたれで、ほんのりピリッとくる味付けだった。じっくり噛締めたら熱い肉汁が滴るんですよおおお。じゅわーって。でもあれ何の肉なんだろ？　骨の雰囲気からして、鳥っぽい感じだったんだけれど。追求しなかったから、今更ちょっとドキドキしている。でも、美味しいは正義！　ゲテモノでも、美味しければわりといけます。

意外と野宿は得意なので、お肉に後ろ髪を引かれながらの旅立ちです。野宿は得意というよりは、どこでも寝れるからなんですがっ。ほーらいまでさえ眠い！　奥歯を噛締めますよ。目よ醒めろ～。念

じればいけるかなっ。

だいたい、今までの街の思い出はイコールおおよそごはんだったりします。多分、思い出を語るとしたら、ごはんで語れます。ご飯でつづる旅日記です。まさにグルメ旅。そのうち旅行記が書けそう。ごはんでつづる旅！　でも勇者一行だとばれたら大変な気がするからできやしないよ。一応、市民感情を考慮してみた。私も根っからの町民だから、「えっ、勇者一行食べ歩きってなんなの。こっちは大変なのに！　さっさと世界を救いなさいよ」って思われるのが判ってるから、そんな本は作れやしませんっ。……うだうだしていた庶民に戻りたいです。わりと。

それにしても、今日の旅立ちはかなり慌しい。

何でか急いでいるみたいだったけれど、神官様は何もいわなかった。勇者様は何も聞かなかった。お二人が納得してるなら、いいんじゃないかなあって思う。考えることの放棄だって言わないでね！

多分、私に言わないことも、意図があるんだと思うし。

それに最近、こんな感じの旅立ちが多い。あと、街に入る時のパレードとかもなくなってきているよ。あれは心をガリガリ削るから、むしろなくなって正解です……。でも、何でだろう。急になくなった理由は知らない。勇者だと名乗ったら、歓迎は多分されるとは思う。けど名乗らないんだよね。名乗らない方がいいんだろうなーって私もわかるような雰囲気になっている。

何かがおかしい。街の雰囲気というか、空気というか、ぶっちゃけ黒いのが見える頻度が高くなっているかというか。

いやな予感が、予感だけですんだらいいんだけどね。

なんだか気分が暗くなってきた。

空を見上げると、不思議なことに、なぜかいつも薄暗い気がするんだ。本当なら、ぽかぽか陽気で結構明るい空のはず。こんな日にはお弁当を持って、ぼんやりとしたいぐらいのいい天気だと思うん

だけど。なんだか暗く見えるんだよね。
陸馬さんの背に揺られながら、ぼんやりと空を見上げる。上ばかり見てたら、また口が開いてた。おっとっと。失敗っ。

一応の目的地はこの先だそう。
神官様の説明によると、タングステンとかいう街が今いたところで、そこからシーブライトという街に移動する間で魔物が大発生しているらしい。
大発生かあ。
それにしても、魔物本当にきりがないですよね。私は襲われないけれど、割と切実なのはわかる。襲われている人を見たことがある。はっきり言ってトラウマです。なんとか浄化までは頑張ったけど、正視できませんでした。本当は治療とかできたらいいのに！　本気で流血沙汰は駄目ですよ！　大丈夫かなーって思っていたけれど、傷口見たら足がすくんだ。お二人は無理をするなと仰るけど、もうちょっとは役に立ちたいんだよね。
薄暗い空を見上げて、私は一つ溜息をついた。

神子、とうとうその日がやってくる

徒歩といってもお二人の歩く速度はかなり速い。私は絶対陸馬さんに乗ってなかったら置いてきぼりになるレベルです。

どうしてそんなに足が速いんですかって、この間勇気を出して聞いてみました！　勇者様は山育ちだからと端的な回答、神官様は神官稼業には体力も必要なのです、との何か含むところがある回答をいただきました。衣装とか重いのかな？　大神官様って言ったら、神殿であったキラキラ集団より衣装重そうだしね！　一度星都で、マナー授業の一環でドレスを着たことがあるけど、締め付けるわ重いわで最悪でした。汚しそうで怖いのもあるけど、金糸銀糸の刺繍が重量を増しているとかもうね、庶民にはわけがわからない。何で布に金を使うの。きらめきが足りないから？　そんなに輝いて威嚇しなくてもいいから！　ボディラインを綺麗にするためとか、締め上げられ布を詰められ、いろいろ加工されましたとも。あれだけ苦しい思いをしているのに、王侯貴族は優雅に動いているんですね……。華の姫様があのときだけは本気で恐ろしかったです！　あんなに細いのに何であんな重いドレスでニコニコできているんだ。

とにかく、もうちょっと体力がほしいなって思う今日この頃です。特に、今みたいな時に切実に思うよ！　体力って、どこかに売ってませんか？　お金がないから買えないけどっ。

今、陸馬さんと大きな岩陰に隠れてじっとしています。

はい、私以外は絶賛戦闘中です。

さっきまでは薄暗い晴れ空を見ながらのんびり歩いていたけれど、首が四つある狼っぽい獣型の魔物の群れがいきなり襲い掛かってきたのでした。徐々に数が増えて、最後に見たときは二十匹以上はいたのではないかな？　慌てすぎて具体的には数えてなかったけど。

逃げろと指示され、お二人がひきつけている間に、慌てて陸馬さ

んと現場を離れて岩陰に潜みました。
ほんのちょっと走っただけなのに、私はハアハアいっている。息が乱れるって、本当に体力無いなあ。う、首筋に汗かいている。気持ち悪い。布で汗を拭きながら、じっと座り込む。陸馬さんは一掴み草をあげていたらおとなしくずっとそれを食べているから動く心配はない。これは意外なことに勇者様に教えてもらった方法です。動物の事は勇者様に聞いたほうがいいらしい？
私は膝を抱えてじっとしておく。
役に立てないこのときは、静かにしておく以外ない。
遠くで雷が落ちたみたいな音や、地響きが聞こえるんですが、一体どんな戦闘が行われているんですかああ！　なんかたまに凄い突風とか、獣の断末魔とかが響いている。
生物じゃないって知っているけど、その声はなんだか物悲しくて、私は抱えた膝の上に顔を伏せた。
目を閉じながら、響いてくる音に耳をすませる。
お二人とも何かと規格外なのは知ってる。だけど実際に私が傍にいるときって普通に剣とか棒術とかで対応しているから、星術ドカーンていうのは滅多に見たことが無いんだよね。巻き込まれたら私もドカーンといっちゃうから気を使ってもらっているのかも。流れ弾を避ける自信は全くありませんから、お気遣い無くとか絶対に言えないし。
少しすると、あたりが急に静かになった。
終わったのかな？
目を開けて顔を上げる。
その途端、私は絶叫しそうになりました！
自分で自分の口を押さえてガード！　自分を誉めれます！　よくやった！
目の前には悠々とさっき見た狼の五倍ぐらいの大きさのヤツが歩いていましたあああ。
でかいって！　首がなんで八個もあるの。ちょっと多めに盛って

見ました、にしてはやりすぎでしょうよ！　どの目もうつろで、口からだらだらと唾液をたらしている。毛並みは土か何かわからないもので、黒っぽくまだら。多分あの前足の一撃で私死ねます。背の高い勇者様二人分ぐらいの大きさの、狼っぽい魔物です。首の数が多すぎるけどね！　魔物の周りには、ピンクの霧と黒い霧が渦巻いています。うっ、霧まで引き連れて歩かないで！

それにしても、この巨大な魔物が近づいているのに足音がしなかった。これが肉球の威力なんですか！　なら私も肉球が欲しい！

お二人は接近に気付くだろうか。知らせようにも手段がない。

陸馬さんも動かないでね、と思って横を見たら、まだ食べていた。

……マ、マイペースですね、陸馬さん。うすうす思ってたけど、この状況で食べれるって本気で根性座っていますね……。

狼もどきは本当に近くを通っている。手を伸ばせば、ごわごわな毛皮に触れそうなぐらい至近距離なのに、魔物は私たちに気付かなかった。

お枝様、ありがとう。凄い効果ですね！

街の入り口とかこれ植えればいいんじゃない？　魔物の避けになるよ！　あと瘴気も避けれるよ！　あ、人にも悪影響がでるっけ。忘れてた。

狼もどきは悠然と歩き、戦場へと向かっていく。その後姿を見送って、ようやく私は息をついた。

震えて手に汗をじっとりとかいてしまっていた。とりあえず簡単に手布で拭く。

再び響いてきた戦闘音に縮こまりながら、膝の上に顔を伏せる。

目を閉じて音を聞いていた……んだと思う。

しばらくして、肩を揺さぶられた。

「……こ、起きてください。大丈夫ですか！」

……はっ！　また寝てましたあああああ！

飛び起きて、口元をチェック！　よし、よだれは垂れていない！

心配そうに覗き込んでいたのは神官様だった。

「お帰りなさい！　怪我はありませんでしたかっ」
お二人は土ぼこりで汚れていたものの、大きな怪我も血の痕もないみたい。ほっとするね！
「あなたの体調はどうなんですか？　最近、寝てばかりでしょう」
かなり真剣な表情の神官様が私の顔を覗きこんでいた。うわ、そこまで心配をおかけして申し訳ないです！
「本当に眠いだけだから、大丈夫ですよ！」
元気さを主張するよ！
「毎日ごはんも美味しいですし、多分ただ眠いだけなんだと思います！」
　神官様はぎゅっと眉根に皺を寄せた。美人さんに変な癖がつきますよ！
「それがおかしいんですけどね」
でも元気だから大丈夫だとは思うんだけど。神官様はそれからいつも通りの診察をして、
「確かに目立った異常はありませんが……無理は禁物ですよ」
と溜息をついた。了解です！　無理してないです。昼寝ばかりしてるよ。
「浄化を頼みたいのですが……止めておきますか？」
「えええ、全く健康ですよ、お枝様持っていくだけですしっ」
そこまで心配される方が怖いですよ！　自覚なく私深刻な状況なんですかッ。
「……ならいいのですが」
私の主張に神官様が譲ってくれた。でも、本当に元気なのになあ。太りもしてないけど、痩せてもないから大丈夫ですよ！　多分最近は前より動いているから太らないんだと思う。いっぱい食べれる幸せを感じています。
　そのまま、少し離れた戦闘後の場所に陸馬さんに乗って移動しました。
　大地がえぐれているんですが。

草原に大きな焼け焦げがあるんですが。
私は周囲を眺めて遠い目をしました。
なんだか凄い跡地になってしまっていたね！　そりゃあ、この場所に私つれてきたら即死亡だよね！　どれだけ星術使ってるんですか！
とりあえず、お仕事の時間です。
もやもやと漂う黒とピンクに向けて、私はお枝様の浄化をしようと巻きつけていた布を取った。
これだけで準備完了ですよ！
陸馬さんに変な影響が出たらいけないので、浄化のときはちょっと離れて行っている。
立って、大声で星唱です。

「ｘｘｘｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖｍ０ｎ０ｈｘｘｘ　ｘｘｘｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘｎｖｖｖ．／」
（あるべきものは　あるべき姿に）

星原樹の枝がそれに反応して輝く。その瞬間、小さな声が耳に届いた。

――　ゴメンね、もう、もたない。

何を謝っているのか判らないけれど、囁くような、でも本当に辛そうな声だった。
誰、と聞こうとしたけれど、私の身体も動かない。息をすることも出来ない。
パキン、と何かが割れる音もする。
え、え？　何が起こっているの？

私は瞼の裏の闇に取り込まれながら、遠くで何かが落ちる音を聞

いていた。

◆勇者一行、出会う（前書き）

神官の視点です。

◆勇者一行、出会う

何かの音がした。
何の音か判らない。しかし、とても気になる音だ。私は周囲を観察したが、全く音源は見つからない。叫びのような、悲嘆のような、音を形容するには不適切な言葉であるが、何かが破綻したような音だった。
その音が大気に溶け込み、音源を捜すことを諦めた。

次の瞬間、弓弦の糸が切れたような唐突さで、神子が倒れた。

大地の上に身体が人形のように力なく横たわる。
手から外れた星原樹の枝はカラリと小さな音を立てて転がった。
みつあみの頭髪が地面に力なく投げ出される。
瘴気の気配は周囲から消えうせている。浄化はなされていた。しかし、浄化が何かを奪い取るほどのものだったかは聞いたことが無い。今日の浄化は、常日頃と何も変わらなかったはずだ!
彼女にすぐさま駆け寄り、傍らに膝をつく。顔色を確認する。僅かに白くなっている。だが、悪いというほどではない。唇の色も正常だ。体温も低くもなく、高すぎもしていない。また、異常な発汗も無い。
「どうしましたか、大丈夫ですか!」
傍らで大声で呼んでみるも、返答は無い。また、至近距離にも拘らず、反応も無い。意識は完全に失っているようだ。
見たところ頭部を強打した倒れ方でもなかった。怪我の有無は走査術で調査することにする。
とにかく頭を支え顎を上げ、気道を確保する。口元に頬を近づければ、僅かに呼気を感じた。呼吸はある。僅かに緊張が緩んだ。星

別者なら、呼吸があればなんとかなる。
首の大動脈に手を添える、これも確実に脈拍も感じた。ここまでは異常は無い。
私は身を起こし、彼女の身体を検査するために術を構築する。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，（呪文開始）
Ｓｋｙｎｎ，（走査（スキャン））
ｔｓｈ　ｎ　ｊ　ｗ　ｈｋｋｎｎｓｒ，（対象の異常を発見する）
Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ（呪文終了）」

新星術を唱えるとすぐに効果が発現する。が、想定した威力よりかなり落ちている。神子の全身を調査する程度を謳ったつもりが、頭部から胸部にかけて程度を調べたに過ぎない結果になった。
新星術は結果が安定していることこそが利点だ。それが崩壊しつつあるのか？

一点だけわかったことは、神子の頭部には異常が無いということだ。
そうすると、彼女はただ昏々と眠り続けているといえる。苦しそうな表情もなく、静かに寝ているだけに見えた。
しかし、それこそ明らかに異常だと言える。

星別者が眠り続けているのだ。

今だけではなく、最近は特にその兆候が現れていた。
私も勇者も、少しでも時間が空けば眠りこけている彼女を目撃した。ただ、以前より良く眠っていたため、初めはその異常に気がつかなかった。疲れているのだろうと解釈してしまったほどだ。
しかし、一度気付いてしまえば静かに進行していた異常を忘れることなど出来なかった。

そもそも、星別者に眠気や食欲が訪れ、しかもそれがコントロールできないことがおかしい。

以前神子には軽く説明したのだが、彼女はすっかり忘れているようだった。

生物としての欲求に振り回されないよう、星別者は欲求が薄れ、他の方法で身体を補っている。すなわち、星から直接身体を構成する力を取り込んでいるのだ。いうなれば、呼吸で存在値を補える。実際、私も勇者も最近は滅多に食事をすることがない。彼女の食事に付き合うときは軽く飲み物で済ませていた。彼女はそれを気にした様子は無く、普通に食事を摂りつづけていた。また、空腹を訴えることもあった。ただの嗜好なのかと思っていたが、それにしては普通に食欲がありすぎるのだ。勇者ですら不思議に思うほどに。

かといって彼女が星別者でないことはない。何度彼女の情報を読み取っても、返ってくる答えは【０（みこ）／Ｍｖｖｖｋ０】だ。それ以外に、彼女を呼ぶ言葉を、私たちは知らない。

巡らせていた思考は唐突に破られる。隣に膝をついて神子を覗き込んでいた勇者が、声を零したのだ。

「空が……」

勇者がかすれた声で呟いた。その呆然とした響きに、私も神子から目を離し、思わず空をふりあおいだ。

先程までは綺麗に晴れ渡っていた空が、私たちの目の前で徐々に色を無くしていく。

青が水色へ、水色が白へ、そして最後は白が灰色へと濁る。鮮やかで透明感のある青が、ぼんやりとした白灰色にすりかわったのだ。雲とは全く関係が無い。太陽すら色あせたようにしらじらと淡い輝きへと変化する。

中空にぼんやりとあった第二の月が、不吉なほどに赤く見える。

一斉に、怖気を誘うような魔物の遠吠えがあちこちから響き渡る。
まるで歓喜のような声だった。
「なにが……」
その続きを声に出してしまえば、確実に現実になると確信している。
「こんにちは」
背後から掛けられる声。私は全く聞いたことの無い声だ。
それに勇者は既に抜刀を済ませていた。私も頭の中で幾つか短呪を思い浮かべ、用意する。
振り返ると、フード姿の人物がいつの間にか出現していた。全く気配が無い。勇者が警戒をしている。彼も気付かなかったのだろう。
恐らく、彼が神子が言っていた人物に違いない。背格好、声から読み取る。
――嫌味なぐらいイイ声なんですよ！
神子の言っていた言葉を思い出す。彼女は圧倒的に語彙が少ない。確かに、謳うにはよい声だろう。通りと伸びがよく、活舌も音程も的確。発音が綺麗だ。
私は交渉用の仮面をすぐに被る。敵対しないと意向を示し、笑いながら話しかけた。
「はじめまして、【1／Shr】。それとも、はじまりのひととお呼びしたほうがよろしいですか？」
神子から聞いた話の断片を繋ぎあわせて気付いた、彼のもう一つの呼び名をあえてぶつけてみる。
「どちらでも」
あっさりと始原の勇者は私の言葉を認めた。
「本日は何の御用ですか」
警戒を強めながら問いかける。彼はあっさりと返事をした。

「世界の終わりの始まりを告げに来ただけだよ」

◆神官、はじまりと対話する（前書き）

神官視点です。

◆神官、はじまりと対話する

「終わりの……始まり？」

始原の勇者の言葉を反復したのは、意外なことに勇者だった。彼は鋭い目で始原と名乗る男を睨んでいる。まだ抜刀したままであり、更にいうなら敵意も向けたままだ。よほど前回の邂逅が気に入らなかったのか。珍しい反応だった。始原の勇者はそんなこちらの様子に構うことなく、話を続ける。

「今、何が起こったか判るかな？」

「さっさと話せ」

勇者が剣で切りつけるように言葉を投げつける。その語気は決して荒くない。むしろ冷静な方だ。だが、その言葉選びには焦りを感じているように見えた。何故か。

目の前に眠る神子を見る。相変わらずこのような状況でも彼女は目を覚まさない。こちらの異常事態も続いている。

もしかすれば彼女に関して、勇者には何かが見えているのだろうか。この幼馴染が自分と違う『視界』を持っていることは知っている。神子が瘴気を見れるように、彼は韻律の構成を見る。それは一体どんな感覚かは、私には想像すらできない。

ともかく、一旦この人物と接触を持った神子がいたほうが、話がすすむのではないだろうか。彼女を起こすべきだ。そう判断し、私は神子を抱えなおす。

神子の額に手を置き、回復の星術を使おうとすると、

「星術は使うな。君が疲れるだけだ」

と硬い声で始原の勇者に差し止められた。私は反射的に不審を込めて、

「理由は？」

と逆に問い返した。が、始原の勇者は言葉を返しては来なかった。

代わりに私たちの横を通り、星原樹の枝を拾い上げる。神子が眠る今、これをどうするかも懸念していたものだ。始原の勇者は簡単に持ち上げた。手袋をしているため、実際の損傷はわからない。しかし彼は全く枝によって損なわれる様子がなかった。

始原の勇者は枝を何度か角度を変えて眺めた後、こちらを見て笑った。フードの陰に見えた口元に、いやな予感が走る。

次の瞬間、始原の勇者はおもむろに私のほうへ枝を投げつけた。

こちらは神子を支えている。自由になるのは右手一本だ。大きな枝を避けることも出来ない。息を呑みそれを反射的に右手で掴む。

先日、これを持ったときのような衝撃を覚悟した。最悪、私の手は使えなくなるだろう。一瞬で全身に冷や汗が吹き出る。

しかし、覚悟とは裏腹に手に伝わったのは、ただの枝の手触りだけであった。衝撃は全く無い。

私は思わずそれを握り締める。そう、普通の植物の枝と相違ない手触りだった。

星原樹の枝から発していた力が、消えうせていた。

「これは……」

発した言葉はかすれた声だった。私にとってもこの衝撃は大きい。星原樹が、沈黙をしている。

先程から続く異常。それは星原樹に何かあったせいなのか。

星の原に茂る樹木。

今の時代に現存する、神が直接創造した生体である。

ただ、人を寄せ付けないその樹は、一体何のために神が植えたのかはっきりとはしていない。

「星原樹が、効力を発揮していないのですか？」

私の言葉に、始原の勇者は頷いた。正解らしいが、全く嬉しくない。

「それにより、何が起こるかは教えていただけるのですか」

どこまでなら答えてくれるのかが判別が出来ない。顔を見ながらの交渉のほうが遥かにやりやすいだろう。今、相手がどのような感情を抱えているかを読み取るのも交渉の上では重要だ。けれども始原

の勇者はフードを被ったまま顔を見せようとはしなかった。
　意外なことに、この問いにはあっさりと返事があった。
「神殿に伝わっているかどうかは判らないけれども、星原樹のおもな働きは二つだ。……その前に、少し失礼」
彼は話しながら、眠る神子の隣に膝をつく。手袋をしたままの手で神子の額に手をかざした。慎重な手つきに、危害を加えるつもりではないと判断し、見守る。害意の無さに勇者も静観している。
「ｓＯｓｘｘｘ」（走査）
　私の使用した術とは違う、旧星術で神子の様子を調べている。ただし、発動はとても小さなものだった。言語としては意味は同じだが、リズムと旋律が違うため効果が変わっているのだろう。一通り術が神子の身体を調査する。それを情報として受け取り、判別しているようだ。
　始原の勇者は重苦しく溜息をつき、
「……これでは、起きない」
と零した。それは判っている。先程からこれほど騒いでも彼女の目は開かない。
　何を言っているのか、という感情が表に出ていたのだろう、始原の勇者はもう少し付け加えた。
「彼女が眠っているのは、呼吸や食事、睡眠だけでは存在値を保つ最低ラインを維持できていないせいだ。もともと彼女は他の星別者より大きな存在値が無ければ活動できないんだ。よりによって『神の目』だけではなく『神の耳目』だからね」
存在値は、いうなれば生命力という言葉に近いだろうか。枯渇すれば死ぬどころか、世界に存在できなくなる。それを星術により人々は漠然と感じ取ることができる。普通は食事や睡眠で補える。ましてや星別者であれば呼吸だけで補えるはずのものだった。
「『神の目』ではなく？」

「そう、それだけじゃないから、こんなことになっているんだ。本来は目だけの役割なのに、もう一つも負っている。例え彼女が、」
何かを続けようとしたが、そのまま口をつぐんだ。不味いことでも口にしようとしていたのか。追求しようとしたが、話題の転換のほうが早く、そちらに気を取られてしまった。
さらに続けての始原の勇者の言葉は絶望的だった。
「下手すれば一生このまま目は醒めないかもしれない」
その話題に、私たちの緊張感がいや増した。根拠を彼は示していない。平常心を保つために、ゆっくりと息をしてから、
「ただ、眠っているのではないのですか？」
と問いかける。まるで夢を見ているようにふんわりと微笑む神子の顔を眺めた。寝顔だけを見れば、深刻そうな状態には見えない。始原の勇者もその顔を見ながら、
「本当に今のが生きている最低ラインだ。樹からの供給が停止したからね。起きれるなら起きて、お菓子でも要求するんじゃないか？」
「……よく、いろいろとご存知なのですね」
自分達は監視されていたのか、と探りを入れた。が、相手はあっさりとかわす。
「いいや知らないよ」
どう考えても彼は胡散臭いのだから疑うのも仕方が無い。
「……どうすれば目を覚ますことが出来る」
ようやく沈黙を守っていた勇者が、厳しい声で始原に詰め寄る。しかし、相手が悪かった。微塵の動揺も見せずに、
「回復を待つしかない……が、どうだろうね。」
と希望にもならない言葉を落とす。
「どちらにせよ、星原樹が今のままでは回復は難しい」
そう、星原樹だった。
「だから話を戻そう。星原樹のおもな働きは循環と伝達だ」
始原の勇者は私の持つ枝を見上げる。私たちもつられてそれに目線を移す。枝葉はみずみずしく、常とは変わらないように見える。

「さまざまなゆがみを吸い上げて、元に戻す。これが循環だ。そのため、世界に何かあるとまず星原樹にゆがみが蓄積され、静止する」

視線を枝からそのまま上げて、白く変色した空を見上げた。静止した途端これであるなら、この状態が続けばとんでもないことにならないだろうか。

「君達が浄化といっているものもこの循環を利用したものだ。星術でゆがんだ世界を戻しつつ、浄化の際に大気中に力を撒いている。これが、いうなれば星別者が呼吸している星の力だね。これが今一気に不足したため神子が倒れ、術が使いにくくなっている」

先程の感覚を思い出した。確かに術は完成しているにも拘らず、効果が出にくかった。

「あともう一つが伝達。神からの言葉が伝わりやすいようにする役割がある。樹であり、星語を解するからね。ただし、こちらは今は使用されていない」

始原の勇者は一旦言葉を切った。

「星原樹が沈黙した。このままであればゆがみと瘴気が蓄積し、五十日ほどで限界がくるだろう」

その日数が指し示すもの。

終わりの始まり。

皮肉にも、人々の知らぬ間に既に終焉は始まりを告げていたらしい。

勇者は更に問いかけた。

「星原樹は元に戻るのか？」

その問いに、わずかに見えている口元が震えた。何かを堪えている様子だった。

「……もともと寿命が近い。戻らないと考えた方がいい」

勇者は剣の柄に手をやったままだ。私も枝を持っていなければ、始原に詰め寄ったに違いない。

どう考えても、詰んでしまっている。

「打つ手なしなら、何故今更それを告げるのですか？」

言葉が刺々しくなるのも仕方が無いだろう。早く動けば、その限界とやらも防げたのではないか。瞬間的に怒りが爆発しそうになる。が、既に過ぎ去った事柄について人を罵倒したところで何も解決はしない。こみあげていた罵りを必死に喉の奥に封じ込める。

「手を討ったから今年まで無事だったとは言える」

具体的には彼は語らなかった。私も今はそれを質問する余裕が無い。意識は過去よりも未来の事柄に向いている。

「限界が来たからには、最後の手段をとるしかないだろう」

最後の手段、と口の中で転がす。どうにも不穏な響きだ。

「奇跡を起こし、神を再び呼び戻すしかない」

奇跡！　この相手が言っているのでなければ、一笑に付したかもしれない。何を言っているのか、と正気を疑ったかもしれない発言だった。

「……神はいらっしゃるのでは？」

実際に大神官として託宣を受け取ったことが何度もある。その度に自分の存在が削られるほどの神の存在を知ることとなったが。それゆえに、神の存在は誰よりも実感している。

だが、今の言い方はまるで神がいないかのような口ぶりだ。私の言いたいことに気付いたのか、

「君が受けている託宣は、神が無意識に返した答えだ。いつも、質問には答えてくださっただろう。だが、対話が出来ていないのではないかな」

と付け加えられる。

「神は現在、昼と夜の狭間にいらっしゃる」

その表現は、旧星語で作られた文によく用いられる言葉だ。

昼と夜の狭間――　すなわち、夢を指す。

「三期で人に絶望を感じた神は、人に人の管理を命じ、眠りに入られた。そして、『神の耳目』である神子を通して、人を夢という形で見ていらっしゃった。この局面を乗りきるには、現界に神を呼び戻すしかないだろう」

淡々と話す始原の勇者は、深蒼の勇者を正面から見据えた。
「それには人が奇跡を起こさなければならない。自らが撒いた瘴気を消すという奇跡が」
その言葉に、背筋が凍った。おそらく、現在は星術自体使えなくなりつつあるのだろう。その上で全ての魔物を駆逐せよというのか。
奇跡とは言うが、恐らくそれは勇者という犠牲を伴う奇跡ではないのだろうか。始原は自分が要求しているものを理解したうえで深蒼の勇者に突きつけている。世界のために犠牲になれと。
余りにも無茶な要求に、だがしかし、深蒼の勇者は一つ頷き了承した。
その様子を見て、始原は一つだけ質問をする。
「あの日の答えを聞きたい。……深蒼の。君は、人間が好きかい？」
唐突な質問だったが、両者の間では伝わったようだった。ぴり、とした緊張感が空気に生まれる。
深蒼の勇者は、僅かに考えた後、ゆっくりとした言葉で彼にとっての答えを返した。
その答えに、私は傍らの彼の顔を凝視する。彼からこんな答えが聞けるとは思わなかった。恐らく、今眠る彼女の影響があるのかもしれない。何故か、そう思った。
深蒼の勇者の答えを始原の勇者は静かに聴き、
「それが君の理由になったのか」
とだけ、返事をしたのだった。

神子、まさかのジョブチェンジ

いつの間に眠っていたのか、今日もすっきりとした素晴らしい目覚めです。

寝てしまう癖をいっそのこと趣味にまで昇華さえてしまったほうが、色々いいんじゃないかなあ。

どうしていつも寝ているんですか？　趣味です！　こう言い切ったほうが潔いかと。

思わず遠い目をしてしまいますよ。

何時寝入ったか、今度は記憶もありません！　これはさすがにやばいよね？　ちょっと自分で思います。

とりあえず、今日もおはようございまああぁぁぁあす！

ばっと跳ね起きバッチリお目覚めですよッ。爽やかな朝ですね。

そして周囲はいつも通りどこかわからない部屋でした。これもいつも通り！　いや、確かによくあるパターンだけど。本気でここドコだ。

私はぐるりと部屋を眺める。私以外、誰も部屋にはいなかった。これは推理するしかない！　フッフッフ。鋭い知性のきらめきを見せるには今だ！

とりあえず、庶民の部屋じゃあないな。私が一人暮らししていた部屋の、三倍はあります。この場合、私の部屋が狭いのか、ここが広いのかは置いておいてね！　心が痛いから！

調度品は多分本物の金をあしらっているみたい。輝きがゴージャスです。キラキラしているよ。金かどうかは、星都とかで本物を見ているうちに判るようになった！　これが目が肥えるということか！　ちょっとしたスキルですよ！　一芸をやっと持つことが出来たのかと、感慨深いです。何でも慣れって大事だよね。実際、神官様の美人顔にはかなり慣れています。もう普通だと思うようになって

きた。

プチゴージャスな部屋は趣味がいいです。

部屋の照明用の蝋燭立てのうねうね模様に覚えがあります。うむ、あれは星原樹の葉っぱをモチーフにしているものだ。ということは、ここは神殿なんだろうか？　私が眠っちゃったから、ここに連れてきたのかも。わざわざ星都に帰ったんだろうか？　そんなわけないですよね。大体帰る術って結構面倒っぽいし。

部屋には私以外の誰の気配もありません。ひっそりとした空気が流れている。

さて、誰もいないことには聞けない。今は手かせも足かせもついていないから、まさに野放し状態です。これは……部屋を探検しろというお達しなのか。了解した。とりあえず先に観察をしてみる。

部屋一面を覆う絨毯は深い紅でふかふか。所々織りで模様が入っているのが上品な感じだ。壁は真っ白。色が激しかったら目がチカチカするかもしれないけれど、両方とも押さえた色で勝負している感じがします。

寝台はつやつやのなんだか良くわからない布地で出来たシーツを敷いています。肌触りが最高級になめらかそう。でも余りにも高そうで気後れがしますよ。

うーむ、ここがドコで、誰が連れてきたんだろう。全くヒントはありません！

私は更に寝台を観察するために視線を落とした。

思わず息が止まる。

大変なことになっています。……見間違いじゃないよね。

現実逃避をして、空を見上げると心が洗浄されます。洗い立てのシーツって気持ちいいよね。

今日は外はなんだか曇り空みたいです。

窓から見える空が白灰色をしているからそう思ったんだ。

あ、遠くに見える屋根が青い。ん？　やっぱりここは星都ですか？　戻ってきたのかな。

と、平常心に戻ったところで、問題のものをもう一度見てみる。

私の下に、私がいる。

う、うん、ゴメン、混乱して自分でもなにを言っているのか分からない。振り返ったら、後ろに寝ている私がいるとか。

落ち着け。クールになるんだ！　もう一回、見てみよう。

……どう見ても、鏡でよく見る自分の顔だね！　わあ、そっくりさんが寝てるー。じゃなくて！

何よりもそれよりも、私を見下ろす私の身体が、透けている方が問題だと思うんだけどおおお！　まさにシースルー、すっけすけですよ！　私は恐る恐る全身を観察してみた。起きている身体半分が、腰からはえているような状態です。なんでだ。じゃあ、このまま後ろに倒れれば戻れるはず！　私はそのまま後ろの私へと倒れこんだ。

が。

ぼよーんと弾かれて、全身私の身体から追い出されましたああ！

凄いスプリングのベッドで跳ねたらこんな感じなんじゃないかな。

えええ、なんでっ、私の身体はそれでしょう！

いいじゃないですか、戻ったって！　それを追い出すなんて。といっても、文句をつける相手もいないけどね！

それにしても、身体に入れない様子。むむむ、どうしてくれよう。

自分の身体の横に座り込み、悶々と考える。

私はごそごそと一人で寝台から降りる。もう一度勢いをつけて、身体の上にダイブ！

が。またぼよーんとした何かに阻まれます。ううう、ここまできたら意地になるよ！

半透明のまま、立ち上がり、腰に手を当てる。

半透明といったものの、服を纏ったままだ。つまり服も一緒に半透明です。私は眠っている私と同じような格好をしていた。裸じゃなくて、よかったね！　これは噂に聞く幽体離脱というヤツなんでしょうか。何というレアな。どこかの作家さんの創作ではないらしい。手をしげしげと眺め、その向こうに風景が見えるのに溜息をついた。どう見ても、半透明。

ど、どうしたらいいんだろう。

まさかの霊体になってしまいました……。

浮遊霊C、死後のことを考える

……最近、眠いと思っていたら私とうとう永遠の眠りについちゃったんですかあああああ！

どうしよう！

でもどうしようもない！

そろそろお葬式はじまっちゃうんだろうか。誰が参列してくれるんだろう……って違う！　ここが星都だとしたら、パン屋の人たちはさすがに参列できないよ！　というかひっそりとした式でいいです。今もなんか死体な私は放置されてるっぽいから、密葬だと信じたい。ひっそりと、しめやかに埋めてやってください。

それにしても、お葬式始まるのに私こんなところで浮遊霊してていいの？　神官様とかに見つかったらさっさと除霊されそうです。

汗をかきそうなこの事態に、汗も滲まないいいい！　やったね！

汗は乙女の敵だったしね！　ウフフ、これで汗臭いとかとはおさらばですよ。

……ついでに、人生ともおさらばっぽいけどおおお！　こっちは想定外だったね！　負けた！

うわあああああ！　これなら太るとか我慢せずに、あれやこれ食べておけばよかったああ！　あと、陸馬さんのブラッシング途中だったし、勇者様にご飯奢ってもらう約束を果たしていない。あと、神官様に葬式だと多大な迷惑をかけそうだな。大体、祭礼式典は神官様の稼ぎ時だと聞きました。笑顔が黒かった。こんなにお金にならない仕事は無いよね！　すみません！　あ、あと本を返してない！

荷物から適当に抜いちゃってください。えーと他にはバッグの中には生ものが入っているので、処分してやってください！　あれから何日経っているか分からないけど、腐っていると思われます。他には何かあったかなあ。

といっても、伝えられないよね！　何故なら私は現状、霊だから！　物がつかめるかどうかも分かりません。どうしようもない！

こんなことならちゃんと遺言状書いておけばよかった！　分配する財産も何もないけどね！

うーん、意外と未練たらたらだなあ。こんなにも私も欲にまみれていたのか！

でも、こうやって出来なくなってからいろいろ考えるってなんともいえない感覚だ。もう、普通にみんなと話したり、ごはん食べたり、走ったりすることが出来ないんだなあって思ったら、胸の辺りがぎゅうっとなりますよ。つらいというよりは、悲しい。当たり前と思っていたものが、当たり前じゃなかったショックが思ったより大きいみたいです。

でも裏のおばあちゃんが言ってた。いつ死んでもいいように身近なものは整理しておくべしって。ものだけじゃなくて、いろんな物事を整理して、きっちり片をつけなきゃ後悔するんだって。人生、何があるか分からないらしい。おばあちゃん、さすがです。今更言葉がじわじわ効いてきました！　人生の深みが半端じゃない。そうだよね、後悔しない人生を送りたかったなあ。これからは、霊ですけどっ。霊生っていうの？

こんなに唐突に人生終了って、世の中って何が起こるかわからないんですね……身に沁みます。

でも死因はなんだろう。さすがに若い身空で死んじゃった私、死因ぐらいは知っておきたい。これからの健やかな死後の人生のために！　だって恨み残して化けて出なくちゃいけないかもしれないし。死因は結構重要です。

途切れた記憶を掘り返してみる。むむむ、最後の記憶は浄化をしていたぐらい……かな。うーん。そうすれば、死体をお二人に運ばせたわけで。まさに申し訳ないです！　平謝りだよ！　今度お会いしたら土下座ですよ。お先にあの世で待ってるっ。あの世ってあるんだろうか。星教では星のかなただと言っていました。ぶっちゃけ、

飛べませんから！　更にどこから行けばいいか判らないし。やっぱりしばらく現世を彷徨うしかないのかあ。もうちょっとホラー物の本を読んでおけばよかった！　これからはさすがに白さんも知らない世界だろうし、先輩がたは実体験したあとは死んじゃってるしね！　これから白さんさえも知らない世界に旅立つのです。あ、ちょっと優越感。一歩先往く町民ですよ！

それにしても、これだけぐるぐる考えても死因が思い出せない。浄化をしました。そして、人生終了。

いや、何か間にあるだろうよ！　もうちょっと覚えておこうよ！　誕生と死亡は自分の意思でできないけどさ、せめて死亡は覚えておきたいっ。

ひらめいた！　そうか、死体を見れば分かるかもね！　うっ、死体……自分のでも怖いです。だってなんか霊が出そうじゃないですか！

あっ、私が霊か。じゃあ、まだ大丈夫かな。

気を取り直して、転がっている自分を観察してみる。シーツを丁寧におなかの辺りまでかけられています。胸のところで手を軽く組んだ格好です。

こう、客観的に、横から見ると……私、かなり胸ないですか？　もしかして、本当にゼロ地点ですか？　地味にショックを受けながら、横からコンプレックスの平原を見詰めます。くうっ、何故ここが育たなかったのか。生きている間じゃないと、成長できないのにね！　と言う事は、これから私はずっと霊ではこの体形！　なんということ。

顔色は死体の癖につやつやしてるな。髪は洗ってもらったのか、ふわふわになっています。さすがにみつあみじゃない。

うん、元気に寝ているようです。……ん？　寝てる？

じーっと凝視していると、僅かに胸の辺りが上下しているのがわかりました。あ、なんだ生きてるみたい。へー……って思わず私は二度見しました。

え、生きてるの！

浮遊霊C、お出かけする

生きてる……生きてる！　よかった……。

私は思わずへたり込む。じわりと涙が浮かんできた。霊だけど、涙は出るみたい。新しい発見だね！

私は少し気持ちを落ち着かせながら、眠る自分の身体の隣に腰掛ける。といっても、シーツにはしわの一つも出来ないけど。

死んだと思って混乱していた頭が、ちょっとだけ冷静なってきた。旅で亡くなった方を見ることが増えていた。その時、こんないい顔色してなかったし。何で気付かなかったんだろう。あ、そうか、私が霊になってるから死んだと思ったんだね！　早とちり早とちり！

うう、生きてるならなんでこんなことになってるんだろう。余計に意味が分からなくなってきた。膝を抱えてベッドの上に座り込む。膝の上にそっと溜息を零した。

その膝でさえ、半透明で向こうの景色が見えるんだ。直視しなければいけない現実ってこういうことか。どうしようもなく不安になっているけれど、この部屋も部屋の近くも人の気配がないんだよね。静か過ぎる。だからてっきり私が死んだのかと思ったんだ。

それに、ベッドサイドとかには何もない。誰かを看病しようと思ったら、いろいろ置いていると思ったけど、私の思い込みかな。タライとか、飲み物とか。あー、でも寝てるだけって思われてたら仕方ないかも。寝てる人は看病要りません！

呆然としているのもなんだかいやだから、とりあえず自分の身体に向き直る。ちょっと霊魂そこに入れなさいよ。

自分の額に手を振り下ろすけど、ぼよんと跳ね返る。えい、ぽよん。

何これ、ちょっと面白い。バシバシ叩いたけど、そのぼよんぼよ

んは終わらないし、私は起きないし、本来の目的を見失っていることを思い出した。ちょっと冷静になろうよ。

やっぱり身体に帰れないどころか、触れないらしい。実験終了です。本当にどうしようね。

眠る自分を見るって、かなり変な気分になる。けど、さっき気付かなかったことがあるかも、と思いなおして観察してみるよ。

顔。よだれは垂れてない。大丈夫。

明らかに髪は綺麗にしてもらっている。

服も着替えてるし、本当にただ寝てるだけに見えるなあ。た、ただの寝坊だと思われてる？　違いますよ！　私はここですよ！　わーん、なんか変な能力でも持ってたらここですかさず自己主張できるんだけどね！

悲しいかな、どこまでも一般庶民です……霊になってまで、何の能力も無さそうとか。部屋をうろうろしたけど、私の荷物もない。あれ？　本当に、一体何がどうなっているんだろう？　お枝様も見当たらない。仕事終了ですか？　ま、まさかクビとか！

震え上がる私。思わずよろけて、サイドボードに触ろうとしたとき、そのことに気付きました！

何度触ろうとしても、スカッと空振りする手。よく見たら、触れてない！　サイドボードに溶け込んでいるよ。うわあああ！　本気で霊です。そうか、ホラー小説に書いていた幽霊って、本当に壁抜けていたんだね。今、実体験してものすごく納得している。ちょっと感動ですよ。これだけは霊になってよかったね！　……や、全般的によくないけど……。

でも、それだったらもう一つおかしい。私の身体以外すり抜けちゃうんだったら、床も貫通しそうじゃないかな。座り込んで自分の足元を見てみる。あ、浮いてる。なーんだあ、ういてるんだはっはっは！　って、笑い事じゃないよ！　自分ツッコミが増えてきた。これから私こんな感じでひとりごと倍増するのかなあ。怖いです！

身体に戻りたい。

ためしに気合を入れて浮くぞ！　と念じてみたら、拳一つ分ぐらい浮いた。でもそれだけだった。そこから一歩も動けやしないよ。霊にもランクがあったりして。とりあえず、私は庶民ランク確定ですがっ。普通に歩いたら、ちょっと浮いているようだけど、歩ける。霊っぽく飛んでいくとか、ちょっと憧れでした。

とりあえず、ここにいても仕方がないから何とかしよう。よし！　気合を入れるために、両手で頬を叩いてみる。でも痛くないから霊体を実感しただけでした。逆に涙がこぼれそうだよ。

ドアノブを持とうとすると、思いっきりスカッと空振りしてバランスを崩した。

っっとお！　こけそうになるところをなんとか踏ん張る。あ、頭だけ廊下に出た。もうちょっとこの身体に慣れたらどこにでも行き放題だね！　誰の秘密でも暴けそうな気がするよ！

頭だけ廊下に出てるのも気持ちが悪いので、そのままドアをすり抜けて部屋の外に出た。やっぱりいまいち知らない廊下です。じゅうたんは深い紅。んん？　神殿のじゅうたん、青が多かった気がするんだよね。といっても滞在一週間なうえに勉強部屋に閉じこもってたから、神殿施設にはさっぱり詳しくないです。これは迷うな。どう考えても迷うな！　でもさすがに私、学習しました。

私は霊。霊だから、壁なんて何それになるんだよ！

部屋と反対側は、どうやら部屋が無さそうなので、さっきと同じようににゅっと顔を突き出してみる。ウフフ、傍から見たら壁から首が生えている状態！　まさにホラー！　これが夜だったら雰囲気バッチリなのに。

首だけ出すと、空にそびえる星原樹の根が見えた。あ、こっち側だったんだ。部屋からの窓では見えないはずだ。納得しました。納得してから、外の景色に違和感を覚える。なんだろうな。

一つだけ分かった、ここは星都だ。

連れ帰ってくれたのか、一体何があったのかは分からないけれど、

ここに戻ってきていたみたいです。よかった、やっと現在位置が分かった！

けど……お二人は何処へ行ったんだろう？　忙しいから仕方ないのは知ってるけど、行き先が分からないのが少し寂しいと思う。これはわがままだろうか。まあ、寝こけている私はお荷物にしかなりませんが！

よし、とりあえず自分で現状を把握してみるよ。

調査開始！

いつも迷いがちだから、今日はきちんと目印を決めて歩きます。

よし、あの青い壺を右だ。次はあのバケツを左。霊体なせいか、ものすごく身体が軽いです。凄くすいすい廊下を進んできます。息切れ知らずだね！　勇者様の体力セレブは、こんな感じなんだろうか。ちょっと想像します。

目印を覚えながら、気になったことを思い出す。

それにしても、さっき見た星原樹、ちょっとおかしくなかった？

薄暗く見えた上に、なんか見えにくかった。私の目が霊になって悪くなったのかな。それとも本の読みすぎ？　あ、その理由は知的でいいかも。でも、今更メガネも発注できません！　本当に生前にいろいろすべきだよね。人生って難しい……。

左、右、と覚えながら歩いていると、廊下の先にようやく女の人たちが見えた！

あの服って、姫様付の人たちだよね。前にぞろぞろ出てきた人たちだ。

仕事中かな？　それにしては固まってひそひそ噂話をしている様子。

なんですか、私も混ぜてください！　ついでに私が見えないかどうか実験してみる。

こんにちはー！

あ、聞こえてませんね。誰も反応しませんでした。予想通りだけど、ちょっと落ち込む。

「でもあの話本当かしら、世界が滅びるとか言う噂……」
「確かに星原樹もおかしいし、変な噂が流れるの、分かるわ」
なんか凄い噂が流れるんですが！　私が知らない間に何があったんだ！

浮遊霊C、どっかの部屋に侵入する

お付きの人たちは顔を寄せて不安を口にしている。余り大声でいえない話題らしい。五人で固まってひそひそ話をしている。私はさりげなく混ざります。隣のお姉さんのドレスから生えてるけど、許してね！　それにしても、さすがは星都。お付きの人たちの言葉もどこかお上品です。

「勇者様がご帰還になったそうだけど、この時期が時期だからおかしいっていう話です」

「神子様も体調不良とかでずっと出ていらっしゃらないし」

思わぬところに私の話題です。びくっとするよ！

「でも騎士団に招集が掛かっているって聞きましたわ」

「魔物の出現が多くなっているのに、前線から呼び戻しているとか……明らかにおかしいらしいです」

皆だんだん青ざめているみたい。そりゃあ、こんな話題だったら暗い顔になるよ！　分かりますその気持ち！

「それに、なんだか新しい術を研究するって、魔法使いが呼び集められているみたい」

「魔王の呪って大丈夫なの？　魔法使い、怖いわ」

皆さん抱える不安が同じなのか、話せば話すほど顔が暗くなっていきます。

「でも勇者様がいらっしゃるんだったら……大丈夫よね？」

一人がちょっと明るく言います。そうそう、と他の人も同意して、なんとなくそのまま廊下での会話は終了したみたい。皆さん、解散しました。私はその場所で留まって、どーんと落ち込みだしました。

とりあえず、聞いた事を頭の中でグルグルと整理してみる。

勇者様達、帰還しているって事は、ここにいるんだ。……お会い

できるかなあ。

私が放置されているのは、寝こけているのが秘密にされているせいですね！　すみません、早く身体に戻って仕事を再開します！

こんな大変な時に眠りっぱなしって確かに酷すぎる。何でこんなに寝るようになったんだ。むむむ、考えても答えは出ません。ささっと帰って、身体に戻る方法を見つけるよ！　噂レベルでも大変なことになっている現状、猫の手も借りたいはず。つまり、私でも何らかのお手伝いが出来る可能性があるのだ！　やっと役に立てればいいけど。

そ、そのためには身体に戻らなきゃいけないしね。よし、帰ろう！　ついでに生きかえろう！　やり方は分かりませんがっ。

私は気合を入れてさっき通った道を思い出しながら引き返す。途中、何人か掃除の人とすれ違う。お疲れ様ですー。聞こえないだろうけど、大きな声で挨拶するよ！

これが裏方の仕事！　こうやって星都の美しさは維持されているんですね！　社会勉強になります。右、左、ここで青い壷が……あれ？　壷……があったと思うんだけど。覚え間違いかな？

そのときすれ違った人を、私はそのまま目で追った。あ、青い壷持ってる。ああそうか、移動させているんですね。だからさっき見当たらなかったのか。じゃあ、ここが壷の曲がり角かな？　とりあえず勘を発揮して、くりっと左に曲がる。

どこもかしこも同じようなデザインだから迷うんだよね。？えんえんと続く赤いじゅうたんと白い壁、似たような扉！　本当にここに就職した人は大変だろうなあ。どこかの部屋を掃除して来いって言われても、私だったら、まず部屋にたどり着く自信がないね！

……そうだね、たどり着く自信がないね……。

なんでじゅうたんがここから緑？

明らかに違う雰囲気だなあ。壁の色も茶色の木目が混じったり、

違う落ち着いた雰囲気になってきた。兵士の……いや、鎧が立派だから騎士様かな？　廊下でうろうろしているのを見る回数が増えてきた。道、間違えているよね。でも大丈夫！　ここで私の無駄知識が発揮されるのです！

前、教えてもらったことがある。王城と神殿は繋がっていて、星原樹をぐるっと囲むように建てられているって。つまり、こうやって辿っていけばそのうち帰れる！　ハズ。だって壁抜けも余裕ですから！　浮遊霊になると、そのあたりの心配は無くなるのか。これはこれでお得なのかもね！　この状態なら、悪い人とも会話できないし、食べ物で吊られることもないよ！　一人で街も歩けます。おお、新しい発見。今度身体に帰ったら、自由自在にこれになれるか研究してみよう。

帰れたら、だけど。

廊下をふわふわ歩きながら、だんだん落ち込んできた。

だって、誰も反応しないんだもん。私がいても見えないんだろうな、知らない顔して皆通り過ぎていく。ここにいるのに、見られないってかなりショックだ。じわじわと心が削られていきます。幽霊状態も、心が強くなければできない職業だったんですね！　安易に新しい職になることは危険でした。自分からなったんじゃないけど！

誰にも見られない私。

もしかして、このまま勇者様達に出会っても、気付いてもらえないんだろうか？　お二人に無視されたら、本気で立ち直れそうにないな。

ちょっと想像したら、それだけでじわりと涙が出てきた。身体に帰れるかなあ。なんでこうなったんだろ。

目元を擦りながら歩いていたせいで、廊下からはみ出てどっかの部屋に踏み込んじゃいました。得意の壁抜けですよ。とりあえず、一歩先が外じゃなくて良かった。ここは一階じゃないから、壁ぬけました、足元無い、結果自由落下という感じで、ぴゅーって落ちそうな気がする。幽霊だけど、落下するよ！　……多分死なないけど。

なんだか死んだかもって思ってからいろいろ考えたことが頭を駆け巡ってなかなか涙が止まりません。つまり、寂しかったり、混乱してたり、死ぬのが怖かったり、そんなあたりの感情が頭の中にこびりついてて、それがじわじわ出てきた感じ。

我ながら情けないことに、泣きながらとぼとぼ歩いていたら、また違う部屋に入り込んでしまった。もう既に現在位置が全く不明です。うう、また涙が出てくる。

中には目つきの凄く悪い男の子が、大きい椅子に座って何か書き取りをしている。小さいのに働いて大変だなあ。貴族だろうな、ゴージャスな衣装を着ています。見えないだろうけど、お邪魔してゴメンなさい。

一応頭を下げて出て行こうとすると、

「昼間から泣きながら徘徊するな、うっとうしい」

と、男の子がぼそっと呟きました。私は周りを見回します。部屋には誰もいません。

「そこの女、お前だ」

へ、私ですか？　驚きすぎて涙が引っ込んだ。男の子は目つきが悪いままこちらを睨みつけてきます。濃い紫色の目で、白金の髪、お人形さんみたいな容貌の男の子ですが、目つきの悪さが全てを台無しにしています。

半信半疑で見返したら、バッチリ目が合いました。そして睨まれた。ひい！　あまりこんな風に睨まれるのは慣れてないから身体が固まるよ！　霊だけど！

「幽霊なら幽霊らしく、夜中に出てろ」

口の悪さもいろいろ残念だね、少年！　そこまで考えて、今のセリフの意味にやっと気付いた。

え、私見えてるの？

浮遊霊C、名前を聞かれる

『あなたは、私が見えてるんですかっ！』

勢いよく言った台詞に、少年からは鋭い一瞥がとんできただけだった。

み、見えているんですねっ。了解しました。ついでにいろいろ聞いてしまう。返事があるか判らないけど、勇者様で鍛えられた会話力を見せ付けるときがやってきました！　つまり、返事が無くても会話を続けるスキルですよ。え？　空しいだけ？　そうは言っちゃいけないよ。

『ふつうの人には私は見えるんですか？』

明らかに年下だけど妙に威圧感がある少年に、私は正直気後れする。機嫌が悪いのか悪くないのか分からない目つきの悪さだよ！　相変わらずの怪しい敬語で話しかける。少年は黙って書き取りを続けている。ちょっといらっとしたのか、羽ペンに力が入りすぎて、今、インクが飛びましたね！　見ちゃった。そうだね、書き取りの途中だったら邪魔だね！

『か、書き取り終わったら教えてくれますか』

ちょっと少年に近づきながらなおもお願いすると、少年は書き取りの手を止めてこちらを見上げた。んん？　誰かに似てる気がするんだけどなあ。少年は不機嫌そうなまま私を見上げます。目つきの悪さは倍増です。ひい！　怖いって！

「僕の名前を呼ばないということは、お前は僕を知らないのか」

なんですと。

予想外の言葉に私はぽかーんとしました。

え、少年は有名人だったのか！　でも誰だろ。思い出せないっ。さっき思ったどこかで見たっていうのはそのせいかな。じーっと少年を観察してみる。思い出すかな……。すると、少年がものすごく

嫌そうな顔になった。
「自国に出る幽霊にさえ顔を覚えられていないのか……」
少年は遠い目をして溜息をつきました。と、年に似合わず重い溜息だね！
『有名人なんですか？　すみません、田舎ものなので存じ上げてないみたいです！』
正直に謝ると、少年は微妙な顔のまま、
「いい」
と言う。で、少年は誰だろう？　質問をしてもいいのかな。私はさっき聞いた事を繰り返してみる。
『で、あなたは誰ですか？　で、私って他の人にも見えるんですか？　あなたにだけ？　それと、ちょっと迷ったんで、ここがどこかを聞きたいんですけど！』
「一度に言われて僕にわかるか！」
あ、ごめんなさい。ですよね、一度に言われたって、私でも覚えられないよ！　神官様あたりなら可能そうなところが恐ろしいです。数人の言うことを聞き分けれるんじゃないだろうか。勝手な思い込みですが！
「とにかく名を名乗れ。話はそれからだ」
名前ですか！　えーっと……つまり、あの名前を名乗らないといけないんですか。これはとんだ羞恥プレイ！　まさに時間差攻撃です。今までは大体神官様辺りが紹介してくださっていたか、相手があらかじめ私のことを知っていたから、自分で言ったことは滅多にないんです！　あの恥ずかしい名前を……。自分で神子という。いじめですか、いじめですね！　私はとことん断る覚悟で口を開いた。
『えーと……、言わなければならないですか？』
少年の顔が渋いものとなる。うっ、明らかに不機嫌です。言わなきゃ勘弁してもらえなさそうです。ひい！
「お前は星術に詳しいのか？　ぼくも保険が欲しい。悪いようにしないから、きちんとした名を名乗れ」

少年の使う言葉が難解すぎて、私にはさっぱりです。お子様だといってなめるなっていう意思表示でしょうか！　とかく背伸びしたい年頃なのでしょか。

私が馬鹿なのかどうかは横においてくださいね！

『共通語で、平たく、判りやすく、今のお話の解説を要求します！』

どーん。正直に言いました。意味がわかりませんでした！　かといって、何でも知ってる大先生の神官様はここにはいません。解説を要求することなど出来ないよ。代わりに少年に聞いてみる。

少年は鼻を鳴らしてちょっと馬鹿にしたような感じだった。小生意気ですね！

「自分の身元を明らかにしてから挨拶するのは基本だろう」

偉そうに少年は言った。それにしてもいい服着てますね！　ふわふわのレースがついている。男の子でレースって誰の趣味だろう。親御さんでしょうか。

『で、星術がどうとか言うのはなんなんですか？』

「力の強い人間なら、名前を呼ぶだけで支配できるらしいぞ。世界はえーといんりつ？　とかいうのの力が強いから、言葉に縛られるんだとか」

初耳ですね！　少年はいろいろ知っているんですね。単語的に怪しいとはいえ、私よりは確実に。……私も遠い目になりますよ。

『でもそんな怖いことってあるんですか？　相手の名前呼ぶだけで悪いことしほうだいじゃないですか』

「馬鹿、普通できるか。出来るのは勇者殿ぐらいの、特別な人ぐらいだ」

へー勇者様達ぐらいかあ。凄いね！　名前呼ばないんだなあ。

『勇者様達って凄いんですねえ。教えていただいてありがとうございます！』

少年は不機嫌そうにぷいっと横に向いた。耳が真っ赤だ！　照れている！　判りやすい！

「で、ここまで僕が説明したんだ。お前はさっさと名を名乗れ！」

うっ！　きましたね！　私はてっきり忘れているものとばかり。私だったら絶対忘れているよ。あ、私が忘れやすいだけですか、そうですか……。

とりあえず私が名乗れる名前は一つだけだ。

『えーと。は、はじめまして、神子といいます……』

自分でも挙動不審に挨拶すると、少年は思いっきり微妙な表情で振り向いた。

「おまえが？　神子様はご病気だと聞いたぞ」

うう、目線が痛い。少年ドンドン目つきが悪くなっているよ。将来街で彼が歩いていたら、チンピラに絡まれそうなぐらいだよ。怪しまれているのは判るね！　その名前からしたらもっとキラキラしい人間が出てくるはずですよねー。残念！　私でした。なんともガッカリな事実です。

『病気かどうかはよくわからないんですけど、気がついたら幽霊状態でした！』

「幽霊ではなんとも名乗れるか」

あっ、少年が私を嘘吐き呼ばわりしているっ。えーと、えーと、あ！　そうだ。

『私の名前、【０／Ｍｖｖｋ０】というそうです！』

ちゃんと星語で名乗ってみると、少年があんぐり口をあけた。顎の下に手を当てて閉じたいぐらい見事に口が開いているよ。

その反応はさすがに酷くないですか。私でもちょっぴり傷ついちゃいますよ！

「ほんものか……これが」

少年のガッカリ具合が加速しました。ガッカリさせてゴメンね！

でもぶっちゃけ聞いたのはそっちから、私悪くないよ！　ふふふ、そこまで驚愕させる事実ってどうなの。ヤッパリキラキラゴージャス美人が一般的な神子様ってかんじなんだろうか。

「ほんものならしかたがない。僕はこの国の王子だ。一応、来年には立太子の予定だった」

へー王子様。
え、王子様ですかあああああ！

おー凄いですね！　ふーん。へー。……で。

『立太子ってなんですか？』

ふって湧いた王族用語？　の解説を早速要求してみた。少年は肩を落とし、めんどくさそうな顔で、

「次の王様になる王族を決める儀式のこと」

と付け加えました。

ふーん、そうかあ、大変ですねえ。

そういえば聞いたことがある。この国では女性、つまりお姉さまたちじゃなくて、男の王子様が継ぐのが慣わしらしい。

家業を継ぐのはいろいろあるって、パン屋のおかみさんも言ってました。おかみさんも兄が継ぐはずだったパン屋を継ぐはめになったらしい。なんでも冒険の血が騒いだ兄が家を飛び出したとか。おかみさんの旦那さんが次男だったけど家業を継ぐ予定だったらしく、婿養子に来てもらう交渉とか、パンの修行とか、かなりもめたんだって。でも二人の愛で乗り切ったとか。愛って凄いな。最終兵器だよ！　とにかくかなり大変だったと聞きました！

そうだね、庶民でも家業を継ぐのはかなり大変なことなのに、王様って大変だよなあ。庶民には想像もできません。キンピカの椅子に座って、臣下の言葉に適当に頷いて、よきにはからえって言ってるだけじゃ無さそうだしね！　あ、一般的イメージですよ。

『だからいっぱい勉強しているんですね！』

感心しながら少年の手元を見る。ただの目つきが悪い少年じゃなかったのか……そうか、少年じゃなくて王子様だった。

「でももういらないし。書き取りをしても、すべてむなしい」

急になに悟ってるんですかっ。私より若いでしょうに！　私より若いんですから、フレッシュで弾ける感じでいってくださいよ！

私は力説した。
『若い身空で何言ってるんですか！　もっと子供らしくこう、はじける感じで行きましょうよ！』
王子様はものすごくあきれた顔をしています。えー、なんなんですかその反応。不満げな私に、王子様は頭を抱え込み机に突っ伏しました。伏せた下から、また溜息が聞こえます。
こうしてみると金の巻き毛がお姉さまがたに良く似てますね。あ、つむじ発見。つつきたい。意気消沈している王子様の肩に透明ながらも手を置きます。
『まあ、元気出してくださいよ』
「……幽霊に励まされても」
はっ、そうでした！　私幽霊ですよ！
『幽霊だからこそ、いろいろ後悔とか考えちゃうんですよ。思ったよりも、命は大事です！　どうやら一人に一つしかないようですよ！　もうちょっと頑張ったらよかったなーって思い知りました！』
そこで何か大変なことに気付いたらしく、王子様ががばりと顔を上げました。
「というか、本当にお前が神子様なら、死んでいるのか！　なんでだ！」
『えっ、死んでないですよ！　勝手に殺さないでください！　ちょっと身体に帰れなくなっただけでっ』
「それが大問題だろうが！」
おお、王子様の突っ込み。ロイヤルかと思いきや、意外と普通でした。
その上げた顔を改めてみて、思い出しました。国王様一家の肖像画に、確かに一人男の子がいたと思う！　三人姉弟なんですよね。画家さんは姉弟は似せて書いていたな。目つきはさすがに修正されてたと思う。
唯一の王子様なのに、一番影が薄い殿下として有名でした……。姉上達が濃すぎるのもよしあしですね。影が薄いっていうことは、

普通な方かと思いきや、幽霊と会話する王子様だったとは。やはり彼も濃い人物だったようです。

『なんで私も幽霊になったか覚えてなくて。ちょっとどうしてこうなってるのかなと思って、散歩している途中です』

王子様は眉間に皺を寄せました。今からそんな顔してたら、皺になっちゃってずっとまぶしそうな顔になるよ！　大人になって癖になるから、やめたほうがいいんじゃないかなあ。

「……そうだな、こんなに会話が続く幽霊もおかしいし。あいつらとは気配が違うから、生きているって言うのを信じてやる」

おお！　急に信じてくれるようです！

『普段から幽霊をよく見るんですか？』

王子様は憂鬱そうに頷いた。本当に、この王子様笑顔以外の表情ばっかりですね。勇者様みたいに無表情も怖いけど、こんな風にアンニュイなの人もとっつきにくいです。

「大体は自分の恨みつらみばかりを言いたがるな。たとえば、その端っことか」

へ？　王子様が指差した先をみると、確かに黒い靄に覆われた半透明の何かがっ。昼間なのにその一角は妙に薄暗いです。よーく目を凝らしていると、もごもごする何かが！　どうみても、あれは！

『ひ、ひゃあああ！！　幽霊ですよ！』

私は悲鳴を上げる。だって幽霊ですよ！　はじめてみた！　自分以外ではじめてみた！

こっち来ないって言うのが判ってても怖いです。

耳を澄ませば、何か言っているのがちょっと聞こえる。

――　ウウ、つらい、苦しい、なんで私だけが、つらい……。

じょ、女性の方だったみたいですね。ずっと同じ事を意味なく呟いています。ひいいい！　聞かなきゃ良かった！

私幽霊状態だけどトリハダ立った！　なんでトリハダ立つんだ！

とにかく怖いっ。

「お前も仲間だろうが。王城にはゴロゴロいるだろう」

私がうるさかったのか、耳をふさいだ王子様のツッコミ。

お、同じかな？　同じなのかなあああ！　と言う事は、王子様は意外と日常的に幽霊を見てるみたい。余りにも平然としています。ある意味、大物なのか。そんなに幽霊ってゴロゴロいてたまるかって思うのは私だけ？　今までの道では見てないけどっ。

『あんなに怖いのと、一緒にしないでください！　私は善良な一般幽霊ですっ』

とりあえず、違いを主張してみる。祟ったりしないよ！　身体に帰りたいだけだよ！　確かにあんなに怖いのを見ている毎日だったら、顔がアンニュイになりますよね、王子様。いささか同情的になる私。

「とにかく、神子様なら早く生き返れ。世界はあと四十七日で滅びるらしいから」

ひらひら手を振って王子様は私を追い払おうとしています。失礼な。むっとしそうになり、王子様の発言をようやく飲み込みます。

……は？　なんですとっ。

浮遊霊C、現実を見据えてほしい

え、ちょっと待ってください、いつの間にそこまでタイトなスケジュールで世界が滅びることが決定しているんですか！　私は幽霊ながらも青ざめたのがわかる。えええええ、一体何が！

『おおおお王子様ッ、いつのまにそんなことになってるんですか！』

「三日前に星原樹が停止し、滅びまでの時間が始まったらしい。ただ、魔物を全滅させればなんとかなるとかならないとか」

王子様はお子様らしからぬアンニュイさを漂わせたまま仰います。た、確かにゆううつな話題ですね！

『私、ぜんぜん知りませんでした！』

慌てて忙しない動きになる私。なんで逆に王子様はそこまで落ち着いていられるんですかあああああ！　ぐるぐると王子様の周りを回ってみる。お、落ち着け自分！

……魔物って、全滅させれるの？　瘴気が生まれる限り魔物も生まれるんじゃないの？　……逆に言えば、人間がいる限り、絶望したりいやな心をいだく限り魔物が絶えることがないんじゃないかな。本当のところは一体どうなんだろう。この知識もまた白さんによるトンデモ知識っぽいから、神官様以外に聞いたら大変なことになりそうだし！　ど、どうなるんだあああああ。

そりゃあ勇者様達をなかなか見かけないわけです。とんでもなく忙しく働いていらっしゃるんじゃないですか！　たぶん世界各地飛び回ってるんじゃないですか？　すみません！　寝ててごめんなさい！

「そういえば神子様はここに帰ってきた時点で病気だから面会できない、と発表されていたから、そのころから浮遊霊してたら知らないんじゃないか？」

とにかく、と話題を一旦切る王子様。
「そのせいで何もかもむなしい……」
頬杖をついて遠い目をする。相変わらず溜息が重苦しいですね！
私は足を止めて王子様を見る。
『あ、いや、その、慌てても仕方がないんですが、そこまでゆううつにならなくても』
「だけど、子供だからできることがない。剣でも姉上に勝てないし、何かをするにしても影響力自体がない。会議にも出席できない。できることといえば、大人の邪魔にならないように星典の書き取りをするぐらいだ」
うっ。その言葉が私にも突き刺さります。
みんなが忙しいのに本当に出来ることが少ないって、意外とプレッシャーですよね。私はお枝様運搬係です。それ以上でもそれ以下でもない、それだけなんだけど、星原樹が停止したって言うならお枝様を持ち歩いても意味が無さそうだ。神子とか言うけど、実際のところは役立たずです。
それで書き取りですか王子様。なんか積極性があるんだかないんだか分かりません！
でも、この状態で私が身体に帰ったとして、何かできるんだろうか？　ちょっと落ち着いてきた。あれ、逆に寝てたほうが大人しくていいんじゃない？　ネガティブ発言ですがね！
『何か、できることがあればいいんですけどね』
王子様の横に座り込み、私もゆううつな溜息をこぼします。うーむ。
「落ち着いているな、お前。あ、いや、神子様だったか」
もう呼び名はどっちでもいいです。むしろ、王子様の口調ならお前のほうがまだ違和感が少ないです。
王子様を見上げると不思議そうにこちらを見ている。
「世界が滅びると聞いた途端、大人達が右往左往していてな。どこに逃げようかと言い出すやつもいる始末だ」

その言葉に私は首を捻る。

『でも、皆さん普通どおりに生活していますよね？』

大騒動が起こったように見えなかったな。さっきのお付の人はそんな話題していなかったし、掃除の人も普段通りに業務をこなしていた感じ。皆、もっと混乱しそうだけど。

「あたりまえだ。上層部で方針が決まっていないのに、民草に周知できるか」

ふん、と鼻を鳴らしながら王子様。尊大な態度が似合ってますね！　陰薄いとか言う噂、信じててごめんなさい。これから目つき悪くてちゃんと態度も悪かったと言いふらしますから！　あれ、悪口ですか？

『じゃあ、まだ特に対策が練られてないんですか？』

「今から各国の代表が会議を開催するそうだ。主神殿のセイヒツの間の近くらしい。星原樹の影響がなくなったから、逆に侵入者がいそうで危ないと思うんだが」

へー。あのあたりかあ。

『あのあたり、綺麗なのに皆見たことがないってもったいないですよね』

私は廊下の彫刻などを思い出した。近づける人がいないエリアがあんなに綺麗になっているのが不思議で、神官様にどうしてか聞いたことがある。

昔はまだ星原樹に近づける人がここまで少なくなかったとか。

星原樹の近くの彫刻は信仰心がものすごく篤い人たちが何年もかけて作り上げたらしい。特殊な結界を張った上で作業していたとか言う伝承なんだって、職人魂って凄いなあって思ったものです。恐らく時期的には第一期から第二期で樹の近くの不思議な扉や建造物とかを作ってて、第四期初頭に天井画が始まったとか。建築様式の鑑定をするとそんな感じらしい。神官様の知識は本当に半端ないです。

星原樹の近くを思い出していると、王子様がじっとこちらをガン

見していました。な、なんですかあああ。その目つきで睨まれると怖いです！

『な、なにか御用ですか』

怯えながら返すと、

「名乗りを聞いて疑っていたわけではないけど、やっぱり神子なんだなと思っただけだ」

王子様の中での神子基準は一体どんなですか！　とりあえず私みたいに庶民ではないことは確かだけどっ。

『大体ですね、神子とか聞いただけで夢を抱いちゃ駄目ですよ！　現実を見据えてください！』

現実、つまり私。なんという夢を砕く現実でしょう！　……自分で言ってちょっと辛くなってきた。ううう。

「特に夢も希望も抱いていないし。いろいろむなしいなと」

またそこにもどるな！　無気力だこの人！

浮遊霊C、世界の理不尽について

『こう、もっと希望を持って生きましょうよ！』

私はぐっと拳を天に突き出しました。

「この状況で？　世界が滅びるのに？」

アンニュイなまま王子様は言う。左手に持ったままのはねペンをゆらゆら揺らして、その先っぽをぼんやり見ている。うぅ、目が遠い！

『こっ……、この状況で、でも、です！』

自分でも無茶言ってるなーって気はする。だけど、この主張は譲れない。

「勇者殿なら、何とかできるのか？　だから希望を持てと？」

王子様の問いかけに、私は首を振って否定をした。そうじゃない。多分、いや、絶対勇者様達は諦めてない。最後まで頑張ると思うんだ。

実際、今までの危機はたった一人、その時代の勇者様が世界のゆがみを突破してきた。そうして世界の危機は切り開かれてきたって白さんが言ってた。だからこそ勇者様に頼る流れが出来ている。

でも、本当にそれでいいのかな。

今回も、勇者様一人に重荷を背負わせていいのかな？

街を出たあの日から、私はずっと一緒に旅してきた。その間、お二人が一度も勤めを放棄する姿を見たことがない。そこまで頑張らなくてもいいんじゃないのかなと思うときもあるけれど、お二人は全力を尽くすんだよね。旅も楽しいことだけじゃなかった。勇者様一行にみんな期待と自分の希望を寄せる。自分の希望どおりにならなかった時、何故かお二人に不満の矛先が向く。

魔物が減らないのは働きが足りないんじゃないか、って領主様達に見当違いの文句を言われていたのを見たこともある。

なんでもっと早く来てくれなかったって、八つ当たりされいた事

もある。魔物が増えているのはお二人のせいじゃないのに。そんな言葉を受け止めても、無言で戦いにいく姿をずっと見てきた。

でも、だから思う。

『勇者様達だけが頑張るんじゃなくて、本当はみんなが頑張らなきゃいけないんだと思うんですよ……』

たった一人や二人では、本当は世界は変わらないんじゃないかな？　任せちゃうんじゃなくて、みんなが頑張らなきゃいけないんじゃないかな。勇者様達だけが辛いのっておかしいと思うんだ。

椅子に座る王子様の横の床に、膝を抱えて座る。

「どうしてそう思う？」

王子様は私より年下なのに、耳を傾けてくれる。器、大きいですね！　将来いいご主人になりますよ！　女の話を聞く度量の大きさは重要だと、近所のおばあちゃんも言ってた。

神官様も知らなかったことだから、言ってもいいのか分からなかったけれど、意を決して口を開く。

『魔物は人の心の悪いところが漏れ出して生まれてくるんです。だから、本当は勇者様達だけが頑張っても一時しのぎは出来ても、全部は消せないんです』

王子様はただでさえ悪い目つきを更に悪くして私を睨む。そうなってるの、私のせいじゃないですよおおお！　視線の鋭さにざっくざっくと切り刻まれるよ！

「それは事実か？」

『本当だって、言ってました！』

白さんが言ってたから本当だと思う。ほ、本当だよね？　今更びくびくしてきた。

王子様は、しばらく考えてから、

「じゃあ、人間がいる限り魔物はなくならない。なら……話がおかしくないか？」

なんでですか？　私は王子様を見上げます。

「世界の滅びを回避するためには、魔物の全滅が条件だと。なのに、

人間がいる限り魔物はなくならない……つまり、人間が滅ばない限り、世界は救われないんじゃないか？」

えーと……そうですね、そう言われればそうですね！

ええええ！

私は混乱の余り手を振りまわす。じゃあ、どんなことしても駄目じゃないですか！

『そ、そ、そ、そうなんですか！』

王子様は落ち着け、と羽ペンを揺らします。

「慌てても仕方がない」

いや、落ち着きすぎでしょうよ！　王子様の言うこともっともだから、私は取り合えずそのまま座る。うう、変に焦りがこみあげてもぞもぞしてしまう。

「魔物は人間が生み出したもの、か。分かる気はするけれど」

そういいながら、王子様はさっきのすみっこの黒い幽霊さんを眺めました。私もつられて見ると、まださっきの幽霊さんはぶつぶつ言っています。ど、どこへ呟いていらっしゃるんですかっ、怖い！

見なきゃよかった！　でも、こんな風な幽霊さんを見ていると、人の悪意って怖いんだな、って実感する。……はっ、幽霊さんの周りの黒いのってあれも瘴気かな？　明るい部屋でも暗くなっちゃうよ！

「それにしても、この仕組みを作ったやつは結構人間が嫌いなんじゃないか？」

幽霊さんを見ながら王子様がぼそっと呟いた。私は幽霊さんの雰囲気に飲み込まれて、そのセリフを聞き逃した。なんですか？　って見上げると、王子様はなんでもないと羽ペンをひらひら振った。

なんだか幽霊さんの冷却効果でちょっと落ち着いた私は、ふと浮かんだ疑問を口にする。

『でも、その世界が救われる方法って誰が言い出したんですか？』

「その情報も開示されてないな……僕も父上に聞いただけだ」

王子様はコツコツとペン先で紙をつつきながら考えます。目つきは悪いけど、アンニュイさはちょっと薄れています。

「その話は勇者殿はご存知か？」
『勇者様というよりは、神官様がご存知だと思います！　取調べを受けました！』
こめかみをグリグリしてた神官様を思い出しながら言うと、王子様が珍妙なものを見る視線を投げてきます。なんですかその目線。止めてくださいよ。
「神官？　どの神官の話だ。神子様を取調べするぐらいだから、高位なんだろうが」
あ、そういえば違うんだった。
『えーと、大神官様です！』
「睨下に？　なにをやらかした、お前」
あ、お前呼びがデフォルトにっ。冷たい視線の圧力に屈し、私は自己申告した。
『その、し、知らない人に着いて行きました……怒られついでにいろいろ聞かれました』
「確かにそれは駄目だな。ぼくでも駄目だと分かる。自分の利用価値を知らないだろう」
ばっさり切り落とされました。ううっ、あれは自分でも大きな失敗だとおもっているから痛い思い出ですよ！　利用価値というか、奴隷としての商品価値は労働力ぐらいでしたけど！　膝を抱えたままうなだれる私の頭の上を、王子様のひとりごとが滑って行きます。
「ともかく。睨下がご存知なら大丈夫だろう」
じっと両手を見てみる。透けてる。透けてなくても、大してとりえのない私。なにかできるかな。できたらいいな。何も出来ないのが悔しくてどんどん落ち込んでくる。
「おい」
不意に王子様が私のほうを向いていった。
「どうせなら、そのまま会議を覗いてきたらいい。僕みたいな目を持っているのは、今のところいないから気付かれないと思う」
何の会議ですか？　私の顔にでかでかと疑問が浮かんでいたんだ

ろうな！　王子様はきちんと付け加えてくれた。
「これからの世界について語る世界会議だそうだ。世界各国の元首が集まる。勇者殿は参加されるかどうかは分からないがな。身体に戻ったところで、どうせ市井出身だといって弾かれるだろう？　ならそのまま覗いてきたらいいんじゃないか？」
私をそそのかす王子様を見上げる。
その表情を見ながら、不意にピンと閃きました。
『本当に会議を見てみたいのは、王子様でしょう？　見せてくださいって、王様にお願いしたらいいんじゃないですか？』
不安じゃないはずはないんだよね。しかも下手に知っている分。
王子様は少しだけビックリした顔をした。あ、ちょっと姉上様に似てますね、今の顔だったら！　けどそれは一瞬で、すぐに目つきを鋭くして、一言。
「幽霊の癖に生意気だ」
理不尽に言われました。えー。

浮遊霊C、部屋に帰ろうとする

よし、おさらいをしてみる。

右に星原樹を見ながら、直進、五つ目の曲がり角を左、次に右、直進して四番目の角を曲がると赤じゅうたんになる。あとは一部屋一部屋覗いていけばいける！

指折りながら唱えること数度。

よし、覚えてる！　やったね！　思わず握りこぶしですよ！　私の記憶力も捨てたものじゃないね！

私が今いるのは、廊下です。王子様に聞くと、どうやらここは王様の家族が暮らすあたりだそうです。へー。

ちなみにじゅうたんの色は緑がそれを指しているとか。

スタート地点は王子様の部屋の前。

方向、よし！　ちゃんと星原樹が右に見える！

私は指差し確認をして歩き始めた。これで部屋に帰れるかな？

あの後、王子様は予定があったらしい。なので私はお部屋から出てきました。追い出されたんじゃないよ！　王子様を係の人が呼びに来ちゃったから、自主的に出てきたんだよ。

その人が準備のために引っ込んだ隙に、こっそりとまた遊びに来ますって言ったら、かなり呆れてた。身体に戻ったらそんな場合じゃないだろうって小声で突っ込みをされました！　そ、そうですね。でも身体に戻れるかなあ。戻りたいなあ。……駄目だ！　悲観的になったら駄目だよね！　戻れると信じておこう。うん。よし、切り替え完了！　割と楽観的です。

王子様の周りにいようかなってちらっと思った。けど、私は絶対話しかけちゃうだろうなと思ったから止めた。

本当に、幽霊は他の人たちには見えないみたい。

さっきの係の人も、私を突き抜けて登場した。かなりビビリました。王子様と私と小声で話しているのも、不思議そうにちらりと見ていた。私が見えてないから、王子様のひとりごとっぽく見えている様子。だから、万が一王子様が私とお話しているところを見られたら、王子様に変な噂が立つかもしれないなと思ったんだ。虚空を見詰めてぶつぶつ言っている怪しい人とか言われだしたら、原因となった幽霊としましては、かなりいたたまれなくなる。だからちょっとは気を使ってみました！　唯一普通に会話できた人だしね。

ちなみに、他の幽霊さんに話しかける勇気は、まだない！　多分無理！　だって、怖いもん。自分も幽霊だけど、怖いのは変わらない！　さっき出るとき見たら、まだ壁に向かって何か呟いてたし！

会話になる気がしません。

王子様が言っていた会議というものは、どうやら夕方からだそう。王子様はとても見学をオススメしてきたけど、偉い人がいっぱいいると思うと気が引けます。難しい話しても、解説してくれる人なんていないだろうしね！　多分、何を話しているか分からないだろうなあ。みんなに見えない幽霊だけど、偉い人がいたら緊張するし。あの偉い人オーラってヤツが苦手です。

でも王子様もああいってたし、身体に戻れなくて暇になったら、怖いもの見たさでちょっと覗こうかと思っている。

あくまで身体に戻るのを試してから。こっちが優先です。

戻れなかったらすることないしね……役立たず幽霊状態が続きます。戻れたら戻れたで、役立たず神子状態になるだけだけど、爆睡よりはいい気がするんだ。

ぶつぶつさっき教わった道順を呟きながら、廊下を歩く。

忙しなくいろんな人が動き回っている。神子として歩いていた時は、こんな風に人に会うことがなかったのは、もしかしてわざと逢わないようになっていたのかなって思う。偉い人っぽい気配がした

ら、皆すうっとドアの中に入ったり、壁際で気配を消して頭下げてたりする。これがプロの技！

幽霊になったおかげで、今まで見えなかったことが見えてきた気もする。ちょっと得した気分だ。

時折聞こえるみんなの会話を総合すると、会議はどんどん開催が遅れてるみたい。

偉い人の到着がなかなかなんだって。

星術が使いにくいせいで転移がいつもより大掛かりな術になっているとか。大変だね。

覗くにしても、時間が分からないと困る。

白さんが持っていたような時計が欲しいです。あれがあればいつでも時間が分かると思う！　幽霊状態だから、腹時計は使えないし。結構正確です、私の腹時計。神官様もビックリの正確さだよ！　陸馬さんには負けるけど。陸馬さんの腹時計の正確さは凄すぎる。

ちなみに今は丁度お昼。

王子様が言っていた通りの、昼間に活動的な幽霊な私です。そこかしこでお昼ご飯が運ばれて行っているみたい。おー、綺麗な食器だね！　お昼ごはんの気配には私は敏感ですよ。

目に毒だよおおおお！　匂いがあんまりわからないのが不幸中の幸いだね！　これで匂いがわかったら辛さが倍増してた。そうごはんだよ！　幽霊になったらご飯が食べられないのがショックです。え、そういや幽霊の活動源は一体なんだろう？　王子様に聞いておけばよかった！　幽霊ってごはん食べるんですか！　人生の楽しみの半分が掛かってるからね！　あとの半分は、まあ、いろいろです。そう、いろいろ！　乙女には秘密が盛りだくさんだから。

ちなみに腹時計がないせいで、時間が良く分からないからかなり不便だ。

王子様に聞くまで、薄暗いからてっきり夕方だと思っていた！

思い込みって恐ろしいです。すっかり夕方気分だったよ。

それにしても薄暗いなあ。
私は足を止めて窓の外を見た。星原樹の周りは、うっすらと靄が掛かっている。
ちらちら見える窓からの景色は、どこを切り取ってもゆううつな感じになる灰色の空だ。
どうやら星原樹が停止した瞬間から、あんな色の空になったらしい。世界中の空が太陽が見えない状態になり、みんなおかしいって騒いでるんだって。
おかしいことは明らかだ。魔物が一気に増えて、空が暗い。本当に……世界は終わっちゃうのかな。
何時までもこの状態を隠してはいられない――　王子様は淡々と言っていた。
悲観的なのかなんなのか謎のテンションだった。姉姫様たちはどっちかといえば活動的で、ガンガン行きそうなイメージだけど、それとは逆だったな。あとで王子様って知ったから、敬語もグダグダだったけどまあよし。
これから、どうなるのかな。
ぼーっとご飯を運ぶ使用人の人たちを見ていたら、私は大変なことに気付いた。
……今、曲がった角は何番目だったっけ？

浮遊霊C、さまよいつづける

迷った。

私は呆然と周囲を見回しました。

前に広がる廊下を見て、今来た方向の後ろの道を見て、頭の中で考えます。

うん。どこ曲がってきたか、ぜんぜん思い出せない。つまり、完膚なきまで迷ったようです。

王子様に道を聞いたとき、なんだかいやな予感がしたんだよね。これは覚えられないぞって。こんな身体じゃなければ、地図を手にメモ書くか何かに描いてもらうんだけど、今の状態じゃ仕方がありません。何でもすり抜けるよ！　ある意味最強状態です。

しかし！

迷っているけど私は慌てません！　なんと、こんなこともあろうかと、王子様に迷った時の道順も聞いたのです！　……これを質問した時、かなりあきれた顔をされましたが、今更ですよ。備えあれば愁いなし！　ここまでしている私に弱点はない！　え？　記憶力が弱点とかは言わないお約束です。

まず、窓を探す、と。

今いる廊下は多分建物の内側を通っているものだ。だから右か左かを見当をつけて壁抜けをする。気分的に左を選んで、てくてく歩く。だんだん幽霊らしく壁抜けすることに慣れてきた！　慣れていいものかどうかは分からないけどね。

それにしても、いろんな部屋があるものです。リネン室だと思われる、布だらけの部屋でシーツの山と格闘する人たちを見ながら通り過ぎる。次の部屋はトイレだった。あっ、覗くつもりじゃないので失礼！　早足で通り過ぎる。その先でようやく外周の廊下と思し

き場所に出ました。明りの雰囲気が違うんだよね。外に面している廊下は、外の光を採りいれれるように作られている。蝋燭代の節約ですよね！　わかります。高いしあれ。

また壁からにょきっと顔を出して、道を確認。

あ、こっちは星原樹じゃないほうの壁でした！王城の外壁側の壁だね。

兵士さんたちが訓練をしています。号令で一斉に動いているさまがちょっと面白い。動きが揃ってる。練習してるんだろうな。芝生の生えた広場で、兵士さんたちが走り回っていました。

一口に建物というけど、本当にここ広いよ。

何人働いているか、見当もつかないよ。その人たちに全部お給料とか出てるんでしょ？　一体何がどうなってこの建物が維持されているか私には分かりません！

うーん、外の光を見ても、何時かが分からない。時間の節目には鐘が鳴るらしいけど、一日四回しか鳴らないらしいし。ちなみにお昼の鐘はさっき鳴ってた気がする。

日時計も使えないぐらいぼんやりとした陽光しかないので、結局どれぐらい時間が経ったか分からない。

会議の見学どうしようかなー。そもそも、見に行くにしても道に迷わないでいけるとは到底思えません。場所も聞いたけど、ばくぜんとしか覚えてないしね。恩返しのつもりで見に行ってもいいけど。

壁から生やした頭を引っ込めて、私はこっちじゃない方の壁側を目指して歩く。何部屋か突っ切って反対側の外周に到達！　うん、こっちが星原樹のあるほうだった。

で、この星原樹を左にして、ずーっと壁を無視して歩いていくと、そのうち赤いじゅうたんの区画に入るらしいです。幽霊ならではの道案内の仕方ですよね！　初めからこっちの方法をとればよかったかな、と思ったんだけど、正しい道じゃないから掛かる時間も倍になるかもしれないんだって。王子様はそれにしてもよく覚えてるなあ。自分の家ぐらい覚えているとは言ってたけど、これは家の中っ

ていうレベルの話じゃないと思うよ！　街がすっぽり入っちゃうと思う。街にしても、今だけキラキラしい建物は元町民の身としましてはとても眩しゅうございます。庶民感覚、全く抜けてません。

よーし、今度は歩くことだけに集中しよう！

私はそう心に決め、壁を全部無視して歩き始めました。方向音痴の私にとっては、こっちの方が楽だよね！　でも、これからは道に迷わないように気をつけようと思いました……うん、何かとツライ。迷子という響きがツライ。

何部屋かすり抜けているうちに、ふと気がつけば、かなり暗い部屋に到達しました。

うん？　ここは何だろう？

壁や天井がぼんやりと光っています。蝋燭じゃない明りに照らされた部屋だ。さっきまでいたるところでしていた、人の気配がさっぱりありません。静か過ぎる。余りの静寂に、ぶるっと身体を震わせます。なんか幽霊とかでそうですね！　不思議な雰囲気があります。

よーく目を凝らしてみると、一面に本棚が設置されている。床の近くから、口が開くぐらい上まで伸びた本棚です。それが、どこまで詰まっているか分からないぐらいずっと続いている。

本棚も一つ二つじゃなくて、何列もつなげられているみたい。まさに本の海。

おー、凄い、王城にも本がいっぱいあるんだ。かなりぼろぼろの本から、綺麗な本まで、何かの法則で全部並べられているみたい。あ、これが噂にしか聞いたことがない図書館ってやつですか！　へー、世の中っていろんな本があるんですね。

多分、壁がぼんやり光っているのは、何か光るものを塗っているせいのようです。蝋燭とか危険そうだもんね。この光ってるのが灯りの代わりなのかな？

本にも触れないけど、珍しい部屋に好奇心がうずいた！　こんな

ところ、普通には入れないよね！　まあ今の状態だったら、入ってもあんまり意味がないと思うけどっ。

物珍しさで、ふらふらと書架の間を歩いてみる。おどろおどろしい題から、読めないなんかの文字までいろんなものが目に入る。神官様とか、こういったので勉強したんだろうか。本とか読んでそうだしね！　娯楽小説とかあるかなあ。背表紙を眺めながらうろうろしてみる。

『珍しいねお嬢さん、図書室に何か御用かな』

誰かの声が聞こえて、私は足を止めた。人がいるんだろうか？　お嬢さんと呼ばれているぐらいだから、誰か他に本を見ている人がいるのかな。周囲を見回しても、相変わらずの静けさと暗闇ばっかり。

『上をみたまえ』

不思議な声に指摘され、私は反射的に上を見る。

ぎゃあああああ！

天井際に白っぽいものがふわふわ浮いています。ゆうれいがでたあああああ！！

浮遊霊C、先輩に出会う

『やあやあ珍しいお嬢さんだ、こんなところでお散歩かい？　それにしても王城で普通の幽霊を見るとは時代が変わったものだね、ボクは初めてそういった人物を見るけれど、うん、君はどうやらすこぶる健康そうなんだが一体死因は何かね？』

口を叫びの形にしたまま見上げる私にふってきたのは、怒涛のセリフ攻撃でした。口を挟む隙がないよ！　これは勇者様と別の意味で会話のキャッチボールが出来ない人じゃないかな。なんとなく引き合いに出した勇者様に謝りたくなるけど。

幽霊さんは、体重を感じさせない動きで私の前にふわふわ現れました。もちろん半透明だよ。透けてるよ。腰まであるぼさぼさの髪は、多分灰色だ。それか白っぽい色。伸ばしてるんじゃなくて伸びたのを放って置いたらこうなったって感じだ。前髪のせいで目が殆ど隠れているけど、前髪の向こうにメガネをかけている。意味あるの？　背の高さはふわふわ浮いているから不明。見たこともないつくりのブカブカの濃い色のコートにずるずるのローブっぽい服装だった。かろうじて見えてる顔や手の肌は、なめらかな褐色だった。

『ゆゆゆ、幽霊さんですかっ！』

私は怯えながら聞いてみた。あの王子様の部屋で見た幽霊さんは関わりたくないぐらいの人だったし、元々読んでいた本の影響からか幽霊怖いという図式が頭の中にあるんだ。だって呪い殺されるんだよ！　幽霊怖い！

『うん、それは分類的なものを指摘しているのだろうか？　ボクとしては、そのあたりにいるひとを指差してあなたは人間さんですかと聞いているような質問であり、その答えについては適切な返答をする自信がない。種というものが葉となり花となりそして枯れ草と変貌するように、人の名称も赤子から死体へと時とともに移ろい行

くものである。適切な言葉を探すのは難しい、今の質問へはただこう答えよう、確かにボクは既に死んだ人間であると』

畳み掛けられるような言葉に私は頭がぐらぐらします。幽霊になっても頭が痛いっておかしくないかなっ！　つまり、死んだ人なんですね、それだけは分かりました。

『ああそうか、君は様子を見る限りまだ死んでいないようだね、なら、死因などというプライベートな事情を質問して申し訳ないことをした、だけどね、そうするならば別の問題が浮上するだろう？ボクのことを幽霊とするならば、君の事は生霊とするべきだと思うね、この意見に相違がないなら同意してくれた方が嬉しい、そうするとボクは君の事を生霊さんと呼ぶがどうだろう？』

不意に返事をする間を与えられ、私はうっかり頷いてしまいました。

『え、あ、はい、それでいいです……』

『よろしい』

満足そうに幽霊さんは頷きます。なんか大失敗した雰囲気がする。

そういえば、商人の話はまともに聞いてはいけませんよって神官様がいってた。自分のペースに巻き込んで、価値観を狂わせてトンでも商品を買わせるその手口、絶対私には切り抜けることは無理だって。まさに現在、その忠告を実感しています。現状口をはさめないし。これで幸せの壷とか売りつけられたら、私はうっかり買ってしまうに違いないです。前、幸福を呼ぶ日の出鳥の足の干物買おうとして勇者様に止められた記憶が甦りました。止められて気付いた、確かにこんなアクセサリーをつけている人などいないということに。え、問題はそこじゃない？

それよりも大問題が現状目の前に転がっています。

『で、生霊さんは何をしているのかな？　若い女の子がふらふらとそんな身体で出歩くもんじゃないとボクは思うんだけれど』

そういいながら幽霊さんは好奇心いっぱいに私を観察しています。腕を組んでこちらをじーっと見るので、私も自分の格好をじーっと見下ろしてみました。なんか変なところがありますか？　視線は胸

を素通りしたのでよしとする。そこに注目してはほしくない気持ちがあります。スルーしてくれたからよし。まさに合格点です。

私を上から下まで観察した結果、幽霊さんはこんな感想を述べた。

『久しぶりに夜着姿の女の子を見た、珍しいこともあるものだ。寝ていたのかな、ふふ、白い夜着か。いい趣味だね。清潔感の中にこそ隠微さが見え隠れするとはおもわなかい？　例えて言うなら、水にぬれた白いシャツなんかどうだろうか、爽やかさの中において肌に張り付く部分に透けて見えるうっすらとした体のありようを妄想させる部分などまさに圧巻』

な、なんだか危険な方向に話がすすんでますね。

って、アッ！

遠まわしなのか直接的なのか分からない言葉で、ようやく私は寝る時の格好のままふらふらしていることに気付きました！

そういえば、たしなみってやつで、こんな格好で歩いちゃ駄目なんだよね。時折注意をされていたのを思い出しました。勇者様ごめんなさい、教育は実を結んでいませんでした……。

王子様はスルーしてたなあ。王子様の中では幽霊は幽霊だからあんまり驚かなかったのだろうか。

でも着替えろって言う方が無理なことを要求していると思いませんか！　全部透けるし。どんな服触ってもオールスルーですよ。

『霊では着替えられないですよ！　だからこの格好でしかありえないかとッ』

私の反論に、幽霊さんはにやりと笑いました。死んでいるのに楽しそうですねこのひと。

『そこは気合と根性で達成すべき課題であろうよ』

気合と根性で着替えれるんですか！　知りませんでした……。地味にショックを受ける私。

それにしても、ちょっと話が長いのを除いたら、悪い幽霊さんではないような気がしてきた。ちゃんと突っ込みに返事もしてくれるし。本当に気をつけるべきポイントはそこではないかもしれないけ

ど。謎の幽霊さんをじっと見てみる。
『で、生霊さんは何をしているのかな？』
意外と普通の質問が来ました。
『身体に戻りたいので、お城を歩いていました！』
幽霊さんはちょっと考える仕草をして、
『生霊さんの言葉にはいろいろと抜けがあると思うんだが、もう少しこの浅学なボクに詳細な解説をしていただけるだろうか』
えーっと、詳しく話せばいいのかな？　私はつたない説明ながら、部屋で目が覚めたらこうなっていたこと、よく分からないので出歩いてみたこと、王子様に出会ったこと、そしてここにきてしまったことを話してみた。すると、幽霊さんは、
『つまり、迷子か』
と端的にまとめてくださいました！　ええ！　迷子です！
『それにしても星別者の生霊で迷子か。ボクも長生きするもんだ。おおっと、もう死んでいるんだったハッハッハ』
この人のテンションに、ついて行きかねます。まさかの一人突っ込みです。でもつっこむべきところはそこじゃないとおもうんですよ！　私の微妙な雰囲気に気付いたのか、幽霊さんは空中でくるりと一回転して優雅に一礼した。
『ともかく、久しぶりに誰かと会話したのでね、嬉しくて話し込んでしまったよ、大変申し訳ないことをした』
その言葉に、私はちょっと胸が痛くなった。確かに、あんなふうに誰にも見られずにうろうろするのは寂しいし、この人が一体何時亡くなったのか分からないけどずっと一人も寂しいと思う。テンションが高かった幽霊さんが、真面目モードになったからか、ちょっと空気がしんみりしてきました。まあ元々図書室だから静かなんだけどね！　いくら霊が騒いでも大丈夫なぐらい静かです。……はっ、今私たちが騒いだら騒霊現象ですかっ。うわ、いろいろごめんなさい。静かにしています……。
このしんみりムードを壊さないように、静かな質問をしてみる。

『一体何時頃お亡くなりになったんですか？』
聞きにくいけど、正直気になります。だって、この幽霊さんの服、見たことがない服なんだよね。
『フフフ、ボクの華麗な幽霊歴を聞いてのけぞるが良い！　なんと僕が死んだのはＳｋ，６０３６だっ』
へー……って、凄い昔ですね！
ぽかんとした私に、幽霊さんは口を尖らせた。
『あんまり驚いてないのがいささか不満ではあるね、ボクの死亡年なんて素敵な情報を暴露したにも拘らずそのテンションの低さは何だろう？』
『え、ああ、驚きすぎてビックリしてましたーうわーすごいですねー』
『棒読みは逆に失礼だな生霊さん』
いや、本当にビックリしたんですよ！　そう言われてみれば、第三期の人たちの服装に似ていないこともない。多分、そんな時代の人だったら第三期の名残があったんだろうなと思うんだよね。コートとか、特に謎の材質に見える。でもそんな時代から幽霊しているんだ。本当にお疲れ様です。
『なかなか星の向こうっていけないんですか？』
『遠まわしにボクを除霊しようとしていないかい生霊さん』
じっとりと幽霊さんがこちらを見る気配がした。前髪で目線は分からないけれど見られている気がするよ！
『していません！』
『こんな善良な幽霊なのに、なかなか理解が得られないんだよ、世間は世知辛すぎるね』
『それは多分幽霊だからだと思いますよ』
私のツッコミが炸裂しました。なんだかもうこのひとに遠慮はいらないような気がしてしまって、つい本音が。しかし、幽霊さんは思った以上にあっさり納得して、それもそうかと立ち直りました。納得していますね。

『まあ、たまには善行でもしてみようか。君を部屋まで送って行ってあげよう』

『本当ですかッ』

『幽霊歴二千年弱のボクを信じたまえ、ついでに崇め奉ればよい』

幽霊さんが手を差し出します。握れるんだろうか？　ちょっと不安になったけど、お礼を言いながら触ってみる。うわ、握れた！　ひんやりしている！　おもったより細い指だった。神官様とかと違って、手の皮が厚くない。見た目からして戦闘とか力仕事はしそうにないのは分かるけど。

手をつないでから、ようやく私はちょっとだけ思考が戻ってきました。

今まで勢いで流されたけど。……えっと、つまり、このひと誰？

浮遊霊C、知らない霊についていく

この場合、そう、この場合ですね、なんと申しますか、勢いといいますか。

うん、神官様勇者様ごめんなさい！　私は今日も知らない人についていってしまっているようです。幽霊さんが私の視線に対してにっこり笑います。目が見えないからどういった表情かいまいち分からないけど。なーんかこの笑いの胡散臭さはどこかで覚えがあるんだよね。

『さて、幽霊らしく移動しようか？　君はまだ自覚が足りないから軽やかな身体が楽しいことを知らないだろう。行くよ、叫ばないように気をつけたまえ』

幽霊さんは爽やかに宣言をして、軽く床を蹴りました。びゅん、と私の周りの景色がとびます。えええええ。なんともいえない感覚の後、私の足元から床が消失しました！　というよりと、と、と、とんでます！　ヒイ！　私の遥か下に、先程までいた床が見えます。あああ、めまいがしそう！

声が出ない私を、幽霊さんはほがらかに手で引っ張ります。なんであなたそんなに楽しそうなんですかあああ！　私を痛めつけるつもりですかあああ！

『飛ぶのと跳ぶのとどっちがお好みかね？　たまには人のペースに合わせるのもいいと思うのだが君の好みはどちらだろうか』

耳で聞く限りは違いが分かりません！　つまり、どっちもいやだ！

ぶんぶんと首を振る私、ただし否定の方向で思いっきり振ったつもりだった。でも幽霊さんは華麗にスルー。

『好みがないのなら、ボクの楽しい方でいくとするか、そーれハッハッハッハ』

テンション高いなこのひと！　王子様に分けてあげればいい！　私

は荷物のように手一本を引かれてどんどん上昇して行きます。
右足で天井、次の一歩で天井を突き抜けその上の階へ、更に三歩進めばあっという間に屋根の上！　やったね！　初めての飛行体験です！　死ぬ時は皆お空の彼方に飛んで逝くって言うけれどまだ生霊の私としましてはですね、ちょっと早いかなーって思うんですよはい、早いって絶対早いってやーめーてー！
動けない私の視界いっぱいに、灰色の空が広がります。改めて薄ぼんやりした日の光の下で見ると、幽霊さんは灰色の髪をしていた。もうちょっと梳けばサラサラになるんじゃないかと思う髪を、ざんばらのまま伸ばしている。楽しそうに飛ぶからばっさばっさと髪が翻っているけど、幽霊だったら風は関係無さそうなんだけどな！　多分、生前の記憶を身体が再現しているのかもね！　よくしらないけど！　つまり今私が感じているめまいや動悸やトリハダは生前の記憶だからダイジョウブ！　恐らく死なないからダイジョウブ！
一生懸命自分で自分に言い聞かせるよ。
ぽん、ぽん、と空中を跳ぶ幽霊さん。なんでスキップなんですか、上下運動が地味に私の精神を削っていくんだけどッ。ゆらゆら揺れる視界に、私はとうとう根を上げた。
『お、お、降りたいです！』
必死の救助コールに、でも下った結論はとても非情なものだった。
『大丈夫、すぐに慣れるさ、ホラ風がこんなに爽やかだ。空中散歩の醍醐味をしっかりと味わいつくすがいいさ！　下を見たまえ、絶景だろう？』
だから！　イヤだと！　言っている！
私の必死の訴えかけも空しく、幽霊さんの空中散歩が続く。
ガクガク揺さぶられることに、だんだん私の諦めが勝ってきた。
空が視界を埋めて、力を抜いた次の瞬間。
針で胸を指されたような、ツキン、とした鋭い痛みが感じられた。

え、何で痛いの？
そのとき、幽霊さんの指に一瞬力が入る。同時に、私の身体も一瞬凄く冷たくなる。
幽霊状態なのに、痛いってどういうことだろう。
なんだろう。
落ち着かない。怖い。瞬間的に走ったその何かの予感は、どんどん不安を吸い込んで膨れ上がる。
私の様子を知ってか知らないでか、幽霊さんは空中に静止した。
私たちの足元には青い屋根の王宮が広がっている。余りの高度のせいで、建物がちょっとした小屋ぐらいの大きさに見える。
左側には星原樹が、薄い靄を纏いながら静かに佇んでいた。
幽霊さんも口を開かず静かに止まった。今のおかしいのを感じたのは私だけじゃないはず。
『今の……なんですか？』
今はないはずの心臓が凄くドキドキしている。余りの落ち着かなさに私はもぞもぞする。ぽこぽこと頭の中に不安と恐怖が浮き上がり、でもそれは根拠がないからと頑張って閉じ込めようとする。でもどんどん増殖していくそれらは、確実に私の足をすくませる。
『どうやら』
幽霊さんは足元の建物を睥睨し、そのまま視線をずらした。あっち？　確かに、私もあっちからいやな感じを受ける。何だろう、凄くいやだ。
『星術が失敗したようだね。嘆かわしいことだ』
何のことだと首を捻る私に、幽霊さんはまたあの笑顔で話しかけてきます。
『行って見るかい？』

浮遊霊C、目撃者になる（前書き）

残酷な表現があります。かなりの残酷表現です。
直接的表現を避けては降りますが、流血に耐性の無い方は御注意ください。
流血が駄目な方へは、活動報告へダイジェスト版をあげています。

浮遊霊C、目撃者になる

何だろう、何が嫌なんだろう。

まだそちらを見るだけでドキドキしている。

嫌な予感で身体がすくみます！　なんだか凄く行きたくない！

冷たい水で洗われるのが分かっているペットぐらい、身体が行きたくないのが分かる！

そんな私に幽霊さんはにこにこして言い放ちました。

『幽霊としての先輩からのアドバイスその一だよ！　気になったらとりあえず飛び込んでおくべきだね、なさなかった時の後悔よりもなした後悔の方が潔いとボクは思うから』

そうだね！　でもこれは同意じゃないよ！　力いっぱい拒否させていただきます。

幽霊さんは私の手を引っ張る。いや、ちょっと待ってください。

そうだ、この人、私が行きたくないといったところで聞く人じゃありませんでしたあああああ！　この短時間でそれだけは分かった！　よく見抜いた私。ちょっとは成長したかなっ。いや、余り成長していない気がするけどっ。余りの行きたくなさにいやいやと首を拒否の方向に振っているんですが。目の前で首を振って拒否しているんですが。

幽霊さんの目は節穴だった。前にいる私の反応ぐらい見てくださいよ！

『納得したね？　じゃあ悲劇に満ちた場所へ行くよーそーれー』

ハイテンションな幽霊さんは、また空中を蹴って私を引きずって行きます。踏ん張りようがない！　軽々と持ち運ばれるよ！　いつもより体重がかなり軽くなっております。ある意味乙女の夢？　いやいや幽霊だから。夢とか希望とかから一番遠いから。

それにしても生霊って軽いんですか！

幽霊さんがちょっと手を引くだけで、私は横に滑っていく。棒に括りつけた旗が風にあおられる、あんな感じです。目が回るううう！　さっきからなんだか人形より軽やかに振り回されている気がするんですが！

それにしても、さっき、さらっととんでもないこと言いませんでしたかあなた！　悲劇だのどうだの！　ちょっと、そんな場所行きたくないです！

『まず、行く行かないの返事をしてませひゃあああ！』

喉が枯れるぐらい騒いだけど、何と言っても生霊状態、喉が枯れることがない！　凄いね。だから王子様の部屋にいる幽霊さんとかノンストップで喋れる訳です。恨みつらみをずっと呟いても疲れないわけです。納得した。かなり納得したから離してえええええ！　もう叫びたくない！

空中でめまいがする私。幽霊でもめまいがあるという発見はあったね！

軽々と振り回されて行った先には、どこか見覚えのある壁がそそり立っていた。

あ、初めて神官様の星術で転移してきた庭だ。見覚えがある。同じような庭が幾つもあるんだったら違うんだろうけど。

幽霊さんの強引飛行は、そこで一旦停止した。

ここが目的地ですか？　幽霊さんを見上げると、にこっと笑顔を返された。

遥か空中からそこを見下ろした時、体中を悪寒が走り抜けた。幽霊なのに、毛穴という毛穴が開いたぐらいの勢いでぞわわわわって感覚が走る！　気持ち悪い！　思わず逃げようと後ずさる。

そのとき、つないでいた手がぎゅっと握られました。なんで？

強い力に私は傍らの幽霊さんを見上げる。長い前髪の隙間から、下を見る昏い翠の目が見えた。鋭い感じの目だ。口には先程までの笑みがなく、ただじっと庭を見守っている。私の目線に気付いてこちらを見たときにはまた胡散臭い笑みが浮かんだけど、まるで取り繕

っているようにしか見えないんですが。
『……なんか、気持ち悪いから帰りましょう』
握られたままの手を引っ張ってみる。でも幽霊さんは動かない。
私はじわじわ焦りがつのる。なんでこんなに焦っているか分からないけど、ここから離れなきゃいけない気がしたんだ。
『帰りたいです！』
『駄目だよ、神子。君が神の目ならば、これから起こる事を見なければならない』
その口調は今までのハイテンションさの欠片も見当たらない。こ、これが感情の起伏の激しい人っていうやつですか！　あまりの違いに逆にビックリして私の動きが止まる。でも、それは一瞬で、どうしてもここから離れたい気持ちばかりが募る。
『離してください！』
余りの恐怖に涙が浮かんできた。さっきから泣いてばっかりだ。なんだか恥ずかしいけれど、涙腺が壊れたみたいにぼろぼろ涙が出てくる。足がすくむ。
眼下に見える高い壁で囲われた庭は、一見おかしいところはない。またどこかの国から人が転移してくるのを迎えるためだろう、出迎えの神官さんたちが並んでいる。あの、例のキラキラしたゴージャス集団だ。
あの人たちも、早く逃げた方がいい。でも私にはそれを伝えることが出来ない。
分かる。
凄く歪んでいる。
彼らは星術に失敗したんだ、それは知識とかじゃなくて、何故か一目で分かった。私の恐怖がとうとう限界に達した時、それが起こった。
限界まで水を入れた皮袋がはじけるように、空間がたわんで、弾けた。
ぱん、と乾いた音。とても、軽い音だった。

次の瞬間、いくつもの何かが破裂をし、庭を真っ赤な何かが染め上げた。

私はその光景に悲鳴を上げた。

一瞬の沈黙の後、出迎えの人たちも狂乱状態に陥った。彼らの白い服を、飛び散った赤いものが染め上げている。

なんで、なんで！

身体の震えが止まらない。今まで、何度か魔物に襲われた人の死を見たことがある。

でも、こんな酷い死に方をした人たちを見たことがなかった！

ひとが、弾けて死ぬなんて。庭を染めたその赤は、余りにも鮮やか過ぎて作り物のように見えた。でも、私は見てしまった。空間を渡ろうとした人たちが現れた途端破裂したさまを。

『な、んで……』

身体の震えが止まらない。目の裏に赤い色がこびりついて離れない。

『これほどに、人は過ぎた力を手にしてしまったのだよ』

幽霊さんの静かな声が、私の硬直した思考に沁みこんでくる。私はのろのろと幽霊さんを見上げた。まだショックが大きすぎて、何か遠いところで全部が起こっているようなそんな気持ちになる。幽霊さんが痛いほど握っていた手を緩めた。匂いも温度も曖昧な今の私にとって、唯一の感覚だったそれが遠ざかるのが怖くて、逆に私がすがるように握り締める。

『星術は世界をゆがめる力だということは知っているかね？』

何もかもぼんやりとしたまま、私はしらない、と答える。遥か下方の庭では、悲鳴と怒号が入り混じる。誰が被害にあったかを確かめる人、ただ震える人、助けれる人がいないか探す人、ただ右往左往する人、混沌の坩堝に叩き込まれたかのような状態だった。その騒ぎさえも遠くに感じてしまう。ここから見たら、人々は豆粒のようだった。小さな小さな人々は、戸惑い、嘆き、叫ぶ。

神様が見下ろしている場所も、こんな風なのだろうか。人々が小

さく見える、遠い場所。
幽霊さんは淡々と話し続ける。
『世界の仕組みを自分勝手にゆがめる術が星術だ。そのせいで昔何度も人は滅びたのを知っているかな?』
私はそれは知っている、と頷いた。
白さんに見せられた滅び。見せてもらった不思議な光景。あの時代でも、沢山の人が死んだ。
でも、それはとても昔の話だったから、実感が沸かなかったんだ。こんな風に誰かが目の前で死んでしまうと、あの時感じた恐ろしさよりも更に強い恐怖が押し寄せてくることを感じる。
『今の事故は、恐らく術者の計算ミスだ』
幽霊さんを見上げる。神官様があの術を使ったときは、こんな事故は起こらなかった。そして、他の人が転移してきたけれど、それもこんなことになっていない。今回に限り、何が起こったのか。
『いつもであれば、星原樹がそのゆがみを解消していた。今はその加護がない状態だからね、いつもより計算が難しくなっている。さらにゆがみが蓄積したせいで星の巡りに対する数値が微妙な変動を見せているのだよ。残留している韻律の残骸をみると、弱威力で定型である新星術を使わずに旧星術を使ったんだろうね、……これは、人為的なミスで起こった事故だ。……人間には、星術は過ぎたものなんだよ、本来は軽々しく扱うべきではない力なのに』
専門用語があるけれど、なんとか理解しようと努める。
とりあえず、今は星原樹がおかしいから術が使えない。そして星術はひとには過ぎた力だと幽霊さんは考えている、というのが漠然と理解できた。
でも、ひとには過ぎた力だけれど、魔物と戦うならみんな使ってしまうだろう。大半の人は、星術が危ないなんて知らない。ちょっとだけ便利な術だと思っているぐらいだと思う。でも、今まで見たいに使っていて、ゆがみが蓄積してしまったら?
これからもこんな事故が起こるんだろうか。

こんな風に、沢山の人が死んじゃうの？

世界があとちょっとで滅びるって聞いたけれど、その時はどんな風に滅びるんだろうか。本当にみんな死んじゃうんだろうか。

今まで漠然としていた死ぬっていうイメージに対して、今の光景は明確な印象をあたえてしまった。

人々の死を想像する。頭を過ぎったその中に、親しい人たちの姿を思い浮かべ、私は身を震わせる。

『ショックを受けさせてすまないね、ボクはこのあたりはもう麻痺してしまっているからあまり君を気遣ってあげられなかった』

どういうことだろう。私の疑問は顔に浮かんだのか、幽霊さんはほろ苦い笑いを浮かべて、

『ボクにとってはあまり他人は気にするべきものではないから。この無感覚が歪んでいるのも分かるし、人間だという集団で生活する生物として不適格なのも分かる。でも、だからこそボクは他人に期待をいだかない。期待をしなければ、絶望もしない。そこにあるのは行動と結果だけになる。ボクにとっては人々は数だった。それゆえに社会としての動向を観察した結果、いろいろな仕組みを作ったのだけれど……いや。今はこの話は違うな、君を慰めるべき話題で出すものではない。ボクの主観を述べても、君が受けたショックは和らがない』

と言った。私はその言葉を聞けているようで、でも真っ白になった頭の上をするするとその言葉は流れていってしまう。そんな私の様子を見て、幽霊さんは困ったように、

『結局のところ、君を泣かせてしまったことには罪悪感をいだく。これ以上の言葉は過多だろうから……失礼』

独り言のように呟いて、幽霊さんは私をぎゅっと抱きしめた。

触れていることが分かるけれど、あたたかいかどうかは分からない感触。びっくりしながらも、私は目を閉じる。そのやわらかさに私は少しだけ安心する。まるで記憶の中のお母さんみたいに、背中をゆっくりと撫でてくれた。じわりと涙がまた浮かんでくる。よう

やく固まっていた私の中の何かが溶け出した。多分、さっきから見えていた赤いものが目を閉じたから見えなくなったせいだ。現金だな、と思う。

『あの人たちは、助かるんですか』

自分で言いながら結果が分かっている質問。

『助からない』

幽霊さんの現実的な答え。

そうだな、無理だよね。

『私、星別者とか言われているんですけど、本当に何か意味があるんですか？』

ただ見るばかりで、何も出来ない。わめいても、泣いても、世界は淡々と進んでいく。いつかはあの光景が、勇者様や神官様のものに摩り替わる時が来るかもしれない。でも、そのときも私は何も出来ない傍観者でしかないのかな。

『それは人生に意味を求めるのと同じぐらい難しい質問だね』

幽霊さんは言う。

『星別者自体の意味が本来の意味と乖離（かいり）しているせいもあるね、結局星別はもとから区別されていたものを明確に差別化し、能力の制御を容易にするための最適化であるための儀式であるが、とどのつまりは世界からの天災指定だ。個人に降りかかった災難と言い換えても遜色はないだろう、そう、たとえば色彩コードであれば自然発生型、四期に創設した役コードであれば後天的発生型、どちらにせよ普通の人生を送る上では不要な能力をあたえられた人々のただの名称だ』

また分からない用語が出た。けれど、私は今は聞く気がなかった。心が疲れているのが分かる。私はその言葉を聞き流して、とりあえず文句だけを言った。

『私の聞いたことと、全然関係ない答えを言われている気がします……』

未だに震える手は止まらないけれど、少しだけ、頭が冷えてきた。

それを狙ってよく分からない話をされたのだろうか。幽霊さんのしたいことがいまいち理解できないけど。

『よく言われる、君もとうとうそのセリフを言うようになったのか、大きくなったねえ、ボクは嬉しいよ』

いや、育てられた覚えがないから！　ツッコミが出る程度には、少しは回復してきた。

幽霊さんはまだ優しく背中を撫でてくれる。そのおかげでちょっと落ち着いてきた。ぎゅうっとよりいっそう抱きしめられ、頭をわしわしと掻き回すように撫でられる。私は幽霊さんの胸に顔を押し付けられたまま、もごもごと質問した。どうしても気になって気になって仕様がない！

『とりあえず、一つだけ気になるんですが』

『なんだね』

『この位置で、ぎゅっとしてもらったら、私の顔が胸に当たってちょっと息苦しいんですが』

『どうせならもっと抱きついて窒息したまえ。君が男性ならば苦しくともこの状態を望むだろうに』

霊状態なのに、胸で窒息するとか何がなんだか分からない。幽霊さんの胸は想像以上のボリュームでした……。お姉さんなら、もう少しだけ、身なりに気を使ってもらいたい。私が言えることじゃないけれどね。

妙に気が抜ける会話に、苦笑が漏れる。

『落ち着いたかね？』

幽霊さんがゆっくりと身体を離した。この人も、よく分からない人だ。目にたまった涙を拭いながら頷いた。私はようやく震えが止まったことを知った。

浮遊霊C、それはゆずれない

落ち着いてきたら、また回りの様子が気になってきた。
下の庭での喧騒はまだ止まない。私は恐る恐るもう一度そちらへ目を向けてみる。ぎゅっと口を閉じて、この状態をもう少しだけ、目に映した。
神の目とか呼ばれたけれど、私がこの光景を見たら、何かあるんだろうか？
神様って、これを見てくださっているのかな。それだったら、こんな悲しいことがなんで起こるのかを教えて欲しい。そう思いながら下の様子をじっと見る。

緑の芝は、酷い有様だった。
赤いものがまんべんなく飛び散っているものだから、大掛かりな清掃が必要になると思う。
大まかなものは拾い尽くされ、生存者がいる様子は全くなかった。
私は死の雰囲気を感じ取り、唇を噛締める。
神官たちは混乱している様子。
今、あの人たちは何を話しているんだろう？　下の様子が気になるけど、幽霊さんは何も言わずにずっと見ているだけだ。
じっと人々の動くさまを見ていたら、何を言っているか分かることに気付いた。幽霊になったせいなのかな、耳を澄ませると音がとてもよく聞こえる。
「これはどこの使節団だ」
ひときわ身なりのいい神官が叫んでいる。顔色が土気色で、油汗をかいているのがここからでも見える。つばを飛ばしながら指示をしているけれども、どうやら彼の指示は余り伝わっていない様子だった。周りの人たちは口々に自分が知っていることを話す。

「いや、先遣隊らしい」
「本当か？　使節団本体が先に来るという話も」
「だったら、国主が巻き込まれた可能性が」
ざわめく現場では、確かな情報がないみたいだった。
「詳細を確認しろ！」
土気色を通り越して、恐らく責任者であろう神官のおじさんが叫ぶように指示している。それに、何人かがばたばたと神殿の建物に走りこんだ。
『星教では、一応、命に貴賤はないという教義なんだけれど』
その様子を見ながら、幽霊さんは淡々と感想を述べた。
『残念ながら、命に貴賤がなくとも、その命に付随する要素に貴賤が発生してしまうわけなのだよ』
あんなふうに、と指で下の庭を示す。
使節団のひとじゃなかったら亡くなっても良かったのか。
そうとも取れる騒ぎに、私はまた胸の辺りが重くなるのを感じた。
私は見よう見まねで、星教でのお祈りの形に指を組む。さっきの人たちは幽霊にはなってないみたいです。幽霊はすぐに分かるよ！
まさに見たら分かる。幽霊仲間は発生していません！
……皆さん、ちゃんと星の彼方にいけたようなのだけが救いだと思う。あのとんでもない光景の途中で、人間だったものからフワッとした何かが抜け出して光りながら消えたのが見えたんだ。あれが星の彼方にちゃんと行くって事なんだろうなと納得した。
残った服の残骸などから調べようと、真っ青な顔のままでいろいろな切れ端を集める人もいる。あらゆるものがこっぱ微塵に吹き飛んでいた。まだ乾ききっていない血液が、拾い集める人の手を赤く汚している。
「使節団の方がいらっしゃらなければいいが」
漏れ聞こえる声は、高位の人たちを案じる声ばかりだった。私は服を握り締めて叫びだしたい気持ちを抑える。そうじゃない。気にするところはそこじゃないと思う！

『……これは仕方がないことでもあるのだろうね、人間がしあわせを求める過程には往々にして競争が発生し、そこには勝敗がつきまとう。その目安が地位であり権限であり、財力でもある』

幽霊さんはそういいながら、私に手を差し出した。移動するのかな。

私は服を握り締めていた手を上げて、手を重ねる。

幽霊さんはさっきみたいな無茶な跳び方をせずに、今度はゆっくりと空中を歩き出した。といっても、どうやって歩いているんですかそれ。私、空中で自由行動があるの初めてなんですが！　こ、こんどはいきなり走り出したりしないかな。びくびくしながら私は自分の足をそっと出してみる。幽霊さんの後についていくことを心がけていれば、落ちることは無さそう。よかった。

でも、今の幸せの話については、何かが違うとは思う。

『競争だけじゃない幸せもあると思うんですけど』

たとえば、お菓子を食べた時とか。あれって単純に幸せなんだけどなあ。

『他者より秀でるということは、生物において正しいことであるから、間違いではないんだろうよ。ただし、その競争しつつ幸福を求める過程で、踏みつけてしまったり取りこぼしたものの大きさにもよるんだろうけれども』

幽霊さんの話は難しすぎる。私はなんとか足を動かして歩くまねをしながら幽霊さんについていく。こう考えたら、確かに手は女の人の手だった。うむ。

『大崩壊は知っているかい？』

大崩壊、ですか。私が首を捻ると、幽霊さんは言葉を付け加えた。

『第三期の終焉、といった方が良いだろうか』

ああ、それなら知っている。私は頷いた。

浮遊霊C、昔の人について

『ボクらはあれで生き残った人間でね』

私はビックリして足を止めてしまった。足を止めたらまたふよふよ引きずられるだけだけどね！　それにもちょっとビックリした。幽霊歴の長さか、幽霊さんに私は力負けしてるし。さっきから引きずられまくりです。生身だったら転ぶレベルだよ。

おっとっと。引きずられている場合じゃなかった。一生懸命足を動かして歩くようにしてみる。幽霊さんはだんだん高度を下げている。もうすぐ神殿の建物に突入するぐらいです。あれ？　神殿？　私が寝ていたところは赤じゅうたんなんだけどな。神殿は青じゅうたんですよ。でも幽霊さんにも何かの意図がありそうで、目的が終わらない限り案内してくれないのがはっきりと分かったので、私は大人しくついていくことにする。さっきは問答無用で引きずられたし！

とりあえず幽霊さんの良いようにしてもらおう。諦めが混じってちょっとは大人の対応になってきたよね！　……現状、知らない人についていっているけど、そのあたりは気にしない方向で！

私の様子は気にせず、幽霊さんは話を続けている。

『昔はどんな時代だったか聞いたことがあるかな、いろいろ伝わらないようにしたけれど』

確かに普通に町民だった頃には、さっぱりそんなことは聞いた事はなかった。昔の世界がぜんぜん違ってたって言うのも知らなかったしね！

それにしても、伝わらないようにしたっていう話をばら撒いているひとがいるんですが！　白さん、徘徊してあんな話を伝えちゃって本当にいいの？　やっぱりあの人は歩く不審者ですか？

『白さん……違った、始原（しろ）の勇者さんに聞きました。ちょっとだけ

だけど』

幽霊さんは、私の言葉に息を呑んだようだ。驚かせたのかなと思ったけれど、次の瞬間それが大間違いだったのが分かる。

幽霊さんが爆笑しました。

ええええ、それ笑うところですか！　ドコに笑いのポイントが！

『始原（しろ）の勇者か』

といいながらひとしきり笑いました。

え、何その反応。

笑いすぎて涙がでたのか、目元を拭っている。あ、幽霊でも笑いすぎたら涙が出るんだね！　泣きべそかいてた私が言うことじゃないけど。

幽霊さん、相変わらずぼさぼさの前髪で目が見えない。顎のラインとか綺麗だから、かなりの美人なおねえさんじゃないのかなと思うけど、詳細が不明ですよ！　前髪を上げたい。絶対それ視界の邪魔ですよ。あ、でもその髪形が昔の流行ならば謝ります。

幽霊さんはちょっと落ち着いたようだ。すまないね、と前置きをして話の続きを始めた。

『ボクとしてはまだあれに勇者という名称を付けるのを聞くたびに、はらわたがよじれるぐらい笑い転げたくなるんだけど、君はどうだい？　あの根性悪にかなり似合わない名称で面白いと思うんだが』

そういう声自体がまだ震えている。

そこが笑いのポイントだったんですか？

幽霊さんとりあえず白さんと知り合いなのは分かった！　白さんがドコにでも出るのも分かった。これはどう反応していいのか。でも根性悪って言うのはなんとなく分かるよ！　あれ？　性格悪いのと根性が悪いのとどっちがいい表現なんだろう？　どっちもどっちだけど。

『昔は勇者っていわなかったんですか？』

幽霊さんは

『そもそも、勇者という言葉自体、四期の初めに作られた言葉だか

らね。もともとあのコードは天災指定なだけの名称なんだ。実際、勇者に当たる響きの言葉はついていないだろう?』

ええ！　でもそれも変な話だ。

『でも神様が星別して、勇者様になるんじゃないんですか?』

神様が創った星語に記載されるって言うことは、昔からある言葉なんだと勝手に思っていた。幽霊さんは首を振った。否定。

『星別はする。だが、それは天災指定の選定だ。勇者の称号とは本来は全く違うのだよ。――王では駄目だった。英雄でもない。権力を持たず、人の希望となりながらも他を押しのけてはいけない。人と争ってはいけない。敵対するものはあくまで人ではなく、人が生み出した闇だ。そんな条件でつけられた名称が勇者なんだよ。意外と思惑と利権が絡むドロッした名称だとボクは思うんだけれどね、みんなはすんなり受け入れた。今は文字通り人々の希望の名称になっているから、まあ想定した通りともいえるんだけれども。ああ、話がずれてしまった。つまり勇者というのは』

幽霊さんは珍しく少しだけ言葉を止めた。

『三期の生き残りが決めた、世界の犠牲者に捧げる名誉の称号だよ。多数の幸福のために犠牲になる一だ。今や誰もが疑問に思っていない名称だけれど』

え。私は幽霊さんの腕を強く引いた。さっきみたいに引きずられたらいけないから引っ張って注意を引いてみました！

幽霊さんはさすがに足を止める。

『え、前に白さんに聞いた話は……人の可能性を神様に見せる人、っていう感じのことを言ってたんですけど』

『そうだね、人が闇を乗り越えるさまは疲れ果てられた神へ捧げられるだろう。昼と夜の狭間でただよう神様のなぐさめになるかもしれない。なられないかもしれない。客観では慰めになると思うのだが、それは神様からの主観で見た場合にどう感じるかは分からないのだよ。だから、その言葉は正解でもあるし間違えているとも言える』

『白さんは嘘をついたんですか？』
私は思い出しながら聞いてみる。基本、白さんの言うことをそのまま信じているんだけど、それが間違えてるんだったらどうしようもないしね！
『あれは隠し事と面倒くさい言い回しはするがさほど嘘はつかないよ、ただし、嘘をつくときは完璧に騙しとおすと思うが』
えー。つまりどうなんですか！　それにしても白さんについて語れる人がいるとは驚きです。まあ、あれだけ徘徊しているおじいちゃんだからどこに出現してもおかしくはないけど。結構な知り合いなんだろうか？
『でも、何でそんなことが……』
『大崩壊の後、生き残ってしまった人々は神の嘆きを聴いたんだ。世界の隅々まで響き渡った悲しい声を』
白さんに見せられたあの日の映像を思い出す。
命を弄んだ結果、崩壊した人のありよう。一瞬で崩れ落ちた世界。
それを見ているしか出来なかった神様の嘆きの声は、静かに世界に降りそそいでいた。思い出しただけでも悲しくなる声。
『あの声を聞いたんですか？』
幽霊さんは頷いた。白さんに見せられた記録だけでも辛かったのに、全部を無くして聞いたあの声は、どれほどその時の人たちを揺さぶったのかなんて分からない。
『その嘆きに、神様に謝っても許されないとボクらは考えた。そんな折だな、始原（しろ）が人間に接触してきたのは。神様はこれから休息の眠りに入るだろうという知らせだった。神なき世界の始まりだね。だからボクらはその後の社会をどうするか、何年もかかって決めこの四期を始めたんだ』
幽霊さんは私のほうを向かずに話している。だんだん話の内容が嫌な方向に傾いているんですが！　でも止めるわけにもいかず、私はじっとその話に耳を傾けた。
『つまり……今、世界が滅びようとしているのはそのとき人間が決

めたことだ。神は世界を滅ぼすけれども、人を滅ぼされない。世界を守るためならば、人間は滅びるべきなのだろうと考えた。そして人が滅びる仕組みを整えたんだよ――もともと、生き残っていたのが死にたがりばかりだったから、当時はさほど問題にならなかった』

浮遊霊C、昔の人はわけが分からない

『幽霊さんも、死にたかったんですか？』

わきあがる疑問が頭の中でグルグルする。その、死にたがりばっかりだったというのが良く分からない。

『……そうだよ。自殺をしたところで強引に甦りの星術を使われ、治療を受けさせられる。犯罪に走ったところで、殺さずに永遠に収監される、病気になったところで結構その分野も進んでいたからね、たいていは治療される、さらに事故で死んだとしても加害者を減らすために必ず甦りさせられる。そうなれば、希望できる死に様は老衰ぐらいだ』

幽霊さんはこちらを見ず、前を見たまま歌うようにお話をする。優しい低めのハスキーな声です。だから初め性別が分からなかったんだよね。この髪型に騙されたのもありますが！

幽霊さんは淡々と続ける。

『一応、甦り治療を拒否できる意思表示は出来たが、それを無視される場合もあったからね』

勝手に生かされていた、と語る幽霊さん。幽霊さんと甦りの術について話しているって、なんだか変な感じだ。実際、今は二人とも幽霊状態なのに！　でもそれだけのひとが甦っていたら、逆に幽霊さんもいなかったのかな。白さんに見せてもらった以上に、今とはかけ離れていた世界だったんだろう。

戦闘とかを横で見てたら、死にたくないって思う。あれを感じずに逆に死にたいって思うって、私の想像を超えてるよ！

『結果、大崩壊で生き延びたのは、甦り治療を行ったことがない人間。つまり幼い子供か、意思表示をしてまだ死んだことがなかった人々か、自然派と言って甦りを否定していたグループぐらいだった。余りにも生死に対して軽すぎる社会だったからね、生きることと死

ぬことがあべこべになってしまっていたんだ』

つまり、生きるよりは死ぬのが難しかった世界。そして、バランスを壊し過ぎたせいで、いきなり崩壊した世界。

生きることが難しい、今の世界とは全く逆の話だった。さっきの血に染まった庭の事を思い出して、身震いをする。

『でも、みんなが死にたがってて、それでいいって思ってても、ずっと先の時代に人間が滅ぶようにするのは酷いです！』

強い口調になっちゃったのは仕方がないと思う。実際に世界は滅びかけているし、沢山のひとが魔物に襲われているんだから。

『……否定はしない。ボクらにとっては、生こそ苦しみであり、死が解放だったからね。なんだかおかしいことになってしまった。死にたがっていたボクらのせいで遠い子供達が苦労しているんだからね』

幽霊さんの話に耳を傾けていると、ついに星神殿の中に入った。じゅうたんはやっぱり青。さっきの事故のためか、ばたばたと人が走り回っている。使節団が、転移のミス、と聞こえることから、間違えてはないと思う。

何部屋か通り過ぎている途中、幽霊さんと会ったところに似た本ばかりの部屋で男の人がぶつぶつ言いながら調べ物をしていた。食料の生産率がとか言いながら本を片端から読んでいる。幽霊さんと同じぐらいなんか身なりに気を使っていないタイプの人っぽい。無精ひげとぼさぼさの髪をして、神官の衣もよれよれだ。目の回りもクマで真っ黒だ。何しているんだろう？　さっきから通り過ぎる人たちより、ひときわ追い詰められている感じのする人だ。生きている人なのに、幽霊より酷い感じだよ！

幽霊さんがそのとき足を止めた。そして、棚の上をじっと見る。私もつられて棚の上を見た。うん？　特に変なところがない書棚だよね。なんだろう？

横で観察していると、一番上の本がぐらりと動きました。えええええ。心霊現象ですか！　びくびくしながら見守っていると、ずる、

ずると動いていた本がとうとう落下をする。
「痛ゥ！」
さっきのおじさんの頭にゴンと本が降りそそぎました。床に落ちた本は、不思議と勝手にめくられて、中身のページが晒される。
どう考えても私の手を引く人の仕業だ。幽霊さんを見ると、にっこりしていたから、この人が落としたんだなと確信を深める。
幽霊も気合が入れば物に触れるのか！　あ、触ってないね、念力だね。……触るより、さらに難しくなってるけどね！　私にも出来るのかなあ。
『本とか触れるんですか？』
恐る恐る聞いてみると、
『さすが、目の付け所が違うね！　ボクが悪霊とかそういった線は考えないのかい？　こうやって人知れず図書室で誰かを殺害しているかもしれないじゃないか！　迷宮入りの図書室事件だよ』
ええええ。さすがに冗談だと思うけどな！　でも、怪しすぎるから完全に否定は出来ない！
『事件を起こしているんですかっ！』
幽霊さんが悪霊さんだったら正直涙目で逃げるレベルです。
『いや、していないからそこでどん引きしないように』
冗談を本気にしたら幽霊さんのテンションが落ちた。なんだかごめんなさい。
頭に本をぶつけられたおじさんは、落ちた本の中身を見て歓声を上げていた。これだ！　とか叫んで小躍りしている。もしかして。
『あのおじさんが探していた本を知ってたんですか？』
幽霊さんを見上げたら、ちょっとだけ笑みをこぼしていた。行こう、と促されてまた歩き始める。その方向へ、さすがに私も疑問がわいてきだしました。
『ところで、どこへ向かっているんですか？』
この場所を私は知っていた。

浮遊霊C、初めの場所に行く

ここを私は知っている。初めて勇者様達と神殿に来た時に通った道だ。

星原樹へ続く、神殿の回廊。

沢山の昔の話が描かれた綺麗な天井画。相変わらずともしっぱなしの蜜ロウのろうそく。

以前来た時は横で勇者様が手を引いてくれたのを思い出した。ものすごく昔のような気がする。あの時はお二人の行動にいちいち慄(おのの)いていた気がするよ！　懐かしいなあ。今となってはなんであんなに怖がってたか分からないけど！　特に勇者様を怖がってたしね。人間、第一印象が重要ですよと主張したい。あ、そういえば姫様に始めてあったのも、もうちょっと先の場所だなあ。まだ姫様は勇者様にアタック中なんだろうか。あのあと星都に一度も戻ってないから分かんないんだよね。今の状態はカウントに入れないよ！　だって私の意識が無い状態だし。

でも、なんでここにくるんですか？

『幽霊さん、幽霊さん』

握られた手を引っ張る。これがこのひとを呼ぶのに一番いいと学習しました！

『なんだい、生霊さん』

幽霊さんは足を止めずにこちらに目線を投げてくれる。

『どこへ行くんですか？　この先は星原樹ですし、私の部屋じゃないんですけど』

幽霊さんは、明確に言葉を返さず、うん、とだけ頷きを返す。え、その反応はなんですが！

『時折、人と違うものを見る目を持っている人がいるのは分かるだろう？』

幽霊さんの話の飛びっぷりは相変わらずだけど、一応質問の返事に繋がると信じて聞いてみるよ！

天井に描かれる時代が、夜闇から黄金へ変わった。あと、赤、白と続けば星原樹だ。あの日、勇者様がこっぱ微塵にした扉はもどったのでしょうか！　ちょっと気になった。いくら復旧するって言っても、壊しちゃ駄目だと思いますよ。今ならそのツッコミをできるね！　以前は心の中だけで突っ込んでいたものです。

私の返事を待つように、ちらっとこちらを幽霊さんが見たので、

『私も瘴気が見えます！』

理解というよりは実感していることを返した。あれなんで見えるんだろう？　本当に不思議だな。

『あれは後天的に四期に追加された物質コードだからね。古い君にはエラーとして見えるのだよ。後は魔物もそういったものだけれど、一般人にも見えるように物質が変性して生まれているものだから一見違和感はないんだろう』

『私は古くないですよ！』

なんだかとんでもない言葉がついていたので、思わず反応するよ！

乙女に対してなんと言う発言！　久々に乙女って言葉が浮かんだ。まだまだ言い張りますよ。主張できる限りがんばってみるつもりです、ええ。

『ああごめんごめん』

なんと誠意がないお返事ですか！　幽霊さんはひらひらと手を振りながら付け加えた。

『星別者のコードの前につく番号があるだろう？　それが君が一番古いからね。1よりも前の0だ。ただ、話の流れからしてお嬢さんに対して古いだの新しいだの失礼な発言をしてしまった、さらっと流してほしいのだがどうだろう』

な、なんだか謝ってもらっている気がしない！

確かに今まで神子っていうひとはいなかった、っぽい話を聞いた覚えがある。だから私は0番なのかな。えー、なんだか順番外って

感じで微妙な気分になるんですが！

でも幽霊さんはその話はもう続けなかった。

『つまりね、君が王子に見えたのもそのせいだ、黄金の勇者の弟が今の王家につながっているからね、何らかの影響が残っていると考えられる。能力は遺伝する場合があるからね、弟とはいえ天災指定とまでは行かないものの、力を持つ場合がある』

『ということは、黄金の勇者様って王族なんですか！』

ロイヤルな方だったんですね！

天井画の長い金色の髪をしたお姉さんを見上げてみる。幽霊さんと私は、丁度そのあたりに差し掛かってた。いろいろな物語っぽい天井画の中、ひときわ輝く美人さんがいる。ものすごくきりりとした顔の綺麗な女の人だ。煌めく紫色の眸は自信に満ちた笑顔とあいまって、とても生き生きとした印象をもたせる。そういわれてみれば、確かにお姫様や王子様も同じ色だったと思います！　ずっと代々同じ色なんだろうか？

それにしても、本当に今更なんだけどね。天井画の美人さんが持っている武器が鞭なのは、これは突っ込んでいいところなんだろうか。美人さんと鞭。なんだかすごく……いや、ちょっと見ない取り合わせですね！

『女王様と鞭は突っ込んでもいいところだとぼくも思うよ、むしろ始原はつっこんだらしいが。まあ、彼女は王位を継がなかったから、正確には女王様ではないんだけれど』

私が熱心に見上げていたからか、幽霊さんが的確に助言をしてくれました！

なんでそんな情報を持っているんですか幽霊さん！　というか白さん、分かっている以上にフリーダムですね。つっこんだんですか。あのひと、一度何をしているのか問い詰めたほうがいいんじゃないですか。暗躍しすぎだと思います！

『深蒼もそういった目の持ち主らしいね、聞いたことあるかい？

まあ、今はそれは本質的に関わってくる問題じゃない。実はボクも

ちょっと特殊体質の持ち主でね、君の状態を見てみたんだけれど』
じっと私を私を見る幽霊さん。
『君の魂と身体がちょっと変だなと思うわけなのだよ』
変、って！
『私が変だって言うんですか……』
ちょっと変な幽霊さんに正面切って変だといわれました！
地味にショックです。えー。

浮遊霊C、気付かれない

幽霊さんは私を上から下まで眺めて、一人納得したように頷きました。

『うん、かなり変だ。そしてありえない』

『な、なにが変でありえないんですか！　普通の町民を捕まえて、それは酷いんじゃないですか幽霊さんッ』

久しぶりに庶民ップリを主張してみる。

『ちょっと野菜が安くなっただけで小躍りする、晩御飯にデザートが出たらフェスティバル！　銅貨一枚分のお値引きでお得感を覚えて、逆にタダという言葉に警戒する！　まさに庶民ですよ！　私のどこが変だって言うんですか！』

別に生まれが高貴なわけでもないし、その辺にいる雑草と同じ扱いで大丈夫ですよ！　意外と丈夫なのは実感しています。

『いろいろずれてるところも変だということを自分で露呈させているね君は』

大幅にずれている幽霊さんに言われるとは！　頭を殴られたような衝撃です。

『幽霊さんに変って言われた……』

『うん、個性に埋没するよりは、どこかの方面で突出することを望む僕にとっては至上の賛辞に過ぎない言葉だね、逆にありがとうといっておく』

お礼を言われるのもどうだろうと思うよ！　私は！　けして！　誉めたんじゃない！

それも分かった上でにこにこしているのが分かるのが恐ろしいですね！　きー！

『……ところで、深蒼（あお）は君に何も言わなかった？』

ふと真顔で幽霊さんが私にそんなことを問いかける。今までの口調

とは違うなにかが含まれた質問に、
『なにをですか？』
と返すと、幽霊さんは納得したようだった。
『なら、ボクはこの件に関しては特にコメントはしない！』
『気になるじゃないですかあああああ！』
ここまで引きずっておいて、何がコメントしないですか！
『気になって、ベッドに入ってから寝るまでにいろいろ考えてしまいます！』
『その程度かい』
普段なら目を閉じただけで夢の中にダイブだけどね！　いろいろ考えていたら、一瞬では夢の中に入らない。ちょっとだけ時間が掛かる。
『まあ、大丈夫だよ、今の君は食べ物も睡眠も必要としない！　ほーら自己解決すっきりはっきり問題がなくなったようだね、よかったじゃないか』
幽霊さんの指摘に、私はヒイ、と声を上げた。
『じ、じ、人生における幸せが半減じゃないですかあああ！』
食べるとか！　寝るとか！　人生の大半の幸せですよ、分かってますか！
幽霊さんは私を見て、ハハハと爽やかに笑う。笑ってごまかせばいいもんじゃないよ！
『普通はもっと早くに半減しているんだけどね、君はやっぱりおかしいな』
きー！　変、変って酷すぎる！　私はもう一度何をもって変だと言うのかを問い詰めようとして口を開く。
その瞬間、幽霊さんが、あ、といって横を向いた。だ、騙されませんよ！　そうやって注意をひきつける計画ですか？
私たちが来たのと別の廊下だ。丁度十字路になっている部分です。前は逆の方向から華の姫様が登場したんだよね。
『ほら、あれ』

幽霊さんが遠くを指差した。
幽霊さんに釣られて私もそっちをのぞき見る。なんだろう？
向こうのほうから複数人の足音がこちらへ近づいてくる。幽霊なので耳が良くなっているのだ！　何故かちゃんと人数も聞き分けられるのです！　五人……かな？　身体に戻ってもこの特技が残ってたら、なんか新しい職を探せそう。偉い人が来た時、道を開ける係とか！　人生裏方希望だよ。もう、こんな変な人とばかり出会う職業とキラキラしい称号はお断りです。なんだか貧乏くじですかって言う勢いですよねっ。
幽霊さんが近づいてくる人を待っているのか、静かになった。
私は幽霊さんの様子を不思議に思って、一緒にそっちをじっと見ているものだから、二人してじっと見ている状態です。音だけ届いていたけれど、待っていたらその人たちがようやく視界に入る。
その先頭の人を見て、私も、あ、と言って固まった。まだ遠いせいで小さく見えるけど、私が見間違えない人。後ろのおじさんが必死に呼びかけている。

「猊下！」

神官様だった。いつもの服装じゃない、壮麗な服装だった。白を基調にして星原樹の葉のモチーフを金糸や銀糸で刺繍している。織りで布地に模様を持たせている長衣の下にも、何重にか服を重ねているみたい。後ろに裾を引きながら、無表情のままこちらへ歩いてくる。
『神官様！』
私は声を上げたけど、やっぱり神官様には聞こえないみたい。
『神官様！』
遠いせいかな、と思って、もう一度大声を出してみた。けれど、全く反応はない。
うっ。これは本当にきついです……。神官様の金色の瞳は、私が

いること自体に気付いた様子がない。多分、私がここにいることを誰も気付いていないんだろう。王子様の言ったとおりだ。見える人はいなかった。本当に誰も私たちに気付かないなんて。そして、神官様も気付かないなんて。

ちょっと目の奥が熱くなる。じわりと寂しさと悲しさが混じってこみあげてきた。

幽霊さんが、二人でつないだままの手を少しだけ揺らした。

私より少しだけ背が高い人を見上げる。下から見上げると、少しだけ前髪の奥から翠色の瞳が見えた。やわらかい光を宿して私を見ている。

『幽霊は、そういうものだよ、見えないから幽霊だよ。落ち込まなくていい。見えるほうが本来は異常なのだからね』

幽霊さんのフォローに、私は頷いた。というわけで、王子様も変だということが確定しました！　変仲間ができて、うれしいです！

私は大きく深呼吸をした。そしてぐっと口を閉じて、目を瞬かせる。これだけで、泣いたら駄目だよね！　すーはーすーはーとちょっと落ち着いた気がする。

神官様の後ろから追いかけてきていたおじさんが、不意に歩く速度を速めて、神官様の前に回りこみました。そのまま正面で膝をつく。進行方向を妨げられた神官様は、その前で足を止めた。

「猊下、なにとぞお考え直しを」

見下ろす神官様の顔は、表情というものが乏しい。元々美人さんだから、そんな感じで見下ろしていたら冷たいイメージになっちゃいますよ！　無表情は勇者様の専売特許ではないんですかっ。

どうしたんだろう、神官様。

見ているだけなのに、なんだかハラハラする。説教をしてもらっているときも、神官様はこんな表情をする人じゃなかった。ろうそくの明りのせいでよく分からないけど、銀色の髪と同じ位、お顔が白くなっている気がする。……大丈夫ですか？　無理、していないのかな。前に遺跡で倒れた時と同じような、真っ白な顔色をしてる。

神官様の体調が心配になるけれど、どうしようもないという事実。
それからもやっとした気持ちが生まれてくるから、ぎゅっとスカートを握って叫びたい気持ちをやり過ごした。
「退いていただけますか？」
神官様は穏やかにおじさんに声を掛ける。おじさんは頭を下げているだけで、退こうとはしなかった。
「猊下が直接確かめられるほどの現場ではありません」
何の話だろう？
「この神殿で起こる事象は、今は私の責任です。確かめなくてはなりません。そこをお退きなさい、シンナバー神官」
神官様がゆっくりとおじさんの名前を言った。おじさんの顔色がいきなり土気色になる。汗が噴出してぶるぶる震えだしました！　何が起こっているの？
『これが名前の力だよ、見ておくといい』
幽霊さんが静かに言いました。その場の異様な雰囲気に、私は言葉を失いました。

浮遊霊C、意見の相違について

名前を呼ばれた神官さんの様子は異常だった。
空気がピンと張り詰めて、後ろのほかの人たちの緊張感が増したのが分かる。
私は息を呑んだ。幽霊さんが囁くように私に話しかける。
『星別者が名前を呼ぶということは存在を支配することなんだよ。つまりそれに逆らおうとするということは、星の韻律の流れに逆らうということで、結果ああなってしまうのだよ』
そういえば、王子様が名前がどうとか言っていた。
多分、このことなんだろう。あの時は漠然と、へー凄いんだな、としか思わなかった。けれど、まさかこんな風に強制的に人を従わせる術だなんて思わなかった！
そして、なによりもそれを躊躇いなく神官様が使ったことにショックを受ける。
名前を呼ばれた神官さんは、顔色がどんどん悪くなりガタガタと震えだしている。油汗が滲み、神官の衣をぬらす。それでもこの人は退こうとはしなかった。じっと神官様の前に跪(ひざまず)いている。
この人は大丈夫なんだろうか？
不安になって私は隣の幽霊さんの腕にすがった。幽霊さんは何も言わない。幽霊さんはじっと神官様を見ているようだった。といっても、視線が前髪に隠されて分からないから本当はどこを見ているかは知らない。
この状態を引き起こして、目の前の神官さんを苦しめているのは神官様だ。
なんで、こんなひどいことをするの？　私は神官様をじっと見詰めた。いろいろ聞きたかった。でも、私がここで叫んでも神官様には聞こえない。例え、すがって訴えたとしても気づかれもしないの

だろう。……またじわっとにじんできた涙をごしごしこすって、この状況を見守る。

神官様は苦しむ神官さんを眺めている。表情に揺るぎはない。いつもなら、怪我人を真っ先に癒していた神官様の姿とはかけ離れている。ほ、本当に、神官様だよね？　そっくりの違う人じゃないよね？　不安になって神官様を観察する。そして、私は錫杖を握り締める手が力の込めすぎで色をなくしていることに気付いた。それに私は少しだけ緊張が抜ける。神官様が何も感じていないわけではなかった。神官様が変わってしまったんじゃない、何か理由があるんだと思って安心した。

「かはっ」

とうとう呼吸がおかしくなったのか、名前を呼ばれた神官さんが崩れ落ちる。けいれんをして、明らかに大変な状態になる。

そのとき、とうとう別の神官さんが飛び出した。名前を呼ばれた人を引きずって神官様の前から退ける。神官様の前から退いた瞬間、劇的に変化が訪れた。すぐに顔色が戻った。無理やり退けられた神官さんは、仰向けに倒れ、ぜいぜいと苦しそうな息をしている。まるで溺れていたか、全力疾走した後の人みたいな有様だった。

神官様はその様子を少しだけ眺めて、何もなかったように歩き出そうとする。

「猊下！」

半歩ほどで再度歩みは止められた。今まで凍り付いていたほかの人が、一斉に神官様の前に回り込み、跪いた。

「なぜ……」

神官様は小さな声で呟いた。静かな廊下に、行き場をなくしたようにその声が響く。後ろでぜいぜいと荒い息をしている神官さんがいるけれど、その音以外はないぐらい静かな廊下だ。小さな声でも思わぬ大きさで響く。

「もしそのまま進まれるのでしたら、私どもをお手打ちになってください」

灰色の髪をぴっちりと撫で付けて髭を蓄えた立派な神官さんが、真っ直ぐに見上げながら言う。深い渋い声だ。

続けて隣の人が発言する。

「貴方様がお行きになる事故ではありません。ここは任せていただけませんか？」

白い長い髭を伸ばしたおじいさんだ。静かな水色の目で見上げている。

最後に、さっきの神官さんを引っ張った人だ。ふくよかな体形をしたおばさんだった。

「猊下はお休みになっていません。どうか、どうか御自愛ください」

三人の神官さんの訴えを、けれども神官様は聞き入れるつもりがない様子だった。

「今は休んでいる時ではないのです。そして、事故を解決するのが先決だと判断しています」

神官様はそう答え、歩き出そうとする。

「それほどまでに、私どもが信用なりませんか？」

灰色の髪をした神官さんが、鋭い声を投げかけた。その声に、神官様の足が止まる。

「信用しています。が、それとこれとは別問題です。今はとにかく時間がない」

静かな声は、ごっそりと感情をなくしたような音をしていた。

「どうして一人で抱えようとされるのです！」

おばさんの神官さんが立ち上がった。真っ向から神官様に向かい合い、怒りをぶつける。

「そういう問答をしている場合では」

「今後のことを考えるための、重要な問いでございます。神妙にお答えください！」

頬を紅潮させて噛み付くおばさんに、神官様は僅かに目を伏せて、

「大神官でありながら、瘴気の進行を止められなかった。明らかに私の責となることです。ならば、現在の世界の存続に身を粉にして

働くべき、そう考えています」
と答えた。
その答えに、灰色の髪をしたおじさんも立ち上がり、切りつけるような声で、
「それは猊下の思い上がりです」
と言い放つ。
「思い上がり？」
無表情のまま反復する神官様。
触れれば切れそうな空気に、私は自分の手が震えているのに気付いた。ここにいるだけでプレッシャーに押しつぶされそうです！普通に殴り合いの喧嘩とは違う、静かで怖い意見のぶつかり合いなんて、私は見た事がないよ！　私のほうが気絶しそうです。
『二千年という時は長い』
幽霊さんがぽつんと零した。
『かつてボクらが作った神殿という組織が、一体どこまで形骸化しているのか、個人的には興味があるね。さあどこまで汚職と保身にまみれているのだろう、気になってしまうよ』
『そんな好奇心はしまっておいてください』
私は思わず物騒な呟きに言葉を返した。場の緊張感に影響されて、声がかすれてしまった。またトリハダが立ってきました。幽霊なのにね！

浮遊霊C、人の可能性について

神官様が目に力を込めて、さっきの灰色の髪の人を正面から睨んでいる。

立ち上がったおじさんの方が背が高い。肩幅が広くて堂々としているおじさんだ。髪と同じ灰色の眸が、深い色を湛えて神官様を見返している。

「一人で世界は背負えません。背負えると思っているほうが思い上がりというものです」

それは切りつけるような言葉だった。

おじさんの言葉に揺らぐことなく、

「それでも背負うべきなのが星別者です」

と神官様が仰る。

「ですが、猊下は勇者殿や神子様にそれを求めていらっしゃらないでしょう。御自分だけで背負おうとして、つぶれそうになっている」

「彼らは自分でそれらの荷を負っています」

「……私は猊下が彼らと荷を分け合っているようには見えない。むしろその荷を減らそうと、御自分で全て抱えてしまわれている」

神官様の表情にわずかに揺らぎが見えた。

「それは正しいやり方とは思えません。そして、今の私たちの使い方に関しても、です」

「……使い方、とは」

おじさんの神官さんは笑った。それは、バカにしたような笑みじゃなくて、お父さん見たいな笑い方。

「大人に頼りなさい。たたき上げの我々は、神官に好き好んでなったお人よしが揃っています。助けてくれといわれれば、逆に奮い立つでしょう。そこまで、お一人で頑張らなくてよろしい」

先程までの強い口調ではなく、包み込むみたいな、柔らかい口調

だ。

「私たちからすれば、あなたも勇者殿もまだまだ子供です。このようなときぐらい、大人ぶらせてくださいませんか？　子供達は大人が守るものだと」

おじさんの言葉に、神官様が言葉を失ったようだった。少しだけ金色の目を見開いている。

続けておばさんの神官さんが、

「もう、お体が限界を訴えておりますよ、猊下。星別者とはいえ、限界がございます。ましてや今は星原樹が静止した状態。ご無理は禁物ですよ。猊下のお体の様子は、医局を司るものとして見過ごせる段階ではありません。猊下の星術が活躍されるのは、まだ先ですよ。どうか、今は我々に任せてお休みくださいませ」

と柔らかい声で続けた。

神官様の顔色が真っ白だということに、他の人もとっくに気付いてくれていたんだね！　私は安心する。

おじいさんの神官さんがよっこらしょ、といいながら立ち上がった。曲がった腰のままで、神官様を見ながら言う。

「若いうちは全部できると思い込み、限界を知らないものです。わしらもかつて通った道ですぞ。それを知らないということは恥ずかしいものではありません」

神官様は目線を上げておじいさんを真っ直ぐ見た。おじいさんは少しだけ口調を強くして、

「今は、あなたが動くべき時ではない」

と言い放つ。神官様は静かに話を聞いている。おじいさんは笑いを含んだ声で、

「この程度の事態をわしらで収拾できないと見くびっていらっしゃるのか？　大神官がいなくとも、星神殿を海千山千の国主や政治家と渡り合いながら支えてきたのは、わしらみたいな善良な一般神官たちですぞ」

と続けた。善良って、ここは笑っていいところなの？　どう考えて

も善良とは程遠い、善良な皮をかぶった食わせモノにしか見えないんですがっ。横の幽霊さんはさすがに空気を読んでか、押し殺した声で笑っている。

神官様はじっとおじいさんと目を合わせている。やがて、神官様の肩から、少しだけ力が抜けた。表情の硬質さが薄れる。

神官様は溜息をついた。

「私は限界を迎えている、と仰いますか。師匠」

おじいさんが器用にひょいと眉毛を上げて、

「おやおや久しぶりの呼び名ですな。結構。少しは人の話を聞く耳が残っていたようで」

とキツイことをさらっと言った。神官様の師匠がこのひとなら、毒舌の師匠でもあるんでしょうね！　そのあたりも気になる。昔は普通に一般神官として勉強していた、と仰ってたのを思い出した。その頃のお師匠さんなのかな。

神官様は、長い長い溜息をついた。そして、ようやく呼吸が落ち着いてきたさっきの神官さんに目線を向けて、

「異常はありませんか？」

と質問はする。油汗を懐から出したハンカチで拭いながら、

「はい」

とおじさんは答えた。にっこりと笑いながら、

「たまには、ダイエットにいいかもしれません」

と軽く流した。神官様は何もいわずにおじさんに手を差し出す。おじさんはありがたいと言い、それにつかまり立ち上がった。引っ張り上げるとき、神官様が少しだけよろめいた。

それにしても、ダイエットって。確かにおじさんはぽっちゃりだけどね！　わざとこう言ってさっきのことを流そうとしたんだと思う。神官様は頷いただけで、それ以上は何も言わなかった。謝らないのかな？

『上に立つというのは微妙でね、安易に謝罪は出来ないのだそうだよ』

幽霊さんがそんなことを言い出した。
『なんでですか？』
私は傍らの人を見上げて聞いてみる。
『上のものが間違えているはずが無いのだそうだ。上に立つものの判断のミスは、大勢を揺るがすものだからね、決してミスをしないという前提があってのことなのだよ。そのあたりを履き違えているバカも時折いるのが笑えるんだけれどね。ともかく、人間が行うことなのにミスがないはずだなんて、なんとも滑稽で笑えると思わないかい？』
『笑えません！』
ツッコミながらも、私は神官様へ視線を戻した。旅をしているとき、良く柔らかい声ですみませんと仰ってた気がする。地位が違うんだっていわれても、本当の神官様には変わりがないのに、とても変な感じだ。
『本来なら、大神官のいうことも一理ある、実際にトップが動いて収拾できる事態は幅が広いからね。大神官の体調をかんがみてだろうが、それを逆にほかの神官たちは止めようとした。しかし大神官の意向とはそれは沿うものではなかった。だから名前を呼んで従わせようとした。本来なら、星神の声を預かる大神官を押し止めること自体があってはならないことなのだから。……こうやって筋道を立てると大神官の行動に非はない、だから謝るべきではない』
難しいですね。
『でも、』
といいかけて、言葉を失って私はうなだれた。これが、神官様が生きている、私たちが知らなかった世界なんだろうな、と思った。幽霊さんは、私の頭をぐしゃぐしゃとかき回した。あわわわわ、幽霊状態で頭をかき回されたら、乱れませんか！　というか、戻せるんですか！　髪の毛を気にして慌てる私に言ったのかどうかは分からないけれど、
『まあ、なんにしても。まだ骨のある神官が残っているようで何よ

りだ』
と幽霊さんが呟いた。
その時、さっき神官様たちがやってきた方向から、また誰かが走ってきた。
あ、図書室で幽霊さんが頭に本をぶつけた人だ。さっきの本を片手に走ってくる。何だろう？　憔悴しているんだけど、キラキラと目を輝かせて　神官さんは走ってきた。でも痩せこけた顔で目が輝いてるって、結構怖いですよ！
『気付いたか』
幽霊さんがにやりと笑っている。人が悪い笑顔ですね！　誰かさんをほうふつとさせるよ！　……そういや前も思ったな、誰だっけ？

浮遊霊C、明日の可能性について

緊張が緩み、私はようやく服を握り締めていた手を解いた。おお、さすが霊体！　しわがついていない！　これは地味にビックリだよ！　洗濯・アイロンいらずです。やったね。

「ジルコ神官、報告いた…し……ま、」

汗だくで走ってきたなんか凄い状態の神官さんが、膝に手を突いてゼイゼイと息をする。ボロボロの状態だけど、よくここまで走って来れたね、この人。

「おちつきなさい」

とおばさんの神官さんがあきれたように言う。さっき呼んだのはこの人のことなんだろうな。他の神官さんたちも、毒気を抜かれたのか空気が緩んだ。

今までの緊迫した空気を読まずに、飛び込んできた人は持っていた本を掲げた。

「食糧問題が解決しそうです！」

男の人がばっと開いたページには植物の絵が描いてある。あ、これもさっき幽霊さんが開いたページじゃない？　傍らの人を見ると、楽しそうに笑っていた。もしかして、ぶつけたのもここを見せるため？

男の人は植物の特性について熱く語りだした。え、肥料とか専門すぎじゃないの？　ちょっと難しい話しすぎて、私はすぐに飽きてしまった。神官様達は真剣に聞き入っている様子。幽霊さんに聞いてみる。

『あれって、落とした本ですよね？　わざとですか？』

『うん』

幽霊さんはあっさり肯定した。いや、頭に当たっていたし、普通に傷害じゃないですか！

『昨日から探していたようだったから、ちょっと思い出しついでに教えてあげたのだよ』
幽霊さんが浮き立つ調子で言う。
『昨日は、なんで教えなかったんですかっ？』
その時点で教えてあげていたら、ここまでボロボロじゃなかったんじゃないの？　私の突っ込みに、幽霊さんはあっさりとこう答えた。
『昨日は気が向かなかったからね』
えええええ。気まぐれ人助けですかああ！　私のじっとりとした視線に気付いたのか、
『物を動かすというのはね、階層の違う世界に手を伸ばすからかなり労力がいるのだよ！』
とすねたように言う。ヤッパリ幽霊さんが物を動かすのは、かなり疲れることなんだね。ちょっとチャレンジしようかと思ってたんだけど、止めておこう。
『じゃあなんで今日は教えてあげたんですか？』
幽霊さんはちょっとだけ笑って、
『そうだな、一つは君に逢えたからね。再会を祝して』
なんていいだした。なんだか恥ずかしいセリフじゃないですかああ！
　でもちゃんと訂正するべき部分がある。
『再会じゃなくて、初めてお会いすると思うんですけど？』
その答えは返らなかった。間違いだと思うんだけど！
　そうこうしているうちに、神官さんによる説明がひとしきり終わったようだ。これなら、というムードが広がっている。あ、いろいろ聞き逃した！　聞いたところで分からなかったから、聞くのを放棄したんだけどね。だから、答えを知っていそうな隣の人に聞いてみる。
『あの植物は何なんですか？』
『あれはね、ボクらが大崩壊の後に食べていたものだよ。子供でも使える簡単な星術で芽吹かせることが出来る上、収穫までの時間は

三日。種が出来るまでは更に二日、しかも一つの種から二十に増やすことが出来る。ある程度荒れた土地でも生育可能！　さらに人間に必要な栄養がバッチリ取れる優れた植物なんだよ！　なのに！　その辺りに生えている！』

おおお、凄いっ！　でも、私は食べたことがないなあ。そんな凄い食材なら、食べていそうなんだけれど。

『ただし、それなりに不味い』

おー……。そういうことですか。盛り上がった気持ちがしょんぼりした。

『文明が大崩壊でなくなったようなものだからね、生き残ったものに関してはかなり食糧問題がシビアだったんだよ』

そうですね！　食べ物の確保がかなり重要ですよ。お腹が空いたらろくなことを考えませんから。うー、お腹が減らない今の身体がうらめしい！　ごはん食べたいなあああ。はっ、こうしてひとは世の中をうらやむ霊になるのかなあ。

ふと、神官様達の様子を見ると、おばさんの神官さんが両手をぽんと打ちながらこういっていた。

「美味しくないのは問題ですけど、これで最悪の事は回避できますわね。一応、星都人口の五十日程度を養う食料は現時点でおさえておりますが」

とニコニコしている。エ、それって凄い量じゃないんですか？　私は気になる話題がでたので聞き耳を立ててみるよ。身体に戻ってもごはんがなかったら切ないしね！　即物的ですか？　ごめんね！　正直に生きています。

「地方神殿に関しても、九割までは完了しています。いままで地方政治にも食い込んできたかいがありました。かなりみなさまご協力的で」

さらっとなんだか黒い話題が出ている気が。

「まあ、貴族の係累が多く在籍していることは、こういうときぐらいしか景気よく使えないカードですしね。そのために受け入れてき

たようなもので」
おじさんの神官さんも爽やかにそんなことを言ってるし！　神官様がたまに黒いと思ってたんだけれど、黒いのは神官様だけじゃなくて元々皆さん、その、ちょっと、黒いんですか……？
『そうだよ、世の中にはいろいろあるからね、正直だけでは渡っていけないんだよ』
幽霊さんまですれたことを言い出しました。えー。
「この植物の件を合わせると、何があっても食糧不足で困ることはありません、猊下」
おばさんの神官さんが神官様に語りかける。その話を聞きながら、私はようやく理解をした。
　ああそうか、この人たちは世界が滅ばないって言う前提で話しているんだ。

浮遊霊C、未来の話について

世界があと四七日で滅ぶって聞いてから、私は知らない間に思い込んでしまっていた。

あと四七日のことだけを考えていればいいんじゃないかなって。ともかくその期間だけ頑張れば、後は何とかなるんじゃないかなって。

でも、それは違った。

三期で生き残った人がいるように、今期も本当に全てが滅びるとは限らない。

そして、滅びを免れたとしても、そのときにみんながボロボロだったら意味がない。悲惨な未来が待っているかもしれないんだ。神官さん達のお話に、私は目が覚める想いだった。話題は現状の食糧生産に移っている。

「星も見えない天候のせいか、徐々に生産量が落ちてきています。ですが、この植物ならさほど照度が必要ありません。何とか生産が軌道に乗ると思います」

よれよれの神官さんがきりっとした表情で言い切った。といっても、皺だらけの格好と、無精ひげだらけの顔ではいまいちしまりがないんだけど。でもつっこめる雰囲気じゃないからか、みんなスルーしている様子だ。

ここに集まっている神官さんたちは、多分偉い人っぽいよね。偉い人センサーがビンビン反応しています。そのせいだろうけど、この神官さんは妙に緊張しているみたい。背筋が真っ直ぐに伸びてるよ！

神官様がゆったりと頷いた。そして、

「では、そのまま進めてください。この件はジルコ神官に委任します」

と名前を呼んだ。けれどもさっきと違って、おばさんの神官さんは何も苦しむことがなく一礼しただけだった。

『名前呼んだのに平気なんですか？』

さっきと何が違うのかな？

私は不思議に思って呟いてしまった。隣に立つ幽霊さんは、

『大神官自ら名を呼び、言質を与えたという意味では、とても大事なことだよ。どんな書面や許可状にも勝る威力がある』

などど解説する。

分かったような分からないようなそれに私は曖昧に頷いた。

とりあえず、許可みたいなものなんだね！　そう理解しました。

そして更におばさんの神官さんから任命されたよれよれの神官さんは、しっかりした足取りで元来た道を歩いていった。これから早速さっきの植物を生産する体勢を整えるらしい。

頑張れ！　その肉の薄い背中に向かって応援してみる。ちゃんとごはんも食べて寝てくださいよー！　身体が資本です。寝ている間に幽霊なんて、私だけで結構です。聞こえないだろうけど、気持ちだけでも届けばいいな。

ううん、真剣に考えると頑張って欲しい……けど、複雑な気分です。

身体に戻ったときごはんがあのまずいという葉っぱだけになったら私は泣くよ！

人生の大半の楽しみがないって泣くからね！　……それしかないなら、食べるけど。むしろ残さない勢いです。食べ物を無駄にしてなるものか！

本当に、この先どうなるんだろう。もやっとした不安が胸の中に沸いてくる。

気がつけば、神官様達の話題は別のことに移っている様子。

「魔物の襲撃で孤児が増加していますが、それでも何とかなるでしょう。今まで溜め込んできたものを放出すればよいだけのことですから」

おじいさんの神官さんが聞き捨てならない事を言っていますが！
三日、そう、たった三日私が寝ている間に、世界はどんどん進んでいっているようだった。
　ふっと言葉が途切れ、全員が神官様のほうを向いている。
「ですから、猊下は暗夜のことだけをお考えください。他は我々が手配します」
あんやのことだけ、って、どういうことだろう？　私は首を捻る。
そのとき、神官様が思い出したように、別の話題を切り出した。
「ところで、フォッシ神官とカルサイト神官が見えませんが」
ここにいない人たちのことらしい。
　他のおじさんたちは、顔を見合わせて、ほろ苦い笑みを浮かべている。分かっていてあえて神官様は聞いていなかったみたい。
「ああ、彼らですか」
とおじいさんの神官さんが、顎の髭を触りながら、
「彼らは、故郷に帰りました」
と告げた。
　神官様はああ、と何かに思い当たったらしい。
「……先日の布告の後ですか」
その言葉は正解だったようだ。おじいさんの神官さんが、後を続けて、
「ええ、止める暇もなく、世界が滅びるならこんな一番に危険になる場所になどいられるかと。あっという間に還俗の手続きをとり、御実家に帰られましたよ」
と呆れた調子で言った。続けておばさんの神官さんが、
「お二人とも、名家の出でいらっしゃった矜持が、最後までなくなることがございませんでしたね」
と言った。
　更に、ぽっちゃりしたおじさんの神官さんは、
「彼らが抜けたところは、補佐役の者たちが繰り上がりで席を埋めました。残念ながら彼らがいないほうが仕事がはかどるらしいです

が」

と報告した。い、いろいろとチクチクする言葉ですね！　抜けた人たちに対して思うところがあったようです。多分、神官様自信も今更指摘していることだから、大人の事情ってヤツですね！　あえて突っ込んで聞かない。

それらの言葉を受けて神官様は、ゆっくり頷いて了承を返した。

今の会話で気になった単語を、幽霊さんに聞いてみる。

『暗夜って、三つ子月がどれも出ない日のあれですか？』

単語は聞いたことがあるんだよね！　星のめぐりの授業でちょっと勉強したよ。といっても、たまに空を見上げれば分かることなんだけどね。あ、今日は月が出ていないんだーっていう感じで。

『そう、本来なら星が良く見えるから星神殿では良い日とされているけれど、今回は勝手が違う』

確かに、その日はいつも星神殿で祭祀が行われていたなあ。年に四回ぐらいあったと思う。お菓子とか配布していた。そして私はさりげなく紛れ込んで貰ったことがある。いや、無償配布だから、貰っていいんだからね！

でも正直、それぐらいしか生活に関係がないから、いつも深い意味とかはスルーしていたんだよね。

幽霊さんは、ゆっくりとした口調のまま、話を続ける。

『星は隠され、その日には地上に暗闇が立ち込めるのだよ、暗闇で魔物が活発になるという噂もあるから、どうやらその日付が一番危険な日だと推測されている』

え！　いつの間にそんなことになったのだろう。

『推測だけですか？』

推測だけなら外れればいいのに、と思いを込めて聞いたのだけれども、現実はもう少しだけ無情だった。

『いや、これはボクの言葉が悪かった。推測ではなく、確実に世界の命運が決まる日だ。今から丁度四六日後の夜に当たる』

今から四六日後、つまり、滅びるといった四七日の前日。

その夜は、一番長い夜になるのだ。

浮遊霊C、だから帰りたいといっている

神官様が凛とした声で宣言する。

「暗夜は、なんとしてでも私達が乗り切ります。暗闇で照らす星は、迷える人々を照らす礎になる――星典の言葉通り、このような時代では、我々は人々のせめてものよすがになるでしょう。朝の時代が来るまで、どうか、お願いします」

はい、と揃って頭を下げる神官さんたちを、私はぼんやりと眺めていた。

夜、かあ。でも一体何がこれから起こるのかなんて、全く想像もできません。

普通の夜なら怖くないのにな。月があるかないかだけで、それほど違うんだろうか。

私が思った瞬間、それが訪れた。

目の前が、ふっとろうそくの明りが消えたように暗くなる。

世界が暗転した。

私の視界の前には、荒涼とした大地が拡がっている。けれども、それは決して美しい光景ではない。星も見えない暗闇の中、遠い場所で赤い光点がちらちらと揺れている。大気に敵意が満ち、肌を殺気が撫でていく。赤の光点に見えたのは、おびただしい魔物の目の発する光だ。

――湧く、という表現がまさにあっている。とめどなく大地を魔物が埋め尽くし、まるで草の波のようにゆらゆらと揺れている。人間への異常な敵意。それらを生み出したものをまさに憎悪する塊。大体において魔物は醜い姿をしており、人に嫌悪を抱かせる。それら

が群れを成している様は、まさに圧巻。

見ているだけで胸をざわつかせ、圧倒的な嫌悪と恐怖を抱かせる光景の中、その人が独り、立っている。

魔物の群れからは離れているものの、あの数を前に一、というのは絶望でしかない。

見慣れない蒼い光剣を持ち佇む姿は、私がとてもよく知っている人。

大地を埋める魔を目の前に、対峙する蒼い瞳はどこまでも穏やかだった。

私はその人の名前を呼ぼうとするけれども、声が出ない。

『――っ！』

私は叫びながら目を覚ました。いつの間に、目を閉じていたのか、そんなことに気付く間もなく、恐怖に身がすくむ。

幽霊なのに、震えている。全身ガタガタ言ってるよ！　今のはなんだろう？　夜って考えただけで浮かんできた光景。魔物の群れ、その余りの恐ろしさと相対する人の姿に、体中の毛が逆立つ感じがした！

なんて考えに沈んでいるところに、

『起きたかい？　やれやれ、幽霊になっても良く寝る子だね君は』

にょきっと目の前に、逆さになった人が現れた。しかも至近距離で。

『ぎゃあああ！』

私は魂のそこから叫び声をあげた。

ちょ、ちょっと！　なんですかあああ！

口から心臓が飛び出そうだよ！　驚いて心臓が止まっちゃうじゃないですか！　幽霊だけどっ！　ちなみに、目の前に逆さ釣りで現れたのは幽霊さんだ。何してるんですか！　なんでそんなにフリー

ダムに浮遊しているんですかっ。
『おお結構いい声をしている、叫び声でいうなら、ピカイチじゃないかね、よし、満点をあげよう！』
私の叫びをものともせず、幽霊さんはのんびりと評価した。わーいいい点貰ったー。じゃなくて！　いや違う、今はそこじゃないって！
『なんか今、変な白昼夢みたいなの見えたんですけど！』
幽霊さんが首を傾げて不思議そうに言った。
『幽霊なのに？』
『幽霊なのに！』
恐怖と混乱のまま、幽霊さんをガクガク揺さぶる私。
あははは、とか笑っている状態じゃないですよ、幽霊さん！
『幽霊さん、勇者様の行方は知りませんか！』
幽霊さんは逆さ釣りになっているため、肩を掴むしかない。
くっ、逆さ釣りの肩って掴みにくいんですが！　わざと狙ってませんか幽霊さん！
『知らないよ』
あっさりと返ってきた答えに、私は唸りながら手を離した。この人が知らないって言うのなら、知らないんだろうな。どうしよう、さっきの光景が脳裏に焼きついて離れない。あれは現実？　それとも私の妄想？　妄想だったら、かなりの想像力なんじゃないでしょうかっ。あ、妄想より想像力の方が言葉が綺麗だね！　神官様なら知っているだろうか。なんとか私の声が届けられないかな。
焦りながら周囲を見回した私は、異変に気付きました。
あ、あれ？

さっきまでの廊下じゃなかった。

視界いっぱいに広がるのは、見た事のある樹。
星原樹だ。
星原樹は透明感と光を失い、乳白色に染まったまま、以前と変わ

りなく空から生えている。その威容は変わらないものの、満ちていた不思議な雰囲気は半減していた。確かに、異変が起きているよね！　私でも分かるレベルだった！

　ということは、ここはセイヒツの間？

　とりあえず知っていそうな人を問い詰めてみる。つまり目の前の幽霊さんなんだけどね！

『な、な、ななんでここに私がいるんですかあああ！』

『そりゃあ、つれてきたからさ！』

そうですね、わかりました！

　でもね、ちょっと今イラっとした！　さっきからはぐらかされっぱなしだけど、どうして私のいた部屋に連れて行ってくれないんだろう？　焦りだけが私を包み込む。

『……あの、私、やっぱり身体に戻って皆さんのお手伝いをしたいのです。部屋まで、連れて行ってくださいませんか？』

出来るだけ、丁寧にお願いする。でも、返ってきた答えは別のものだった。

『……君はもう戻れない』

思わず幽霊さんを睨んでしまう。迷子の話じゃなくて、もっと不気味な意味が含まれた言葉に、嫌な予感しかしない。幽霊さんの真意が分からず、私はじっと幽霊さんを見る。

『私は、ずっと幽霊のままって言うことですか？』

まだ生きているのに、不思議な薄皮一枚隔てた場所から見ることしか出来ないもどかしさ。頭がぐちゃぐちゃになりそうだよ！　ずっとこのままだとするなら、私はおかしくなっちゃうかもしれない。幽霊さんたちがいろいろいたずらをする気持ちが痛いほど分かってきた。ここにいるのに、気付いて欲しい。そういうことですね！

『私はここから、幽霊のままで、見てるだけしか出来ないんですか！』

身体に戻れないということは、つまり死んじゃうってことなんだろうか。幽霊さんはただ単に事実だけを述べているのだろうけれども、

私はそれを受け入れられない。なんでこんなに焦っているのかなあ！

『落ち着いて』

『落ち着けません！』

そう叫んでから、私はふっと既視感にとらわれた。あれ、こんな会話をどこかで交わした覚えがある。こみあげる違和感が半端じゃない。

一瞬、私の意識がそれたのを幽霊さんは感じたのか、不意に問いを差し込んできた。

『ねえ神子。君は人間が好きかい？』

浮遊霊C、鼻つまみものについて

ふわりと幽霊さんが一回転する。ようやく普通に向き合ってくれた様子。そういえば逆さになっても服が逆さになっていない不思議！　幽霊ライフって、かくも不思議なものなのですね……。

変な質問に気をそらされてしまう。

こうして幽霊さんのペースに巻き込まれていくんですね……神官様、やっぱり私は商人さんや詐欺師とはお話しないほうがいいようです！　今、身に沁みて実感しています！　私、どうやら流されやすいようです！　今気付いたのかとは、言わないでやってください。

私はさっきの問いに答えずに、それよりも気になることを聞いてみる。

『その質問って、流行ってるんですか？』

誰かとそんな話をした気がするんだよね。うーん、誰だっけ？　誰だったかすぐに思い出せない。記憶力のない自分がうらめしいです！　まさにうらめしや！　幽霊っぽくなってきそうだねっ。いや、言わないけど。ぱっと思い出せるそんな優秀な頭脳は持ってないから考えても無駄そうだから、頭の中からポイって追い出します。幽霊さんは相変わらずの調子で答えてくれる。

『これは普遍的な問いであり君の思考に対する研究でもあるよ、ボクの好奇心でもある』

難しい言葉を使われてもね。

この幽霊さんからでた問いって、なんだか深い意味がありそうなんだ。しかもこのタイミング！　こんな時に出た問いに私は警戒する。疑いすぎかなあ。じっと見ても、前髪で目が隠れているからいまいち表情が分かりにくい。意外と目と眉毛って表情を作る大事な部分なんですねっ！　睨めっこは得意だけど、まず同じステージに相手が立ってないときは不戦敗なのが分かりました！

それでもめげずにじーっと見詰めて、
『何でそんなことを聞くんですか？』
と聞いてみる。幽霊さんはふっと笑って、
『ん？　ただの参考に、だよ』
なんて、毒に薬もならない答えを返す。むむ。はぐらかされているのかな。
私はなおも食いついく。
『ちなみに、幽霊さんはどうなんですか？』
『ボク？』
そうあなたです。幽霊さんは首を傾げて一言。
『うーん、どっちでもいいよ』
えー。明らかにがっかりと顔に出ていたのか、幽霊さんが私の鼻をつまむ。
ふが！
『なにするんれすふぁ！』
幽霊なのに発音が変になるよ！　息していないはずなんだけど、よく原理はわかんない。
幽霊さんの行動自体が謎が多いですよ！　離してくれませんか！
『……まあ、君の行動を見ていると、嫌いじゃないんだなというのは分かるからいいか』
人の鼻をつまんだまま、シリアスっぽいぼやきをするのは止めてください！
離して欲しいという意思を込めて、鼻をつまむ幽霊さんの手首を両手で握ってみた。あ、細い！　かなり細い！　え、だぼだぼの服の下って、どんな風になってるんですか！　すっとんきょうな言動でごまかされがちなんだけれど、こうしてみるとやっぱり女の人なのかなと思う。まだ素性はさっぱり分からないけど。色々物知りなのは、幽霊なせいなんだろうか。どこにでもすり抜けて情報収集できるよ！　もし、身体に戻れなかったら、これを特技にして王子様にでも雇ってもらえるかな。すりぬけぐらいしか役に立ちません。

ただ、まさに今、その特技を生かしたいけれど駄目っぽい。鼻をつまむ幽霊さんの手はすり抜けられない！

『はらひてくらさい』

だからなんでここで鼻をつまむ！

身体をひねっても絶妙の力具合で鼻をつまみ続ける。私がくねくねすると、ちゃんと動きについてくるよ。つままれてるって言っても、痛くない。痛くはないんだけれど、心が折れそうです！　乙女の鼻はつまむものではありません！　見守るだけにして欲しいよホントに。

私と幽霊さんの静かな攻防戦は、次の一言で一気に凍結する。

『ボクらは多分、人間が嫌いだったんだ』

ニコニコしながら言う幽霊さんに、私は抵抗する手を止める。い、いきなりとんでもない発言ですね！　じわりと汗がにじみそうです。

じっと見上げると、笑顔と裏腹に静か過ぎる声が落ちてくる。今までの喋り方とは違う、抑揚の少ない静かな声。

『人間なんて信じたいけれども信じられない。何が起こっても世界にとって最悪の結末にならないように、人間だけが滅びるように、何重もの仕掛けを作った。けれど、その杞憂が嫌な方向に当たってしまっている。備えあれば愁い無しというけれども、これは酷いとは思わないかい？　世界にとって毒なのは人間だ。――人間は滅ぶべきなんだよ』

私は反射的に声を上げた。

『ひょんなことないれす！』

なんでそんなことというんですか！　幽霊さんも人間だったのに！

沢山の人が死んでもいいって、なんであっさり言うんですか！　そんなに命は軽くない！

かっと頭が真っ白になって、幽霊さんを睨む。言いたいことが沢山あるのに、言葉が上手く出てこない！　幽霊さんの手を少しずらして、

『いい人もいっぱいいます！　なんで、なんでっ』

興奮の余り涙が出てきた。
私が泣き出したのを見ながら、幽霊さんがやっと手を退けてくれた。
ちゃんと主張が出来ないって、なんか悔しい。睨みながらぐずぐず涙を拭う。しゃっくり出てきた！　うー、泣いているのも悔しい！
『人間は神様に二度世界を滅ぼさせ、更には自ら滅びを招いた。ならその後始末こそ人間がすべきなんじゃないか？　そう考えてボクらは人間が世界を巻き込んで滅ばないよう、韻律に手を加え、世界の俯瞰図を書き換え、星語を再構築し、真実の神話を隠蔽した。それでも足りない部分は勇者という人柱により補うように位置づけた。けれども、まだ足りない。それでも、人間は懲りていないんだよ』
でも、反論が浮かんでこない。二期、三期。白さんの話で教えてもらった昔の風景は、確かに過去を悔いるところからはじまるんだ。けれども、どちらも世界は滅びてしまった。
だからといって、人間は滅びるべきだとか、極論過ぎると思う！
私は涙を拭きながら、
『やっぱりおかしいです！』
と叫んでから、唐突にそのことに気付いた。
そう、おかしいんだ。なんで今まで気付かなかったんだろう！
頭の中がさっと冷たい水を浴びたように冷静になる。
幽霊さんの話からすると、世界をこんな風に作り変えたのは、神様じゃなくて。
ボクら、と幽霊さんは表現した。
『……今の世界って、三期の人たちがこんな風に作り変えたんですか……？』
人間が、こういう風に作り変えた、としか思えない語り口だ。
……一体人間がどうやって？
私の視線の先で、幽霊さんが笑みを深めた。

浮遊霊C、世界をつくったひとについて

今まで、私は何故かこういったふうに世界を作ったのは神様だと思い込んでいた。白さんも明らかにそのあたりは何も言っていない気がする。言い伝えを変えてみたりとかは人間でも出来るって分かるんだ。でもね魔物が生まれる仕組みとか、瘴気の仕組みとか、あれって人間に出来ることなの？　建物を作るとか、料理を作るとか、そういったものじゃない話だと思うんだ。でも、だからこそちょっと希望が出てきたように感じてしまった。

『人間が作った仕組みなら、人間が壊せるんじゃないんですか？』

そうすれば、魔物とかなくなるんじゃないの？　私が意気込んで聞いた言葉を、幽霊さんはゆるく首を振って却下する。

『君が言うとおりに、人間だけでは実行できなかった』

人間以外？　私は思わず渋い顔をした。

『人間以外って……なんか、そんなことできる、神様以外の存在っていたんですか？』

幽霊さんはじっと私を見て、ああ、とだけ頷いた。

『今の世界は、彼が立案し、ボクらが細部を作成し、彼女が承認して神の力を借りて実行した』

その言葉を反芻しながら、私は頭の中でふっと思い浮かんだことを口にした。

『彼って、もしかして、白さんのことですか？』

幽霊さんは答えの代わりに笑みを深めた。あのさんざん話していた不審な人が計画してても、おかしくはないよね。今までの言動自体、怪しい雰囲気満載です。そりゃあもう疑うよ。でも、これで今までいだいていた印象がある程度正しかったのは分かった。やっぱりあのひとは管理する方の人っぽいんだよね。

『幽霊さんは、何をした人なんですか？』

『ボク？　ボクはただの天才だから、星語の研究をしていたのだよ、あまり外に出ることが出来なかったからね。世界で一番の嫌われ者だから』

……かるーくっているんだけど、この人重いッ。

『それは、幽霊さんが勝手に嫌われてるーって思ってたんじゃなくて？』

幽霊さんは、それに対して、

『当時の人にボクの名前を言ったら、多分十人中、十人がボクを殺そうと追い掛け回してきただろうよ！　それぐらいの嫌われ者さ』

なんですかその知名度！　でもぜんぜんそんな人に心当たりがない。

『猟奇殺人犯だったとか？　凄い犯罪者なんですか？』

私は思わずじりじりと後ずさる。このひとがたまにおかしい雰囲気を見せるのは、そのせいなのかな？　やっぱり幽霊は幽霊なんですかっ。

『ある意味世界一の罪人だよ、まあ、その肩書きのせいで白と話すようになったのもあるけれど』

何かを思い出しているように、ふんわりとした声になる。む、いまいちこの人がどんな人なのか分からない。

『ボクの話はいい、他に聞きたい事はないかね？』

あっさりとした話の転換に、さっきまでの話題を思い出す。

彼が立案、これは白さんのこと。

細部を作成した人たちは、当時の人々。幽霊さんも含むんだろうね。

でもこれだと最後に出てきた人物が誰か分からない。消去法でいけば、その人が人間じゃないってことになるんだけど。

――彼女。

そういうからには、それは女の人一人をさすんだろう。まるで人間みたいに幽霊さんは呼ぶし。

『その人も、幽霊とかなのですか？』
『いいや。幽霊は元人間だよ』
胸の奥がざわざわする。じゃあ、その「彼女」っていった何なのですか？
『その人に頼めば、今の状態は何とかできるんですか！』
さっき幻で見た光景が頭の中で過ぎる。あんなふうな事態はまだ起こってはいない、けどこれから確実に起こる風景だ。
もし、その人がこの仕組みを壊せるなら。これから先、沢山の人が死ぬことがないはず。
『魔物とか、なくなったら……』
そういいながら、幽霊さんの様子を見る。反応がないそれに、多分無理なんだろうなって私は思った。
たぶん、それで解決になるなら、今までの勇者様達がそれを放置しているとは思わない。
幽霊さんは静かに私をじっと見ていた。
『彼女はもうすぐ寿命を迎える。それに、彼女でもそれは無理なんじゃないかな？』
『その人に聞いて見なきゃ、分からないじゃないですか！』
幽霊さんからは、答えが返ってこない。沈黙がものすごく重いんだけど……。
『彼女に直接聞きたい？』
幽霊さんが言った。今までの声音とはぜんぜん違う、平坦な声だ。
私は頷いた。
『聞きたいです』
『なら、』
幽霊さんが手を伸ばして私の首を掴んだ。そのままぎゅっと手を握る。
『ッ！』
私は幽霊なのに苦しい気がして、それ以上に驚きすぎて動けない。何か言おうとしたけれど、喉からはひょろひょろの音が出るだけだ

った。

幽霊さんが首を傾げると、前髪がわずかに分かれてややきつい感じの翠の眸が垣間見えた。細い手なのに力が半端じゃない。私は首を掴む手をはがそうと暴れるけど、手はびくともしなかった。

幽霊さんが冗談とかでこうしているんじゃないのが分かる。目は真剣だった。だけど、不思議なことに殺気とかはないんだ。悲しそうな雰囲気だった。ただ、怖い！　いきなり首を絞められて本当に怖い！　これが幽霊じゃなかったら、死んでいるかもしれない。声を出そうにも声が出ない。や、や、やっぱりすごい犯罪者なんですか幽霊さん！

幽霊さんは私を掴んだまま、ふわりと空中を蹴った。私はそのまま抵抗できずに首を掴んだままそこへ落とされる。

星原樹の真下、星櫃（せいひつ）の中へ。

私はそのまま押し付けられ、水の代わりにたまっていた謎の光に包まれる。

『往（い）っておいで』

堆積（たいせき）していた光が視界を包む。最後に見えた幽霊さんの顔は、本当に悲しそうだった。

◆幽霊、考える（前書き）

幽霊視点です

◆幽霊、考える

神子は星櫃（せいひつ）の中の光へ解けた。文字通り、融解したともいえる。

自分から見てもここ以外であそこに繋がっていそうな場所は見当たらない。韻律を［謳う］のではなく［描く］のに適した手で彼女に直接韻律を記入し、送り込んだため、恐らく大丈夫だろう。いささか乱暴になったのだが、そのあたりは霊体なのだから痛みも何も無いはずである。

思ったよりも、普通の女の子だったな。

その言動を思い出した。しかし、身体を失ってもさほど取り乱した様子がない。どこまでも能天気な様子、それ自体が異常なことなのだが、いたって本人は気にしていないようだった。

恐らく今の術で、残留していた存在値は半分以下に減っただろう。

そもそも、四期が終わるまで持てばよい霊体だ、補給などあてがあるはずがない。そろそろ自分も消滅の時間が来るだろう。それはさんざん考えつくした、完全なる死の瞬間である。

肉体の死を迎えた時、別れは済ませた。あとは星に還らず、このまま消滅するのが自分の望みである。

普通の視力の殆ど消えた目で周囲を観察する。

前髪を伸ばしているのは、単純に世界と自分を隔てたいから。また、目が殆ど見えないせいでさまよう目線を隠したかったから。

だらしない格好を見せ、性別を不明にし、喋り口調を近寄りがたいものへと変えた。

人付き合いを断ち、自分がかの有名なあの女だと分からないように生きたかつての時代を思い出した。

結局はそれがばれての刺殺だったが、それはそれでよかったと考えている。何といっても、そのおかげで友人の涙などと珍しいもの

を観察できたのだから、対価は十分につりあっているというものだ。

星原樹の下は、何も無かった。考え、空気を蹴り上げ空中へ駆け上がる。霊の身体はこういったときは身軽でよい。何のしがらみも無いように、空を翔けられるところが爽快だった。

探しているものは、おそらくこの近くにいるはずだった。それは勘ではなく、確信だ。そして、自分ならそれを見つけられるであろうことも。

自分が視力の代わりにえた視界は、物事の根源を探る目だった。少し意識を切り替えるだけで、目に映る全ての情報がほどけ、うねり、内蔵をあらわにするかのごとく情報がさらけだされる。それは直接の韻律ではなく、由来、来歴などの赤裸々な情報だった。いとけないころ自分の能力も知らなかった。浮気をしている御主人の前で、目で見えた名前を――妻とは別の人の名前を挙げ、仲がむつまじいんですねと話したこともある。その時の引きつった夫婦の顔は、今でも脳裏に焼きつくほどの恐ろしい映像だ。人の秘密を暴いてしまうことを、強烈に意識したのはそのときだった。

星別者の能力が身体に現れる場合、視界に特化したものが多い。それは、神自身が「星」と名を付けているように、光に由来する能力が付与されやすかったのではないだろうか。そういえば、そのことを神にお伺いした事は無かったなとかつてを想起しながら考えた。他の勇者などの能力も、大体見たら分かる場合がある。危険そうなら忠告を与えることもあったが、不吉なことを言い当てる預言者は好まれないのだ。礼の代わりに投げつけられた石を頭で受け取り、自分は渦巻く感情を確認した。

星原樹はそれ自体が恐ろしいほどの緻密な韻律構成を持っている。まさに神のみわざとしかいえない。あれほど膨大なシステムを維持するだけの力は、一体どれほどのポテンシャルがあるのだろうか。

ともかく、その目を持ってすれば、星原樹がいまどれほど静止しているかが分かるのだ。

星原樹の状態は、ひとであれば昏睡状態といったところか。そう見て取る。

もう、遅いのだ。人々の変わらぬ愚かさのため、滅びの目は芽吹いてしまった。おそらく、神子が彼女に会えたところで、現状どうにもならないに違いない。

いくらこの状況を仕掛けた第三期の人間とはいえ、むやみやたらに世界を滅ぼしたいのではないのだ。ただ、人間の欲望の限界を信じていないだけだ。信じたいのだと、思う。

――第一期の頃。

かつて、人間は星原樹に近づくことが出来た。今のように星別者だけの特典のような扱いではなかったのだ。

実は、人間は星術を使えば使うほど、自らの体内にゆがみを蓄積させる。少し韻律がずれた構成の星術を使っても、術はある程度は実行される。しかし、その実行し切れなかった部分が、自分の体内へと蓄積されるのだ。三期の人間が一気に滅びたのも、このゆがみによるところもある。甦りの術で甦ったものは、蓄積されたゆがみそのものだったのだから。

大多数の人間が星原樹に近づけないのはそのせいである。星原樹は近づいたものの抱えるゆがみを解消しようとする。しかし、人間という生体の中にあるゆがみが、直接揺さぶられる形になるのだ。いうなれば、臓腑を生きたまま改造されようとしているようなものだ。ゆがみとともに生きている人間にとってはまさに命に関わる。

逆に近づけるというのは、ゆがみに影響を受けないほどの存在値を持つもの。つまり、天災指定人物（ゆうしゃ）。

あるいは正しい韻律を使ってきたもの、つまり、韻律の管理者（だいしんかん）。

もしくは星原樹と同じであるかということだ。つまり、星別者だけになってしまった。そして、これらの本来の意味も現在は喪われてしまっている。

実際のところ、旧星術により生み出される世界のゆがみは大きかった。日々星原樹が解消してなんとか成り立っている状態だった。

だから、四期に当たっては星術の改造という大きな手を打った。いままでそれ自体を改造という発想は無かったらしい。実行できる力を制限することにより、世界への影響を小さく抑え、星原樹への悪影響も防いだ。

旧星術から、新星術を生み出すこと。それはかつての自分の仕事だ。

言葉というものを知り、音を知り、その成り立ちを知ることが元々好きだった。その延長で韻律研究者となったようなものだ。

そもそも、生体への韻律を研究していた自分にとっては、かつての研究の続きでもあったため、たやすいことだった。あらたな言葉を製作し、大系を纏め上げる。その傍ら、本を読み、本を書いた。罪人の身の上だ、人に会うこともなく、書籍の中で埋もれるような人生であった。それはとても充実していた。

その過程でいつの間にか自分も星別者になっていたことを知った。ただし、決してそれは公開して欲しくないと始原（しろ）に頼み込んだ。珍しく彼がそれを受け入れ、自分はどの記録にも残らない存在になった。それは全く後悔をしていない。

【1／Ｄｓｎｋｎｎ】、それが今の自分の名前だった。唯一の友人と同じ番号コードなら悪くは無い、その程度だ。

自分は、かつて死から人を遠ざける韻律を作った。

しかし、それで世界を滅ぼした。ゆえに、大罪人と自らも思っている。

……始原（しろ）とはその点、同じような傷を抱える同士ともいえる。

彼は、かつて星術を広めてしまった。

人々の生活を豊かにし、人間を世界の主へと押し上げたが、人のために何度も世界が滅ぶこととなる。ゆえに、彼もそれを罪だと考えているふしがある。

しかし、それらも間もなく終わるのだろう。人間の世界の滅亡とともに。

自らの責で終焉を決めた始原（しろ）が、一人安穏としているはずが無い。上空、星原樹の幹の半ば辺りの高度で、ようやく目的を達成する。友を探して見渡した視界に、それが映り込んだのだ。

ああ、と息を吐く。

瘴気の中に沈みこむ始原（しろ）を示すコードが見えた。彼が何をしようとしているのかは一瞬で理解した。

かつて、自分が死んだ時。

命が消える間際に始原（しろ）に言った。友人に見送られて死ぬのも、悪くは無いと。友は言った。いつもお前達は僕に見送らせてばかりだと。漠然と、それに申し訳ないと思った記憶がある。血と涙に彩られた、最後の人間だった自分の思い出。

『前は見送ってもらったからね。今回は、ボクが君を見送るよ』

この声も姿も届かない。せめて友が安らかであるように祈ることぐらいは、許されるだろうか。

◆華の姫、現状について

簡素な報告は、決して面白いものではなかった。
知らず知らずのうちに、眉根に力が入る。いや、ここは不快を表してはならない。私は力を抜き、表情を取り繕う。いつも通りの、おしゃれと噂話にしか興味が無い頭の軽そうな姫君の表情へと作り変える。口角を上げ、目元を緩める。動作は緩慢に、言葉は舌足らずで甘えた調子に。これが私がいつもつけている仮面だった。
私は常に人の目の中にいる。しかも、王族としての理想を体現しなくてはならない。つねに意識して動かねばならないのだ。これは幼い頃から続けてきた訓練でもあり、日常でもある。つまるところは、王族という生物として振舞うこと、であった。
われは孤独の王にあらず、人の中の王なり。わが国の建国者の言葉だそうだ。
王族の中にも、召使は家具や空気と同じだと言い放つ愚か者がいるが、彼らにも感情があり、思考があり、何よりも噂をする口があることを忘れてはならないのだ。私が持っている情報源も、こうした下働きのものから集められているものが多い。召使がいなければ、誰がシーツを変え、食事を用意し、室内を清めるのか。想像力の欠如と、現実を知らずにいること自体が恥であると私は考える。伯爵夫人と男爵が同じ部屋に入り、乱れたシーツを残して去っていったことや、会議の茶の準備に配置したメイドたちが何を見たのか。彼ら一人一人は欠片のような情報しか持っていなくとも、それらをつなぎ合わせたとき、王宮という場所の正確な図を描けるのだ。
今回の会議次第も、そのようにして手に入れたものである。
しかし、その内容は最悪だった。
私は報告書を握りつぶしたい気持ちに駆られる。しかし、実際に

指先には力を入れず、胸の奥から息を吐くことで苛立ちを片付けた。

世界が滅ぶというその日付まで、あと四十五日と迫った今日、ようやく各国首脳による会議が主神殿にて開催されたらしい。公の会議ではないので、ひっそりと、だけれども厳重な警備で行われたとか。それはしかたあるまい。ただでさえ混乱している現状、これ幸いとのし上がろうとし、刺客を差し伸べるものたちは後を絶たない。

また、今回の会議にあたり外部から人間を受け入れた。その中に間諜がたっぷりと紛れ込んでいた。実際、どこで何人の間諜が、という報告もあがってきていた。

さて、これからどうしてくれよう？

報告書は常に何かに紛れ込ませている。

今回のものは、可愛らしい詩集に入っていた。これを読みながら、渋い顔は無いだろう。

その報告書で、私は会議の様子を把握する。結局、なにをするでもない結論に達したとか。

想像以上に馬鹿馬鹿しい内容だった。

決まったことは大まかに二つだけ。勇者様達に兵を預け、指揮を委任する。食糧不足の折は、各国で助け合う。

そんなことを決めるために、星都まで星術を使ってやってきたのか。この程度のことを決めるのであれば、そのあたりのペットにでも手紙を預けるだけで十分。

「本当に、困りましたこと」

駆け引きも何も、ただの現状維持どころではない。

現在、星が隠れ、徐々に悪影響が出始めている。

一部植物が星の光に触れないために発芽が狂いだした。植物は星明りで発芽・開花をするサイクルを作っているものがあるのだ。

また、陽射しが遮られているため、葉が黄色くなっている植物がある。気温がじわじわと下がってきている。

このままでは、食糧危機が起こるかもしれないと囁かれだしている。今の時点では、ただの懸念に過ぎず、星都でもだれも準備している様子は無い。

真綿で首を絞められているよう。

気がついたときには、何もかも手遅れになってしまうに違いない。

詩集を見ながら、そのようなことを考えていると、侍女が私に妹と弟の来訪を告げた。

珍しい組み合わせだった。

◆華の姫、弟と妹と（前書き）

昨日に引き続き、姫様視点です。

◆華の姫、弟と妹と

そもそも、妹と弟が顔を合わすなど、公式行事以外でないのではないか。

しかも、その二人が私を訪ねてくるなど。私は先程の詩集に報告書を挟み、傍らの侍女に渡す。彼女はこういった仕事を任せているうちの一人だ。

「これはもう読んだから片付けて頂戴」

私の言葉に侍女はかしこまりました、と詩集を受け取った。報告書は速やかに始末されるだろう。もっとも、見たところで特殊な暗号を使っているため、すぐには解読できないようになっている。

「お入りなさい」

入室の許可を与えると、先に弟が部屋へ入り、来訪の口上を述べる。相変わらず真面目で暗そうな雰囲気を纏っている。もう少しにこやかになれないものか。

次に妹だ。相変わらずの男装である。最近、ようやく板についてきたとは思うが、それを伝えるつもりは無い。

弟の背が伸びたように思う。あの年代の子供の成長は早いのだろうか。まだ立太子を済ませていない弟は、世継とされているが儀式と承認による確定はされていない。そのため、まだ猶予はある、と考える貴族がいる。

そのため私を押す動きをするもの、または妹を押す動きをするものまで現れている。私はただ言質を決して与えずに微笑んで光栄ですわとだけ囁く。あちらが勝手に踊るだけだ。私に声を掛けたものの名前を忘れる事は無い。いつかは弟の妨げになるだろう。国を割るような算段をする愚か者など不要だ。この国が割れて喜ぶのは神殿なのだから。長老とされる実質神殿を動かす狸たちのことを思い出す。私がこの国の王女という地位から変わるときまでには片付け

ておくべき課題だ。正直、王座には全く興味は無い。そのようなものは弟にリボンをかけて贈呈しよう。返品は決して不可。そもそも、四六時中仕事と国政に携わり民衆に尽くすなど、私の性に合っていない。私は表には消して出ず、その裏で策謀を回らせる方が好きなのだから。

先のことを考えていたものの、現状では無駄になる可能性も捨てがたい。かといって、自暴自棄になるつもりは無いのだが。

傍仕えが二人に椅子を勧め、私の向かいに座らせる。

弟は沈み込んだ様子であり、妹はいつも噛み付いてくるくせにこのようなときだけはしおらしい。どうやら、厄介ごとの匂いがする。

「下がりなさい」

二人に飲み物が差し出されるのを見てから、私は全員下がらせる。最後のメイドが一礼をして退室するのを見てから、

「珍しいこと。なにかございまして？」

と声を掛けた。すると、弟がようやく決意をしたように顔を上げる。

「姉上、お力をお貸しください」

私は扇を広げ、その影で思案する。

「あら、か弱いわたくしでも力になれることかしら？」

あえて外した言葉を告げたにも拘らず、弟の眼光は緩まなかった。いい目だ。我が弟ながら良い方向に育ってきている。私は扇の陰で笑みを洩らした。一応、人並みには家族の情めいたものもあるのだ。

「姉上でなければ出来ないことです」

そして、弟は息を吸い込み、決意を露わにこういった。

「情報の操作をお願いしたい」

ここで採るべきリアクションは主に二つだ。とぼけるか、受けて立つか。

「あら、難しいことを言うのね」

どちらとも取れる言葉を零すと、妹が大げさに溜息をついた。

「ホラ、見てみなさい。姉上に頼んで無駄だろう」

わざと棘を含ませた物言いである。妹とこういった応酬を始めたのは、星都を魔物の群れが襲ったときからだ。私は覚えている。それまではある程度は仲が良い姉妹だった。しかし、あの日、私は自分の無力を思い知り、政治の世界の仕組みや人の動かし方を知ろうとした。妹は、自分の無力を思い知り、直接的な力を求め、自ら剣を取り騎士団の再編に尽力した。私達はやり方が違っただけであるが、どうにも妹には私は怠惰に見えるらしい。事あるごとに突っかかるようになり、今に至る。けれども、それも潮時だろう。今のこの世界情勢において、私が家族にも仮面を被ることも、妹が一方的に棘を向けることも、本当は無駄なのだ。

「ルチル」

私は妹の名を呼ぶ。王族間でも名前を呼び合うことは滅多に無い。それは星別者を真似た風習であるが、根強い力を持っている。私達は自分の名前を聞くこと自体がほぼ無いのだ。

まるで頬を叩かれたかのような顔で、妹が私を凝視する。私はゆるりと笑った。

「わたくしを攻撃するのは結構。けれども、その時機を見誤ることはしてはいけません。相手を油断させて言葉の針で牽制しなさい。そして、相手を攻撃するときは正当な理由をもっていなさい。気に入らないからなどという理由で、誰彼構わずトゲをばら撒いていいものではないわ。言葉が相手だけではなく、周囲にあたえる影響を計算するのよ」

華の姫としての普段のぼやけた喋り方をやめ、私自身の言葉で伝える。前々から言おうとは思っていたことである。そろそろ、私達は成長すべきなのだから。

妹は衝撃が抜けた後、真っ青になり、真っ赤になった。相変わらず分かりやすい。混乱し、そして図星を指されたことに反射的に怒りがわいているのだろう。そこを制御し、さらに笑って見せるのが王族の勤めだ。けれども、こうして表情を素直に出す妹のありようが、たまに眩しくなる。私にはもうないものであるから。しばらく、

妹の中での葛藤は続くに違いない。彼女は意識的か、無意識的かにしろ、私を軽んじていた。そんな相手から図星を指されたのだから、混乱しているに違いない。

「それで？　一体何をわたくしに求めるのかしら」

弟は息を吸い込み、顔を上げて告げた。

「僕は、いえ、私は、民にも情報を開示すべきだと考えています…世界が滅ぶということを」

◆華の姫、弟について

「あら」

私はそれだけを返事し、考える。報告には、会議では民には混乱を防ぐためにこのことを伏せるとあったはずだ。それを真っ向から否定するのか。確かに、現在の星原樹の様子はおかしい。史実に詳しいものに聞いたとしても、前例が無いとの返事だけだった。そして、おそらく勇者様が何とかしてくれるだろう、神の使いであるから、と役にも立たない言葉がついてくるばかり。漠然と現状が続けば危険だということは理解している。

しかし、民に公開するべき情報なのかといわれれば、首を傾げざるをえない。あまりにも利が無い。

「皆さん、混乱するのではなくて？」

安易に賛成は出来ない。

実際問題として、今も治安の悪化が問題なっている。魔物に対抗するための騎士団が、治安維持に走り回っているというのは、なんと言う皮肉だろう。

魔物は命をとるだけだが、人のほうが厄介だ――そんな風に、この状態を揶揄した歌が流行しているという。混乱の中、殺人鬼や魔王の噂が飛び交う。どこまでが虚像か分からないものだ。私の言葉に、弟はつたないながらも反論した。

「例え知らないことで世界が滅ぶとしても、ですか？」

滅ぶ。大きな言葉が出てきた。それを口の中で転がし、私は弟を眺める。

弟は言葉を選びながら話しているのだろう、どこかたどたどしく話す。私はその様子を観察する。

本来ならとっくに王太子に推挙されて当然の弟であるが、それが延期しているせいで妙な噂が付きまとっている。延期は弟に関係が無い部分での問題だ。

だが、それが噂を助長している。誰もいないところで一人喋っている、急に怒り出す、または誰も知らないはずのことを知っている。噂に関しては枚挙(まいきょ)に暇(いとま)がない。噂を鵜呑みにしている貴族もいるとかいないとか。

弟に真実なにかあるとしたら、それはすぐお父様に知れるだろう。私達の周りを取り巻く従者達はそうした報告の義務を持っている。若輩の私から見ても、お父様は無能ではない、といえども悲しいかな有能でもない。平均取る感覚は尊敬しているものの、いささか精神的に弱すぎる。平和な時代の王としては善王と呼ばれるだろう。しかし、今は混乱期だ。無謀なぐらいが丁度いいのではないか。どちらにせよ、私は政治に口出す権利など無いのだけれど。

ともかく、弟は正常なのだろう。彼の言葉は明瞭であり、筋が通っている。周囲を配慮する行動もとっている。例の噂のもととなった行動にも、問題はないだろう。一応、他の根拠もある。似たような行動をとっていたとされる人物を、私は聞いた事がある。黄金(きん)の勇者であられた方の弟君である。つまり、私達の先祖になる。曰く、見えないものが見えたという。今回の話が、それに起因するものだとしても。

「そのようなお話は聞いたことがありませんわ」

私はあっさりと否定を返した。自分の手札を出さない相手に対して、私は何も協力をすることは出来ない。

ここに来てようやく復活したらしい妹が会話に加わってきた。

「それは一体どういうことなんだ?」

にわかに信じられない、といった様子で、弟に問いかける。私も同じ感想を抱いている。あまりにも飛躍した発想であるからだ。

弟は目を彷徨わせて逡巡(しゅんじゅん)した。いいあぐねている様子だ。口を開こうとする妹を目線で制止する。珍しく妹はあっさりと引き下がる。彼女なりに今の話には何かを感じている様子だった。

たっぷりの沈黙が落ちる。私は紅茶で口を潤す。

やがて、ようようと弟が沈んだ声音で話し始めた。

「もし、私が幽霊を見ることが出来るとお話すれば、信じてくださいますか」

さて、噂は本当なのかもしれない。そういった目を持つものが入るという話は聞いたことがあるが。迷ったということは、受容してもらえる可能性が低いと考えたのだろう。賢明な判断だと思う。人は自分を基準に考えがちだ。私にしても、そう。にわかには信じがたい。判断するには材料が少ない。

「では、幽霊に何か聞いたというのかしら」

「姉上は信じるというのですか！」

妹が驚いたように言う。その発言は不味いだろう。弟にちらりと目線を投げる。弟はテーブルを見ている。その表面から読み取れる感情は、達観めいたもの。恐らくこの反応は想定済みだったのだ。

私は柄じゃないと思いつつ、口を開く。そう、人生には時にはあまやかな言葉や奇麗事が必要なときもあるのだ。

「かわいい弟の言うことですもの。とりあえずは信じてみることからはじめるのがいいのではなくて？」

奇麗事を口にしながら、現実的なことを考える。弟が本当にそれらを見ているにしても、見ていないにしても、必要なのはそれらがもたらす結果である。先程から語ろうとしている話の情報源の確度はいかほどなものか。

妹ははっとした表情を浮かべた。ようやく自分の発言が含む棘に気付いたらしい。とたんに萎れた花のようになり、

「すまない……」

と弟に謝罪した。本当にあきれるほど素直だ。こういったところはまねが出来ないと思う。私は弟が生まれる前まで、万が一の場合国を継ぐものとして育てられた。妹は既に私があるため、自由に育てられた。幼い頃はそれに苛立つこともあったが、今は達観している。どう羨んでも妹は妹、私は私だ。そして、幼いながら、秘密を抱えていた弟もそれぞれ別の立場なのだから。

いえ、と小さな声で言う弟の心の内は分からない。弟も自分を押

し込める癖を持っているのは、私と同じかもしれない。
「どこから話せばいいのか……」
思案する弟に、私は質問する。こうして思考を導くと、いずれ知りたい情報も出てくるだろう。
「民衆に知らせないというのは誰から聞いたことかしら」
これも先般の会議で決定したものの、まだ公にされていないことである。
「ラインです」
私と妹は、声をそろえて、「ライン？」と聞き返す。ラインというのは、御父様の侍従長の名前だ。
ただし、三年前に亡くなっている。とっくに墓の下にいるはずの故人である。
私達の沈黙をよそに、淡々と弟は更に言葉を重ねる。
「彼はいつも父上についていっているのですが、昔みたいにずっと小言を呟いたままなのです。それを聞いたらいろいろなことが分かります」
ぞっとする話だ。へたに本人を知っていたため、たやすく想像が出来る。王相手でも節度を守りながら意見を言える貴重な人材であった。隙が無い官服を着こなした、かくしゃくとした老人で、とにかく話が長かった記憶がある。
妹も同じ想像をしたようだ。腕で身体を抱え込むようにして身震いをする。
「……確かに、亡くなる前まで父上の心配をしていたと聞いたが……」
と妹はいい、周囲を見回す。考えている事は分かる。ここに幽霊がいないか、ふと怖くなったのだろう。自分が見えないからこそ、恐怖が沸き起こったのだろう。私もいささか不愉快ではある。見えない情報源がいるということなのだ。
「ここには何もいません」
弟が見越したようにあっさり告げる。妹はぎこちないながら、あ

あ、とだけ返した。
「それで、どうしてわたくしに相談を？」
「なんとなく、幽霊たちの話を聞いていると、姉上が一番城内の噂話に精通しているのだと思いました。そして、様々なことを裏側で行っていらっしゃると。それに、現実的なので話を聞いてもらえるのではないかと」
幽霊達に、何を話されているか気になる。妹がものすごいものを見る目で私を見てくる。失礼ではなくて？
「わたくしの良い評判でも聞いたのかしら」
皮肉を込めた言葉に、弟はぎこちなく頷いた。反応で本当の話がどうなのかがばれているのに。ああ、この子もまだまだ嘘が下手だ。我ながら意地が悪い質問であった。
「でも、本当にこのままでは世界が駄目になると聞きました、だから」
弟はしっかりとした目で私を真っ直ぐに見る。私に何を期待しているのか。ただの噂話を操ることが出来る王女に過ぎない私に。
「魔物は人の心の悪いところが漏れ出して生まれてくる。だから、本当は勇者殿たちが頑張っても一時しのぎにしかならない。そう聞きました」
一時しのぎ！　なんとも壮大な一時しのぎだ。しのぐことしか出来ないなら、そのまま世界は負の方向に転落するのではないか。
「……魔物退治だけでは、いけませんの？　消していくだけでは」
そこへ難しい顔をした妹が、
「姉上、魔物は瘴気から生まれるという説もあります。普通、魔物は倒したら瘴気に戻る……ですが、いまは星原樹が停止しているため、浄化星術がさほど効かない。それに、その話が正しいのであれば、無限に魔物が生まれてくるのではないでしょうか」
と話し始めた。このあたりは騎士団に混じる妹の発言だからある程度は信頼できる。
「その話は、誰から聞いたの？」

問いの矛先は弟へ。返答は私の想像の上を超えた。

「神子様に聞きました」

◆華の姫、覚悟の話をする

神子様？

想定していなかった人物の名前に、私は危うく驚くところだった。

彼女は倒れてからずっと、目を覚ましていない。目立った外傷も無く、病を得ているのではないにもかかわらず、だ。実際、猊下が神子は眠っているだけであると明言しているとか。つまり、あくまでも眠りであり、死亡だという話は聞いていないのだ。

「……亡くなられたの？」

さすがにこれは重要な問題だろう。いいえ、とあっさり弟は首を振る。

「生霊だといってました。後、自分の寝ている部屋が分からないから戻れないと」

これにはさすがに、私も妹も言葉を失った。自分で生霊だという時点で、どうなのだろう。以前もうすうす感じたが、神子様は大人しそうに見えるくせに、とんでもない思考をしている。相変わらずどう感想を述べていいか分からない行動であるので、恐らく本当に本人だろうと思われるのだが。妹はあまり神子様に触れ合いが無かったためか、その行動に想像がつかなかったらしい。妙な事を聞いたという表情をしている。

扇の陰に口元を隠しながら、確かめる。

「神子様は目を覚まさないと聞いていますわ。つまり、御本人が身体から抜け出しているせいなのかしら？」

弟は神妙に頷いた。

「おそらく。あの後、付近では見かけません。けれども部屋に帰れた雰囲気では無さそうでした……方向音痴だと本人も言っていましたから」

方向がどうとかというものではない気がするのだけれど。

「ともかく、魔物の話は事実だと思います。神子様も猊下が御存知だと仰っていました」

私とさほど変わらない、神殿の頂点に立つ方の事を思い出す。私と猊下は会話をしているとどうしても騙しあいのようになってしまうのが難点だ。本音を隠すことに慣れるのも問題が多い。だからこそ、その行動から目的を読み取ったほうが早いときもある。先程の報告書を思い出す。猊下は終始、全ての国による一斉の掃討作戦を提起していたはずだ。ただし、主権を放したがらない国家元首たちにより、抵抗にあったようだ。それでも取り付けられた約束は、ある程度の出兵だった。

それでも猊下はよく譲歩を引き出せたと思ったのだが、実際は全然足りなかったのではないだろうか。敵は、魔物ではなく、人間だとしたら。

弟が昂然と顔を上げ、

「魔物が人間から生まれるのであれば、本当はみんなで戦うべきなのではないのでしょうか。むしろ、ひととしてのあり方を、民にも考えてもらうべきなのではないでしょうか。だから姉上、私はこのことを開示したい！　国民全員で、勇者殿に任せきりにせずに考えるべきだと示したいのです」

宣言する。

真っ直ぐに正面からぶつかってくる言葉と眼差し。

大きくなった、と唐突に思う。そうしたいという目的を持っているだけではなく、目的のために誰かの力を借りることにためらいが無いことに。私は扇の陰で笑った。弟の成長が愉快だ。このまま是非逞しい王になってほしいものだ。そのためには、現状を打開する必要がある。

「……ただ、開示するだけでは駄目ね。民が混乱をしてしまう」

私の言葉に、冷静に妹が意見を述べる。

「守る、といった姿勢を見せればどうでしょう」

「いいえ、守られるだけの民では駄目なのよ。彼らが自ら武器を取

るように仕向けなければ」
私は頭の中に図を画く。どう動けば、誰がどう動くか、予想できる範囲を。
「けれど、騎士団の協力も必要ね。王城側が何もしていないと感じさせるのも危険だから」
「公開練習を増やすとか」
妹の意見に頷く。それも妥当な線だ。
「お願いできるかしら」
「いくらでも。幸いある程度動かせるのがそろっている」
ふと気がつけば、弟が不思議そうな顔をして私たちを見ていた。
言いたいことはなんとなく予想がつく。姉達は仲が悪いのではなかったのかと。結局のところ、私と妹の間には壊滅的な溝があるわけではないのだ。ただ、考え方の違いから干渉しなかっただけで。根のあたりが似ているからこそ、相手を嫌う部分もあるのだが。
「騎士団の方はわたくしは詳しくないから任せるわ」
「逆に侍従たちのほうは姉上にお任せします。あの噂話ばかりは性に合わない」
向き不向きがあるのは承知している。私達は久しぶりに笑いあった。和解と呼ぶにはまだ少し足りないけれども。
頭の中で、簡単な計画は作成した。
私はぱちんと音を立てて扇を閉じる。
そして弟に最後の確認をした。
「何かあったとき、国が混乱に巻き込まれた時、責任を取れといわれるかもしれませんわよ？」
「分かっています」
「下手をすると、王族全て処刑されるかもしれない」
ここではさすがに躊躇った様子だ。しかし、逆に妹が、
「かまわない」
と弟に声を掛けた。こういう恐ろしいまでの潔さを時折妹は見せる。
それを受けて弟は私に返答する。

「……はい。覚悟します」
「それでも、後悔しないのかしら」
「知っているのに、何もできないのが辛いのです。微力でも、僕はこの国を守りたい。この世界が好きです」
よくできました。
私は笑って請け負った。
「では、わたくしがあなたを舞台に押し上げて見せますわ。まかせなさい」
発言権を与え、表舞台に弟を押し上げる。その声は王城内だけに留まらせず、民に発表しなければならない。いいえ、この国だけではなく、それこそ世界に広がるように。
さあ、準備を整えよう。
こんな状況だけれども、私は自分が高揚するのを感じた。弟の発言権がないのなら、彼の声を聞くように時流を流せばいい。噂を操り、人を幻惑し、目的を達成して見せよう。
静かな私の戦いは、こうして始まったのだった。

浮遊霊C?、落下する

ぎゃあああああああ！
落ちるううううう！！
幽霊さんに首を掴まれて落とされたと思ったら、真っ暗なところを落下しています！　何が起こったんだあああ！
落ちてるのが分かるけど、暗すぎて何も見えなくて、大混乱中です！
恐怖が大きすぎて声が出ないよ！
落下しているのは分かる。この浮遊感はだめだ！　怖いいい！
でもこんなにも落下しているのに地面が見えないのはどうしてなんだろう？　というか、幽霊だから私地面をすり抜けて突き抜けちゃっているんですかああ！　こ、このままだったら世界のそこに到達しちゃうのか？　いっそそこまで行ったら止まるというヤツですか！
あああああ、気絶できたらいいのに！　さっきまでよく気絶していたのにこういうときには働かないね、私の気絶する能力はっ！　いや、気絶するには能力も何も無いね、そうですね……。そういえば、幽霊も気絶する不思議。あれ何でだろう。幽霊ってなんだろうね。今更考えても仕方がないけどさ。
冷静に考えているようで、全く冷静じゃないんだけどね！
かなりの時間、落下していると思う。
ううう、なんだか気持ち悪くなってきた。もしかして、落下していると思っていたのは私だけとか、そんなオチないよね！　落下中だけに落ちはない……うわ。
パキン。
なんかガラスが割れたような、硬質な音が不意に響く。え、今の私の冗談に対するツッコミですか？　世界から突っ込まれましたか

？　そんなバカなっ。
　目の前に光のヒビ割れみたいなのが見えてきた。じょ、冗談いったから割れたんじゃないよね。そそそそんなことないよね！
　って、あそこに落ちるべきなのか、あそこを避けるべきなのかが全く分からないんだけど！　といっても避けられる自信はない！
この落下状態で軌道をそらすとかむりむり。勇者様ぐらいスゴいひとに期待してください、そんなことは。幽霊になっても凡人ですはっはっはっは……はう。
　だんだん近づいてくるヒビ割れ。中は明るいっぽい。
　あきらめてじっとそこを見ていると、結構大きいことに気付いた。家が一軒入る位のヒビ割れだよ！　ぐんぐん私はそこに近づいていって、とうとうそこへすぽんと落ちました。眩しい！　急に光が増えて反射的に目を閉じてしまう。けど、幽霊だったことを思い出しておそるおそる目を開ける。
　周囲は覚悟していたほど明るくは無かった。

　私を囲んでいたのは、圧倒的な星空だった。

　黒い、暗い、深い、闇色の天蓋（てんがい）に、きらきらと光る星が飾り付けられている。
　宝石箱を振りまいたレベルじゃなくて、金粉をくしゃみで飛ばしちゃったとか、とんでもない量のビーズを撒き散らしちゃったとか、それぐらい小さな光までが細やかに輝いている。
　凄い、と呟こうとしたけど、相変わらずの落下中だから声も出ない。
　いつも見上げている夜空とは圧倒的に数が違う。
　余すところなく光がまたたき、闇が背景になってる。上も周りも、全部、星に囲まれている不思議な場所。
　感動した！
　けどね！　それと落下は別問題のようです！　私の勢いは止まら

ないよおおお！

なんと、星空に落ちていきます。

空に落ちるってどんな感じか分からないんだけど、そっちに落下中です！

あ、これはまさかの昇天ですか！

とうとう昇天する時が来たということかっ。

生霊だったけど、こうして人は死んで夜空に上っていくんだね。

しみじみとします。

確かに心が洗われそうな夜空だった！　高級な洗濯石鹸使ったときぐらい、汚れが落とされた感じです。

というか、幽霊さんは私を昇天させるために殺害しようとしたのかな？　いや、でも幽霊は殺せないよね。未だに謎ですあの行動。

でも、ここに私が落ちて行ってる原因は、絶対あれだと思うんだ。

自分が成仏できないから、せめて私を道づれに？

だんだん落ちていることに慣れてきた。周囲が星空になったのもあるんだろうね。真っ暗より怖くないです。

落ちているというより、跳んでいるというか、移動している感じがしてくる。

……そしてそのうち私は暇になってきました。

ね、ねむい。

落ちながら眠い……って、はっ、これが気絶の兆候？　やっと気絶するの私？

このまま落ちて何かにぶつかっちゃうのはいただけないしね。潔く目を閉じて眠ることにした。

幽霊だけど、目を閉じると真っ暗だ。

さっき落ちていた場所ぐらい暗い。

ふわふわとしてきた、その時。

――そっちじゃないよ。

どこかで聞いた覚えのある声がした。

浮遊霊C？、女の人に出会う

そっちじゃないって、つまり、どっち！
知らない声につっこみたくなるけど、落下のままアワアワしてたら上手く声が出ません！
ひー、方向転換とか、何も分からないって！　混乱のきわみに到達しそうになったその時、もう一度声がした。

――目をつぶって。夢はもうそこまできているから。

なんだかポエムっぽい表現が聞こえたけれども、とりあえず逆らわずに目を閉じる。不思議なことに目を閉じたら落下していることがわからなくなるっぽい。あれ、これ本当に落ちてるのかな？　ふわふわとした気持ちが広がって、ふっと意識が吸い込まれた。

……って、はっ！
寝ちゃ駄目でしょう！　嫌、この場面で寝るぐらい図太いとか無いよねっ。私そこまでまだ突き抜けてないと思うっ。
目を開けていいっていう指示がないけれど、本当に何がどうなっているか分からないから、おそるおそる目を開けてみる。
瞬間、後悔しました！
ごめんね名前も知らない人！　指示に従ったらよかったあああああ！
相変わらず星空の中を落下しているのだけれど、ぐんぐんその何かが近づいてきてた。金色の光がそこだけ固まっているんだ。でも、月とか太陽とか、そういったのじゃなくて、何故か思い出したのは草原にある花畑。真っ暗の中、金色がとても目に眩しいけど、どう考えてもこのままだと衝突コースなんですがあああああ！

――落ちるって思えば落ちる、止まるって思えば止まる。止まっ

て！

誰かさんがちょっと強い声で指示をする。はい！　止まります！

止まれ！

「うあああああ」

その、金色何かスレスレに、私はようやく停止をしました。止まったよおおお！　本当に良かった！　良かったあああ！

「と、とまった」

名前も知らない誰かさん、ありがとう！

ぜーはー荒い息をして、中途半端に浮いたまま周囲を観察してみる。空は相変わらずの満天の星空。遠くて綺麗な光が、豪奢に闇を彩っている。足元にあるのは、金色の花だと思っていたけれど、金色の光がふわふわ漂っているものだった。け、結局ここには地面はあるんですかっ。普通に立ちたいんだけどなあ。

それにしても、静かな場所だ。時折、透明な悲しい音が響く。それに釣られて上を見上げると、流れ星が光の澪（みお）を引きながら夜空を滑り落ちていく。なんだかそれに胸が詰まる。綺麗なんだけど、綺麗過ぎてどう反応していいか分からない感じ。

さっきの声の人、どこかにいるんだろうか。キョロキョロと見回していると、

「もうちょっと先の、足元だよ」

と声が掛かった。さっきまで頭の中に響いていた不思議な声と同じだ！

っていうか、足元？

とりあえず、もうちょっと先というのを信じて、声が聞こえたと思う方向へ移動してみる。花畑に下りるのはなんだか違う気がしたから、根性の空中移動ですよ！　できるかな。

落ちない、落ちない、と唱えながら、空中をゆっくりと歩いてみる。幽霊時代に練習したけど、やっぱり才能ないのかな、上手く空中は進めません！　これも練習あるのみかなあ。

五歩ほど進んだとき私はようやく光とは違うものを見つけた。
花畑……いや、光畑なのかな？　その中央、寝転ぶ人影を見つけました。
「いらっしゃい」
ほがらかな声は、どう聞いても女の人。私と同じぐらいの歳だと思う。うーん、暗いからこんばんはというのもおかしいのでとりあえずこれがいいかなという挨拶をして見ました！　挨拶ではじまるコミュニケーションだよ！
「おじゃましてます」
そう返すと、彼女は笑った。楽しそうな笑い声が響く。
まだ姿が見えないから、私は近づいて覗き込んでみる。
その人は、ぱっちりとした目を開いて、上空でふよふよ漂う私を見てニコニコしていました。私も釣られてニコニコしてしまうよ！
何という恐ろしい相乗効果っ。
髪は一度も切っていないといわれたら納得しそうなほどの長さ。というか、この人髪の上に寝てるんじゃないかな。寝返り打ったら巻き込まれませんかっ。余計なお世話かもしれないけれど。波打つ長い髪の色は、金色の周りの光を受けて輝いているけど、よく分からない。何故か頭の中に、色はない、と浮かんだんだけど、さすがにおかしい発想かなと思って自分で却下しました。
顔は美人さんです。最近見た人のうちではとんでもない美人さんの類に入るね。白さん並に整っているとんでもない綺麗さ。というか白さんに似てる？　系列が同じ顔だなあ。ただし、女の人だけあって全体的に華奢で、不思議な儚さがある。あと、笑顔に裏や黒いのが感じられないのが得点が高いと思うよ！
見たこともない美人さんは、光の中に寝転んでいた。手や足の先が光の中に埋もれている。髪の長さが分からないのもそうなんだ。光の中に埋め込まれているというか。ちゃんと見えているのが髪と顔と、鎖骨からおなか辺り、あと二の腕ぐらい。服はゆったりとした布っぽいものを纏っているみたい。

って、声からして女の人だと思ったんだけれど、正解だよねっ！
この人も私と同じぐらい不安になるほどその、胸が、薄いというか、その……つまり、仲間なんですが。私の視線に何を思ったのか、
「やっぱり胸はあるほうがいいの？」
おしとやかそうな美人さんが、いきなりそんなことを言い出しました。え、まずその話題からですか。
いや、ほんとすみません。悪気はなかったんです！　あと、私は変態じゃないから安心してください！　美人さんにドキドキするけど変な意味じゃないよ！
私は居たたまれなくなりながら、自分の胸を見下ろしながら考えた。
「……ないより、あるほうがいいんじゃないかなあって」
「へえ。つまり、好きな人が巨乳派だったとか？」
いきなりコアな単語が飛び出してきたあああ！　なんでこんなところでこんなネタを！
「いや、好きな人とかは、特にはっ」
「残念。女の子と話す恋バナとかしてみたかったけど」
浮世離れした美人さんなのに、妙に話題が庶民的といいますか何といいますか。これは、どこからつっこんだらいいか分からない！
話題を探して視線を彷徨わせていると、女の人と目が合った。
彼女が微笑む。
あれ？
なんだか懐かしい。
もや～ッとしたものを抱えながら、首をひねっていると、
「ところで、こんなところまでどうしたの？　普通はここまで落ちてこないでしょう」
「えーっと」
幽霊になって、幽霊に落とされてここまできましたよ！　とか、現実感なさすぎだよね！　今気付いた！
「その、まずここはどこですか？」

キョロキョロと周りを見回しても、この人と星以外、何も見えない。綺麗だけど、不思議な寂しい場所だと感じた。
「夜と昼の間。平たく言えば、星の見る夢かな」
「夢？」
夢の中に入り込むとか、聞いた事もない。星空を見上げる彼女の視線を追い、真上を見上げる。うっ、口が開く。根性でカパンと閉じて、じっと見てみるけれども、やっぱり星以外、何も見えない。静かな闇、時折響くのは星が流れる音。あれ、そういえば太陽も月も見えない。風も温度も匂いもなく、延々と星空が広がっているだけ。
「夢にしては、少し寂しいですね」
本音をぽつんと零してしまった。でも、彼女は気を悪くした様子はなかった。
「……そうだね。お客様もあなたで二人目」
そりゃあここにくるのは難しそうだしね！　というか自分でどうやってきたか分からないんですが！
ここに来る前、幽霊さんとした会話がようやく頭に戻ってきた。世界を変革した存在、彼女に会うために、幽霊さんは私をここへ突き飛ばした。
「……彼女？」
もしかして、この人のことなんだろうか。
そういえば、この人も誰なんだろう？　最近相手の正体知らないままに話してることが多いね！　し、神官様にバレたら説教だ……。

浮遊霊C？、彼女と話をする

それにしてもなんて呼んだらいいんだろう？
あなたは彼女ですか？　って、とっても間抜けすぎやしませんか！
でもこんな変な場所にいる不審人物なんて、どう考えてもおかしいし。そういえば性格とか容姿とかなにも話していなかったね、幽霊さん……。あの幽霊さんなら人の外見とか全く無視しちゃうのはなんとなく分かるけど、こういったとき困ります。
困ったなあ。
そう首を捻っていると、女の人も、
「困ったね」
と呟いた。おおっとまさかのシンクロですよ。
「え、何かお困りですか」
自分の事を棚上げして、聞いてみる。そこから起きれないとか、色々ありそうだしね！
「うん、困ってる。どこから話したらいいか分からないから困ってる」
綺麗な顔をしかめながらその人は心底困った声を出した。おお、これは本格的に困っている。
「とりあえず、物事の核心からとか！」
よく分からないままにアドバイスしてみたら、
「ちょっとズバリ過ぎるかなあ」
と否定的な意見。え、そうですか？　分かり易くていいんじゃないかなって思いますけれど。
「まあ、いいか」
割り切り早っ！　私も早いほうだと思ってたけど、それ以上に早っ！　女の人は、ふむ、と考えた後、話し始めた。
「私のことを知ってる？」

空中にふよふよ漂う私を見ながら、彼女が問いかける。私は息を吸い込んで聞いてみた。

「幽霊さんとかが言ってた、彼女さんですか？　その、……人じゃないっていう」

私はじっと彼女を見詰めてみた。見れば見るほど見覚えがあるんだよね。なんでだろう。こんなにインパクトの強い人を忘れるとは思わないんだけどな。私の記憶力の有無は別として。別として、だよ！

「そうだね、それも私。それ以外に、何か知ってる？」

あっさりと認めた彼女に、ちょっと安心しました。おお、幽霊さんはきちんと仕事をしてくれたようです。方法は本気で怖かったけどね！　ッていうかあっさりとしたものでした、人外発言。こんなところで寝転んでいる時点で、確かにおかしいとは思っていたんだけれど。

「それ以外？」

あまり覚えがありません！　私は首を振って否定をした。彼女はふうんとだけ呟いた。

それよりも、彼女が幽霊さんの話していた人だとしてたら、ここにきた目的がある。

「あの、魔物とか瘴気とかの仕組みって、あなたが作ったって聞いたんですけど！」

彼女は静かに私を見上げる。

「あれって……無くしちゃう事って、出来ないんですか？」

魔物がいるから人が死んじゃったりするのなら、魔物がなくなればいいと思うんだ。でも、彼女はゆっくりと首を振った。否定。

「一度作ったものを無くすのは、かなり難しいんだよ。私はそれを出来ないし……する気もない」

えっ。

「な、なんでですか！　あれで、人がいっぱい死んだり、怪我したり、つらい目にあってるんです。なのに、」

「魔物というのは、よく出来た敵なんだよ」

彼女は私の言葉をさえぎって言った。私は口を閉じる。なんだか声の響きが凄く悲しそうだったから、聞かなければいけないと思ったんだ。

「魔物がいなかったら、人の敵は人になってた。かつてのように」

彼女が手を上げる。手に纏わりついていた光が、さらさらと零れ落ちる。その手の中には小さな光の欠片。彼女はそれを私に差し出した。

私はそれを指を伸ばして受け取った。

途端に、私の意識は別の世界に飲み込まれる。

それは戦場の只中だ。

悲鳴、怒号、血しぶき。

無辜（むこ）の民の嘆き、地面を揺るがす馬蹄の轟き。

空は鈍く濁り、人の持つ刃は常に人脂に汚れている。

天を仰いで祈りを捧げるも、その願いは神に届くことなく、振り下ろされた剣によって露と消え果る。

人が人を殺していた時代――かつての二期。

白さんが見せたよりも生々しい恐怖を焼き付けたそれに、私は口を押さえてうずくまった。怖い！　怖い！　これなんだろう。体中を戦慄が駆け抜ける。まるで私が殺されたかのような光景だった。思わず掌から光が零れ落ちる。

彼女はそれを手招きする。すると、光は意思を持っているかのように彼女の掌に吸い込まれた。

「このまま無為に魔物を消したところで、同じことになると思う」

彼女は悲しそうに言った。

あまりの凄惨な光景に、私はこみあげてくるものを抑えながらなんとか反論する。

「そんな、そんなことはないと……」

「思いたい、だけれどね」
と静かに言った。
「でも、同じように誰かが死んでいます！　それに、このままじゃ、」
このままでは私の知っている人たちも沢山死んでしまう。そのことを考えただけで、膝が震える。誰かを喪う事に、私は慣れていないんだ。慣れる筈がないことだけれど。でもこのままじゃ確実に勇者様も神官様も、先の見えない戦いに出て行くと思うんだ。あの、幻で見たように。
彼女は透明な眸でじっと私を見上げている。
「悲しい？」
不意にそんなことを問いかける。
「悲しいです」
私は肯定する。悲しいに決まってる。昂ぶった感情に涙が出そうになったけれど、ぐっと堪えた。深呼吸して、心を整える。彼女はそのまま穏やかに私を見ている。
二人ともが口をつぐむと、星が落ちる音しかしない。
言葉を発しない彼女は、本当に精巧な人形のようだった。さっきまでの豊かな表情はなく、じっと私を見ている。
彼女の静けさに、私はここで初めて違和感を覚える。
この静けさ、どこかで体感した覚えがある。そう、どこかで。記憶の中をぐるりと探してみる。
「思い出した？」
ぽつんと彼女が私に問いかけた。
静かな、静謐の……、
「星原樹？」
正解、と人の姿を模した樹が、嬉しそうに笑った。

浮遊霊C?、はじまりのひとと星原樹の話を聞く

なんとなく雰囲気に流されていってみた言葉だけど。
「ほ、本当に星原樹さんですか……？」
実際、樹が喋るとか聞いたことないんですが。
「そうだよ」
と彼女は頷く。どこからつっこんだらいいか、分かりません！
樹ですか！
でも、どう見ても普通に綺麗なお姉さんにしか見えません。
私の頭の中でだけの妄想じゃないよね……そ、そこまで妄想力は鍛えていないはずだ！
動揺する私に、
「見る？」
彼女はニコニコしながら、また何かの光を差し出してきた。多分、これは記憶の欠片。
さっきみたいに生々しいのは怖いんですが！　なんとなく断りがたいものを感じて、恐る恐る手を伸ばした。
光に触れた途端、また頭の中に不思議な映像が流れていく。

星原（わたし）樹は謳っていた。

梢を風に揺らし、ただ繰り返し神に教えられた生命の賛歌を。星語で編まれたささやきの歌は、常に世界を満たし、揺籃（ゆりかご）のように守り育てる。その頃、世界には言葉を持つ生命はいなかった。
どれほどそうしていたかなんて、全く覚えていない。何度も夜と昼を繰り返し、天候は定められたとおりに動き、葉を揺らし、梢を軋ませた。

それは透き通るような青空の、晴れたある日のこと。

星原樹（わたし）は唐突にそれに気がついた。ちょうど真下に小さな人の子が座り込んで、一緒に同じ歌を謳っていた。それはただ鳴き声をまねる鳥とは違い、意味を理解し、ともに謳っていたのだ。つたないながらも生命の賛歌は確実に効果を発揮していた。その子の足元でにょきにょきと草がありえない速度で生育していたのだ。

星原樹（わたし）を通して神がそれを見、聞き、気づかれた。

そして星語を操るに至った生命が現れたことに驚き、喜び、人の子を祝福した。

こうして、人の子は星術を得たのだった。唯一星術を操れる生命として。

人の子が私を見上げて笑う。茶色の髪と目を持った子供だ。聡明そうな、綺麗な顔をしていた。

ふっと光が掌から零れ落ちる。それとともに不思議な幻は遠ざかり、光は彼女の周りにある花畑のような群れに戻っていく。

私は目を瞬かせて、考え込む。むむ。さっきの子、どっかで見たことがあるんだけど。どこで見たんだっけ？

「あの子は毎日私のところに来て、歌をまねて帰ったんだ。そして、歌を謳うと不思議なことが色々起こることに気付いた。姉や、一緒に生活していた人たちに、星語を教えたんだよ。それが人間の始まり。だから、動物には星術は使えない」

おお。そういうことですか！　納得。でも、前に神官様に貰った絵本と若干違う気がする。

「不思議なくだものを貰って、それで星語をおぼえました！　って言う絵本を読んだんですけど、くだものじゃないんですね」

「くだものがモチーフで使われているだけ」

「じゃあ、頭が良くなるくだものはないんですね……」

がーん。

絵本を読みながらなんとなくそういうものがあるのだと思い込んでた！　食べたら賢くなるってロマンじゃない？　え、違う？

「ちゃんと大神官が勉強見てくれているんだから、そっち頑張ったほうがいいんじゃないの？」

あっさりと星原樹さんはそんなことを言う。

「もうちょっと物覚えがいいといいんですけどっ」

記憶力の限界っていうやつがありますので……残念ながら。日頃思っていたことを口に出すと、

「容量の拡張はちょっと厳しいかなあ。いまでも狭い容量からはみ出しちゃって、色々忘れちゃってるみたいだから、何とかしてあげたいけどごめんね」

星原樹さんが謎のことを言い出した。よく分からないのでスルーしちゃったけど、とりあえず私の記憶力がよくはならないってことですよね！　それは分かります。涙が出そうだっ。

さっきの幻で見た子は、良く覚えれたなあ。尊敬します。まさに星語の元祖ですしね！

「……さっきの子って、もしかして白さんですか？」

顔立ちがそういえば同じなんだ。色合いは違うけど！

「うん」

星原樹さんがあっさりと頷く。

「だからあの子がはじまりのひととか呼ばれる時がある。神様に直接祝福を受けたものだから、いきなり体質が変わったり色々あったみたい」

あー。選定を受けたあとみたいに、知らない間に人体改造ってやつですね！　覚えがあります。前例もなかっただろうし、ビックリしただろうなあ、若かりし頃の白さん。というか、さりげなく星原樹さんあの子呼ばわりしていますね。さすが貫禄が違う！

「でも、あの頃は星原樹さんはいなかったんですか？」

諞っていた樹に、こころがあるようには思えなかった。

「うん。あの子と話しているうちに、なんとなく人格っぽい何かが生まれて、私になったんだ。この姿はそのせいかな。ちょっとあの子に似ちゃっているでしょう？」

初めの直感で白さんに似ているって思ったのは、間違いじゃなかったらしい。人格っぽい何かとか、白さんにしても樹さんにしても、カンロク溢れた言い方とかはしないんですね！　分かり易くていいけど。

「だからかもしれないね、あの子のお願いを聞いたのも。魔物とかの事は、はじめはどうかなあって思っていたんだけど、結局説得されて同意したし」

「それで、魔物の話に戻るんですか？」

「うん」

浮遊霊C?、瘴気とひとについて考える

樹さんは淡く微笑みながら言った。

「魔物というあり方は、生き残ったみんなとあの子が考えたものだった。でも、結局みんな信じたかったんじゃないかな。人間を信じられないって言いながら、信じたかったからあんな仕組みを作ろうとしたの」

「そうすると、今生きている人たちが駄目だったってことですか……？」

それはちょっと納得がいかない。もとから失敗するんじゃないかな、むしろ失敗するだろうって言う仕組みを作っておいて、そのとおりになったらなったで勝手に絶望している、みたいな。小さい子にたぷたぷに注いだジュース持たせて歩き回らせるようなものだよ！

それか私に星典を暗誦させるようなものです。つまり、失敗は目に見えている。ええ、暗誦など出来ませんとも！

それで信じたかったって言われてもムッてしちゃうんですが！

「そうでもないかな……私は、瘴気も魔物も、悪い在り方ではないと思うから」

「でも、魔物は人を殺します！」

悪いものじゃないって言うけれど、実際沢山汚したり、苦しんだりしている人がいる。もやもやとしたものがだんだん胸にたまっていくよ。むむ。樹さんのお話に、何か、違和感がつきまとうんだよね。それがなんか納得いかない。

「瘴気や魔物が生まれるって言うことは、人間が持っている黒い感情が、悪いものだって自覚があるということなんだよ」

む？　難しい話に突入ですか？　頭をグルグル働かせて頑張ってついていってみる。

「そうですね、悪い気持ちがやがて瘴気になるっぽいことを聞きま

した……」

黒いもやっとしたのが、ピンクの霧になっちゃうんだよね。おさわり禁止のピンクですよ！

誰が話していたか微妙に記憶が無いけれど、多分白さんあたりじゃないかなあ。うん、変な知識のもとは結構あの人のような気がする。

「誰かを騙したり、盗んだり、殺したり、いろんなことが悪いってされているけれど、それは人間という生物の集団を保つための規律であり、自分がされたくないことでもある。でもただのルールなら、それを守らなかったときは罰則があるだけ」

私を攫った少年とかを思い出す。彼はぜんぜん罪悪感とか無さそうだった。攫われる方が悪いっていうスタンスだったしね！

「でも彼らも瘴気の元を纏ったりする。それが悪いことだと自覚があるから……たまにとんでもない逸脱している人もいるけど」

とんでもない人について突っ込んでいいのかな。気になります。

「とんでもないひとって、どんな感じなんですか？」

「あー。見せてもいいけど、……いや、やめとこう。簡単にまとめると、愛情表現がじわじわと相手を殺すことっていう人」

「変態ですか！」

率直な感想が口を突いて出てしまう。

いや、変態どころじゃない。犯罪者です。とんでもない人だということだけが分かった！　絶対にお近づきになりたくないです。

「稀代の変態だと夜闇（くろ）の勇者が言ってた」

「夜闇（くろ）の勇者さん、なんでそんなお知り合いが」

とりあえず現代の人じゃないことだけは安心した！　安心していいのかな……。

「親友らしいよ。つまり夜闇（くろ）のストーカー」

それって親友じゃなくて、自称親友なのではないでしょうか！

ツッコミどころが多すぎて、どこからつっこめばいいか判りません。とりあえず無難に返してみる。

「……人生って、色々なんですね」
昔の勇者さんも苦労をしていたのはわかった。
「あそこまで歪んでて枠を逸脱しているのはべつとして」
樹さんは咳払いをした。私も背筋を伸ばしてちょっと真面目モードに戻りますよ。
「瘴気は罪悪感や後悔もまじっているものだから、それ自体は悪くないんじゃないかなと思ってる。毒がそこにあっても、その毒自体がいるということには、罪がないんじゃないかなって」
それってかなり人間に希望を見た考え方ではないかなあ。悪い人でも本当に後悔をしているのかな。いや、私が言うのもなんだけれどね！
私の微妙な反応に気付いている樹さんは、
「私の考え方だから、意見の一つとして覚えておいてほしいな」
という。
「わかりました」
最近いろんな人がいろんな意見を言ってる。なんで私に言うのか不思議なんですがね！　幽霊ですが、一般庶民です。幽霊ですが……。なら、一般幽霊？
思考がそれかけた私に、樹さんが心配そうに言う。
「あの子もあなたに色々言ってたみたいだけど、嫌わないであげてね？」
あの子……幽霊さんが白さんのことを勇者と聞いて爆笑していた気分がよく分かります。あの子っていうガラじゃないですよあのひと！　確かに昔の白さん少年時代ならありだと思うんですが。今は徘徊不審者おじいさんですよ……。樹さん、教育をどこで間違われたのですか。とりあえず、乙女を転がしたまま話をする男には育てて欲しくなかったです。
私の内心の葛藤をよそに、樹さんはふっと息を吐いて軽く目を閉じた。疲れている様子。
そういえば、この人はさっきから起き上がらないよね。私も気にし

ていなかったけれど、これがいつもの姿なのかどうか知らないから聞いてみる。

「大丈夫ですか……？」

今更なんだけど……幽霊さんが不吉なことを言っていたのを思い出す。

――彼女はもうすぐ寿命を迎える。

あの時は正直、おばあさんとか想像していました！　ごめんなさい！　お姉さんでした！　……見た目だけは。つまり白さんと同じ見た目詐欺です。

でも普通の樹木の成長具合からいったら、この人は一体どれぐらいの年代なんだろう。残念ながら植物には詳しくないんだよね……。

もし、幽霊さんが言っていたことが本当なら。

星原樹が寿命だということなんじゃないの？

えええええ。今更大変なことに気付いたよ！　それってどうなんですか！

というか幽霊さん絶対星原樹さんのこと白さんから聞いて知ってたっぽいし！　代名詞じゃなくて、ちゃんと名詞で話して欲しかったね！　今になってだけどっ。あの人、言葉数が多いわりには大事なことは煙に巻いていた気がする。

私は軽く目を閉じている樹さんをじっと見てみた。

「……体調、大丈夫ですか?」
樹だからなんだろう、幹の調子どうですかっとかになるのかな?
いや、それは逆に馬鹿にしすぎかもしれないから、とりあえず体調って言って見ました！　樹さんは少ししてから目を開いて、ふんわり笑いました。
「ちょっと疲れただけだよ」
と言っても、私と会話しているだけなのにな。はっ、私との会話は力が要る作業なのか！　そ、そんなに調子悪いのかな?　おろおろする私に、樹さんは気にしないで、と言った。
「こんなに会話をしたのも久しぶりだからね。会話って難しいなって思って」
樹さんはぎゅっと眉根に皺を寄せて考えている様子。
心配は御無用です！
私は胸を張って太鼓判を押す。
「普通に会話していると思いますよ！」
大丈夫です、久しぶりの会話でも、ちゃんと成り立っています！
できることならば、もうちょっと噛み砕いた表現をしてもらってもいいかなーなんて思うけれど。
「その感想ってどうなの」
まさかのツッコミが入りました。でも、この程度のツッコミは私をゆるがせるに値しません。
「勇者様とのコミュニケーションで鍛えられましたから、たいていの方とは楽しくお話できると思います！」
「……深蒼(あお)の勇者を応援したい気持ちになってきた」
えー。
私のショックを受ける様が面白かったのか、樹さんが軽やかな笑

い声をあげる。本当に人と変わらなく見えるんだよね。人形みたいな容姿は別として。それにしても、勇者様とお知り合い？　いや、確かに私達は星原樹の下にいったことがあるけれど、樹さんのこと知らなかったしね！　というか、どこから見ているのか判らない。

「あの、樹さん」

恐る恐る呼びかけると、樹さんはビックリした様子だった。

「新しいあだ名をありがとう」

そこ？！　そこにお礼が？　まさかのお礼に私のほうが慌てる。

「ど、どういたしまして」

ああ、なんか変な調子になるよ。樹さんと話していたらちょっとずれていく。会話に慣れていないとかじゃなくて、何か別の原因だろうな。つまり、ボケ同士な気がします。まさかのツッコミ不在！　私がかねればいいけれど、どっからつっこんでいいか見失っているから無理無理！　白さんでも何でもいいからツッコミ要員が必要です。早急に。

それにしても、気になっていたことを改めて聞いてみるよ。

「さっきから私のこと色々御存知みたいですけど、なんでですか？」

樹さんの近くに、浮いたまま座り込む。枕もとのあたりに膝を抱えて座り込む。どうにも気になるんだよね！　私の秘密を知られているとか！　ドキドキですよ。

「私の周りに色々落ちているでしょう？　これで見たんだ」

キラキラ光るこの何かのことだろうか？　よく見ると、光には強弱がある。明滅するように弱弱しいものや、眩しいものもあったり。これは一体なんだろう？

そういえばさっきこれを貰った時に、まるでその場にいるみたいな感じで映像が浮かび上がってきた。手に持った感覚はなかったんだよね。本当に、ただの光の塊といったら一番近い感じ。

「これが世界の記憶の欠片だよ」

樹さんはどんな原理か、簡単に手でつまんでいる。樹さんの指をほんのりと光が照らしている。これ一つ一つにああいった何かが入っ

ているのかな？　欠片って言うぐらいだし。だとすると、世界全部の記憶としたら思ったよりも少ない気がする。樹さんが言っているのって、ここの周りにお花畑みたいに広がっている分のことだよね？

「これで、全部ですか？」

回りに転がっている光を眺めながら聞いてみたら、樹さんはきょとんとした。でもすぐに何を聞いているか判ったみたい。

「違うよ。これだけじゃなくて……」

と樹さんは白い手で空中に弧を描いた。しなやかに指先が示すのは、私達の上に広がっている星空。数多（あまた）の星を指し、

「あれもそう」

と言う。私はぽかーんと口を開けて上を眺める。これ、全部ですか！

「といっても、これでも本当に一部だけなんだよ。これぐらい分厚い本があったとして」

といいながら掌を出す。いや、それ分厚すぎですよ！

「これの一ページ分が、ここにあるものぐらいかな。欲しいものだけを抜いているから」

あまりに壮大すぎて、想像力が追いつきません！　あの遠いのと近いのに違いがあるんだろうか。でも、遠いのでも暗い光のがあったとしたら、ここから見えていないかもしれないんだよね。それを数に入れると、凄そうなんだけど！　えー。

「口開いている」

はっ。指摘にかぽんと口を閉じて、樹さんに向き直る。

「じゃあ、あれは星じゃないんですね」

そ、それだけは理解したぞ……。この不思議空間が更に謎になってきた。奥も底も見えないしね！　これだけ無限スペースがあったら、更に詰め込めそうだけれど、何がどこにあるかとか判らなくなるだろうな。私だったらいっぱい行方不明にすると思うよ！　そういった自信は無駄にあります。

「そうだね、星じゃない。あれは動きを止めた時間の欠片、夢の中に僅かに残滓として残る思い出たち。ここは星の動きも時間も関係

がない場所だから、記憶が結晶化してこうなっているの」
樹さんの言葉に、改めて光を見る。手が届かないほどはるかに輝く光。それを眺めて綺麗だなと感嘆が沸き起こってきた。感動で胸が一杯になるぐらいの輝きに、ためいきをもらすだけで精一杯ですよ！
「凄いですね」
うわー。
「終わった過去も、確定した未来も、全部ここに収納されている」
樹さんが不意に調子を変えて言った。今までの会話であった、あたたかみとかが抜けた声だ。
けれど、私はその中で聞き捨てならないことに頭が行ってしまいましたよ！
「未来、も？」
「そう、全てが」
ふ、と樹さんが息を吐く。声に感情が戻る。その声は、とても悲しそうだった。
「だから、私は自分が枯れるときを知っている。世界の始まりも、世界の終わりも、これまでの過去も、これからの未来も全てここにあるから」
私は急に樹さんの回りにある光が怖くなってきました。え、これもしかして、未来も混じっているの？　熱いものに触れたように手を引っ込める私を、樹さんが静かに見ていた。
「か、枯れるときって……」
なら、彼女は初めから自分の寿命を知っていたことになる。

浮遊霊C?、彼女の寿命

「そう、星原樹（わたし）はＳｋ八〇〇〇年を迎える前に枯れる」
それは、何か書物を読み上げるような声だった。歴史の本を読んでいるようで、逆に私のほうがビックリする。
「後、ちょっとしかないじゃないですか！」
「そうだね、あと少しだ」
彼女はあっさりと同意する。いやいやいや！　そんなノリで話す話題じゃないと思う！
昔からずっと世界にあったという星原樹。一期より昔からずっと、神様と一緒に人々と世界の興亡を近くで見てきた樹。これが世界にとって大事なものだと私にも理解できている。
それの何かが停止しているから、空が曇ったままなんだよね？
なのに枯れちゃうなんてことが起きたら、一体何が起こるかなんて想像もできません！
……もしかしたら、今みんなが頑張っていること自体、無駄になっちゃうんですか？　私は怖くて聞けなかった。全部知っている彼女に、世界って滅びるんですかって聞いて、その返事が悪いものだった時には、どうしたらいいかわからないから。
真っ青になる私をよそに、樹さんは傍らの光を手にとって、顔の前にかざして眺めている。あれも、何かの記憶なんだろう。私は怖くて触れませんけど！　もし、未来の欠片を触ってしまったら、と思うと身じろぎもなかなか出来ないですよ！　そそっかしいことに定評があります！　うっかり触ってとんでもないものを見たら、簡単に恐慌状態になると思うよ。私は小さくなりながら、彼女を見るしか出来ない。
彼女は何かを眺めながら、とつとつと語る。
「世界は流動して、いつか命はなくなるもの。星の巡りを……世界

が流動することを、星神様が決めたから、仕方の無いことだよ」
彼女はほんのりと笑顔さえ浮かべながら、言った。なんで笑っているのか判らない。私はぎゅっと自分の服を握り締めて考える。
怖くないの？
私だったら大恐慌を起こして、そこらじゅう走り回るレベルだよ！　死ぬって、擬似的に幽霊世界を体験したけれど、本当に怖い。自分が死んだと思った瞬間のあのじわじわと足元から何かが這い上がってくる瞬間を、もう味わいたくない！　唐突に日常が切れるあの瞬間は、おそろしいことだった。世界から追い出されたような、身の置き所がなくなったような、寂しさと焦りが入り混じった感情が思い出される。それが今のところの私の死のイメージだった。
なのにそれを目前にしているという彼女は、あまりにも穏やかだった。
「怖くは、ないんですか？」
「怖くない。ちゃんとお別れも言ったし、課せられた役目も大体は果たした。今は、とても穏やかな気分だよ」
彼女の言葉には嘘はないんだろう。なにもかも、覚悟を決めた揺らぎないやわらかい表情だった。
その笑顔を見て、ふと、お父さんとお母さんのことを思い出した。お父さんとお母さんは、街道で馬車の事故に遭遇して亡くなった。私は奇跡的に無事だったけど、お父さんは即死だった。重傷を負ったお母さんとは少しだけ話をすることが出来た。冷たい手を握りながら、最後に交わした会話を覚えている。
あなたが無事でよかったわ。お父さんもそう思ってる。だから、ちゃんと元気で、しあわせになるのよ。
ああ言ったときのお母さんの表情と、今の彼女の表情が被ってみえた。胸をぎゅっとつかまれたような切なさが私を満たす。苦しいはずなのに、あまりにも穏やかだったその声と眼差し。彼女はとっくに覚悟を決めていたんだろう。
「後一つだけ、まだ出来ていないことと心残りはあるけどね」

樹さんの手から、ころりと光が零れ落ちた。それは一度彼女の肩に跳ね返ったあと、同じような光に埋もれていく。

「神子」

彼女の声が凛とした張りを持つ。

初めて、彼女が私を呼んだ。

過去からぐいっと意識を引き戻される、はっとして知らない間に伏せていた顔を上げた。彼女はいつの間にか私を見ていたようだった。私は雷で撃たれたみたいに動けなくなる。

彼女の眼差しと、私のそれがぶつかって、目が反らせなくなった。深い、深い眼差し。吸い込まれるように、私の目が彼女のそれに留め置かれる。

「私はずっと待っていた」

彼女の何色でもありながら何色か分からない不思議な眸は、どこかで見たものと同じだった。私はその色を知っている。とても身近な色のはずなのに、どこで見たか判らない眸。

彼女は、なかなか言葉の続きを口にしなかった。

何かを言わなくてはならないと、焦りが生まれる。

私は強張る喉を、力を入れて無理やり働かせた。声が上手く出ない。ひゅ、と風だけが漏れる音がして、私は震える手で喉を押さえた。なんで、手が震えているんだろう。とても力を入れて、ようやく出た声は小さい上にぶつ切りの言葉だった。

「何を――」

待っていたのか。

その答えを、私は知っている。

頭の中で、これ以上は聞いちゃ駄目だと警鐘が鳴った。

なんでそんな風に思うのかが判らない。

けど、それを聞いたら後戻りが出来なくなる、そう考えた。

勝手に震えている手をぎゅっと握る。でも、握った手も震えている。私は彼女の唇が動いて、言葉を紡ぐさまを眺めるしかなかった。

「この日を待っていた。あなたが、ここにたどりつく事を、ずっと

待っていた」

「私を……」

そんな、星原樹に待たれるようなご大層な人間じゃない。ただの、どこにでもいる人間で……。頭の中でそう繰り返したけれど、それ以外の部分で恐怖がじわじわと上がってくる。

星原樹は日の光が溶け込んだような、優しい笑顔でこう告げた。

「さあ、これから未来の話をしよう、もう一人の私」

私、彼女

「わ、私は……」

冗談、ですよね？

笑おうとしても顔が引きつって動かない。

何よりも、それ以上の言葉が喉に引っかかって出てこない。否定できるはずなのに、出来ない。まるで星原樹のまなざしに、言葉を押さえ込まれたようだった。

彼女は私を見ながら、すがりつくように言う。

「否定しないで。あなたは私。未来のために蒔いた種で、接ぎ木で、同じ魂のひとひらを持っている、ひとではないもう一人の私。俯瞰図で定められていない、空白の私」

理屈じゃなく、彼女が嘘をいっているんじゃないって言うのは分かる。

私もずっと感じているから。初めて彼女を見たときから感じていた懐かしさ。見たこともない人なのに、私は彼女のことを知っているというよくわからない感覚。

それはたやすく私の言葉を封印する。自分の中に、自分の知らない何かがあることにじわじわと恐怖がこみあげてくる。叫びたくて、混乱したくて、でも、多分そんなことをしたら彼女が困るだろう。それがたやすく理解できて、私は更に混乱する。

ぐっとつまったまま、私は抱えた膝に顔を埋めるしかできない。頭の中を言葉にできない何かがグルグルと渦巻いているけど、どうしようも出来ません！

でも、おかしいよね。私には両親がいたはずなんだ。普通に暮らしていた、一般庶民で、人間だ。

けど、彼女は違うという。何もかもを知っている、彼女が否定をする。

何か、信じていたことが足元からさらさらと崩れていくような気がする。嘘だといいたい、けれど、彼女は更に追い討ちをかけてくる。

「あなたは、自分の名前を言える？」

「名前、ですか？」

私の声はかすれていて、殆ど音みたいなものだった。けれど、星原樹には届いたようで、彼女は小さく頷いて、繰り返していった。

「名前、だよ」

「私は……」

神子、と言おうとして、違うことに気付いた。血が下に下がる感覚がする。名前。

「星別者は名前が上書きされるって言うけれど、本当は違うんだ。付与されるコードは大きな力を使うために、上から一枚上着を着るようなものなの。心の底ではみんな自分の名前を持っている。……始原（あのこ）でさえ、そう」

あなたの名前を言ってみて。

その質問に、答えられない！　私は何って呼ばれてた？　いくら記憶を探っても、誰も私の名前を呼ばないんだ。そして、私も名乗ったことがない！　どうして？　胸の辺りがきりきり傷む。ぎゅっとそのあたりの服を握り締める。

「誰かに名前を聞かれたことがある？」

パン屋のおかみさんは、私をあんた、と呼ぶ。同僚は見た目からのあだ名で。近所のおばあちゃんやおじいちゃんもそう。お父さんやお母さんはなんと呼んでいた？　そしてはっと気付く。

「お父さんや、お母さんは……」

口に出しながら、私は改めて気付いた。二人を両親だと思っていた。それは、何時から？

やっぱり、子供の頃の記憶がない！　続いていたはずの過去へ至

る記憶の道は、あるところで突然途切れているんだ。ぽっかりと開く空白に、私は自分が震えるのを抑え切れなかった。

一番古い記憶。

時系列に並ぶ、記憶の一番最初のページ。

あの日、私は、青空を眺めていた。

どこまでも続く青空だ。人の子の間で普段着と呼ばれる服装をして、初めて見上げる青空を、呆然と眺めていた。広い、と感じた。

そして、人の小ささに驚いたのだ。

いつも、青空は見下ろすものだったから――。

自分の記憶が、私が人間だということを裏切っていく。

それ以上言葉を失う私に、彼女は更に付け加える。

「誰の名前も、聞いてもおぼえられないでしょう？　私達の声は、韻律に近すぎる。名前を呼ぶだけで、その人に危害を加えてしまうから、あなたは名前を覚えないことで自衛した」

勇者様達と初めて話したときを思い出す。

彼らは名乗らなかった。

そして、私も名前を聞かれなかった。

「私の、名前は、ないんですか……？」

呆然と呟くと、目にたまっていた涙がぼろっとこぼれた。顔を足の生地に押し付けているのに、布地に当たらず涙は解けて消える。ここは現実じゃないから、私の身体から出たものは分解され還元されていく。

当たり前だったから気付かなかったことを目の当たりにして、自分が信じられなくなる。

でも、目の前の人と同じ存在だと言われても、それはにわかには信じられない。私には何の力もないんだ！　じゃないとあんなに無力を嘆くことはなかった！

「本当に、私はあなたと同じなんですか……？」

「そうだよ。……たとえば、魔物はあなたを襲わない」
それは星原樹の枝を持っていたからだと、ずっと私は思っていた。けれども、それは違った。
魔物は人間だけを襲う。
だから、逆にこうだともいえる。魔物は人間以外を襲わない。
「魔物はそういう風に作られているから、例外はないんだ。だから、陸馬さんは襲われなかったでしょう？　あなたと同じで」
私は顔を埋めたまま首を振った。それだけじゃ、証明にならない。けれど、事実を積み重ね挙げられるたびに真実が不動のものとしてどんどん重みを持ってくる。
指先が冷たくなるような感覚。
「あなたは自分で知らない知識を持っているときがある」
私はぐっと詰まる。
「例えば、領主様の屋敷で倒れた時、あなたは検索を実行し、周囲の様子を把握した」
どうして知っているのだろう？　知識が混じると危険だということは、白さんにも忠告を受けた件だ。あまりに深淵を覗き込みすぎると、戻って来れなくなると。その深い淵には、彼女がいたのだろうか。
「あなた自身が曖昧にならないように壁を作っていたのだけれど、私が駄目になっちゃったから、それがなくなっちゃったの。だから、このままではあなたも目覚めることが出来ない」
「……壁？」
私はようやく顔を上げて、彼女を見た。私が幽霊状態のままでいるのは、このせいだったの？　彼女はすまなそうな表情で私を見た。
「元々あなたのコードは【０／Ｍｖｖｋ０】じゃないんだけど、選定で上書きしてしまったからそれでちょっと調整が狂っちゃったんだ。……もうすこし、普通の女の子でいさせていあげたかったけど、ごめんね」
それは、私は謝られるところなのかな？　違うと思いながらも、上

手く表現できない。判らないけれど、彼女があまりにも悲しそうだったから、何か言わないとって考えて、でも何も言えなかった。

「時間がないから、あなたにこんな風にしか伝えられなかった」

だから、ごめんね。

再度彼女が呟いた時、何百もの稲妻が落ちたような光が弾けた。

続いて身体を吹き飛ばすような大音声が響き渡り、全ての光が瞬き揺れる。何が起きたのかと反射的に上を振り仰いだ。

星空が、光に引き裂かれ、砕けていた。

私、彼女、運命

光が闇を浸食し、大雪のようにはらはらと降りそそぐ。
私は呆然と上空の光景を見た。
星空のように見えていた上は、光に食い荒らされ、白い亀裂が走っている。それは目を焼かない光で、青空とは違っていた。ただ、眩しいだけ。
いずれかはここもあの光に飲まれちゃうんだろうか。
わけが判らないまま、身震いをした。
「幾つかの運命（さだめ）が確定したみたいだね」
彼女がそれを見上げながら呟く。
さっきの大音声は一度だけで、ひらひらと光は音もなく舞い降りる。今更ながら、ここの世界では音は私と彼女の声しかないことに気がついた。たった二人だけの場所。けれども、彼女と私が同じなら、ここで繰り広げられているのはただの一人芝居なのかな。それはそれで微妙だな、とぼんやりと思考に浮かんできた。
「運命？」
彼女の寿命も、それで決まっていると言っていた。自分の知らないことが、勝手に決められている恐ろしさ。運命なんて言葉は、いまの私にとっては不吉なものでしかない。
私の眼前を光の欠片が掠っていく。思わず恐怖に身を引いた。
これがまた何かの記憶の欠片なのかな？　下手に触って何かがあったら怖いから、私は更に小さくなりながら上を垣間見た。不安で仕方がない。何もかもわからない事だらけで。
だって、自分も信じられないって、どうしたらいいかわからないし。だんだん、なんで涙がにじんでいるのかも判らなくなってきた。
彼女の欠片が私なら、私の事は彼女は全部知っているのかな。
私じゃない私は、何もかも知っているのだろう。彼女は私と対照

的に、不安の欠片もない眸で、静かに上空の光を眺めている。
「運命だよ。神様が天地開闢の折りに定められた、おおよその世界の指針。こうなる方向にあるよっていうヤツで、大体おおよその気候変動とかを書いた世界の設計図みたいなものだね」
私が抱いていたイメージとはちょっと違ったみたいだった。
「誰かの運命が決まっているとかじゃ、ないの？」
「違うよ。私みたいに大きなものの事項は書かれているけど、人ひとり程度は載っていない。だから、読めずに世界が何度も滅びてしまったの。あんなに人は小さいのにね」
ここでいう生物の大小って、純粋な大きさのことなんだろうか。
「ここは、昼と夜の間の場所。神様がいらっしゃる虚空に一番近い、世界の外側なんだ。時間の概念が、限りなく薄くなっているの」
とつとつと語られる内容は、なんだかとても抽象的な内容だった。理解を放棄したまま、私も彼女と同じように光を見上げた。耳を彼女の声だけが撫でていく。他の音はここにはない。彼女が喋っていると言うことは、私が独り言を言っているということなのだろうか。そのあたりもまだ理解が出来ていない。
「未来の欠片もここにあるって言う話はしたよね」
私は頷いて、その話を覚えていることを伝えた。だから、光に触れるのがとても怖い。見たくない未来を見るかもしれないし、なによりも、自分が自分でいられなくなるかも知れない怖さがたまらない。
「世界のありようを眺める俯瞰図がここにあるんだけれど、それは確定するまでは虫食いばっかりの本みたいなものなの。結果だけが、幾つか記されている程度の運命図なんだ」
結果だけが？　私の疑問は顔に出ていたらしい。彼女が言葉を追加した。
「そう、おおよその結果だけが未来として確定されているんだけれど、大体は過程が抜けているの。その未来にいたる道筋が決まって現実の時間が運命に追いついたら、そこまでの世界の記憶が確定す

る。そして、それが記録になって、ここに落ちてくる」
それは、つまり、
「現実で、……時間が流れたっていうこと？」
私が久しぶりに出した声は、泣きはらしたみたいにかすれていた。
「……うん」
正解らしい。さっきまでの話で、呆然としていた私の頭に、ふっと閃くものがあった。
「って、何日か進んじゃったって事？」
私がここに落ちた時点で後数十日で世界が滅びるっていう段階に来ていたはず！　不意に沸いてきた現実感に、背中に悪寒が走る。一体どれぐらい経過しちゃったのかな。そもそも、私がここに来たのは、彼女に魔物をなくして欲しいと願いに来たんだ！　けれど、今はそれどころじゃない話になってしまっているけれど。
「今、これはどれぐらい時間が進んだってことのなの？」
震える声で彼女に聞く。彼女が虚空に向かって手招きをした。白い掌の上に、光がすいっとまるで生物みたいに降り立ち、明滅する。彼女はそれをじっと眺めている。世界の記憶を読み取っているんだろう。
彼女はしばらく熟考して、やがて口を開いた。
「一番先の時間で、二日」
まだ、二日しか経過していないのなら、大丈夫だろうか。けれども、それは間違いだった。彼女は改めて言い直す。
「始原（しろ）のが切った、世界滅亡の期限から二日前だ」
私は息を飲むしかなかった。

私、彼女、夜明け

二日前。

私はその言葉に、元々白くなりかけていた頭が真っ白になる。

「それって、もう、」

「大丈夫」

私の言葉を遮って、彼女が強い口調で言い切った。

「大丈夫。まだ間に合う。みんなを信じてあげて」

彼女が掌を傾ける。そうすると、光の粒がころりとそこから転げ落ちた。それを私は目で追うけれども、あっという間に他の光にまぎれて見失ってしまう。

周りは徐々に明るくなってきた。まるで夜明けのように、闇が黒ではなく、何度も塗り重ねた深い紺に変わっていく。万の、いや億かもしれないほどの光が流れて、この場所をやわらかく染めていく。光の雨が、上から降りそそいでくる。その色が変わる様は、まるで夜明け前の空を見ているようだった。

「深蒼（あお）は夜明けの色だよ。綺麗だよね」

彼女の言葉に、うん、と頷いた。今まで意味が判らなかったけれど、そういわれればこの色が勇者様のイメージに近いとすとんと納得した。夜の闇ではなくて、そこに光が混じった透明な深い蒼色。底抜けに明るいものではなくて、その向こうには闇だけじゃないって期待できる希望が混じった色。

私は夜明けのような空を見上げた。

これがいつも見ている夜明けなら、徐々に地平線が赤くなり、金に燃えて、太陽が顔を出す。夜は逆の空に押しやられて、光溢れる昼の世界がはじまる。毎朝繰り返されていた、世界の風景。頭の中で、その光景が鮮やかに甦った。

たまに旅をしていたときに早起きをして、それを眺めていた。パ

ン屋に出勤していた癖で、朝が私はとても早いんだよね。そのせいで夜明け前にバッチリ目が開いちゃう体質で、神官様に日の出鳥みたいだと指摘されたことがある。裏のおばあちゃんが飼っていた日の出鳥のヒナちゃんは、私の永遠のライバルですから！　日の出鳥以上と言っていただきたい。

ぽろぽろと勇者様や神官様と歩いた道のりが、頭の中に湧き上がってくる。

少し冷えた不思議にぴんと張った朝方の空気、寒いからよりそった陸馬さんの暖かさ。見張り番としてお二人のどちらかが起きていたからぽつぽつと挨拶をした時の声。どれも私の思い出たち。

あれからとても時間が経ったみたいに感じる。まるで、何年も前の風景のように頭の中で考えてしまうんだ。

外の世界では何が起こっているんだろう。

期限の二日前、それは月も星も隠れる暗い夜のはずだ。その日に夜明けはくるのだろうか。ふわりと私の横を光がかすめていく。まだ手を伸ばして世界の記憶を見る勇気はないけれど、少しだけ落ち着いた。見上げた空は、もう暗いだけの星空ではないから。

混乱しても、何も始まらない。

私は深呼吸した。この身体で息が必要かはわからないけれど、こうしたら落ち着く気がしたから。

吸って、吐いて、頬を自分で叩く。

よし！

彼女が私の行動を、目を丸くして見ていた。

「痛くない？」

え、そこですか！　私は胸を張って答えた。

「気合注入だから問題はないです！」

「気合かあ、気合は重要だね。ならよいね」

彼女も納得したようだった。バッチリです！　気合十分。まるで麻痺したようだった頭の中が、ようやく普段どおりに戻る。切り替えは早いほうだと思っていたけれど、意外と役立ちました。まだ、ち

ょっと手は震えているけどね。あえて考えないようにする。
「色々聞いたけれど、落ち着こうと思って」
「……うん。混乱させてごめんね」
「大丈夫です！」
さっきとあべこべに私が大丈夫と口にする。なんだかおかしいなと思って、少しだけ笑い
がこみあげてきた。うん、大丈夫、私はまだ笑えますから！　たとえ顔が引きつっていたとしても、まだ、大丈夫。
　気合を入れなおした私は、ようやく正面から彼女に向き合った。彼女がただ私と逢いたかっただけのはずがないって、ようやく気付いたんだよね。
「あなたはここから出られないの？」
白さんと知り合いみたいなことを言っていたから、外と交信する何らかの手段は彼女は持っていると思う。でも、実際に星原樹が話している！　とか、聞いた事がないんだよね。そもそも人が近づけないのもあるけれど。
「うん、意思を伝えることは出来るけど、人の姿で出たことはないし、世界を見るのはいつもこの欠片からなの。だから、ずっとあなたを待っていた」
その言葉に私は一つだけ納得したことがある。
　彼女の話に付きまとっていた違和感。
　それは、まるで傍観者のような言葉達だ。彼女は世界の外側から見て、話をしている。当事者ではなくて、一歩引いたところからの言葉だからずっと違和感があったんだろうな。気合注入のおかげか、頭がようやく落ち着いてきた。うん、これならいける！　……気がする。空元気でも、元気ですから！
　君は、君だよ。
　白さんが前、そんなことを言っていた。
　そう、私は私。
　多分、あの時、白さんが言ったことは、今の状況を知っていた上

なのかも入れない。あと何かと呆れていたのは、私と彼女のことを知っていたせいなんだろうね！　比較しちゃ駄目だよ！　それは間違えています。胸の大きさなら競合できるかもしれないけどっ。

さて、本題です。私は彼女に質問する。この世の全てを知っているはずの存在が、なんで私を待っていたのか。

「で、ようやく落ち着いてきたから、不思議に思ったんですけど」

「うん」

「私は結局、何をすればいいんですか？」

私、彼女、そして、

私の言葉に、彼女はきゅっと唇を噛んだ。目を少しだけ伏せて、何かを心に決めたようだった。

「お願いがあるんだ」

私は居住まいを正す。背筋を伸ばして、じっと言葉に耳を傾ける。

「なんですか？」

「私の代わりに、世界を支える樹になってほしい」

彼女の願いに、私はすぐ頷けなかった。不安とかそういうんじゃなくて、純粋に疑問がわいてしまった。

「え、私はあなたと同じだから、もう星原樹なんじゃないの？」

さっきから、彼女と私は同じ存在で人間じゃないよって話をしていたと思う。でも今の言い方だったら、私はまだ星原樹の一部でも無さそう。つまり私は今はなんなんですかっ。もしかして、本当に幽霊だとか！　これ以上謎な存在になったらなんて名乗ったらいいんですか！　ただでさえ、今は名前も職業もない状態だし。はっ。なんてこと！　自己紹介も出来やしないよ。今、気付きました。名乗りようがないね！

彼女は混乱する私を見上げて、

「あなたと私は同じだけれど、それでいて違うものなの」

と言った。私は逆にきょとんとしてしまう。さんざん同じだって言ってたけど、違うもの？　彼女はちょっと考える仕草をして話し始める。

「たとえば、海の水をコップに汲んだとするね。じゃあ、そのときコップの中にあるのは何だと思う？　海って言うかな？」

「いいえ、海水、ですね」

私の答えに彼女は嬉しそうに笑った。正解だったみたいだ。

「でも、海の水とコップの水は同じだよね？　でもコップの中には

海はない」
コップに海が入っているとか詩とかでありそうだけれど、今の話はそうじゃないのがわかる。
多分、今のたとえ話だと海が彼女でコップの中の水が私、になるのかな？　それぐらいスケール差があるんですか！　そりゃあぜんぜん違うと思うよ。
そうか、じゃあ彼女があの大きな樹全部で、私が枝の一振りぐらいなのかな？　つまり、お枝様は私の姉妹だったのかもしれない。もう少し丁重に扱っても良かったかもねっ。まさか、自分も樹だとは思いませんでした！　いや、普通はその発想はないよね。でも樹だけどさんざんご飯とか食べたなあ。あれは一体どういうことなのか謎ですが。
私が思考を逸らしかけるけど、彼女の解説は続いていた。ちゃ、ちゃんと聞かなきゃね。説明を聞かずにあとで痛い目を見るのが私です。つまりいつも通り。
「こんなふうにかたちが違うと、世界で名付けられている名前が変わるの。それを利用して、星原樹を違うものにする。俯瞰図から離れて、違う運命を辿るものに変換する」
だんだん彼女の話が見えてきた。
彼女が言っているのは、主と従の置き換えなんじゃないかな。枝と本体を置き換えるって言うことだよね。
でも、それだったら。
「海とコップのたとえが私とあなただったら、それってかなり無茶なんじゃ……？」
私はおそるおそる聞いてみると、彼女はとてもいい笑顔で頷きました。
「うんかなり無茶だよ。でもなんとかなると思う」
「絶対に？」
思わずつっこんじゃったのは仕方がないよね！
「ううん、多分」

彼女もいい笑顔のまま返しました。って、多分って、ちょっと！
繊細な容姿をしてとんでもなく大雑把な発言が飛び出てきた。
うわー……。今、どんな言葉よりもこのひとが私と同じものだって言うのが理解できた！　そして、無駄に前向きだよね。なんか、うん、私もそういうところあるからわかるけど。こんなところで似ている部分を実感したくなかったと言うか、複雑だと言うか！
「でも、心配は要らないよ。時はちゃんと満ちた。ギリギリだけれどなんとかなる。あなたの大事な人たちも助けることが出来るかもしれない」
不意に現れた希望の言葉に、私は思わず彼女を凝視する。彼女は真剣な顔をして続ける。
「星原樹（わたし）の力がもっとも落ち、かつ、星の力がもっとも強くなっている星夜の今日なら不可能を可能に出来る」
星夜というのは、今日みたいな月が出ない星空の夜を指すんだけれど、今日の場合は違うはずだ。だって、地上がもやーっとしたのに覆われて、星が見えないんだから。そのせいでこの日のことをみんなが暗夜と呼んでいた。
「星が出ていない、暗夜じゃないんですか？」
神官様たちが一生懸命話していたことを思い出しながら彼女に疑問をぶつけた。彼女は軽やかに笑う。
「私の名前の由来を言ってみて」
「星原樹……星を源にした樹？」
「そう、つまり、私は常に星から力を得ている。地上が何かに覆われていようと関係がない。私の根は星空に在るから」
頭の中に星原樹を思い浮かべる。星空から地上に向かって生えている巨大な樹木。確かにあの樹だったら、星のあたりまで根っこがありそうです。そしてそのまま星の力を取り込んでいるって。そうかあ。納得した。
「私をあなたに重ねて、存在を変換するの。星原樹から、違う樹へ」
「重ねるって、」

私は大事なことに気がついた。つまり、私が樹になるということは。
「……私は、私のままじゃ、いられないってこと？」
彼女は小さく頷いた。
私はここでまたちょっと怖気づいてしまった。
私が私じゃなくなるということ。
それは、死んじゃうことに似ているような気がして、顔が青ざめていくのを感じた。

私、彼女、そのしあわせについて

死。

自分が死ぬ時とか、考えたことなんてなかったです！

それこそ、幽霊になったときのように、わけがわからない間にぽっくりいっちゃうのが理想だったのかも。じわじわとその足音を聞きながら、自分で決断することが、限りなく怖い。私は幽霊にすらならなくて、誰にもお別れがいえなくて、すっぽり世界から消えちゃうんだろう。

私は、震える手を握り締めた。

なんで私が、とちらっと考えちゃったけれど、でもそれは私が元々そういう存在だったからで誰が悪いとかでもないんだよね。私がもし違うものになって世界が続くのなら、みんな助けられるなら、本当は喜んで頷くべきなのかもしれない。でも、正直怖かった。どうなるのかなんてわからないし、単純に自分がいなくなるのが怖い！　そこに尽きるんだ。忘れられるのが怖いって、子供みたいだけど。スパッと決められないのが自分でいやだ。

彼女は私をじっと見ている。促すことも、せかすこともしないで、静かに私を見つめていた。その凪いだまなざしに、ふっと、彼女がどう考えたのかが気になった。だって、私以上にずっと昔から自分の寿命が何時だって知っていたんだ。そしてそれを受け入れて、じっとその時を待っていた。

「あなたは、怖くはないの？」

私の顔は真っ青になっていると思う。笑顔とかそんな余裕もないから、顔はこわばったままだ。

「私と重なったら、あなたも消えちゃうんだよね？　怖くない？」

彼女は花が綻ぶように笑顔を浮かべる。本当に良く笑う人だな。この人の周りの時間は、どこか穏やかに流れている。神様もこんな感

じなんだろうか。
「そうだなあ」
彼女はふんわりと目元を緩めて、私の向こうにある何かを思い出す顔をする。多分、思い出を探しているんだろう。そんな表情だった。
「怖くない。私が私だった証は、あなたの中にも残るからそれでいいの」
どこか予想済みだった答えだったから、私は少し妙な顔をしちゃったのかもしれない。彼女がそれに気付いたのか、言葉を付け加える。
「強がりとかじゃなくて……私はもう後悔することがないから。まさかただの管理者だった私に魂ができるとは思わなかったし、あの子にも逢えた。あなたと言う存在を世界に送り出せたし、逢えてこうして話せたから、今もそれでしあわせ」
まるで草原に咲く小さな花を探すように、ひとつひとつ彼女にとっての幸福を拾い上げていく。拾い上げている小さな欠片は、私が当たり前に持っているものだった。そういえば、と思い出す。彼女はここから出たことがないって言ってた。私にとってはここは寂しい場所で、彼女が言うしあわせもあまり判らない。でも、それで彼女はしあわせだと言う。

私は、しあわせだった？

自分の中に問いかけた。
とても簡単に答えが出た。
つらいな、苦しいなって思ったこともあるけれど、それを差し引いても私はしあわせだった。だから、私は今、自分が持っているそれをなくしたくなくて怖いんだろうか。じっと自分の手を見つめてみる。

私がしたい事は何？

ここまで来たのは、確かに魔物をなくして欲しいと彼女に問いかけるため。でもその根っこにあるのはどんな考えだった？

案外、それは単純に答えが出るんだ。

大事な人みんな、かけることなく、一緒に笑って他愛のない話をしたりして、おだやかに生きたい。

でもそれは、無茶なことだと思うけれど、私の周りだけじゃなくて、世界中そうだったらいいなって思う。だって、隣で泣いている人がいるのに能天気に私だけ笑えないし。美味しいものも、一人で食べるだけよりみんなで食べたい派です！

もし、ここで彼女の言うことを受け入れずに、そのまま帰っちゃうことになったら、私は多分一生後悔する。死んでも死に切れないぐらい後悔して、幽霊になって壁に向かってぶつぶつ言っているかもしれないね！　それはそれで暗い未来だな。

彼女の言うことを受け入れること、それが世界にとっても私にとっても最良の選択なんだ。

……ただ、ちょっとだけ、覚悟が必要なだけで。

私が私じゃなくなったら、どうなるかなんてわからない。ただ、願えるのなら、私だってわかってほしいかな。

ああ、やっぱり答えは身近にあって、とても単純だった。毎日がおくれるしあわせや、誰かに触れ合えるしあわせ。私が私だって言うことと同じぐらい身近に溢れていたしあわせたちを思う。

彼女は今まで自分がしあわせだったと笑った。

でも、私も十分しあわせだったんだ。それが判っただけでもとても嬉しい。まだちょっと怖いけれど、手の震えは止まらないけれど、私は胸を張って答えを出せる。

私はなけなしの気力を振り絞って笑った。

「わかりました。そのお願い、受け入れます！」

彼女がくしゃりと表情を崩した。私は逆にそれにビックリする。

「ありがとう」

泣き笑いを浮かべる彼女を見ながら、私だけじゃなくて彼女も不安だったんだ。私がそれを受け入れるかどうかなんて、彼女でもわからないから。

不思議に親近感が沸いてきて、目があった拍子にどちらからともなく笑い声をもらした。笑いながら目の端からこぼれた涙は、隠しながら、ちょっと拭った。

私、彼女とさようなら

ひとしきり、二人で笑って、これで最後。どちらからともなく頷いて、お互いの目を見つめる。彼女が白い手を私のほうに伸ばした。

「手を」

ひらひらと舞い降りる光の中で、その白い手はほんのり闇に浮かび上がっている。

「人間として生きてみて、どうだった?」

彼女がぽつんと漏らす。僅かに混じる憧れの響きに、私は正直に答えた。

「良かった! それなりに、しあわせな人生だったと思う」

いろんな人と出会って、失敗したり、笑ったり、泣いたり、怖がったり。ぎゅうぎゅうと詰め込まれた思い出たちが溢れて、私は満たされる。

「私達の周りにあるのは、あなたの中に入りきらなかった思い出だよ」

手を重ねようとする私に、彼女が声をかけた。指先が触れる手前で、私はすこしだけ動きを止めた。

「忘れっぽいから落っことしちゃったの?」

「あたり」

彼女が楽しそうに笑った。

「ちゃんと覚えておかなきゃいけないから、一番近くに置いてるの」

その言葉に私は彼女が埋もれるようになっている光を見る。さっきまでこれが未来の欠片だと思い込んでいたから、とても怖くて仕方がなかった。でも、そんな風に聞いたらなんとなく懐かしい気持ちが溢れてきて、嬉しくなる。

「ちゃんと残ってるんだ」

消えちゃったと思ってた記憶が残っていることが単純に嬉しくて、

私は笑った。なくしたと思ってたものがひょっこり出てきたあの嬉しさに似ている。そんな私に彼女は言う。

「全部、何もかも消えちゃわないんだよ。だから大丈夫。……私達が重なったとしても、それは消失じゃない」

私はその言葉にはっと顔を上げた。私の不安を見透かすように、彼女は悪戯っぽく付け加える。

「残念なことに、私とあなたは結構似ているから、違和感はないと思う。それに、主軸はあなたになる。星原樹（わたし）では駄目だから、あなたになるの」

それに湧き上がったのは安堵じゃなくて、なんとなく後ろめたさだった。だって、私が消えるというよりも、彼女が消えるって言っていることに安心しちゃったから。それに凄く罪悪感が沸いてくる。私の考えはいつもみたいに顔に表れていたみたいだった。彼女は困った表情を浮かべて、

「そんな顔しないで」

と目元を和らげた。

「私は私。あなたはあなた。私よりもあなたのほうが大変になるよ！」

「大変って何ですか！」

思わず突っ込んだ言葉に、彼女はにやりと笑顔を浮かべた。

「面倒くさいよー大変だよー。この四期始めるときにどれだけ面倒くさかったか、思い知るがいいよ」

どれだけ面倒だったんですか！　ぽかんと口を開けてしまう。面倒くさかった……というのは、やっぱり、

「世界の設定を変えたのが面倒くさかったの？」

このことかな、と当たりをつけて聞くと、彼女は大きく頷いた。

「と言うわけで、後は宜しくね！」

底抜けに明るく彼女は言った。そして、あと少しの距離まで近づいていた私の手を強引にとった。私の冷えた指先より、やわらかくて暖かい手だった。

「って、どさくさにまぎれて何しているんですかあなた！」
つないだ手が、熱を持つ。
覚悟を決めて悲愴な気持ちで握ろうとしてた手を、なんだかノリで握られた気がする！　これはつっこむべきところじゃないですか！　気がそれて、涙が引っ込んだ気がする。
彼女は悪びれることは一切無く、さらりと私の抗議を流した。
「いいの！　私は前から決めていたんだから」
「なにを？」
「笑って、さよならすること！」
彼女の声は、まるで希望に満ちた未来を語るように底抜けに明るかった。声と内容があってないよ！　一瞬何言ってるか頭に入らなかったし！
ぎゅっと手を強く握られる。
周囲の光が、急に強さを増した。
手だけじゃない。
私の目、肌、髪、存在全てに光が降りそそぐ。
いや、降りそそぐなんて表現では生ぬるいね！　光が質量を持つように、全部がぶつかり私に叩きつけられて、無理やり押し入ってくる感じ。痛くない叩かれかたというか、吸水綿に水をかけているような、そんな雰囲気です。ああ、あれだ。むりやり袋の中に荷物を詰め込む感じ！　私いつか頭がパンパンになりそうなんだけど！
はじけたりしないんですかこれ！
あまりに流入しているものに戸惑って目を白黒させていたら、彼女が不意に静かな声で囁いた。
「じゃあ、さようなら、もう一人の私」
つないだ手の先の存在が、徐々に曖昧になってくる。頭の中の感覚から引き戻されて目線を向けると、彼女の笑顔は光にほどけて、ふわりと消えた。

「あっ」

つないでいた手の感覚が無くなって、私の手だけが宙に残る。

「さよなら！」

もう聞こえないかもしれないけれど、私は手を握りしめながら叫んだ。

視界を埋め尽くす白い光の中、彼女が笑った気がした。

私、世界と

彼女だけが光に解けたのでは無かった。
私自身も薄くなって、だんだん光に変換されていく。でも、怖くは無かった。自分が世界に溶け込んでいくのが解かる。

最後の髪のひと房が消えた瞬間、私は世界に重なった。

彼女は単なる樹木で、世界を支えるだけの仕組みだと思ってた。
でも、それどころじゃなかった無かったと今実感してる！　彼女は、全部だった。
世界そのものといっていいほどの存在だったみたい。

私に彼女が重なる。

流入してくるそれは記憶であり、思い出であった何か。

でも全然不快じゃなくて、私の中の足りないものがそれによって補われるような感覚だった。ちょうど鍵穴にあった鍵が差し込まれるようなぴったりさ。私は補われながら、どんどん細かくなっていって、世界に広がっていく。

私は細かく解けて、空に、土に、樹に浸透する。そして世界そのものと重なった。

風のそよぎ。
虫の触覚のためらい。
小石が崖から転げ落ちる勢い。

木の葉が一枚枝から滑り落ちそのまま地上に口づけする。
波しぶきが岩にぶつかりしぶきが飛び散る、その一滴一滴のゆくえを理解する。

全部が私で私が全部。
世界が意識を持っていたもの、それが彼女であり、私だった。
さっきまで見えていた彼女は、あくまで私にわかりやすいような形で現れてくれてたんだろうな。色々理解が追いついていなかったから、いまならそういったことも手に取るように解かるんだ。

私はおおよそ世界に溶け込んでいった。
でも唯一私が溶け込めないものがあった。
それがひとだと気づいた時、彼女が感じた喜びが理解できた。
全部が私だからこそ、そこから外れたものがいとおしいんだ。初めて感じる異物の存在を恐怖するか喜ぶかで、世界のありようが変わっていたのかもしれない。
今まで人だった意識を引きずったまま世界の全てを理解している私だからこそ、理解できない他者がいるという不思議な安心感に包まれる。
全部が理解できるものだけだった時、星原樹には魂も人格も無かったと言うのがよくわかる。だって、全部解かっている自分の延長上だったら、全部自分の中だけで解決してしまう。そうなってしまえば、他人とのやり取りなんて生まれないんだ！　だから彼女は彼女ではなかった。星語を理解する他者と言うものが出来て初めて彼女に人格が生まれたんだろう。
彼女は魂が生まれて初めて、神様の気持ちを理解する。
神様も、寂しかったんだろうなって。
だからこそ、初めて生まれた他者を甘やかしちゃったに違いない。

今の世界はどうなっているんだろう。

私は感覚を向ける。どこまでも広がっていく私。目の前に地図があるみたいに全部が詳細に示されている。

これが彼女の言っていた俯瞰図なんだろうな。外側からの神様の視点。俯瞰図は、一万年記されている……それを読み取りながら、未確定の未来から目をそらす。良くないことが書かれている予感がする。まだ私の意識が大部分であり、それを見終わっているはずの彼女の記憶は沈黙を続けていた。

世界の外側から、世界の内側へ。

私はかたちを変え、するりと世界に入り込む。

どんな姿だったら動けるだろうか。そう考え、私は風になった。

草原で空を不安そうに見上げる子供の頬を撫でる。

草牛さんたちを放牧している、畜産農家の子供だった。手に、牛達を追うための棒切れを持ったまま、不安そうに空を眺めている。空から魔物が来ないか、いつかあの空が落ちてこないか不安そうに。大丈夫だよと私が頭を撫でる。

風に撫でられた子供の頭は途端にくしゃくしゃになり、慌てて飛んでしまった帽子を追いかける。私はお詫びの代わりに帽子を元のように被せた。

私は木になった。

不安そうに集合する人々を感じている。ざわざわと囁く言葉一つ一つを拾い上げると、王族が、魔物が、と言うささやきが多く聞かれた。

星都だ。今から王族の演説が行われるらしい。人々はそのために集められている。星神殿の神官たちが集合し、この模様を世界に伝えるとか。

でもその裏で慌てている人たちがいるのも感じた。これを中止さ

せようと集合する人相の悪い人たち。私がひいきするわけじゃないけれど、この人たちを囲っているのは瘴気だ。ちょっとだけそれを掃除をするために、木からすべりでて、彼らを意識で撫でる。

ヒャ！　と奇声を上げたままばたばたと彼らが倒れる。彼らを止めようと追いかけてきていたらしい騎士さんがぽかんとしてこの光景を見ていた。大丈夫、気絶しているだけだよ。私はそういうけれども、誰にも私の声は聞こえない。

人の意識が一点に集中した。そこにあるのは大きく張り出したお城のバルコニーだ。

私も意識をバルコニーに向ける。

そこに立ったのは王子様だった。

王様じゃなかった。王様は随分お城の奥のほうで足止めをされているみたい。不穏に笑う華の姫様が王様と王妃様と話をしている。ひとの内面は複雑すぎて、私には完全に読み取れない。

――全ての人間にこの言葉を送る。

星術により拡大された王子様の言葉が、みんなの上に降りそそいだ。

――既に噂を聞いているものがいるかと思う。世界は滅びの危機に瀕している。それは事実だ。今宵、もっとも暗き夜が来る。今までに無い魔物との戦いが起きるだろう。

人々のざわめきが大きくなった。でも、術によって声は人々の上に降りそそぐ。

――魔物は人間の心の闇が生み出した怪物だ。そう、我々が作り上げてしまった怪物だ！　それを今までの勇者殿たちは戦い、自らを犠牲にしてその闇を払ってこられた。彼らの犠牲をなくして、今

の私達はなかっただろう。

噂では既に流れていた。魔物はひとが生み出していると言うことが。人のすさんだ心が、人をねたむ心が変化して生まれたのだって。その噂を公に肯定され、人々は戸惑い、恐れる。

――しかし、今の闇はこれまでと全く規模は違う。深蒼（あお）の勇者殿は最後まで戦いぬくと誓ってくれた。だが、それだけでは世界は救われない！　私達はこのまま滅びに向かうだろう！

不安の声が更に大きくなる。恐慌をきたしている人々もいる。暴れて騎士に取り押さえられているひとも。でも、王子様は言葉を止めなかった。

――私は、いや、僕はまだ見ての通りの子供だ！　何の力もない。剣術も上手くない、だが、戦うつもりだ！　勇者殿を一人死地に送り込んで、安穏としていたくない！

王子様の決意がひしひしと伝わってくる。母親に連れられて広場に来た少年は、じっと王子様を見た。彼は王子様と同じぐらいとの歳だ。傍らの母を見上げて、何かを決意をする。そういった人々が、ちらほら現れだした。それこそ、世界中で、この声を聞いた人たちから。

――あの魔物の一部は、もしかすると僕かも知れない！　そしてあなた方かもしれない！　僕は自分から生まれたかもしれない魔物が誰かを苦しめていることがつらい。

人の心から染み出した悪いものが、あのかたちをとっているなら、本当は皆でこの闇を払わなければ意味が無い！

うなだれていた人々が顔を上げる。

――みんなも大事なものがあると思う。それは誰かだったり、物だったり、ともすれば自分かもしれない。僕はこの国が好きだ！　家族も好きだ。そして、この国を支えてくれている人々全員を大事だと思っている！　全部守りたい！　それにはみんなの力が必要だ！　闇に負けず、誰かを思って、自分をしっかり支える心が！　大事な人を、守るのは誰か。それは勇者殿ではなく、あなただ！

不安そうだった民は、じっと王子様の言葉に耳を傾ける。奇麗事だと笑おうとする人もいるけれど、その人は周囲の人の視線に怯えて首をすくめた。じわじわと何かの熱がたまり始めている。人々は、隣にいる自分の大事な人を見詰める。それは我が子であったり、親であったり、恋人であったり。一人きりだと思っている人々も、じっと自分の手を見詰める。

――皆、武器を取れ！　明日のために、夜明けのためにともに戦ってほしい！

一瞬広場がしん、と静まり返った。そして次の瞬間、爆発的な歓声と怒号が空気を揺るがした。

ああ、と私は笑う。人々の目の中に決意が見えたから。多分、王子様の言葉は最後の一歩を揺り動かしたんだ。

人は前を向いて歩き出したのだと。

なら、次は私の番、そう考えて、この場所をあとにした。

私、ひとりぼっちの最後の戦い

人々の声を聞きながら、私はその場所から意識をべりっとはがした。

街を、人を覆う黒い霧が薄れていくのが分かる。

心のありようが変わっただけで、世界まで変わっていくその光景に、私はじんわりと心が熱くなる。

でも、あまり世界に重なりすぎるのはまだ危険なんだ。どこまでが私で世界か分からなくなって、そのうち時間軸まで間違えちゃうかもしれないから。

世界に重なりすぎたら雑多なことまでが入ってくる。まだ私の感覚が人間だった時のものを引きずっているせいで混乱するだろうし、これ以上はやめておくことにする。

……まだまだ行方が気になるひともいる。ずっと見ていたいけれど、このままじゃ駄目だ。

未来が確定する前に、色々しておかなきゃいけないことがある。

確かに、人の中に希望は灯ったけれど、それだけじゃ瘴気は全部無くならないし、魔物が消えることもない。

瘴気を無くすことは出来ないって事をひしひしと感じてる。瘴気は世界と分離できないところまで混ざっちゃってるんだよね。プリンから牛乳だけを取り出せと言うのと同じぐらいの無理具合です！

いくら神様でもそれはちょっと出来ないですと断るレベルだよ。

神様が実際そんな断り方するかどうかはともかく！

私は拡散していた意識をまとめて、星都の中心にある星原樹に寄り添う。樹に触れてその中を探る。

この樹はもうとっくに仮死状態になっている。さっき読み取った情報からすると、本当に間もなくどころか今すぐ枯れてもおかしく

ないぐらいだった。

今まで人が近づけなかった原因の力も、彼女がいないからもう消えているんだけれど、それにしては人が近づいていない。よくよく見ると、不思議な結界で人払いがされている。ああ、始原（あのこ）の手によるものだと、その手触りで術を読み取る。こういう言葉が素直に浮かんでくるのを感じて、彼女と混じったんだなあって思い知る。白さん、って呼んで老人扱いしてごめんね！　下手したら私のほうがスーパー引きこもりおばあちゃんだったかも！　それを知っていたからあんなに微妙な反応をしていたのかな。今更だけど、心の中だけで謝っておく！

私はまだ世界に重なっただけだ。

本当の意味での星原樹じゃない。人間の身体だったら溜息をついてたかもしれない。

私はまだ名前のない私で、星原樹の力を使えるわけじゃないんだ。彼女の知識をもらって、これからどうすべきかわかるけど、うわあああっていうぐらい面倒くさい！　彼女がにやりとするわけです。そして勉強することってここでも役立つんだと実感したよ……主に忍耐力を養うとかの方面で！　スパルタ神官様、何かとありがとうございました！　私、勉強の成果がちょっとは発揮できそうです！

私に世界が背負いきれるかって言われたら、正直自信も何もないですよ。でも、しなくちゃいけない。怖いし嫌だしと言い続けても、逃げれるものじゃないし、実際時間が迫ってる。

ここらで気合を入れなきゃいけない。

私の中の知識が囁く。

俯瞰図を動かすためには鍵が必要で、それが星原樹自身。

今は彼女が抜けて、ただの空洞の物体になっていること。

そして、星原樹はまだ書き換わっていないから、俯瞰図にあるその寿命は変更されていない。

私が新しい樹となるには、星原樹の存在を違うものに作りかえることが、必要不可欠な絶対条件なんだ。

つまりですね……たとえると家に入るための鍵の型だけをもらって、じゃあ頑張って鍵を作ってね！　そのあと中に入って、凄く散らかっているから全部掃除してから今日の晩御飯作って置いてね、今夜までに！　もう昼だけど、今夜までに！　という状態。

まず、鍵を作ることからってことが口がポカーンと開いてしまいますよ！　作り方は漠然と解かるけど初心者にハードル高すぎるよ！　なに考えてたんだ彼女だった私！　自分で自分に突っ込みを入れるしかない。これが自分の首を自分で絞めているということか！

……ここまでの旅路、あの日に街から旅立って今日まで。

私は選択をすると言うことをあまりしなかった。さっきは彼女の頼みごとを受け入れただけで、実際に私から何かをするということではなかった。

勇者様や神官様に拉致されて、思えばかなりの遠くに来たものです！

あのままあそこにいたとしたら、私はここにいなかったのかもしれない。

日々を働いて、ちょっとした事で喜んで、ささやかな生活を送っていたかもしれない。でも、それが懐かしくて戻りたいって気持ちがあることも嘘じゃないんだ。

始原（しろ）にしても、幽霊さん……いや、白の大神官にしても、私がどういう結論になるか、情報の欠片を提示してくれていた。あの頃はなんでこの人たち私に話すんだろうなって不思議に思ってたけど、彼らは彼らで私のことを知っていたんだろうね！　見ればまるわかりと言ってたし。

これが、本当の意味での最期の選択だろう。

ここから先、星原樹を作り変えたあと、私は世界を支える一部に

なる。

だけど、正直なところ事態が大きすぎて恐怖しか覚えない。だって昨日まで絶賛庶民をしていました！　自分ひとりを支えていればよかったんだ。

昔の私はそれこそ本当にそのために生まれてきた存在だったから疑問なく役割を果たしていたけれど、今は少し違う。

世界の中で生きてきて、だからこそその中に生きる人たちを支えるっていう重さに立ちすくんでる。沢山のひとがいて、みんな違う考え方を持っていて、一人一人の人生がある。考えれば考えるだけうわーってなるよ！

お姫様たちや勇者様や神官様はどうして背負えるんだろう。

その強さを分けて欲しいと切実に要望します！

心があるから、私はこれほど弱くなっているのかな？　昔の星原樹みたいに、魂がなければこんな迷いもなかったのかな。でも、今更私は私じゃなくなりたくないし、世界の終焉も待ってくれない。

そのとき、ふっと頭に過ぎった光景がある。

幽霊さんといたときに、見た光景。

魔物の群れとたった一人対峙する人の後姿。

あれは、確実に未来の欠片だったと今は分かる！　多分、彼女と知らないうちに繋がっていたのだろう。私は恐怖に固まりかけた。このままではあの未来は確定しちゃうだろう。大勢の人のためなんて、やっぱり無理だった。でも、大事になった人たちのためなら私は覚悟を決めることが出来る。

なんて、人間的な思考だろう。

でも、これが私なんだろうね！

彼女ではなくて、私の思考。あまりにも単純な心の動きに、私は笑い出しそうだった。

そうだ、悲壮な決意とか、重い覚悟とか、私にはできない！

でも、誰かのために、それも自分の大事な人のためになら何でもできる。

知らない人のために覚悟は出来ないけれど、あの光景を少しでも覆すことが出来るなら。

今まで沢山傷ついてきたあのお二人が、しあわせになれるように私に出来ることがあるなら。それなら話は簡単！

ためらうことなんて何もないじゃないか。

よし、ようやく心が決まりました！

ぐっと色々渦巻いている不安を、無理やり胸の奥に押し込めて、私は一人世界に戦いを挑み始めた。

◆深蒼の勇者、回想する（前書き）

勇者視点です。もう一話続きます。

◆深蒼の勇者、回想する

神子の部屋は相変わらず静かだった。腰に下げたままの剣が足に当たる音さえ響く気がする。

「手間をかけた。ありがとう」

「いいえ……勇者様、ごゆっくりしていってください。他のものは近寄らせませんので」

そう言い置き、女官はそそくさと部屋をあとにした。どの噂を思い浮かべているのか、訳知り顔だけを俺に向けていた。

どう考えても、流れている噂のどれかを信じ込んでいる顔だった。何度も眠る神子の様子を見に、ここに足を運んでいることが憶測を呼んでいるらしい。

穏やかなもの、色っぽいもの、過激なものまで、神子と勇者が男女であるだけで様々な噂が飛び交っているそうだ。情報に精通している幼馴染に、おおまかに全部は聞いている。対処するかと聞かれたが、その程度でただでさえ激務なあいつを煩わせるほどでもないと考え、放置でとだけ答えた。その答えにかなり妙な顔をされた。なので、どこかの国の姫君と噂になっていたとしたら国家問題になる可能性がある、そうでないのだからいいのではないか、と言えば更に微妙な顔をされた。幼馴染は理由に関しては問い詰めれば答えるだろう。が、問い詰めることが面倒くさく感じ、それ以上は聞かなかった。そもそも神子は眠っており、彼女は噂で実害は受けない。俺は噂が流れているせいで女官達が勝手に気を回してくれるのが便利だ。その程度の認識だった。

女官の気配が完全になくなるまで扉の傍らで外を窺う。人払いをする手間がなくて助かる。

人間と接することの方がいまだ気が重い。魔物の群れに飛び込んでいくほうが気楽だった。実際、先刻まで殲滅戦に参加していた。

戦場では刻一刻と状況が変化している。本来なら離れるべきではないが、今夜の事もある。大事をとって、一旦星都に戻らされた。

部屋の空気が動いていた。窓から風が吹き込んでいる。流れ込む空気がやや冷たい。恐らく彼女は病とは無縁であるだろうが、冷え込むのはどうだろうかと考え、窓を閉めた。風に落ち着きなく揺れていたカーテンが、ゆっくりと動きを止める。外の音が遮断され、よりいっそう静けさが深まった。

このまま感覚を研ぎ澄ませば、ある程度の範囲までの気配は感知できる。人の気配を探る。大声で呼ぶか、術を仕込んである呼び鈴を鳴らせば届く範囲にだけ人がいるようだ。この距離なら問題はないだろう。ようやく息をつくことが出来た。

振り返り、寝台を見る。

そこにはあの日以来、目を覚まさない神子の姿が変わりなくあった。とても安らかな表情で相変わらずの深い眠りにある。どう『視ても』、彼女の状態はただの眠りだった。ただし、この状態に陥ってから数日後、彼女の状態に一度だけ変化が訪れた。唐突に神子を構成する韻律から、ぽっかりと何かが失われていた。このときほど物質を構成する韻律のうち、どれがどこを指すものか、その知識がない事を悔やんだ時はない。その欠損は翌日でも埋まらず、幼馴染ですら原因不明とした。始原（しろ）を問いただしたいところだったが、無理だった。あれの側からしか連絡が取れない。恐らく、必要になるその時まで、あれは連絡を取ってこないだろう。

抜けた何かに対する答えは、意外なところから得られた。王子が幽霊姿の神子と出くわしたらしい。部屋に帰れず彷徨っていたとか。彼女らしいと言えばらしい。三階建ての建物で迷っていた姿を思い出す。神子は記憶力と方向感覚が特に壊滅的だった。そのままどこに行ったのか、彼女の欠損は修復されず、目覚めることもない。かといって王子のような「目」を持つものを見つけるほうが至難の業だろう。どこからか神子自身が帰ってくるのを待つしかない。

また泣いていなければいいとは思う。

寝台の傍らに立ち、安らかな寝顔を眺める。目が覚めるように手を尽くす幼馴染には言えないが、これはこのままでいい。起きるなら全てが終わったあとで構わない。

眠っているだけで彼女自身は損なわれていない。おそらく停止したことにより、『神の耳目』としての機能も同時に停止した。そのおかげか、呼吸のみにて存在を保つことが出来ている。また、床ずれも栄養失調、また排泄その他も全く見られない。皮肉なことに彼女はこうなることによって、ようやく普通の星別者として機能しているようだった。

全ては今宵終わるだろう。どういう形でかは解からない。どちらでも、俺は見る事はない。終焉か存続か、それとも変化か。始原（しろ）はこの陳腐化した勇者と言う仕組みの終焉を描こうと提案してきた。それには不可避なことも提示した上での提案だった。

俺はそれで構わないと頷いた。そもそも、この称号を引き受ける時点で覚悟していたことだ。いや、それより前、星都にいる幼馴染から呼び出しを受けた時点で、この日が来ることは知っていた。何度その選択をしなければならないとしても、すべて同じ答えを出すだろう。一つの希望が叶うならば、どういう形であれ結果以外にはこだわらない。

ここ三十日ほどで世界は驚くほど変革してきている。各国の国境が薄れ、商人と物流が血のように世界を循環し始めた。物流の壁は取り除かれ人々も大きな移動を始める。武力の統合と再編成が行われ、犯罪者としてあぶれていたものたちですら戦力として再編されたと言う。

世界が明らかに急速に動いている。人間社会はまるで一つの生物のように、魔物と言う異分子に対してまとまり、抗おうとしていた。それの糸を裏で引いたのは、神殿と星都だ。大体何を行うかは聞いていたので理解はしているものの、それが間に合うとは思っていな

かった。
　一番あおりを食らったのは、各国の指導者達に違いない。彼らは以前の会議でこの件に関しては情報の封鎖と対応の保留を決定していた。もう今までの戦いとは違うと神殿側が主張したにも関わらず決定をくだしていた。
　そんな彼らが事態に気づいた時には、もう民衆は動き出し、止める事は不可能なところまで来ていた。
　民衆への戦いへの参加の扇動。その武器防具の急速な調達。民兵として立ち上がった彼らに与えられる、地の利を生かした魔物たちへの罠の知恵と戦術および戦略。
　これらは各地に浸透する神殿を通じ、あるときはひそやかに、またあるときは大々的に実行され、効果を着実に上げていた。
　魔物に対抗できるのは勇者や騎士たちだけではなく、自分達もだ……そういった、世界を動かしている実感が彼らの間に沸いている。
彼らは自分達の可能性に光を見ていた。

◆深蒼の勇者、述懐する（前書き）

勇者視点です。やや残酷表現がありますので、御注意ください！

◆深蒼の勇者、述懐する

先刻、王子の演説があったらしい。戦場から帰還した折、沸き立つような熱気が星都全体からあふれ出していた。今までの仕込みもある。そこに王族からの扇動の言葉があれば、火がつくことはたやすい。

自分達が世界を変える。

そんな熱気が下層階級のものほど高まっていた。それこそ、貴族達が慌てるほどに。議会を慌てて召集しているらしいが、何人ほど集まるか。時流に乗るならば、議会に参加などしている場合ではないことは解かるだろう。皮肉にも人の上に立つ資質があるか無いかを、支配階級が試されている。

この策謀が始まった日の事を思い出す。

――この策は諸刃の剣ですよ。

幼馴染が、この件を提案してきた華の姫と王子に苦言を呈した。騎士姫も賛同しているらしいが、その場には居合わせなかった。俺はたまたま帰還していたためその場に立会い、話し合いを眺めていた。実際の政治的な話においてはっきり言って門外漢だ。下手に口を出す事はしない。せいぜい幼馴染の意見に賛同するためである。

幼馴染に警告に華の姫は、あら、と目を見開いた。

――民衆が力をつけ、考えるようになる。おあつらえ向きに手元に武器があり、戦い方も知ってしまう。つまり反乱が大変起こしやすい環境になりますわね。それぐらいは想定の範囲ですわ。それで倒れるぐらいの国でしたら、さっさと滅びるほうが世の為です。今

まで自分達が無能に振舞い、民衆をないがしろにしてきたツケでしょうし。

華の姫が笑う。今まで俺達の前で見せたことのないような、毒々しい笑い方だ。姫君がツケという言葉を使うのもどうかと思うが、口には出さない。幼馴染は考えているようだ。沈黙を保っている。俺はどのような反応を採るか考え、あえて表情は浮かべず、いつも通りの姿勢で傍観する。笑うべきところでも、困惑すべきところでもない。

俺達の反応に姫君は扇で口元を隠したまま、ふふふと笑った。それはいつもの曖昧で清楚な笑い方とは全く違う。これが本性なのかもしれない。姫はもともと幼馴染と似た空気があったため、あえて近づかなかった。本性を深いところに沈め笑顔であたりさわりない牙を持たない生き物のように見せている。本当にとてもよく似ている。

実際、姫君は今まで見た中でもっとも生き生きとしていた。

――それは強者の理屈ですよ、姉上。国を失った国民はさらに路頭に迷います。

諭す王子のほうが幾分穏やかには感じてしまうほどだった。が、続く言葉でそれもくつがえる。

――悪政で徐々に弱体化するぐらいなら、一思いに滅びてくれたほうがいいと思いますけれども。そのほうが疲弊が少なくてすみますし。

一国民としては、あまり知りたくない王族の実態だ。この姉にしてこの弟ありか。

反応が無い幼馴染にじれたのか、神官様、と姫君は唐突に切り出

した。

――わたくし、手紙を書きましたの。お友達にたくさん。お願いを聞いて欲しいと書いて送りましたのよ。

華の姫が笑って話し始めた。そして挙げた内容と相手に、幼馴染が笑みを深めた。旅先で聞いた、評判の良い実力者の名前が幾つも飛び交っていた。

製鉄が盛んな場所には武器の調達を依頼する。食糧生産に強い場所には食料の増援を頼み込む。そしてそれらの対価は、あえて物納にすると言うことを示している。本来であれば関税がかかり行き来することのできない物品同士を交換させる。価格にしても恐ろしいほど適正な量を示している。そして、どの土地に何が足りないかを調べつくしてもいた。

実際に統治している土地に行けば領主のことは解かる。生産量や状況もわかるだろう。しかし、この城から出られないはずの彼女がこれほど人脈と情報をもっているとは驚いた。

――的確な人選ですね、姫君。私もそれに参加させていただきましょう。

情報の適切な運用に、幼馴染も首肯したようだ。計画に何点か修正を加え、色々考えつつではあるが同意した。神殿と王宮が密かに手を組んだ瞬間だろう。隣り合っていても常に権力闘争をしていた星都の二大勢力が手を取り合ったのはどれほど久しいものか。黄金（きん）の時代はあったと聞いた。が、それ以来ではないだろうか。

それを見ながら考えた。

もうこれで、俺は暗夜を乗り切ることさえ果たせれば大丈夫だ、と。

あとは彼らや、彼らと手を携えたものたちが世界を動かすだろう。
身のうちにある人間に対する不信感が今は良くてもいずれは彼らも代替わりし闘争が起きるかもしれないと囁く。だがそこまでは俺は関係もない上に彼らも責任など取れるはずも無い。未来の事はその時代の人間に任せればいいだけの話だ。
この戦いが終われば、少なくとも人が一人穏やかに一生を終えるぐらいの時間は平和が約束されるのではないだろうか。つまり幼馴染と神子が寿命を迎える程度の時間が、確保されるということだ。

考えに耽っていると、ふと窓の外に懐かしい気配を感じた。窓の外というのがまずおかしい。視線を転じる。しかし、そこには相変わらず佇む星原樹があるばかりで、何も目にすることはなかった。幽霊状態の神子が戻ったのかと思ったが、違うようだ。
幽霊が見れるかためしもした。王子が幽霊がいると指し示した一角は確かに韻律の乱れはあったものの、俺の目には姿は映らなかった。あの時に視た乱れが幽霊であるならば、彼女が戻っていたとしても見分けがつくだろう。まだ戻ってきていないようだった。
眠る神子の髪は解かれてシーツの上に散らばっている。薄茶色の髪を一筋、手に取った。癖があり、波打ったような形になっている髪。それは、俺が手にとっても崩壊する気配は全く無い。彼女の韻律は、完璧であり、ほころびが無かった。

生物に触れられなくなったのは何時からだったか。幼い頃森で、罠にかけてしまった森兎を助けようと安易に撫でた時からだろうか。
兎を『見た』俺は、ここの韻律が弱いなと思う部分に触れてしまった。
触れた場所から、兎が『壊れた』。
両手をぬらす赤い液体の暖かさがしばらく理解できなかったのを覚えている。兎が何故粉々になっているのかも。肉から立ち上る湯

気を呆然と見ていた。
そして、その光景を偶然見た母から避けられ始めたのも、この日だった。
俺は実体験を元に自分の異常さを学んだ。
――どんなものでも完璧な韻律は無く、どこかほころびがある。
――そこに触れてしまうと、大体のものは壊れてしまう。
――そして、普通の人間にはそのほころびも韻律も『見えない』。
幼馴染には話したことはあるが、理解を求めようとは思わなかった。ただし、共感はできた。幼馴染は異常に良い『耳』で星語の抑揚を聞き分けることができた。その感覚も余人に無いもので、彼も理解を求めるのを早々に放棄し、ひとから離れた。
結果、俺達は狭い村ではかなり浮いた存在になっていた。交流を断ったのだから仕方が無い。人付き合いの苦手さと不信感は、ここから来ている。ただし、選定がなされ、称号を得てしまったからには苦手だと忌避できない立場になってしまった。そのため、技術としての人間づきあいを学ぶことになる。こういう場合にはどう答えるべきか。どう誘導さえ、どんな印象をあたえるべきか。そういうことを技術として学んだ。最も、その笑顔での対応が普段と違いすぎて、神子を怯えさせていたようだが。

神子の髪がさらりと手の間から滑り落ちる。神子はどこに触れても崩壊することは無い。彼女の構造の完璧さは、強固だった。

初めて彼女を見たとき、人間だとは全く思わなかった。
あの日あの街で彼女は、勇者を迎えるために沸き立つ民衆の壁の向こうで無関心そうな眸でこちらを眺めていた。一目見たときに、うっすらと恐れをいだいたのを覚えている。
何度見ても色を覚えられない不思議な眸、そして初見でもわかるその身体をかたどる韻律の構造の完璧さ。あれはもしかすると神子という『もの』かもしれないと直感で理解した。それは神がひとの

世を見るために放つ人型だという説があった。人型の、ひとではない何かだと。

なによりもそう断定したのは、構造が完璧だった唯一の生物、星原樹のそれと彼女は一致していたからだ。

俺はそれらを踏まえて、彼女は人のかたちはしているけれども、心などない何かだと思ってしまった。当時は浄化に関して行き詰まりを感じていたため、それに使えるかもしれないと言う程度で言葉を交わさずに連れ去った。

だが、それに関しては後悔している。

彼女は、正しく人間だった。下手をすれば、俺以上に。

泣き、笑い、怯え、傷つけられ、それでいて人が好きだと言う彼女と人間に、何の違いがあるだろう。どうせ世界は神が創りたもうたものだ。逆に彼女と人間の違いはどこもないと思い至るのは早かった。贖罪はしたものの、後悔は消えない。

神子が倒れ、始原（しろ）に覚悟を問われた時、俺は答えた。

――何もかも人間を肯定することはできない。自分でさえ難しい。全てを救いたいとは言い切れないが、救いたいものもいる。

あの時答えた言葉に偽りは無い。

ただ、言っていない部分があるだけだ。

救いたいと願うのは、二つの存在だけだ。

俺の幸福を純粋に願ってくれた二人だけが在ればいい。そのためにはできることなら何でもしよう。

全てが終わるその時まで、彼女は眠っていた方がいい。ここは大神官が強固に編んだ結界の中だ。万が一の場合でも、最後までここは無事だろう。終わったあとに目覚めて、新しい朝を見て欲しい。

利己的な願いに違いない。万人を救う神の兵士としては失格だろう。

何よりもこの考えを言葉に出したなら当人達に拒絶されることは

理解している。だから口に出すつもりも無い。
日が傾く。
最も暗い夜が近づいていた。そろそろ往かねばならない時刻だった。
「おやすみ。良い夢を」
悪夢が彼女を苛むことが無いように、それだけを祈ろう。

◆神官、戦場にて（前書き）

神官視点です。３話続きます。

◆神官、戦場にて

武装した神官に囲まれ、平原を見渡す場所へと立つ。
わずかに隆起した丘だ。その高低差のおかげで、今回の戦場を見渡すことができる。本陣はここに展開する予定である。

星都周辺の戦場として想定されたのは、星術単位で五百離れた場所だった。森林に囲まれた中、唯一開けた平原で、それはかつて深蒼の勇者と星都の騎士団が魔物を退けた場所であった。在りし日の戦場を再び決戦の地としたのは、戦意の高揚と言う意味もあるだろう。今回の兵の構成は、騎士団に対し、圧倒的に民兵が多い。それも、急ごしらえの彼らは僅かに十日しか訓練を受けておらず、錬度は明らかに足りなかった。ただ、守りたいと言う意欲が異常なほど高いのが幸いか。ちらほら女性の姿すら見える。

現在、星都には最低限の人数が残っているのみだ。小さな子供、老人達は神殿の中に非難させた。あの場所がもっとも結界が強い。もともと建物や王都自体が星術を利用した地場である。その中心にある王宮と主神殿がもっとも結界が強固に構成されているのだ。万が一、ここを突破されたとしても時間を稼ぐことができるだろう。

移動速度に不安が残る民兵を眺める。とはいうものの、私自身が彼らの指揮を執る事は無い。

王宮の将軍以下の組織に組み込まれている。お飾りだった大貴族の将軍が瞬く間に失脚し、もともと下級貴族であった叩き上げの人物がその地位に就いた。裏で何があったかは想像でしかないが、かの姫の笑い声が聞こえてきそうではある。

新将軍はもともと実力と人望がありすぎたせいで、辺境へ左遷となっていた人物である。人品、実力は万人の知るところだった。老年に差し掛かっている将軍の顔には多くの傷と深い皺があり、威圧

感をかもし出す原因となっている。そんな年齢にも拘らず、隆々とした筋肉とぶれのない体幹は見事としか言いようが無い。男としてああいった姿にあこがれた時期もあったが、今は諦観の域に入っている。ただ、この歳になって女性と間違われるのだけはもう遠慮したいところだ。こういった純粋に力が問われる場所では、頼りがいや力という印象から程遠いどうにもこの姿は、不安を抱かせる一因となってしまうのだ。

将軍が悠然とした足取りでこの場所へやってきた。その隣には騎士姫が共に歩いている。位としては姫のほうが上位なものの、将軍の存在感に薄れてしまっていた。彼女としても国王の名代としてここにいるものの、実質は将軍に指揮権を預けているようだ。

肩で風を切って歩く二人に、兵達の憧憬の眼差しが寄せられる。民兵は実際に魔物と戦った事は無い。戦意をあおり高揚させ、恐怖を感じる間もなくさせなければ、一気に瓦解する可能性がある。彼らは職業的に戦いに慣れているわけではないのだ。それにかんしては将軍と騎士姫は旗振り役としては最適だった。将軍と美しい姫君と肩を並べて戦うことに、兵達の気持ちは確かに高揚している。

「猊下」

将軍が簡略化した礼を行う。私の答礼をうけ、彼は率直に用件を切り出した。

「神殿のみなさまは準備はいかほどでしょうか」

「完了しています。後はそちらの布陣が終わり次第、治療部隊の位置を調整するぐらいです」

「なら、間に合いますな」

将軍がちらりと周囲を眺めた。その隣で騎士姫が周囲を見回す。

「猊下、勇者殿はどちらにいらっしゃるのですか」

「一旦王都に戻ってから武器を調達後、合流の予定です。間もなくかと」

「そうですか」

周囲の動きが慌しくなるが、我々がすることは泰然と構えること

ぐらいだ。
自然と視線は人の群れに降りる。壮麗とは遠い動きで、人の群れが列をなして動いている。まるで水の流れを見ているようだ。時折渦巻き、流れ、滞留する。整然とした動きをしている場所は、職業軍人だろう。状況が切迫していなければ、民兵を出さずとも良かったかもしれない。
ただ、勝算はある。今回は魔物の動きをあらかじめ制御できるという条件を前提としてこういった布陣となっているのだ。
――魔物は、日の出方向から現れ、こちらに一直線に移動する。その幅は草原を出る事は無い。ただしその数は膨大であり、草原は黒く埋め尽くされるだろう。
始原(しろ)の勇者が告げたことだ。
予測ではなく、これは確約された未来である、彼はそう言った。彼の主張は荒唐無稽ながら嘘ではない。根拠はあるものの、それは開示できない、人の世に残す知識ではないと彼は言った。そして、魔物をこの戦いでできる限り消滅させるとも。魔物が消滅した折に発生する瘴気については、手立てがあるそうだ。それについても口を割らなかったが、信用するしかない。
また、彼が予測を立てたのは星都だけではない。
世界において、同時に六ヵ所魔物の大群が現れると告げた。各国で総力戦が行われるだろう。各地の神殿に連携をとり、それらの情報も逐次収集している。
始原(しろ)は私に告げた以外にも、何かを勇者と話していたようだ。が、その内容については両者とも口をつぐんでいる。嫌な予感はする。何度問い詰めても口を割らないところを見ると、その予感は的中しているのだろう。
恐らく彼は死を覚悟している。
戦闘になれば、彼の傍を離れないようにするしかない。大神官と

呼ばれているこの身ではあるが、実際の神殿側の指揮は任せてある。最後まで共にある、そう決めていた。

彼を村から呼び出し、選定を受けさせてしまったのは自分だった。その命運を決めてしまった責任は少なからずあると考えている。大神官を拝命した時、勇者と考えたときに真っ先に浮かんだのが幼馴染だった。まさかという思いと、やはりという納得が心にわきあがった。ただ、勇者という称号が名誉であるかといえばそうではないと私は思う。

勇者達の軌跡は明らかに途切れているものばかりだった。彼らは燃え尽きるかのように若いままで亡くなっているとしか思えない。失踪説も出奔説もあるものの、それを裏付けるものは何も無かった。彼らは死んだのだろう。戦いの果てに。始原（しろ）は漠然とそれを示唆する言葉を使っていた。覚悟を決めるなと何度も言っても、幼馴染には届かない。彼の中の決意をゆるがせられないなら、隣で戦うしかないと考えた。

白い空の向こう、陽射しが僅かに黄色を帯びる。

傾いた太陽は、しばらく見ることができていない。この戦いが終わったら、それを見ることができるだろうか。

◆神官、人の戦いについて

戦場をここに想定したときから様々な準備はしていた。

ここは森林の向こうは両側が急な斜面となっており、直進してくる魔物以外は対応しなくても良い。森林と言っても規模は小さく、子供が歩いても半日で往復できるものだ。中にも狩人と協力し、罠を設置している。

布陣は密集陣形を採っており、正面からやってくる魔物をまず盾で押し込める。その後ろから弓、星術で遠距離攻撃を行い、盾にまで押し寄せた魔物はその隙間から槍を差し出して攻撃する。正面の者達は消耗が激しくなる。後ろに交代要員を置き、壁が崩れないように各隊ごとで調整する。万が一瓦解しかけた場合は騎馬隊が出撃し、その間に修復する。

人の大規模戦闘の記録は、私が調べたところでも殆どない。人が人と戦ったというのはそれこそ御伽噺の中ぐらいだった。神子が聞いたという第二期の時代であれば存在していたかもしれないが、次の時代に争いをいとう人の手によって処分されてしまったのだろう。今となっては純粋に惜しいと思う。史料的価値と、現在の状況に有効だろうに。

この戦いは、ただ相手の将を殺せば終了する類ではない。

殲滅か、全滅か。それしか結果はありえないのだ。

「緊張していらっしゃいますか？」

いつの間にか私の隣に将軍が立つ。威風堂々たるさまは、なるほど戦場慣れをしている雰囲気をかもしだしている。揺るぎない芯を持

つ人間のほうが今回のような持久戦の将を務めるのにふさわしい。
「いいえ」
魔物との戦いは様々なものを経験していた。ただし、それは自分達が武器を携え戦うものであった。今回のものは随分と勝手が違うのは分かっている。それを考えていたのが緊張に見えたのだろうか。実際、緊張とは違う憂鬱さは感じている。
「相手が魔物なので、まだ兵達もやりやすいでしょう」
その言葉に、私は将軍を振り仰いだ。将軍は淡々と告げた。
「人間を相手にする場合は、どうしても心理的に負担がくるものです。相手のことを考えると剣先が鈍る」
国の治安部隊は、盗賊の捕縛なども行っていたはずだ。対人間の戦いを知り尽くしているのだろう。相手を殺すことに関しては、確かにそういった問題もあるに違いない。
「魔物は魔物で、あの食欲は問題だと思いますが」
魔物は人間を好む。喰らうために牙をむき、爪を研ぎ、そして決して捕食を諦めないのだ。
「食欲だけだから分かりやすいのです。敵が理解できるというのはかなり大きい」
「ああいった獣の類でもですか？」
「ええ。魔物は獣よりも考えません。罠に気付くことも無く飛び込んでくる。自分がどうなっていようと攻撃してくる。息の根を止めるまで絶対に油断してはならない。こちらを食うことを優先でくるので、まさか、ということもおこる。兵には言って聞かせています。心構えができる違いは大きいですよ。相手が人間で、少女がナイフを持ってこちらを殺しに掛かってくるよりはるかにマシです」
「それは確かに」
相手が人間だった場合を想像してみたが、確かに後味も悪いうえに決心も鈍るだろう。
将軍から兵達へと目を転ずる。そろそろ大体が配置に就いただろうか。

「異形だということが、殺すことへの罪悪感を減らしてくれる。むやみな殺生を禁じる星教でも魔物を殺すことを禁止していない。そうですな？」

「ええ」

そうであるならば、勇者という機構自体が成り立たないのだから。星教において魔物は生物の範囲に入っていない。早く気付くべきであった。魔物が神が創ったのではないということが、こんなに身近に示されていたのに。将軍は顎を撫でながら語る。

「心の支えは重要です。特に弱いものには。神に祈りを捧げているものも多数いる」

見える範囲でも青ざめて祈りを捧げているものが何名か存在していた。

「神は人間をどうされたいのでしょうな」

それは神への問いか、神の言葉を預かる大神官（わたし）への問いか。漠然とした問いは、答えを求める響きではなかった。どちらとも答えがたい。周囲の者達もこの会話を耳を澄ませて聞いているに違いない。私は神の眠りを知っている。そして、この事態が神によって起こされているものではないことも知っていた。ただ、それを語るべき時は今ではないだろう。

「人間は……神に愛されていると思います」

人間が世界をゆがめても、世界は終わっていない。どころか、何度も何度もやり直しの機会をあたえてくださる神は、真実、人間を慈しんでいるのだろう。私が親ならこのような不出来な子はもうとっくに見離しているに違いない。神はまだ人間を見放してはいない。

『神の耳目』としての神子があらわれたことがそれを示している。彼女個人はどうであれ、神へ世界の情報を渡す役割を担っている存在だ。そうと知ったうえで神子を連れ歩いた。浄化が間に合わなかったと言う切羽詰った理由もある。様々な土地を歩いた神子を通して、神は人間をどう見たのだろうか。私は『神の声』と言えども対話をした事は無い。ただ、彼女の目を通してみた世界が美しいもの

であることを願うしかないだろう。
「神は愛しているものに、試練を課していらっしゃるのですか？」
騎士姫が声を上げた。試練というより、この事態は人間の自業自得だろう。ただし、それはこの場では望まれている言葉ではない。私は堂々と宣言する。
「そうです。この試練を乗り越えてこそ、人は更なる階梯へと進むことができるのでしょう。明けない夜は無く、死力を尽くして乗り越えられない試練は無い」
ただし、死力を尽くして乗り越えられない試練に失敗することもあるが。それは胸のうちにだけしまっておく言葉だ。
おお、と周囲から感嘆の溜息が漏れる。これは神の試練だ、と目の色が変わる。そう、絶望的な戦いではなく、乗り越えられるものだと。希望は抱くほうがいい。絶望はたやすく心の剣を折る。
多くの犠牲が出るだろう。下手をすればこの草原が屍で埋め尽くされるかもしれない。それでも最後の一兵卒まで戦う意思を持たなければならないのだ。

◆神官、深蒼の勇者との決裂（前書き）

神官視点最後です。

◆神官、深蒼の勇者との決裂

その時、空気が揺れた。

振り返ると、人々の隙間に勇者が現れていた。急な現出にぎょっと人が退き、にわかに空間が広がった。ざわめきがさざなみのように揺れる。

恐らく星術で跳んできたのだろう。星術を使える神官たちが、畏怖と尊敬の眼差しを勇者に向けていた。今行った術の難易度が分かるためだ。

普通はこんな密集した場所に直接跳んで来ることはない。到達点に何かあれば事故が起きるため、開けた場所に座標を置くのが定石である。物体が密集した場所に座標を置くのは針の穴を通すより難しい。しかも現状、星原樹が停止し威力が落ちた新星術しか普通は使えない状態となっている。勇者が行使した術は大変難しい部類に入るのだ。

だが私には分かる。彼はことによってはとんでもない面倒くさがりであり、今回も手間を惜しみ直接跳躍してきたのだろう。時折そんな無茶をしてこちらの肝を冷やさせる。もう一度改めて、色々と話し合いをすべきだろうか。様々な記憶が過ぎり、言っても聞かないだろうと少々諦めてもいた。

勇者は軽く周囲を見渡し、状況を把握したらしい。

迷わずまっすぐ私達のほうへ来た。自然と人が退き、彼を通す形になる。

「お久しぶりです、姫君」

まず、姫君に軽く挨拶をする。いつも浮かべる対外的な笑顔である。

「ああ、勇者殿もご苦労」

次に将軍が動いた。

「勇者殿、はじめまして。このたび将に任ぜられたものです」
将軍が手を差し出し、握手を求める。名前を名乗らないところを見ると、将軍も星別者への対応を知っているようだ。
「宜しくお願いします」
勇者が人当たりの良い口調でその手を握り返す。挨拶は和やかに行われたようだ。もともと多弁ではない勇者は、それで十分だと判断したようだった。
私の隣に立ち、
「話がある」
と用件を切り出してきた。彼からの呼びかけなど、珍しいことだ。そう考えながら私は頷いた。そして、勇者がちらりと目線を周囲へ走らせたのに気付く。意図は分かる。わざわざ宣言したほどだ。ここでは駄目なのだろう。実際、勇者が切り出した瞬間に周囲が聞き耳を立てている気配がする。読唇術もありうる。なるべく視線も声も漏れない場所がいいだろう。あそこではどうかと後方にある天幕を指し示すと、勇者は軽く頷いた。
「では、少し中座させていただきます」
姫君と将軍へ伝え、了解を得る。傍らの神官が、
「猊下、間もなくお時間です」
と、注意喚起する。私が答える前に、勇者が、
「分かっています。時間は取らせません」
とあっさりと返した。本当に珍しいことばかりだ。大体こういった場合の交渉役は私だったのだが。
連れ立って歩くのも久しぶりだ。私は主神殿でこの日の準備を、勇者は各地を転戦していた。歩きながら、簡単に情報の交換をする。まだ他の視線があるので口調は崩さない。大神官は、あくまで勇者を立てるべきなのだ。もともと勇者には具体的な権威はない。本来はただ選定を受けただけの一般人である。大神官が敬意を示して初めて、他のものが勇者を尊重すべきものだと認識する。ゆえに私の口調は、他者がいるときは緩める事は無い。それは勇者と私の不文

律だった。あの日、セイヒツの間を出たときからの、取り決めでもある。

勇者は今まで星都で休憩と武器の補充をしていたはずだ。現状について幾つか伝達する。

「兵達の配置は間もなく完了するでしょう」

「油は？」

魔物の群れの進路に、燃えやすい油を蒔き火責めにする計画がある。ただし、獣と違い油にもやつらは怯まないのが問題だった。ある程度は数を減らすことができるだろうが、恐怖をあたえる効果は薄い。また、火系統の魔物には効かないだろう。それが厄介だ。

「問題ないそうです。ただし、揮発性が高いものため、使用するのは直前になりました」

「着火は火矢で？」

人払いを頼み、救護用の天幕に勇者を連れて入る。ここは非常時の救護所となる予定の場所だった。まだ誰もいない。物品は雑多に置かれているものの、その陰に隠れれるほどの隙間はないように思えた。

ここなら口調を戻してもいいだろう。丁寧語からいつもの会話へと戻す。

「弓の名手をそろえたとか。星術の制御がそこまで上手いものが少ない。計算で生まれる爆発力では、前列の盾が少々厳しい程度のはずだ。それでどれだけ削れるか」

私の言葉に勇者は考えているようだった。

人間は攻め入る必要は無い。防ぐだけで十分だ。そのため、線引きをしそこでぶつかるまでに足止めのための落とし穴なども多数設置している。どれだけが削れるかは分からないが。

私が他のことも伝えようとしたが、それを勇者が手で制した。左隅を警戒している。何かを感じているのだろう。盗聴でもされているのかもしれない。権勢争いはこのようなときにさえ行われると思えば、いささかうんざりする。

勇者がゆっくりと星術を編む。

「ｋｘｘｘｖｖｖｗｘｘｘ　ｎ０　ｋ０＊　ｗ０　ｍ０ｒｘｘｘｓ
ｘｘｘｎｘｘｘｘｖｖｖ．
（会話の声を洩らさない）
ｋｖｖｖｋ０＊ｒｗ　ｈｘｘｘｎｎｖｖｖ　ｈｘｘｘ　０ｔｘ
ｘｘｇｘｘｘｖｖｖ　ｎ０ｍｖｖｖ．
（聞こえる範囲はお互いのみ）
ｈ０ｋｘｘｘ　ｎ０　ｍ０ｎ０ｎｖｖｖｈｘｘｘ　ｒｖｖｖｋｘ
ｘｖｖｖｖ　ｄ＊ｋｖｖｖｎｘｘｘｘｖｖｖ．
（他のものには理解できない）」

いつもより発音が丁寧で、正しい。かなりの念の入れようだ。私はそれを口をつぐんで見守る。効果はたちまち発揮された。

勇者が私を制していた手を下ろす。私は続きを口にする。

「星都はどうだった？」

「下町は見ていないが、王宮は落ち着いていた。神殿に避難も完了している」

勇者が視線をこちらへ戻した。おそらく声漏れを阻害できたのだろう。表情も対外的な仮面を脱ぎ捨て、無表情へ戻っている。

「で、話と言うのは？」

促しに、勇者が僅かに沈黙を返した。対外交渉はある程度思考の流れが決まっているため、彼はすらすらと言葉を紡ぐのだが、こういった場面において少し考え込むのはいつもの癖だった。焦らずに待つ。

「魔王の話だ」

「魔王？　……大型の魔物でも出たのか？」

「いや、そうじゃない」

魔王の呪などという言葉はあるものの、実際魔王というものは存在したことが無い。このときなって一体何の話が始まるのだろうか。

ただ、無駄な話はしない勇者が切り出してきた背景が気になった。
「始原と話し合いの結果、分かりやすい構図をとることにした。勇者が魔王を倒すと、魔物が消えて世界が救われた。そういった筋書きを使う」
いまいち言いたいことが分からない。
「今から魔王が生み出される。俺が今まで倒してきた魔物の瘴気を凝り固め、人を核とした最初で最後の化け物。それが魔王となる」
「人……まさか、」
誰かを犠牲にしたのか？　全身に冷水を浴びせられたように衝撃が走る。私の言葉を遮るように、珍しく勇者が話を進める。
「瘴気は存在値を直接叩き込むと対消滅するそうだ。聖剣ならそれが可能となる。瘴気を取り込んだままの魔王を倒せば世界の延命はなされる」
「聖剣をつかうのは、お前が削られるだろう！」
自分が世界に存在するための力を存在値という。確かにそれを叩き込めば、何かを消滅させることは可能だ。しかし、それには常に消滅の危険性が伴う。存在値が無くなった時、この世界で形が保てない。
相変わらず自分のことを考えない勇者に、怒りを覚える。
「初めからこの日が来るのは分かっていた。この賭けも危険だが、成功率があるならこれに賭けるしかない」
静かに勇者は告げる。
「勝手に死ぬ気になるな！　それに人を核にするというのは、間違えているだろう！」
「核になるのは始原だ。あれなら瘴気に飲まれても世界を壊す前に自制できる」
「な……」
どちらも、決して無事ではないだろう。深蒼が、始原を制することができなければ大変な被害が出るに違いない。危険な賭けだった。
止めさせるのか？　だが、止めさせたところでどうすればいい。

瘴気に飲まれれば、理性を失う。
いくら始原（しろ）とて、それは例外ではないだろう。理性を失くした瘴気の塊との戦いは、人知の及ぶところではない。戦いの場でそれを補助するしか、見ていることしかできないのか！　苛立ちが湧き上がったその瞬間、

「――アゲート・カルセドニー」

勇者がその言葉を口にした。
私は一瞬で支配されたことを感じた。呼吸、心臓の鼓動さえ相手に握られているのを、頭ではなく全身で理解をする。
それは私の名前だった。星別者になった折、封じられたはずの名前。星別者になったとしても、名前は奥深くに沈み込むだけだ。そして、存在値の大きい方が下位の者を支配できる。知識としてはあった。
圧倒的な圧力が私を支配する。星別者としての力は、実際勇者のほうが上だ。私を完全に押さえ込んでいる。
「な、にを……」
声を発するのが精一杯だった。全身に力を入れてもそれ以上は無理だった。くらくらとする眩暈にも似た酩酊感が頭の中を掻き乱す。

「一つ目。お前は俺の名前を呼ぶことはできない」

私の記憶にあるその名前に、強い制限がかけられるのを感じた。
喉から音として発することはできないだろう。一般人からはその名前は星別者となった時点で世界に修正され、おだやかに消去されている。そうして星別者は名前を喪うのだ。私達は稀な例外だった。根源からの名前をあらかじめ知っていたうえ、お互いが星別者だったので忘れることが無かった。
つまり、もうこの世に勇者の名前を呼ぶことができる者はもう誰

もいない。
私が勇者ににかけられている呪を解くこともできない。

「二つ目。お前はこの戦場の人間が全滅もしくはお前の瀕死、それか完全な勝利までここから離脱できない。俺を追ってくることはできない」

私が私であるところの存在が大地に関連付けられ、制限と共に縛り付けられるのを感じる。範囲は確かに勇者が言うとおりの範囲だった。どこへ行くつもりだ！　目に力を入れ、相手を睨み付けた。
何故、こんなことを！
私の言いたいことは大体察しているようだ。
「お前は生きるべきだ。このあと、人々は心のよりどころをなくし神にすがるだろう。神殿の勢力が必要以上に拡大する。それを押さえられるのは、この戦いを制したお前や各国の代表となる。お前は必要とされる」
「ふざけ…るな！」
口に血の味が広がる。無理をしすぎてどこかを切ったのか。だが、今はそれを気にするどころではなかった。怒りとかけられた術で、はらわたが煮えくりかえる！
完全にこちらの意思を無視した、勝手な言い草だ！
「すまない」
口先だけ謝られても意味が無い。
「お前たちは、生きてくれ」
そう口に出し、勇者はわずかに目元を和らげた。勝手に覚悟を決めている顔だった。
勇者は再び口を開いた。
「最後に三つ目。お前は俺に命ぜられた三つの事柄を、戦いが終わるまで忘れるだろう」
それはなんとも残酷な宣言だった。自分勝手にも程がある！　抗議

をしようとしたときに、私の意識は叩き切るように途切れた。
最後にもう一度、勇者がすまないと呟いた言葉が耳の奥で残響した。

◆始原、落日と（前書き）

白視点です。あと1話続きます。

◆始原、落日と

星都の上空は静かだった。地上には姿を現さない。上空から人々の様子を眺めた。避難は完了したようだ。遠見の術を使えば、全世界の戦場でも着々と準備が整っている。

今宵で全てが決まるだろう。それは自分の消滅も示していたが、感情は全く波立たなかった。恐ろしく凪いだ心で風景を眺める。

星都の中心に浮かぶ巨大な樹木を見上げる。星原樹は沈黙のうちにあった。

沈黙を保つ樹は、光も無い。仮死状態にある。彼女が言っていたもう一人の切り離された自分は、彼女のもとにたどり着けたのだろうか。

今、自分に対して仕掛けている術のため、それを知ることはできない。

この状態で彼女に近づくというのは止めを刺すのと同意義を持つ。先日の邂逅が正しく別れだった。それは彼女も了承していたことだ。

眺めていても事態は変わらない。彼女の寿命も、魔物の侵攻も俯瞰図に示された通りに世界は動いている。

あの彼女の居る場所で俯瞰図に触れたときから知っていたことだ。

この未来は変わるのかと聞いたとき、彼女は曖昧に笑うだけだった。変えられないのだとそれだけで悟る。彼女も随分人間らしくなったと思った覚えがある。

彼女の姿は、はるか過去に亡くした姉の姿に似ていた。

自分の影響を受けたといっていたが、恐らくあれは意図的だろう。家に帰れなくなった子供を慰めるために彼女がとった姿だった。共にあった時間が何よりも長い。彼女との関係を表すなら、姉という

のが近いのかもしれない。姉を二度喪うことになった。

あの日、神の韻律を自分が理解しなければ、と考えたこともある。しかしそれは無駄な仮定だろう。実際に韻律は自分により解明され、人々に広がってしまった。ただの便利な歌だと思ったのだ。それまで人同士で意思を伝える言葉はあった。しかし、明確に何かを表現するにはもどかしいものだった。

私は不思議な大きな樹が好きだった。それが星原樹というものだとは理解もしていなかった。

樹から聞こえる音が言葉だということだけは漠然と理解し、心地よく聞いていた。ここに来ればいつも心が満たされた。それだけで、満足すべきだったのだ。

あれは姉を亡くした日だった。今でもはっきり思い出せる。寂しさのあまり、いつも聞こえる綺麗な歌にすがったのだ。喪失を埋めるように、樹のまねをして音を紡ぐ、謳う。その瞬間世界のあらゆるものが理解できた。手に取るように全てが分かり、表現できる素晴らしい言葉。

狭かった世界が一気に広がった。言葉により、現在だけではなく未来や過去まで自分で表現することができるのだ。

姉の喪失はすぐに埋まってしまった。火を望み謳えば、火が熾(おこ)った。水を呼べば不思議と湧き上がる。

幼い自分はただ興奮するばかりでその影響を全く考えなかった。いや、言葉も持たなかった自分に、それを求めるのは酷な話かもしれない。

不審な韻律の動きに神が注目し、この事実が露見した。

あの時、自分の世界が変わっただけではなく、世界が変わってしまった。

神に恩寵をあたえられ、人の枠からはみ出した。恵を与える存在として、畏怖され、あがめられた。幼かった頃はそれでも父や母に近づきたい一心で努力した。韻律を解きほぐし、それを伝えたのだ。

人々は豊かになった。
同時に、自分はより孤独になった。
長い生の中、何度か死について考えた。
なぜ神は人に死をあたえたのだろうと思ったこともある。
気がつけば何人も家族を見送り、友人を見送り、そして今は彼女までも見送った。そして一人立ち尽くす自分を省みた時、理解した。永遠は辛すぎると。
神は神であるが、超越した何かではない。長い時の中、短い対話を重ねて理解した部分だ。
神にとっての悲劇は、自己を自覚してしまったことだろう。人間であれば他者とのやり取りの中で自己を形成する。しかし、単独で自己に目覚め、語り合う何かが無かった時、そこにあるのは孤独の淵だ。星原樹は知恵ある樹であったが、神は不足を感じたのだろう。だから偶然を待った。そして、偶然の果てに人間が知を得、神と語り合う基礎ができてしまった。それは神にとって喜びでありながら、大きな失敗だろう。神が人間を消去しないのは、そういった根底がある。寂しいかの一柱は、神子の目を通し、世界を見ることはできただろうか。

日が傾く。
風の匂いが変わる。
時間が迫っている。
俯瞰図には世界の大まかな出来事と、天地の運行が示されている。一万年、それは記述されていた。その後はどうするのか。神に問いかけた事は無い。一万年以降の記述は全く増えず、削られてもいない。かの方の御心はゆれていらっしゃるのかもしれなかった。
これから演じるのは喜劇だ。
子供が喜ぶような、単純明快な劇である。
――魔王は勇者に倒されました。
悪いものは、良いものに駆逐される。

簡単だからこそ思い込める。瘴気は人の負の部分から生まれたものだ。光と影のように切り離せない負を視覚化し変化させたもの。三期の生き残りは、人々の中に負があることを病的に恐れた。結果、切り離せないものを切り離そうとし、迷走した。

悪いものは、悪い。それを分かりやすくすることで天秤を負に傾けないようにする。瘴気は既に世界に浸透している。今更取り除けない。

その単純な構図の原点である正義の定義については、自分は手をつけるつもりはない。後の時代の人間の仕事だ。そこまでは面倒をみるつもりはない。そもそも、今宵で終わりなのだ。最後の詰めを深蒼(あお)頼みなのは気になるが、彼はやり遂げるだろう。以前と顔つきが変わっていた。布石は幾つか置いているが、お互い失敗は許されない。

――始原(しろ)。

位相の違う場所から、声がかかった。

◆始原、終焉の序曲

小さな呟き程度の音だ。だが、耳で確実に拾った声。

感覚を切り替える。世界は数層に分かれている。普通の生物には第一層しか見ない。星別者は別の層が見えることが多い。星別者ほど存在が頑強でなければ、知覚が多すぎて破綻してしまうのだ。更に下層には韻律が、上層には精神体が。更に多層に分岐し、世界は存在している。

それら全てを知覚は可能だ。知覚の方法も干渉する術も知悉している。しかし全部見えたところで情報が多すぎ、振り回されすぎてしまう。あえて常に自戒している、あくまで自分が人間だという意識。それが能力に限りをつける。自分は神ではない。決して。それを自覚させるために自らに枷をつけている。

それを一つ解除する。恐らくこの感覚で合っているに違いない。

解除した感覚制限は、霊体の知覚だ。視覚がやや切り替わる。

周囲を見回すと、少し離れた場所に懐かしい姿があった。友人だ。後ろが透けているのがかろうじて幽霊だと判別させる。

変わりない姿に、気分が明るくなる。

「久しぶりだね。髪ぐらい梳(と)いた方がいいと思うけれど。そのほうがもう少しあっさりとした印象になるんじゃないかな」

声を掛けられるとは思っていなかったらしい。

友人は狼狽した様子で空中を後ずさりをする。そういえば、感覚を切り替えられることを話したことはない。見えることを知らなかったのか、と納得する。

ぼさぼさの灰色の頭髪に、大きさの合っていないローブ姿。

最期の時、友人が真っ直ぐに星神様の許(もと)へいってないのは知っていた。幽霊になっているとは思っていたのだ。

しかし、声を掛けにくる事は無かった。理由は知らない。知覚で

きることを知らなかったならば、それも仕方ないことか。
友人は狼狽から立ち直ったようだ。褐色の頬が人間だったときの身体の記憶のままに反応をしている。頬が赤くなっている。思念の声が恥ずかしさを怒りで隠すように尖っていた。
『久しぶりの友達に向かって、そんな説教をするのは君ぐらいだよ、もう少し情緒を大切にしたまえ！』
「幽霊になってまでそんな格好をしたがる君が分からないだけだよ」
『この格好が好きなんだから仕方が無いだろう』
胸を張る友人に溜息が漏れる。相変わらずだ。それは懐かしく、あたたかい感情を思い起こす。ここ千年ほどは勇者達以外には余り人と関わりを持ってこなかった。感情が揺れるのも久しぶりだ。それを味わいながら、友人に正対する。
「元気そうで、何よりだね」
『……幽霊に元気かどうかはあるのかい？』
「精神的に元気かどうかはあると思うよ。君の精神は健全だ」
『健全な幽霊っておかしいと思わないのかい！　ボクも何か壁に向かってブツブツ言っていた方が幽霊らしくて良かったのかもしれないね、期待はずれで申し訳ないばかりさ！』
友人は友人だった。珍しいことに、肉体を失っても性質が変化していない。千年以上だ、どうやってその精神を守ってきたのか。ただの人であった友人が。
「どうしたんだい？　心残りがあったのかな。それとも道を見失った？」
道を見失ったのなら、案内図ぐらいは描こう。
『別に昇天したくって、君に逢いに来たわけじゃないさ』
「その気になったらいつでも……ああ、すまない。今でなければ道案内は出来ない」
間もなく日没が来る。
夜が始まるその前ならば、まだ正気は保てている。
『君の手を煩わせなくたってね、ボクにはボクの視界がある。残念

ながらどこへ行ったらいいかは知っているさ』
そういえば、友人も特殊な目を持っていたのだった。代わりに第一層、いわゆる普通の視界を犠牲にしたけれども。
「それは大変失礼したね」
『全くだ』
そして友人は顔をしかめた。
『嫌な風だ、陰気臭い空気を運んできている』
尖った声で文句を言う。風はこちらに向かって吹いている。正確には、術を施したこの身体に向かって緩やかに流れている。瘴気を運んできているからだ。友人は風に乗っているものを理解しているのだろう。
『いつから英雄願望に目覚めたのかな、そういったところから一番ほど遠い存在だと思っていたけれど。その点は心配していなかったけど、どこで頭が煮えくり返ったんだい？　らしくない行動はよしたまえ』
友人らしい皮肉に笑みがこぼれる。純粋に心配しているとは言わないのだ。
「ある意味僕らしい極地だと思うよ。一番効率的だ」
答えに友人は嫌そうな表情を浮かべた。久しぶりとはいえ、会話が小気味よく、心地よい。まさかこんな時間がすごせるとは思っていなかった。
「ところで何か用だったかな？」
わざわざここまで出てきたのだ。理由があると考えるのが順当だろう。友人はわざとらしく溜息を吐いた。
『最期の挨拶ぐらいしに来たらいけないのかい？』
その言葉に気付いていたかという思いが広がった。
「僕が君を見ることができるのを知らなかったのに？」
『それは、』
友人は沈黙した。煙に巻くように言葉数は多いが、実際友人は不器用だった。自己を表現する手段を幾つも失っている。このように軽

口の応酬ができるまで、何年もかかった。自分にとっての何年かと、人間にとっての何年かの重さの違いがこんな時は気になる。

友人は意を決したように口を開いた。

『ボクらが提案したことで、色々君にだけ負担をかけている』

「そうかな？　僕があの話に乗ったのはそれが効果的だと思ったからだ」

『だけれども、そういうがね、君は数千年単位で管理を続けていたろう、そこまでの負担は必要じゃないと思うんだがね』

「自分が加担した部分に責任を取るのは当たり前だろう」

友人は言葉を探しているようだった。

『だからといって、』

ぎゅっと一度唇を噛締める。

『だからといって、魂まで汚染されるようなことはしなくていいだろう！　人間にそこまで尽くしても君が居なくなるだけじゃないか！』

上げた声は悲鳴のようだった。いつも飄々としていた友人のそんな姿に、思わず声を失う。

そして、じわりと喜びが浮かんできた。どうやら笑ってしまったらしい。

『何がおかしい！』

「おかしいというより、思った以上に嬉しかったみたいだ」

存在が肯定される喜びに。そして喪失を嘆いてくれる人が居たということに。自分はやはり人間だった。誰かが肯定してくれるという幸福は、なにものにも代えがたい。

『馬鹿かお前は！』

「馬鹿で結構。それより、そこ以上は近寄らない方がいい。君も染まってしまう。肉体の囲いがないだけ、危険だ」

手で下がるように伝える。ローブの下から出した手は、既に瘴気に汚染され黒く染まっていた。恐らく、髪の一筋まで黒に染まるだろう。

それを厳しい顔で友人はじっと『視た』。
『そこまで……』
おそらく自分で見るよりも深い侵食を見て取ったのだろう。はっきりと顔が歪む。
「幸いなことに、今代の災害指定者（ゆうしゃ）は破壊に特化しているからね。僕が見た中でも破壊力は随一の星別者だ。なんとかなるはずだよ」
『何とかなったら君が居なくなるじゃないか……』
友人は顔を覆い、弱弱しい声で呟いた。
「生きている限りは、いつか死ぬ。それが今日か先の違いぐらいで」
『まだ普通にぽっくり逝くならまだしも、こんな方法で死なれたら骨を拾うこともできないだろう』
「骨を拾ってくれるつもりだったのか」
そういえば友人が生まれ育った地域は、親類の葬送で骨を拾っていた覚えがある。友人は死の作法について異常に詳しい。以前語ってくれたところによれば骨を拾うのはかなり親しい相手に限定されるはずだった。意外なところで好意を示され逆に驚いてしまった。
『約束しただろう、君の骨を拾ってやるってさ』
「……したかな」
『した』
きっぱりと言い張る。その約束のために友人はこの世界に残っているのだろうか。まさかと思いながら、一応確認をする。
「もしかして幽霊になったのは、」
『分かったなら口にするな！　恥ずかしい！　ああそうさ、君が忘れる程度の約束を守ろうとしたからさ！』
「なにも怒らなくても」
『怒っていない！』
「忘れていたのは謝るよ」
『やっぱり忘れてるだろう、けど怒っていないから謝らなくて構わない！』
どう考えても怒っている。この件はあまり追求しない方がよさそう

だ。
　代わりに違う質問を投げてみる。
「君は、今までを後悔するかい？」
『半々だ』
意外とあっさりした答えが返ってきた。
『あの術を作ったことで色々悩んだし、後悔もしたし、できることなら全部無かったことにしてやり直したいとも思ったこともある。けれど、その苦しみも全部ボクのものだ、それによって得たものもある。全てが悪かったことだけじゃない、だから半々だ』
「いい事言うね」
『真面目に答えた返事がそれかい？』
「いいや、賞賛だよ。心からのね」
自分は後悔無く生きてこれたのだろうか。自問する。答えは出ない。夜明けを世界が迎えることができるなら、後悔はしないに違いない。
　遠く瘴気の靄の向こうで沈もうとしている太陽を眺める。
　間もなく、世界が始まって以来、最も深く、暗く、苦しい夜がやってくる。
『夜だね』
「そろそろ時間のようだ。精神体でも危険かもしれないから、始まったら近づかないように」
『近づけないと思うから大丈夫だよ、残念なことにね』
　別れの時は迫っている。
「……今更ながら、彼女が言っていたことが身に沁みるよ」
『星原樹が？』
「最期のお別れは笑っていたいと」
『何故？』
「なんだろうな。ただ、君にもありがとうといっておくよ。骨を拾ってもらうより、今の会話だけで十分だ」
『一体何かねそれは』
「思ったよりも後悔が少なかった。友人に見送られるのも、悪くは

ない」
この言葉に、友人は沈黙した。そして、天を振り仰いで一言。
『わかった』
こちらを睨みつけたまま、友人は言い放つ。
『もう何も言わない。この頑固者、石頭、相変わらず頑迷で救いようがない男だな君は！　好きに自分の信じた道を歩みたまえ！』
「それは誉め言葉としていただいておくよ」
罵倒なのか許容なのか。いつも通りの毒舌に笑みがこぼれる。
『……最期まで、見ておいてやるから』
「なら、無様なところは見せられないね」
身体が異変を感じている。とうとう疼痛が始まった。瘴気によって、身体が作り変えられる。表層にはそれを出さずに、会話を続ける。
「ところで、魔王の概念はどんな形を描けばいいだろう？」
『最強の生物だろう！　気持ち悪いのは却下だよ、カッコいいものにするべきだ』
その主張はどうだろう。だが、イメージを固定する方が変化に志向性を持たせやすい。
「実在の？」
『もちろん、架空のだ。魔王と並び立つほどの架空の強い生物といったら、竜だろう』
頭の中に人間が想像するその形を描く。なら、それを選ぼうか。弱点もあるはずだ。

そのとき、背後の星原樹が『ブレ』た。
二人とも思わず息を呑み、それを見守る。
それは世界が変わる序曲でもある。休眠中の星原樹が、輪郭を曖昧にし存在を薄れさせていく。
これは、一つの樹の完全なる死だった。
彼女は笑っていたのだろうか。それを知ることはできない。

世界から、絶対の加護が一つ失われた。

日が落ちる。
夜が始まる。

「時間だ」
『そのようだね』
友人がこちらの意を汲み、離れてくれる。痛みは無視できないほどに広がっていた。星都上空ではこれ以上は無理だ。星原樹を見送った今、ここに居る意味は全くない。
「そろそろ往くよ」
『……ああ』
友人は顔を上げた。頬に涙が伝っている。
『君が、良き生をすごせますように！』
「君も、きちんと天に昇れるように祈っているよ！」
そして、目を合わせ、どちらからともなく笑う。
さようなら。これが別れなら、自分の一生も悪くないのではないか。そう思った。

そして、瘴気の塊を引き連れ、最期の場所へ跳ぶ。
事前に打ち合わせしていた場所だ。周囲に人の集落はない。また、どの戦場とも離れている。人を巻き込む危険性が少ない場所だ。
体中を知らない力が巡っている。人の業は本当に深い。恐ろしいほどの力を秘めている。
どこかで獣が唸っている。どこかではない、自分の口からそれが出ていることに気付く。いつの間にか肌はうろこが覆っていた。黒いうろこは、ぬれたような光を放つ。硬そうだとわれながら思う。
不快な音を立て、身体が爆発的に膨らんだ。

骨が折れる音、肉が軋む音があたりに響く。苦しみの中、獣のように叫んだ。だが、まだ理性は保っている。

体積は圧倒的に倍増する。手足には鋭い爪が、口は裂け牙が並び、目は闇の中でよく見えるように特化する。喉も胴も伸び、尾が生え、体より巨大な黒い翼が背に広がった。

瘴気の器にふさわしい、人々の恐怖をあおる姿に。魔王に変容する。

身のうちに持て余す破壊衝動そのままに、暗い夜の中、咆哮を上げた。音のはずの咆哮が衝撃波を生み、空を覆う薄い靄を一時的に吹き飛ばした。

靄の向こうには、いつも通りに美しい星空が広がっていた。

さあ来い、深蒼(あお)の。準備は整った。

終焉を奏でよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5611v/

町民Ｃ、勇者様に拉致される

2012年1月10日03時10分発行